

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第120集

飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

分 冊 1

(本文・挿図・表)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

飛鳥台地Ⅰ遺跡 分冊1訂正表

ページ	行など	誤り	訂正
11	表2	ビット・不明・第2次の数 36 ビット・第2次小計 88 ビット・合計 114 第2次・合計 874 合計 980±	37 89 115 875 981 ±
14	図4	G:土器 P:礫	G:礫 P:土器
17	17	・・・L区までの・・・	・・・N区までの・・・
	24・26	・・・火山破砕物・・・	・・・火山碎屑物・・・
23	第7図	HⅢ区 108	102
55	5	・・・(Ⅱ型)。	・・・(Ⅲa型)。
63	第36図	No. 82 分類 脱落	ⅡM
85	28	Ⅱ類はM1a・M1bなどがある。	Ⅱ類はM1aなどがある。
87	第54図	No. 124 分類 脱落	ⅡM1
105	8	・・・表わしている。	・・・表わしている。また備考中の○番号は並列状況を示し、図39に対応する
110	表	EⅣ-105 落とし穴・備考 ⑤	④
	表	FⅣ-105・同106 落とし穴・備考 ⑤	④
112	表	FⅣ-108・同110 落とし穴・備考 脱落	④
114	表	FⅣ-111 ～同114 落とし穴・備考 脱落	④
	表	GⅣ-101 落とし穴・備考 脱落	⑧
116	表	GⅣ-102・同103 落とし穴・備考 脱落	⑧
	表	GⅣ-104 落とし穴・備考 脱落	④
126	28	焼土2はP1に切られ、焼土3はP2の・	焼土2はP2に切られ、焼土3はP1の・・・
152	第100 図	No. 285 分類 脱落	ⅡM
157	27	不定形石器306	不定形石器304
170	5	Ⅱ類はM2bなどがある。	Ⅱ類はM1aなどがある。
173	3	PP5～PP12は・・・	PP5～PP11は・・・
174	第118 図	CⅢ-9住居跡 脱落 CⅢ-10 住居跡 脱落	P1 PP1・PP2
186	8	M2bである。	M3である。
192	19	・・・Ⅱ類2aがあり・・・	・・・Ⅱ類M1があり・・・
200	26・27	I群の 類と 類・類、Ⅱ群1類・類が・・・	I群の3類と4類、Ⅱ群1類・10類が・・・
201	第138 図	脱落	PP9 (PP2とPP6の中間)
203	第139 図	No. 132 不定形石器	石筴類

ページ	行など	誤り	訂正
203	第139 図	No. 132 特徴・備考 2	削除
205	24・25	397 がⅡ類がある	397 がⅡ類である
206	27	・・DⅡ-251 構・・	・・DⅡ-252 構・・
207	18	Ⅱ類404 はM3aである。	Ⅱ類404 はM2である。
213	第147 図	脱落	PP8～PP10
216	10	PP1は・・	PP2は・・
218	27・28	・・Ⅶ層としている。南部浮石に・・	・・Ⅶ層としている南部浮石に・・
226	23	467・478 はⅡ類で、SとM1bである。	467・468 はⅡ類で、SとL2である
237	31	L5 (496) がある。	L6 (496) がある。
259	第184 図	脱落	PP4 (FⅣ-52ビット中)
265	3	壁は住居跡と・・	壁は9a住居跡と・・
	28	Ⅱ類540 はM1である。	Ⅱ類540 はMである。
266	第189 図	脱落	No. 540 分類 ⅡM
			No. 541 分類 ⅠL1
			No. 542 分類 ⅠL2
274	8	549 はⅡ類L1bである。	549 はⅡ類L2である。
275	第198 図	脱落	P3 (G' と重なるビット)
299	7	・・を挿む。	・・を挟む。
	13	・・586 はM1bである。	・・586 はM1aである。
320	12	・・Ⅱ類L1aで・・	・・Ⅱ類L1で・・
330	第241 図	No. 642 鍛冶施設	鍛冶施設
331	9	鍛冶施設から・・	鍛冶施設から・・
333	第243 図	脱落	P8 (P1の東)
			大きさ 45×65cm 深さ 30 cm
336	8・21	挟着式手鋸	装着式手鋸
341	32	<床面積>6.4 m	<床面積>6.4 m ²
347	13	・・S1bなど・・	・・S2など・・
353	15	はC0である。	はB0である。
362	1	・・A2が4点、B2が1点。	・・A2が3点、B2とC4が1点ずつ、
	第267 図	No. 700	図を90°左へ回転する
		No. 698 分類 ⅡA1	ⅡA3
366	24	Ⅱ類A2の・・	Ⅱ類A3の・・
384	表	CⅢ-58ビット 出土遺物 Ⅰ群 類と類の・・	Ⅰ群3類と6類の・・

ページ	行など	誤り	訂正
392	表	E IV-54ビット 脱落	開口部 径102 × 132 cm 深さ 30cm 壁 外傾 底面 平坦
458	4	・・切れる北東端から・・	・・切れる部分の西端から・・
477	第331 図	K IV-402 墓墳	K IV-401 墓墳
484	20	・・6類と同様の・・	・・6類と同様の・・
530	4	一部の縁片が・・	一部の縁辺が・・
531	4	1が8点	1が18点
532	28	同C III-3住居跡から1点が・・	同C III-3住居跡とD III-3住居跡から1点ずつが・・
	図10	脱落	重量の単位 g
533	29-31	前期前葉C III-1、晩期・・の3棟の住居跡から4点出て・・	晩期・・の2棟の住居跡から3点出て・・
570	16	、87点の・・	、82点の・・
576	2-3	87点が・・、14棟(44%)、3点出土は7棟(22%)、	84点が・・、15棟(47%)、3点出土は6棟(19%)、・・
584	9	D II-3住居跡	D III-3住居跡
585	30-31	C III-3とD III-3の2棟	C III-3とC II-3・D III-3の3棟
586	13	・・北寄り隣接	・・北寄りに隣接・・
595	9	・・37㎡台の2棟の・・	・・37㎡台の1棟の・・
	図22	脱落	縦軸の単位 m
598	9	・・葉理が・・	・・葉層が・・
603	図27	脱落	①～④ I型
607	20	③割2カ所と5カ所・・	③割2カ所、と5カ所・・
621	14	・・(第2図参照)・・	・・(図5参照)・・
627	28	E IV-201	E II-201
629	11	E IV-201	E II-201
632	6	・・表3に・・	・・表13に・・
634	12	(第106 図315)	(第106 図311)
645	30	・II群は・・	・III群は・・
657	8	・・N-Sのように・・	・・N-Eのように・・
	30	・・壁と接して・・	・・壁を接して・・
667	表16	11 沼久保遺跡の周溝1	中・近世 住居1
670	23-24	・・距離において散在的に存在した・・	・・距離において散在した・・
695	19	D II-4住居跡出口の・・	D II-4住居跡出土の・・
688	図6	スケール 写真左 6mm 37.5μ 写真右	10mm 25μ 10mm 37.5μ

あすか だい ち
飛鳥台地 I 遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

分 冊 1

(本文・挿図・表)

序

広大な面積を有する本県は、縄文時代の遺跡を中心にした数多くの埋蔵文化財包蔵地が県内各地に分布し、昭和60年度末の岩手県教育委員会のまとめでは7,000カ所を越えることが知られております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことはわれわれ県民に課せられた重大な責務であります。

一方、現在の生活を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発、とくに、その基幹となる道路をはじめとする交通網の整備もまた県民の切実な願いであります。このように、保護・保存と開発という相容れない要素をもつ事業の調和のとした施策が今日的な課題となってきました。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設の趣旨にもとづき、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡について埋蔵文化財保護の立場に立った発掘調査を行ない、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、昭和59・60年度に発掘調査した二戸郡浄法寺町飛鳥台地Ⅰ遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は縄文時代と平安時代を主にした複合遺跡であります。これまで類例の少なかった縄文時代早期前葉の住居跡や92棟にもおよぶ平安時代の住居跡群をはじめとする数多くの遺構、そして、それに伴うさまざまな遺物が検出され、県北でも有数の規模をもつ遺跡であることが判明いたしました。それらの貴重な資料は当地方の歴史を明らかにするうえで大いに役立つものと考えております。

この報告書が、研究者のみならず一般に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりますが、これまでの発掘調査や報告書作成に御援助・御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸事務所・浄法寺町をはじめとする関係各位に感謝申し上げるとともに、今後とも御指導・御協力をお願いいたします。

昭和62年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直

緒 言

1. 本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴う緊急発掘調査のうち、岩手県二戸郡浄法寺町大字御山字飛鳥谷地22-1ほかにある飛鳥台地Ⅰ遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 調査は、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議に基づいて、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はJ E37-0112、遺跡略号はASDIである。
4. 調査期間と調査面積は次のとおりである。
第1次：昭和59年8月11日～11月14日、5,230㎡
第2次：昭和60年4月15日～11月15日、17,500㎡
5. 調査担当者は次のとおりである。
第1次：三浦謙一・玉川英喜・片方宗明・光井文行
第2次：三浦謙一・玉川英喜・昆野 靖・佐々木嘉直・田村壮一・岩渕 久・片方宗明・長沼 彬・渡辺洋一
6. 整理期間と整理担当者は次のとおりである。
第1次：昭和59年11月15日～昭和60年3月31日、三浦謙一
第2次：昭和60年11月16日～昭和61年3月31日、三浦謙一・玉川英喜・昆野 靖・佐々木嘉直
第3次：昭和61年4月1日～昭和62年3月31日、三浦謙一
7. 下記の項目の分析・鑑定は次の個人・機関に依頼した（敬称略）。
(1) 火山灰・土器の胎土……………三辻利一（奈良教育大学）
(2) 放射性炭素年代測定……………木越邦彦（学習院大学）
(3) 鉄製品……………赤沼英男（岩手県立博物館）
(4) 鉄滓……………梶田勝彦（宮城県立古川工業高等学校）
(5) 石材鑑定……………佐藤二郎（地質コンサルタント）
(6) 樹種鑑定……………早坂松次郎（社）岩手県木炭協会
8. 野外調査や整理・報告書の作成には次の個人に協力・指導・助言をいただいた（敬称略）。
天野 努（千葉県文化課）・熊谷常正（岩手県立博物館）・佐藤喜蔵（浄法寺町民俗資料館）・柴田陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター）・高橋信雄（岩手県立博物館）・中村 裕（浄法寺町教育委員会）・林 謙作（北海道大学）・山口直樹（千葉県文化財センター）

9. 野外調査では、大森弘一氏・横浜佐一郎氏をはじめとする浄法寺町の方々多数に作業に従事していただいた。
10. 本書の担当は次のとおりである。
 - 〈執筆・編集〉三浦謙一
 - 〈作図〉小笠原邦子・勝政タカ子・川崎清子・瀬川幸子・月館美智子・中島ヨシ・武蔵アサヨ・村上幹子・吉田 京
 - 〈遺物撮影〉岩渕希士
11. 調査成果は現地説明会資料や調査略報ほかに中間報告として発表してきたが、本書の内容が優先するものである。
12. 調査の記録や遺物は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
13. 挿図凡例などはII章3（14ページ）に記載している。

本文目次

序	
緒言	
I. 調査に至る経過	2
II. 調査方法	7
1. 野外調査	7
2. 室内の整理	9
3. 凡例	11
III. 遺跡の位置と地形・地質	14
1. 遺跡の位置	14
2. 地形	15
3. 地質	17
IV. 検出遺構と遺構内出土の遺物(1)	
—第1次調査—	27
1. 竪穴住居跡	27
2. 住居状遺構	91
3. ビット	93
4. 落とし穴	105
5. 周溝	105
6. 焼土遺構	120
V. 検出遺構と遺構内出土の遺物(2)	
—第2次調査—	122
1. 竪穴住居跡	122
2. 住居状遺構	366
3. 掘立柱建物跡	372
4. 柱穴状ビット群	374
5. ビット	375
6. 落とし穴	410
7. 周溝	455
8. 埋甕	462
9. 焼土遺構	462
10. 溝跡	467
11. 基壇	476
VI. 遺構内外の出土遺物とまとめ(1)	
—遺物—	479
1. 縄文土器	479
2. 弥生土器	526
3. 平安時代の土器	527
4. 剥片石器	527
5. 石斧・礫石器	531
6. 土製品	565
7. 石製品	568
8. 金属製品類	569
(1) 遺構外出土の鉄製品	569
(2) 平安時代の遺構出土の金属製品	
について	570
(3) 鉄滓	576
(4) 古銭	578
VII. まとめ(2)—遺構—	582
1. 住居跡	582
(1) 縄文時代	582
(2) 平安時代	587
(3) 中世	612
(4) その他	613
2. 住居状遺構	615
3. 掘立柱建物跡	615
4. ビット	616
(1) 縄文時代	616
(2) 平安時代	617
(3) 時期不明	619
5. 落とし穴	619

6. 周溝	627
VII. まとめ(3)―遺物―	632
1. 縄文土器	632
2. 平安時代の土器	635
(1) 土師器壺	635
(2) 坏	646
(3) その他	649
3. 植物遺体	653
4. 漆器連の遺物	655
IX. まとめ(4)―遺跡―	657
1. 平安時代の集落	657
2. 周辺の遺跡	665

3. きいごに	668
付篇	
浄法寺町遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	
三辻利一	678
飛鳥台地I遺跡出土鉄器の金属学的解析結果	
赤沼英男	680
飛鳥台地I遺跡出土鉄滓の分析調査	
橋田勝彦	689
飛鳥台地I遺跡出土土器の蛍光X線分析	
三辻利一	696
学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	
木越邦彦	701

挿図・表目次

第1図 若手泉図にみる遺跡の位置	1
第2図 縦貫自動車道開通遺跡ほか位置図と本遺跡周辺の地形図	3
第3図 地形図とグリッド配置図	5
第4図 地形図	16
第5図 基本図解	18
第6図 遺構配置略図と遺構名(1)	21
第7図 遺構配置略図と遺構名(2)	23
第8図 遺構配置略図と遺構名(3)	25
第9図 EIV-1住居跡実測図(1)	28
第10図 EIV-1住居跡実測図(2)	29
第11図 EIV-1住居跡出土遺物	30
第12図 EIV-2・4・5住居跡実測図	31
第13図 EIV-2・4・5住居跡出土遺物	32
第14図 EIV-3住居跡実測図	33
第15図 FIV-1住居跡実測図(1)	36
第16図 FIV-1住居跡実測図(2)	37
第17図 FIV-1住居跡実測図(3)	38
第18図 FIV-1住居跡出土遺物	39
第19図 FIV-3住居跡実測図(1)	40
第20図 FIV-3住居跡実測図(2)	41
第21図 FIV-3住居跡出土遺物	42
第22図 FV-1住居跡実測図	44
第23図 FV-1住居跡出土遺物	45
第24図 GIV-1住居跡実測図	47
第25図 GIV-1住居跡出土遺物	49
第26図 GIV-2住居跡実測図	50
第27図 GIV-2住居跡出土遺物	51
第28図 HIV-1住居跡実測図(1)	53
第29図 HIV-1住居跡実測図(2)	54
第30図 HIV-1住居跡出土遺物(1)	56
第31図 HIV-1住居跡出土遺物(2)	57

第32図 HIV-1住居跡出土遺物(3)	58
第33図 HIV-2住居跡実測図	60
第34図 HIV-2住居跡出土遺物(1)	61
第35図 HIV-2住居跡出土遺物(2)	62
第36図 HIV-2住居跡出土遺物(3)	63
第37図 HIV-2住居跡出土遺物(4)	64
第38図 HIV-2住居跡出土遺物(5)	65
第39図 HIV-3住居跡実測図	66
第40図 HIV-3住居跡出土遺物	67
第41図 HIV-4住居跡実測図	69
第42図 HIV-4住居跡出土遺物(1)	70
第43図 HIV-4住居跡出土遺物(2)	71
第44図 HIV-5住居跡実測図	72
第45図 IIV-1住居跡実測図・出土遺物	74
第46図 IIV-2住居跡実測図(1)	76
第47図 IIV-2住居跡実測図(2)	77
第48図 IIV-2住居跡実測図(3)	78
第49図 IIV-2住居跡出土遺物	79
第50図 IIV-3住居跡実測図	80
第51図 1 IIV-3住居跡出土遺物(1)	81
第51図 2 IIV-3住居跡出土遺物(2)	82
第52図 JIV-1住居跡実測図(1)	84
第53図 JIV-1住居跡実測図(2)	85
第54図 1 JIV-1住居跡出土遺物	86
第54図 2 JIV-1住居跡出土遺物	87
第55図 JIV-2住居跡実測図	88
第56図 JIV-2住居跡出土遺物(1)	89
第57図 JIV-2住居跡出土遺物(2)	90
第58図 DIV-1住居状遺構実測図	91
第59図 FIV-2住居状遺構実測図	92
第60図 FIV-4住居状遺構実測図	93
第61図～第65図 ビット実測図(1)～(5)	95

第66回	ビッド出土遺物(1)	104
第67回	落とし穴実測図(1)～(7)	107
第74回	落とし穴出土遺物(1)	121
第75回	HIV-201方彫南実測図	122
第76回	A I-1 住居跡実測図	123
第77回	A I-1 住居跡出土遺物(1)	124
第78回	A I-1 住居跡出土遺物(2)	125
第79回	B I-1 住居跡実測図・出土遺物	127
第80回	B II-1 住居跡実測図(1)	128
第81回	B II-1 住居跡実測図(2)	129
第82回	B II-1 住居跡出土遺物(1)	130
第83回	B II-1 住居跡出土遺物(2)	131
第84回	B II-1 住居跡出土遺物(3)	132
第85回	B II-2 住居跡実測図	133
第86回	B II-2 住居跡出土遺物	134
第87回	B II-3・4 住居跡実測図	136
第88回	B II-3 住居跡出土遺物	137
第89回	B II-5 住居跡実測図	138
第90回	B II-5 住居跡出土遺物	139
第91回	C II-1 住居跡実測図	140
第92回	C II-1 住居跡出土遺物(1)	141
第93回	C II-1 住居跡出土遺物(2)	142
第94回	C II-2 住居跡実測図・出土遺物	144
第95回	C II-3 住居跡実測図	145
第96回	C II-3 住居跡出土遺物	146
第97回	C II-4 住居跡実測図(1)	148
第98回	C II-4 住居跡実測図(2)	149
第99回	C II-4 住居跡出土遺物(1)	151
第100回	C II-4 住居跡出土遺物(2)	152
第101回	C III-1 住居跡実測図	154
第102回	C III-1 住居跡出土遺物(1)	155
第103回	C III-1 住居跡出土遺物(2)	156
第104回	C III-2 住居跡実測図	157
第105回	C III-3 住居跡実測図	160
第106回	C III-3 住居跡出土遺物	161
第107回	C III-4 住居跡実測図	162
第108回	C III-4 住居跡出土遺物(1)	163
第109回	C III-4 住居跡出土遺物(2)	164
第110回	C III-5 住居跡実測図(1)	165
第111回	C III-5 住居跡実測図(2)	166
第112回	C III-5 住居跡出土遺物(1)	167
第113回	C III-5 住居跡出土遺物(2)	168
第114回	C III-6 住居跡実測図	169
第115回	C III-6 住居跡出土遺物	170
第116回	C III-7 住居跡実測図	171
第117回	C III-8 住居跡実測図	173
第118回	C III-9・10 住居跡実測図	174
第119回	C III-11 住居跡実測図	176
第120回	C III-11 住居跡出土遺物	177
第121回	C IV-1 住居跡実測図	178
第122回	D II-1・4 住居跡実測図	181
第123回	D II-1 住居跡出土遺物	182
第124回	D II-2 住居跡実測図(1)	183
第125回	D II-2 住居跡実測図(2)	184
第126回	D II-2 住居跡実測図(3)	185
第127回	D II-2 住居跡出土遺物(1)	187

第128回	D II-2 住居跡出土遺物(2)	188
第129回	D II-2 住居跡出土遺物(3)	189
第130回	D II-3 住居跡実測図	190
第131回	D II-3 住居跡出土遺物	191
第132回	D II-4 住居跡出土遺物	193
第133回	D III-1 住居跡実測図	195
第134回	D III-1 住居跡出土遺物	196
第135回	D III-2 住居跡実測図(1)	198
第136回	D III-2 住居跡実測図(2)	199
第137回	D III-2 住居跡出土遺物	200
第138回	D III-3 住居跡実測図	201
第139回 1	D III-3 住居跡出土遺物	202
第139回 2	D III-3 住居跡出土遺物	203
第140回	D III-4 住居跡実測図	204
第141回	D III-4 住居跡出土遺物	205
第142回	D III-5 住居跡実測図	206
第143回	D III-5 住居跡出土遺物(1)	208
第144回	D III-5 住居跡出土遺物(2)	209
第145回	D III-6 住居跡実測図	210
第146回	D III-7 住居跡実測図	211
第147回	D III-8 住居跡実測図	213
第148回	D III-8 住居跡出土遺物	214
第149回	D III-9 住居跡実測図	215
第150回	D III-11 住居跡実測図・出土遺物	217
第151回	D III-12 住居跡実測図	219
第152回	D III-12 住居跡出土遺物(1)	221
第153回 1	D III-12 住居跡出土遺物(2)	222
第153回 2	D III-12 住居跡出土遺物(3)	223
第154回	E II-1 住居跡実測図	223
第155回	E II-2 住居跡実測図	224
第156回	E III-1 住居跡実測図	225
第157回	E III-1 住居跡出土遺物(1)	227
第158回	E III-1 住居跡出土遺物(2)	228
第159回	E III-1 住居跡出土遺物(3)	229
第160回	E III-1 住居跡出土遺物(4)	230
第161回	E III-2 住居跡実測図	231
第162回	E IV-6 住居跡実測図	232
第163回	E IV-6 住居跡出土遺物(1)	234
第164回	E IV-6 住居跡出土遺物(2)	235
第165回	E IV-7 住居跡実測図	236
第166回	E IV-8・9 住居跡実測図	238
第167回	E IV-8 住居跡出土遺物	239
第168回	E IV-10・11 住居跡実測図	242
第169回	E IV-10 住居跡出土遺物	243
第170回	E IV-11 住居跡出土遺物	244
第171回	F II-1 住居跡実測図	245
第172回	F II-1 住居跡出土遺物	246
第173回	F III-1 住居跡灰白色浮石分布状況	247
第174回	F III-1 住居跡実測図	248
第175回	F III-1 住居跡出土遺物	249
第176回	F IV-5 住居跡実測図(1)	250
第177回	F IV-5 住居跡実測図(2)	251
第178回	F IV-5 住居跡出土遺物(1)	252
第179回	F IV-5 住居跡出土遺物(2)	253
第180回	F IV-6 住居跡実測図	254
第181回	F IV-6 住居跡出土遺物(1)	256

第182回	F IV - 6 住居跡出土遺物②	257
第183回	F IV - 6 住居跡出土遺物③	258
第184回	F IV - 7 住居跡実測図	259
第185回	F IV - 7 住居跡出土遺物	260
第186回	F IV - 8 住居跡実測図	261
第187回	F IV - 8 住居跡出土遺物	262
第188回	F IV - 9 住居跡実測図	264
第189回	F IV - 9 住居跡出土遺物①	266
第190回	F IV - 9 住居跡出土遺物②	267
第191回	G III - 1 住居跡実測図	268
第192回	G III - 1 住居跡出土遺物	269
第193回	G III - 2 住居跡実測図	270
第194回	G III - 3 住居跡実測図	271
第195回	G III - 3 住居跡出土遺物	272
第196回	G III - 4 住居跡実測図	273
第197回	G III - 4 住居跡出土遺物	274
第198回	G III - 5 住居跡実測図①	275
第199回	G III - 5 住居跡実測図②	276
第200回	G III - 5 住居跡出土遺物①	279
第201回	G III - 5 住居跡出土遺物②	280
第202回	G III - 5 住居跡出土遺物③	281
第203回	G III - 5 住居跡出土遺物④	282
第204回	G III - 6 住居跡実測図	283
第205回	G III - 6 住居跡出土遺物	284
第206回	G III - 7 住居跡実測図	285
第207回	G III - 7 住居跡出土遺物	286
第208回	G IV - 3 住居跡実測図	288
第209回	G IV - 3 住居跡出土遺物	289
第210回	G IV - 4 住居跡実測図	290
第211回	G IV - 5 住居跡実測図	291
第212回	G IV - 5 住居跡出土遺物	293
第213回	G IV - 6 住居跡実測図	294
第214回	G IV - 6 住居跡出土遺物	295
第215回	G IV - 7 a 住居跡実測図	296
第216回	G IV - 7 b 住居跡実測図	297
第217回	G IV - 7 住居跡出土遺物①	300
第218回	G IV - 7 住居跡出土遺物②	301
第219回	H III - 1 住居跡実測図	304
第220回	H III - 2・H III - 3 住居跡実測図	305
第221回	H III - 2 住居跡出土遺物	306
第222回	H III - 4 住居跡実測図①	308
第223回	H III - 4 住居跡実測図②	309
第224回	H III - 4 住居跡出土遺物①	310
第225回	H III - 4 住居跡出土遺物②	311
第226回	H III - 5 住居跡実測図	312
第227回	H III - 5 住居跡出土遺物	313
第228回	H III - 6 住居跡実測図	314
第229回	H III - 7 住居跡実測図	316
第230回	H III - 7 住居跡出土遺物	318
第231回	H III - 8 住居跡実測図	319
第232回	H III - 8 住居跡出土遺物	320
第233回	H III - 9 住居跡実測図①	321
第234回	H III - 9 住居跡実測図②	322
第235回	H III - 9 住居跡出土遺物①	324
第236回	H III - 9 住居跡出土遺物②	325
第237回	H III - 9 住居跡出土遺物③	326

第238回	H III - 10 住居跡実測図	327
第239回	H III - 10 住居跡出土遺物	328
第240回	H IV - 6 住居跡実測図	329
第241回	H IV - 6 住居跡出土遺物	330
第242回	I III - 1 住居跡実測図①	332
第243回	I III - 1 住居跡実測図②	333
第244回	I III - 1 住居跡出土遺物①	335
第245回	I III - 1 住居跡出土遺物②	336
第246回 1	I III - 1 住居跡出土遺物③	337
第246回 2	I III - 1 住居跡出土遺物④	338
第247回	I III - 2 住居跡実測図	339
第248回	I III - 2 住居跡出土遺物	340
第249回	I III - 3 住居跡実測図	341
第250回	I IV - 4 住居跡実測図	342
第251回	J IV - 3 住居跡実測図	344
第252回	J IV - 3 住居跡出土遺物	345
第253回	K IV - 1 住居跡実測図	346
第254回	K IV - 1 住居跡出土遺物	348
第255回	L IV - 1 住居跡実測図	349
第256回	L IV - 1 住居跡出土遺物	350
第257回	O II - 1 住居跡実測図①	351
第258回	O II - 1 住居跡実測図②	352
第259回	O II - 1 住居跡出土遺物①	354
第260回	O II - 1 住居跡出土遺物②	355
第261回	O III - 1 住居跡実測図	356
第262回	O III - 1 住居跡出土遺物①	357
第263回	O III - 1 住居跡出土遺物②	358
第264回	O III - 2 住居跡実測図	359
第265回	O III - 2 住居跡出土遺物	360
第266回	P II - 1 住居跡実測図	361
第267回	P II - 1 住居跡出土遺物①	362
第268回	P II - 1 住居跡出土遺物②	363
第269回	D III - 10 住居状遺構実測図・出土遺物	365
第270回	D III - 13 住居状遺構実測図	366
第271回	D III - 13 住居状遺構出土遺物	367
第272回	D III - 14 住居状遺構実測図	368
第273回	E III - 3 住居状遺構実測図	369
第274回	E III - 3 住居状遺構出土遺物	369
第275回	E IV - 12 住居状遺構実測図	370
第276回	G III - 8 竪立柱建物跡実測図	371
第277回	G IV - 8 住居跡実測図	303
第278回 1	柱穴状ビット出土遺物①	373
第278回 2	柱穴状ビット出土遺物②	374
第279回～第295回	ビット実測図⑤～②⑤	379
第296回～第303回	ビット出土遺物②～④	411
第304回～第320回	落とし穴実測図④～④	437
第321回 1	落とし穴出土遺物②	454
第321回 2	落とし穴出土遺物③	455
第322回	E II - 201 方形周溝実測図・出土遺物	456
第323回	J II - 201 円形周溝実測図	457
第324回	M III - 201・M III - 202 周溝実測図	460
第325回	B I - 451・F IV - 451 埋室実測図・出土遺物	461
第326回	焼土遺構実測図①	463
第327回 1	焼土遺構実測図②・出土遺物①	464
第327回 2	焼土遺構出土遺物②	465
第328回	溝跡実測図①	471

第329図	溝跡実測図(2).....	473
第330図 1	溝跡出土遺物(1).....	475
第330図 2	溝跡出土遺物(2).....	476
第331図	基壇実測図・出土遺物.....	477
第332図	遺構内出土古銭・漆塗り板.....	478
第333図～第337図	縄文土器(1)～(5).....	498
第338図	坏・土師器.....	503
第339図～第360図	縄文土器(6)～(10).....	504
第361図	縄文土器(11)・弥生土器.....	526
第362図	石鏃(1).....	535
第363図	石鏃(2).....	536
第364図	石鏃(3)・尖頭鏃(1).....	537
第365図	尖頭鏃(2)・石鏃・石匙(1).....	538
第366図	石匙(2).....	539
第367図	石匙(3).....	540
第368図	石匙(4)・不定形石鏃(1).....	541

第369図～第375図	不定形石鏃(2)～(8).....	542
第376図	不定形石鏃(9)・石鏃(1).....	549
第377図	石鏃(2).....	550
第378図	石鏃(3).....	551
第379図	石斧・磨石(1).....	552
第380図～第382図	磨石(2)～(4).....	553
第383図	磨石(5)・半円状扁平打製石鏃(1).....	556
第384図	半円状扁平打製石鏃(2)・凹石(1).....	557
第385図	凹石(2).....	558
第386図	凹石(3)・敲石・石皿・砥石.....	559
第387図	土製品(1).....	560
第388図	土製品(2)・石製品(1).....	561
第389図	石製品(2).....	562
第390図	石製品(3)・鉄製品.....	563
第391図	古銭.....	564

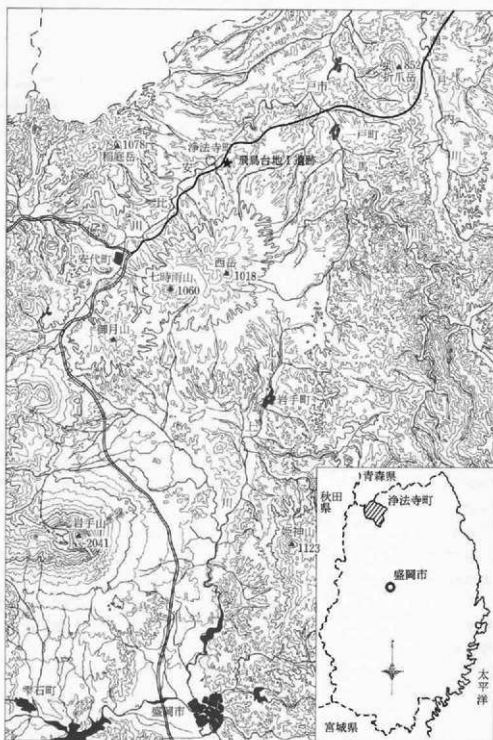
図 1	Field Card 使用例.....	9
図 2	遺構の整理.....	10
図 3	遺物の整理.....	10
図 4	遺構・遺物の凡例.....	14
図 5	地形面区分図.....	17
図 6	石鏃計測値分布図.....	527
図 7	石匙計測値分布図.....	530
図 8	銅片石鏃の器種別石材百分比.....	530
図 9	石匙類計測値分布図.....	531
図10	磨石 I 類計測値分布図.....	532
図11	磨石 II 類の器種別石材百分比.....	533
図12	円盤状土製品計測値分布図.....	565
図13	円盤状土製品計測値分布図.....	569
図14～図17	平安時代鉄製品集成図(1)～(4).....	572
図18	縄文時代遺構種類別分布図.....	580
図19	平安時代遺構種類別分布図.....	581
図20	縄文時代前期住居跡柱穴配置図.....	584
図21	縄文時代住居跡床面傾斜分布図.....	587
図22	平安時代住居跡床面傾斜分布図.....	595
図23	平安時代住居跡床面傾斜分布の概念図.....	596
図24	浄法寺町の平安時代住居跡床面傾斜分布図.....	597
図25	平安時代住居跡主軸方向分布図.....	598
図26	平安時代住居跡にみられる灰白色砂石.....	599
図27	平安時代住居跡柱穴配置図.....	603

図28	カマド位置概念図.....	606
図29	煙道部分傾斜図.....	607
図30	カマド位置の動き.....	608
図31	平安時代住居跡内ビット規模別分布図.....	611
図32	平安時代土製品ビット規模別分布図.....	617
図33	平安時代大型ビットほか規模別分布図.....	618
図34	溝状落とし穴概念図.....	621
図35	溝状落とし穴規模別分布図.....	622
図36	落とし穴分類図.....	624
図37	溝状落とし穴深さ分布図.....	626
図38	落とし穴主軸方向分布図.....	627
図39	落とし穴分布図.....	628
図40・図41	遺構遺構新旧関係図(1)～(2).....	630
図42	押型文原形図.....	632
図43	土師器変 I 類口縁・器高分布図.....	636
図44～図48	土師器変集成図(1)～(5).....	640
図49	坏口縁指数.....	648
図50・図51	坏集成図(1)・(2).....	651
図52	須恵器集成図.....	653
図53	砂流・河線土器・各種土師器.....	654
図54	磁器・ヘラ書集成図.....	655
図55	平安時代住居跡分類図.....	659
図56	岩手県北部付近の古代の住居跡検出遺跡.....	671

表 1	遺構種類別分類番号.....	8
表 2	調査次別検出遺構の種類と数.....	11
表 3	石材・産地略号一覧表.....	529
表 4	縄文時代住居跡一覧表.....	582
表 5～9	平安時代住居跡一覧表(1)～(5).....	588
表10	平安時代住居跡重複図.....	593
表11	中世・近世・所属時期不明住居跡一覧表.....	614
表12	所属時期別ビット一覧表.....	616

表13	縄文土器分類表.....	633
表14	土師器変出現頻度表.....	645
表15	坏出現頻度表.....	649
表16	周辺の遺跡一覧表.....	666

付図 1	遺構配置図
付図 2	柱穴状ビット分布図



東北縦貫自動車道
第1図 岩手県図にみる遺跡の位置

I 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、岩手県二戸郡安代町で青森線と分岐して青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車道である。本県に関係するのは第7次施行命令区間約27.6kmと第8次施行命令区間約26.2kmである。このうち第7次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は昭和58年度で終了している。

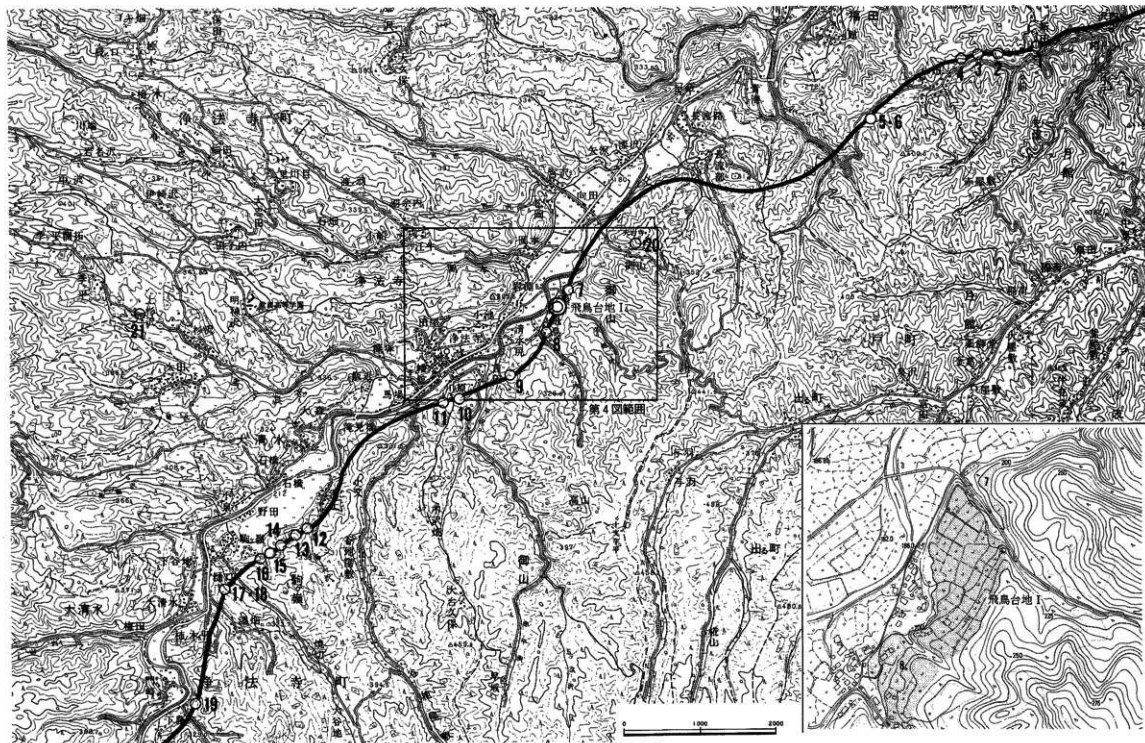
安代町・浄法寺町・二戸市・一戸町を通る第8次施行命令が出されたのは昭和53年11月である。岩手県教育委員会はその区間の埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねてきた。そのなかで、浄法寺町には天台宗の古刹である八葉山天台寺があり、緑地保全区域となっていることから、路線はこの地を避けて設定することになった。

県教育委員会事務局文化課は、日本道路公団の協力を得て、実施計画路線に沿った500m幅での埋蔵文化財包蔵地の分布調査を昭和54年10月に行ない、その結果をもとにさらに両者で協議を重ねた。昭和56年5月には路線発表があり、文化課は路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、約30遺跡を確認した。昭和57年には安代町の5遺跡について発掘調査範囲の確認調査を行なっている。

昭和58年度は、湯の沢Ⅲ遺跡ほか4遺跡の発掘調査が当センターに委託された。また、文化課は発掘調査範囲の確認調査を浄法寺町の12遺跡について実施している。

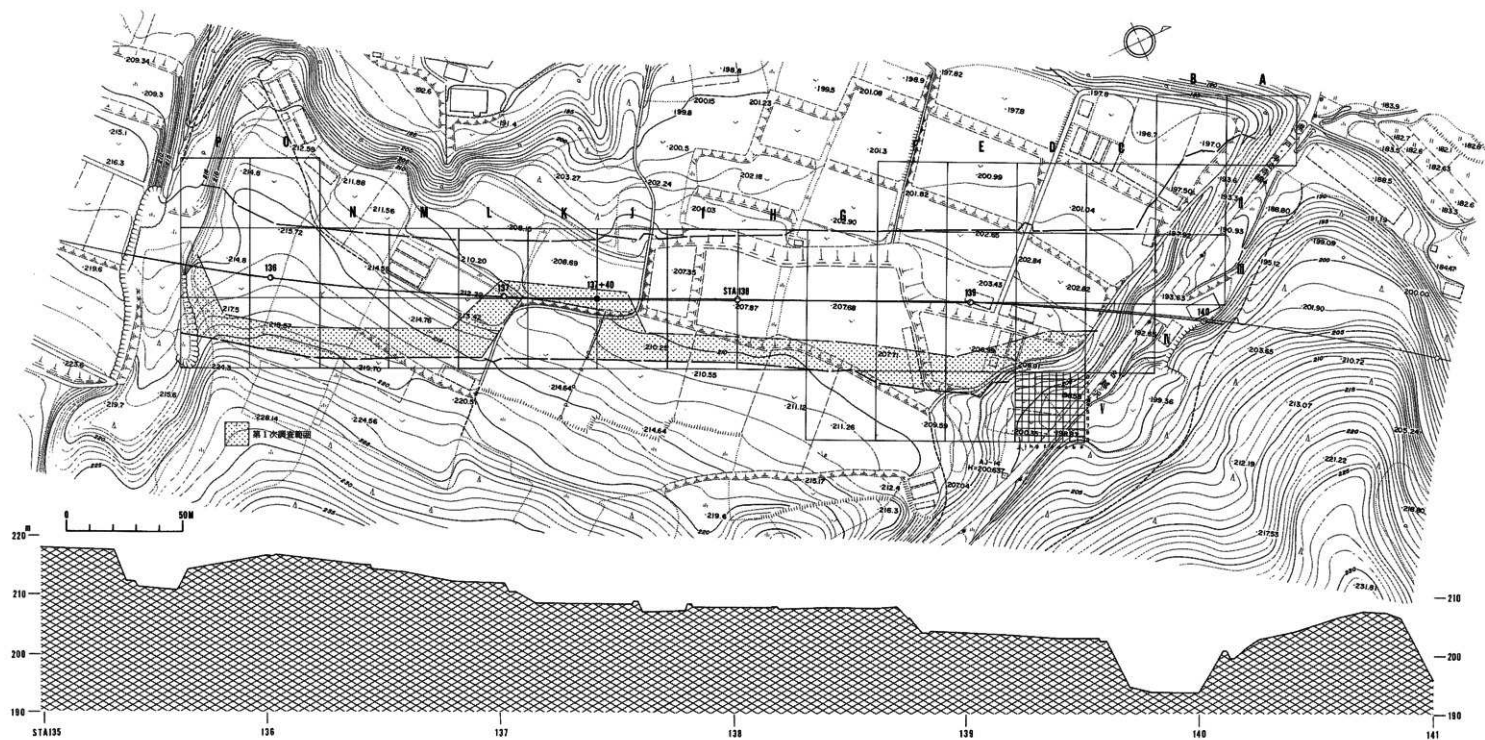
昭和59年度は、安代町の2遺跡と柿の木平Ⅲ遺跡をはじめとする浄法寺町の9遺跡の発掘調査が委託された。このうち、浄法寺町の飛鳥台地Ⅰ・沼久保・桂平の3遺跡は工事用道路部分の調査である。文化課は、二戸市・一戸町のそれぞれ6遺跡についての発掘調査範囲の確認調査を行なうとともに、新たに浄法寺町の五庵Ⅲ・広沖の二つを調査対象遺跡として追加した。その結果、縦貫自動車道に関連する浄法寺町の遺跡は14カ所となった（第2図参照）。

昭和60年度は、前年度からの継続調査である沼久保・桂平、そして本報告書の飛鳥台地Ⅰの各遺跡のほかに浄法寺町の5遺跡、二戸市の2遺跡、一戸町の3遺跡の調査を実施している。それによって、浄法寺町の14遺跡の調査はこの年度で終了した。なお昭和61年度は、二戸市の5遺跡、一戸町の4遺跡を調査し、昭和58年度から始まった第8次施行命令区間に関連する発掘調査はすべて終了した。



第2図 縦貫自動車道関連遺跡ほか位置図と本遺跡周辺の地形図

〔5万分の1地形図は神法寺、一戸、荒屋を使用
周辺の地形図は1万分の1
なお遺跡名は、666ページを参照〕



第3図 地形図とグリッド配置図

II 調査方法

1. 野外調査

調査の方法は第1次・第2次とも共通である。したがって、必要な場合のみ調査次数を記すことにする。

(1) 座標と区画

おおよその調査範囲は、幅が東西50～70m、長さが南北450mである。測量座標の中心線は縦貫自動車道の中心杭のうちのSTA137+40と同138を結んだ延長線とし、後者を座標基点とした。基点からは調査範囲をカバーする30m×30mの大区画を設定し、それぞれの大区画は3m×3mの小区画(グリッド)100個を小単位としている。グリッドは粗掘りや遺物取り上げのときの最小単位に使用している。なお、中心線は磁北に対して25°22'12"東へ偏している。

区画の呼称は次のようになる。大区画は、北から南へA～Pのアルファベット、西から東へI～Vのローマ数字をつけ、AⅠ区・AⅡ区のように組み合わせて呼ぶ。小区画は、北から南へa～jのアルファベット小文字、西から東へ0～9のアラビア数字をつけ、大区画と組み合わせてAⅠa0・AⅡa0ほかのようになる。

測量のための座標は、北へはN1・N2・・・、南へはS1・S2・・・のように基点を離れるにしたがって1m単位の数字が増えていく。東西についてはEWを使用している。

(2) 粗掘りと遺構検出

区画を設定したあと、東西方向のトレンチ(2m幅)を各区の南端に開け、遺構・遺物の有無と分布状況を確認した。そして、遺構が多く分布する範囲を優先してグリッドを単位にした市松用の粗掘りをおこない、遺構が広がる場合にはその周辺を拡張していった。その結果、第1次調査はD区からJ区の間をほぼ全面調査している。一方、遺構が検出されず、遺物もほとんど出土しないK区からN区の間は市松用の粗掘りにとどめた。南端のO・P区はビット1基がトレンチで検出できたにすぎないが、縄文時代前期末葉を中心にした遺物包含層が安比内I遺跡との境の開析谷の斜面に形成されていたことから遺構の存在が予想され、ほぼ全面を調査している。

第2次調査は、遺構や遺物の検出が少ないのはL区とN区の間狭い範囲に限られていたことから、遺構検出面まで全体を掘り下げることにした。そして、地形改変による盛り土層が非常に厚い部分が多いことや調査期間との関係から人力とともにバック・ホーによる粗掘りを必要に応じて行なった。その結果、粗密はあるものの、各種遺構がほぼ全域に分布することが確認できた。また、CⅢ区とCⅣ区、DⅢ区とDⅣ区の境界付近はVI層が厚く残り、縄文時代早

期の遺構が下位に検出される可能性が強いことが出土遺物から判断できた。その部分は、上位の検出面で確認できた遺構を掘りあげた後、人力とともにバック・ホーを使って最終的にはⅦ層火山灰の上面まで掘り下げている。その結果、DⅢ-11・DⅢ-12の縄文時代早期の住居跡をはじめとし、いくつかの遺構を検出している。

(3) 遺構の名称

検出した遺構の名称は、大区画名の次に遺構種類別の分類番号・種類名を併用している(表1)。遺構名の具体例は、AⅠ-1住居跡・BⅡ-51ピット・CⅢ-101落とし穴などになる。遺構が二つ以上の区画にかかるときは北端が含まれる大区画名をつけたが、厳密なものではない。

(4) 精査

精査は、調査員の指示のもとに、女性作業員を中心にして進めた。住居跡・住居状遺構は四分法、ピット・落とし穴・焼土遺構・埋薬は二分法を原則的に採用し、他の遺構は性格に応じて精査している。ここでは平安時代の住居跡を例に上げ、その手順を簡単に説明する。

まず、四分と土層観察のためのベルトを設定する。各分割区は、北西を起点にQ1～Q4と時計と逆回りに呼び、遺物取り上げの際の単位にしている。各区ごとに埋土を掘り下げて床面まで検出し、次に土層断面図を作成する。写真撮影用に1本のベルトを残し、撮影後はそれも掘りあげる。次いで、壁溝や柱穴・貯蔵穴・カマドほかの細部を精査する。そして、平面実測や全景写真など必要な記録を終えたあとは、カマドの断ち割り・貼り床の除去・掘り方面までの掘り下げほかの2次的な細部調査を記録を取りながら進め、終了とした。遺物は、各区ごとに、埋土上部・中部・下部、埋土・床面直上・床面・掘り方埋土で取り上げ、付属施設からのものはその部分名と住居埋土と同様の出土層位を記入して取り上げた。

(5) 実測と写真

実測は、女性協力員のなかから年齢ほかを考慮して人選し、短期間ではあるが訓練のあと、作業を開始した。2人1組を基本にし、3組から多いときは8組を確保してきた。また、第2次調査で、調査員が増えた段階では調査員も実測作業に加わっている。簡易の遣り方法を採用し、各種遺構とも1/20の縮尺を原則に、一部は小縮尺を使っている。

写真は調査員が撮影した。住居跡を例にあげると、土層断面・第1次全景・細部写真・カマドや炉の断ち割りほか第2次の細部写真・掘り方の土層断面と全景(第2次全景)など、情報の質と量に応じてできるかぎり写真による記録をしてきた。使用フィルムとカメラは、モノクロームが35mm判と6×7cm判各1台、カラースライドが35mm判1台を一組とし、最大3組を使

遺構の種類	分類番号
墓穴住居跡 住居状遺構 掘建柱蔵物跡	1～50
ピット	51～100
落とし穴	101～150
焼土遺構	151～200
溝	201～250
溝跡	251～300
柱穴状ピット	301～400
墓墳	401～450
埋薬	451～500

表1 遺構種類別分類番号

(6) 文章による記録

(7) 広報活動

2. 室内の整理

(1) 作業内容

Field Card		姓
姓名	姓名: <u>田島 幸三郎</u> 姓: <u>田島</u> 名: <u>幸三郎</u>	姓名: <u>田島 幸三郎</u>
年齢	年齢: <u>35</u> 歳	年齢: <u>35</u> 歳
職業	職業: <u>会社員</u>	職業: <u>会社員</u>
住所	住所: <u>東京都中央区銀座4丁目1番1号</u>	住所: <u>東京都中央区銀座4丁目1番1号</u>
電話番号	電話番号: <u>03-XXXX-XXXX</u>	電話番号: <u>03-XXXX-XXXX</u>
備考	備考: <u>田島 幸三郎 (田島 幸三郎)</u>	備考: <u>田島 幸三郎 (田島 幸三郎)</u>

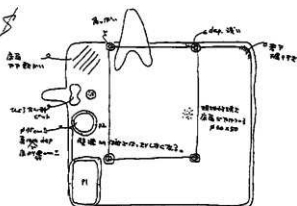


圖1 Field Card使用例

a. 野外の調査時はもちろん、室内での仕事も調査員と臨時職員との一つのチームの上に成り立っている。おおよそ次のように分担している。

調査員：全体的計画の立案・作業の指示・判断・遺物観察・原稿執筆など

臨時職員：実測・トレース・拓影・割り付け・写真撮影・作図・作表など

b. 調査員は、第1次・第2次は遺構に関する整理と原稿執筆、第3次はそれを継続するとともに、遺物観察とそのほかの原稿執筆を主な内容としている。

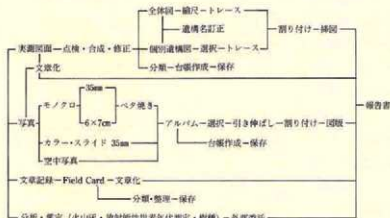


図2 遺構の整理

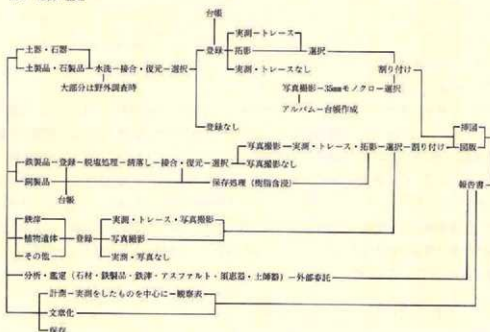


図3 遺物の整理

c. 整理回数ごとの作業員数と主な作業内容

第1次：5人×4.5ヵ月。第1次調査の整理。遺構配置図作成とトレース・個別遺構図のトレース・遺構挿図と遺構図版の割り付け・土器の接合復元ほか。

第2次：11人×4.5ヵ月。第2次調査の整理。内容は第1次に同じ。

第3次：2～8人×12ヵ月。平均5人×12ヵ月。遺物の実測・トレース・拓影・遺物挿図と遺構図版の割り付け・遺構挿図と遺構図版の修正・作図・作表・鉄製品の保存処理・遺物の収納ほか。

(2) 検出遺構と発見遺物はおおよそ前ページの図2・図3に示したような手順によって整理している。

3. 凡例

(1) 全体的なこと

a. 本書は表2に掲載した遺構とそれらからの出土遺物、遺構外からの出土遺物を収録している。

b. 事実記載は第1次調査と第2次調査とに分けて記載し、挿図と遺構図版はほぼそれに従っている。しかし遺物図版は調査回数別にせず、種類別に一括掲載している。

c. 遺構のうち、竪穴住居跡・住居状遺構・掘立柱建物跡は本文や挿図ではほぼその項目別に記載・掲載してきた。しかし作業の関係から、遺構図版は遺構番号の順に組んである。

d. 遺構は、本文・挿図・図版とも種類別に北から順に掲載している。

e. 掲載遺物は、遺構内外や種類に関係なく、掲載順に1からの通し番号をつけている。遺物図版に掲載した遺物番号はそれに対応する。

(2) 遺構・遺物に関すること

a. 遺構のうち、CⅢ-62・CⅢ-64・CⅢ-67・DⅢ-52・OⅢ-52のあわせて5基は調査時は仮にビットとして分類し、登録してきた。

遺構の種類	時代など	第1次	第2次	小計	合計 基数
竪穴住居跡	縄文	1	15	16	122棟
	平安	23	69	92	
	中世		3	3	
	その他		11	11	
小計		24	98	122	
住居状遺構	縄文		1	1	8棟
	平安	2	3	5	
	不明	1	1	2	
	小計	3	5	8	
掘立柱建物跡	平安		1	1	1棟
住居・ビット不明	平安		2	2	2基
ビット	縄文	4	19	23	114基
	平安	15	33	48	
	不明	7	36	43	
	小計	26	88	114	
落とし穴	溝状	46	80	126	137基
	円筒形I型		5	5	
	円筒形II型		6	6	
	小計	46	91	137	
焼土遺構	縄文・不明	6	37		43基
周溝	円形		2	2	5基
	方形	1	2	3	
	小計	1	4	5	
溝	不明		7		7条
基壇	不明		3		3基
埋蔵縄文			2		2基
柱穴状ビット	不明		536±		536±
合計		106	874		980±

表2 調査次回検出遺構の種類と数

しかし整理の段階で検討を加えた結果、落とし穴に再分類することにした。

作業の関係から、本文・挿図・図版ともピットに含めている。そして、最終的には次のような2種類の遺構番号を与えている。

CⅢ-62 (103) ピット・CⅢ-64 (104) ピット・CⅢ-67 (105) ピット・DⅢ-52 (109) ピット・OⅢ-52 (115) ピット

b. 住居跡の記載

1棟にみえる住居跡でも、カマドや柱穴配置・ピット・貼り床ほかの状態や在り方から重複関係にある2棟が含まれていることを知ることができる場合がある。時間的な先後関係が認められる場合、新期をGⅣ-1 a 住居跡、古期をGⅣ-1 b 住居跡のようにアルファベット小文字によって区別し、集計上は2棟に数えている。なお、重複のカテゴリーには拡張・縮小も含むことにする。

c. 平安時代の遺構にみられる浮石について

平安時代に位置づけられる多くの遺構の埋土を中心に、供給源と性状の異なる2種類の火山灰が存在する。一つは灰白色(N 8/1・7.5Y R 8/1~7/2周辺)で極細粒から粗粒まで認められる浮石質のものである。他の一つは黄褐色(2.5Y 5/3周辺)の極細粒の火山灰である。サンプルを採取したなかから、いくつかを鑑定依頼している。その結果、前者はほぼ十和田 a 火山灰、後者はほぼ白頭山-苦小牧火山灰に同定できる。本文では、その色調を代表させ、灰白色浮石・黄褐色火山灰のように記載している。調査時の肉眼的な観察をもとにしているため、誤認の可能性を含むからである。

d. 掘り方埋土=床(底)構築土について

平安時代の住居跡や大型ピットの多くの床や底を観察すると、いわゆる“地山”そのものではなく、いったん遺構の底を掘り下げたあとに別な土を入れて埋め戻し、床や底を作っていることを知ることができる。本書は、その土を掘り方埋土=床(底)構築土と記載している。性状は2種類に分けることができる。①Ⅶ層火山灰の大小塊をマトリックスにし、黒褐色や黒色土ほかの大小塊を混入する。②逆に、黒褐色や黒色土の大小塊をマトリックスにし、Ⅶ層火山灰の大小塊を混入する。そしてほとんどの例が①で、②はJⅣ-2住居跡など少数に認められるだけである。その違いが単なる偶然であるとは考えないが、個別にはその性状の記載を省略している。

e. 上述の床(底)は広義には貼り床(底)である。しかし、貼り床といった場合、ある床面の上に別な床面を構築することをさす狭義の意味もあり、本書は後者の意味において使用している。

f. 住居跡主軸方向は、カマドが設置された辺に直行する線が北あるいは南から偏する角度

を東西へ90°の範囲内で示している。使用方位は磁北で、西偏約7°50'（昭和53年度）である。複数のカマドが設置され、時間的な前後関係がある場合はそれにみあう主軸方向をもつことになる。住居跡主軸方向というものの、カマドの向く方向を強く意識したもので、ほぼカマド方向といってもよい。なお、住居跡の平面形の歪みが著しい場合はある程度修正を加えて計測している。またカマドが住居跡の隅に設置され、煙道部が対角線方向に伸びている少数例はカマド主軸方向として記載している。

g. 本文や土層注記表に記載した火山灰・汚れ火山灰は、断りがなにかぎりはⅦ層起源である。Ⅶ層はいわゆる“地山”である。

h. 遺物の掲載の仕方

主になる平安時代の遺構とともに縄文時代の各種遺構があり、縄文時代の遺物は広範囲にわたって出土している。平安時代や中世以降の住居跡から出土した縄文時代や弥生時代の遺物（推定も含める）は個別の遺構出土遺物には含めず、遺構外出土遺物と一緒に掲載しているが、住居跡でも縄文時代のもの・ピット・落とし穴ほかの遺構から出土した場合は個別の出土遺物として掲載している。

i. 落とし穴は表形式で記載するとともに、形状を記号化している（「まとめ」の項参照）。

j. 土色や遺物の色調は、「新版 標準土色帳」農林水産技術事務局監修による。

(3) 挿図に関すること

a. 縮尺

遺構： $\frac{1}{50}$ と $\frac{1}{100}$ を主に、一部が任意縮尺。挿図右下に縮尺率記載またはスケールで表示。

遺物： $\frac{1}{50}$ と $\frac{1}{100}$ を主に、一部が任意縮尺。挿図右下に縮尺率記載またはスケールで表示。

b. 遺構の重複関係

各時代の各種遺構が様々の状態・形で重複している。個別の遺構図にはいくつかの方法でできるだけその状態を表現している。しかし煩雑になることやそのほかの理由で、必ずしも重複関係のすべてを表わしているとは限らない。また、新旧関係の厳密な表現方法は一定していない。重複関係は本文や全体図・重複遺構新旧関係図（図40・41）に記載している。

c. 遺物観察表中の計測値のうち、破損しているものは（ ）に入れている。縄文土器実測図の左上の数字は口径・器高・底径の順である。

d. 遺構の部位名称や遺物の表記方法の一部を図4に示している。

(4) 図版にかかわること

a. 縮尺

遺構：すべて任意縮尺。

遺物： $\frac{1}{50}$ ・ $\frac{1}{100}$ ・ $\frac{1}{200}$ を主に、一部が原寸大。図版右下に表示。

b. 遺物図版は種類・器種を優先し、個別の遺構とは無関係に組んでいる。

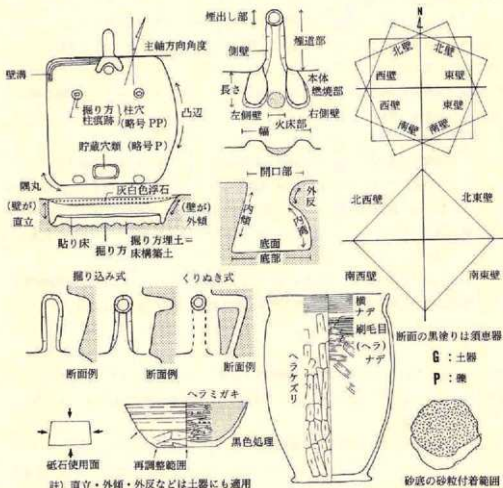


図4 遺構・遺物の凡例

III 遺跡の位置と地形・地質

1. 遺跡の位置

遺跡がある岩手県二戸郡浄法寺町は県北部に位置している。北部で接する青森県との県界に未確定部分があるが、面積183.24km²、人口約7,100人の町である。西部は安代町を挟んですぐに秋田県である（第1図）。

県北部に位置するために県内でも冷涼な気象環境にあり、年平均気温は10.9℃、最高気温は36.25℃、1月中における最低気温は-14.6℃と内陸山間地特有の気象条件を示す^{注1}。冬季の寒さは厳しく、積雪量も多い。基幹産業は農林畜産業で、稲作を中心にしながらも、土地条件に制約されて畑作や酪農が盛んである。とくに葉タバコは東北有数の産地となっている。また全国一の生産量を誇るものに生漆があり、浄法寺桶で知られる漆器の産地でもある。歴史的には、神亀5年(728年)、行基によって創建されたと寺伝にある八葉山天台寺があり、桂泉観音は「奥羽三十三観音札所の詣り納めの霊場」(高橋, 1977)として厚い信仰を集めてきた。

飛鳥台地Ⅰ遺跡へは次のような道順をたどることになる。東北本線あるいはそれにほぼ平行して走る国道4号と二戸市で分かれて県道を南西に向かう。あるいは東北縦貫自動車の安代インターチェンジで降りて同じ県道を北東へ向かうと、二戸市と荒屋新町のほぼ中間に浄法寺がある。県道は浄法寺町の南東部を南西から北東に流れる安比川に沿い、浄法寺街道・鹿角街道^{注2}と呼ばれている古道とほぼ重なる。安代町曲田で盛岡市を起点とする鹿角街道と合流し、栗木峠を越えて秋田県鹿角市に至る。現在の道筋とはだいぶ異なるが、鹿角街道の中でも難所とされる七時南山(1,060m)の西麓を通る古道は、上津野・火内など12村が反乱を起こし、秋田城まで攻撃をしかけた元慶の乱(887年)のとき、坂上好藤が兵二千を率いて秋田へと向かった流籠路とされている(吉田, 1906)。それから約900年後の天明5年(1785年)、32歳の菅江真澄は9月1日に花輪の里を出立し、鹿角街道・浄法寺街道をたどって5日には浄法寺に着き、天台寺を訪ねている^{注3}。

行政や商業・教育などの面で町の中心になっている浄法寺の北東端に岩淵の集落がある。二戸市方面から来た場合はそこを左折、安代町方面から来たならば右折すると、すぐに安比川が流れ、対岸には段丘や低平な丘陵地が見える。一帯は天台寺にちなんで御山の大字名で呼ばれている。飛鳥台地Ⅰ遺跡はその河岸段丘に立地する(第2図)。20万分の1地勢図では「八戸」、5万分の1地形図では「浄法寺」の図幅に含まれ、おおよそ、北緯40°11'、東経141°11'の位置にある。

注1) 昭和51年から5年間の気温。「角川日本地名大辞典3 岩手県」角川書店刊による。

注2) 岩手県教育委員会発行の岩手県歴史の道調査報告「浄法寺・八戸街道」は浄法寺街道を採用している。

注3) 浄法寺街道とも称されるが、明治10年以降のこととされている(岩手県歴史の道調査報告「鹿角街道」岩手県教育委員会発行)。

注4) 菅江真澄: けふのせば布。内田武志・宮本常一編・訳、「菅江真澄遊覧記1」, 平凡社刊による。

2. 地形

浄法寺町は山地・丘陵が面積のほとんどを占めている。安比川を挟んだ山地・丘陵は南北に大別できる。北部は1,078mの稲庭岳が最高峰である。その北東はしだいに高度を下げ、標高400mを境にして丘陵地へと移行している。南西は700~800m台の頂部をもつ山地が連なり、安比

川水系と米代川水系の分水嶺となる貝梨峠(436.6m)へと続く。一方、南部へ広がる丘陵地は1,060mの七時南山に連なるものである。

浄法寺を流れる安比川は安比岳(1,458m)や前森山(1,305m)など八幡平



第4図 地形図

の山々を源にしている。ほぼ南西から北東に流れ、一戸町鳥越付近で馬淵川に合流する流路52kmの1級河川である。馬淵川は青森県八戸市で太平洋に注ぐ流路142km、流路面積2,050km²の県内第2の大河である。

本遺跡付近では安比川はゆるやかに蛇行しながら南西から北東へ流れている(第2図)。遺跡をすぎた岡本付近で幅約700mの狭い谷底平野を開き、それに沿う河岸段丘は小規模で、あまり発達しているとは言えない。遺跡は安比川東岸の低平な段丘に立地している。

本遺跡の載る面は河岸段丘の低位面に相当する。遺跡での標高は200~220m、安比川の現河床との比高差は約21~45mである。同じような面は南西では清水尻・川原、北東では御山の前面に小支谷を挟みながら小規模にみられる。それらと安比川の間にはわずかに付着した沖積古期面、そして同新期面が広がる。一段高い面は南東の吉田や対岸の小池・田屋・八幡館にみられる。そこでの標高は220~240m、安比川との比高差が約40~55mになる(第4図)。

遺跡は、北が名越沢、南が安比内I遺跡との境になる開析谷によって区切られている。しかし南は巨視的には安比内I遺跡の南限である安比内沢に挟まれた範囲と考えることができる。遺跡前面の名越沢との合流点付近では幅200m前後の沖積地が東岸に広がっている。

遺跡の現状の土地利用は畑地である。しかし減反政策が取り入れられる前は水田として利用されていたもので、それにとまなう地形の改変が後述のL面とM面ではいちじるしい。それは、斜面上方を切り土して下方へ盛ることによって平坦面を作り出すもので、上方にあたる部分は遺構の一部、あるいは全体が削剝をうけているのに対し、逆に下方は盛り土の下でよく保存さ

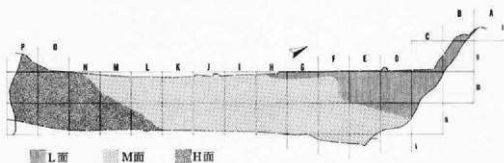


図5 地形面区分図

れる結果になっている。原地形面は安比川との段丘崖に向かい緩傾斜を保っていたものであろう。それにくらべると南半のK区からP区までは原地形をおおむねよく残している。

以上のような状況をふまえながら、微視的には次ぎのように三面の区分をした(図5)。これは記述的な便宜を主にしたもので、地形学的な細分ではない。しかしL面とM面は低位段丘における細分と考えることができるものかもしれない。

L面：調査区北西端のA I区からH III区の一部までの部分。現地表面での標高は197～203mである。

M面：L面から3 m高くなる。DN区からL区までの広い範囲を占め、斜面の状況によっては次ぎの面との境が不明瞭である。

H面：いちおう標高213m以上の範囲を設定した。南端のO・P区を主とした北西へ張り出す舌状の部分を目区分した。M面から漸移的に移行するため境界の不明瞭な部分がある。

上述の地形面の区分は遺構や遺物の分布ほかで使用することにする。

3. 地質

浄法寺町の丘陵や台地は火山破屑物で覆われている。そのほとんどは北西35kmにある十和田火山起源である。

岩手県北部に分布する十和田火山起源の火山破屑物の主なものは、下位から八戸火山灰一・二ノ倉火山灰一・南部浮石一・中梨浮石一・十和田b火山灰一・十和田a火山灰である。そのうち完新世火山灰と考えられているのは二ノ倉火山灰以降である。本遺跡には二ノ倉火山灰と十和田b火山灰をのぞいたものが存在する。

南部浮石は8,600±250B.Pという測定結果があり(大池ほか, 1970)、縄文時代早期の遺構・遺物を知るうえでの鍵層である。中梨浮石層は放射性炭素年代ではバラツキがみられるが(町田ほか, 1984)、遺跡とのかかわりからみて、縄文時代前期という見解が定着しつつある(最近

の例では、福田，1986）。十和田 a 火山灰は町田ほか（1984）によると東北地方のほぼ全域に分布する広域火山灰としてとらえられ、秋田県での大湯浮石と同一のものである。岩手県北部だけでなく、青森・秋田の各県の古墳時代～平安時代の遺構との関連が強く、絶対年代を知りたいところであるが、確定的なものは現在のところはない。先の町田ほかでは「おそらく A.D.915 年。考古学資料からは A.D.870 年よりも新しく、934 年より古い」としている。本遺跡でも多くの遺構に含まれ、遺構や土器の分類上の鍵を握るものである。最近では、噴出源を異にする火山灰が十和田 a 火山灰の上位にあることが知られ、中国と北朝鮮の国境にある白頭山を起源とする白頭山一苦小牧火山灰と命名されている（町田ほか，1984 年）。年代観としては、泥炭層での観察から十和田 a 火山灰との時間的間隔をせいぜい 100 年とする見解がある（町田ほか，1982）。本遺跡の住居跡の一部や周溝の埋土中にもみられ、とくに JⅢ-201 円形周溝や MⅢ-201・202 の円形・方形の周溝では両者の関係がよく観察できる。三辻分析でも上位に位置するものが白頭火山灰との鑑定結果がでている（付篇参照）。

以上が本遺跡にみられる火山灰の概略である。第 5 図は基本層序の概念図である。上述のような地形の改変があることや地形に働く営力の違いから、地点によっては堆積物を大幅に欠くことがある。概念図は GⅣ区の東端や PⅢ区での観察をもとにしている。

盛り土：地形の改変は L 面と M 面にいちじるしく、もっとも厚く覆われた AⅠ区では層厚が 150cm±であり、100cm±の層厚をもつ部分も多い。反対に、盛り土の移動に伴う削剝を受け、遺構への直接の影響がみられるのは、L 面は EⅢ区の東半、M 面は EⅣ区の東半・FⅣ区や GⅣ区の一部・HⅣ区と IⅣ区の東半の一部である。各種の遺構の上部から下部が削剝を受け、EⅣ-2～5 や IⅣ-4 の各住居跡のように堀り方の痕跡しか残さない例もある。少量の遺物が含まれるが、すべて異地性のものである。

0 層：通常は下位の I 層と層相は同じであるが、現表土と盛り土の下にある旧表土を 0 層として分離した。ほとんどが耕作土である。調査区全域に分布し、削剝がいちじるしい場合は本層の下位がⅦ層“地山”になる。層厚は 15cm±である。縄文時代以降の各種遺物を含む。

I 層：暗褐色土。削剝を受けている部分以外ではほぼ全域に分布する。層厚は 15～30cm である。遺物の出土状態は 0 層と同様である。

Ⅱ層：黒褐色土。I 層とは色調の違いから区別できるものの、性



第 5 図 基本層序図

状や包含物はほとんど差がない。分布が確認できるのは堆積物が厚く残っている所であり、CⅢ区などのように“地山”面までの堆積物が30cm土と薄い場合などはⅠ層と区別がつかない。遺物の出土状況はⅠ層とⅡ層と同様である。

Ⅲ層：灰白色浮石層。平安時代の遺構に一般的に認められる灰白色浮石（十和田a火山灰）を概念的に組み入れたものであり、遺構外での存在は限られた地点で小規模に認められるにすぎない。遺構内に層状に堆積する例はCⅢ-4住居跡やFⅣ-3住居跡ほかに認められ、最大層厚は24cmである。

Ⅳ層：黒褐色土。一般にはⅡ層とⅤ層に挟まれていることによって識別できる。M面のEⅣ区やFⅣ区・南端のPⅢ区の斜面堆積物に認められるが、分布が確認できないところも多い。先のPⅢ区では縄文時代前期末葉を主にした遺物の包含層になっているが、EⅣ区やFⅣ区では主に縄文時代後期の遺物を包含する。

Ⅴ層：暗褐色土。主に中礫浮石を母材にする層であろう。調査区に広範囲に分布する。中礫浮石は土壌化が進み、におい黄褐色の塊が北側の狭い範囲に部分的にみられたにすぎない。層厚は10～20cmである。本層が分布する場合、平安時代の遺構の多くはその上面に検出される。縄文時代早期以降の遺物を主に包含する。

Ⅵ層：黒褐色土。主に南部浮石を母材にする層と考えられ、黄褐色浮石粒を霜降状に含む。分布は広範囲である。層厚はよく残っているDⅢ区で35cm土と厚い。南部浮石はOⅣ区でⅦ層に直接載るかたちで限定的ながら分布するほか、南側に隣接する安比内Ⅰ遺跡の竈頭にわずかに層状の堆積を示していることを確認している。縄文時代早期の遺物を主に包含している。縄文時代早期前葉のDⅢ-12住居跡が検出された付近では本層とⅦ層との間に2層の黒褐色土層（上位からⅥb層、Ⅵc層）が認められ、Ⅶ層からⅥ層への漸移層としてとらえた。層厚は40cm土である。分布は限定的で、遺構との関わりで把握できたDⅢ-12住居跡に限ってⅥ層をⅥa層として記載した。

Ⅶ層：におい黄褐色～黄褐色土。“地山”火山灰で、遺跡全体に分布する。八戸火山灰の上部に相当する火山灰で、層厚は15～50cmである。下部には粘土質の灰白色～明褐色浮石層が堆積し、最大層厚は50cm土である。遺構の最終的な検出面である。遺物は包含されない。

Ⅷ層：におい黄褐色～黄褐色。砂層である。L面のCⅡ区では35cmの層厚で、小礫を上部に含む。M面のEⅣ区では150cmまで層厚を確認しているが、数多くの単層に細分されるとともに、葉層の発達が見られる。浮石起源の明黄褐色粘土質土が砂層中に一部含まれる。遺物は包含されない。

Ⅸ層：灰黄色～灰白色。浮石流礫灰岩である。灰白色～灰黄色の浮石（最大粒径10cm土）を多量に含むとともに炭化樹幹が多くみられる。層厚は確認していない。また遺物を包含しない。

Ⅵ層と不整合であることを考えると大不動浮石流凝灰岩に相当する可能性が強い。^(註3)

上記の基本層序と遺構との関係について次ぎに若干触れておく。

Ⅲ層は平安時代の遺構に密接にかかわる。プライマリリが再堆積かの問題は別にしても、遺構や遺物の時期決定の鍵層になる。

Ⅴ層に含まれる浮石は、岩石学的な分析をしていないが、中厚浮石である可能性が強い。それは隣接する広沖遺跡でⅢ層としてよく観察できるほか、縦貫自動車道の発掘調査にかかわる浄法寺町の多くの遺跡で認められること、あるいは北東約7kmの二戸市馬立Ⅰ遺跡で明確に確認できることによる。本遺跡では縄文時代遺構との関係が密接である。前期前葉(Ⅱ群Ⅰ類期=早稲田6類相当)のDⅢ-8住居跡はⅥ層を切って構築しているが、本層に厚く覆われていることがグリッド壁で観察できる。また、同時期のDⅢ-3住居跡の埋土上半に本層起源のよい黄褐色～明黄褐色土が堆積し、埋土の一部を構成している。さらに、同時期のGⅣ-2住居跡の埋土上部に中厚浮石が塊状に含まれていることが確認できる。別種遺構では、そのGⅣ-2住居跡の埋土を切っているGⅣ-101・102の各落とし穴の上部にも同浮石が含まれ、とくにGⅣ-102落とし穴の場合、検出面において輪郭を線取る状態で認められている。しかし、本層を切って構築するGⅣ-108落とし穴の例もある。再堆積ほかの問題を問わないまま、厳密な年代指標層と考えることはできないであろうが、Ⅴ層との関連をふまえ、縄文時代前期前葉(早稲田6類相当)と前期末葉(円筒下層式d1)の間に本層を位置づけることができる可能性を指摘できるであろう。

Ⅵ層を南部浮石起源としたのも浄法寺町や二戸市・一戸町の遺跡での分布を考慮にいれていることである。年代指標層としてはⅤ層と同じ問題をもつが、早期前葉の日計式押型文期のDⅢ-12住居跡は本層の下位にあることがグリッド壁で確認できる。

以上、基本層序について記載してきた。個々の遺物との関係をいえば、各地区で基本層序との確実な対比を十分にできないままに遺物を取り上げているため、一部に混乱が生じている。また、基本層序が調査区すべてに均質に分布するならばよいが、その条件を欠く部分が多いことも事実である。したがって、PⅢ区における縄文時代前期末葉～中期初頭?の包含層での層位的な確実性をのぞけば縄文土器を層位的に位置づけることは無理である。それでも、傾向としてはⅤ層やⅥ層がより古い時期の遺物を包含していることを知ることができる。

註1) 十和田・火山灰は、「下位から上位に降下軽石(大湯浮石と呼ばれた)、降下火山灰、サージ堆積物、火砕流堆積物(毛馬内火砕流)とつづく」とされている(町田ほか, 1984)。なお同論文は十和田αテフラの名称を用いている。本遺跡で確認できるのは降下軽石だけである。

註2) 当初の論文は宮小牧火山灰と呼んでいる(町田ほか, 1981)。

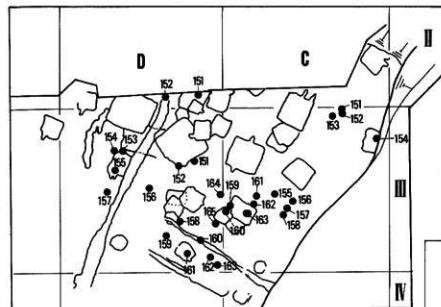
註3) 松山 力は、浄法寺町に隣接する一戸町の段丘を区分しているなかで、洪積世の低位段丘を福岡段丘と一戸段丘とに細分している。それぞれは火山灰流凝灰岩を構成層にもち、前者は八戸浮石流凝灰岩、後者は大不動浮石流凝灰岩を伴う。そして、「福岡段丘よりも一戸段丘の形成がより古い時期のものである」と

1. 遺構名は、大区域名—分層番号—遺構種類名の順である。

(例：AⅢ—1住居跡・BⅡ—51ピット)

2. 遺構が2つ以上の区にまたがっているときは、北端を含む大区域名をつけているが、厳密なものではない。

分 区	遺 構	分 区	遺 構
1～50	竪穴住居跡 住居状遺構 掘立柱建物跡	201～250	溝
51～100	ピット	251～300	溝
101～150	竪とし穴	301～400	柱穴状ピット
151～200	焼土遺構	401～450	溝
		451～500	堀



部分図



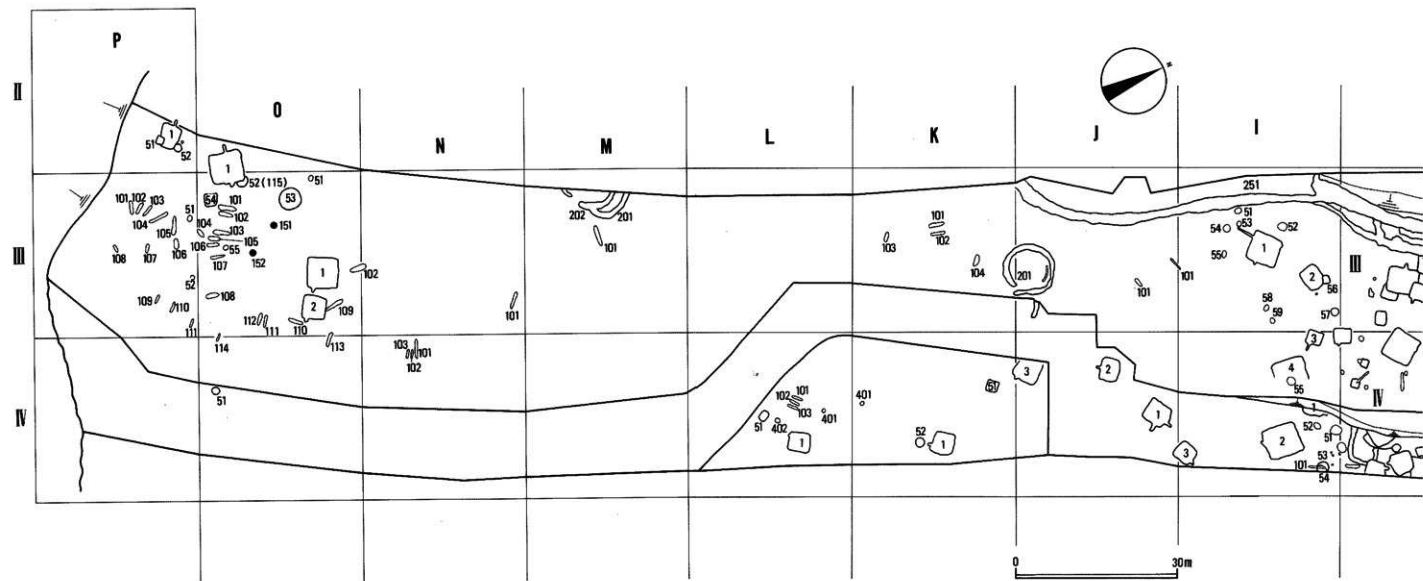
第6図 遺構配置略図と遺構名(1)

A～H区住居跡・住居状遺構・掘立柱建物跡・焼土遺構・埋塞



第7図 遺構配置略図と遺構名(2)

A～H区ビット・落とし穴・周溝・溝跡



第 8 図 遺構配置略図と遺構名(3) I～P区全遺構

している(松山, 1981)。¹⁴C年代から、八戸浮石流凝灰岩は10,000~13,000B.P.、大不動浮石流凝灰岩は「28,000B.P.より古いらしい」という噴火年代が与えられている(野田ほか, 1984)。なお、八戸浮石流凝灰岩と大不動浮石流凝灰岩は層相が似るが、前者が角閃石を含むのに対し、後者は含まないとされているが、本遺構では岩石学的な分析はしていない。

Ⅳ 検出遺構と遺構内出土の遺物(1)―第1次調査―

この年は、工事用道路分ということで、調査予定区域の東端にそって10m幅の南北に長い範囲を調査した。検出した遺構の種類と数は表2(11ページ)に示している。

1. 堅穴住居跡

EⅣ区

EⅣ-1住居跡

遺構(第9図・第10図、図版4~6)

〈検出状況・重複関係〉全体的な削刺を受けている。とくに、南東側約 $\frac{1}{2}$ は床面の一部を含めて削刺され、壁の大部分を失っている。重複する遺構はない。

〈平面形〉わずかに隅丸の正方形 〈規模〉6.2×6.4m 〈床面積〉37.8m² 〈主軸方向〉N-51°30'-W

〈埋土〉下部の一部が壁寄りで見えてきたにすぎないが、2層の黒褐色土が認められる。

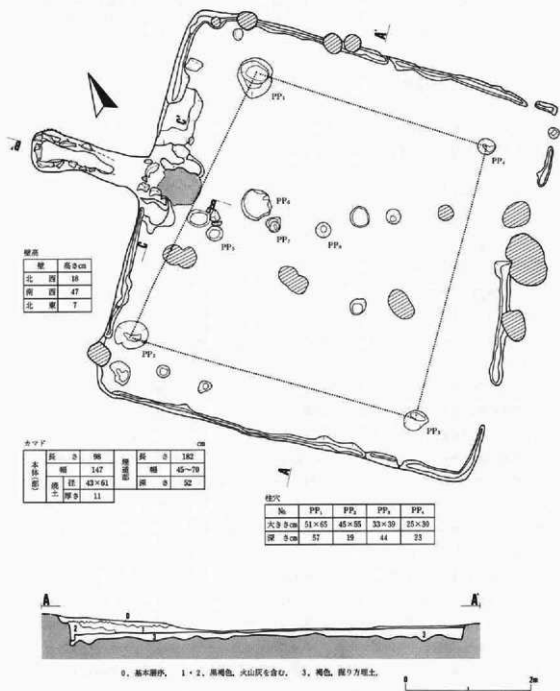
〈壁の状態〉直立 〈壁高〉47cm 〈壁溝〉床面の一部まで削刺されている南東壁沿いで断続するほかはほぼ連続して存在する。幅は8~20cm、深さは6~24cmである。

〈床面・掘り方〉床面は中央部付近が硬く締まっている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

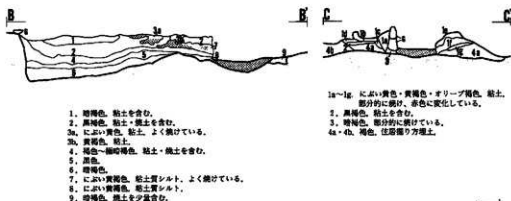
〈柱穴〉PP1~PP4の4本柱である。PP1・PP3・PP4は隅から内側に入った位置にあるのに対し、PP2が北西壁に寄るため、いびつな方形の配置になる(Ⅰ型)。PP5~PP8の4個は灰白色浮石を埋土に含むが、本遺構との関係も含め、具体的な位置づけは分らない。また近年掘り込まれた柱穴も多く存在する。

〈カマドの位置〉北西壁の中央 〈カマド本体〉崩壊しているものの、側壁などはよく残っている。側壁は、粒径10~30cmの亜角礫・亜円礫多数を芯材に使い、黄褐色ほかの粘土で被覆している。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。いくぶん急傾斜で下がったあと、緩傾斜で先端部へ向かう。中央部から先端部までの側壁の上半部は粒径10~30cmの多くの亜角礫を立てかけたあと粘土で固定している。天井部の一部も粘土で構築されている。煙出し部はピットを伴わない。

遺物(第11図、図版221)



第9図 EIV-1 住居跡実測図(1)



第10図 EIV-1 住居跡実測図(2)

$S = \frac{1}{40}$

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、出土量は少ない。カマド本体を中心に、床面～床面直上・壁溝・埋土・煙道部・柱穴状ピット・掘り方埋土から出土している。土器と剣片石器がある。

〈土器〉土師器壺が主体を占め、次いで坏・須恵器・縄文土器の順に多い。土師器壺はⅠ類がほぼ全部で、M1 などがある。Ⅱ類は破片1点があるにすぎない。4の底部は砂底である。坏はⅠ類の1のほかに破片で、Ⅰ類11点、Ⅱ類4点がある。須恵器は壺6以外は5点の破片がある。

〈その他〉剣片2点が出土している。

まとめと遺構の時期

2～5は本遺構と共伴あるいは時間的に近い関係にある。灰白色浮石や黄褐色火山灰の在り方を知ることができないが、住居形式や遺物から、平安時代Ⅰ群あるいはⅡ群として分類する。

EIV-2 住居跡

遺構 (第12図。図版5・6)

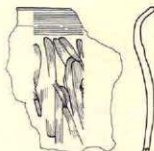
〈検出状況・重複関係〉床面の下まで削剝を受け、掘り方やカマド本体・煙道部など、かろうじて残っていた部分から把握できた。重複するEIV-4・5の2棟の住居跡(ともに平安時代に切られて不明な南隅をのぞいた3隅は大部分が残っている。平面形や規模・床面積は推定である。一部が重複するEIV-105落とし穴との新旧は確認できなかった。

〈平面形〉ほぼ正方形 〈規模〉4.2×4.5m 〈床面積〉18.7㎡ 〈主軸方向〉N-45°30'-W 〈埋土〉掘り方埋土と煙道部埋土をのぞいては固有の埋土を欠く。

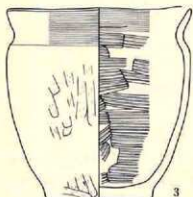
〈壁の状況・壁高・壁溝〉不明



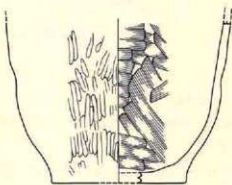
1



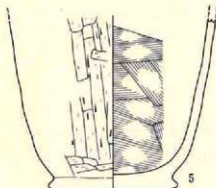
2



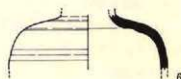
3



4



5



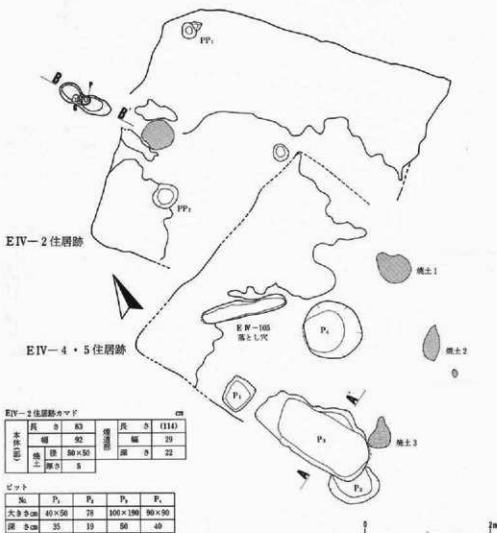
6

No	地点・層位	種類・群	外			内			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口縁部	高さ	口径		
1	堀土	環	口タロ底	口タロ底	—	ヘタタギキ	—	—	15.1	(4.6)	—	1E	

No	地点・層位	種類・群	外			内			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口縁部	高さ	口径		
2	カマド	土師製	横ナデ	ヘタナデ	—	横ナデ	ヘタナデ	—	—	—	—		
3	灰皿	H	H	ヘタナデ	ナデ	H	横毛目	ナデ	14.8	15.1	8.4	1M	221
4	カマド	H	—	ヘタナデ	砂底	—	ヘタナデ	H	—	(12.5)	10.6		
5	カマド火床部直上	H	—	ヘタナデ	ナデ	—	H	ナデ・ナデ	—	(13.6)	10.0		
6	カマド(掘り方)	土師製	—	口タロ底	—	—	口タロ底	—	—	(4.2)	—		

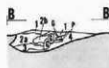
第11図 EIV-1 住居跡出土遺物

S = $\frac{1}{3}$



柱穴

No.	PP ₁	PP ₂
大きさ cm	22×25	40×40
深さ cm	5	20

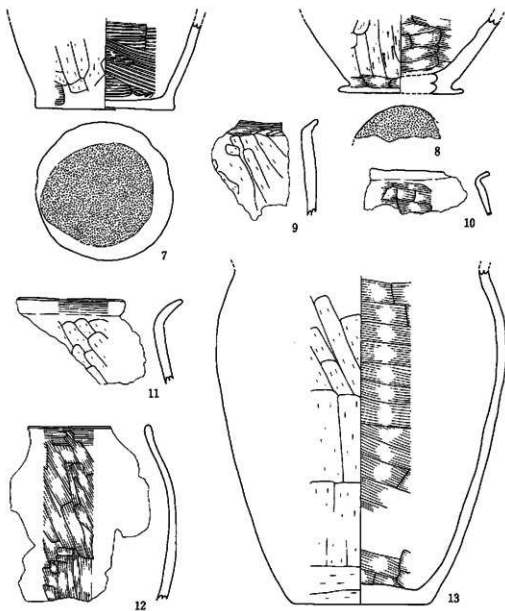


1. EIV-4 住居跡跡り部。
2. 褐色、粒状・塊状の灰白色浮石を多く含む。
3. 黒褐色、炭化物粒を少し含む。
- 4a. 黒褐色。
- 4b. 黒褐色。灰白色浮石の塊を少量含む。
- 4c. 黒褐色。火山灰塊を含む。
5. 黒褐色。焼土塊を少量含む。
6. 暗褐色。灰白色浮石の小塊と炭化物粒を微量含む。

1. 黒褐色。
- 2a. 細かい黄褐色。焼土質シルト。
- 2b. 細かい黄褐色。シルト質粘土。
- 3・4. 黒色。

$$S = \frac{1}{40} (\text{東})$$

第12図 EIV-2・4・5 住居跡実測図



No	地 点・層位	種類・器名	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	最 大 径 径	底 径		
7	EIV-2 住居遺跡	土師製	—	ヘラケズリ・ナデ	砂紙	—	刷毛目	ナデツケ	—	(7.2)	11.2		
8	EIV-4 住P2層土	〃 〃	—	〃	〃	—	ヘラナデ	ナデ	—	(5.8)	10.0		
9	EIV-4・5 住P1層土	〃 〃	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	〃	—	—	—	—		
10	EIV-4 住P2層土	〃 〃	不明	ヘラナデ	—	〃	〃	—	—	—	—		
11	EIV-4・5 住P1層土	〃 〃	横ナデ	ヘラケズリ	—	〃	〃	—	—	—	—		
12	〃 〃	〃 〃	〃	ヘラナデ	—	〃	〃	—	—	—	—		
13	EIV-4 住居面	〃 〃	—	ヘラケズリ	不明	—	〃	ナデ	—	(28.7)	10.7		

S = $\frac{1}{3}$

第13図 EIV-2・4・5住居跡出土遺物

〈床面・掘り方〉床面はまったく残っていない。掘り方は北東壁や北西壁寄りの部分によく残っている。

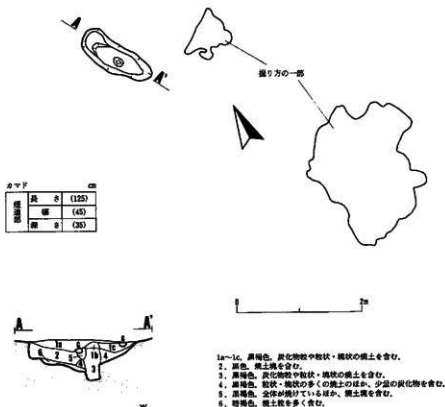
〈柱穴〉柱穴状ピットはPP1・PP2の2個があるが、主柱穴にはならない。

〈カマドの位置〉北西壁の中央 〈カマド本体〉両側壁の下底部と火床部が痕跡として残っているにすぎない。側壁はシルトや粘土質シルトで構築されていたものと推定でき、左側壁には芯材である礫の抜き取り痕1個がある。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉削刺のため、形態は不明である。埋土は数個の亜角礫や粘土質シルトを含み、礫が焼けていることから、側壁あるいは天井部を構成していたものが転落したことが考えられる。本体寄りの部分は削刺され、壁からやや離れた位置から残る底面は緩やかに傾斜して下がって行く。側壁はよく焼け、赤褐色に変化している。煙出し部はピットを伴わない。

遺物（第17図）

〈出土状況〉遺構の残存状態が悪く、量は少ない。7以外にはカマド本体や煙道部から土師器壺Ⅰ類の破片が5点出土している。

〈土器〉7は土師器壺Ⅰ類で、砂底である。



$$S = \frac{1}{40} (\%)$$

第14図 EIV-3 住居跡実測図

まとめと遺構の時期

住居形式や出土遺物から平安時代に分類できるものの、小群に細分することはできない。

EⅣ-3 住居跡

遺構（第14図、図版6）

〈検出状況・重複関係〉床面の下まで削剝を受け、掘り方の一部と煙道部が残っているにすぎない。重複する遺構はない。

〈平面形・規模・床面積〉不明である。掘り方の残存部は北西—南東方向で4.4mを測る。〈主軸方向〉N-32°-W（推定）

〈埋土・壁高・壁溝〉埋土は掘り方埋土の一部と煙道部埋土をのぞいては固有のものを欠く。あとの二つは不明である。

〈床面・掘り方・柱穴〉床面はもちろん、掘り方も一部しか残っていない。仮に柱穴があったとすれば通常は痕跡を残すであろうが、それもない。

〈カマドの位置・本体〉北西壁に設置されているが、占める位置は不明である。本体はまったく残っていない。〈煙道部・煙出し部〉削剝のため、形態は不明である。底面は、中央にある小ピットまで急激に下がり、ピットから先端部へは波打ちながらゆるやかに上がっていく。側壁は焼け、赤褐色に変化している。煙出し部はピットを伴わない。

遺物

〈出土状況〉遺構の残存状態が悪く、土師器壺Ⅰ類2点、縄文土器1点の破片が煙道部から出土しているだけである。

まとめと遺構の時期

住居形式や出土遺物から平安時代に分類できるものの、小群に細分することはできない。

EⅣ-4・5 住居跡

遺構（第12図、図版5・7）

〈検出状況・重複関係〉周辺の遺構と同様に、現代になってから受けた削剝がいちじるしく、一部に残る床面や掘り方・ピット・現地性焼土から確認できた住居跡である。時間的な先後関係のある2棟が重複していることが考えられるが、個々の部分の帰属に不明の部分が多いため、一括して記載したあと個別に検討する。重複するEⅣ-2住居跡（平安時代）を切っているが、EⅣ-105落とし穴との新旧関係を示す痕跡は残っていない。

〈平面形〉方形と推定できるが、詳細は不明である。〈規模〉東西で4.0mと推定〈床面積・主軸方向〉不明

〈埋土・壁高・壁溝〉埋土は掘り方や内部にあるピットのものをのぞいては不明である。あとの二つは残っていない。

〈床面・掘り方・柱穴〉床面は、貯蔵穴P3の埋土の上に施された層厚2cmの貼り床が狭い範囲に認められるにすぎない。その部分は硬くしまっている。掘り方は北壁寄りの部分に残り、二つの隅を含んでいる。反対壁はP2と2号焼土を結んだ付近にあったものと推定しておく。柱穴の痕跡は認められず、伴わないものであろう。

〈焼土〉現地性焼土は推定範囲の3カ所にみつかっている。焼土1は推定される東壁中央、焼土2・焼土3は推定される南壁寄りに位置する。カマドの火床部の可能性があるが、割削・破壊がひどく、確実な点は不明である。

〈付属施設〉貯蔵穴、あるいはそれに類似するピットは4基がある。P1は平面形が不整形で、埋土は、上半が黒褐色土、下半が汚れ火山灰である。P2は平面形が円形と推定され、埋土は黒褐色土の単層でいくぶん多い焼土粒や炭化物粒を含む。P3は平面形が不整な長方形で、埋土は暗褐色～黒褐色土である。上半には灰白色浮石の小塊を多く含む。P4は平面形が円形で、埋土は汚れ火山灰の単層である。位置的には、P1～P3が推定での西壁際に、P4がほぼ中央部にある。またP2とP3は重複し、前者が後者を切っていることが平面的に観察できた。P3・P4は貯蔵穴であることが形態から考えられる。

〈帰属〉上述の焼土やピットの状況・数を検討すると、まずP3の埋土上に貼り床する1棟が考えられ、それをEN-4住居跡とする。P3はその形態からみて、住居内に付属する貯蔵穴の可能性がきわめて強い。そうすると、EN-4住居跡に先行する1棟を想定することができ、EN-5住居跡としておく。ピットや焼土との伴関係は、EN-4住居跡はP2、EN-5住居跡はP3を伴う。残るP1とP4の帰属は不明である。また3基の焼土のうち、焼土3はP3との位置関係からみて、EN-4住居跡に属すると考えることは難しいものの、EN-5住居跡との関連はわからない。ほかの2基については2棟との関連が不明である。

遺物（第13図）

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、出土量は少ない。P3上の貼り床に密着して出土した一括の土師器壺13のほかは、P1～P4から出土している。土器と鉄滓・礫石器がある。

〈土器〉土師器壺が主体で、少量の縄文土器と坏が出土している。土師器壺はI類Lの13以外は破片で、すべてI類である。8は砂底である。坏はII類の破片2点がP1から出土し、うち1点はB0である。

〈鉄滓〉5点414gがP3から出土している。

〈その他〉凹石1点がP4から出土している。

まとめと遺構の時期

EN-4住居跡に固有のものは13やP2からの8・10である。EN-5住居跡に固有のものはP3からの土師器壺I類や鉄滓である。平安時代に分類できるものの、小群に細分すること

はできない。

FⅣ区

FⅣ-1住居跡

遺構（第15図～第17図。図版7・8）

〈2棟の重複〉カマドが3基あることや共伴するピットからみて、同形態・同規模の少なくとも2棟が重複していることを推定できる。新期を1a住居跡、古期を1b住居跡として記載し、カマドについてはまとめて後述する。

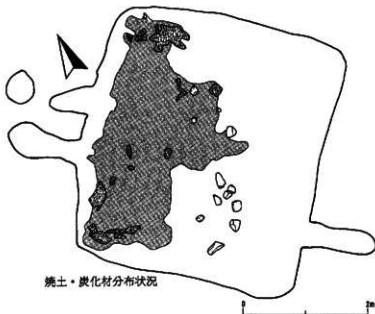
〈重複関係〉FⅣ-110・111・FⅤ-102の3基の落とし穴を切っている。

FⅣ-1a住居跡

〈平面形〉いくぶん隅丸のほぼ正方形 〈規模〉3.8×4.3m 〈床面積〉12.7㎡ 〈主軸方向〉1号カマド：N-54°-W 3号カマド：S-54°-E

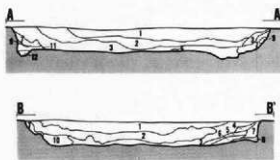
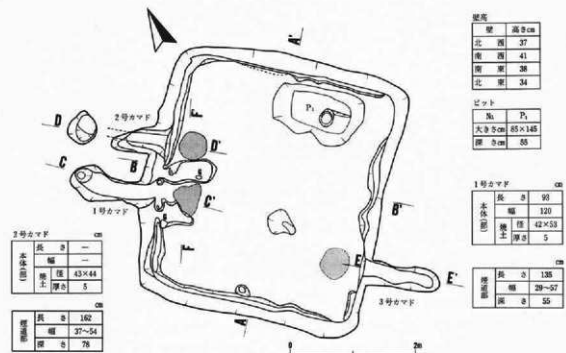
〈埋土〉暗褐色～黒色の土層群が占める壁際をのぞいては黒褐色土と2層の黒色土で構成される。粒状や10～30mmの小塊が主体の灰白色浮石を全体に含み、壁際は埋土上部、そのほかでは中・下部に著しく、床面まで分布する。

〈壁の状態〉直立～ゆるやかな外傾 〈壁高〉34～41cm 〈壁溝〉1号・3号カマド、東隅をのぞいた部分に回り、幅は10～20cm、深さは8cmである。



〈床面・掘り方〉床面は周辺部をのぞいて硬く締まっている。全体規模の掘り方を下位に伴うが、掘り方埋土は灰白色浮石を部分的に少量含んでいる。しかし、床面の少なくとも一部は1b住居跡と共有一再利用の

第15図 FⅣ-1住居跡実測図(1)

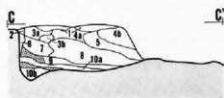


1. 黒褐色。灰白色砂石を上部に僅かに含むほか、灰白色砂石・炭化物粒を少量含む。
2. 黒色。灰白色砂石の小塊を全体に含むほか、黒色土塊を含む。
3. 黒色。灰白色砂石の大塊を多く含むほか、黒色土塊を含む。下部は焼土塊が多い。
4. 黒色。灰白色砂石の小塊を含む。
5. 黒色。粒状の灰白色砂石を僅かに含む。
6. 黒色。灰白色砂石の小塊を僅かに含む。
7. 黒褐色。粒状の灰白色砂石を少量含む。
8. 黒褐色。
9. 増褐色。
10. 黒褐色。粒状の灰白色砂石を僅かに含む。
11. 黒色。灰白色砂石の小塊を多く含む。
12. 黒褐色。

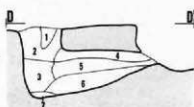
3号カマド

本体部	長さ	幅	高さ	厚さ
	—	—	122	38
焼土	44×50	不明	40	—

1. 黒褐色。焼土粒を少量含む。
2. 濃い黄褐色。
3. 黒褐色。
4. 暗褐色。粒状・塊状の焼土を多く含む。
5. 暗赤褐色。焼土粒。
6. 濃い赤褐色。焼土粒。炭化物粒を少量含む。
7. 黒褐色。焼土粒を多く含む。

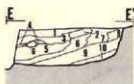


1. 黒褐色。焼土塊を多く含む。
2. 黒色。
- 3a・3b. 黒褐色。焼土塊・炭化物粒を多く含む。
- 4a・4b. 黒色。灰白色砂石の小塊を含む。
5. 黒褐色。焼土粒が全体に散在する。
6. 暗褐色。焼土粒。
7. 黒褐色。焼土塊・灰白色砂石塊を多く含む。
8. 黒褐色。粒状・塊状の焼土を多く含む。
9. 黒褐色。
- 10a・10b. 黒褐色。粒状の焼土・炭化物を少量含む。

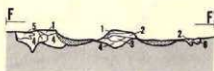


第16図 FIV-1 住居跡実測図(2)

$$S = \frac{1}{40} (\text{漸})$$



1. 黒褐色。
2. にぶい黄褐色。焼けている。
3. 暗褐色。粒状・塊状の焼土を多く含む。
4. 黒褐色。
5. 黒褐色。焼土塊を少量含む。
6. 灰黄褐色。粒状・塊状の焼土を多く含む。
7. 黒色。焼土塊を多く含む。また灰白色浮石の小塊を少量含む。
8. 黒褐色。焼土塊を多く含む。
9. 黒褐色。焼土塊を少量含む。
10. 黒色。焼土塊を多く含む。



1. にぶい黄褐色。粘土質シルト。
粒状の焼土・炭化物を含む。
2. 暗褐色。粘土質シルト。炭化物を含む。
3. 黄褐色。粘土質シルト。
4. 黒褐色。
5. 褐色。
6. 黄褐色。

$$S = \frac{1}{49}$$

第17図 FIV—1 住居跡実測図(3)

関係があることから推定するならば、掘り方はむしろ 1 b 住居跡に固有と考えるべきであろう。

〈柱穴〉 伴わない。

〈付属施設〉 東隅にある貯蔵穴 P 1 を伴う。平面形はいびつな凸辺長方形で、深い。P 2 と重複する南東部はその埋土を壁にしている。埋土は、上部が住居跡埋土最下部から連続する黒褐色土、その下位はⅥ層起源の汚れた土が占める。底面の中央部付近には径 25cm・深さ 48cm の円形小ピットがあり、共伴することが考えられる。

〈焼土〉 炭化した材や草本類、多くの焼土が埋土下部から床面直上に分布する。分布範囲は北西側半分が主である。焼土は、壁際では床面から高い位置にあるが、急傾斜で下がってそのまま床面に接するように分布する。シルトが焼けたもので、粘土の小塊を一部に伴う。材や草本類の多くは焼土に載る状態で分布するが、一部はその下位に位置する。材は小さく短いもので、本来の形状や大きさは分からない。方向としては住居の中央部を向くものが多い。そのほか、粒径 8～26cm の亜角礫が 3 号カマドの北西の床面を中心に数多く分布し、そのなかのいくつかは焼土の上に載るとともに焼けている。材や草本類の量はそれほど多くはないが、以上の状態から、焼失住居とすることができる。

FIV—1 b 住居跡

〈平面形・規模・床面積〉 1 a 住居跡と同形・同規模と推定される。〈主軸方向〉 N—54°—W

〈壁・壁溝〉 共伴する 2 号カマドと P 2 の位置や状態からは、北東壁全部と北西壁や南東壁の一部は 1 a 住居跡と共有一再利用の関係にあることが推定できる。〈埋土〉 固有のものを欠く。

〈床面・掘り方・柱穴〉 壁と同じ理由から、少なくとも北東側については床面の共有一再利用が考えられる。掘り方については 1 a 住居跡の項に記載した。柱穴は伴わない。

〈付属施設〉 P 1 の南東側にあり、それに切られている貯蔵穴 P 2 を共伴する。調査の勝手

際から、P 2 については実測していないため、Field Card をもとに記載する。幅は P 1 と同じで、残存する南東部50cmの部分からは長方形の平面形を推定できる。深さは分からないが、P 1 よりは浅く、2 基の間には明瞭な段差が認められる。埋土についての記載はない。なお、埋土の上には 1 a 住居跡の側から貼り床されている。

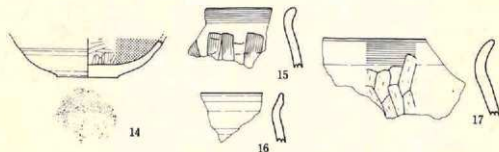
次に 3 基のカマドについて記載する。

1 号カマド：〈位置〉北西壁中央からやや南西寄り 〈本体〉崩壊し、残存状態は良くないものの、粘土質シルトで構築された両側壁を確認できる。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。平面形は先端部がわずかに屈曲する。底面は緩やかに傾斜して下がり、円形の小ピットが煙出し部に掘り込まれている。埋土は黒褐色土・黒色土が卓越し、中・下部の一部に灰白色浮土の小塊を含んでいる。

2 号カマド：〈位置〉1 号カマドの北隣りにある。〈本体〉よく焼けた火床部が残るだけである。〈煙道部・煙出し部〉くりぬき式である。底面は緩やかに傾斜して下がり、楕円形のピットを煙出し部に伴う。

3 号カマド：〈位置〉先の 2 基とは反対側の南東壁に設置され、その中央と南隅との中間。〈本体〉よく焼けた火床部が残っているだけである。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。底面はほぼ水平に伸びたあと緩やかな傾斜に転じ、上がっていく。埋土は天井部を作っていたシルト質粘土や少量の灰白色浮土を含む。煙出し部はピットを伴わない。

〈3 基のカマドの帰属〉残存状態からみて、1 号カマドは 1 a 住居跡に伴う。2 号カマドは、火床部しか残っていないこと、壁溝が火床部と壁の間に掘り込まれていること、壁面に見える煙道部埋土の上を焼失に伴う炭化材が覆うことから 1 b 住居跡に伴う。3 号カマドは本体が火



No	地点・層位	種類	外 面				内 面				計測値 : cm	分類	図例
			口縁部	側 部	底 部	口 部	口 部	側 部	底 部	口 部			
14	埋土	坪	—	ロクロ底	回転糸切り	—	ヘラミダキ	○	—	(2.8)	4.9	1B0	
No	地点・層位	種類・図例	外 面				内 面				計測値 : cm	分類	図例
			口縁部	側 部	底 部	口 部	口 部	側 部	底 部	口 部			
15	埋土	土師器類	横ナデ	ヘラナデ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—	—		
16	埋土	ロ 口	ロクロ底	ロクロ底	—	ロクロ底	ヘラナデ	—	—	—	—		
17	埋土	ロ 口	横ナデ	ヘラナデ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—	—		

第18図 FIV-1 住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{2}$$

床部しか残っていないが、壁溝がその部分で切れていることを考えると、1a住居跡に伴い、1号カマドよりも時間的に先のものであろう。

遺物 (第18図)

〈出土状況〉埋土を中心に、P1埋土・2号カマド煙道部・床面・壁溝から出土しているが、量は多くはない。土器と剥片石器がある。

〈土器〉すべて破片である。土師器甕が主体を占め、次いで多い方から順に、縄文土器・坏・須恵器がある。土師器甕はI類が卓越する。砂底2点、木葉底1点がある。坏はI類21点、II類7点がある。I類はC4が2点、A0・A2・B0・B2が各1点、II類はA0が2点である。須恵器は壺?が1点あるにすぎない。

〈その他〉不定形石器1点がある。

まとめと遺構の時期

重複形態からみて、2棟は時間的に近い関係にあるものと推定する。

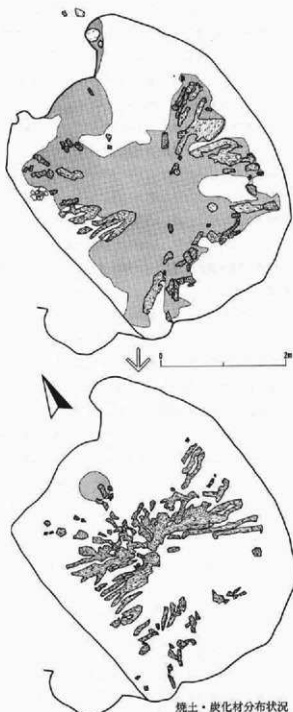
埋土や掘り方埋土の状況から、平安時代Ⅲ群に分類できる。

FⅣ-3住居跡

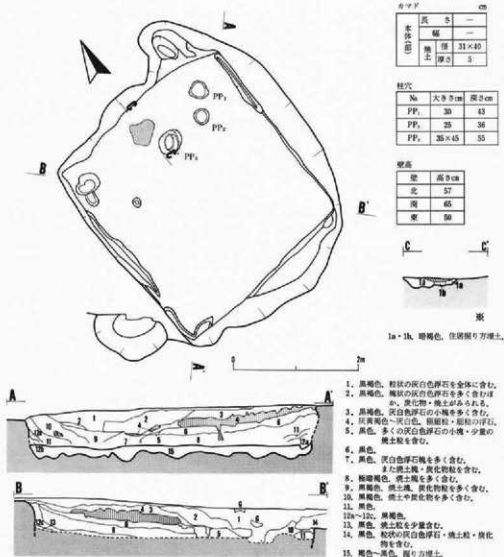
遺構 (第19図・第20図、図版9～11)

〈検出状況・重複関係〉灰白色浮石の大小塊の分布によって平面形を確認できる。重複する遺構はない。

〈平面形〉長方形。東壁と南壁は上・中部が膨らむ。北壁の北東隅付近は掘りすぎがあり、また、西壁は全体



第19図 FⅣ-3住居跡実測図(1)

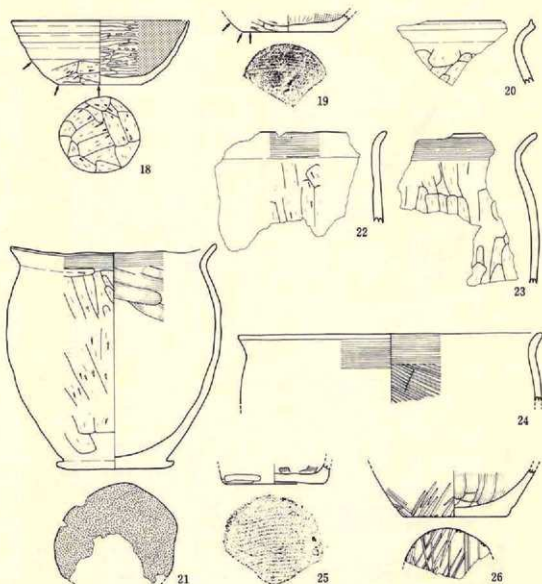


第20図 FV-3 住居跡実測図(2)

$S = \frac{1}{48} (\text{米})$

を掘り下げて検出しているため、上・中部の壁の状態は把握できなかった。〈規模〉3.3～3.8×3.8～4.3m 〈床面積〉10.8m² 〈主軸方向〉N-14°-W

〈埋土〉黒褐色土・黒色土が卓越する。上・中部の4層は灰黄褐色～灰白色の浮石層である。南西側約 $\frac{1}{2}$ に分布し、中央へ緩やかに傾斜している。その先端部は浮石塊を含む黒褐色土へ収斂する。下位より、粗粒～極細粒～細粒～極細粒の四つの葉層が認められる部分と粗粒～極細粒の二つがみられる部分とがある。最大層厚は17cmである。浮石はその上位の黒褐色土に塊状



No.	地点・層位	種類・図様	外 面				内 面				計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	肩部	口縁部	胴部	底部	肩部	口縁部	胴部	底部		
18	カマド・廻り万塚土	坪	口縁部底・河泥塗	河泥塗	河泥塗	河泥塗	ヘラミガキ	○	○	○	14.2	5.1	6.6	IC4	217
19	埋土上部	■	ヘラミガキ	静止糸切り・河泥塗	■	■	○	○	○	○	—	(1.4)	(7.2)	IA2	

No.	地点・層位	種類・図様	外 面				内 面				計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	肩部	口縁部	胴部	底部	肩部	口縁部	胴部	底部		
20	埋土下部	土砂層裏	口縁部底	ヘラミガキ	—	口縁部底	ヘラミガキ	—	—	—	—	—	—		
21	埋土下部～床面直上	■ ■	横ナデ	ヘラミガキ	砂塗	横ナデ	■	ナデ	■	ナデ	16.5	16.8	9.4	IM2	221
22	埋土上部	■ ■	■	■	—	■	■	—	—	—	—	—	—		
23	埋土下部	■ ■	■	■	—	■	■	—	—	—	—	—	—		
24	床面直上	■ ■	■	不明	—	■	刷毛目	—	—	—	(24.3)	(5.5)	—		
25	埋土下部	■ ■	—	—	静止糸切り	—	—	ナデツケ	—	—	—	—	7.9	221	
26	埋土下部	■ ■	—	刷毛・ヘラミガキ	刷毛	—	ヘラミガキ	ナデ	—	—	(3.7)	8.3	—	221	

第21図 FIV-3 住居跡出土遺物

$S = \frac{1}{2}$

に含まれるが、上部ほど少量になる。

〈壁の状態〉下部は直立するが、南壁と東壁の上・中部は張り出して外傾する。〈壁高〉50～65 cm 〈壁溝〉西壁と東壁の一部にある。幅は7～25cm、深さは2～10cmである。

〈床面・掘り方〉床面はほぼ水平で、中央部付近は硬い。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉柱穴状ピットは掘り方面で検出されたものである。PP 1～PP 3は深い、主柱穴にはならない。

〈カマド〉円形の現地性焼土が北壁中央の壁際にある。カマドの火床部と推定したが、本体の構築材の分布はみられず、煙道部・煙出し部を伴わない。

〈焼失〉焼土が住居中央部を中心にした範囲に分布し、径5～8cmを主にした炭化材がその縁付近に放射状に載る。焼土は層厚2cmと薄く、それを除去すると、多量の材が床面・床面直上の層準に検出された。材は5cm±のものが主で、一部は角材のようにみえる。長いものは120cm±が残存する。幅の広いものは9～12cmであるが、板材は含まれていない。床面中央から放射状に分布する。その下位には焼土をほとんど伴わない。以上の状態からは火災をうけた住居であることが考えられる。なお6点の材の鑑定結果はすべてクリである。

遺物（第21図、図版217・221）

〈出土状況〉埋土下部や埋土上部（灰白色浮石層上位）を中心に、床面直上・床面・カマド本体・掘り方埋土からいくぶん多い量が出土している。土器・鉄滓・轆の羽口・石器がある。

〈土器〉18や21以外は破片である。土師器甕が主体を占め、次いで縄文土器・坏・須恵器の順に多い。土師器甕はⅠ類が卓越し、Ⅱ2などがある。砂底は21以外に2点、木葉底は1点がある。25はⅡ類の小型または中型で、静止糸切り痕を残す。26はヘラ状工具による鋭い刻線を胴部下端～底部の外面に伴う。下端は斜行、底部は格子目状の施文である。坏は、Ⅰ類がC 4の18、A 2の19のほかにC 4が2点、Ⅱ類はC 4とB 0が1点ずつ出土している。須恵器は破片1点があるにすぎない。

〈轆の羽口〉少破片1点が埋土下部から出土している。

〈鉄滓〉8点327gが埋土下部から出土している。

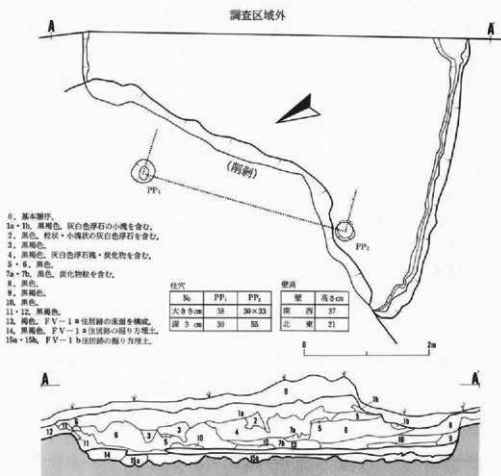
〈その他〉不定型石器ほかの剥片石器2点と凹石1点がある。

まとめと遺構の時期

19と22は埋土上部からの出土である。18は掘り方埋土とカマド本体からのものが接合している。21や24ほかは本遺構と時間的に近い関係にあるであろう。層状に堆積する灰白色浮石から、平安時代Ⅰ群に分類できる。

F V 区

F V - 1 住居跡



第22図 FV-1 住居跡実測図

遺構 (第22図, 図版12・13)

〈2棟の重複〉 上下に重なる2枚の床面とともに異なる掘り方があり、2棟の住居が重複していることを知ることができる。新期を1 a 住居跡、古期を1 b 住居跡として記載する。

〈検出状況・重複関係〉 南東側は調査区域外にある。また、北西壁寄りの部分は現代になってからの削削を受けて壁と床面を失っている。別の遺構との重複関係はない。

FV-1 a 住居跡

〈平面形〉 方形と推定できるものの、詳細は不明である。〈規模〉 北東—南西方向で6.2 mを測る。〈床面積・主軸方向〉 不明

〈埋土〉 黒褐色と黒色の多くの土層群で構成される。粒状～小塊状の灰白色浮石を全体に多く含み、とくに上・中部に顕著である。

〈壁の状態〉南西壁は1b住居跡と共有一再利用の関係にある。残存する部分では外傾する。

〈壁高〉21~37cm 〈壁溝〉南西壁沿いにあり、幅は15~32cm、深さは8cmである。また、図示していないが、非常に浅い壁溝が北東壁沿いにも存在した。

〈床面・掘り方〉床面中央部と推定できる付近が非常に硬く締まり、小凹凸を伴っているが、周辺部は軟らかい。北東壁寄りの部分約130cmをのぞいては下位の1b住居跡の床面を覆う貼り床である。この住居跡に固有の掘り方は1b住居跡と重複しない北東壁寄りのみ認められる。

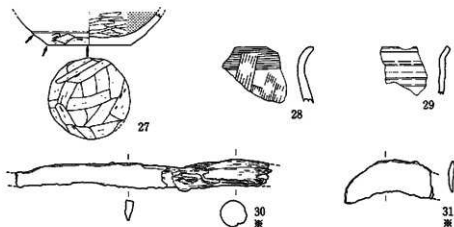
〈柱穴〉PP1とPP2が検出され、位置や規模からは主柱穴として位置づけできる。PP1は上部を削削されている。対になる2個は調査区域外にあることが予想される。

〈カマド〉床面が残っている部分には検出されていない。

FV-1b住居跡

〈検出状況〉1a住居跡に全形を覆われ、その貼り床下に検出されたが、床面・掘り方以外の詳しいことは分からない。

〈床面・掘り方〉床面は南西壁から北西方向へ2.6mの範囲に確認でき、1a住居跡よりも小



No	地点・層位	種類・特徴	外 面				内 面				計測値: cm	分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	底 部			
27	埋土	坏	口縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	底 部	(2.3)	6.6	3C4
28	床面	土器片	口縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	底 部	—	—	—
29	床面	土器片	口縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	底 部	—	—	—
30	1b住居跡床面	刀子	口縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	底 部	—	—	23a
31	床面直上	土器片	口縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	底 部	—	—	—

$$S = \frac{1}{4}(\text{底}) \cdot \frac{1}{4}$$

第23図 FV-1住居跡出土遺物

型であることが推定できる。床面は周辺部をのぞいては非常に硬く締まり、掘り方を下位に伴う。

遺物（第23図、図版234）

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、量は少ない。埋土や床面・掘り方埋土から出土している。土器・鉄製品・鉄滓がある。

〈土器〉すべて破片で、数の多い方から順に、土師器壺・縄文土器・坏・須恵器がある。土師器壺はⅠ類が主体を占める。坏は、Ⅰ類C 4の27のほか、Ⅰ類1点、Ⅱ類3点がある。須恵器は3点である。

〈鉄製品・鉄滓〉刀子30は木質の丸い柄が残っている。31は小型の鎌と推定した。鉄滓は、1 a 住居跡の床面から1個7 g、1 b 住居跡の床面から1個16 gが出土している。

まとめと遺構の時期

1 a 住居跡の貼り床の下から出土しているのは刀子30と鉄滓1個である。埋土の状況や出土遺物から、1 a 住居跡は平安時代Ⅱ群に分類できる。

GN区

GN-1住居跡

遺構（第24図、図版13・14）

〈2棟の重複〉柱穴配置や壁溝・貼り床の存在からは拡張を伴う2棟の住居の重複を確認できる。新期を1 a 住居跡、古期を1 b 住居跡として記載し、カマドについては後述する。

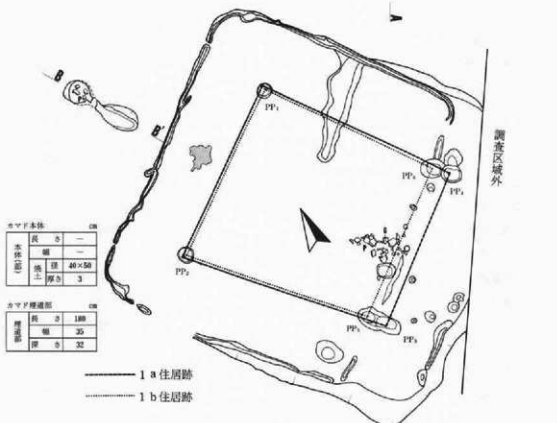
GN-1 a 住居跡

〈検出状況・重複関係〉東隅を挟んだ南東壁の大半と北東壁の一部が調査区域外に出る。また1 b 住居跡と重複する北西隅約 $\frac{1}{2}$ は床面直上まで現代における削剝を受けている。ほかの遺構との重複はない。

〈平面形〉隅丸正方形と推定 〈規模〉 5.3×5.6 m 〈床面積〉 26.4m^2 （推定） 〈主軸方向〉N-42°-W

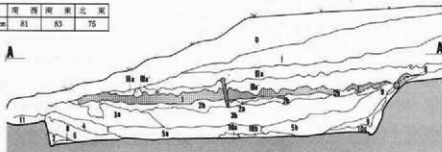
〈埋土〉褐色～黒色の多くの土層群で構成され、黒褐色土が卓越する。上部を占める1層は灰白色浮石層である。大小塊が集合して層を形成しているもので、再堆積と考えられる。最大粒径は40mm、最大層厚は20cmである。同浮石は下位の2 a 層や2 b 層にも少量含まれるが、中・下部にはみられない。

〈壁の状態〉直立～わずかに外傾。北西壁と大部分の南西壁・北東壁は1 b 住居跡と共有一再利用の関係にある。〈壁高〉75～83cm 〈壁溝〉1 b 住居跡と重複する部分と南東壁の一部に認められる。1 b 住居跡との重複部分は共有一再利用の関係が考えられる。幅は7～30cm、深



壁高

壁高	南	西	南	東	北	東
高さcm	81	83	75			



- 0~11, 基本層序。
1. 灰白色・黄褐色。浮石。
- 2a. 黒色。粒状・小塊状の灰白色浮石を含む。
- 2b. 黒褐色。灰白色浮石層を部分的に含む。
- 3a・3b. 黒褐色。
4. 黒色。
- 5a. 黒褐色。
- 5b. 暗褐色。
6. 黒褐色。
7. 黒色。
8. 褐色。
9. 黒色。
- 10a~10c. 黒褐色。
11. 褐色。



1. 黒色。焼土塊を含む。
2. 暗褐色。
3. 黒色。焼土塊・礫を含む。
4. 暗褐色。礫を含む。
5. 暗褐色。礫を含む。

柱穴

No.	PP ₁	PP ₂	PP ₃	PP ₄
大きさcm	25	25	25×40	25×33
深さcm	33	42	39	42
備考				

No.	PP ₁	PP ₂
大きさcm	30	32×35
深さcm	32	35
備考	取り底下	取り底下

$$S = \frac{1}{40} (\text{概})$$

第24図 GIV-1 住居跡実測図

さは8～18cmである。

〈床面・掘り方〉床面は、1b住居跡のものをほぼそのまま再利用するとともに南東方向へ1.2m拡張している。1b住居跡の東隅や南隅付近は本住居跡の床面が5cmほど高く作られ、その段差を残したままPP5とPP6の間へ貼り床を施している。拡張した部分の床面はやや硬く、下位に掘り方を伴う。重複部分の床面については後述する。

〈柱穴〉PP1～PP4の4本柱である。四隅から内側に入った対角線上に位置し、台形状の配置になる（I型）。PP1とPP2は1b住居跡と共有・再利用の関係にある。

GN-1b住居跡

〈検出状況・重複関係〉全体を掘ることができたが、削剝を受けていると同時に、南東壁は1a住居跡に切られて消失している。

〈平面形〉隅丸長方形 〈規模〉4.2×5.2m 〈床面積〉21.6㎡ 〈主軸方向〉N-42°-W
〈埋土〉1a住居跡に先行するもので、固有の埋土は不明である。

〈壁の状態〉南東壁をのぞいては1a住居跡と共有・再利用の関係にある。〈壁溝〉南東壁をのぞいた三方の壁沿いに存在し、その状態からは壁の場合と同様のことを考えることができる。南東壁沿いには一部にあるだけである。

〈床面・掘り方〉壁から62～130cmの幅で掘り方を伴うほかは“地山”を直接床面として使い、その部分は非常に硬く締まっている。

〈柱穴〉PP1とPP2・PP5・PP6の4本柱である。PP1とPP2は隅から内側に入った位置にある。PP5・PP6は南東壁際にあつて重複するPP3・PP4に切れ、1a住居跡の側から貼り床が施されている。配置形はII型である。

次にカマドについて述べる。

〈カマドの位置〉北東壁中央部 〈カマド本体〉削剝が著しく、シルト質粘土で構築された両側壁の下底部と火床部が残っていたにすぎない。〈煙道部・煙出し部〉削剝されているが、煙道部と煙出し部の境の状態からはくりぬき式であることが推定できる。残存部は、燃焼部から続く部分が検出面に移行し、その先の底面はゆるやかに傾斜して下がっている。煙出し部には円形のピットが掘り込まれ、粒径10cmの垂角礫5個が内部に落ち込んでいた。それらは火を受けており、煙出し部の施設に使われていたものであろう。煙道部・煙出し部とも、側壁や底面がよく焼け、赤褐色に変化している。〈カマドの帰属〉このカマドに先行するものが存在した痕跡は1b住居跡の内部には見出せず、同住居跡に伴うことは確実である。1a住居跡は一部が調査区域外にでるが、拡張ということやカマドの上に貼り床されていないことから、カマドも共有・再利用の関係にあつた可能性が大きい。

遺物（第25図、図版220）



32



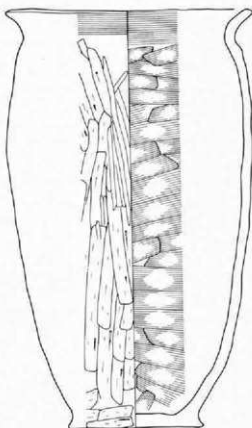
33



34



35



36

No.	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部		
32	埋土上部	杯	ロクロ痕	ロクロ痕	静止未切り	ロクロ痕	黒色粘着	×	(12.6)	4.8	(6.2)	IAO	
33	埋土上部	B	—	B	回転未切り	ヘラミダキ	○	—	(4.3)	(6.0)	IBO		

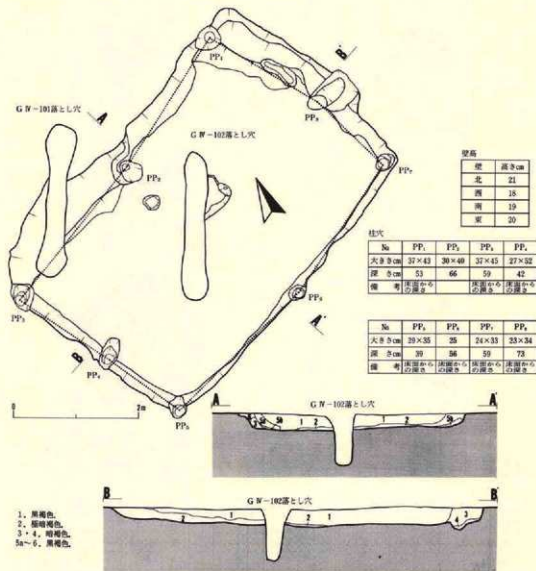
No.	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部		
34	床面直上	土器器種	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	—	—	—		
35	覆り方埋土	B B	—	ロクロ痕・ナ デ	ナデ	—	ロクロ面	ロクロ痕	—	(3.8)	6.4		
36	床面	B B	横ナデ	ヘラ削り・ヘ ラミダキ	木炭痕	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	19.6	33.4	10.8	112	220

$$S = \frac{1}{3}$$

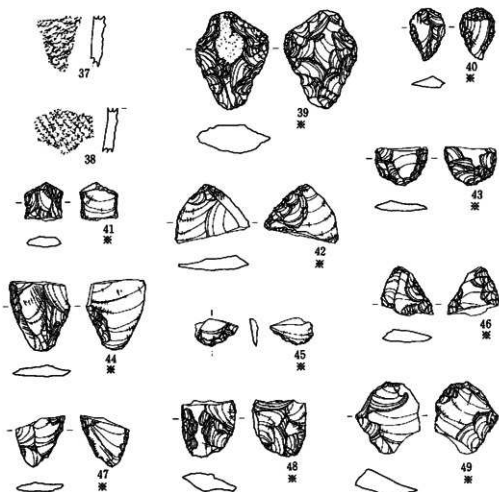
第25図 GIV-1 住居跡出土遺物

〈出土状況〉 上述のような検出状況のため、出土量はあまり多くない。埋土中・下部（灰白色浮石下位）を中心に、埋土上部（灰白色浮石上位）・床面・床面直上・掘り方埋土・煙道部・カマド本体・柱穴から出土している。土器と鉄滓がある。

〈土器〉 36以外は破片である。土師器甕が主体を占め、次いで坏・縄文土器・須恵器の順に多い。土師器甕はⅠ類卓越し、Ⅱ2などがある。木炭底は36以外に4点がある。坏は、Ⅰ類B0の33、Ⅱ類A0の32以外はⅠ類25点、Ⅱ類17点がある。Ⅰ類C4は灰白色浮石層の上位と下位から2点ずつ出土している。須恵器は6点である。



第26図 GIV-2 住居跡実測図



№	地点・層位	群種	部位	群形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
37	堀土	群種	群形		平滑	観察多し	群18層		
38	堀土	群種	群形	LR					

№	地点・層位	群種	大きさ(最大): mm				重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ	重量				
39	床面直上	不定形石器	52	38	15	25.6		建築用石, De 3	4	213
40	堀土	群種	28	18	6	2.4	群種	群種	4	群
41	堀土	群種	(21)	20	6	(3.0)	群種	群種	5	
42	床面直上	群種	(28)	(39)	(7)	(7.1)	群種	群種	5	211
43	堀土	群種	(19)	(26)	(6)	(3.1)	群種	群種	5	群
44	堀土	群種	(37)	(30)	(6)	(7.8)	建築用石, De 1	群種	5	群
45	堀土	群種	(14)	(22)	(4)	(1.2)	群種	群種	5	
46	堀土	群種	(26)	(27)	(6)	(3.6)	建築用石, De 3	群種	5	
47	堀土	群種	(26)	(25)	(5)	(3.4)	群種	群種	5	211
48	堀土	群種	(30)	29	10	(7.4)	群種	群種	5	群
49	堀土	群種	(38)	34	11	(9.9)	群種	群種	5	群

$$S = \frac{1}{2} (\text{mm}) \cdot \frac{1}{3}$$

第27図 GIV-2 住居跡出土遺物

〈鉄滓〉 1点18gが埋土上部から出土している。

まとめと遺構の時期

遺物の大部分は1a住居跡に固有のものである。36は1b住居跡へ施された貼り床に密着して出土した一括のもので、1a住居跡に共伴あるいは時間的に近い関係にある。埋土の状況や出土遺物から、1a住居跡は平安時代Ⅰ群に分類できる。拡張という関係からみて、2棟は時間的に連続した関係にあるものと推定する。

GN-2住居跡

遺構（第26図、図版15）

〈検出状況・重複関係〉 VI層中に検出された。GN-101・102の2基の落とし穴には埋土上面から切られている。

〈平面形〉 いくらか不整な長方形 〈規模〉 3.8×5.7m 〈床面積〉 15.7㎡

〈埋土〉 VI層起源の暗褐色～黒褐色の土層群で構成され、中層浮石が上部に含まれる。

〈壁の状態〉 北壁はゆるやかに外傾する。東壁は北半分の把握がむずかしく、PP1とPP8の間を掘りすぎているのかもしれない。そのほかの部分はほぼ直立している。〈壁高〉18～21cm 〈壁溝〉 伴わない。

〈床面〉 壁際がわずかに高くなっているほかはほぼ水平で、全体が硬く締まっている。

〈柱穴〉 PP1～PP8の8個が四隅とその間に1個ずつ配置され、対称形になる。PP1・PP3～PP7の6個は壁を切るように掘り込んでいる。

〈炉〉 GN-102落とし穴に切られている中央部付近に深さ8cmの方形状のくぼみがあり、少量の炭化物が分布している。確実なことはいえないがそこが炉である可能性が指摘できる（「まとめ」の項で後述）。

遺物（第27図、図版21）

〈出土状況〉 縄文土器・剝片石器・剝片・碎片が埋土を中心に出土しているが、量は少ない。破片は埋土下部から床面にかけての層準に多い。

〈土器〉 縄文土器の破片12点がある。すべて胴部破片で、胎土に植物性繊維を含むものは6点である。38は胴部でも下端に近い。

〈剝片石器〉 図示した11点以外に、微細剝離痕を伴う剝片3点と剝片・碎片多数がある。

まとめと遺構の時期

第2次調査で検出された住居跡と住居形式が類似していることや埋土・出土土器から、縄文時代前期前葉Ⅱ群1類（早稲田6類相当）期に分類する。

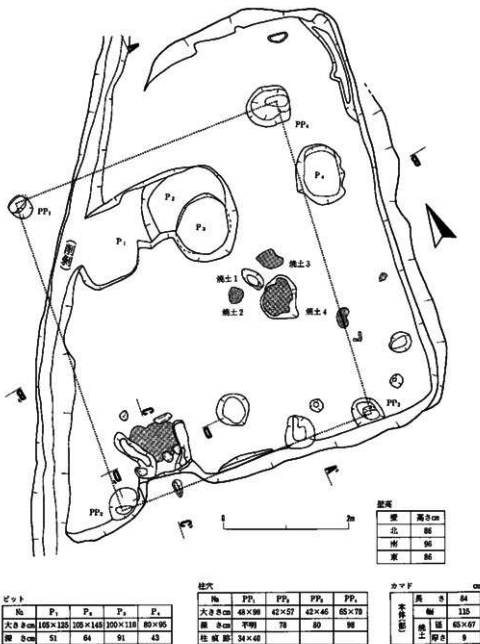
HN区

HN-1住居跡

遺構（第28図・第29図、図版14～16）

〈検出状況・重複関係〉 西側約1/3は現代における削剝を受け、掘り方下位まで消失している。重複する遺構はない。

〈平面形〉 隅丸正方形 〈規模〉 南北は7.0mである。南西隅がわずかに残っていることから、

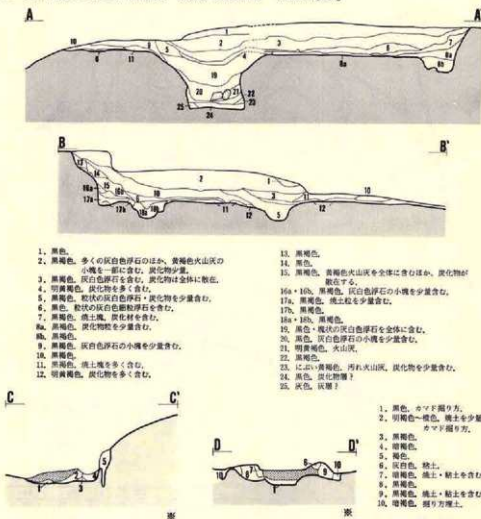


第28図 HIV-1 住居跡実測図(1)

東西もほぼ同じくらいの長さであることが推定できる。〈床面積〉44.7㎡（推定）〈主軸方向〉S-5°-W

〈埋土〉数多くの土層群で構成され、なかでも黒褐色土～黒色土が卓越する。色調と粒径の異なる2種類の火山灰が認められる。灰白色浮石は粒状～塊状に埋土全体に含まれるが、とくに下半に多い。それに対し、黄褐色火山灰は東壁際上部から床面直上の一部にかけてみられる。また粒状～小塊状の焼土が一部では炭化材を伴いながら埋土中に広く分布する箇所があるが、異地性のものと考えられる。

〈壁の状態〉直立するが、東壁は上半が外傾する。〈壁高〉48～96cm 〈壁溝〉東壁と南壁に沿って短く認められる。幅は15～30cm、深さは3～5cmである。



第29図 HIV-1 住居跡実測図(2)

$$S = \frac{1}{40}(\text{米}) \cdot \frac{1}{60}$$

〈床面・掘り方〉床面はほぼ水平で、カマドとP1～P3に挟まれた部分が非常に硬く締まっているほかはやや軟らかい。焼土1・2付近は貼り床で、黒色土の薄い層を挟んだ下位に、硬くよく締まった別な一枚の床面が存在する。残存部には全体規模の掘り方を伴う。

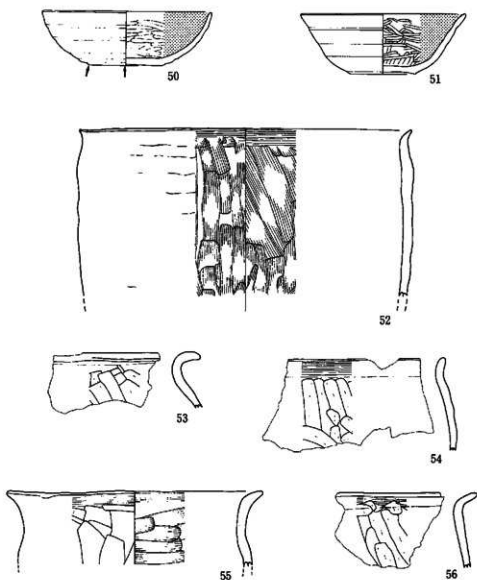
〈柱穴〉PP1～PP4の4本柱である。PP1・PP4は隅から内側に入った位置にあり、PP2・PP3はカマドが設置された南壁際にある(Ⅱ型)。わずかにいびつな長方形の配置になる。PP1は上部を削刺されているが、掘り方と柱痕跡が識別できる。

〈カマドの位置〉南壁中央と南西隅の中間 〈カマド本体〉残存状態は不良で、粘土やシルト・礫などのカマド構築材が床面上の広い範囲に分布する。礫は粒径10～31cmの亜角礫・亜円礫である。両側壁の下部と火床部はそれらの下位に検出された。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉煙道部は35×85cmの台形状に南壁を削り残した部分に作られている。粘土質シルトが作る側壁の一部が残っているが、溝状の掘り込みや煙出し部のための施設は認められない。底面は急傾斜で上がって行き、短い。

〈付属施設〉P1～P4の4基のピットがある。P1は西側の一部が削刺されているが、平面形は隅丸方形である。埋土は数層の明黄褐色土～黄褐色土が卓越する。P2はP3に切られているが、平面形は隅丸凸辺長方形である。埋土は、最上部が貼り床と推定される層厚6cmの黒褐色土、その下位が明黄褐色～黒褐色の土層群で構成されている。P3はほぼ円形の平面形をもつ。埋土上半は住居跡埋土から連続する黒褐色土や黒色土、下半は黒色土・明黄褐色土ほかで構成されている。底面は部分的に焼け、炭化物を多量にふくむ黒色土に覆われている。P4は東壁中央部際からわずかに北寄りに位置する。平面形は楕円形で、埋土は、上部が黒褐色土、その下位は汚れ火山灰である。以上の4基は貯蔵穴であるが、住居跡との関係については後述する。なお、P1とP2に挟まれた部分には、P2の底面よりもいくらか高い平坦面と壁が部分的に認められ、2基に先行するピットの残存部の可能性が考えられる。

〈その他〉現地性焼土がP3の南側の床面に形成されている。焼土1は楕円形ピットの南壁がわずかに焼けているものである。焼土2は24×25cm、焼土3は30×48cmの規模である。焼土4の東から南西部分にはさらに小規模な焼土が3カ所にみられる。焼土1～3が存在する付近は貼り床されているために2面の床があり、下位の床面上にも焼土が形成されている。径35cmの円形の焼土がP3の南壁に接する部分にあるほか、焼土4は径70cmの不整円形の浅い落ち込みのなかに形成されている。

〈小結〉上述のピットのうち、P3とP4は同時存在でP2よりは新しい。P2はP3に埋土上部から切られると同時に貼り床を施されていることから、2基の間にはある程度の時間幅をもった新旧関係があるといえよう。P1への貼り床の有無は確認できず、P2～P4との関係は不明である。以上のことと一部ではあるが貼り床を伴うことから、壁や柱穴・カマド・

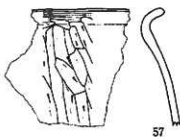


No	地点・層位	種類・形状	外面			内面			計測値：cm			分属	図版
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口径	高さ	底径		
50	P3埋土	坏	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	13.4	4.3	5.8	IC	
51	埋土中部	?	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	13.0	4.8	5.3	IC	

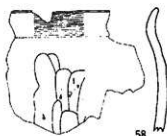
No	地点・層位	種類・形状	外面			内面			計測値：cm			分属	図版
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口径	高さ	底径		
52	埋土上部	土師器	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	26.4	(13.3)	—	IS	
53	埋土下部	?	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	—	—	—		
54	埋土下部	?	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	—	—	—		
55	埋土中部	?	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	20.5	5.8	—		
56	埋土中部	?	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	—	—	—		

S = $\frac{1}{8}$

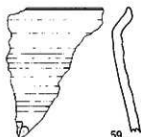
第30図 HIV-1 住居跡出土遺物(1)



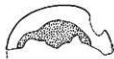
57



58



59



60



61



62

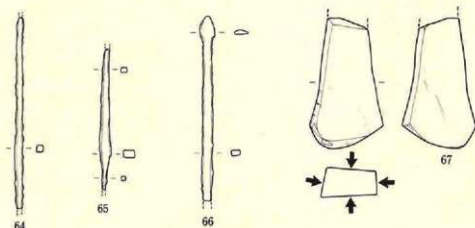


63

No	地点・層位	種類・部位	外 面			内 面			計測値 : cm		分級	記号
			口縁部	残 部	底 部	口 縁 部	底 部	底 部	口 径	高 度		
57	埋土中部	土師器製	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—		
58	埋土上部	Ⅱ Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	—	Ⅱ	Ⅱ	—	—	—		
59	カマド	Ⅱ Ⅲ	口クロ底	口クロ底・ヘラケズリ	—	口クロ底	口クロ底	—	—	—		
60	埋土上部	Ⅱ Ⅲ	—	ヘラケズリ	砂底	—	ヘラナデ	ナデ	—	(4.7)	(9.1)	
61	埋土下部	Ⅱ Ⅲ	—	下縁に縦線	—	—	Ⅱ	Ⅱ	—	—		
62	埋土中部	Ⅱ Ⅲ	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	Ⅱ	Ⅱ	—	(7.6)	9.2	
63	埋土	Ⅱ Ⅲ	—	Ⅱ	砂底	—	Ⅱ	Ⅱ	—	(4.7)	(9.1)	

$$S = \frac{1}{2}$$

第31図 HIV-1 住居跡出土遺物(2)



No.	地 点・層 位	器 種	大 き き (最 大) : mm			重 量 g	特 徴・備 考	図版
			長 さ	幅	厚 さ			
64	埋土中部	鉄鍔車の跡基か	(102)	4	4	(5.92)	丸棒状	234
65	床面直上	鉄鍔	(75)	6	4.5	(4.63)	両端を欠損	234
66	埋土中部	鉄鍔	(96)	5	3	(6.80)	新基式か、長楕円模式	234

No.	地 点・層 位	器 種	大 き き (最 大) : mm			重 量 g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長 さ	幅	厚 さ				
67	埋土下部	砥石	(69)	37	18	(59.5)	硬砂質凝灰岩(石質凝灰岩) G 5	小型。一端を欠失。使用面 4 面。	241

$$S = \frac{1}{2}$$

第32図 HIV-1 住居跡出土遺物(3)

大部分の床面などを共有一再利用する 2 棟の存在を考慮することができるのかもしれない。

遺物 (第30図～第32図、図版234・241)

〈出土状況〉埋土上部～下部を中心に、カマド本体・掘り方埋土・P 1～P 4 から出土し、量は他に比べていくぶん多い。土器・鉄製品・鉄滓・砥石がある。

〈土器〉大部分が破片である。土師器甕が主体を占めるほか、坏・縄文土器・須恵器がある。土師器甕は I 類が卓越し、L 5 a・L 5 c などがある。砂底は 60・63 のほかに 4 点、木葉底は 1 点がある。61 はヘラ状工具による刻線を胴部下端に伴う。わずかに残った底部へは施文されていない。坏は、I 類 C 5 の 50、I 類 B 0 の 51 のほかは破片で、I 類が 24 点、II 類が 10 点である。I 類は 3 点の B 0 と 2 点の A 2 を含んでいる。また、ヘラミガキと黒色処理を内外面に施した破片が 1 点出土している。須恵器は甕と壺の破片 5 点がある。

〈鉄製品・鉄滓〉鉄鍔 2 点と紡茎 1 点、器種不明の小破片 1 点が床面直上や埋土中部から出土している。鉄滓は、1 個 17 g が床面から、2 点 285 g が埋土下部から出ている。

〈砥石〉埋土下部からの 67 がある。

まとめと遺構の時期

埋土の状況や出土遺物から、平安時代Ⅳ群に分類できる。

HN-2 住居跡

遺構（第33図、図版16～18）

〈検出状況・重複関係〉東壁を含む一部は調査区域外にある。多くの遺構と重複している。まず、本住居跡よりも時間的に先行するのは、HN-51・52（以上は平安時代）・55（時期不明）の3基のピットとHN-103・104の2基の落とし穴である。HN-3住居跡・HN-57・58ピット（すべて平安時代）には切られている。HN-54（平安時代）・HN-56（時期不明）との新旧関係は不明である。

〈平面形〉方形であるが、詳細は分からない。〈規模〉南北は4.7mである。〈床面積〉不明 〈主軸方向〉N-61°-W

〈埋土〉黒褐色の土層群が卓越する。灰白色浮石の大小塊が上部から床面まで多量に含まれている。最大粒径は70mmで、粒状から30mm土が主体である。下部の層群には多量の焼土と炭化物を伴い、後述する。

〈壁の状態〉直立～外傾 〈壁高〉17～30cm 〈壁溝〉調査した範囲には存在しない。

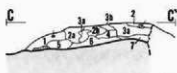
〈床面・掘り方〉調査区境付近の床面はやや波打っている。全体規模の掘り方を下位に伴うことが推定できる。

〈柱穴〉PP1～PP5の5個の柱穴状ピットが検出されている。PP1とPP4、PP2とPP5が対になるものであろう。それらが支柱穴の一部を占めるかどうかは全体を調査できないために不明である。

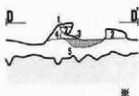
〈カマドの位置〉西壁のほぼ中央 〈カマド本体〉残存状態は良くないが、両側壁の一部と火床部が確認できる。側壁は粘土質シルトで構築されている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。底面はわずかに傾斜して上がって行く。先端部はHN-51・52ピットの埋土上にあるため、煙出し部の状態は把握できなかった。

〈焼失〉多量の木炭と少量であるが草本類が埋土下部から床面にかけての広い範囲に分布する。一部は焼土を伴うものの小規模で、カマド左横などに残る。材は細かいものがほとんどで、形がある程度残るのは北壁東端近くの一部である。それらについての記載がField Cardになく、詳しいことは分からない。サンプル4点の樹種鑑定結果はクリが3点、不明が1点である。

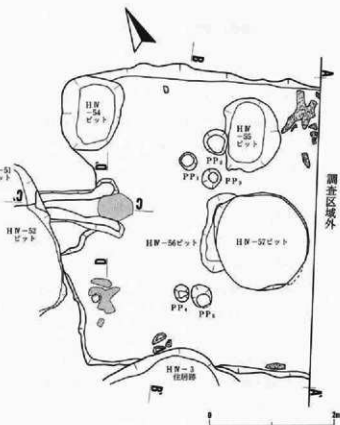
〈ピットについて〉新旧関係があるものも含め、本遺構内には多くのピットが存在する。ここでは新旧関係がつかめなかったHN-54・56ピットについて述べる。HN-54ピットは北隅にある。西壁は本遺構の外側に出る状態で掘り込まれており、本遺構とは伴しない可能性が高い。HN-56ピットはHN-57ピットに切られている。また床面を掘り下げた段階で検出さ



- ※
1. 黒褐色。粒状・塊状の灰白色浮石・焼土・炭化物を含む。
 - 2a・2b. 黒褐色。粒状の灰白色浮石・焼土・炭化物を含む。
 - 3a・3b. 濃い赤褐色・褐色。焼土が卓越。灰白色浮石・焼土・炭化物を含む。
 4. 黒色。灰白色浮石塊が全体にみられるほか、炭化物を含む。
 5. 黒褐色。炭化物・焼土を多く含むほか、灰白色浮石を含む。
 6. 暗褐色。粒状の灰白色浮石を含む。
 7. 黒色。



- ※
1. 灰黄色。粘土。
 2. 黒褐色。焼土・炭化物・粘土を含む。
 3. 暗褐色。焼土を含む。
 4. 黒褐色。
 5. 褐色～黒褐色。住居跡り方埋土。



調査区域外

柱穴

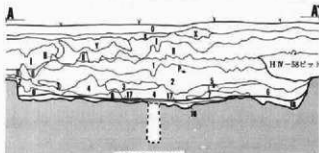
No	PP ₁	PP ₂	PP ₃	PP ₄	PP ₅
大きさcm	30	40	30	35	35
深さcm	37	37	14	17	58

壁高

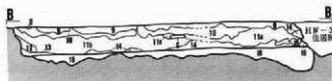
壁	高さcm
西	17
南	25
北	30

カマド

本体	高さ	幅	深さ
1	65	53	42×55
2	—	50	25



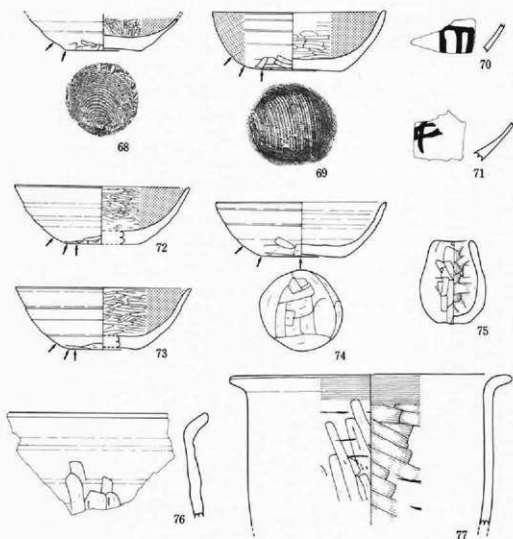
HN-103遺跡と穴



- 0～II. 基本層序。
X～Z. 黒褐色。
1. 黒褐色。灰白色浮石・炭化物を含む。
 2. 黒褐色。灰白色浮石塊・炭化物を多く含む。
 3. 黒褐色。
 - 4・5. 黒褐色。灰白色浮石塊のほか、炭化材を多量に含む。
 6. 黒褐色。灰白色浮石・炭化材・焼土を含む。
 7. 黒褐色。灰白色浮石・炭化材を含む。
 8. 黒褐色。多量の炭化材のほか、灰白色浮石を含む。
 9. 黒褐色。粒状・塊状の灰白色浮石・炭化物を含む。
 10. 黒褐色。塊状の多くの灰白色浮石のほか、炭化物を含む。
 - 11a. 黒褐色。灰白色浮石のほか、炭化物・焼土を多く含む。
 - 11b. 黒褐色。灰白色浮石塊が多いほか、炭化材を多量に含む。焼土も散在する。
 12. 黒色。灰白色浮石塊を多く含む。
 13. 暗褐色。焼土を多く含むほか、炭化物がみられる。
 14. 黒褐色。灰白色浮石・炭化物を含む。
 15. 黒色。粒状の灰白色浮石を少量含むほか、炭化物・焼土がみられる。
 16. 黒褐色。粒状の灰白色浮石を多く含む。
 17. 赤土。
 18. 暗褐色。細り方埋土。

第33図 HIV-2 住居跡実測図

$$S = \frac{1}{40} (\text{米})$$

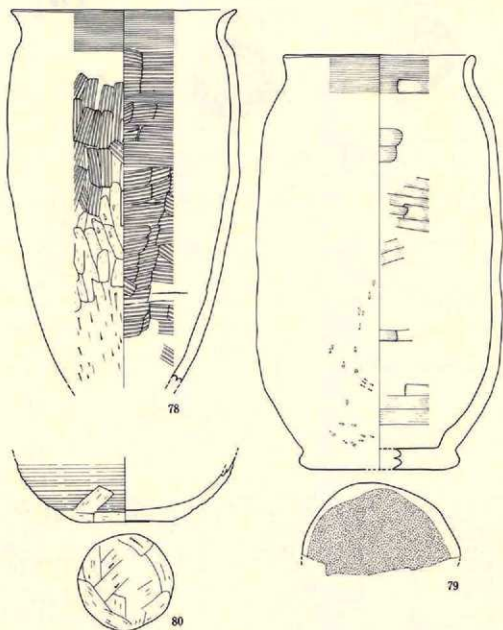


No	地点・層位	種類・形状	外面		内面		計測値: cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	高さ	口径	底径		
68	床面直上	坪	—	口縁部ヘタケズリ	胴部未切り	ヘタミガキ	○	—	(2.6)	6.0	1B
69	埋土下部	■	口縁部	■	胴部未切り・ヘタケズリ	■	○	13.8	4.6	7.5	1A
70	埋土上部	■	—	口縁部	—	■	○	—	—	—	220
71	埋土上部	■	—	口縁部ヘタケズリ	—	■	○	—	—	—	220
72	埋土上部	■	口縁部	■	残存部ヘタケズリ	■	○	14.0	4.6	5.6	1E
73	掘り方埋土	■	■	■	■	■	○	14.0	4.9	5.2	1E
74	埋土下部	■	■	■	ヘタケズリ	口縁部	×	13.6	4.4	6.6	1C

No	地点・層位	種類・形状	外面		内面		計測値: cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	高さ	口径	底径		
75	埋土	土器器小個土器	ヘタケズリ	ヘタケズリ	ヘタケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	3.4	5.6	2.0
76	床面直上	土器器	口縁部	口縁部・ナデ	—	口縁部	口縁部	—	—	—	—
77	埋土下部〜床面直上	ナデ	横ナデ	ヘタケズリ	—	横ナデ	ヘタケズリ	—	22.6	(12.40)	11A

$$S = \frac{1}{2}$$

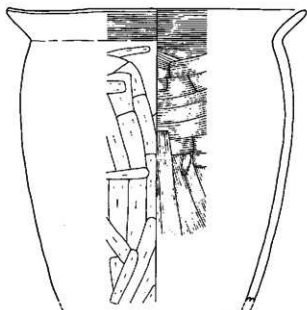
第34図 HIV-2 住居跡出土遺物(1)



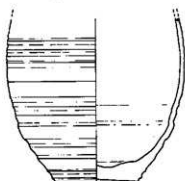
No	地点・層位	種類・用途	外 面				内 面				計 測 値 : cm		分類 図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口縁部	底 部	口 径	高 径	
78	埋土〜床面直上	土器器壁	横ナデ	—	—	横ナデ	縦目	—	—	—	18.0	(29.6)	112 221
79	埋土上部〜下部・床面	灰 灰	灰	ヘラケズリ・ナデ?	砂底	灰	ヘラナデ	ナデ	—	—	15.0	33.8	114
80	床面直上・埋土	不明	—	ロクロ模・ケズリ	ヘラケズリ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	(5.2)	7.4	

$$S = \frac{1}{9}$$

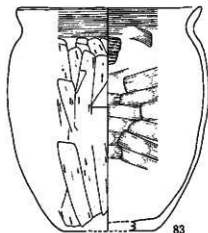
第35図 HIV-2 住居跡出土遺物(2)



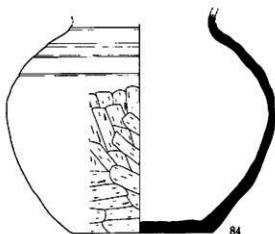
81



82



83

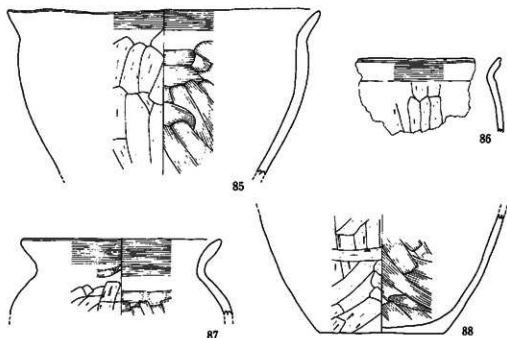


84

No.	地点・層位	曜曜・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	記 載
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	器 高	底 径		
81	床面直上・埋土	土師器類	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	23.9	(25.4)	—	111	221
82	埋土上部～下部	# #	—	ロクロ底	—	—	ロクロ底	ロクロ底	—	(15.0)	6.6		
83	埋土上部～下部	# #	横ナデ	ヘラケズリ	既知底か	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	14.8	17.8	7.4	162	222
84	埋土上部～床面	灰土器類	—	ロクロ底・ケズリ	ヘラケズリ	—	ロクロ底	#	—	17.4	11.1		223

S = $\frac{1}{4}$

第36図 HIV-2 住居跡出土遺物(3)



No.	地点・層位	器種・群	外 面				内 面				計測値: cm			分類	図版
			口縁高	胴高	底高	口縁径	胴径	底径	口縁高	胴高	底径	口縁径	胴径	底径	
85	埋土・床面直上	土師器鉢か壺	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	25.0	13.3	—	—	—	222
86	埋土	土師器壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
87	埋土上部～下部	—	—	—	—	—	—	—	—	15.7	(6.0)	—	—	—	
88	埋土・掘り方埋土	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズ	—	—	ナデ	—	—	(9.4)	10.0	—	—	

S = $\frac{1}{4}$

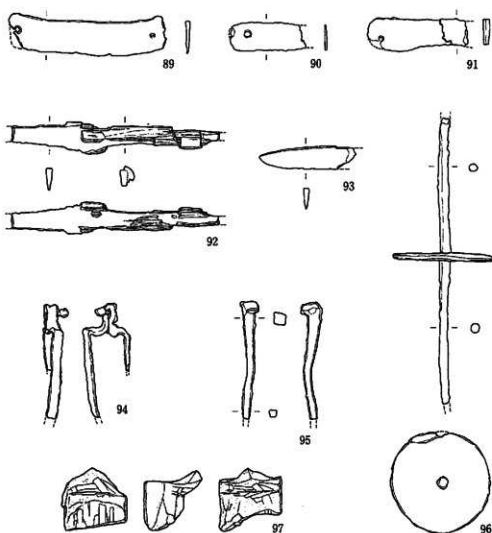
第37図 HIV-2 住居跡出土遺物(4)

れたため、床面における状態が分からない。本遺構との具体的な関係は不明である。

遺物 (第34図～第38図、図版217・220～222・233～235・241)

〈出土状況〉埋土上部～下部を中心に、掘り方埋土・床面直上から出土しているが、量はそれほど多いものではない。土器と鉄器・石製品がある。

〈土器〉土師器壺が主体を占め、次いで坏・縄文土器・須恵器・土師器ミニチュアの順に多い。土師器壺はⅠ類が卓越し、M2やL1・L2・L4b・L5bなどがある。79は他に例がない器形である。82はⅡ類で、M1と推定した。砂底は79のほかに2点がある。土師器鉢として分類した85はむしろ壺とすべきかもしれない。坏Ⅰ類の68・69・72・73は再調整を伴うが、72・73は底部がわずかしき残っていないため、切り離しと底部の再調整の状態が不明である。69はⅠ類A2に分類した。両面が黒色処理されている。図示例以外ではⅠ類24点、Ⅱ類1点が

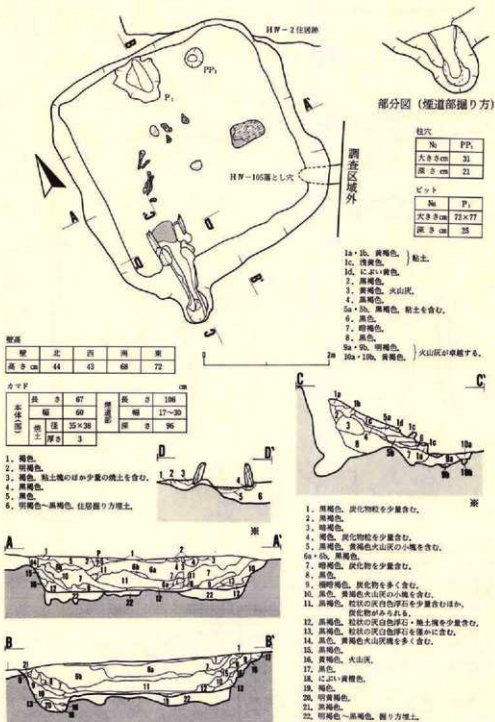


No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):cm			重量g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
89	堀土上部	目釘式手鐲	83	17~19	2	10.54	ほぼ定形。目釘一部残存。刃部外周。	234
90	堀土上部	〃	(40)	18	1	(1.68)	一輪を含む破片。全体が細く、背板・刃部の区別がない。	234
91	堀土下部	〃	(54)	14~18	2	(5.12)	約1/3の残存。刃部内側。中央部は折れた部分が密着している。目釘穴径2.5mm	234
92	堀土上部	刀子	(113)	24	4	(14.93)	柄が残る。	235
93	堀土下部	刀子	(52)	13	3	(9.26)	刃部先端部の残存。	
94	堀土上部	簪子状鉄製品	(58)	23	7	(6.26)	釘状のものがつまみ状の腕部にくい込み歯がっている。	234
95	堀土下部	釘	(63)	5	4	(7.03)	折戻式の角釘。先端部欠損。	234
96	堀土上部	銅鍍車	(182)	52.5	2~4	(42.93)	断面両端欠損。丸餅状で、径5.5~6cm。	234

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):cm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
97	床面直上	足跡石製品	(26)	33	21	(14.37)	白色細粒燧石。G 17	甲のつけ根に相当する部分の残存。	241

第38図 HIV-2 住居跡出土遺物(5)

S=1/1



第39図 HIV-3 住居跡実測図

あり、I類は1点のA2と2点のB0を含む。70・71は胴部に墨書をもつ環I類の破片で、70は横位の「日」か、71は不明である。須恵器は84以外にはない。75は土師器のミニチュア土器である。

〈鉄製品〉目釘式手鎌が3点・刀子が2点・紡錘車・鐮子状鉄製品・釘が1点ずつある。すべて埋土からの出土であるが、点数はIⅢ-1住居跡に次いで多い。

〈その他〉石製品97がある。破損がいちじるしいが、形状や加工の仕方がFⅣ-6住居跡から出土した(人間の)足形石製品(第183図530)に類似しており、それとの比較から、足首から甲にかけての部分が残っているものと推定した。軟質な白色細粒凝灰岩を素材にしている。

まとめと遺構の時期

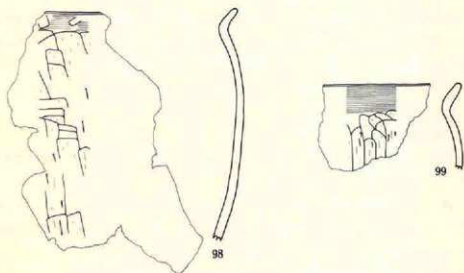
確実な共伴遺物といえるものはない。埋土の状況や重複関係・出土遺物から平安時代Ⅱ群に分類できる。

HⅣ-3住居跡

遺構(第39図、図版18・19)

〈検出状況・重複関係〉北東隅で重複するHⅣ-2住居跡(平安時代)を埋土から切るとともに、HⅣ-104・105の2基の落とし穴も切っている。

〈平面形〉隅丸のほぼ正方形 〈規模〉3.8×3.9m 〈床面積〉10.0m² 〈主軸方向〉S-2°



No.	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値 : cm			分級	図取
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	器 高	底 径		
98	カマダ埋土	土師器類	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—	—		
99	埋土		口 径	器 高	—	口 径	器 高	—	—	—	—		

$$S = \frac{1}{3}$$

第40図 HⅣ-3住居跡出土遺物

〈埋土〉黒褐色の土層群が卓越する。黄褐色火山灰を含み、東側約 $\frac{1}{3}$ に顕著である。埋土上部や壁際から下部へ傾斜して堆積する層に含まれ、粒状から小塊状のものが主である。灰白色浮石は小塊が床面に少量分布する。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉43～72cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面はほぼ水平で、それほど硬いものではない。ほぼ全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉柱穴状ピット PP 1 が床面に検出されただけである。柱穴については不明である。

〈カマドの位置〉南壁の西隅寄り 〈カマド本体〉残存状態は良好である。側壁は、粒径30cmの扁平な凝灰岩を「ハ」字状に前方に立て、粒径15～20cmの亜角礫をその奥へ1個ずつ埋設し、粘土や粘土質シルトで被覆している。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。煙道部・煙出し部は原形をよく保っている。まず幅が77cmと広い掘り方を掘り、次に側壁と天井部を粘土や粘土質シルトで構築する。底面は南壁の半ばから急激に傾斜して下がり、煙出し部ではいちだんと深くなるとともに、下端がオーバーハングする。煙道部の一部と煙出し部が壁外に出るだけで、そのほかは外傾する壁中に作られている。

〈付属施設〉P 1 が北壁中央にある。平面形は不整円形状で、形態的な安定感にとほしい。共存するものの、性格・機能は分からない。

〈その他〉炭化した材や草本類・焼土が床面の主に中央付近に分布している。材のなかには幅が30cmと広い板材らしいものが一部にある。量的には少ないが、現地性のものである。材3点の樹種鑑定の結果は、1点がクリ、2点が不明、草本類1点はススキとなっている。また、炭化した多量のクルミが材に覆われて1カ所から出土した。床面から床面直上にあるもので、大部分は半分に割れている。

遺物（第40図、図版243）

〈出土状況〉埋土を中心に、カマド・床面から出土しているが、量は少ない。土器と鉄製品・堅果類がある。

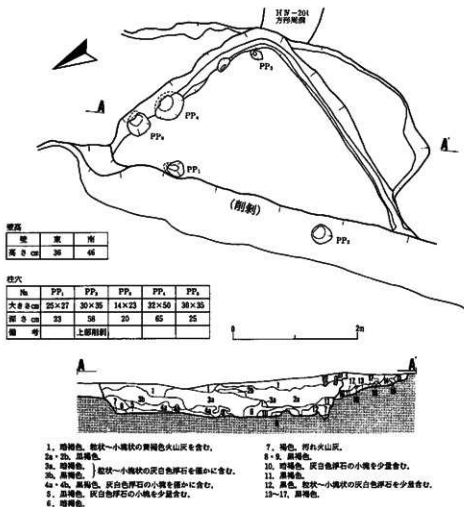
〈土器〉土師器壺・坏・縄文土器があるが、すべて破片である。土師器壺は、図示例以外にはⅠ類4点とⅡ類1点、木葉底1点がある。98は化粧粘土を伴う。坏はⅠ類が4点、Ⅱ類が1点だけで、Ⅰ類B 0、Ⅱ類C 4あるいはC 5が1点ずつある。

〈鉄製品〉図示していないが、鉄鏝の茎と推定される破片が埋土上部から出土している。

〈その他〉上述のように、多量のクルミが出土している（図版243）。

まとめと遺構の時期

埋土の状況や重複関係から、平安時代Ⅳ群に分類できる。



第41図 HIV-4 住居跡実測図

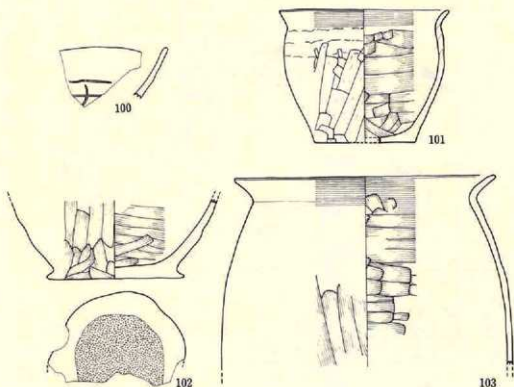
HIV-4 住居跡

遺構 (第41図。図版20)

〈検出状況・重複関係〉削削が著しく、南東隅を中心にした部分が残っているにすぎない。重複する HIV-201 方形周溝 (平安時代) を切っている。

〈平面形〉方形であるものの、詳しいことは不明である。〈規模〉南壁は4.2m まで確認できる。〈床面積・主軸方向〉不明

〈埋土〉多くの層に細分でき、なかでも黒褐色土が卓越する。色調と粒径が異なる二種類の火山灰が認められる。黄褐色火山灰が最上部、灰白色浮石が最下部に含まれる。どちらも粒状



No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 縁	黒色結核	口 縁	器 高	口 径	分 割		
100	埋土中層～下部	杯	ロタロ模	ロタロ模	ヘラ	—	—	×	—	—	—	220	

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 縁	器 高	口 径		
201	床面・埋土中～下部	土器鉢	横ナデ	ヘラケズリ	本黒底	横ナデ	ヘラナデ	ナゲツケ	13.5	10.6	8.0	151	222
202	床面	タタ	—	ヘラナデ	砂底	—	ヘラナデ	ナゲ	—	(6.2)	11.0		
203	埋土・床面直上	タタ	横ナデ	タ	—	横ナデ	タ	—	20.8	15.2	—	112	

第42図 HIV-4 住居跡出土遺物(1)

S = $\frac{1}{3}$

や小塊状であり、量は少ない。

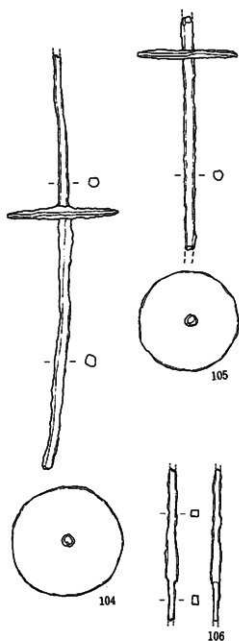
〈壁の状態〉直立 〈壁高〉36・46cm 〈壁溝〉PP4の北側をのぞいた部分に存在する。幅は10～20cm、深さは5cmである。

〈床面・掘り方〉床面は壁沿いをのぞいては硬く締まり、ほぼ水平である。下位には掘り方を伴う。

〈柱穴〉柱穴状ビットPP1～PP5の5個が検出されたが、主柱穴になるものはない。

〈カマド・付属施設〉調査できた範囲には検出されていない。

遺物 (第42図・第43図。図版220・222・234・235)



〈出土状況〉上述のような検出状況のため、出土量は少ない。埋土上部～下部を中心に、床面直上・掘り方埋土・柱穴状ピット・床面から出土し、土器・鉄製品・鉄滓がある。

〈土器〉数量の多い方から順に、土師器甕・坏・縄文土器がある。土師器甕はⅠ類が卓越し、S1・L2などがある。101は木蒔底、102は砂底である。坏は100以外はすべてⅠ類の破片で、B03点を含む。100は、内外面の色調が橙色～明赤褐色、断面が灰色であり、還元炎焼成の須恵器の焼き損じであろう。ヘラ書を伴うが、破片のために判読できない。

〈鉄製品・鉄滓〉紡錘車2点が床面直上、鉄鏃1点が埋土下部から出土している。鉄滓は、3点74gが埋土下部から出ている。

まとめと遺構の時期

101や102は本遺構と時間的に近いものである。主として埋土の状況からみて、平安時代Ⅳ群に分類できる。

HⅣ-5住居跡

遺構（第44図、図版20～22）

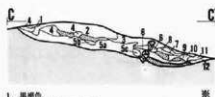
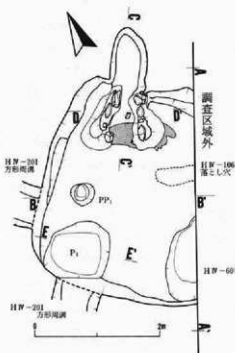
〈検出状況・重複関係〉南東側の一部が調査区域外にでる。重複するHN-106落とし穴とHN-201方形周溝（平安時代）を切り、HⅣ-60ピット（平安時代）には床面下位まで切られている。

〈平面形〉隅丸方形 〈規模〉北東～南西方向で3.5mを測る 〈床面積〉不明 〈主軸方向〉N-33°-E

No	地点・周位	種類	大きさ(最大):cm			重量g	特徴・備考	図号
			長さ	幅	厚さ			
104	床面直上	紡錘車	(223)	60	5	(76.20)	一端は欠損。紡錘の径5mm。	234
105	床面直上	円	(124)	88.5	4	(143.41)	紡錘を大きく欠損。径4～6mm。	235
106	埋土下部	鉄鏃	(82)	7	5	(1.86)	両端欠損。	234

$$S = \frac{1}{2}$$

第43図 HⅣ-4住居跡出土遺物(2)



1. 黒褐色。
 2. 褐色。火山灰、天井部。
 3. 黒褐色。粒状の灰白色浮石を含む。
 4. 暗褐色。焼土粒を含む。
 - 5a~5c. 黒褐色。粒状~塊状の焼土・炭化物を含むが、なかでも5b・5cに多い。
 6. にぶい黄褐色。粘土。
 7. にぶい黄褐色。粘土。
 8. にぶい黄褐色。粘土粒を多く含む。
 9. 褐色。粘土粒を多く含む。
 10. 褐色。粒状の焼土・炭化物を含む。
 11. にぶい黄褐色。粘土質シルト。
 12. 黒褐色。粒状の焼土・炭化物を含む。
- カマド本体積土。



壁	高さcm
北 西	24
南 西	30
北 東	35

1. 暗褐色。焼土を含む。
2. 黒色。
3. 黒褐色~黒色。焼土を含む。
4. 褐色。
5. 明褐色。
6. 褐色。火山灰

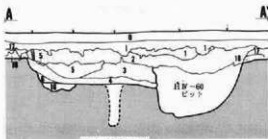
カマド		cm	
本体	高さ	長さ	102
煙	132	幅	57
焼土	径 37×45	深さ	
	厚さ 3		

ビット	
Na	P ₁
大きさcm	90×100
深さcm	42

柱穴	
Na	PP ₁
大きさcm	35×35
深さcm	54

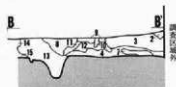


1. 黒褐色。粒状~小塊状の灰白色浮石を含む。
2. 黒褐色。灰白色浮石を多く含む。
- 3a~3c. 黄褐色。汚れ火山灰。
4. 黒褐色。灰白色浮石を僅かに含むほか、火山灰塊が散在する。



HIV-106落こし穴

- 9・1. 基本層序。
- 1・2. 黒褐色。
3. 黒褐色。火山灰塊を少量に含む。
4. 黒褐色。火山灰の小塊を多く含む。
5. 明黄褐色。火山灰。
6. 黒褐色。
7. 黄褐色。火山灰。
8. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を含む。
9. 黒褐色。粒状の灰白色浮石・炭化物を少量含む。



10. 黒褐色。
11. 黒褐色。灰白色浮石を僅かに含む。
12. 黄褐色。汚れ火山灰。
13. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を全体に含む。
14. 黒褐色。
15. 暗褐色。
16. 黄褐色~黒褐色。細り方粒土。
- 17・18. 黒褐色。

$$S = \frac{1}{40} (\text{漸})$$

第44図 HIV-5 住居跡実測図

〈埋土〉黒褐色の土層群が卓越する。灰白色浮石は、北西壁寄りの部分やP1には小塊状、上・中部を占める3層中には粒状に認められるが、少量である。火山灰の大小塊は全体的に含まれている。

〈壁の状態〉いくぶん外傾 〈壁高〉24～35cm 〈壁溝〉調査できた範囲には検出されていない。

〈床面・掘り方〉掘り方は壁沿いの周辺部にだけ伴う。そのほかの部分は“地山”を直接床面にし、非常に硬く締まっている。

〈柱穴〉柱穴状ピットP1は本遺構の埋土を掘り込んでいる。柱穴は伴わないであろう。

〈カマドの位置〉北東壁の北西端 〈カマド本体〉両側壁が残存する。粒径7～28cmの垂角礫4～5個ずつを間隔を置いて「ハ」字状に並べて芯材にし、粘土質シルトや粘土・火山灰で被覆している。火床部の奥には長径方向を上下にした細長い礫を埋設して支脚にしている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。煙道部は崩壊した天井部構築材に全体を覆われた状態で検出された。底面は緩やかに傾斜して上がっていき、検出面に収斂する。

〈付属施設〉貯蔵穴P1が西隅に寄った南西壁際にある。隅丸の凸辺方形の深いピットで、埋土は、上部が住居跡埋土から連続する黒褐色土、中・下部は汚れ火山灰が卓越する。粒状から小塊状の灰白色浮石が上部から中部の層準に含まれ、とくに中部に多い。

遺物

〈出土状況〉埋土を中心に、カマド本体・煙道部・床面直上・床面から少量が出土している。土器と鉄滓があるが、図示はしていない。

〈土器〉すべて破片で、土師器壺が大部分を占め、少量の坏・縄文土器がある。土師器壺はすべてI類である。また、坏4点はI類である。

〈鉄滓〉2点68gが埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

埋土の状況からみて、平安時代II群に分類できる。

IV区

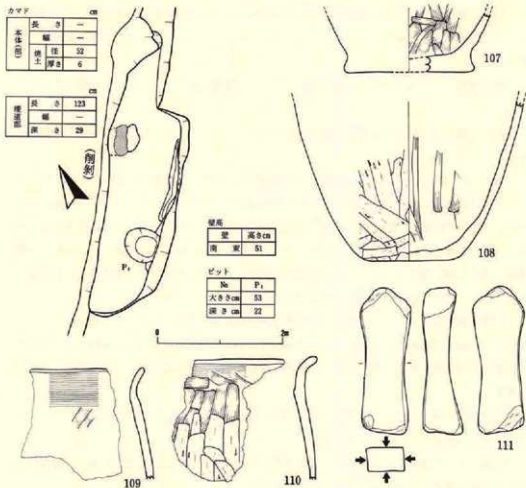
IV-1 住居跡

遺構（第45図、図版22）

〈検出状況・重複関係〉削剥がいちじるしく、南東壁を含む一部を調査できたにすぎない。

〈平面形・規模・床面積〉詳細は分らない。平面形は方形を基調とし、北東～南西方向で3.4mを測る。〈主軸方向〉N-33°30'-E

〈埋土〉南東壁際の一部が観察できたにすぎないが、黒褐色土の単層で、粒径30mmの塊状の灰白色浮石を床面直上まで全体に含む。同浮石は掘り方埋土にも少量含まれる。



No	地点・層位	種類・用途	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	口 径	底 径	底 高		
107	カマド	土器片	—	ユビナデ	ナデ	—	ユビナデ	ナデ	—	ユビナデ	—	(4.5)	(9.5)		
108	〃	〃	—	ヘラナデ	ナデ	—	ヘラナデ	ナデ	—	ヘラナデ	—	(12.5)	6.5		
109	〃	〃	ヘラナデ	ナデ	—	ヘラナデ	ナデ	—	ヘラナデ	ナデ	—	—	—		
110	〃	〃	ヘラナデ・ヘラナデ	ナデ	—	ヘラナデ	ナデ	—	ヘラナデ	ナデ	—	—	—		

No	地点・層位	器 種	大 小 (最大) : mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
111	床面	砥石	117	41	32	176.6	細砂質凝灰岩(石質凝灰岩), G5	変形, 4面使用。使用による両面生じる	241

第45図 I IV-1 住居跡実測図・出土遺物

$$S = \frac{1}{3}$$

〈壁の状態〉直立 〈壁高〉51cm 〈壁溝〉南東壁際の一部にあり、幅は15cm、深さは12cmである。

〈柱穴〉調査できた範囲には検出されていない。

〈カマドの位置〉北東壁の東隅寄り 〈カマド本体〉残存状態は良くない。右側壁下部と火床部が崩壊した粘土質シルトや2個の礫の下位に検出された。〈煙道部・煙出し部〉大部分が削刺され、詳しいことは分からないが、掘り込み式と推定できる。底面はほぼ水平で、煙出し部には円形の小ピットを伴うものと推定できる。

〈付属施設〉ピットP1を相伴する。南東壁中央からいくぶん南西寄りに位置する。平面形は楕円形で、浅皿状の断面をもつ。埋土は火を受けた赤灰色と灰赤色土で、少量の木炭を伴う。壁はよく焼けている。以上のことや竈の羽口の破片と少量ではあるが鉄滓が出土したことからは鍛冶に関連した施設を想定できる。

遺物（第45図、図版241）

〈検出状況〉上述のような検出状況のため、床面やカマド本体・埋土・ピット・煙道部から少量が出土しているにすぎない。土器と鉄製品・鉄滓・竈の羽口・砥石がある。

〈土器〉土師器甕・坏・縄文土器がある。土師器甕はI類が卓越し、II類の口縁部破片は1点だけである。坏の破片10点はすべてI類である。

〈鉄製品・鉄滓〉図示していないが、現存長33mm・径7mmの断面が方形の棒状の破片1点が埋土から出土している。鉄滓は1個51gがP1から出ている。

〈竈の羽口・砥石〉羽口の破片1点はP1、砥石11はP1の西側の床面から出土している。

まとめと遺構の時期

埋土や掘り方埋土の状況からみて、平安時代Ⅲ群に分類できる。

Ⅳ-2 住居跡

遺構（第46図～第48図、図版22～24）

〈検出状況・重複関係〉残存状態は良好である。重複する遺構はない。

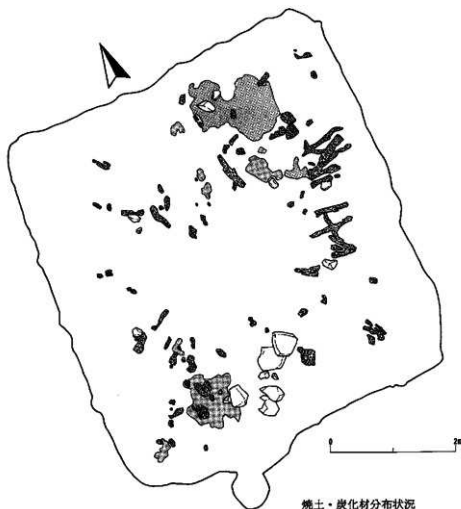
〈平面形〉隅丸長方形 〈規模〉5.6×6.1m 〈床面積〉29.6㎡ 〈主軸方向〉S-4'-W

〈埋土〉褐色～黒褐色・黒色の土層群が卓越する。Ⅶ層起源の暗褐色土が中央部付近や北壁寄りの広い範囲の床面上に分布する。粒状の灰白色浮土をごく少量含む黒褐色土は壁際を占める。

〈壁の状態〉直立～わずかに外傾 〈壁高〉38～63cm 〈壁溝〉カマド部分をのぞいて存在する。

〈床面・掘り方〉床面は全体に水平で、硬く締まっている。中央部付近をのぞいたほぼ全体に掘り方を伴う。

〈柱穴〉PP1～PP4の4本柱である。PP1とPP4が隅から内側に入った位置にあるのに対し、PP2・PP3はカマドが設置された南壁際にある（Ⅲa型）。ややいびつな長方形の配置である。



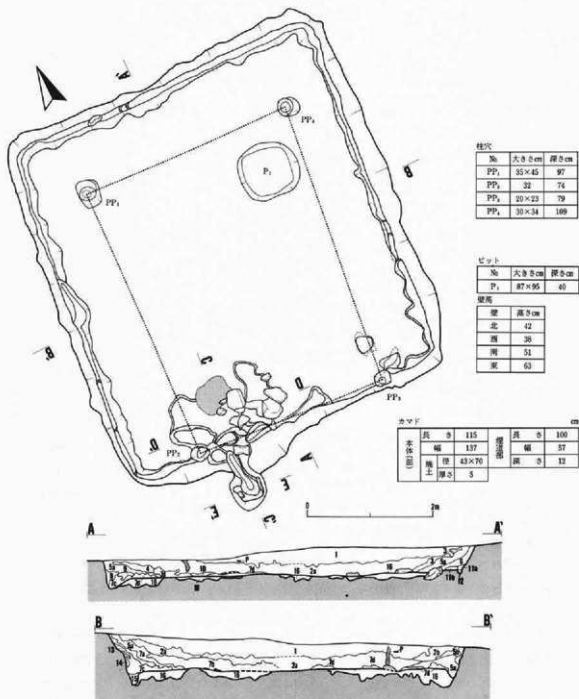
焼土・炭化材分布状況

第46図 I IV-2 住居跡実測図(1)

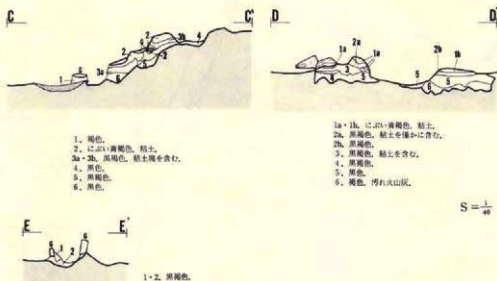
〈カマドの位置〉南壁中央と南西隅との中間 〈カマド本体〉崩壊がいちじるしい。粒径15～38cmの安山岩と凝灰岩を混じえた礫群を粘土質シルトで被覆して構築していたものである。〈煙道部・煙出し部〉黒褐色土中に作られている。原形をあまり良くとどめていないが、煙出し部の側壁を構成する亜角礫3個が残り、それを被覆していたとみられる粘土質シルトの小塊を一部に伴う。底面は緩やかに傾斜して上がって行くが、明瞭な掘り込みは確認できなかった。

〈付属施設〉貯蔵穴P1は床面中央部から北東隅に寄ったPP4の内側に位置する。平面は隅丸の凸辺正方形で、深度は大きい。埋土は焼土粒や炭化物粒を含む黒褐色土の単層である。焼失に伴う焼土や炭化材が床面から20cm下位に落ち込んでいた。

〈焼失〉埋土下部から床面直上に分布する焼土や炭化した材・草本類の状態や量からは焼失



第47図 I IV-2 住居跡実測図(2)



第48図 I IV-2 住居跡実測図(3)

住居跡であることが分かる。実測図には表現されていないが、焼土は北西部を中心にした床面の約4に相当する範囲に分布がいちじるしいほか、北東隅やカマド付近にみられる。炭化材の上下にあって埋土下部から床面直上の層準を占めており、最大層厚は6cmである。材の残存状態は比較的よい。径10cm±の角材と考えられるものが主であるが、カマドの左脇には幅20cmの板材の断片がある。それらはおおむね床面中央から放射状に分布する。床面密着のものはほとんどなく、壁際では材が床面にたいして斜めに傾く例が多い。草本類は量が少ない。材2点のうち、1点はケヤキ、1点是不明であり、草本類はススキという鑑定結果がでている。

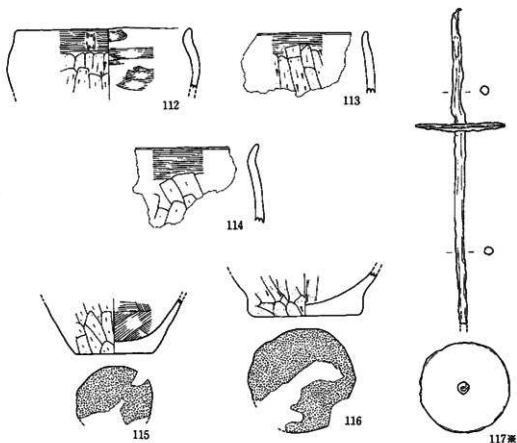
遺物 (第49図、図版235)

〈出土状況〉埋土上部～下部を中心に、床面直上・P1・掘り方埋土から出土している。土師器甕を主体とする土器片の数は他の住居跡と比べても多い方であるが、復元できるものがない。土器と鉄製品・鉄滓・轡の羽口・礫石器がある。

〈土器〉土師器甕が主体を占め、次いで坏・縄文土器・須恵器・甕以外の土師器の順に多い。土師器甕はI類が卓越し、M4などがある。砂底は115・116以外に6点、木葉底は1点がある。坏はI類35点に対してII類は1点である。I類にはA2・B1・C4あるいはC5が1点ずつ、B0が4点ある。図化できなかった土師器の小型の壺は、胴部外面をヘラミガキし、底部に回転糸切り痕を残している。須恵器は4点である。

〈鉄製品・鉄滓〉紡錘車117が埋土下部、鉄滓2個164が床面と埋土から出土している。

〈轡の羽口〉小破片2点が埋土上・下部から出土している。



No	地点・層位	種類・器種	外 面				内 面				計測値: cm			図版
			口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	口縁部	底面	高さ	
112	堀土下部	土師器	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	13.9	(4.8)	—	—	—	116a
113	床面直上	〃 〃	〃	〃	—	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
114	堀土	〃 〃	〃	〃	—	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
115	床面直上	〃 〃	—	〃	砂盛	〃	〃	ナデ	—	(4.2)	6.8	—	—	
116	堀土下部	〃 〃	—	〃	〃	—	〃	〃	—	(3.2)	9.2	—	—	

No	地点・層位	器 種	大きさ(最大): mm		重量g	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅			
117	堀土下部	鉄器	(188)	47.3	3	(26.63) 両端欠損。筋目の径は3.3~5mm。	236

$$S = \frac{1}{2}(\text{米}) \times \frac{1}{2}$$

第49図 I IV-2 住居跡出土遺物

〈その他〉凹石1点がある。

まとめと遺構の時期

埋土の状況から、平安時代II群に分類できる。

I IV-3 住居跡

遺構 (第50図、図版24~26)

〈検出状況・重複関係〉煙道部の先端が調査区域外に出る。重複する遺構はない。

〈平面形〉隅丸のややいびつな方形 〈規模〉3.3×3.7m 〈床面積〉10.3㎡ 〈主軸方向〉

N-66-E

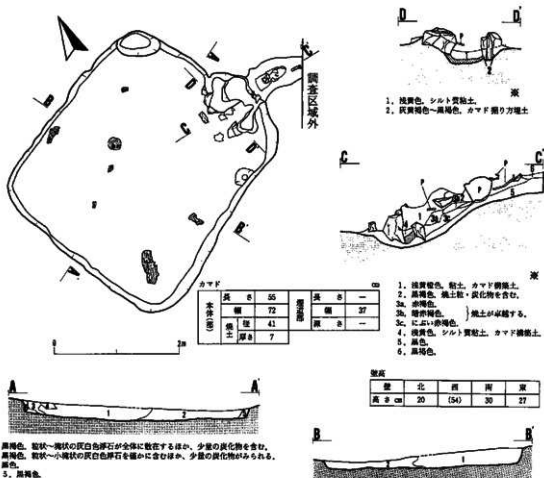
〈埋土〉 黒褐色・黒色の土層群が占める。黒褐色土は灰白色浮石を含み、浮石は床面上にも少量が分布する。

〈壁の状態〉 直立 〈壁高〉 20~30cm。グリッド壁にかかった西壁は検出面よりも33cm上位から掘り込まれているのが観察でき、54cmの壁が存在したことになる。〈壁溝〉 伴わない。

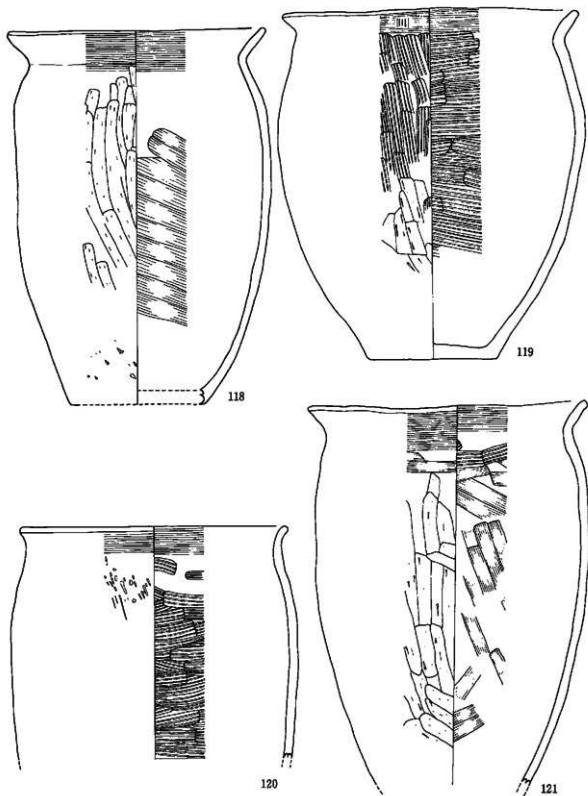
〈床面・掘り方〉 床面は全体に硬く締まり、掘り方は伴わない。

〈柱穴〉 伴わない。

〈カマドの位置〉 東壁中央から南寄り 〈カマド本体〉 崩壊しているが、両側壁を確認できる。側壁は、最大粒径31cmの亜角礫ほか多くの礫や土師器甕の大型破片を芯材にし、粘土やシルトで被覆している。火床部中央部付近には1個の亜角礫を支脚として埋設している。〈煙道部・煙出し部〉 本体から煙道部への移行部分には土師器甕の大型破片を敷き、その先には底部



第50図 I IV-3 住居跡実測図



第51圖 1 I IV—3 住居跡出土遺物(1)

S = $\frac{1}{4}$

No.	地 点 ・ 層 位	種類・形状	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分類	図号
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	器 高	底 径		
118	煙道部使用	土師器甕	横ナデ	ヘラナデ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	20.6	29.8	(19.4)	1L	222
119	カマド・煙道部	※ ※	※	刷毛目・ヘラケズリ	不明	※	刷毛目	ナデ	23.7	27.8	19.9	1L	222
120	カマド	※ ※	※	ヘラケズリ・ナデ	—	※	※	—	(21.3)	(18.6)	—	1L	
121	煙道部使用	※ ※	※	ヘラケズリ	—	※	刷毛目・ナ	—	22.2	(20.9)	—	1L	223

第51図 2 IⅣ-3 住居跡出土遺物(2)

を取り去った土師器甕2個体(118・121)を横倒しにして煙道部の一部にしている。具体的には、本体寄りに118の口縁部を向け、その胴部下半に121の口縁部を差し込んでいる。煙道部は先端へいくぶん急傾斜で上がり、一部が調査区域外に出るが、煙出し部は小さく扁平な凝灰岩の角礫を側壁に使っている。なお、煙道部・煙出し部は黒褐色土中に構築され、明瞭な掘り込みは確認できなかった。

〈その他〉炭化した材や草本類が一部では焼土を伴って埋土下部から床面直上の層準に広範囲の分布を示している。いずれも量的には少ない。南隅では壁際の埋土上部から下部へと材が傾斜するあり方を示し、焼失の場合と似ている。材1点はケヤキ、草本類はススキという鑑定結果が出ている。

遺物(第51図、図版222・223)

〈出土状況〉煙道部に使用された土師器甕やカマド本体からのものを除いては土器片少量が埋土から出土しているにすぎない。

〈土器〉土師器甕が主体を占め、そのほかには、坏・甕以外の土師器・須恵器・縄文土器がある。土師器甕はI類が卓越し、L1・L2・L3aなどが出土している。118は胴部下半の外面に化粧粘土が付着している。砂底・木葉底は1点ずつである。坏は3点で、I類が2点、不明が1点である。甕以外の土師器は高台付坏とミニチュアであり、須恵器は甕1点である。

まとめと遺構の時期

118～121は本遺構に共伴するものである。埋土の状況と出土遺物から、平安時代II群に分類できる。

JⅣ区

JⅣ-1 住居跡

遺構(第52図・第53図、図版25～27)

〈2棟の重複〉新旧2基のカマドや複数のピットの存在から、同形・同規模の2棟が重複していることを推定できる。新期を1a住居跡 古期を1b住居跡として記載する。

JⅣ-1 a 住居跡

〈検出状況・重複関係〉残存状態は良好である。その他の遺構との重複はない。

〈平面形〉隅丸長方形で、北東壁が凸辺になる。〈規模〉4.0×4.6m 〈床面積〉13.3m² 〈主

軸方向) N-56°-E

〈埋土〉黒褐色・黒色の土層群が占める。色調と粒径の異なる2種類の火山灰が認められ、粒状の黄褐色火山灰が上部から中部に、粒状のものを主にした灰白色浮石が中部から床面にかけて含まれる。

〈壁の状態〉北東壁と南東壁がゆるやかに外傾するほかは直立する。〈壁高〉21~54cm 〈壁溝〉2号カマドから西側の南東壁沿いにある。幅が10~20cm、深さが10cmである。

〈床面・掘り方〉床面は水平で、いくぶん硬く締まっている。Ⅵ層下部の黒褐色土を直接床面にし、掘り方を伴わない。

〈柱穴〉伴わない。

カマド: 1号カマドを共伴する。〈位置〉北東壁中央からやや南東寄り 〈本体〉構築材は崩壊して焼土とともに広範囲に分布し、側壁や火床部はその下位から検出された。粒径20cmの亜角礫1個ずつを芯材にし、褐色シルトで被覆して側壁を構築している。右側壁の外方には構築材の一部である小礫3個が散在している。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。燃焼部から続く部分がいくぶん急傾斜、壁外の部分が緩傾斜で上がっていく。煙出し部は円形の小ピットを掘り込み、粒径40cmの亜角礫を横位の状態で先端部に埋設している。

〈付属施設〉貯蔵穴P1がある。南西壁中央の壁際に位置し、平面は隅丸長方形で、深度は深い。埋土の大部分をⅦ層起源の黄褐色浮石が占めるのは人為的に埋められたことによるものであろう。

JⅣ-1b住居跡

〈平面形・規模・床面積〉共伴する2号カマドやピットP2・P3の位置や状態からは1a住居跡と同形・同規模のものと推定できる。〈主軸方向〉S-34°-E

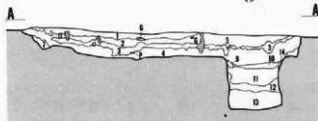
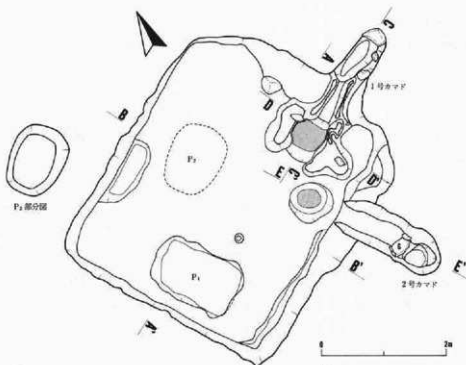
〈埋土〉煙道部やピットをのぞいては固有のものをもたない。

〈壁・壁溝・床面・掘り方〉壁と大部分の床面は1a住居跡と共有・再利用の関係にある。掘り方は伴わない

〈柱穴〉伴わない。

カマド: 2号カマドを共伴する。〈位置〉南東壁中央と東隅との中間 〈本体〉火床部が痕跡として残るだけである。径55cm、深さ6cmの円形ピット内に形成されていたが、その上への貼り床は確認できなかった。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。ゆるやかに傾斜して上がり、煙出し部には円形のピットを伴う。その境は、側壁にそって隙2個を直立させた上に粒径40cmの亜角礫を橋状にわたしている。

〈付属施設〉P2とP3を共伴する。P3は1号カマドの右側壁の下位に検出された(計測



ビット

No	大きさcm	深さcm
P ₁	95×140	100
P ₂	85×115	35

壁高

壁	北西	南西	南東	北東
高さcm	31	32	54	31

1. 黒色。
2. 黒褐色。黄褐色火山灰を含む。
3. 黒褐色。灰白色浮石を多く含む。
4. 黒色。灰白色浮石を多く含む。
5. 黒褐色。
6. 黒色。灰白色浮石を僅かに含む。
7. 黒色。
8. 黒褐色。
9. 暗褐色。
10. 黒褐色。粒状～小塊状の灰白色浮石を僅かに含む。
11. 黄褐色。浮石質。
12. 褐色。
13. 黄褐色。浮石質。
14. 黒褐色。

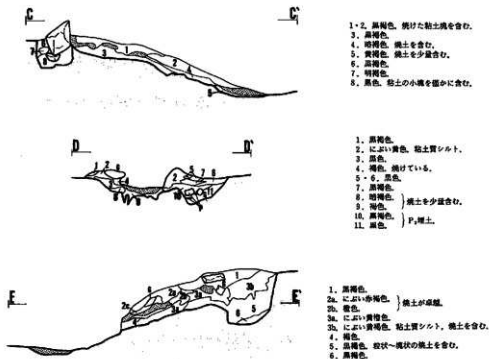
1号カマド

本体部	長さ	91	煙道部	長さ	170
	幅	110		幅	47
	焼土	深さ		深さ	30
	厚さ	7			

2号カマド

本体部	長さ	—	煙道部	長さ	175
	幅	—		幅	67
	焼土	深さ		深さ	56
	厚さ	3			

第52図 J IV—1 住居跡実測図(1)



$$S = \frac{1}{40}$$

第53図 J IV-1 住居跡実測図(2)

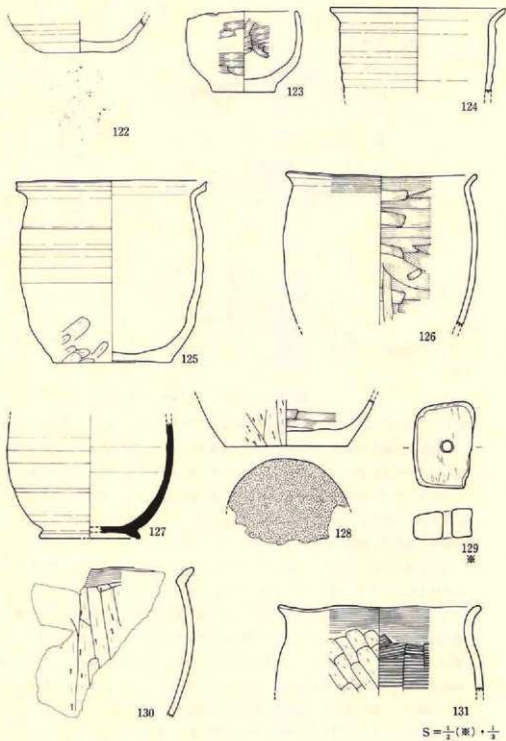
値不明)。カマドの断ち割りのときに一部を掘りあげてしまったが、灰白色浮石の小塊を少量含む黒褐色土が埋土である。平面は楕円形で、深度は小さい。P 2 は 1 a 住居跡の床面を全体に掘り下げたときに検出した。硬い床面の下にあったことからみて、貼り床が施されていた可能性があるものの、確実な点は不明である。平面は凸辺長方形で、深度は浅い。以上の 2 基を、貯蔵穴あるいはそれに類するものと考えておく。

遺物 (第54図、図版222・233・241)

〈出土状況〉埋土上部を中心に、埋土下部・ピット・床面直上・床面・煙道部・カマド本体から出土しているが、量はそれほど多くはない。土器と石製品がある。

〈土器〉土師器の甕と小型の鉢のほか、坏・須恵器がある。土師器甕はⅠ類が卓越する。Ⅰ類はM 2、Ⅱ類はM 1 a・M 1 b などがある。125はP 3や2号カマド煙道部ほかからの破片が接合したもので、時間的には1 b 住居跡に近い。砂底は128以外に1点、木葉底は2点である。坏はⅡ類B 0の122以外はⅠ類3点、Ⅱ類1点が埋土から出ている。123は土師器の小型の鉢として分類した。須恵器はP 1から出土した甕の大型破片1点127だけである。

〈石製品〉平面形が長方形の有孔石製品129が埋土上部から出ている。



第54図1 J IV-1 住居跡出土遺物(1)

No	地点・層位	種 類	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 録
			口縁部	胴部	底 部	口 へ 底	黒色地帯	口縁部	高さ	直径			
122	埋土上部	杯	—	口クロ底	図形未切り	口クロ底	X	—	(2.5)	6.0	直30		

No	地点・層位	種類・部類	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 録
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口縁部	高さ	直径		
123	2号カマド煙出し部	土師器鉢	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	8.5	6.5	4.9	233	
124	埋土上部・2号煙道部	土師器鉢	口クロ底	口クロ底	—	口クロ底	口クロ底	—	14.0	(6.7)	—		
125	P3・2号カマド煙道部	ⅡⅡ	Ⅱ	口クロ底・ケズリ	ヘラケズリ	Ⅱ	Ⅱ	口クロ底	15.2	14.4	9.4	IM1	222
126	P3・埋土上部・灰面	ⅡⅡ	横ナデ	ナデ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	15.2	(12.2)	—	IM2	
127	P1埋土下部	須恵器甕	—	口クロ底	ヘラ切り	—	口クロ底	口クロ底	—	(9.2)	8.0		
128	埋土上部・下部	土師器甕	—	ヘラケズリ	砂面	—	ヘラナデ	ナデ	—	(3.7)	9.8		
130	埋土上部	ⅡⅡ	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	Ⅱ	—	—	—	—		
131	埋土上部	ⅡⅡ	Ⅱ	Ⅱ	—	Ⅱ	灰面	—	16.2	(6.8)	—		

No	地 点 ・ 層 位	群 種	大 き き (最 大) : mm			重 量 : g	石 材 名	特 徴 ・ 備 考	図 録
			長 さ	幅	厚 さ				
129	埋土上部	有孔石製品	48	(31)	15	(21.3)	白色磨光凝灰岩。G17	右側縁をわずかに欠失。同層から穿孔	241

第54図 2 J IV-1 住居跡出土遺物(2)

まとめと遺構の時期

遺物の多くは1 a 住居跡に固有のものである。しかし、123・125・126は1 b 住居跡に関係が深いことが出土地点から明らかである。埋土の状況からみて、1 a 住居跡は平安時代Ⅳ群に分類できる。重複形態からみて、2 棟は時間的に近い関係にあるものと推定する。

J IV-2 住居跡

遺構(第55図、図版27・28)

〈検出状況・重複関係〉 残存状態は良好である。重複する遺構はない。

〈平面形〉 隅丸の長方形状 〈規模〉 3.1~3.4×4.1m 〈床面積〉 10.0㎡ 〈主軸方向〉 S—37°—W

〈埋土〉 黒褐色土・黒色土で主に構成され、粒状~小塊状の灰白色浮石は壁際から床面へ傾斜する3 a・3 b層に含まれるが、少量である。

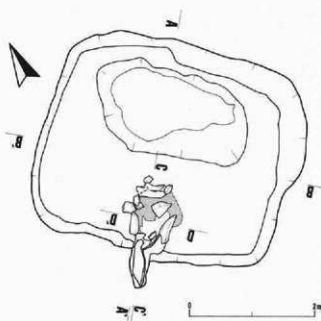
〈壁の状態〉 全体に外傾 〈壁高〉 20~45cm 〈壁溝〉 伴わない。

〈床面・掘り方〉 北東壁側約1/2の床面は3~8cmほど浅くくぼむ。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉 伴わない。

〈カマドの位置〉 南西壁中央 〈カマド本体〉 粒径15~50cmの亜角礫を前方を閉じた「コ」字形に埋設し、それを被覆していた粘土質シルトが部分的に残っている以外は崩壊している。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉 掘り込み式であるが、黒褐色土中に作られ、緩やかに傾斜して上がっていくほぼ底面を確認できたにすぎない。煙出し部のための施設は認められない。

遺物(第56図・第57図、図版217・223・232・235)

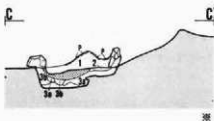


壁高

壁	北西	南東	南東	北東
高さ cm	39	29	45	27

コマド

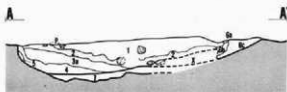
本体部	長さ	97	横溝部	長さ	87
	幅	70		幅	30
	高さ	50×75		深さ	—
	厚さ	10			



源



源

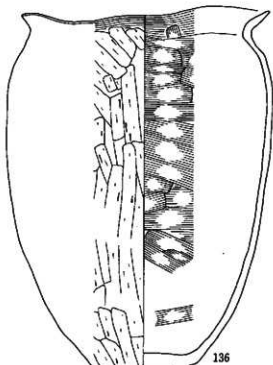
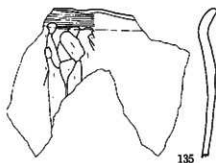
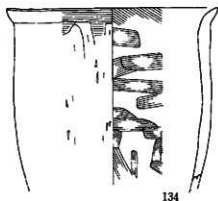
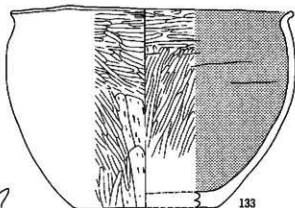
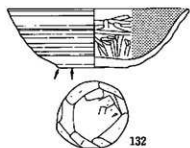


1. 黒褐色。焼土・粘土質シルト。
2. 黒褐色。
- 3a・3b. 黒色。
4. 暗褐色。焼土粒を僅かに含む。
5. 黒色。

6. 基本層序。
1. 黒色。
2. 黒褐色。炭化物粒を少量含む。
- 3a. 黒褐色。粒状～小塊状の灰白色浮石を全体に含む。
- 3b. 黒褐色。3aに似るが、浮石の量が少ない。
- 4・5. 黒褐色。
- 6a. にぶい黄褐色。
- 6b. 暗褐色。
- 6c. 黒褐色。
7. 黒褐色。雨り方層土。
- X. コマド埋土・横溝土。

$$S = \frac{1}{40} (\text{cm})$$

第55図 J IV-2 住居跡実測図

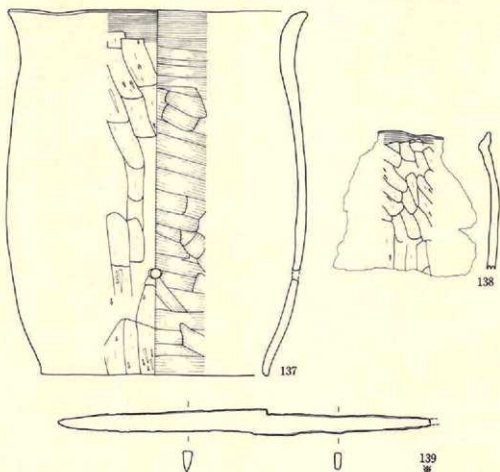


No.	地点・層位	種類	外			内			計測値: cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口縁部	高さ	底径		
132	カマド	片	ロクロ製	ロクロ製	四角形切り・ヘラケズリ	ヘラミガキ	〇		14.5	4.8	5.7	133	217

No.	地点・層位	種類・用途	外			内			計測値: cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口縁部	高さ	底径		
133	カマド・埋土	土師器鉢	ヘラミガキ	ミガキ・ケズ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	22.6	16.2	11.4	—	232
134	カマド	土師器鉢	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	17.0	(13.6)	—	1M1	—
135	カマド	片	片	片	—	片	片	—	—	—	—	—	—
136	埋土中部・埋土	片	片	片	ヘラケズリ	片	片	ナデ	19.9	28.8	7.2	113	223

S = $\frac{1}{3}$

第56図 J IV-2 住居跡出土遺物(1)



No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁	胴高	底径		
137	カマド・埋土	土師器甕	横ナデ	ヘラケズリ	無底	横ナデ	ヘラナデ	無底	24.0	29.0	18.2	232	
138	カマド	土師器甕	ナ	ナ	—	ナ	ナ	—	—	—	—		

No	地点・層位	器 種	大 小 (最大) : mm			重量g	特 徴 ・ 備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
139	埋土中部	刀子	(198)	34	5	(25.26)	基部先端をわずかに欠く。横間をもち、両面平造り。	235

第57図 J IV-2 住居跡出土遺物(2)

$$S = \frac{1}{2}(\text{底}) \cdot \frac{1}{3}$$

〈出土状況〉カマド本体からややまとまって出土しているほか、埋土上部～下部・床面直上から出土しているが、量は少ない。

〈土器〉土師器の甕と鉢・甑のほか、坏・須恵器・縄文土器がある。土師器甕はⅠ類が卓越し、M1b・L2などがある。Ⅱ類は1点があるにすぎない。砂底は1点である。鉢133は底部を欠くが、大型のものである。137は無底式の甑である。先端部は器壁が非常に薄くなり、一部

は外側へまくれている。先端から8cm上位には径8mmの小孔1個を伴う。反対側を失っているが、残存状況からは、2個1対のものである可能性が大きい。多量の小礫を胎土に含んでいる。飯として識別できる唯一の資料である。坏は、I類B3の132のほかにI類6点、II類2点がある。須恵器は壺の胴部破片1点が埋土中部から出土しているにすぎない。

〈鉄製品〉刀子139は基部先端をわずかに欠いている。

まとめと遺構の時期

カマド本体から出土している132～135・137・138は本遺構と共伴あるいは時間的に近いものである。埋土の状況や出土遺物から、平安時代II群に分類できる。

2. 住居状遺構

DN-1住居状遺構

遺構（第58図、図版4）

〈検出状況・重複関係〉L面とM面とを分ける崖の縁に検出された。焼土と柱穴状ビット・床面と考えられる面が検出面に存在したことから遺構とした。DN-53ビットの東部や南部は床面下位まで削刺されているのであろう。重複するDN-52・DN-53の2基のビット（時期

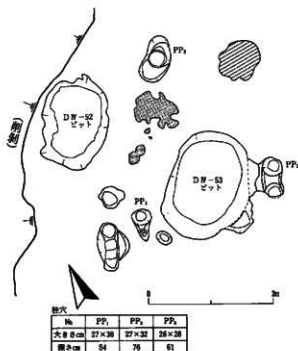
不明）との新旧関係は不明である。

〈平面形・規模・床面積〉座線からPP3間での4.2m、北東から南西方向での5.4mは本遺構の範囲に含まれるものと推定しておく。

〈埋土・壁〉消失し、不明である。

〈床面・掘り方〉床面と推定したやや硬い面は“地山”面を直接使っている。全体に小凹凸がいちじるしい。

〈柱穴〉柱穴状ビットはPP1～PP3の3個が検出されている。方形気味の平面をした深いビットで、本遺構の柱穴の一部になるものと推定した。なお、PP3の上部



第58図 DN-1住居状遺構実測図

には粒径52cmの焼けた安山岩が落ち込んでいた。

〈焼土〉現地性焼土がPP3のすぐ南西側にある。17×37cm、55×70cmほかの焼土がわずかな間隔を置いて並んでいる。層厚は7cmと厚く、浅い掘り込み面を下位に伴う。本遺構に伴い、炉のような性格をもつものであろう。

まとめと遺構の時期

出土遺物はない。住居に類する遺構を想定して記載してきたが、不明な点が多く、確かなことはいえない。所属時期は不明である。

FIV-2 住居状遺構

遺構（第59図、図版8・9）

〈検出状況・重複関係〉重複する遺構はない。

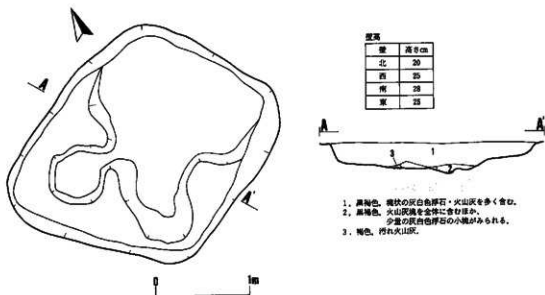
〈平面形〉隅丸不整形 〈規模〉2.2×2.4m 〈床面積〉4.0㎡

〈埋土〉2層の黒褐色土と床面上にわずかに堆積する褐色土で構成される。粒状から粒径40mm土の塊状の灰白色浮石を全体に含むが、下部ほど少量である。

〈壁の状態〉直立～外傾 〈壁高〉22cm土 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は大小の凹凸がいちじるしく、軟らかい。住居跡に見られる掘り方に類似することから推定すると、床面を把握できないまま掘り方面まで掘り下げてしまった可能性が高い。

〈柱穴・カマド・焼土など〉伴わない。



第59図 FIV-2 住居状遺構実測図

遺物

〈出土状況〉埋土と床面直上から出土しているが、量は少ない。

〈土器〉土師器甕・坏・縄文土器がある。土師器甕はⅠ類が卓越する。坏2点はⅠ類である。

〈その他〉縄文土器片を利用した円盤状土製品1点が埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

遺構の形態や埋土の状況・出土遺物から平安時代Ⅱ群に分類する。

FⅣ-4 住居状遺構

遺構（第60図、図版12）

〈検出状況・重複関係〉全体的な削制を受け、掘り方と現地性焼土が残っていたにすぎない。

重複する遺構はない。

〈平面形〉かなりいびつな方形になるのは掘り方の一部も削制を受けているためと考えられる。〈規模〉2.2×2.3m（残存部）

〈埋土〉掘り方埋土以外は固有の埋土を欠く。

〈壁・壁溝〉壁は掘り方に伴うものしか残っていない。壁溝については不明である。

〈床面・掘り方〉掘り方埋土は汚れ火山灰の大小塊をマトリックスにし、黒色土を混じえている。粒径10mmの灰白色浮石を少量含む。掘り方は最深部で20cmである。

〈柱穴〉伴わないものであろう。

〈焼土〉径40×58cm、層厚8cmの現地性焼土が北西壁中央部の壁際に残っていた。それに伴うようなカマド構築材の類はまったく残っていない。性格・機能については明らかでない。

遺物

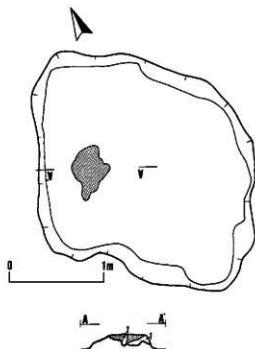
土師器甕Ⅰ類の破片2点が出土しているだけである。

まとめと遺構の時期

遺構の形態や掘り方埋土の状況から、平安時代Ⅲ群に分類する。

3. ピット

表中に、→補足とあるものは後に一括して

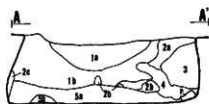
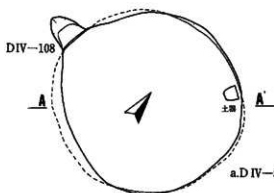


1. 黒褐色、灰化物を少量含む。

第60図 FⅣ-4 住居状遺構実測図

遺構名	DIV-51ビット	DIV-52ビット	DIV-53ビット
挿 図	遺構：第61図 a 遺物：第66図	遺構：第61図 b	遺構：第61図 c
図 版	遺構：29 a～c 遺物：206	遺構：29de	遺構：30ab
検出状況 重複関係	上部を削刺されている。不明→DIV-108落とし穴	上部を削刺されている。不明→DIV-1住居遺構	上部を削刺されている。不明→DIV-1住居遺構
平面形	円形	不整形方形～不整形円形	楕円形
開口部径	184×195cm	116×140cm	130×175cm
深 さ	70～78cm	47～140cm	67～72cm
埋 土	黒褐色土や黒色土が主体。明黄褐色ほかの細砂・砂質土が壁隙を占める。	暗褐色土と砂質の黒褐色土	黄褐色・暗褐色などの砂質土が上半、汚れ火山灰が下半を占める。上半は火山灰塊を含む。
壁	内傾	直立～ゆるやかな外傾	直立～ゆるやかな外傾
底 面	ほぼ平坦	凹凸はないが、わずかに傾斜	ほぼ平坦
出土遺物	縄文土器140が底面から出土。そのほか、縄文土器片6点と銅片1点が埋土から出土。 →補足	埴土類と縄文土器の破片、銅片が1点ずつ埋土から出土。	土師器壺の胴部破片1点が埋土から出土。
所属時期	土器・形態→縄文時代中期中葉円筒上層式c期	不明	不明
備 考	プラスチックビット		

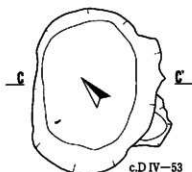
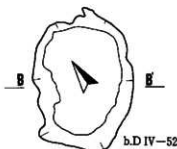
遺構名	DIV-54ビット	DIV-55ビット	EIV-51ビット
挿 図	遺構：第61図 d	遺構：第61図 e	遺構：第61図 f
図 版	遺構：30cd	遺構：30ef	遺構：31ab
検出状況 重複関係	上部を削刺されている。	上部を削刺されている。	
平面形	ほぼ円形	円形	円形
開口部径	90×105cm	100×109cm	90×98cm
深 さ	33～40cm	29～40cm	61～65cm
埋 土	上部・下部の2層に分かれ、上部は粒状・塊状の焼土や炭化物粒を少量含む。	焼土の卓越する層が上部に広がる。下部にも焼土や炭化物を含むが、少量。	性状の似る黒褐色土や黒色土が卓越。
壁	直立～いくぶん外傾	直立～わずかに外傾	上半はほぼ直立し、下半はわずかに外傾。
底 面	壁隙がわずかに高くなる。	いくぶん傾斜	ほぼ平坦
出土遺物	なし	土師器壺の胴部破片1点が埋土から出土。	なし
所属時期	不明	不明	埋土・形態→縄文時代と推定
備 考	DIV-55ビットに隣接し、形態や埋土も互いに似ている。	DIV-54ビットに隣接し、形態や埋土も互いに似ている。	ビーカー形ビット



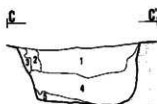
- 1a. 黒褐色。炭化物・土器片を少量含む。
 1b. 黒褐色。
 2a. 明黄褐色。砂質。
 2b. におい黄褐色。細砂。
 2c. 明黄褐色。砂質。
 3. におい黄褐色。砂質。
 4. 褐色。土器を含む。
 5a. 褐色。砂質シルト。
 5b. 黒褐色。



1. 黒褐色。火山灰の小塊を含む。
 2. 暗褐色。砂質。火山灰の小塊を含む。



1. 褐色。粒状・塊状の粘土。炭化物を全体に含むが少量。
 2. 黄褐色。細砂。



1. 黄褐色。砂質。
 2. 暗褐色。砂質。
 3. におい黄褐色。粒状・塊状の火山灰を含む。
 4. 褐色。汚れ火山灰。
 5. 褐色。



1. 黒褐色。粘土の小塊を少量含む。
 2. 褐色。汚れ火山灰。
 3. 暗褐色。
 4. 褐色。粘土・炭化物を含む。
 5. 褐色。
 6. 暗褐色。
 7. 褐色。汚れ火山灰。
 8. 暗褐色。粘土の小塊を少量含む。
 9. におい黄褐色。
 10. 暗褐色。粘土・炭化物を含む。



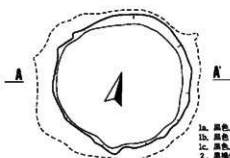
- 1a~1c. 黒褐色。
 1d. 暗褐色。
 1e. 褐色。
 1f. 暗褐色。
 2a~2b. におい黄褐色。
 3a~3c. 暗褐色。



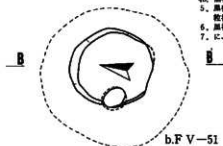
第61図 ピット実測図(1)

遺構名	EIV-52ピット	FV-51ピット	GIV-51ピット
挿 図	遺構：第62図 a 遺物：第66図	遺構：第62図 b 遺物：第66図	遺構：第62図 c
図 版	遺構：31cd	遺構：31ef	遺構：32ab
検出状況 重複関係			最近の削制のために、北西側約1/2の壁の大部分を失っている
平 面 形	ほぼ円形	ほぼ円形	いくぶんいびつな正方形
開口部径	140×150cm	85×93cm	195×228cm
深 さ	68～74cm	130cm	82～88cm
埋 土	黒褐色土や黒色土が主体。火山灰が壁面下部の一部にみられる。	黒色土が卓越。火山灰や細砂が壁面に少量みられる。	大小の火山灰塊を含む黒褐色土が卓越。上・中部や最下部の3a～3c層は灰白色厚石地層と推定
壁	内傾し、上半・上部が直立～外傾	内傾して立ち上がり、上部は直立～外傾	直立。南側の上半が外傾するのは崩壊のため。
底 面	周辺部が高く、ゆるやかに湾曲	ほぼ平坦	ほぼ平坦
出土遺物	144のほか縄文土器片23点が埋土上部・埋土を中心に出土。時期の分るものは後期に属する。	143のほか縄文土器片5点・削片1点が埋土上部・中部・底面直上から出土。	土師器壺破片39点、坏I類破片8点、縄文土器片1点が埋土上・下部から出土。
所属時期	形制・埋土・土器・周辺の分布土器→縄文時代後期と推定	形制・埋土・土器・周辺の分布土器→縄文時代後期と推定	埋土・形制・土器→平安時代
備 考	フラスコ形ピット	フラスコ形ピット。副穴→補足	一部固定されていないが、壁溝が一周。掘り方を下位に伸う。

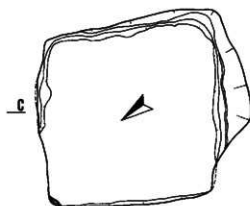
遺構名	GIV-52ピット	GIV-53ピット	HIV-51ピット
挿 図	遺構：第62図 d 遺物：第66図	遺構：第63図 a	遺構：第63図 b
図 版	遺構：33 a・c 遺物：223	遺構：33 b	遺構：34ab
検出状況 重複関係			新→HIV-52ピット。旧→HIV-2住居跡→補足
平 面 形	円形	不整形円形	隅丸の凸凹方形と推定。
開口部径	200×220cm	107×125cm	130cm×不明
深 さ	55～74cm	4～8 cm	34～50cm
埋 土	黒褐色土・黒色土で構成。上・中部に黄褐色火山灰塊、最下部に少量の火山灰塊を含む。	黒褐色土の単層	黒褐色土が卓越。小塊を主にした褐色土塊が全体に散在する。
壁	わずかに傾斜、下半が内傾、上半が外傾。	洗口状	ほぼ直立
底 面	ほぼ平坦	東側へゆるやかに下がる。	平坦
出土遺物	土師器壺145は埋土中部、坏I類破片1点は埋土下部から出土。	なし	なし
所属時期	埋土・形制・土器→平安時代	不明	形制・重複関係→平安時代
備 考	壁溝が一周。底面の東側約1/2は掘り方を伸う。		



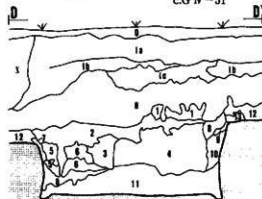
a.E IV-52



b.F V-51



c.G IV-51



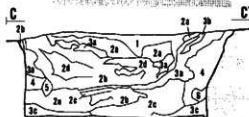
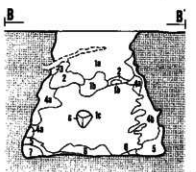
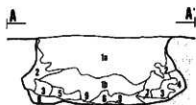
d.G IV-52

- 1a・1b. 黒色。
2. 黒褐色。
3. 黄褐色。火山灰。
4・5. 黒褐色。
6. 黒色。
7. 黒褐色。
8. 暗褐色。
9. 黒色。

- 1a. 黒色。炭化物・土壌片を含む。
1b. 黒色。炭化物を含む。
1c. 黒色。炭化物・土壌片・線を含む。
2. 黒褐色。
3. 明黄褐色。火山灰がマトリックス。
4a. 黒褐色。
4b. 黒褐色～黄褐色。
5. 黒褐色～黄褐色。
6. 黒褐色。
7. 黄褐色。粒状の細砂を含む。

1. 黒褐色。炭化物を僅かに含む。
2a. 黒褐色。
2b. 黒褐色～黄褐色。火山灰草履。
炭化物に含む。
2c. 黒褐色～黄褐色。炭化物を多く含む。
2d・2e. 黒褐色。
3a～3c. 黒色。灰白色碎石配列のクロボク。
4. 黒色。
5. 黒褐色。
6. 暗褐色。

- 0～II. 基本層序。
X. 磁土。
1. 黒褐色。
2. 黒褐色。黄褐色火山灰を含む。
3. 黒色。
4. 黒褐色。黄褐色火山灰を多く含む。
5・6. 暗褐色。
7. 黒色。
8・9. 黒色・黒褐色。
10. 黒色。
11. 黒褐色。火山灰の小塊を多く含む。
12. 黒褐色。
13. 黒褐色。炭化物を少量含む。



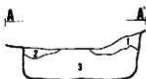
第62図 ビット実測図(2)

遺構名	HIV-52ビット	HIV-53ビット	HIV-55ビット
挿 図	遺構：第63図 c 遺物：第66図	遺構：第63図 d	遺構：第63図 e
図 版	遺構：34cd	遺構：34ef	遺構：35cd
検出状況 重複関係	旧←HIV-2 住居跡・HIV-51ビット		HIV-1 2 住居跡の床下に検出。
平 面 形	隅丸の不整長方形と推定	扇形に似た不整形	不整形円形
開口部径	165×190cm	150×170cm	90×118cm
深 さ	55～65cm	16～35cm	38～44cm (住居掘り方面から)
埋 土	黒褐色土・黒色土卓越。粒状～小塊状の灰白色浮石を全体に、また焼土粒・炭化物粒を主に上部に含む。	黒褐色土・黒色土が占める。粒状～小塊状の灰白色浮石が全体に散在する。→補足	大小の火山灰塊を含む褐色土
壁	直立	いくぶん外傾。北壁は強く外傾	直立～いくぶん外傾
底 面	平坦	北平は壁へ向かって高くなる。	平坦
出土遺物	環Ⅰ類146、土師器小型土器147のほか、土師器破片13点・環Ⅰ類破片7点が埋土上部から出土。	土師器Ⅰ類の破片を主に環Ⅰ類・Ⅱ類の破片95点が出土している。	なし
所属時期	埋土・形態・土層→平安時代	埋土・土器→平安時代	不明。HIV-1 2 住居跡(平安時代)と同時期またはそれ以前か？
備 考	壁溝が一周		

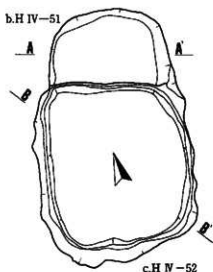
遺構名	HIV-56ビット	HIV-57ビット	HIV-58ビット
挿 図	遺構：第63図 f	遺構：第64図 a	遺構：第64図 c (平面図は作成していない。)
図 版	遺構：35ef	遺構：36ab	遺構：35 b
検出状況 重複関係	旧←HIV-57ビット。不明→HIV-1 2 住居跡。	新→HIV-1 2 住居跡・HIV-56ビット・HIV-103落し穴	新→HIV-1 2 住居跡
平 面 形	不整長方形	円形	不整方形か？ 調査区域外に出るため、詳細不明。
開口部径	70×125cm	(住居床面で) 150×155cm	215cm×不明
深 さ	51～55cm (住居掘り方面から)	(土層断面で) 92～101cm	31～45cm
埋 土	火山灰やⅦ層下部起湧の黄褐色土が卓越。	上部と下部はそれぞれ火山灰が覆占する。粒状～大塊状の灰白色浮石が全体に含まれる。	黒褐色・黒色土が卓越。灰白色浮石塊は上・下部に散在する。
壁	ほぼ直立	わずかに内傾～直立	直立～外傾
底 面	いくぶん凹凸がある。	大きな凹凸がある。	大きな凹凸がある。
出土遺物	土師器Ⅰ類の破片1点が埋土上部から出土。	土師器Ⅰ類破片14点、須恵器Ⅱ類の破片1点、縄文土器片2点が埋土から出土。	土師器Ⅰ類の破片1点が埋土から出土。
所属時期	不明。HIV-1 2 住居跡(平安時代)と同時期またはそれ以前か？	埋土・重複関係・出土遺物→平安時代	埋土・重複関係→平安時代
備 考			



a.G IV-53



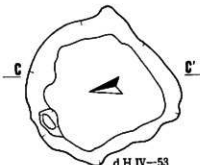
1. 黒色。
- 2・3. 黒褐色。褐色土の
小塊を金障に含む。



c.H IV-52



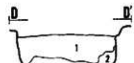
1. 灰褐色。粒状の灰白色礫石を多く含む。
粒状の焼土・炭化物を少量含む。
2. 黒褐色。粒状の灰白色礫石・焼土・炭化物を
多く含む。
3. 黒色。灰白色礫石の小塊を少量含む。
粒状の焼土・炭化物を少量含む。
4. 黒褐色。粒状の灰白色礫石を少量含む。
- 5・6. 黒褐色。
7. 暗褐色。
8. 黒色。灰白色礫石を僅かに、炭化物を多く含む。
9. 暗褐色。灰白色礫石を含む。
10. 黒褐色。粒状の灰白色礫石・炭化物を少量含む。
11. 黒褐色。炭化物を含む。
12. 黒褐色。灰白色礫石の小塊を含む。
火山灰の小塊を多く含む。
13. 黒褐色。粒状の灰白色礫石を僅かに含む。
14. 褐色。汚れ火山灰。



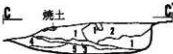
d.H IV-53



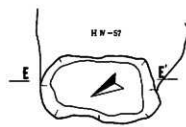
e.H IV-55



- 1・2. 褐色。火山灰塊を含む。



- 1・2. 黒褐色。灰白色礫石や粒状・
小塊状の焼土・炭化物を含む。
3. 黒色。炭化物を含む。
4. 黒色。灰白色礫石の小塊を含む。
5. 黒褐色。粒状の灰白色礫石を含む。



f.H IV-56



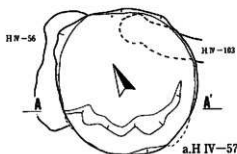
1. 黄褐色。
2. 褐色。
3. 明黄褐色。火山灰。
4. 黄褐色。
- 5a. 黄褐色。炭化物を少量含む。
- 5b. 黄褐色。



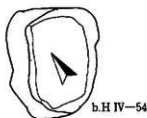
第63図 ピット実測図(3)

遺構名	HIV-60ピット	HIV-61ピット	HIV-54ピット
挿 図	遺構：第64図 d	遺構：第64図 e	遺構：第64図 b
図 版	遺構：36 f	遺構：36 c～e	遺構：35 a
検出状況 重複関係	大部分が調査区域外に出る。新→HIV-5 住居跡		HIV-2 住居跡の北隣に重複して検出。新旧は不明。
平 面 形	不明	不整円形	不整長方形に近い。
開口部径	不明	158×175cm	90×117cm
深 さ	72～82cm	35～40cm	48cm。住居掘り方面からは9cm
埋 土	黒褐色・黒色土が優占。最下部を占める10層に灰白色浮石塊が多い。	1・4層は黄褐色火山灰の小塊を含む。焼土層を覆う下部の6層は灰白色浮石を多く含む。	住居跡の調査時に検出されたため、最下部に灰白色浮石を少量含むことが確認できた以外は不明。
壁	ゆるやかな外傾。いくぶん凹凸	直立～外傾	直立。上部は外傾
底 面	不明	凹凸がある。	凹凸が著しい。
出土遺物	なし	土師器類Ⅰ類の破片9点、灰Ⅰ類の破片1点、縄文土器片2点が埋土から出土。	なし
所属時期	埴土・重複関係→平安時代	埴土・土器→平安時代	埴土→平安時代
備 考		現地性埴土が下部に形成されている。焼土ピット	→補足

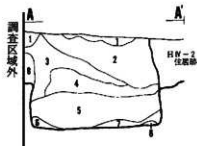
遺構名	IV-51ピット	IV-52ピット	IV-53ピット
挿 図	遺構：第65図 a	遺構：第65図 b	遺構：第65図 d
図 版	遺構：37ab	遺構：37cd	遺構：38 b
検出状況 重複関係			一部が調査区域外へ。新→IV-101層として、旧→IV-54ピット
平 面 形	楕円形に近い。	不整円形	楕円形状と推定
開口部径	170×205cm	104×110cm	190cm×不明
深 さ	18～32cm	20～32cm	24～29cm
埋 土	黒色土が優占。ほぼ全体に灰白色浮石を含む。	黒褐色土が卓越。大半を占める1層は黄褐色火山灰の小塊のほか火山灰塊を含むが、ともに少量。	重複のため部分的な顕微。黒褐色土が卓越し、中・下部には黄褐色火山灰の小塊を含む。
壁	外傾	外傾	わずかに外傾
底 面	西方へわずかに高くなって行く。	わずかに凹凸がある。	凹凸がある面まで掘り下げたが、掘り方埴土まで除去した可能性大
出土遺物	土師器類Ⅰ類22点、同Ⅱ類1点、灰Ⅰ類5点の破片が埴土から出土。	なし	土師器類Ⅰ類の破片5点が埴土から出土。
所属時期	埴土・遺物→平安時代	埴土→平安時代	埴土・形埴→平安時代
備 考	少量の木炭が底面直上に分布。		



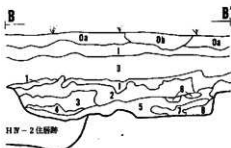
a.H IV-57



b.H IV-54



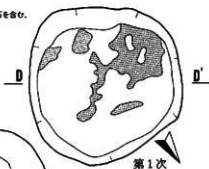
1. 黒褐色。粒状・塊状の灰白色厚石を含む。炭化物粒を少量含む。
2. 暗褐色。粒状の灰白色厚石を含む。炭化物多い。
- 3・4. 黒褐色。粒状の灰白色厚石を含む。炭化物を少量含む。
5. におい黄褐色。灰白色厚石を少量含む。
6. 黄褐色。
7. 黒褐色。炭化物粒を少量含む。
8. 黒褐色。粒状の灰白色厚石を少量含む。



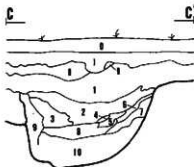
H IV-2 住居跡

- 0~II. 基本層序。
1. 黒褐色。灰白色厚石を少量含む。
 2. 黒色。
 3. 黒褐色。
 - 4・5. 黒褐色。灰白色厚石を含む。
 6. 黒色。
 7. 褐色。
 8. 黒褐色。

c.H IV-58

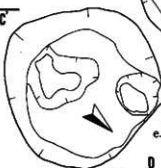


d.H IV-60



- 0~II. 基本層序。
1. 黒褐色。灰白色厚石を少量含む。
 2. 黒色。炭化物粒を少量含む。
 3. 褐色。粒状の灰白色厚石を少量含む。
 4. 暗黄褐色。火山灰層を含む。
 5. 黒色。
 6. 黒褐色。
 7. 黒褐色。粒状の灰白色厚石を少量含む。
 - 8・9. 黒褐色。
 10. 黒褐色。灰白色厚石を含む。

第2次



e.H IV-61



焼土

1. 黒色。黄褐色火山灰の小塊を含む。
2. 黒色。
3. 黒褐色。
4. 黒色。黄褐色火山灰をわずかに含む。
5. 黒色。
6. 黒褐色。灰白色厚石を多く含む。焼土を含む。
7. 黒色。



第64図 ビット実測図(4)

遺構名	I IV-54ピット	OIV-51ピット
障 図	遺構：第65図 c	遺構：第65図 e
図 版	遺構：38ab	遺構：37ef
検出状況 重複関係	東側約1/3が調査区域外へ。新→I IV-53ピット・I IV-101番とし穴	
平 面 形	隅丸長方形	円形
開口部径	136×164cm	126×136cm
深 さ	45～58cm	(土層断面で) 80～86cm
埋 土	黒褐色・黒色土で構成。2層は黄 褐色火山灰の小塊を少量含む。	上・中部の5・6 a層は灰白色厚 石の小塊を少量含む。半分を占め る8 a層は火山灰塊を多く含む。
壁	ほぼ直立	わずかに内傾
底 面	ほぼ平坦	平坦
出土遺物	土師器壺1類の破片11点が埋土か ら出土。	なし
所属時期	埋土・形態・土器⇨平安時代	埋土⇨平安時代
備 考	壁溝がめぐる。掘り方を伴う。	

説明を加えている。重複する遺構との関係は、新→・旧←・不明⇨のように、ピットを基準にして表わしている。

補足説明

〈遺構名〉HV-59は欠番。

〈検出状況・重複関係〉

HV-51ピット：本遺構に先行するHV-52ピットを先に掘りあげてしまったため、平面形や規模に不明部分が生じている。

HV-56ピット：HV-2住居跡の床を掘り下げた段階で検出したもので、貼り床の有無は確認できなかった。したがって、同住居跡との具体的な関係は不明である。

〈埋土〉

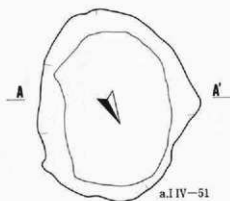
HV-53ピット：炭化物が卓越する3層は北壁から底面中央付近の埋土下部に分布する。

〈出土遺物〉

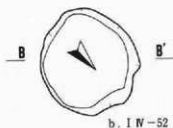
DV-51ピット：縄文土器140は押し潰された横倒しの状態で北東隅の底面に密着して出土した。本遺構に共伴するものである。

〈備考〉

FV-51ピット：副穴P1（径19×25cm・深さ12cm）は底面中央からわずかに西寄りにある。

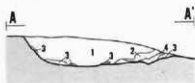


a.IV-51

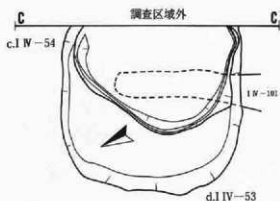


b.IV-52

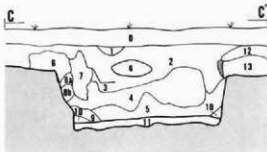
1. 黒褐色。黄褐色火山灰の小塊を含む。
2. 黒褐色。灰白色浮石を多く含む。
3. 暗褐色。
4. 黒色。



1. 黒色。灰白色浮石を少量含む。
2. 黒色。灰白色浮石を多く含む。
3. 暗褐色。
4. 黒色。



d.IV-53



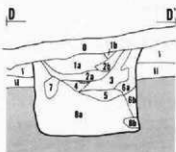
0. 基本層序。
1. 黒色。
2. 黒褐色。黄褐色火山灰の小塊を少量含む。
3. 黒褐色。炭化物粒を少量含む。
4. 黒褐色。炭化物粒と流土の小塊を含む。
5. 黒色。炭化物粒を少量含む。
6. 黒色。
- 7~8b. 黒褐色。
9. 黒色。
10. 黒褐色。
11. 黄褐色。細り方堆土。
12. 黒色。
13. 黒褐色。



e.OIV-51

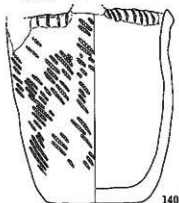
- 0・V・VI. 基本層序。
- 1a~4. 黒褐色。
5. 黒色。
- 6a. 黒褐色。
- 6b・7. 黒褐色。
- 8a・8b. 暗褐色。

灰白色浮石の小塊を少量含む。

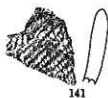


第65図 ピット実測図(5)

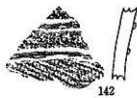
— (15.4)・7.8



140



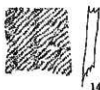
141



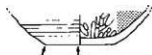
142



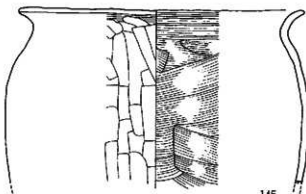
144



143



146



145



147

No	地点・層位	種類・形状	外				内				計測値: cm	分級	図版
			口縁部	胴部	底	部	口一底	黒色粘層	口縁	器底	底径		
140	III-V-52, 埋土上縁	杯	—	口タロ底	ヘラケズリ		ヘラミガキ	〇	—	(2.4)	5.6	IC5	

No	地点・層位	種類・形状	外				内				計測値: cm	分級	図版
			口縁部	胴部	底	部	口縁部	胴部	底	部			
145	G IV-52, 埋土	土師器	ヨコナデ	ヘラケズリ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	22.8	(13.9)	—	223	
147	H IV-52, 埋土上縁	ミニチュア	ヘラケズリ	#	—	ナデ	ナデ	—	(2.3)	(4.8)	—	土師	

No	地点・層位	種類・形状	器形 / 外面	内面	土分	分類	考	図版
140	D IV-51, 表面	神鉢	口一底	突起欠失。口唇部肥厚周目文	ケズリ	田野3型		206
141	D IV-51, 埋土上縁	#	口縁部	台形状の突起。口唇部低い縁等。LR	ミガキ	#		
142	#	#	胴部	縞い軟土層を貼り付ける。RL	#	#		206
143	F V-51, 埋土下縁	#	#	RL	#	#		
144	E IV-52, 埋土上縁	#	口縁部	平行波線文・ボタン状貼付文・藤巻文・LR	ナデ	IV群8型		

$$S = \frac{1}{4}(\text{米}) \cdot \frac{1}{4}$$

第66図 ピット出土遺物(1)

HIV-61ピット：焼土は底面中央から西側半分を主にした範囲の底面直上に広がる。不整形で、層厚は最大1.5cmと薄い。その上にはあまり多くない量の木炭や草本類を伴っている。

4. 落とし穴

溝状の落とし穴は形状を記号化している。これは、開口部の平面形をⅠ型とⅡ型、縦断面形をA～D、横断面形を1～3に分類し、その組み合わせから溝ⅠA1のように表わしたものである（「まとめ」の項を参照）。なお、→補足とあるのは次に一括して説明を加えている。重複する遺構との関係は、新→・旧←・不明→のように、落とし穴を基準にして表わしている。

補足説明

〈DN-108落とし穴〉（遺構：第61図a）

DN-51ピットと重複し、西端を含む長さ15cmが残るだけである。大部分を削刺され、底面がわずかに確認できる。配置的にはDN-101・102と一群を構成するものであろう。なおDN-51ピットとの新旧関係は不明である。

〈検出状況・重複関係〉

FN-109落とし穴：底部の東端がFV-101落とし穴の埋土中にあることを確認している。

〈形状〉

FV-101落とし穴：横断面の形状は、下半がいちじるしくオーバーハングするのに対し、上半は外傾している。しかし下半は、埋土と“地山”の識別が困難であったことを考慮に入れると、部分的に掘りすぎでしまっている可能性が高い。

5. 周 溝

HV-201 方形周溝

遺構（第75図、図版51）

〈検出状況・重複関係〉北部は重複するHV-4住居跡（平安時代）に切られているほか、現代における削刺を受け、消失している。東隅はHV-5住居跡（平安時代）に切られている。

〈平面形〉隅丸方形と推定

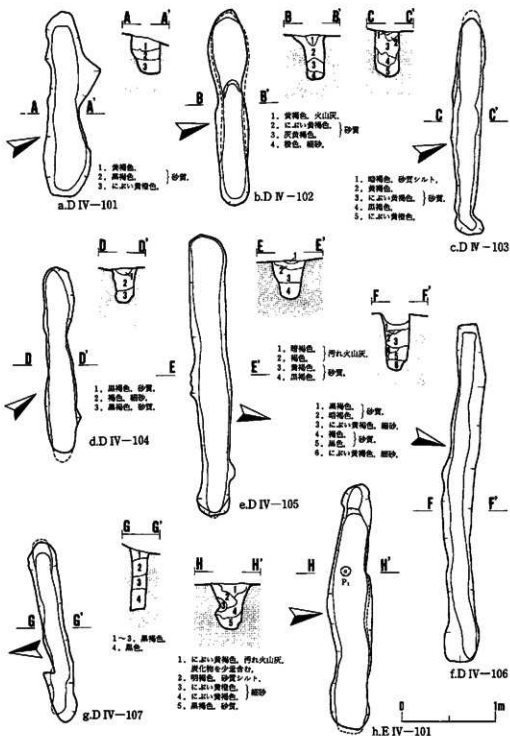
〈埋土〉黒褐色土のほか、暗褐色土などで構成される。上半の黒褐色土には灰白色浮土の大小塊が多く含まれている。

〈規模〉北東～南西方向は5.3mである。北西～南東方向は5.6mが残存する。〈幅〉50～80cmで、70cm土の部分が多い。〈深さ〉30～38cmで、HV-4住居跡に近い部分は一部が20cmと浅くなる。

〈断面の形状〉ほぼ長方形状であるが、HV-4住居跡に近い部分は不規則で、底面も凹凸

遺構名	DⅡ-101 落とし穴	DⅡ-102 落とし穴	DⅡ-103 落とし穴
挿 図	遺構：第67図 a	遺構：第67図 b	遺構：第67図 c
図 版	遺構：38 c・39 b	遺構：38 d・39 c	遺構：38 e・39 d
検出状況 重複関係	削刺を受け、下部のみ残存。	全体的な削刺を受け、下半が残存。	全体的な削刺を受け、下半が残存。 東側の削刺が著しい。
形 状	溝 I A 1	溝 I C 1	溝 I 1。東端は底部のみ残る。 西端の壁は内湾。
規 模	開口部 34～50×197 cm	22～40×210 cm	17～32×230 cm
	底部 22～33×177 cm	23～40×200 cm	12～23×234 cm
深 さ	23～42 cm	32～60 cm	8～50 cm
埋 土	砂質の黄褐色土～黒褐色土。	にぶい黄褐色ほかの砂質土が卓越。	黄褐色ほかの砂質土や砂質シルトが構成。
底 面	西端へわずかに傾斜して上がる。	中央部低く、両端へ徐々に傾斜して上がる。	
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I S 2	I S 1	I M
備 考	DⅡ-108・102と一群を構成。②	DⅡ-101・108と一群を構成。②	

遺構名	DⅡ-104 落とし穴	DⅡ-105 落とし穴	DⅡ-106 落とし穴
挿 図	遺構：第67図 d	遺構：第67図 e	遺構：第67図 f
図 版	遺構：39 a・e	遺構：39 f g	遺構：39 h・40 a
検出状況 重複関係	削刺を受け、下部のみ残存。	削刺を受け、下部のみ残存。	削刺を受け、下半が残存。
形 状	溝 I C 1	溝 I C 1	溝 I B 1。ゆるやかな弧状。両端は壁半ばがややオーバーハングする。
規 模	開口部 23～34×197 cm	29～37×297 cm	27～37×360 cm
	底部 19～28×205 cm	20～30×300 cm	11～20×347 cm
深 さ	33～40 cm	28～41 cm	56～60 cm
埋 土	褐色・黒褐色の砂・砂質土。	砂質土が卓越。	細砂と砂質土。
底 面			ほぼ平らであるが、両端がわずかに上がる。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	縄文土器胴部破片 1 点が埋土下部から出土。	なし	なし
分 類	I S 1	I M	I L 1
備 考			

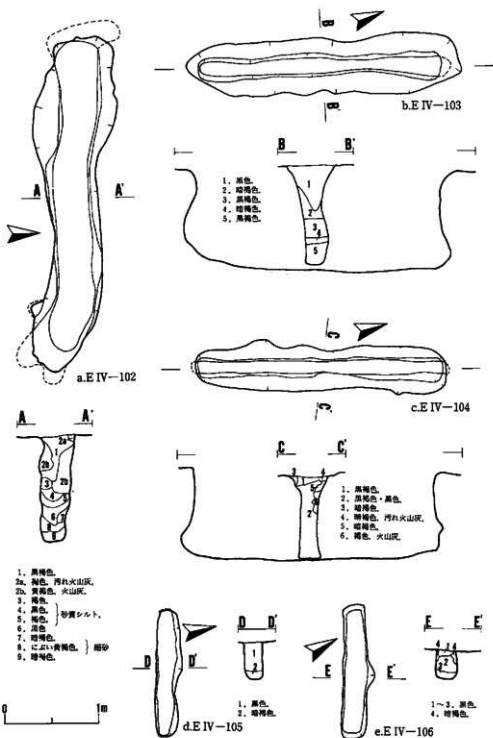


第67図 落とし穴実測図(1)

遺構名	DN-107 落とし穴	EN-101 落とし穴	EN-102 落とし穴
挿 図	遺構：第67図 g	遺構：第67図 h	遺構：第68図 a
図 版	遺構：40 b c	遺構：40 d・f	遺構：40 e・g
検出状況 重複関係	上部は削刺されている可能性大。 西端寄りほぼ最下部の残存。	削刺を受け、下部のみ残存。	
形 状	溝 I C 1。東端がわずかに湾曲。	溝 I D。蛇行状。側壁は凹凸があるものの、1に近い形状。	溝 I D 1～2。蛇行状。両端の壁は内湾。
規 模	開口部	25×195 cm	29～48×260 cm
	底部	13～17×175 cm	50～87×360 cm
深 さ	63～76 cm	28～45×265 cm	32～45×390 cm
埋 土	VI層起源と推定される黒褐色土と黒色土。	細砂と砂質シルトが卓越。	上部は黒褐色土とVII層起源、中部は砂質シルト、下部は細砂。
底 面	西端へ向かってゆるやかに傾斜して上がる。		両端へ向かい次第にあがって行く。
副 穴	なし	P 1 (径10cm・深さ19cm) が中央部から西寄りにある。	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I S 2	I M	I L 1
備 考			

遺構名	EN-103 落とし穴	EN-104 落とし穴	EN-105 落とし穴
挿 図	遺構：第68図 b	遺構：第68図 c	遺構：第68図 d
図 版	遺構：41 a・c	遺構：41 b・f	遺構：41 d・g
検出状況 重複関係	残存状態良好。	残存状態良好。	削刺を受け、下部が残存。不明→EN-2・4・5住居跡。
形 状	溝 I D 2。両端の壁は内湾。	溝 I D 2。両端の壁は下部が内湾。	溝 I B 1。両端がやや角張る。
規 模	開口部	50～63×290 cm	40～50×265 cm
	底部	11～20×270 cm	10～23×275 cm
深 さ	104～110 cm	10～21×136 cm	37～42 cm
埋 土	暗褐色・黒褐色・黒色のシルト質土。	黒褐色土・黒色土が卓越。	黒色土と暗褐色土の2層。
底 面	南端がやや上がる。	ほぼ平らである。	
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	縄文土器片2点が埋土上部から出土。1点は鉄線土器。
分 類	I M	I M	I S 2
備 考	EN-104と対。③	EN-103と対。⑤	④

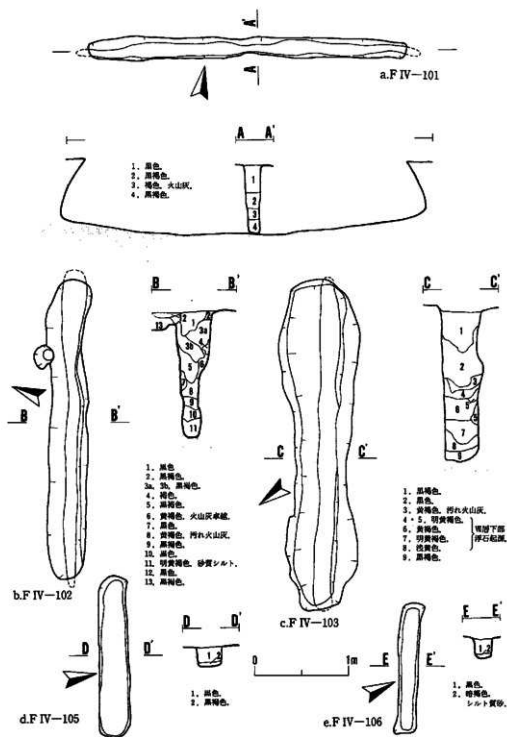
※ DN-108は補足説明



第68図 落とし穴実測図(2)

遺構名	FN-106 落とし穴	FN-101 落とし穴	FN-102 落とし穴
挿 図	遺構：第68図 e	遺構：第69図 a 遺物：第74図	遺構：第69図 b 遺物：第74図
図 版	遺構：41 e・42 a	遺構：42 b・e 遺物：211	遺構：42 c・h
検出状況 重複関係	削刻を受け、下部のみ残存。	削刻を受け、下半が残存。	
形 状	溝 I B 1。両端がやや角張る。	溝 I D 1。両端の壁は内傾。	溝 I D 2～3。東半はわずかに湾曲。両端の壁は内傾。
規 模	開口部 25×145 cm	20×348 cm	36×50×319 cm
	底部 19×132 cm	8×17×367 cm	8×25×340 cm
深 さ	27～39 cm	64～80 cm	118～135 cm
埋 土	黒色土が卓越。	黒褐色土・黒色土が卓越。	汚れ火山灰が中部の一部を占めるほかは黒褐色土・黒色土卓越。
底 面	東端から西端へ向かいゆるやかに傾斜して上がって行く。	中央部から両端へ向かってゆるやかに上がって行く。	ほぼ平らである。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	不定形石器154と使用痕のある破片1点・縄文土器片4点。	縄文土器片は148のほかは1点が埋土中部から出土。
分 類	I S 2	I L 1	I L 1
備 考	④	FN-107と対。⑤	

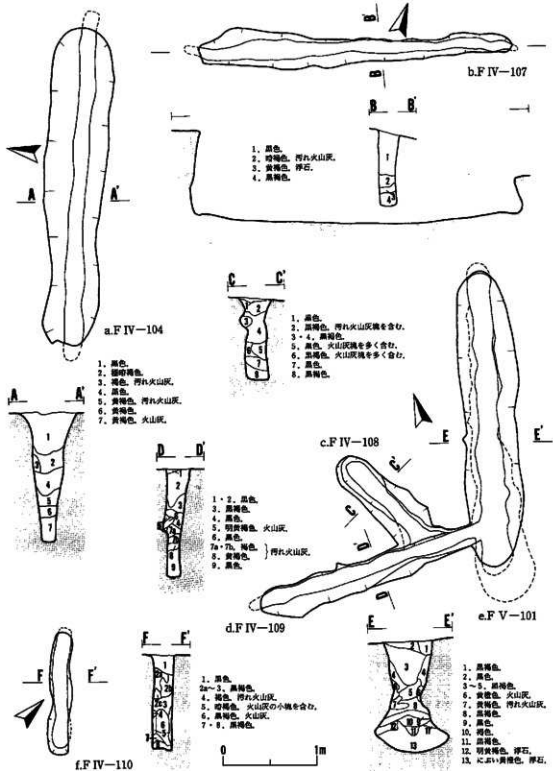
遺構名	FN-103 落とし穴	FN-105 落とし穴	FN-106 落とし穴
挿 図	遺構：第69図 c 遺物：第74図	遺構：第69図 d	遺構：第69図 e
図 版	遺構：42 d・43 a 遺物：206	遺構：42 g・43 d	遺構：43 c・e
検出状況 重複関係		削刻を受け、下部のみ残存。	削刻を受け、下部のみ残存。
形 状	溝 I D 1・3。中央部の壁は直立するが、両端へいくにつれて外傾。	溝 I B 1。両端がやや角張る。	溝 I B 1。両端がやや角張る。
規 模	開口部 52～85×350 cm	27～34×172 cm	21×140 cm
	底部 15～20×355 cm	20～31×166 cm	16×130 cm
深 さ	167～184 cm	22～26 cm	25～32 cm
埋 土	上半は黒褐色土・黒色土。下半は底層下部起源の浮石が卓越。	黒褐色土と黒色土。	黒色土と黒褐色土。
底 面	ゆるやかな凹凸がある。	ほぼ平らである。	東端から西端へ向かってわずかに傾斜して上がって行く。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	図示例2点のほかは、縄文土器片8点が埋土から出土。	なし	なし
分 類	I L 1	I S 2	I S 2
備 考		⑤	⑤



第69図 落とし穴実測図(3)

遺構名	FN-104 落とし穴	FN-107 落とし穴	FN-108 落とし穴
採 取	遺構：第70図a 遺物：第74図	遺構：第70図b 遺物：第74図	遺構：第70図c
図 版	遺構：42 f・43 b	遺構：43 f・44 b	遺構：43 g・44 c
検出状況 重複関係		削刺を受け、東側約1/2は上半を失っている。	不明→FN-109落とし穴。南端はFN-109の側壁に残る。
形 状	溝I D 2。両端の壁は内傾～内湾。	溝I D 1・3。削刺を受けた部分の壁は直立。ほかはやや外傾。	溝I。北端の壁はほぼ直立。側壁は直立や上部外傾の1・2。
規 模	開口部 50～67×338 cm	20～40×333 cm	38～50×145 cm
横 底	16×375 cm	7～22×357 cm	14～20×135 cm
深 さ	130～146 cm	81～98 cm	87 cm
埋 土	上半は黒色土・極暗褐色土、下半は汚れ火山灰・火山灰。	上半は黒色土、下半は汚れ火山灰や浮石・黒褐色土。	黒褐色土と黒色の土層群で構成。上部と中・下部に火山灰塊を含む。
底 面	ほぼ平らである。	両端寄りわずかに上がっている。	ほぼ平らである。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	図示例2点のほかに、縄文土器片3点が埋土上部から出土。	図示例1点のほかに、縄文土器片1点が埋土上部から出土。	繊維を少量含む縄文土器片1点が埋土上部から出土。
分 類	I L 1	I L 1	I S 2
備 考		FN-101と対。⑤	FN-110・111と一帯を構成か。

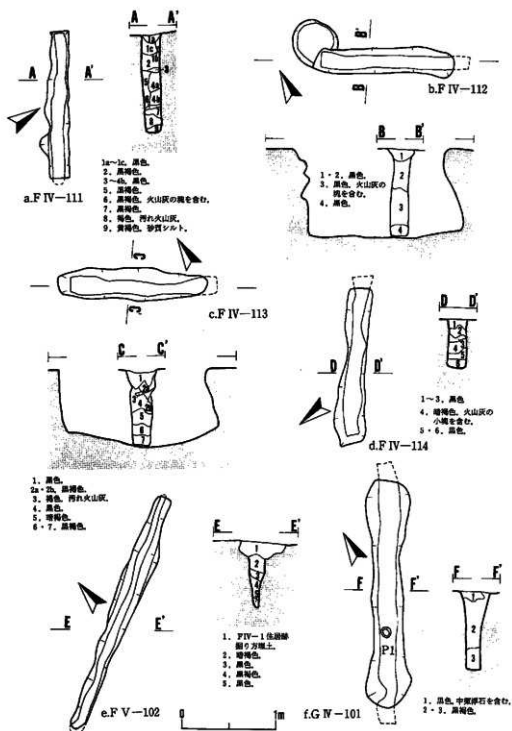
遺構名	FN-109 落とし穴	FN-110 落とし穴	FN-101 落とし穴
採 取	遺構：第70図d 遺物：第74図	遺構：第70図f	遺構：第70図e
図 版	遺構：44 a・f 遺物：211	遺構：44 d・g	遺構：46 a・b
検出状況 重複関係	新→FN-101落とし穴。不明→FN-108落とし穴。	旧→FN-1住居跡。重複する南東側約1/2は上半を失う。	旧→FN-109落とし穴
形 状	溝I。両端の壁は内傾。側壁はほぼ直立。南壁の上部はわずかに外傾。	溝I C 1	溝I C。北端の壁は内湾したあと直立。南端の壁は内傾。→補足。
規 模	開口部 30～38×(推定)265 cm±	20×132 cm	52～63×312 cm
横 底	12～17 cm×不明	15～20×130 cm	25～80×360 cm
深 さ	115～123 cm	109 cm	100～120 cm
埋 土	汚れ火山灰が中・下部を占めるほかは黒色土が卓越。	黒褐色土が卓越。	火山灰や汚れ火山灰が中部、重層状の浮石が下部を占めるほか黒褐色土が卓越。
底 面	ほぼ平らである。	南東端寄りの部分がいくぶん高い。	北半にくらべると南半がやや高い。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	155の石匙のほか、繊維を含む縄文土器片1点が出土。	なし	なし
分 類	(IM)	I S 2	I S 2
備 考		FN-108・FN-111と一帯を構成か。	



第70図 落とし穴実測図(4)

遺構名	FW-111 落とし穴	FW-112 落とし穴	FW-113 落とし穴
採 図	遺構：第71図 a	遺構：第71図 b	遺構：第71図 c
図 版	遺構：44 e・45 a	遺構：45 b c	遺構：45 d・f
検出状況 重複関係	旧←FW-1 住居跡。重複する部分は上半を失っている。	北西端上部は小ピットにわずかに切られている。	削剝を受け、上部を失っている。
形 状	溝 I C 1。両端が角張る。南東端の壁はわずかに内傾する。	溝 I C 1。ただ壁上部はわずかに外傾。北西端の壁は凹凸がある。	溝 I C 1。南東端は角張る。
規 模	開口部 21×156 cm	28×148 cm	25×36×145 cm
横 底部	12×162 cm	15×157 cm	10×21×156 cm
深 さ	103～115 cm	89～95 cm	66～84 cm
埋 土	黒褐色土・黒色土が卓越。	上半の黒色土はⅤ層起源。	黒褐色土・黒色土が卓越。
底 面	中央部付近に比べると、両端寄りがわずかに高くなる。	南東端側ははや高くなる。	中央部がくぼみ、両端へ向かってあがって行く。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	IS 2	IS 2	IS 2
備 考	FW-108・110と一群を構成か。	FW-113と対。	FW-112と対。

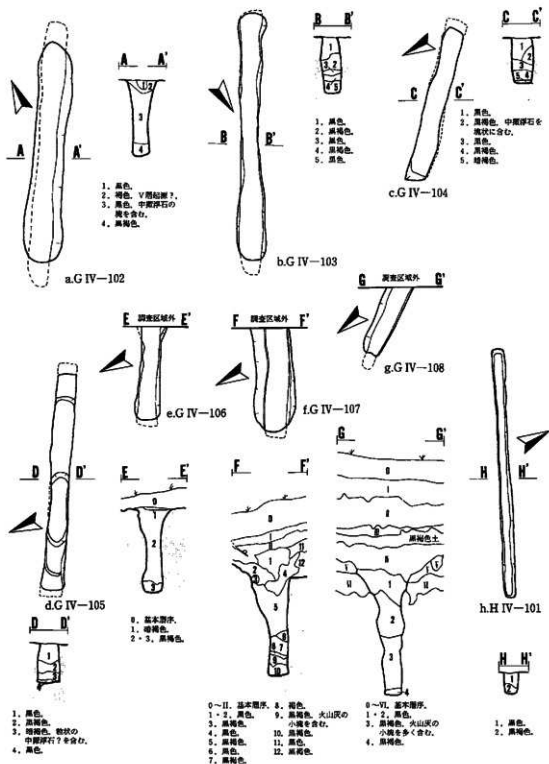
遺構名	FW-114 落とし穴	FW-102 落とし穴	GN-101 落とし穴
採 図	遺構：第71図 d	遺構：第71図 e	遺構：第71図 f
図 版	遺構：45 e・g	遺構：46 c	遺構：46 d・f
検出状況 重複関係	削剝を受け、上部を失っている。	旧←FW-1 住居跡。上半は削剝され、全彩が住居跡の床面下。	重複するGN-2 住居跡（縄文時代）の埋土を切って構築。
形 状	溝 I C 1。両端は角張っている。	溝 I D 3。両端の壁は内傾する。	溝 I D 2。側壁上部の外傾はゆるやかである。両端の壁は内傾。
規 模	開口部 20×32×165 cm	15×30×265 cm	27×47×242 cm
横 底部	13×20×168 cm	5×11×273 cm	16×24×280 cm
深 さ	50～59 cm	52～61 cm	79～83 cm
埋 土	黒色土が卓越。	黄褐色～黒褐色の土層群で構成される。	黒色土と黒褐色土で構成される。Ⅴ層土が部分的に認められる。
底 面	ほぼ平らである。	ほぼ平らである。	ほぼ平らである。
副 穴	なし	なし	P 1（径・深さとも10cm）が中央部から南西寄りにある。
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	IS 2	IM	IM
備 考	GN-104と対。	FW-102と対。	GN-102・103と一群を構成。



第71図 落とし穴実測図(5)

遺構名	GⅡ-102 墓とし穴	GⅡ-103 墓とし穴	GⅡ-104 墓とし穴
挿 入	遺構：第72図 a	遺構：第72図 b	遺構：第72図 c
図 版	遺構：46 e・g	遺構：47 a・c	遺構：47 b・f
検出状況 重複関係	重複するGⅡ-2 住居跡（縄文時代）を埋土から切って観察。	削刺を受け、上部を失っている。	削刺を受け、下半部が残存。
形 状	溝 I D 2。側壁上半の外傾はゆるやかである。両端の壁は外傾。	溝 I C 1。北東端の壁は内傾。	溝 I C 1。両端が角張る。
規 模	開口部 30×45×235 cm	19×32×260 cm	18×24×170 cm
横 断 面	底部 22×282 cm	15×25×280 cm	18×24×170 cm
深 さ	73～86 cm	54～66 cm	34～57 cm
埋 土	2 層の褐色土はⅤ層が起源である。	黒色土と黒褐色土で構成される。	黒色土と黒褐色土が卓越。
底 面	ほぼ平らである。	ほぼ平らである。	北西側は段差を伴って高くなって行く。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I M	I M	I S 2
備 考	GⅡ-101・103と一群を構成。	GⅡ-101・102と一群を構成。	FⅡ-114と対。

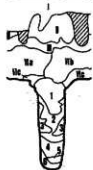
遺構名	GⅡ-105 墓とし穴	GⅡ-106 墓とし穴	GⅡ-107 墓とし穴
挿 入	遺構：第72図 d	遺構：第72図 e	遺構：第72図 f
図 版	遺構：47 d e	遺構：47 g・48 a	遺構：48 b c
検出状況 重複関係	削刺を受け、下部が残存。	東側は調査区域外にでる。また削刺を受けて上半を失う。	東側は調査区域外にでる。また削刺を受けて上半を失う。
形 状	溝 I D 1。両端は角張る。	溝 I 2。北西端は角張り、その部分の壁は内傾する。	溝 I 2。北西端は角張り、その部分の壁は内傾する。
規 模	開口部 23×230 cm	100 cm以上×21～32 cm	110 cm以上×43 cm
横 断 面	底部 15×25×248 cm	105 cm以上×15～25 cm	115 cm以上×23 cm
深 さ	28～40 cm	86 cm	107 cm
埋 土	黒色土・黒褐色土が卓越。3 層はⅤ層起源である。	黒褐色土が卓越	黒色土と黒褐色土が卓越。
底 面	中央部からやや西側が低く、両端へは低い段差を伴いながら上がって行く。	両端から中央部方向へやや急傾斜で下がって行く。	南西端からやや急傾斜で下がったあとはほぼ平らである。
副 穴	なし	不明	不明
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I M	—	—
備 考			



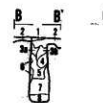
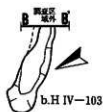
第72図 落とし穴実測図(6)

遺構名	GN-108 落とし穴	HN-101 落とし穴	HN-102 落とし穴
坪 図	遺構：第72図 g	遺構：第72図 h	遺構：第73図 a
図 版	遺構：48 d e	遺構：48 f・49 a	遺構：48 g h
検出状況 重複関係	南側の大部分が調査区域外へでる。V層を切っている。	削割を受け、最下部が残存。	大部分が調査区域外にあるため詳細は不明である。
形 状	溝 I 2。北端は角張り、その部分の壁は内傾する。	溝 I B 1。	溝 I。北西端の壁はわずかに内傾する。側壁はほぼ直立する。
規 模 開口部	88 cm以上×54 cm	12×265 cm	35 cm×不明
模 底部	105 cm以上×14~18 cm	7×257 cm	30 cm×不明
深 さ	91~98 cm	25 cm	78 cm
埋 土	黒色と黒褐色の土層群で構成される。	黒色土と黒褐色土が認められる。	黄褐色～黒色の土層群で構成される。
底 面	北端部がやや高いほかは平らである。	ほぼ平らである。	詳細は不明である。
副 穴	不明	なし	不明
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	—	I M	—
備 考			

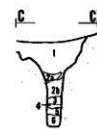
遺構名	HN-103 落とし穴	HN-104 落とし穴	HN-105 落とし穴
坪 図	遺構：第73図 b	遺構：第73図 c	遺構：第73図 d
図 版	遺構：49 b c	遺構：49 d e	遺構：49 f g
検出状況 重複関係	大半が調査区域外へでることや、HN-2住居跡・HN-57ピットに切られ、残存状態は不良。	大部分がHN-2・3住居跡の床面下に存在する。	大半が調査区域外へでることや、HN-3住居跡に切られ、残存状態は不良。
形 状	溝 I 1。詳細は不明である	溝 I D 3。北西壁にくらべると南東壁の傾きは小さい。	溝 I 3。詳細は不明である。
規 模 開口部	95 cm以上×22 cm	27~50×343 cm	30 cm×不明
模 底部	12~20×22 cm	10~17×350 cm	20 cm×不明
深 さ	66 cm	120 cm	108 cm
埋 土	黒色と黒褐色の土層群で構成される。	上半は火山灰、下半は褐色土と黒色土で構成される。	黄褐色～黒色の多くの土層群で構成される。
底 面	北西端から中央部方向へゆるやかに傾斜して下がる。	ほぼ平らである。	北西端寄りの部分がわずかに高くなる。
副 穴	不明	なし	不明
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	—	I L 1	—
備 考			



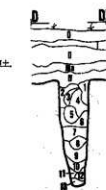
- 0~VI. 基本階序.
1. 黒色.
2. 黒褐色.
3. 褐色.
4. 黒褐色.
5. 黄褐色.
6. 暗褐色.



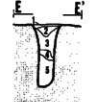
1. HIV-2 住居跡残り方壇土.
2. HIV-2 住居跡残り方壇土.
3a・3b. 黒褐色.
4. 黒色.
5・6. 黒褐色.
7. 褐色.
8. 黒褐色.



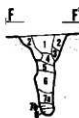
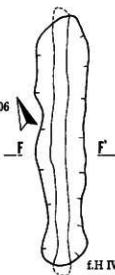
1. HIV-2 住居跡残り方壇土.
2a・2b. 黄褐色. 火山灰.
3. 暗褐色.
4・5. 褐色.
6. 黒色.



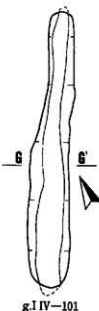
- 0~IV. 基本階序.
1. 黒色.
2・3. 黒褐色.
4. 黒色.
5~7. 黒褐色.
8. 暗褐色.
9. 褐色. 塊状の火山灰を含む.
10・11. 黒褐色. 塊状の火山灰を含む.
12. 黄褐色. 火山灰.
13. 黒褐色.



1. HIV-5 住居跡残り床.
2・3. 黒褐色.
4. 黄褐色.
5. 黒褐色.



1. 黒色.
2. 暗褐色.
3・4. 黒褐色.
5. 暗褐色.
6. 黒色.
7a. 黒褐色.
7b. 黒色.
8. 明黄褐色. 火山灰.



1. 黒色.
2. 黒褐色.
3. 黒色.
4. 明褐色. 火山灰.
5a・5b. 黒褐色.
6. 黒色.
7・8. 黒褐色.
9a・9b. 黄褐色.
汚れた火山灰.
10. 黒色.

第73図 落とし穴実測図(7)

遺構名	HN-106 溝とし穴	HN-107 溝とし穴	IN-101 溝とし穴
詳細図	遺構：第73図 e	遺構：第73図 f	遺構：第73図 g
図 版	遺構：50 a b	遺構：50 c・e	遺構：50 d・f
検出状況 重複関係	HN-5 住居跡の貼り床下に検出されたとともに大部分が調査区域外へでる。		北側約1/2は重複するHN-53・54ピットに上半を切られている。
形 状	溝 I 1。南西端はわずかに内傾。	溝 I D 2。両端の壁は、南端が内傾、北端は凹凸があって不規則。	溝 I D 3。わずかに起伏になり、両端の壁は内傾する。
規 模	開口部 28 cm×不明	35～55×270 cm	42×295 cm
	底部 14 cm×不明	11～17×285 cm	17～26×307 cm
深 さ	71 cm	86 cm	132 cm
埋 土	黒褐色土が卓越。	暗褐色～黒色の土層群が大部分を占め、最下部は火山灰層の薄層である。	黒色・黒褐色の多くの土層群が占めるが、火山灰と汚れ火山灰が中・下部の一部にみられる。
底 面	ほぼ平らである。	ほぼ平らである。	ほぼ平らである。
副 穴	不明	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	—	IM	IM
備 考			

がはげしい。

〈底面〉小凹凸が全体的に見られる。

遺物

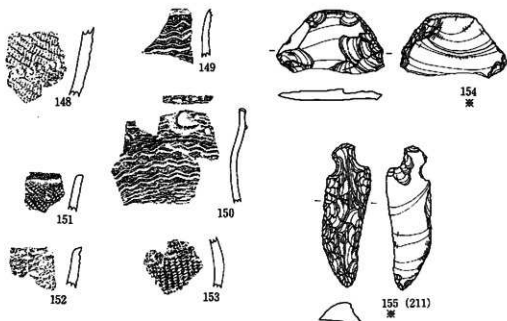
剥片石器 1 点が埋土から出土しただけである。

まとめと遺構の時期

埋土の状況と遺構の形態から平安時代Ⅱ群に分類できる。本遺構を切っているHN-4・5の両住居跡との関係でも矛盾しない。

6. 焼土遺構

6 基の焼土遺構が検出された。それらは検出面において確認された現地性焼土で、上部構造や付属施設を伴わない。分布はEⅡ区とFⅡ区の南北約30 mの範囲内に限られている。遺物を共伴しないことや層位的な裏付けがないことから所属時期は不明である。また性格についても分からない。次ページに一覧表を示すが、実測図・写真の掲載は省略している。



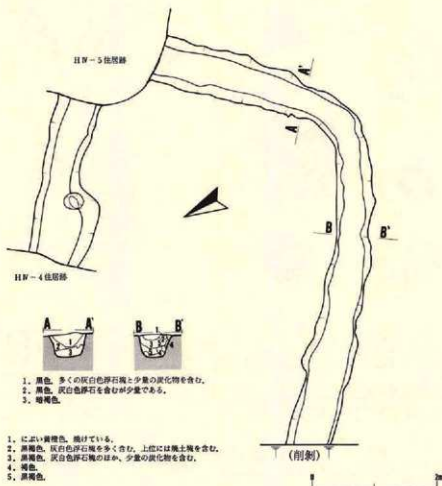
No.	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分製	備考	図録
148	FIV-102, 壇土上部	碎片	胴部	RL (O形多糸)	縦線直	横線多量	目野10型		
149	FIV-103, 壇土	鉢	#	縦線押圧直・波状沈線文	ミゴキ		目野3型	150と同一個体。	206
150	#	#	口縁部	波状口縁。粘土類貼付文・不整跡点文・波状沈線文	#		#	149と同一個体。	206
151	FIV-104, 壇土上部	碎片	#	狭い折り返し状口縁・LR	#		IVB13型		
152	#	#	#	波状口縁。原形不明	#	横線多い	目野10型		
153	FIV-107, #	#	胴部	RL	#	横線多量	#		

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大): mm	長さ	幅	厚さ	重量g	石材名	特徴・備考	図録
154	FIV-101, 壇土上部	不定形石片	(23)	67	6	(19.3)	瑠璃瓦岩。De 3	#	5. 先端部欠。二縁辺に細部調整	211
155	FIV-109, #	縦砂石片	77	24	11	21.05	#	#		211

$$S = \frac{1}{3}(\text{※}) \cdot \frac{1}{3}$$

第74図 落とし穴出土遺物(1)

No.	遺物名	検出グリッド	検出層位	平面形	規模 cm	型厚 cm	備考
1	EIV-151	EIV j 7	VI層	不整形	25×38	不明	
2	FIV-151	FIV f 7	VI層	不整形	26×35	7	
3	FIV-152	FIV h 7	VI層	不整形	25×28	4	FIV-152・FIV-153は間隔が50cm±と接近している。
4	FIV-153	FIV h 7	VI層	不整形	20×31	3	
5	FIV-154	FIV h 8	VI層	不整形	65×65	6	
6	FIV-155	FIV g 6	VI層	不整形	52×152	不明	不整形な3基が南西〜北東方向に長く連なったような形状。



第75図 HIW-201方形周溝実測図

V. 検出遺構と遺構内の出土遺物(2)―第2次調査―

この年は、第1次調査の約4倍近い面積を調査し、遺構の種類・数とも飛躍的に増えている。また時代も、平安時代を主にしているものの縄文時代早期から近世と推定できる遺構まで、時間幅の長いものとなっている。検出した遺構の種類と数は表2(11ページ)に示している。

1. 竪穴住居跡

A I 区

A I-1 住居跡

遺構（第76図。図版54）

〈検出状況・重複関係〉 調査区の北端に検出された。調査区域の境界と農道に挟まれた三角形の狭い範囲を最初に調査したところ、南壁と床面の一部が確認できたものの北側と西側は調査区域外に伸び、東側は農道の下にあることが判明した。そこで、農道の下へ範囲を広げて調査した結果、南半はすでに削割されて床面を消失し、北半は焼土が検出されたものの床面の明瞭な広がりはつかめなかった。また、東端は崖線によって切られている。重複する遺構は調査できた部分にはない。

〈平面形・規模・床面積〉 不明である。

〈埋土〉 調査区域の境界の断面で観察でき、ほぼ黒褐色土の単層である。

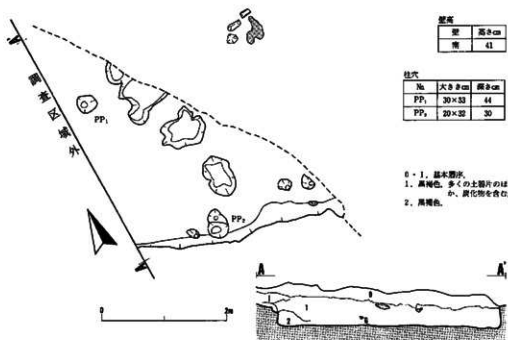
〈壁の状態〉 南壁の一部が検出できただけであるが、直立して凹凸はげしい。〈壁高〉 41cm

〈壁溝〉 調査した範囲には検出されていない。

〈床面〉 全体にやや硬く、いくらか起伏がある。

〈柱穴〉 柱穴状ピットとしては PP1 と PP2 が検出されているものの、位置づけは不明である。

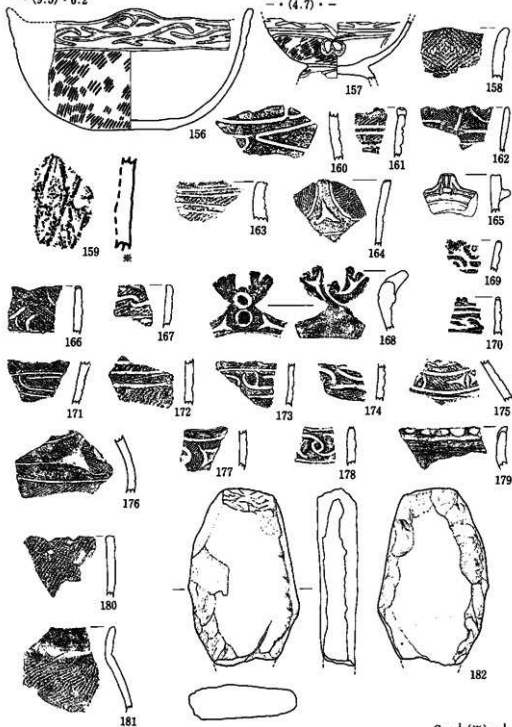
〈炉〉 径36×38cmの不整形な現地性焼土が道路下に検出され、北側には3個の礫がー列に並ぶ。周辺は風倒木による破壊はげしく、多くの焼土が堆積物として先の焼土の付近に見られ



第76図 AI-1 住居跡実測図

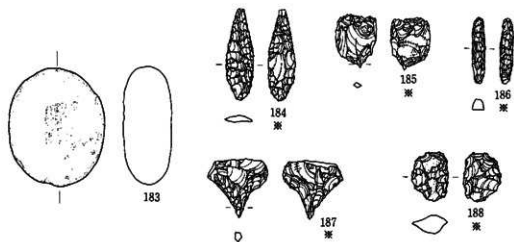
— • (9.5) • 6.2

— • (4.7) • —



S = $\frac{1}{1}$ (※) • $\frac{1}{8}$

第77图 AI-1 住居跡出土遺物(1)



No.	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分製	備考	図版
156	床面直上・床面	鉢	口一様	波状口縁。入組状三叉文・LR	ミガキ		V群1様		206
157	埋土	台付鉢	胴一様	波状口縁・LR					206
158		口縁部	裾束第1極羽状隅文 (O段多糸)・裾紐庄痕			鉄線少量	II群6様		
159			割部	押部文・斜格子目文	割部		I群1様		206
160		皿		無文・沈線	ミガキ		IV群9様		
161		口縁部	B突起・沈線・LR	平沿			V群4様		
162		鉢		小波状口縁。入組文か	ミガキ				
163		口縁部	沈線文・LR						
164		鉢	口縁部	口縁部周A・沈線・三叉文・LR			V群1様		206
165				波状突起・隆帯・沈線			V群4様	朱塗リ	
166				波状口縁。沈線・割部					
167		鉢		入組状沈線文・割部文・磨面隅文					
168		浅鉢		大突起。内部小突起。円部文・三叉文			V群1様		206
169		鉢		B突起・沈線文			V群4様		
170				B突起・研磨隅文・沈線					
171			胴部	沈線文・RL					
172				沈線・LR					
173				R・R					
174				帯状入組文					
175		皿		玉形B三叉文変形・平行沈線・RL			V群1様		206
176				三叉文・沈線・研磨隅文・LR					
177		鉢		沈線・LR			V群4様		
178		皿		研磨隅文・入組状沈線文				朱塗リ	
179		鉢		口唇部周縁状押庄痕・ミガキ					
180		鉢		口唇部周縁・LR			V群5様		
181		皿		口唇部研磨隅文・LR					

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大): cm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
182	床面	平円状扁平打製石斧	(14.2)	(88)	(27)	(565.0)	凝灰質硬砂岩, Sa 2	横断面18mm	214
183	埋土	燧石	94	75	33	360.0	燧石安山岩, An 3	狭く小さな凹みが表面に連続	
184	埋土	石鏃	49	19	4	3.1	凝灰質硬砂岩凝灰岩, G	先端部欠。尖部削面	211
185	埋土	石鏃	28	22	5	3.7	燧岩砂岩, De 3	鋭角の一部に細部異様・刃部前面異形	
186	床面直上~床面		35	7	6	2.4	凝灰質硬砂岩砂岩, De 1	棒状。断面台形・両端が刃部	211
187	埋土		30	32	8	8.7	燧岩砂岩, De 3	頭部に比べると短かい身部	211
188	床面直上・床面	不定形石鏃	27	20	10	5.5	凝灰質硬砂岩, Ry 2	S。両面異様に近いが、表面の一部が削面	211

$$S = \frac{1}{4}(\text{長さ}) \cdot \frac{1}{4}$$

第78図 AI-1 住居跡出土遺物(2)

た。風倒木に破壊された炉の痕跡と推定でき、現地性焼土は下底部の残存と考えられる。しかし、先の礫が石囲い炉の構成礫になるかどうかは不明である。

遺物（第77図・第78図、図版206・211・214）

〈出土状況〉土器片を主体にする多量の遺物が埋土と床面直上から出土している。

〈土器〉すべて縄文土器である。晩期Ⅴ群1類（大洞B式相当）がほとんどで、深鉢・鉢・壺・ミニチュア土器があるが、すべて破片である。他には早期前葉Ⅰ群1類や早期中葉Ⅰ群3類・後期Ⅳ群9類ほかが混入している。

〈石器〉剥片石器は図示した石鏃1点、石錐3点、不定形石器1点のほかに、使用痕のある剥片4点や剥片が出土しているが、少量である。磨製石斧は小破片1点がある。礫石器は凹石2点・半円状扁平打製石器1点・石皿と推定される小破片1点がある。

まとめと遺構の時期

出土遺物や占地から、縄文時代晩期初頭Ⅴ群1類（大洞B式相当）期に分類できる。

BⅠ区

BⅠ-1住居跡

遺構（第79図、図版54・55）

〈検出状況・重複関係〉東側約 $\frac{1}{2}$ は農道を作る際に削削されている。また北壁は東側の半分ほどが消失している。重複する遺構は調査範囲にはない。

〈平面形〉方形と推定できるが、詳細は不明である。〈規模・床面積〉南北で3.6mを測る以外は不明である。

〈埋土〉黒褐色土の単層である。灰白色浮石の小塊少量を部分的に含み、一部は床面にも認められる。

〈壁の状態〉直立しているが、低い。〈壁高〉7～11cm 〈壁溝〉調査範囲には伴わない。

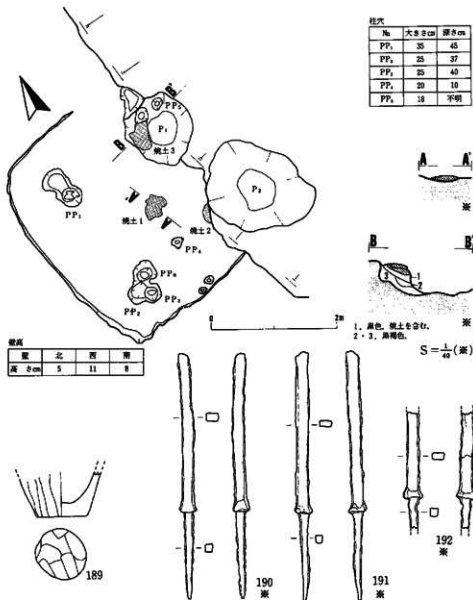
〈床面・掘り方〉Ⅵ層の黒褐色土を直接床面にし、いくらか硬い。掘り方は伴わない。

〈柱穴〉PP1とPP3あるいはPP2が対になって柱穴の一部を構成するものと考えられる。PP5が加わる可能性もあるが、深さが不明なため確実なことは言えない。PP6は柱痕跡と掘り方が識別できる。本遺構に伴うものではない。

〈焼土〉現地性焼土が3カ所に見られる。焼土1は床面のほぼ中央に位置することが推定できる。焼土2はP1に切られ、焼土3はP2の埋土に載ってわずかに沈降している。3基の焼土は不整形、あるいは円形で、周辺には炭化材の小片が分布し、炉のような機能をもつものであろう。なおピットP1・P2は形態が不安定なため遺構とは認定しなかった。

遺物（第79図、図版235）

〈出土状況〉上述のような検出状況ということもあり、量は少ない。PP4から出土した土師



No	地点・層位	種類・図号	外 面				内 面				計測値: cm	分類
			口縁部	胴部	底部	底径	口縁部	胴部	底部	底径		
189	PP4 焼土	土師器類	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	9	—	エビナゲル	ナゲツケ	—	(3.6)	4.1

No	地 点 ・ 層 位	器 種	大きさ(最大):mm		重量g	特 徴 ・ 備 考	図号	
			長 さ	幅 厚 さ				
190	床面	鉄器	130	5~7	3.5	11.83	完形。有蓋の長筒型模式。	235
191	床面	#	133	5~6	3.5~4	11.85	#	236
192	床面	#	(61)	5~6	3~4	(6.82)	両端を欠失。有蓋。	238

$$S = \frac{1}{2} (\text{米}) \cdot \frac{1}{3}$$

第79図 BI-1 住居跡実測図・出土遺物

壁高

壁	高さcm
北	39
西	47
南	15

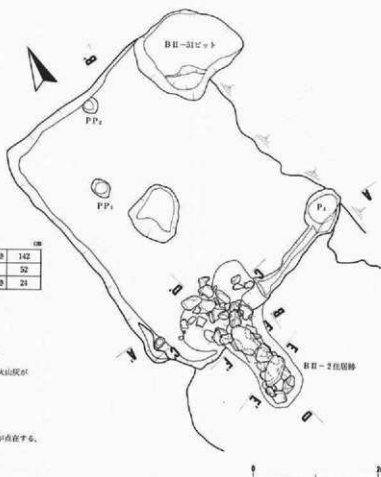
ピット

No	P ₁
大きさcm	55×70
深さcm	41

カマド

本体部	長さ	70	幅	52
	高さ	76		24
	径	32×34		
	厚さ	4		

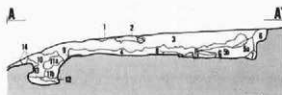
1. 黒褐色。
2. 黄褐色。汚れた火山灰が卓越。
3. 黒褐色。粒状の黄褐色火山灰を含む。
4. 褐色。黄褐色火山灰層を含む。
- 5a・5b. 黒褐色。粒状～小塊状の黄褐色火山灰が点状する。
6. 黒色。
7. 黒褐色。
8. 明赤褐色。汚れた灰土。
9. 褐色。汚れた火山灰。
10. 黒褐色。黄褐色火山灰を少量含む。
- 11a・11b. 黒褐色。黄褐色火山灰の小塊が点在する。
12. 黒褐色。炭化物を少量含む。
13. 黄褐色。汚れた火山灰が卓越。
14. 黄褐色。火山灰卓越。
15. 暗褐色。火山灰層を含む。
16. 黄褐色。火山灰卓越。
17. 灰黄褐色。黄褐色火山灰を含む。
18. 黒色。
19. 褐色。カマド崩壊土。
20. 黒褐色。



カマド部分図

源

$$S = \frac{1}{40} (\text{米})$$



第80図 B II-1 住居跡実測図(1)

器189以外は床面からの出土である。土器と鉄製品がある。

〈土器〉189以外には土師器・須恵器はない。縄文土器は晩期初頭を中心に31点がある。

〈鉄製品〉190～192の3本の鉄鏃はPP1とPP6のほぼ中間で西壁から60cm内側に入った床面から出土した。3本が密着し、西壁と平行する方向を向いていた。

まとめと遺構の時期

189～192は本遺構と相伴または時間的に近い関係にある。出土遺物や住居形式・埋土の状況から、平安時代に分類できるが、小期での区分は不明である。

B II区

B II-1 住居跡

遺構(第80図・第81図、図版55・56)

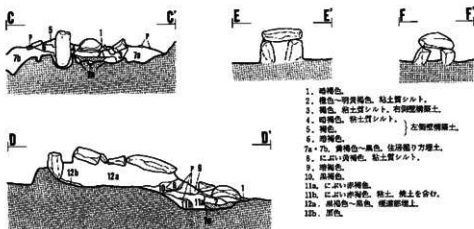
〈検出状況・重複関係〉東側約1/3は農道を作る際に削削をうけている。南側はB II-2 住居跡(縄文時代)と重複して切っており、同住居跡の埋土中に煙道部を構築している。また、B II-51ピット(平安時代)との新旧関係は不明である。

〈平面形・規模・床面積〉方形であるが、詳細は不明である。南北方向では4.4mである。〈主軸方向〉S-24°-E

〈埋土〉黒褐色土が卓越する。黄褐色火山灰は北壁～西壁際の埋土に小塊状あるいは一部層状に含まれるほか、床面直上の層にみられる。

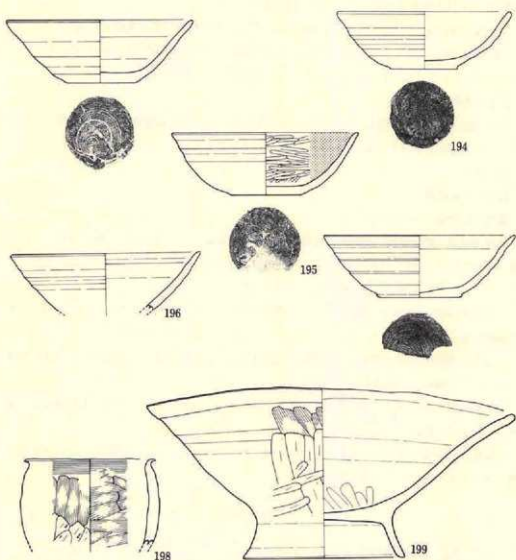
〈壁の状態〉直立～いくぶん外傾 〈壁高〉15～47cm 〈壁溝〉カマドとP1に挟まれた南壁沿いにある。幅は12～18cm、深さは7～13cmである。

〈床面・掘り方〉床面は中央の広い範囲が硬く締まっている。カマド前面をのぞいた部分に掘り方をとめない、とくに周辺部が深い。



S = $\frac{1}{48}$

第81図 B II-1 住居跡実測図(2)

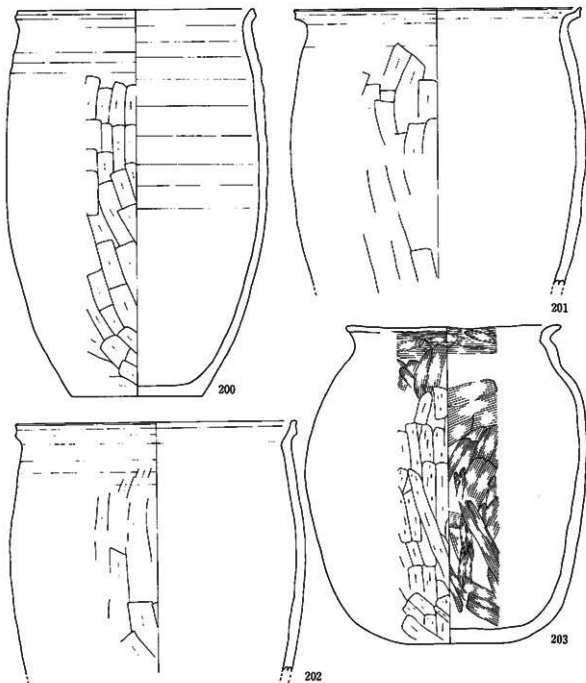


No	地点・層位	種類	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分類	図版	
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口縁部	高さ	底径			
193	灰面	杯	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	×	15.0	5.0	5.4	BIII	217
194	カマド・煙道部・埋土	口	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	×	13.9	4.6	5.4	B	217
195	カマド・煙出し部・埋土	口	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	×	14.8	5.0	5.6	BIII	217
196	埋土・煙り方・埋土	口	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	×	15.1	(4.2)	—	BII	217
197	カマド・埋土最下部	口	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	×	15.3	5.0	6.6	BIII	217

No	地 点 ・ 層 位	種類・素材	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分類	図版
			口縁部	胴 部	底 部	口縁部	胴 部	底 部	口径	高さ	底径		
198	煙道部	土師製壺	横ナギ	ナゲ・ケズリ	一	横ナギ	ヘナナギ	一	10.6	(6.8)	—	IS3	
199	カマド・P1埋土	土師製台付鉢	口ロ口底	ナゲ・アズリ 口ロ口底	不明	口ロ口底	口ロ口底・ 口ロ口底	口ロ口底	29.4	13.7	12.9		233

$$S = \frac{1}{2}$$

第82図 BII-1 住居跡出土遺物(1)



No	期 点 ・ 層 位	種類・陶種	外 面		内 面		計 測 値 : cm			分類	図版		
			口 縁 部	胴 部	口 縁 部	胴 部	口 縁 部	高 度	口 径				
200	カマド・P1・埋土下部	土師器	ロクロ底	ロクロ・ケズリ	ナデ	ロクロ底	ロクロ	ナデ	18.9	30.9	10.4	III2	223
201	堀込部・埋土下部・P1	※ ※	※	ヘラケズリ	—	※	ロクロ・ナデ	—	23.6	(21.6)	—	III1	
202	堀込部・埋土	※ ※	※	ロクロ・ケズリ	—	※	ロクロ底	—	22.6	(20.6)	—	※	223
203	堀込部・埋土	※ ※	ナデ	ナデ・ケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ	ナデ	17.1	25.3	8.6	III2	224

第83図 B II-1 住居跡出土遺物(2)

S = $\frac{1}{3}$

〈柱穴〉柱穴状ビット PP1・PP2があるが、主柱穴にはならない。

〈カマドの位置〉南壁の南西隅寄り 〈カマド本体〉崩壊している。シルト質粘土とともに多くの礫が散乱し、原位置にあるものは左側壁の1個にすぎない。火床部はよく焼けている。

〈煙道部・煙出し部〉原形をよく保っている。片側4～5個の扁平な礫を側面を上下にして並べた上に、粒径50cmほかの巨礫をのせて天井部とし、シルトで被覆している。煙出し部の上部には土師器甕の大型破片が集中している。また、煙道部の一部のシルトの上にも同様の破片が

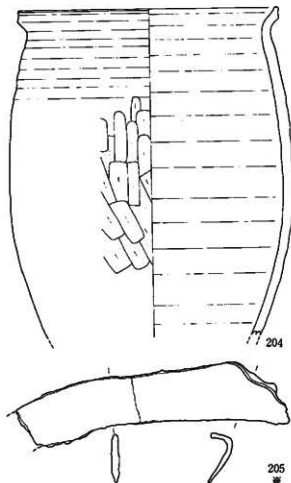
載っている。煙道部・煙出し部の構築材の一部の可能性が考えられる。

〈付属施設〉P1がカマドの設置された南壁の東端にある。平面形が楕円の袋状のビットである。

遺物(第82図～第84図、図版217・223・224・233・235)

〈出土状況〉図示した土師器の甕や鉢・坏は煙出し部と煙道部・カマド本体に大小の破片としてあったものが接合したものである。他には掘り方埋土・床面・P1から出土しているが、量は少ない。土器と鉄製品・鉄滓・土製品・石器・アスファルトがある。

〈土器〉土師器の甕や碗?・鉢・坏・須恵器・縄文土器が出土している。土師器甕はⅡ類が卓越し、L1・L2がある。Ⅰ類にはL7とした203のようにやや特異な器



No	地点・層位	種類・器名	外 面				内 面				計 測 値 : cm		分類
			口縁部	胴部	底 部	底 部	口縁部	胴部	底 部	底 部	口縁部	器 高	
204	カマド	土師器甕	口縁部	胴部	底 部	底 部	口縁部	胴部	底 部	底 部	20.8	(26.1)	ⅡL1

No	地点・層位	器 名	大 小 (最大) : cm		数量	特 徴 ・ 備 考	図版
			長 さ	幅			
205	埋土下部	甕	(128)	27~31	個 : 5	先端部欠失。蓋部折り返し	235

$$S = \frac{1}{2} (\text{東}) \cdot \frac{1}{2}$$

第84図 B II-1 住居跡出土遺物(3)

形があるほか、S 3の198がある。199は台付の鉢で、ロクロ使用のものである。色調は橙色で、硬く焼きしまっている。土師器の範疇からは逸脱するものと考えた方がよいのかもしれない。碗？は小破片である。坏はII類が卓越し、図示例3点はI類の1点とともにB 0である。他には破片で1点ずつがあるにすぎない。須恵器は甕の破片4点がある。なお縄文土器は土師器や須恵器の約2.3倍の破片数があるが、晩期初頭のものがほとんどで、重複するその時期のB II—2住居跡のものが多く含まれているのであろう。

〈鉄製品・鉄滓〉 鎌205は埋土下部から出土している。鉄滓は1点24.3gが埋土から出た。

〈その他〉 円盤状石製品と凹石が2点ずつ、磨製石斧の小破片1点・使用痕のある剥片3点・剥片がある。本遺構名で取り上げているアスファルトの小塊1個は出土地点からみて上述のB II—2住居跡のものの可能性が大きい。

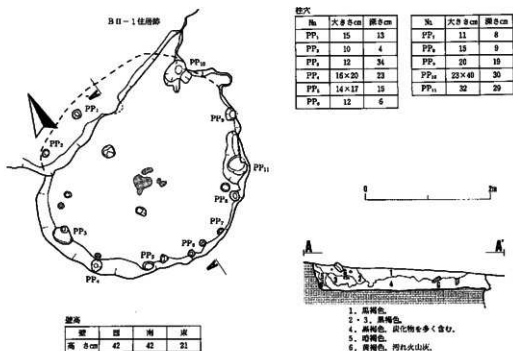
まとめと遺構の時期

煙道部や煙出し部・カマド本体から出土した土師器甕や坏・台付鉢は本遺構と共伴あるいは時間的に近いものである。埋土の状況や出土遺物から、平安時代V群に分類できる。

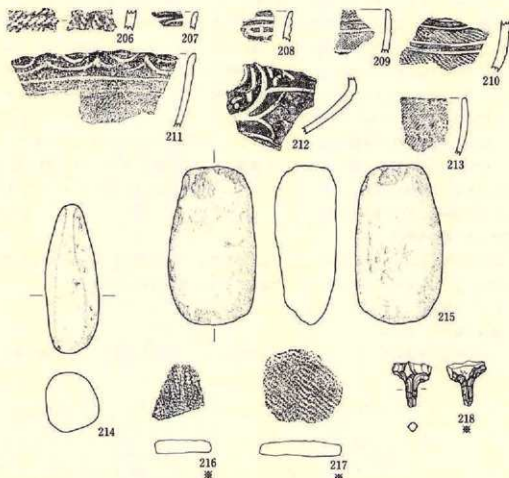
B II—2住居跡

遺構（第85図、図版57）

〈検出状況・重複関係〉 B II—1住居跡（平安時代）と重複し、切られている。北壁や攪乱



第85図 B II—2住居跡実測図



No.	地点・層位	器種	部位	撮影 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
206	埴土	深鉢	胴部	LR	LR		I群5類		
207	FP 1	鉢	口縁部	研磨・三叉文	と方キ		V群1類		
208	埴土			沈線・研磨・LR					
209									
210			胴部	横位平行沈線・研磨・RL					
211			口縁部	小波状口縁・三叉文					206
212		口土器	胴部	沈線・研磨	ナデ				
213		鉢	口縁部	LR	ケズリ		V群5類		

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
214	埴土	磨石目皿	118	43	47	315.0	磨石安山岩, An 3	I類には分類しない	
215	埴土上面	磨製石斧	126	70	48	250.0	磨石貫崎砂岩, Sa 2	完形。四角両凸耳。分厚い	213
218	埴土	石皿	(24)	22	5	(2.1)	磨石貫崎砂岩, Ry 2	磨石・身部とも欠	211

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
216	埴土	不明土製品	(30)	30	7	(7.85)	破片。卑路科縄文地文	216
217	埴土	円盤状土製品	45	39	8	16.6	方形取縁。縁辺打ち欠き	216

$$S = \frac{1}{2}(\text{cm}) \cdot \frac{1}{3}$$

第86図 B II-2 住居跡出土遺物

を受けた北東壁を消失している。

〈平面形〉 楕円形を推定できる。〈規模〉 3.2 (推定) × 3.6m 〈床面積〉 7.4㎡

〈埋土〉 暗褐色土や汚れ火山灰が壁際を占めるほかは黒褐色の土層群で構成されている。多量の細かい木炭が埋土下部から床面直上の層準の広い範囲に分布するが、焼土は伴わない。廃棄物の一部であろう。

〈壁の状態〉 直立するが、凹凸がはげしい。〈壁高〉 21～42cm 〈壁溝〉 伴わない。

〈床面〉 ほほ平坦で、硬い。

〈柱穴〉 壁際をめぐる小ピット PP1～PP10が柱穴と考えられる。深度はバラツキがあり、8～30cmと幅がある。PP1とPP10の間隔が開くのはBⅡ-1住居跡に壊されているためである。PP11の位置づけは不明である。

〈炉〉 床面ほぼ中央に位置する。3基の焼土が45×50cmの範囲に形成された地床炉である。層厚は1cmと薄い。

遺物 (第86図、図版206・211・213・216)

〈出土状況〉 埋土と床面直上から出土しているほか、PP1から207が出ている。土器と石器・土製品がある。

〈土器〉 すべての縄文土器の破片である。晩期初頭V群1類がほとんどで、深鉢や鉢・注口土器がある。他には早期I群6類が混入している。

〈石器〉 剥片石器は石錐1点・使用痕のある剥片3点・剥片がある。磨製石斧は215のほかには小破片が1点である。礫石器は磨石Ⅱ類の214がある。

〈その他〉 土製品は2点の円盤状土製品のほか、器種不明の216がある。

まとめと遺構の時期

出土遺物や住居形式・占地から、縄文時代晩期初頭V群1類 (大洞B式相当) 期に分類できる。

BⅡ-3住居跡

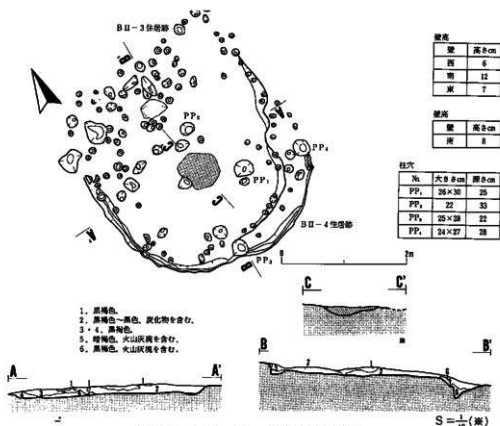
遺構 (第87図、図版57)

〈検出状況・重複関係〉 斜面下方の北壁を失っている。南東壁を中心にした部分で重複するBⅡ-4住居跡 (縄文時代) を切っている。

〈平面形〉 北壁を失っているが、柱穴状ピット群から推定すると、ややいびつな楕円形になるものであろう。〈規模〉 3.2 × (推定) 3.5m 〈床面積〉 9.2㎡ ± (推定)

〈埋土〉 黒褐色土が卓越する。

〈壁の状態〉 直立～わずかに外傾 〈壁高〉 6～11cm 〈壁溝〉 西壁から南壁にかけての約1/4にめぐる。幅は5～20cm、深さ5cmである。



第87図 B II-3・4 住居跡実測図

〈床面〉全体的にいくらか硬い。東から北側へゆるやかに傾斜している。

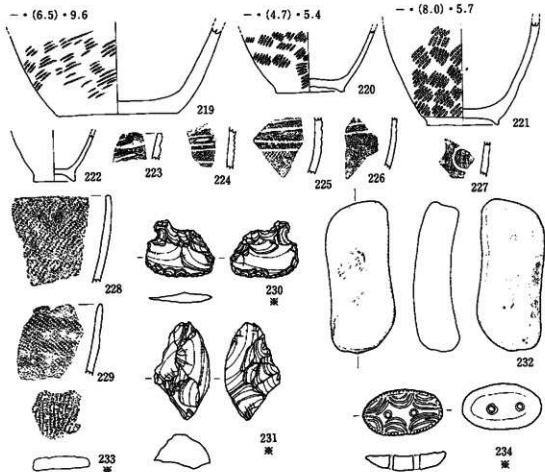
〈柱穴〉数多くの柱穴状ピットが壁沿いや壁中・床面にある。径7～18cmの大きさのものが大部分を占め、深度は10cm±のものが多く、最大で30cmである。木根の痕などが柱穴以外に含まれていることが考えられるものの、壁柱穴が大部分であろう。直径が大きく、深度の深いものとしては炉の東側にある PP1 と PP2 があげられるが、柱穴としての位置づけは明らかでない。

〈炉〉推定であるが、床面の中央からわずかに南寄りに位置する。ほぼ円形の地床炉で、径は55×60cm、最大層厚は9cmである。

遺物（第88図。図版211・216）

〈出土状況〉埋土を中心に、柱穴状ピットや壁溝からも出土しているが、量は少ない。なお、B II-4 住居跡が重複していることを確認できないまま精査を進めたため、同住居跡の遺物が混入していることが考えられる。土器と石器・土製品・石製品がある。

〈土器〉すべて縄文土器である。晩期初頭 V 群 1 類を主体にし、深鉢・鉢・甕がある。他に



No	地点・層位	器種	部位	形状・外面	内面・胎土	分	類	備考	図版
219	堀土	埴輪	胴・口縁部	無刻文・刻文のあとが認められる	ミガキ		V群		
220	堀土	鉢	口縁部	無刻文・LR・研					
221	堀土	鉢	口縁部	無刻文・LR・研					
222	堀土	埴輪	口縁部	ミガキ・ナブ					
223	堀土	埴輪	口縁部	小波状口縁・研・三叉文			V群1類		
224	堀土	埴輪	口縁部	平行波状・研・三叉文・LR					
225	堀土	埴輪	口縁部	無刻文・LR (一部風車)					
226	堀土	埴輪	口縁部	無刻文・LR					
227	堀土	埴輪	口縁部	研・比喩					
228	堀土	埴輪	口縁部	無刻文・LR			V群5類		
229	堀土	埴輪	口縁部	無刻文・LR					

No	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm	重量g	石材名	特徴・備考	図版
230	堀土	横形石	31 27 5	4.8	凝灰質硬質岩, De 1		211
231	堀土	不定形石	52 29 17	19.4		1. 断面がジグザグの形状である	
232	堀土	円石	119 91 39	361	輝石安山岩, An 3	断面が2個・裏面磨石?	

No	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm	重量g	特徴・備考	図版
233	堀土	円形土製品	32 31 6	6.65	縁辺打ち欠き	216
234	灰面直上	土製品	42 24 8	7.46	縁辺打ち欠き・風状刻文・穴2個・全面磨り	218

$$S = \frac{1}{2}(\text{米}) \cdot \frac{1}{2}$$

第88図 B II-3 住居跡出土遺物

は後期の土器が少量混入している。

〈石器〉 剥片石器は石匙230と不定形石器231が1点ずつあるほか、使用痕のある剥片3点・剥片がある。礫石器は凹石232が1点である。

〈その他〉 土製品は垂飾品234と円盤状土製品233がある。石製品は石剣の小破片がある。

まとめと遺構の時期

出土遺物や住居形式・占地から、縄文時代晩期初頭Ⅶ群1類（大洞B式相当）期に分類できる。

BⅡ-4住居跡

遺構（第87図、図版57）

〈検出状況・重複関係〉 重複するBⅡ-3住居跡（縄文時代）にほとんどの部分を切られているため、南東壁を中心とした一部が残るにすぎない。

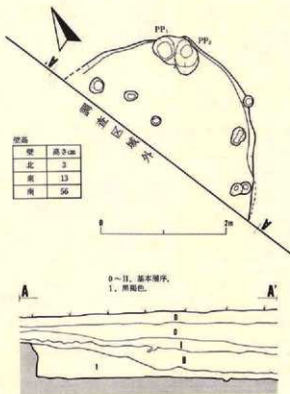
〈平面形・規模・床面積〉 残存部からはBⅡ-3住居跡よりもひとまわり小型で、平面が円形～楕円形と推定できるが、詳細は不明である。

〈埋土〉 BⅡ-3住居跡の一部と考えて掘り進めたため、詳しくは観察できなかったが、BⅡ-3住居跡とほぼ同じ層相の埋土をもつ。

〈壁の状態・壁高〉 最大の高さが8cmの壁がわずかに残っているだけである。〈壁溝〉 南端とPP3に挟まれた部分に存在する。幅は10cm、深さは5cmである。

〈床面〉 軟らかい。BⅡ-3住居跡の床面との高低差は5cm±である。

〈柱穴〉 小さな柱穴状ピットが壁際にいくぶん規則的に並ぶ。径が5～17cm、深さが4～8cmである。それらと一群のものがBⅡ-3住居跡内にあることが考えられるが、識別はできなかった。大きさと深さが異なるPP3・PP4は主柱穴の一部の可能性があるが、対になるものが不明である。



第89図 BⅡ-5住居跡実測図

遺物

BⅡ-3住居跡の〈出土状況〉の項で記載したような理由で、固有の遺物は不明である。

まとめと遺構の時期

住居形式や占地・重複の在り方からはBⅡ-3住居跡とそれほど隔った時間があるとは考えにくく、同住居跡と同時期として分類する。

BⅡ-5住居跡

遺構（第89図、図版58）

〈検出状況・重複関係〉大半が調査区域外にあり、東側へ程度が調査できたにすぎない。重複する柱穴状ピット PP1・PP2には切られている。

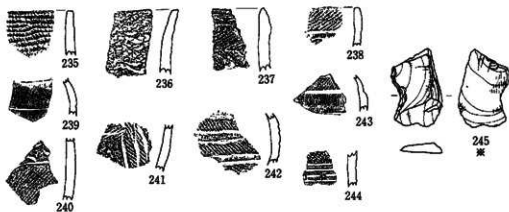
〈平面形・規模・床面積〉詳細は不明であるが、円形あるいは楕円形と推定できる。

〈埋土〉黒褐色土の単層である。

〈壁の状態〉ほぼ直立 〈壁高〉3～56cm 〈壁溝〉検出されていない。

〈床面〉やや硬い。

〈柱穴〉柱穴状ピットは数個が検出されているが、柱穴として適当なものはない。PP1・PP

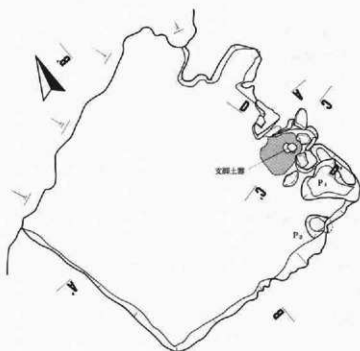


No	地点・層位	種類	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分	類	備考	図版
235	埋土	陶器	口縁部	押し引き文様文状	ミガキ	緑褐色	II群1期			200
236	埋土下部～床面直上	?	?	壁位の縦線文が間隔を置いて施文	瓶	?	II群10期			
237	埋土	?	?	部部圧痕・低い隆起・半段竹管文・部部第1期	ミガキ	?	II群7期			
238	?	鉢	?	伊磨・LR	?	?	V群1期			
239	?	管	胴部	縦文・沈線	?	?	?			
240	?	鉢	?	伊磨・LR	?	?	?			
241	埋土下部～床面直上	?	?	?	?	?	?			
242	埋土	?	?	?	?	?	?			
243	埋土下部～床面直上	?	?	?	?	?	?			
244	?	?	?	?	?	?	?			

No	地点・層位	種類	大きさ(最大):mm	重量g	石材名	特徴・備考	図版
245	埋土	不定形石器	長さ 42 幅 24 厚 3	6.9	陸奥産珪石, De 3	1. 凹刃	211

$$S = \frac{1}{4}(\text{米}) \cdot \frac{1}{4}$$

第90図 BⅡ-5住居跡出土遺物



ピット

No	P ₁	P ₂
大きさcm	60×95	40
深さcm	15	31

0 2m

壁高

壁	西	南	東
高さcm	25	30	16



南



南

カマド cm

本体(部)	長		94
	幅		122
	施工	厚	58×64
		厚	6



1. 褐色。
2. 暗褐色。
3. 褐色。焼土を含む。
4. 褐色。粘土を含む。
5. 濃い黄褐色。焼土。
6. 黒褐色。焼土。粘土を含む。
7. 黒褐色。
8. 褐色。焼土を含む。
9. 黒褐色。
10. 明赤褐色。

1. 黒褐色。灰白色浮石塊を含む。
2. 黒褐色。灰白色浮石の小塊が点在する。
3. 黒褐色。火山灰層を含む。
4. 暗褐色。
5. 斜交層様物。

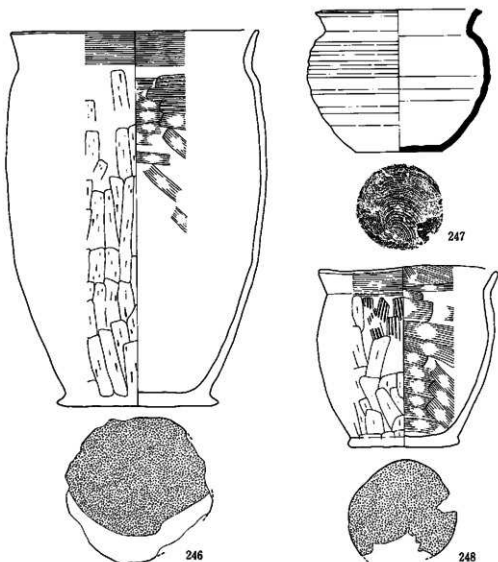
$$S = \frac{1}{40} (\text{米})$$

第91図 C II-1 住居跡実測図

2は本遺構よりも新しい。

遺物 (第90図。図版206・211)

〈出土状況〉埋土を中心に、埋土下部・床面直上から出土している。量は少ない。土器と石



No	地点・部位	種類・特徴	外			内			計測値: cm			分類
			口部形	胴形	底形	口部形	胴形	底形	口径	高さ	底径	
246	P1 埋土上部	土器・陶器	横ナデ	ヘラケズリ	砂底	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	19.7	30.0	12.9	113 224
247	床面直上・埋土下部	須恵系陶	口クロ底	口クロ底	口クロ底	口クロ底	口クロ底	口クロ底	13.3	11.3	6.9	233
248	床面・埋土下部	土器・陶器	横ナデ	斜地目・ケズリ	砂底	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	14.4	14.5	8.8	1M1 224

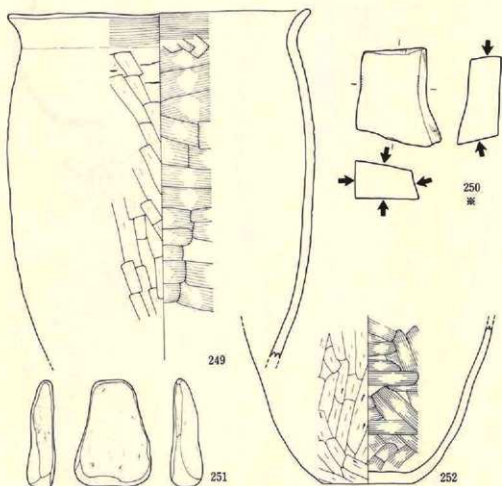
$S = \frac{1}{3}$

第92図 C II-1 住居跡出土遺物(1)

器がある。

〈土器〉縄文土器があるが、すべて破片である。晩期Ⅴ群1類がほとんどで、深鉢・鉢・台付鉢・壺・ミニチュア土器がある。他には前期Ⅱ群1類や同Ⅱ群10類・後期Ⅳ群1類がある。

〈石器〉剥片石器は不定形石器245のほか、使用痕のある剥片3点と剝片がある。



No.	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値: cm			分類	図版
			口縁形	側 面	底 形	口縁形	側 面	底 形	口 径	口 縁 高	底 径		
249	床面・床面直上	土製器種	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラケズリ	—	23.2	(27.8)	—	113	234
252	カマド支脚	—	—	—	—	ヘラケズリ	—	ナデ	—	(12.5)	7.0		

No.	地点・層位	器 種	大 小 (最大): mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
250	埋土	磁石	32	46	20	65.0	細砂質凝灰岩(石質凝灰岩)。G 5	完形。6面すべてを使用。	
251	床面直上	磁石	85	61	26	126.0	輝石安山岩。An 3	完形。3面が使用面。	

$$S = \frac{1}{2} (\text{底}) \cdot \frac{1}{3}$$

第93図 CⅡ-1住居跡出土遺物(2)

まとめと遺構の時期

出土遺物や住居形式・占地から、縄文時代の晩期初頭Ⅴ群1類（大洞B式相当）期に分類できる。

CⅡ区

CⅡ-1 住居跡

遺構（第91図、図版58・59）

〈検出状況・重複関係〉北西部は現代の削削を受けていることや植生による擾乱がはげしく、床面と壁が把握できなかった。

〈平面形・規模・床面積〉詳細は不明である。平面形はやや不整な方形または台形と推定され、東西方向で4.1mを測る。〈主軸方向〉N-60°-E

〈埋土〉黒褐色土が優占する。灰白色浮石の大小塊を含み、とくに床面中央から南隅にかけての範囲に多く、床面直上まで分布する。

〈壁の狀態〉直立〜外傾 〈壁高〉16〜30cm 〈壁溝〉調査した範囲には伴わない。

〈床面・掘り方〉“地山”を直接床面とし、掘り方を伴わない。床面は中央からカマド前面にかけての範囲が硬く締まっている。

〈柱穴〉伴わない。

〈カマドの位置〉東壁中央と南東隅との中間と推定 〈カマド本体〉砂岩ほかの礫とシルトで構築された同側壁の残存部を確認できる。粒径25cmと45cmの扁平な礫の側面を上下にして埋設した2個の芯材が確認できる。支脚は、砂岩の角礫を置いたうえに土師器壺(252)の胴部下半を伏せている。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉伴わない。

〈付属施設〉P1はカマドの東隣り、ちょうど南隅にある。平面は不整形で、深度も浅い。P2はその西隣にある円形の小ピットである。径10cmの灰白色粘土の塊が埋土上部から出土した。2基のうち、P1は貯蔵穴に類するものであろう。

遺物（第92図・第93図、図版224・233）

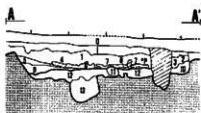
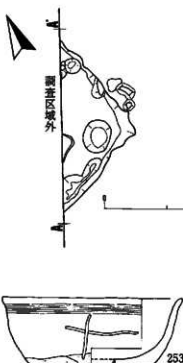
〈出土状況〉埋土を中心に、床面直上・床面・カマド本体・P1・P2から出土している。出土量はいくぶん多い。土器と磁石・粘土塊・礫石器がある。

〈土器〉土師器甕が主体を占めるほか、縄文土器・須恵器・坏がある。土師器甕はⅠ類が卓越し、M1a・L2などがある。246・248は砂底である。坏はⅠ類6点、Ⅱ類1点の破片があるだけで少ない。須恵器247はやや小型の甕である。縄文土器片は129点と多い。

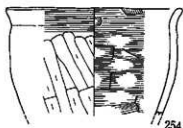
〈磁石〉2点250・251が床面直上と埋土から出土している。

〈その他〉径10cmの灰白色粘土塊がP2から出土しているほか、磨石Ⅱ類1点がある。

まとめと遺構の時期



- 0・1. 基本階序。
 1. 黒褐色。粒状～小塊状の灰白色厚石を含む。
 2. 黒褐色。灰白色厚石を含む。
 3. 黒褐色。
 4. 黄褐色。砂質。
 5. 黒色～黒褐色。灰白色厚石を少量含む。
 6. 暗褐色。火山灰層を含む。
 7. 黄褐色。火山灰が卓越。
 8. 黒色。
 9. 黒褐色。粒状～小塊状の灰白色厚石を含む。
 10. 黒褐色。火山灰層を含む。
 11. 黒褐色。
 12・13. 黄褐色～黒褐色。細り方粘土。



坪

No.	地点・層位	種類・群	外				内				計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底面	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部		
253	埋土下部	坪	横ナデ	ナデ・ケズリ	未調査	ナデ	×	×	×	×	14.4	5.3	9.9	237	

カメ

No.	地点・層位	種類・群	外				内				計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底面	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部		
254	埋土下部	土師器	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—	14.1	(8.5)	—	151	

第94図 C II—2 住居跡実測図・出土遺物

$$S = \frac{1}{4}$$

247・248は接合復元の結果、ほぼ全形を知ることができる。カマドの支脚に使われた252をはじめとする図示例の土器や磁石251は本遺構と共存あるいは時間的に近い関係にある。埋土の状況や出土遺物から、平安時代Ⅱ群に分類できる。

C II—2 住居跡

遺構 (第94図。図版59・60)

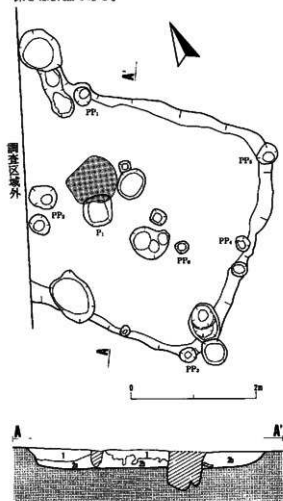
〈検出状況・重複関係〉 大部分は調査区域外にあり、南東隅を中心にした一部が調査できたにすぎない。その部分で重複する遺構はない。

〈平面形・規模・床面積〉 方形を基調とするが、詳細は不明である。

〈埋土〉 暗褐色土や黄褐色土が床面直上・床面に堆積するほかは黒褐色の土層群が卓越する。

粒状～小塊状の灰白色浮石が全体に含まれるが、量的に多いものではない。

〈壁の状態〉直立～外傾 〈壁高〉23～28cm 〈壁溝〉南壁沿いの一部にある。幅は20cm、深さは17cmである。



1. 黒褐色。
2a・2b. によい黄褐色・褐色、得れ火山灰、断片的。

柱穴

No	PP ₁	PP ₂	PP ₃	PP ₄	PP ₅	PP ₆
大きさcm	29	32×45	26	23×26	29×35	20
深さcm	53	25	21	33	22	16
備考			灰面から		床面から	

No	P ₁
大きさcm	48
深さcm	16

壁	高さcm
北 東	22
南 西	24
南 東	24

第95図 C II-3 住居跡実測図

〈床面・掘り方〉床面は硬く締まっている。掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉柱穴状ビットは本遺構よりも新しいものばかりである。

〈その他〉焼土や木炭・焼けた礫を含むシルトが南東隅付近に広範囲に分布している。カマドの崩壊土ということが考えられたが、火床部ほかは下位に確認できなかった。

遺物 (第94図、図版217)

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、少量の土器が埋土から出ているにすぎない。

〈土器〉土師器甕・坏・縄文土器がある。土師器甕はⅠ類が卓越し、S1などがある。坏253はロクロ不使用のものであろう。浅い「+」のヘラ書を体部外面に伴う。他にはⅡ類9点と内外面を黒色処理した小破片が1点ある。

まとめと遺構の時期

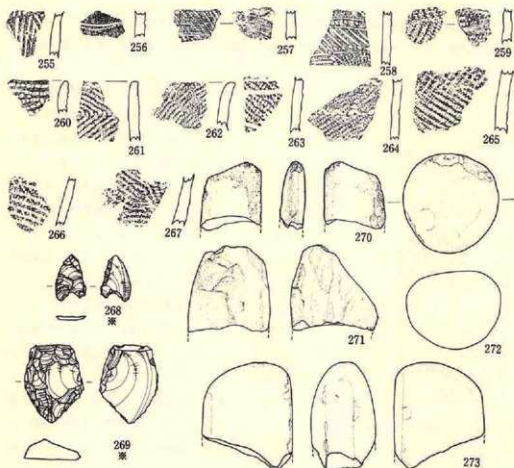
出土遺物は少ない。埋土の状況から、平安時代Ⅱ群以降に分類する。

C II-3 住居跡

遺構 (第95図、図版60・61)

〈検出状況・重複関係〉西側約1/2が調査区域外にある。調査した範囲内には重複する遺構はない。

〈平面形・規模・床面積〉残存部



No.	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分色	備考	図版
255	埋土	碎鉢	胴部	数層V字状文	粗	織物少量	1群1個	にじみ・褐色	206
256	"	"	"	貝殻線輪圧痕文・沈線文	ミガキ	"	1群3個	にじみ・黄褐色	
257	"	"	"	沈線文・条痕文	条痕文	"	1群4個	褐色	206
258	"	"	"	沈線文・網文・準跗斜織文	平滑	"	1群5個	にじみ・黄褐色	206
259	"	"	"	L.R	L.R	"	1群6個	"	
260	"	"	"	口縁部 波状口縁。押し引き沈線文	ミガキ	織物少量	1群1個	"	
261	"	"	"	結束部1種羽状織文 (O段多量)	"	"	1群10個	"	207
262	"	"	"	L.R	粗	織物多い	"	"	
263	"	"	"	胴部 沈線文・R.L	ミガキ	織物少量	1群1個	"	
264	"	"	"	胴部をのいた藤織文・L.R	平滑	織物多い	1群10個	"	207
265	PP4	"	"	奔龍束羽状織文・L.R・R.L	ミガキ	"	"	"	
266	"	"	"	胴部下層。平行沈線文・R.L	"	"	1群1個	"	207
267	埋土	"	"	"・R.L	平滑	"	1群2個	"	

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
268	埋土	石鉢	35	16	3	1.2	陸奥泥岩, De 3	凹底無蓋・不連続的な調整	
269	"	不定形石器	42	31	11	14.0	陸奥黄砂質泥岩, De 1	2, 尖頭形	212
270	"	磨石不明	(46)	49	19	(86.0)	淡緑色凝灰岩, G 1	両面研削・左側縁剥離痕	214
271	"	磨石1個	(68)	(68)	(69)	(118.8)	磨石安山岩, An 3	一端を含む破片。機械研磨11mm	
272	"	磨石1個	75	76	61	534.0	"	完形。表面に平滑面を生じている。	
273	"	磨石1個	(85)	(72)	(52)	(49.4)	"	一端を含む破片。機械研磨22mm	

第96図 CII-3住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{2} (\text{※}) \frac{1}{2}$$

からは長方形の平面形、また柱穴配置からは3.8×6.1mの規模と20.5㎡の床面積を推定できる。

〈埋土〉黒褐色土が埋土上部、汚れ火山灰が下半や北東壁寄りを占める。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉23cm 〈壁溝〉調査した範囲には伴わない。

〈床面〉ほぼ平坦で、硬く締まっている。

〈柱穴〉PP1～PP5の5個を検出した。本来は、四隅とその中間に1個ずつと中央に1個の計9本柱になるものであろう。PP1・PP3・PP5は壁の上端を切るように掘り込まれている。PP6も相伴するが、どのような役割をもつのかは不明である。

〈炉〉中央付近の床面が72×76cmの範囲で焼け、少量の木炭を伴っている。焼土は層厚が確認できないほどに薄い。炉と考えておく。その南側で接する隅丸正方形のピットP1は北壁が焼けている。これは今村（1986）のいう「灰床炉」のようなものかもしれない。

遺物（第96図、図版206・207・212・214）

〈出土状況〉埋土以外にはPP4からの土器片1点があるにすぎない。土器と石器がある。

〈土器〉図示したものも含め34点の縄文土器片がある。早期Ⅰ群の1類・3類～6類と前期Ⅱ群の1類ほかがある。

〈石器〉剥片石器は石鏃268と不定形石器269のほかには3点の剥片がある。礫石器は磨石Ⅰ類2点271・273と磨石Ⅱ類1点272がある。270は両面と右側縁が研磨され、左側縁が主に表面からの剥離痕を伴う。未製品とも考えられるが、器種は不明である。

まとめと遺構の時期

周辺に分布するCⅢ-3やDⅢ-3ほかの住居跡と住居形式が類似することや出土遺物から、縄文時代前期前葉Ⅱ群1類（早稲田6類相当）期に分類できる。

CⅡ-4住居跡

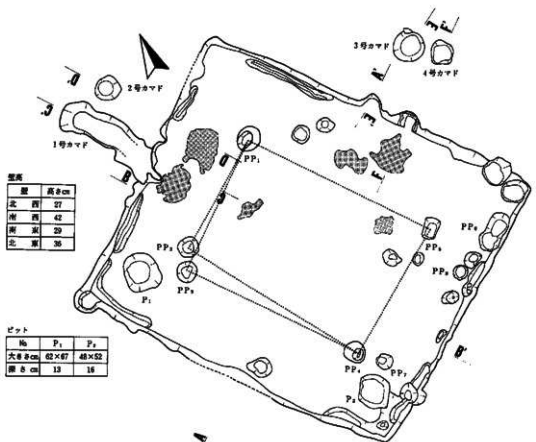
遺構（第97図・第98図、図版61・62図）

〈2棟の重複〉4基あるカマドや貼り床の存在からは新旧2棟の住居跡の重複であることを知ることができる。新期を4a住居跡、古期を4b住居跡として記載し、カマドや貼り床については後述する。

〈検出状況・重複関係〉CⅢ-2住居跡（近世後半以降）には切られている。本遺構に先行するのはCⅡ-57・60・CⅢ-53の各ピット（すべて縄文時代）とCⅡ-101落とし穴である。CⅡ-58ピット（時期不明）との新旧関係は不明である。

CⅡ-4a住居跡

〈平面形〉長方形 〈規模〉5.0×5.6m 〈床面積〉25.0㎡ 〈主軸方向〉1・2号カマド：N-38°-W 4号カマド：N-50°-E



壁高	壁	高さcm
北西	27	
南西	42	
南東	29	
北東	36	

ピット	No	P ₁	P ₂
大きさcm	62×67	48×52	
深さcm	13	18	

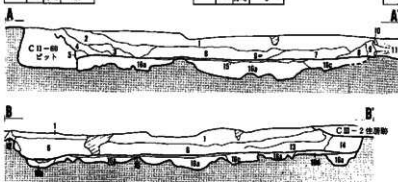
1号カマド	長さ	幅	高さ	160
本体	—	—	—	—
煙	—	—	—	—
焼土	厚さ	45×58	60	60
	厚さ	8	—	—

性穴	No	PP ₁	PP ₂	PP ₃	PP ₄	PP ₅	PP ₆	PP ₇
大きさcm	38×42	33	31	31×36	22×35	35		
深さcm	31	33	30	32	44	27		
柱穴跡	28×30			15×20				

2号カマド	長さ	幅	高さ	126
本体	—	—	—	—
煙	—	—	—	—
焼土	厚さ	50×64	66	66
	厚さ	30	—	—

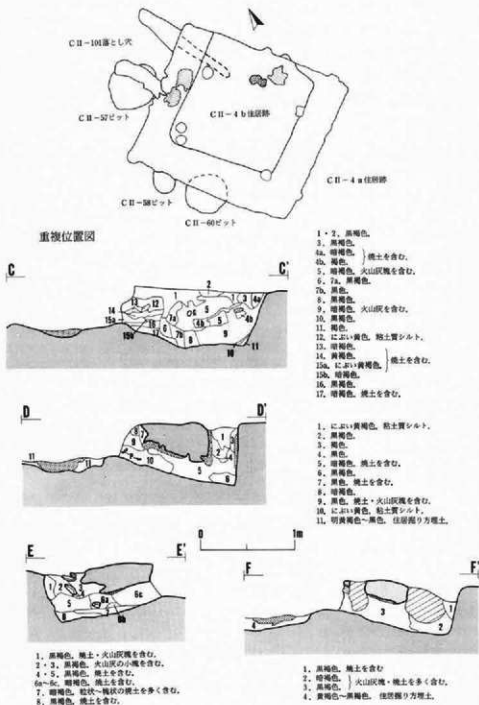
3号カマド	長さ	幅	高さ	120
本体	—	—	—	—
煙	—	—	—	—
焼土	厚さ	36×54	62	62
	厚さ	5	—	—

4号カマド	長さ	幅	高さ	138
本体	—	—	—	—
煙	—	—	—	—
焼土	厚さ	56×60	58	58
	厚さ	8	—	—



1. 暗褐色。火山灰の小塊を多く含む。
2. 暗褐色。
3. 黒褐色。火山灰塊を含む。
4. 黒色。
5. 黒褐色。火山灰塊を含む。
6. 黒褐色。火山灰塊を多く含む。
- 7・8. 黒褐色。
9. 黒褐色。
10. 赤褐色。3号カマド起部の焼土を含む。
11. 褐色。
12. 暗褐色。1号カマド起部の焼土を含む。
13. 黒褐色。火山灰塊を多く含む。
14. 黒褐色。
15. 黄褐色。黒色。粘り厚。
- 16a~16d. 黄褐色～黒色。粘り方硬土。

第97図 CII-4住居跡実測図(1)



第98図 C II-4 住居跡実測図(2)

〈埋土〉主体を占めるのは暗褐色土・黒褐色土である。上部の1層には粒径5～10mmの火山灰がいちじろしい。下部構成層は粒状～大塊状の火山灰を部分的に多く含む。灰白色浮石や黄褐色火山灰は認められない。

〈壁の状態〉直立～わずかに外傾 〈壁高〉27～42cm 〈壁溝〉西隅と南隅を中心とした部分、北隅付近・南東壁の一部に断続的にみられる。幅は12～15cm、深さは2～11cmである。

〈床面・掘り方〉床面中央の広い範囲が非常に硬く締まっている。4b住居跡の床面の上には1～2cmの貼り床を施している。固有の掘り方は4b住居跡と重なる外側の部分に明瞭に認められる。

〈柱穴〉配置はPP1・PP3～PP5あるいはPP1・PP2・PP4・PP5の二組の組み合わせが考えられる(1型)。PP2・PP5は隣接した位置にあり、大きさや深さからは一方から他方への移し替えがあったことが考えられる。PP1・PP4には隅丸長方形・楕円形の柱痕跡が認められる。なおPP7・PP8はCⅢ-2住居跡のもので、床面を切っている。

〈付属施設〉ピットは2基が検出されている。P1は西隅近くにあり、平面形は不整円形、P2は南隅近くにあり、凸辺方形である。深度は13cm・16cmといずれも浅い。性格は不明である。

〈その他〉粒状～塊状の焼土や木炭・土器片・礫を多く含む黒褐色土をマトリックスにし、粘土質シルトの大小塊を混じえた土が北隅と西隅の前面の床面上に堆積している。規模と層厚は、前者が75×91cm・7cm、後者が130×135cm・15cmである。性状からはカマド本体構築材に起源があることが考えられる。共存する1号・2号・4号の3基の本体がほとんど残っていないことと関係するのであろう。なおP1はその堆積物の下位にあるが、内部にはそれらの土をまったく含んでいないことから、P1が埋没してから形成された堆積物であることがわかる。

CⅡ-4b住居跡

〈平面形〉ややいびつな正方形 〈規模〉3.7×3.8m 〈床面積〉13.5㎡(推定) 〈主軸方向〉N-50°-E

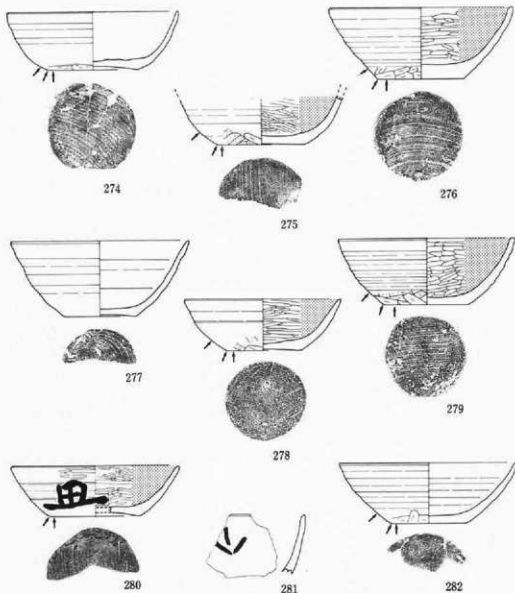
〈壁の状態〉4a住居跡と共有一再利用の関係にある北東壁をのぞいては同住居跡構築の際に削割されている。〈壁高〉36cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は4a住居跡の貼り床下にある。平坦で、非常に硬く締まっている。下位には全体規模の掘り方を伴う。

〈柱穴〉検出されていない。

次に4基のカマドについて記載する。

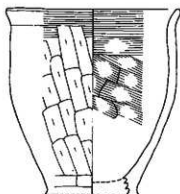
1号カマド：〈位置〉北西壁中央 〈本体〉両側壁のわずかな部分と火床部が残っているだけで、崩壊土も認められない。火床部は左側壁の下に潜り込む形で広がり、本体の作り替えが



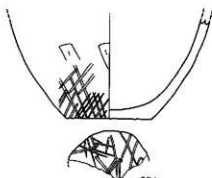
No.	地点・層位	種類	断面図				計測値: cm			
			口縁部	胴部	底	口一底	黒色処理	口径	唇高	底径
274	法面>2号マド埋通	杯	ロクロ痕	ロクロ痕		ロクロ痕	×	(13.7)	4.6	7.0
275	床面	〃	—	ロクロ痕・タズリ	静止糸切り・ヘラケズリ	ヘラミダキ	○	—	(3.7)	7.0
276	床面直上	〃	ロクロ痕	〃	〃	〃	○	(14.7)	(5.7)	7.0
277	3号マド陥り床下	〃	〃	ロクロ痕	回転糸切り	ロクロ痕	×	(14.2)	6.0	5.8
278	埋土	〃	〃	ロクロ痕・タズリ	静止糸切り・ヘラケズリ	ヘラミダキ	○	12.5	4.1	5.9
279	PP4断面	〃	〃	〃	〃	〃	○	14.0	5.3	6.6
280	埋土下部	〃	ヘラミダキ	ロクロ痕	〃	〃	○	(13.5)	4.0	(8.9)
281	埋土	〃	ロクロ痕	〃	—	〃	○	—	—	—
282	埋土	〃	ロクロ痕	ロクロ痕・タズリ	静止糸切り・ヘラケズリ	ロクロ痕	×	(14.3)	4.8	(6.0)

第99図 C II—4 住居跡出土遺物(1)

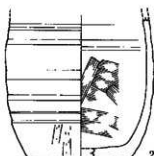
S = $\frac{1}{9}$



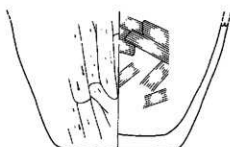
283



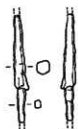
284



285



286



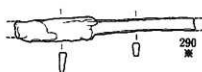
287



288



289



290

No	地点・層位	種類・群	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分 類	図 録
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	口 縁 部	高	底 径		
283	床面>埋土	土師器	ナデ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	ヘラナデ	ナデ	ナデ	ナデ	14.0	14.8	(7.4)	13E1	225
284	床面>埋土	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	—	(7.9)	8.7		224
285	黄壤土>埋土・床面	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	—	(11.2)	8.2		
286	床面・黄壤土・埋土	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	—	(10.2)	9.6		

No	地点・層位	器 種	大 小 (最大) : mm			特 徴 ・ 備 考	図 録
			長 さ	幅	厚 さ		
287	床面	鉄器	(5.7)	6	6	同軸穴鑽。有蓋。	225
288	床面直上	不明	29	43	底径 9	新瓦円形。	225
289	埋土	ナデ	(40)	6	3	新瓦円形。木質部厚く残存。	
290	2号カマド煙道部	刀子	(9.6)	身:12	身:3.5	同軸穴鑽。基部の幅は8mm。両端明瞭。	225

第100図 C II-4 住居跡出土遺物(2)

$$S = \frac{1}{2} (\text{cm}) \cdot \frac{1}{2}$$

考えられる。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。CⅡ-57ピットの埋土を掘り込んで作られている。本体寄りの部分では側壁と天井部に粘土が残っている。底面は半ばまでは傾斜して下がるが、その先はほぼ水平である。煙出し部への施設は認められない。

2号カマド：〈位置〉1号カマドの東隣り 〈本体〉1号と同様、構築材の痕跡はほとんど残っていない。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉くりぬき式である。底面は傾斜して先端へ下がって行く。天井部や側壁は焼けて赤褐色に変化している。

3号カマド：〈位置〉北東壁中央 〈本体〉火床部が4a住居跡の貼り床の下に検出された。〈煙道部・煙出し部〉くりぬき式である。底面は傾斜して先端へ下がって行く。煙出し部の上部には粒径15cm±の亜角礫・亜円礫7個が含まれているが、煙出し部の施設に関連するものであろう。天井部や側壁は焼けて赤褐色に変化している。

4号カマド：〈位置〉3号カマドの南隣り 〈本体〉右側壁下底部と推定される一部と火床部が残っているにすぎない。崩壊土は火床部を覆う状態で認められるが、最大厚層3.5cmと薄く、量的にも少ない。〈煙道部・煙出し部〉くりぬき式である。底面は傾斜して先端へ下がって行く。

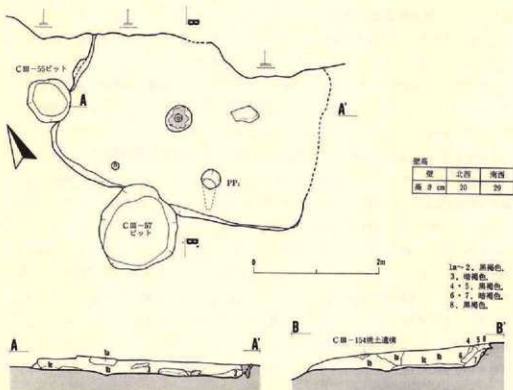
以上の4基の所属は次のようになる。3号は貼り床下に火床部があることから古期の1b住居跡に伴う。1号・2号は4b住居跡の外側にあり、新期の4a住居跡に伴う。4号は本体の崩壊土が少量ではあるが認められることから、やはり4a住居跡に伴うことが考えられる。しかし、3基相互の時間的な関係はわからない。

遺物（第99図・第100図。図版217・218・220・224・225・235）

〈出土状況〉埋土を中心に、床面・カマド本体・煙道部・床面直上・掘り方埋土・柱穴状ピット・ピットの順に多くの遺物が出土している。そのほかには、上述したように、カマド構築材起源と推定できる廃棄土中からも土師器甕の破片が出ている。土器と鉄製品・鉄滓・石器がある。

〈土器〉土師器甕や坏・縄文土器・須恵器・甕以外の土師器がある。土師器甕はⅠ類が卓越しM1bなどがある。285はⅡ類Mである。284は胴部下端～底部の外面に刻線を伴う。坏は、図示した8点のうち、Ⅰ類が5点、Ⅱ類が3点である。277を除いては再調整が施されている。280は切り離し技法ははっきりしないが、静止切り離しの一種と推定した。Ⅰ類はA2が4点、A3が1点、Ⅱ類はA2が2点、B0が1点である。破片ではⅠ類が41点、Ⅱ類が5点である。280・281は体部に墨書を伴う。280は「丑」で判読できない。281は倒位に書かれた「箇」であろう。そのほかにはヘラミガキと黒色処理を内外面に施した坏の破片がある。須恵器は壺？の破片1点がある。土師器の小型の壺の破片も1点である。縄文土器は377点と多い。

〈鉄製品・鉄滓〉鉄製品は5点が出土している。289は木質が付着しているが、器種不明である。288も不明である。図示例以外には刀子の一部かと推定される小破片1点がある。鉄滓は2



第101図 C III-1 住居跡実測図

点118が埋土と埋土下部から出ている。

〈その他〉縄文時代の遺物は土器片以外にも多い。後期前葉十腰内I式の切斷蓋付壺形土器の蓋部がある。小型のものである（第387図1769）。石器は、石鏃や石錐などが10点、磨製石斧と半円状扁平打製石器が1点ずつある。

まとめと遺構の時期

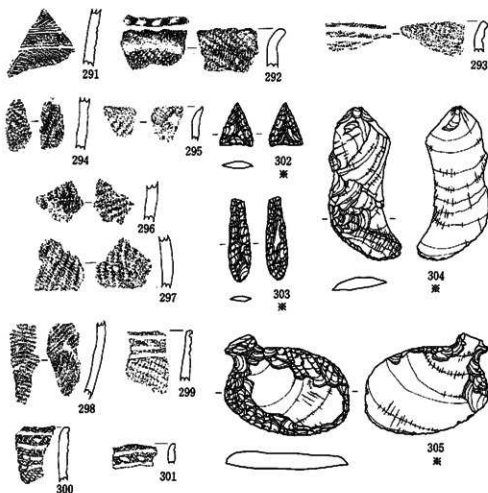
遺物の大部分は4a住居跡に固有のもので、4b住居跡に固有のものは同住居跡掘り方埋土や3号カマド煙道部・貼り床から出土したものの一部であろう。埋土に灰白色浮石を含んでいないのがどのような理由によるものかは明らかではないが、坏I類Aや坏II類Aの存在からは、平安時代I群と時間的に近いことが推定できる。

C III区

C III-1 住居跡

遺構（第101図、図版62・63）

〈検出状況・重複関係〉北東部は最近の削刺をうけ、一部を失っている。南東壁は部分的に把握できたにすぎないが、床面の広がりからほぼ平面形を推定できる。重複するC III-56・57

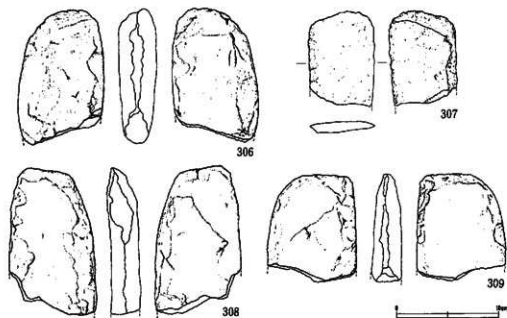


No	地点・層位	種類	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分	備考	図面
291	堀土	陶器	胴部	貝殻紋線文・沈線文	ミガキ		1群3層	褐色	297
292	"	"	口縁部	押圧痕・小波状口縁。口唇部ナド・RL	RL		1群6層	にぶい黄褐色	297
293	"	"	"	平行沈線文・LR	LR		"	にぶい褐色	297
294	"	"	胴部	LR	"		"	にぶい黄褐色	
295	"	"	口縁部	"	"		"	褐色	
296	"	"	胴部	"	"		"	"	
297	"	"	"	"	"		"	"	
298	"	"	"	"	"		"	"	
299	"	"	口縁部	平行沈線文・RL	平切	鉄線多量	口縁1層	"	297
300	"	"	"	"・刺突文・LR	ミガキ	"	"	"	
301	"	"	"	低い波状口縁。平行沈線文・刺突文・LR	"	"	"	300と同一個体	

No	地点・層位	種類	大きさ(最大):mm			遺跡	石材名	特徴・備考	図面
			長さ	幅	厚さ				
302	堀土	石器	23	18	4	1.1	縄文黄変質砂岩, De 1	平部無蓋	212
303	堀土上層	尖頭棒	(44)	12	3	(2.0)	板状黄変質砂岩, Ry 2	先端部欠・木蓋状	212
304	堀土	不定形石器	82	30	6	18.1	磨面粗砂, De 3	1, 凸刃	212
305	底面	楔形石器	54	66	9	38.2	"	急斜面の鋭部磨削	212

$$S = \frac{1}{2}(\text{cm}) \cdot \frac{1}{2}$$

第102図 CⅢ-1住居跡出土遺物(1)



No.	地点・層位	器 種	大きさ(最大):mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
306	床面	半円状磨平打製石器	(132)	84	37	(546.8)	輝石安山岩, An 3	片断残存・縁辺両面加工	214
307	床面	〃	(90)	65	10	(181.8)	〃 〃	〃・薄い素材・小割傷	213
308	床面	〃	(146)	65	30	(581.8)	〃 〃	〃・両左右邊・縁辺両面加工	214
309	埋土下層	〃	(106)	88	30	(388.6)	〃 〃	〃・縁辺両面加工	214

縮尺不定

第103図 CⅢ-1 住居跡出土遺物(2)

ピット (ともに縄文時代)・CⅢ-55ピットとCⅢ-154焼土遺構 (ともに時期不明) には切られている。

〈平面形〉 方形と推定 〈規模〉 南北での長さは4.2mである。〈床面積〉 不明

〈埋土〉 暗褐色土が部分的に見られるほかは黒褐色の土層群で構成される。細分はできるものの類似的性状をもつものである。黒褐色土は緻密で硬い。

〈壁の状態〉 直立～外傾 〈壁高〉 20・29cm 〈壁溝〉 調査した部分には伴わない。

〈床面〉 ほぼ平坦で、全体に硬く締まっている。

〈柱穴〉 PP1が検出されたが、傾きがいちじるしく、柱穴としては適当でない。

〈炉〉 床面中央と推定される部分に位置する。浅くくぼんだ円形のピット (径41×45cm・深さ12cm) の内側がよく焼けている。

遺物 (第102図・第103図, 図版207・212～214)

〈出土状況〉 埋土を主に、少量が床面から出土している。土器と石器がある。

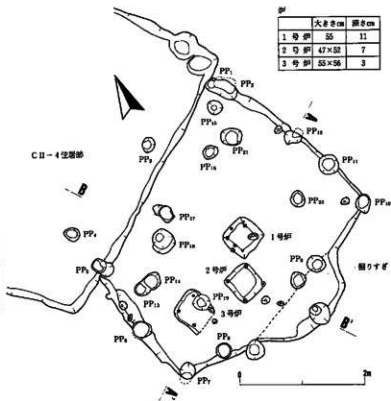
〈土器〉 縄文土器だけであるが、すべて破片である。図示例を含め66点がある。早期Ⅰ群の3類・6類、前期Ⅱ群1類がある。

柱穴

No.	大きさcm	深さcm	柱痕跡
PP ₁	20	34	23
PP ₂	28×39	45	20
PP ₃	28×25	23	
PP ₄	20×28	12	
PP ₅	21×35	51	24
PP ₆	30	51	18×25
PP ₇	25×28	41	19×24
PP ₈	24	25	15×21
PP ₉	25×25	35	11
PP ₁₀	25×31	39	17×31
PP ₁₁	30	35	
PP ₁₂	28	45	
PP ₁₃	21	20	
PP ₁₄	25	40	
PP ₁₅	24	11	
PP ₁₆	20×25	12	
PP ₁₇	27	19	
PP ₁₈	39	26	
PP ₁₉	29	26	
PP ₂₀	23×26	19	
PP ₂₁	26×34	42	

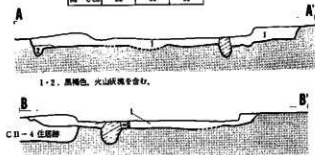
竈

	大きさcm	深さcm
1号竈	55	11
2号竈	47×52	7
3号竈	55×56	3



断面

位置	西	南	東
高さcm	22	16	15



第104図 C III-2 住居跡実測図

S = $\frac{1}{60}$

〈石器〉 剥片石器は石鏃302・尖頭器303・横形石匙305・不定形石器306が1点ずつ埋土や床面から出土しているほか、微細剝離痕を伴う剥片2点・剥片がある。礫石器は半円状扁平打製石器4点306～309がある。中央部からやや東側の床面から3点、同地点の埋土下部から1点が出土のもので、すべて一端を失っている。

まとめと遺構の時期

出土土器や占地などから、縄文時代前期前葉Ⅱ群1類（早稲田6類担当）期に分類できるも

のと推定した。同時期の他の5棟とは住居形式がやや異なるものの、本遺跡における前期の土器の在り方や分布状況からはⅡ群1類期という時間内での形式差と考えている。

CⅢ-2住居跡

遺構(第104図。図版63・64)

〈2棟の重複〉3基の炉や柱穴群の在り方・配置からは新旧関係がある最低2棟の重複を知ることができる。新期を2a住居跡、古期を2b住居跡として記載するが、炉については後述する。

〈検出状況・重複関係〉北壁や西壁の一部が重複するCⅡ-4住居跡(平安時代)の埋土を掘り込んで床面にしているのが観察できる。また、南壁寄りで重複するCⅢ-3住居跡(縄文時代)の埋土の上には貼り床を施している。

CⅢ-2a住居跡

〈平面形〉わずかにいびつな台形状と推定 〈規模〉 $3.2\sim 3.5\times 3.8\sim 4.1\text{ m}$ 〈床面積〉 13.4 m^2 (推定)

〈埋土〉粒径5~40mmの火山灰塊が全体に散在する黒褐色土の単層である。

〈壁の状態〉南壁中央付近は掘りすぎがある。CⅡ-2住居跡との重複部分は壁の広がりを押えることができなかった。東壁や北壁・大部分の南壁は2b住居跡と共有一再利用の関係にある。壁は外傾する。〈壁高〉15~20cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉全体に軟らかい。CⅢ-3住居跡との重複部分や2号炉の一部には薄い貼り床を施す。掘り方は伴わない。

〈柱穴〉PP1~PP12の12個が柱穴を構成する。四隅と各壁際に1ないし2個が存在するが、柱穴間の間隔は不規則である。北東隅のPP1とPP2は重複するが、新旧関係がつかめていないため、どちらが本遺構に固有なのか分からない。またPP3とPP4・PP8~PP12の7個は2b住居跡と共有一再利用の関係にある。掘り方と柱痕跡が識別できるのはPP1・PP2・PP5~PP10の8個である。

CⅢ-2b住居跡

〈平面形〉柱穴から推定してほぼ正方形に近いものであろう。〈規模〉 $3.5\pm 3.6\pm \text{ m}$ (推定) 〈床面積〉 13.1 m^2 (推定)

〈埋土〉固有の埋土を欠く。

〈壁の状態〉北壁や東壁・大部分の南壁は2a住居跡と共有一再利用の関係にある。西壁は2a住居跡に壊されているが、同住居跡のそれよりも内側にあったことが柱穴やPP8とPP12の間に残るわずかな段差から推定できる。

〈床面・掘り方〉床面は大部分が2a住居跡と共有一再利用の関係にあると推定される。後

述するが、本遺構に伴う2号炉の一部には貼り床が認められる。

〈柱穴〉PP1～PP4・PP8～PP14による9本柱が考えられる。そのうちPP13とPP14をのぞいては2a住居跡と共有一再利用の関係にある。また重複するPP1とPP2、PP13とPP14はそのうちの1個が本遺構に伴うものであるが、新旧関係が把握できず、どちらが固有のものかは明らかでない。ただ、PP8とPP14の間に残る段差を考慮するとPP14が適当と考えられ、配置の規則性という点ではPP13が優先するであろう。2個とも掘り方と柱痕跡を識別できる。

以上、新旧関係がある2棟について述べてきたが、次に3基の炉と残りの柱穴を記載する。

〈炉〉3基は住居跡の中央から南や南西寄りに位置する。東から西へ1号炉～3号炉とした。方形気味の平面形であること、大きさや深度、主に四隅に円形の小ピットを伴うことなどが共通する。ここでは炉に伴う小ピットについて触れておく。

小ピットが良く残っているのは2号炉・3号炉である。2号炉では、北側2個が隅の全体を、南側2個はその上部を切るように存在する。径は7cm±、床面からの深さは最大20cmである。それらはわずかに内傾している。3号炉は、3個がほぼ底面の隅に、1個がわずかに外れた底面にある。径は5～12cm、深さは10～20cmである。4個ともほぼ垂直である。1号炉では4隅のほかにも数個を伴う。南東隅では3個が重複している。直径は5～12cm、深さは15cm±のものが多く、それらはわずかに内傾する。

いままで述べてきたピットの多くは埋土に木炭の薄片を少量含んでいる。また、焼土は検出されていないが、1号炉はやや多い量の、2号炉は少量の木灰を内部に伴っている。2号炉については観察記録がなく、木灰の有無は不明である。

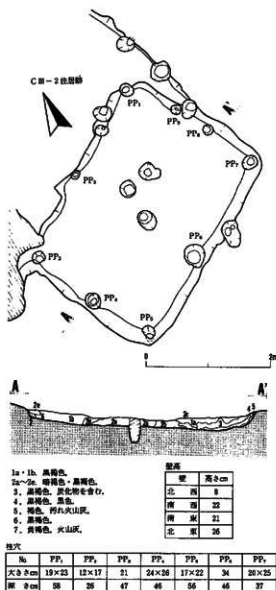
以上の炉の状態は、縄文時代早期の炉について書かれた今村論文（今村、1986）が想定した「灰床炉」に、時代こそ違うもののよく合致する（後述）。

3基の炉の屑属は次のようになる。貼り床が一部に施されていた2号炉は2b住居跡に伴う。1号炉は灰を良く残しており、2a住居跡に伴う可能性が高い。3号炉は、2b住居跡の西壁の残存部と考えられる段差を切るようにしてあることから、少なくとも同住居跡に伴うものではない。2a住居跡に伴うと仮定した場合でも1号炉との具体的な関係は不明である。

〈残りの柱穴〉本遺構に伴う柱穴のほかにも、床面上にはPP15～PP21の7個の柱穴状ピットが存在し、PP20は掘り方と柱痕跡を識別できる。しかし、それらの住居跡内での位置づけは明らかでない。なおPP22は本遺構よりも新しい柱穴状ピットである。

遺物（第332図、図版242）

〈出土状況〉埋土を中心に出土しているほか、炉や柱穴から少量が出ている。土器と陶磁器・古銭・漆の塗り紙・鉄滓・石器がある。



第105図 C III-3 住居跡実測図

にD III-7とC IV-1の2棟がある。所属時期は、染付茶碗と寛永通宝から推定して近世後半ないしはそれ以降と考えられる。

C III-3 住居跡

遺構 (第105図、図版65)

〈検出状況・重複関係〉北半がC III-2住居跡 (近世以降) と重複し、貼り床を施されてい

〈土器〉土師器・埴・縄文土器の破片があわせて108点である。

〈陶磁器〉染付茶碗の口縁部小破片が埋土から1点出土したが、図示は省略している。体部から直立し、口縁部端は内面の丸味が強い。器壁は全体に厚い。文様は、濃淡のある条線が口縁部にめぐり、草花状文が体部に描かれている。

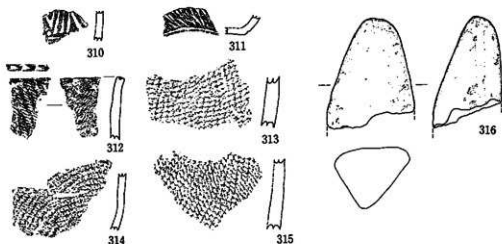
〈古銭〉寛永通宝1点が1号炉の底面から出土した。新寛永である。

〈漆の塗り紙〉埋土や1号炉の隅にある小ピット・1個の柱穴から出土している。ほとんどが小破片であり、色調は赤色である。燃りのかかったものは、直径3mmの細いものが主で、一部が4.5mmほどである。なかには3本一組のもの2組を燃り合わせているものがある (899)。また、燃りのない状態の和紙が一部にある。

〈その他〉鉄滓1個4.5gが埋土から出土している。割片石器は縦形石匙ほか2点がある。

まとめと遺構の時期

住居跡として登録・記載しているが、漆に関わる何らかの工房跡としても機能している可能性が強い。類似の施設



No.	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面胎土	分	装	備考	図版
310	PP 1	鉢	胴部	押板文	平滑		1 群 1 類	にょい黄褐色	
311	埋土	#	野蓋部	わずかに横げ面気味。沈線文			1 群 4 類	#	
312	埋土上部	#	口縁部	口唇部温線刺突文・LR	LR		1 群 6 類	褐色	207
313	#	#	胴部	LR	凹凸	縦線多数	1 群 10 類		
314	埋土	#	#	#	平滑	#	#		
315	#	#	#	#	ミダリ	#	#		

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm	重量g	石材名	特徴・備考	図版
316	埋土上部	磨石 1 個	(88) 70 52	294.0	輝石安山岩, An 3	一端を含む破断品。磨面距離 5 mm	

第106図 CⅢ-3 住居跡出土遺物

S = $\frac{1}{4}$

る。四隅付近はわずかに攪乱を受けている。

〈平面形〉長方形 〈規模〉2.6×3.7 m 〈床面積〉7.6㎡

〈埋土〉火山灰や汚れ火山灰が壁際の一部に見られるほかは暗褐色土や黒褐色土で構成される。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉21~26cm 〈壁溝〉伴わない。

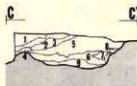
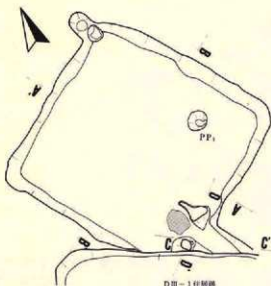
〈床面〉いくら起伏があり、硬く締まっている。風倒木痕と重なる北東壁は狭い範囲に貼り床をしている。

〈柱穴〉PP 1~PP 8 の 8 本柱である。四隅とその間に 1 個ずつ配置され、ほぼ対称形になる。PP 9 や中央付近の柱穴は CⅢ-2 住居跡の精査時に検出されたもので、本遺構を切っている。

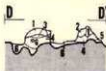
〈炉〉伴わない。

遺物 (第106図, 図版207)

〈出土状況〉埋土と床面から出土しているが、量は非常に少ない。土器と石器がある。



1. 黒褐色、住居埋土1層、
2. 浅黄色・灰白色浮石、住居埋土3層、
3. 黒褐色、住居埋土5層、
4. 黒褐色、
5. 黒褐色、壁土塊・火山灰塊を含む、
6. にぶい赤褐色、焼土が卓越、粘土を含む、
7. 黒色、焼土を含む、
8. 褐色、汚れ火山灰、
9. 暗褐色・黒褐色、焼土と黒褐色土を含む、



1. にぶい黄褐色、粘土、
2. にぶい赤褐色、焼土が現れている、
3. 黒色、
4. にぶい赤褐色、焼土を含む、
5. 黄褐色・黒色、
6. 黄褐色・暗褐色、住居埋方埋土、

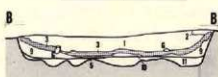
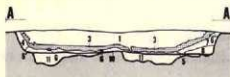
1. 黒褐色、大小の灰白色浮石塊・火山灰塊・黒色土塊を多量に含む、
2. 黒褐色、灰白色浮石を含む、
3. 灰白色、浮石、
4. 黒褐色、灰白色浮石をわずかに含む、
5. 黒褐色、灰白色浮石塊を含む、
6. 黒褐色、灰白色浮石を含む、
7. 黒色、灰白色浮石をわずかに含む、
8. 黒褐色、
9. 黒色、灰白色浮石をわずかに含む、
10. にぶい黄褐色、粘土、
11. 黄褐色～黒色、細り方埋土、

カマド			
本体(区)	長さ	79	
	幅	78	
	掘土	30×40	
	厚さ	2	

壁高		壁	高さcm
北	西	37	
南	西	38	
南	東	30	
北	東	33	

柱穴

No	PP1
大きさcm	28×24
深さcm	17



第107図 C III-4 住居跡実測図

$S = \frac{1}{40}$ (漸)

〈土器〉縄文土器はすべて破片で、図示例も含めて12点と少ない。早期I群の1類・4類・6類のほか前期前葉のものとして推定される深鉢の胴部破片313～315である。311はI群4類(ムシリI式相当)の底部を含む破片である。わずかに揚げ底気味の平底である。

〈石器〉磨石I類316があるだけである。

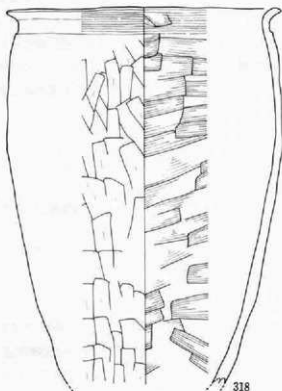
まとめと遺構の時期

C II-3 住居跡ほかとの住居形式の類似性や出土遺物から、縄文時代前期前葉II群1類(早稲田6類相当)期に分類できる。

C III-4 住居跡



317



318

遺構（第107図、図版65・66）

〈検出状況・重複関係〉 灰白色浮石の層や大小塊の分布から平面形を確認できた（図版65b）。重複するDⅢ-1住居跡（平安時代）に南隅や煙道部を含む部分を切られ、CⅢ-54ピット（縄文時代）を切っている。

〈平面形〉 隅丸正方形 〈規模〉
3.2×3.3 m 〈床面積〉8.3㎡（推定）
〈主軸方向〉 S-36°-E

〈埋土〉 灰白色浮石層は壁際からほぼ床面まで凹面を作って覆う。上部から、極細粒-細粒-粗粒の粒径の違いが見られ、最大層厚は10cmである。同層の上位を占める1層は大小塊の灰白色浮石を多量に含むほか、火山灰や黒色土の塊が混じる。それに対して、下位に含まれる灰白色浮石は少量で、粒状-小塊状のものである。

〈壁の状態〉 ほぼ外傾 〈壁高〉
30～38cm 〈壁溝〉 伴わない。

〈床面・掘り方〉 ほぼ平坦で、全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉 浅い柱穴状ピット PP 1が検出されただけである。北隅の柱穴状ピットは本遺構を切っている。

No.	地点・層位	種類・部類	外 面				内 面				計測値：cm			分層	図版
			口縁部	側部	底部	隅部	口縁部	側部	底部	隅部	口縁部	側部	底部		
317	床面・カマド崩壊土	坪	ロクロ底	ロクロ底・ケズリ	静止糸切り・ケズリ		ヘラミガキ	〇			15.0	4.9	6.5	1A2	218
No.	地点・層位	種類・部類	外 面				内 面				計測値：cm			分層	図版
			口縁部	側部	底部	隅部	口縁部	側部	底部	隅部	口縁部	側部	底部		
318	床面・カマド・掘り方埋土	土間跡	横ナデ	ヘラケズリ	—		横ナデ	ヘラナデ	—		21.9	(30.0)	—	112	225

$$S = \frac{1}{2}$$

第108図 CⅢ-4 住居跡出土遺物(1)

〈カマドの位置〉南東壁中央と南隅との中間 〈カマド本体〉残存状態は不良で、崩壊した粘土質シルトが広く見られる。両側壁の一部が残っていて、左側壁の付け根の1個、右側壁のシルトに被覆された1個の礫が原位置を保っているにすぎない。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。本体との境界部分が傾斜して下がるほかはほぼ水平である。煙出し部はDⅢ-1住居跡に切られていて不明である。

〈付属施設〉カマド左側壁側の壁がいくぶんオーバー・ハングしてビット状になる特徴はEⅢ-1住居跡ほかに共通する。大きさや深さは観察記録がない。

〈その他〉径70cmの異地性の焼土が床面中央に分布している。同様の堆積物は北側の床面直上にも見られ、25×40cmの規模である。

遺物(第108図・第109図、図版218・225・235)

〈出土状況〉灰白色浮石層を挟んだ上下で遺物を分けることができるが、どちらからも出土量は少ない。土器と鉄製品・土製品がある。

〈土器〉土師器壺・坏・縄文土器があり、縄文土器片が50点でもっとも多い。土師器壺はI類L2の318のほかは破片が15点あるだけで、II類は浮石上位から1点出土している。坏317はI類A2で、床面ほかからの破片が接合した略完形品である。他にはI類4点、II類1点の破片があり、II類は浮石上位からのものである。

〈鉄製品〉刀子319は浮石上位から出土している。木質の柄を残している。

〈その他〉縄文土器片を加工した円盤状土製品がある。

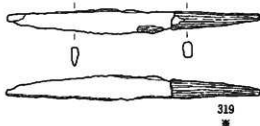
まとめと遺構の時期

317・318は本遺構と伴伴または時間的に近い関係にある。層状に堆積する灰白色浮石の存在やそれらから、平安時代I群に分類できる。

CⅢ-5住居跡

遺構(第110図・第111図、図版67.68)

〈検出状況・重複関係〉重複する遺構はない。



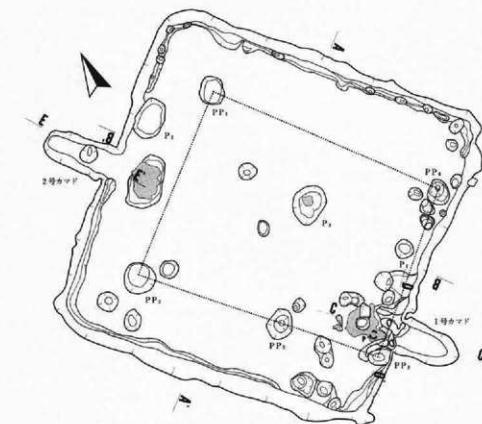
〈平面形〉隅丸正方形 〈規模〉5.5×5.5m 〈床面積〉25.8㎡ 〈主軸方向〉1号カマド：S-42°30'-E 2号カマド：N-42°30'-W

〈埋土〉黒褐色土が卓越する。火山灰・黒色土の大小塊を全体に含み、とくに東

No.	地点・層位	器 種	大きさ(最大): cm			重量g	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
319	埋土上部	刀子	(137)	身: 14 柄: 5.5	(13.4)		刃部先端をわずかに欠く。茎部の長さは71mm。木質部薄く残る。	235

$S = \frac{1}{2}$

第109図 CⅢ-4住居跡出土遺物(2)



壁高

壁	北西	南西	南東	北東
高さ cm	32	53	45	37

1号カマド

本体 (土)	長さ	幅	高さ cm	長さ	幅	高さ cm
	—	95		134	58	
地上	径	60×70	厚さ	径	47	6
地下	径	60×70		径	47	

2号カマド

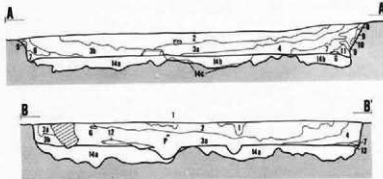
本体 (土)	長さ	幅	高さ cm	長さ	幅	高さ cm
	—	—		113	52	
地上	径	50×55	厚さ	径	26	6
地下	径	50×55		径	26	

住穴

No.	大きさ cm	深さ cm	柱痕跡
PP ₁	42×45	44	11×28
PP ₂	50	49	13×32
PP ₃	39×40	48	
PP ₄	37×42	52	
PP ₅	43×50	39	13×23

ピット

No.	P ₁	P ₂	P ₃
大きさ cm	35×43	46×65	50×65
深さ cm	9	18	14



1. 黒褐色。
2. 黒褐色。
- 3a. 黒褐色。
- 3b. 黒褐色。
4. 黒褐色。
5. 暗褐色。
6. 黒褐色。
7. 黒色。
8. 黒褐色。
9. 暗褐色。
- 10・11. 黒褐色。
12. 暗褐色。
13. 暗褐色。
- 14a~14c. 黄褐色~黒色。

第110図 CⅢ-5住居跡実測図(1)



第111図 C III-5 住居跡実測図(2)

$$S = \frac{1}{20}$$

側半分に顕著である。灰白色浮石は南東壁中央付近の埋土上部に小規模な広がり認められたにすぎない。

〈壁の状態〉直立する部分が多いが、南西壁は外傾する。〈壁高〉32～53cm 〈壁溝〉断続的ながら、ほぼ一周に近い。切れているのは、2号カマドやP 2付近、南隅付近の一部、1号カマドの東側である。

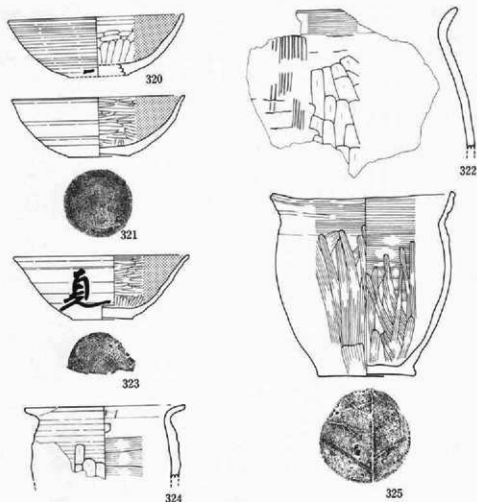
〈床面・掘り方〉ほぼ平坦である。中央の広い範囲が非常に硬く締まっている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉PP1～PP4の4本柱である。PP1・PP2は隅よりも内側に入った位置に、PP3・PP4は2号カマドが設置された南東壁際にあり、ほぼ長方形の配置になる(Ⅱ型・Ⅲa型)。PP2とPP3を結んだ線上に位置するものに、PP5がある。それと対になるような柱穴は床面を掘り下げて検出できず、どのような性格をもつものかは不明である。PP1・PP2・PP5は平面形が長方形あるいは長方形気味の柱痕跡を識別できる。以上のほかの柱穴状ピットの中には本遺構よりも明らかに新しいものや新旧関係が不明なもの、共伴すると考えられるが性格の不明なものがある。

〈カマド〉新旧2基があり、新期を1号カマド、古期を2号カマドとする。

1号カマド：〈位置〉南東壁中央からやや南西寄り 〈本体〉粘土質シルトと礫を構築材に

している。崩壊が激しいが、両側壁の下部が残っている。小型の土師器甕(325)を伏せた状態で支脚として使用している。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。底面は先端へ向かって緩やかに傾斜して上がっている。天井部はシルトで構築され、非常によく焼けている。煙出し部



No.	地 点 ・ 層 位	種 類	外 面			内 面		計 測 値 : cm			分層	図号
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 一 辺	黒色地帯	口 縁 部	胴 高	底 径		
320	床面一層	坪	ロクロ模	ロクロ模	押紐糸切り	ヘラミガキ	○	14.1	4.5	—	180	
321	2号カマド	土	土	土	土	土	○	13.5	4.7	4.9	土	218
323	煙土	土	土	土	土	土	○	14.0	5.1	4.8	土	218

No.	地点・層位	種類・器種	外面			内面			計測値: cm			分層	図号
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴高	底径		
322	床面	土師器甕	横ナデ	刷毛目・ヘラ デスリ	—	横ナデ	刷毛目・ナ デ	—	—	—	—		
324	掘り方層土	土	ロクロ模	ロクロ模・ヘ ラデスリ	—	ロクロ模	ヘラナデ	—	(12.8)	(5.8)	—	11M	
325	1号カマド支脚	土	横ナデ	ヘラナデ	木葉透	横ナデ	土	ナデ	14.9	14.6	7.7	11M	225

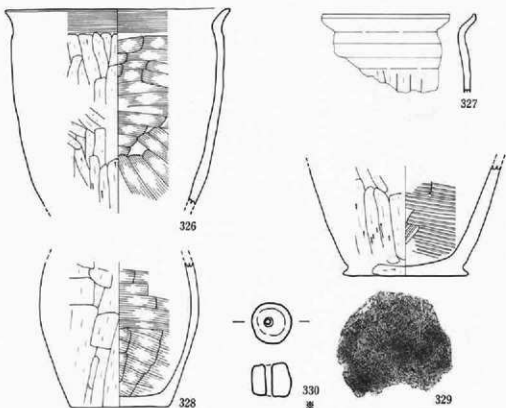
S = $\frac{1}{3}$

第112図 CⅢ-5 住居跡出土遺物(1)

への施設は確認できない。

2号カマド：〈位置〉北西壁中央 〈本体〉 焼土や木炭粒を含むシルトが火床部を覆うが、層厚は薄く、量も少ない。火床部は楕円形の浅い掘り込みの中に形成され、よく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉 掘り込み式である。底面は緩やかに傾斜して半ばまで下がったあと、水平から緩やかな上りに転じる。天井部を作っていた砂質シルトが部分的に残っている。煙出し部への施設は確認できない。

以上の2基のカマドの関係は次のようになる。残存状況から判断すると、1号カマドが住居廃絶時まで使用されているのに対し、2号カマドはそれよりも時間的に先行する。しかし、住



No	地点・層位	種類・形状	外 面				内 面				計測値：cm			分層図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口縁部	口径	唇高	底径		
326	埋土下部～床面直上	土器片	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—	18.0	(15.7)	—	(M)	
327	2号カマド	ロクロ板	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	ナデツケ	—	—	—	—	—	—	—	
328	2号カマド・埋土	—	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	ナデツケ	—	—	—	—	—	—	—	
329	1号カマド埋土下部	—	—	—	木炭底	—	—	—	—	—	—	—	—	

No	地点・層位	種類	大きさ(最大)：mm			重量g	特 徴	備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
330	埋土	土玉	11	11	—	1.05	孔径2mm。ていねいなミダナ。黒色。		240

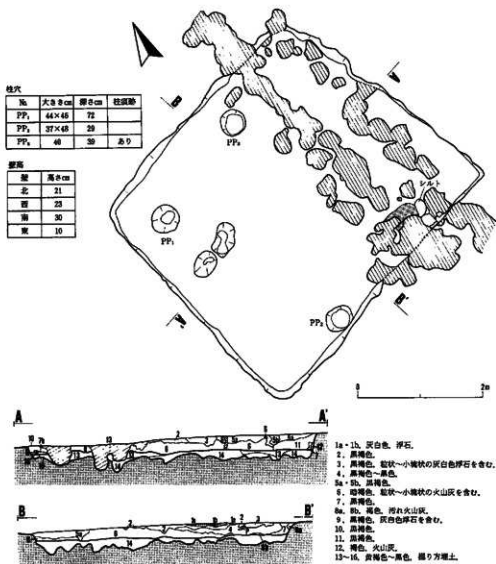
$$S = \frac{1}{1}(\text{米}) \cdot \frac{1}{3}$$

第113図 C III—5 住居跡出土遺物(2)

居の建て替えや拡張といったことを示す痕跡はみつかっておらず、単なるカマドの作り替えなのかもしれない。

〈付属施設〉 1号カマドの左側壁に接するようにP 1がある。平面形は不整形形で、深度も小さい。2号カマドの東にはP 2がある。平面形は楕円形で、深度は小さい。P 2には貼り床は確認できなかったが、位置的にみて、2号カマドとセットになる可能性が高い。床面中央にあるP 3は平面形が不整形形で、深度は小さく、底面が小規模に焼けている。

遺物 (第112図・第113図、図版218・225・240)



第114図 C III—6 住居跡実測図

〈出土状況〉埋土や埋土下部からの出土が大部分のほか、掘り方埋土・床面・カマド本体・床面直上・ピット・柱穴状ピット・煙道部から出土している。量はやや多い。土器と鉄滓・土製品・石器がある。

〈土器〉土師器甕・坏・須恵器・縄文土器がある。土師器甕はⅠ類が卓越し、M1aやM1bなどがある。Ⅱ類はM2bなどがある。325・329は木葉底である。坏は図示したⅠ類3点のうち、底部をわずかに残すだけの320も含め、B0である。破片資料ではⅠ類55点に対し、Ⅱ類が12点である。323は「貞」の墨書を体部に伴う。類似資料はGⅣ—5住居跡にもある（第212図579）。320は体部下端に墨痕がみられる。須恵器は壺？の破片1点が床面から出ている。縄文土器片は157点と多い。

〈鉄滓〉3個24gが床面から出土している。

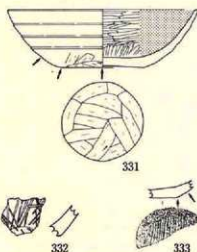
〈土玉〉1点330は埋土から出土している。

〈その他〉縄文時代前期前葉の円盤状土製品1点、石鏃など6点の剥片石器がある。

まとめと遺構の時期

1号カマドの支脚に使われていた325は本遺構に共伴する。320や321・326～329なども共伴あるいは時間的に近い関係にある。埋土の状況やそれらから、平安時代Ⅰ群に分類できる。

CⅢ—6住居跡



遺構（第114図、図版69）

〈検出状況・重複関係〉カマドを含む東側方は耕作による破壊が床面までおよんでいる。また、全体的に上部を削刺されている。重複する遺構はない。

〈平面形〉台形 〈規模〉4.3×4.2～4.9m 〈床面積〉17.8m² 〈主軸方向〉S—24°—E

〈埋土〉暗褐色土・黒褐色土が主体である。灰白色浮石は中央からやや南寄りの部分の埋土上部に堆積している。88×100cmの範囲に凹面を作って分布し、最大層厚は6.5cmである。上位から下位へ

No	地点・層位	種 類	外 面				内 面		計測値：cm			分類	図版	
			口縁部	胴部	底 部		口一底	黒色粘用	口 径	厚 度	底 径			
331	埋土下部	坏	口縁部	胴部	底 部		ヘタケズリ	ヘタミダキ	○	15.2	4.6	6.6	ⅠA	218
333	埋土	?	—	—	静止面切り・ヘタケズリ	部		○	○	—	—	—	ⅠA	

No	地点・層位	種類・形状	外 面				内 面				計面積：cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底	部	口縁部	胴部	底	部	計	黒	底		
332	埋土	土師器甕	—	胴部	底	部	—	—	—	—	—	—	—		

第115図 CⅢ—6住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{3}$$

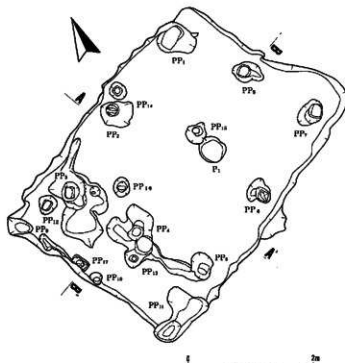
極細粒・粗粒・細粒と分級化し、葉層がみられる。周辺部には同浮石の大小塊が分布している。

6層は火山灰の大小塊を全体に含む。

〈壁の状態〉直立～緩やかな外傾 〈壁高〉10～30cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は中央の広い範囲が硬い。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉PP1～PP3のほかにも2個の柱穴状ピットが検出されている。PP2とPP3は柱痕跡

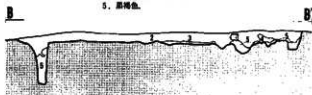


柱穴

No	大きさcm	深さcm	径深跡
PP ₁	50×60	84	30×50
PP ₂	45×50	71	21×22
PP ₃	38×30	82	
PP ₄	18×24	91	22×24
PP ₅	35×45	78	15×18
PP ₆	21×29	70	
PP ₇	45×48	72	21×22
PP ₈	32×51	66	20×22
PP ₉	25×40	床面から21	
PP ₁₀	20	29	
PP ₁₁	25×36	床面から7	
PP ₁₂	30×32	53	13×17
PP ₁₃	25×28	67	11×15
PP ₁₄	25×28	58	
PP ₁₅	31×36	59	
PP ₁₆	26×31	63	18
PP ₁₇	14×28	22	



- 1・2. 黒褐色。
3. 黒褐色。火山灰を含む。
4. 黒褐色。腐土を含む。
5. 黒褐色。



ピット

No	大きさcm	深さcm
P ₁	30×41	8

壁高

壁	高さcm
北	14
西	18
南	31
東	9



重複位置図

第116図 C III-7 住居跡実測図

が識別できる。配置からみて、支柱穴として適当なものはない。

〈カマドの位置〉南壁中央と東隅との中間 〈カマド本体〉構築材の一部であるシルトと原位置にある芯材の礫2個・火床部が残るにすぎない。火床部の層厚は5cmである。〈煙道部・煙出し部〉攪乱により、存在の有無を含めて不明である。

遺物（第115図、図版218）

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、出土量は少ない。埋土を中心に、床面直上・掘り方埋土・カマド本体から出土している。埋土はほぼ下部に相当する。土器と土製品・石器がある。

〈土器〉破片数の多い方から順に、土師器壺・縄文土器・坏・須恵器がある。坏331を除いてはすべて破片である。土師器壺はⅠ類が卓越するが、口縁部資料ではⅠ類6点、Ⅱ類4点である。木葉底は1点である。332は鋭いヘラ状工具による刻線を伴う胴部下端の小破片で、わずかに残る底部へも施文されている。坏は、図示したⅠ類の2点以外にⅠ類・Ⅱ類とも5点ずつがある。須恵器は壺が1点である。

〈その他〉縄文時代後期前葉の十層内Ⅰ式期の鐙形土製品（第387図1768）や石鏃2点など4点の剥片石器がある。

まとめと遺構の時期

接合復元資料は埋土下部からの坏331だけである。埋土の状況から、平安時代Ⅰ期に分類できる。

CⅢ-7 住居跡

遺構（第116図、図版69・70）

〈検出状況・重複関係〉CⅢ-8住居跡（平安時代）やCⅢ-9・10の各住居跡（ともに時期不明）を切っているが、CⅢ-159焼土遺構（時期不明）は本遺構の埋土上に形成されている。

〈平面形〉ほぼ長方形であるが、東壁の一部が不整形に張り出す。〈規模〉3.3×4.6～4.9m

〈床面積〉13.8㎡

〈埋土〉黒褐色土が卓越する。

〈壁の状態〉ほぼ直立 〈壁高〉9～19cm 〈壁溝〉PP4とPP5の間、PP17からPP9方向へ、またPP11から東方向へ短く伸びているが、確実なものではない。

〈床面・掘り方〉PP1～PP12～PP5～PP7を結んだ内側は浅い掘り方を下位に伴い、床面は硬く締まっている。そのほかの部分はⅥ層黒褐色土を床面にしている。

〈柱穴〉共有一再利用の関係にあるものを含めると、2群の配置が考えられる。A群は、PP1～PP8とその西側に張り出すPP9～PP11を結ぶ11個で構成される。一部がややいびつになるものの、長辺方向に4本ずつ、短辺方向に3本ずつ配置される。PP1～PP8が58～84cmと深

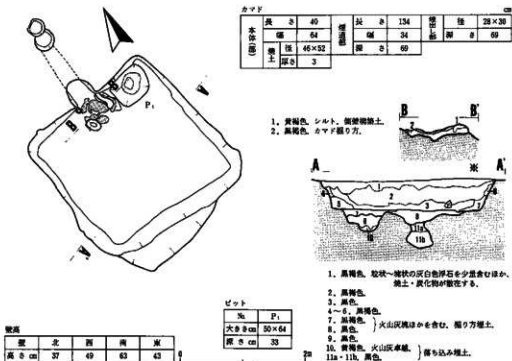
いのに対し、PP9～PP11は7～29cmと浅い。柱痕跡と掘り方が識別できるのはPP1・PP2・PP5・PP7・PP8の5個である。B群は、PP1・PP2・PP12・PP13・PP5～PP8と西側に張り出すPP9～PP11を結ぶもので、11個で構成される。PP1・PP2・PP5～PP12はA群と共有一再利用の関係にある。PP12・PP13は柱痕跡を伴う。そのほか、住居内にあって深度の深いものにPP14～PP16がある。そのうちPP15は貼り床の下位に検出されている。A・Bどちらの群に属するかは分からないが、PP14またはPP2～PP15～PP6を結び、柱穴配置の一部とすることができるのかもしれない。PP17も本遺構に伴う可能性がある。なお、PP4とPP13に挟まれている円形ピットは本遺構の下位にくりぬき式の煙道部をもつCⅢ-8住居跡の煙出し部である。

〈その他〉円形の浅皿状ピットP1がPP15に接する南側にある。その性格や機能は不明である。

遺物

〈出土状況〉埋土からの出土が大部分で、少量が掘り方埋土と柱穴から出ている。土器と鉄滓・剥片石器があるが、量は少ない。

〈土器〉破片数の多いものから順に、縄文土器・土師器壺・坏・須恵器壺があるが、すべて



第117図 CⅢ-8 住居跡実測図

破片である。

〈その他〉鉄滓1個90gが掘り方埋土、尖頭石器1点が埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

重複関係や住居形式からは平安時代以降の住居跡とすることができるが、それ以上に時期を限定できる資料を欠き、所属時期は不明としておく。

CⅢ-8住居跡

遺構(第117図、図版70・71)

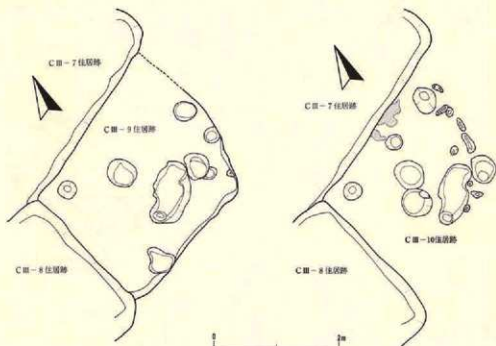
〈検出状況・重複関係〉重複するCⅢ-7住居跡(時期不明)に北壁の一部や煙出し部の上部を切られているほか、CⅢ-160焼土遺構(時期不明)は本遺構の埋土上部に形成されている。

CⅢ-9・10住居跡(ともに時期不明)との新旧は不明である。

〈平面形〉わずかにいびつな隅丸正方形 〈規模〉2.5×2.5m 〈床面積〉4.7㎡ 〈主軸方向〉N-12°30'-W

〈埋土〉黒褐色土が卓越する。最上部の1層は粒状～塊状の灰白色浮石を少量含む。浮石塊の粒径は10mmが主体で、最大が30mmである。中・下部の層準には粒径13～30cmの亜角礫・亜円礫8個が分布し、北半に多い。

〈壁の状態〉直立～外傾。南壁の上半が大きく外傾する。〈壁高〉37～63cm 〈壁溝〉伴わな



第118図 CⅢ-9・10住居跡実測図

い。

〈床面・掘り方〉 壁寄りの周辺部をのぞいては掘り方を伴い、その部分の床面はかなり硬い。

〈柱穴・炉〉 伴わない。

〈カマドの位置〉 北壁中央 〈カマド本体〉 残存状態は良くない。崩壊土は汚れ火山灰が卓越し、シルトの大塊が部分的に認められる。右側壁下部がいくぶんよく残っている。下位には円形の浅い掘り方を伴う。〈煙道部・煙出し部〉 くりぬき式で、CⅢ-7住居跡の床面下に検出された。底面は傾斜して下がり、煙出し部は円形のビットである。

〈付属施設〉 カマドの東隣りに貯蔵穴P1がある。平面形は不整形で、壁に凹凸がある掘り鉢状になる。そのほか埋土2層の黒褐色土の下位に層厚10cm±の焼土が堆積している。

〈その他〉 不整形な落ち込みが掘り方面に検出されたが、遺構として確認できなかった。

遺物

〈出土状況〉 縄文土器片16点が埋土・床面・P1から出土しているだけである。

まとめと遺構の時期

平安時代に分類できるが、細分はできない。

CⅢ-9住居跡

遺構（第118図）

〈検出状況・重複関係〉 下位に存在するCⅢ-10住居跡（時期不明）の上に貼り床を施しており、それよりは時間的に新しいことを知ることができる。CⅢ-7住居跡（時期不明）には切られ、CⅢ-8住居跡（平安時代）との新旧関係はCⅢ-8住居跡を先に掘り上げてしまったために不明である。

〈平面形〉 東壁の一部と南壁が残るにすぎないため、方形であることが推定できるだけである。〈規模〉 2.5×2.9cmの範囲が残存する。〈床面積〉 不明。

〈埋土〉 床面を覆う黒褐色土が残っていたにすぎない。

〈壁の状態〉 低い壁が部分的に残るだけである。〈壁高〉 8cm± 〈壁溝〉 調査した範囲には検出していない。

〈床面〉 北壁からCⅢ-7住居跡に切られている間には非常に硬く締まった面が広がる。

〈柱穴〉 8個の柱穴状ビットが検出されているが、支柱穴になるものではない。

〈カマド・炉〉 調査した範囲には検出されていない。

〈その他〉 東隅寄りにP1がある。平面形が不整形円形状の浅皿状のビットである。埋土は住居跡埋土から連続するもので、上部に灰白色浮石の小塊を少量含んでいる。また、上部から中部には焼土と大型の炭化材が含まれ、材は量的に多い。焼土は底面直上にも含まれるが、少量である。本遺構に伴伴するビットの可能性があるが、性格は不明である。

遺物

〈出土状況〉 検出時に、ほぼ床面近くまで掘り下げているため、遺物量は少ない。埋土やP1・柱穴状ピットから出土している。土器と礫石器がある。

〈土器〉 すべて破片で、縄文土器18点・土師器甕1点、坏Ⅰ類B01点がある。

〈その他〉 凹石1点が埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

住居形式や重複関係・出土遺物とも確実な資料を欠き、所属時期は不明である。

CⅢ-10住居跡

遺構（第118図、図版71）

〈検出状況・重複関係〉 CⅢ-9住居跡（時期不明）の貼り床下に存在する。CⅢ-7住居跡（時期不明）には切られているが、CⅢ-8住居跡（平安時代）との新旧関係は不明である。

〈平面形・規模・床面積〉 壁がつかめず、いずれも不明である。

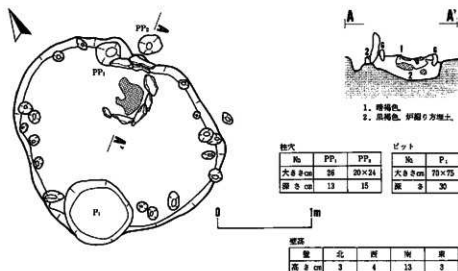
〈埋土〉 CⅢ-9住居跡の貼り床下と床面に挟まれた黒褐色土の薄層が観察できるだけである。

〈壁〉 把握できなかった。

〈床面〉 V層黒褐色土を床面にし、軟らかい。

〈柱穴〉 柱穴状ピットPP1とPP2が検出され、ともに深い。PP1は灰白色浮石の小塊を埋土に含む。性格は不明である。

〈その他〉 現地性焼土がCⅢ-7住居跡に切られている部分に形成されている。残存部は、径が25cmと53cm、層厚が2cmである。PP2の南側には粒径20cmの礫1個があり、焼けた粘土塊



第119図 CⅢ-11住居跡実測図

がわずかに付着している。付近には粘土の塊も散在するが、それらと焼土との関係や性格は不明である。

遺物

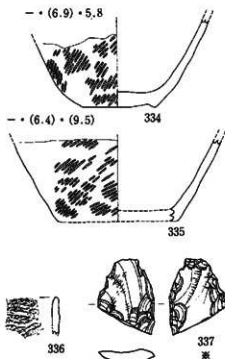
〈出土状況〉本遺構の床面とCⅢ-9住居跡の貼り床に挟まれた薄層から、縄文土器12点・土師器壺4点・坏Ⅰ類1点の破片が出土しただけである。

まとめと遺構の時期

住居形式や重複関係・出土遺物とも確実な資料を欠き、所属時期は不明である。

CⅢ-11住居跡

遺構（第119図、図版72）



〈検出状況・重複関係〉V層を掘り込み、V層とVI層を壁や床面にしている。炉の南東部は壁をほとんど消失している。下位に検出されたCⅢ-67 (105) ビットとは位置的に重複するが、直接的な切り合いはなかったものと推定される。

〈平面形〉不整円形 〈規模〉2.0×2.3m
〈床面積〉2.8㎡

〈埋土〉黒褐色土の単層である。木炭を多く含むが、細片がほとんどである。木炭は炉のなかや貯蔵穴の埋土にもみられる。

〈壁の状態〉直立～外傾 〈壁高〉3～13cm
〈壁溝〉伴わない。

〈床面〉大部分はVI層を床面にし、軟らかい。

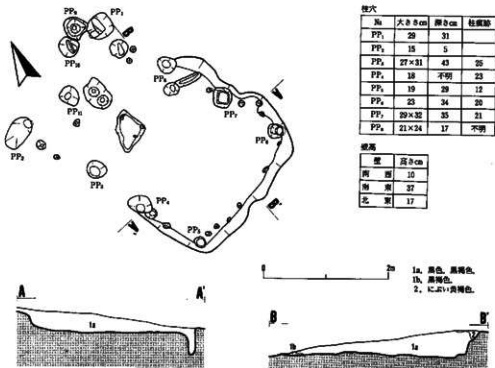
〈柱穴〉小さな柱穴状ビットが壁沿いの床面に数多く検出されている。計測平均値は、

No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分	類	備考
334	埋土層下部	土師器	胴部	筒状直口、LR	ミダキ				
335	埋土	土師器	底	底面欠、LR	ミ				
336	P1表面	土師器	口縁部	短い直状、短い平行状、RL?	凹凸	縦線微量			

No	地点・層位	器種	大きさ(最大):cm	重量:g	石材名	特徴・備考	図版
337	埋土	不定形石器	(40) 30	7 (9.2)	地質泥岩、Da3	S. 保存二輪刃加工	

$$S = \frac{1}{2}(\text{米}) \cdot \frac{1}{2}$$

第120図 CⅢ-11住居跡出土遺物



第121図 CIV-1 住居跡実測図

径が12cm、深さが5.2cmである。全部が柱穴になるとは考えられない。特定はできないが、それらの多くが壁柱穴を構成するものであろう。PP1としたものは他に比べると径が大きい。PP2は住居跡と同じ埋土をもち、位置的にも伴うピットと考えるべきかもしれない。

〈炉〉北東壁寄りに位置し、石囲い炉の形態をもつ。12～30cmの亜角礫7個を「コ」字形に配し、壁側の部分だけは粒径32cmの板状の礫の側面を上下にして埋設し、二重にしている。礫を欠く北西部は、抜き取り痕がないことや木炭の細粒がその部分を覆うことを考えると、もともと開口していたのであろう。炉の大きさは56×74cmである。断面を観察すると、焼土は暗褐色土を間に挟んで上下に2層形成され、それぞれが使用面になるものと推定される。

〈付属施設〉円筒形のピットP1が南西壁を切るようにして炉の反対側にある。埋土は住居跡埋土から連続するものであり、本遺構に伴って貯蔵穴に類する性格をもつものであろう。

遺物 (第120図)

〈出土状況〉少量の縄文土器と不定形石器1点337が埋土と埋土最下部から出土している。

〈土器〉334・335は1/2周ほどが残存する。図示例以外には深鉢の胴部破片6点があり、そのうち1点は胎土に繊維を含んでいる。

まとめと遺構の時期

住居や炉の形態・出土遺物からは縄文時代後期に分類できるであろう。本遺跡での後期の土器の在り方や分布からは初頭～前葉のなかに限定されるものと推定する。

CⅣ区

CⅣ-1 住居跡

遺構（第121図、図版72・73）

〈検出状況・重複関係〉緩斜面下部の北西側ほどは床面や壁が把握できない。重複する遺構はない。

〈平面形〉長方形と推定されるが、東壁は凹凸がある。〈規模〉2.6×（推定）3.8m 〈床面積〉8.9㎡（推定）

〈埋土〉にぶい黄褐色土が南東壁際上部に堆積するほかは黒褐色土・黒色土の単層に近い。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉10～37cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉斜面上方は“地山”を床面にする。PP7の北西部は浅い掘り方を埋めて床を作るが、それほど広い範囲ではない。

〈柱穴〉PP1～PP8の8本柱である。推定も含むが、それらは四隅と長辺はその間に2個ずつ配置されるものである。柱痕跡と掘り方を識別できるのはPP3～PP8の6個である。柱痕跡の平面形は円形・方形・不整形である。掘り方の平面形が方形あるいはそれに近いのはPP6・PP7である。PP9・PP10は大きさや深さの点では柱穴の可能性はあるが、位置や配置は上記の一群からはずれている。

〈炉〉中央からやや北西に寄った位置に、大きさが46×68cm、深さが6cmの三角形の掘り込みがある。焼土が底面から数cm上位に形成されている。焼土は薄層で、木炭や炭化物粒が混じっている。内部にある小ピット4個のうち、径4～7cm、深さ5～7cmの3個を伴い、1個からは濾し紙の小片が出土している。検出状況や類似の住居跡の炉を考慮に入れると、本来は方形になるものかもしれないが、対応するピットは他に検出されていない。

遺物（第332図、図版242）

〈出土状況〉少量が埋土や床面・炉ほかから出土し、土器・漆の濾し紙・漆膜がある。

〈土器〉土師器壺1点と縄文土器3点の破片がある。

〈漆の濾し紙・漆膜〉濾し紙は南東部の埋土下部から床面にかけて集中していたほか、炉のなから少量が出土している。太さは3mmが主体で、5mm・6×9mmのものが少数含まれている。燃りのかかった棒線状のものが主で、最大22cmの長さのものがある。しかしほとんどが折れて小破片となっている。それ以外には900のように、径21×28mmの球状のものがある。これは先の棒線状のものをさらに径6mmほどのもの3本を束ねた木の棒にまきつけて漆をしぼったものと推定される。色調は大部分が赤色～暗赤色で、一部にぶい黄褐色である。

漆膜は先の塗り紙の集中箇所から出土した。直径66mmのほぼ正円で、きわめて薄い。色調は暗赤褐色（10R $\frac{3}{6}$ ）である。木製の容器の底に付着した膜が固化し、容器が腐敗した後も残ったものと推定される。

まとめと遺構の時期

同様の塗り紙とともに陶磁器・寛永通宝が出土し、類似の炉形態をもつCⅢ-2住居跡との比較から、近世後半あるいはそれ以降のものとして分類できるであろう。遺構の性格もCⅢ-2住居跡と同様のものと考えられる。

DⅡ区

DⅡ-1住居跡

遺構（第122図、図版73）

〈検出状況・重複関係〉西側約 $\frac{1}{2}$ が調査区域外に出る。東隅を含む $\frac{1}{4}$ の範囲には、本遺構の埋土に貼り床したDⅡ-4住居跡（平安時代）が存在する。南西壁中央付近で重複する浅皿状ピット（径125cm×不明・深さ10cm）には埋土から切られるほか、DⅡ-151焼土（時期不明）や多くの柱穴状ピットに切られている。

〈平面形〉隅丸方形になるものと推定される。〈規模〉北東～南西方向で4.4m。北西～南東では4.7m+ぐらいになる。〈床面積・主軸方向〉不明。

〈埋土〉黒褐色土が卓越する。粒状～小塊状の灰白色浮石のほか、火山灰塊を全体に含む。

〈壁の状態〉直立～わずかに外傾 〈壁高〉15～26cm 〈壁満〉調査した範囲には検出されなかった。

〈床面・掘り方〉床面は軟らかく、小凹凸がある。全体的には南西側へわずかに傾斜して下がついている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴・カマド・貯蔵穴〉調査した範囲には検出されていない。

遺物（第123図）

〈出土状況〉埋土を中心に、掘り方埋土・床面から出土しているが、量は少ない。土器と鉄滓・石器がある。

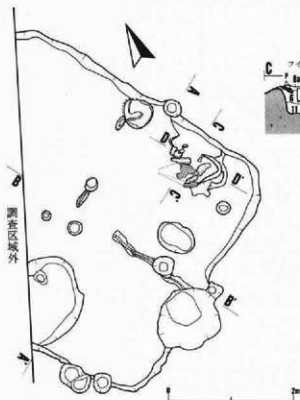
〈土器〉破片数が多い方から順に、縄文土器・土師器甕・坏・須恵器がある。図示した338を除いては破片である。土師器甕はⅠ類が卓越し、Ⅱ1などがある。坏はⅠ類2点、Ⅱ類1点である。須恵器は甕である。

〈鉄滓〉1点23.5gが埋土下部から出土している。

〈その他〉不定形石器など2点の剥片石器がある。

まとめと遺構の時期

土師器甕338や埋土の状況・重複関係から、不安時代Ⅱ群に分類できる。



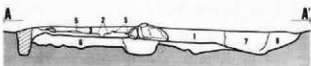
1. 黒色～黒褐色。
2. 黒褐色。
3. 明褐色。
4. 暗褐色。
5. 褐色。
6. 黒褐色。粘土質シルトを含む。
7. によい黄褐色。粘土質シルト。
8a・8b. 黒褐色・明褐色の混土。
9. 黒色。
10. 黒褐色。
11. 褐色～黒褐色。DII-1住居跡埋土。

壁高					
壁	南	西	南	東	北
高さcm	15	16	26		

カマド					cm
長さ	96				
幅	96				
径	28×50				
厚さ	6				



重複位置図



1. 黒褐色。粒状～小塊状の灰白色浮石・火山灰塊を全体に含む。
2. 暗褐色。
3. 黒褐色。
4. 黒褐色。焼土・炭化物・火山灰塊のほか、少量の灰白色浮石を含む。
5. によい黄褐色。DII-4住居跡の盛り土。
6. 黄褐色～黒色。DII-1住居跡の盛り土。
7・8. 黒褐色。埋土を切るビット埋土。
9. DII-151埋土に伴う層。
1・2はDII-1住居跡埋土。
3・4はDII-4住居跡埋土。

$$S = \frac{1}{40} (\text{cm})$$

第122図 DII-1・4住居跡実測図

D II-2 住居跡

遺構 (第124図～第126図、図版74・75)

〈2棟の重複〉2群の柱穴配置や貼り床・壁溝の在り方から、新旧関係のある2棟が重複していることを知ることができる。新时期を2a住居跡、古期を2b住居跡として記載する。

〈検出状況・重複関係〉西隅を含む北西壁と南西壁の一部が調査区域外に出る。重複するD III-3住居跡(縄文時代)を切っている。

D II-2 a 住居跡

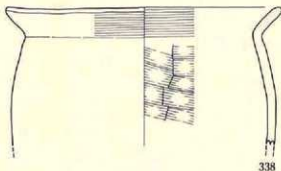
〈平面形〉一部が隅丸の長方形 〈規模〉6.5×7.6m 〈床面積〉43.4m²(推定) 〈主軸方向〉N-39°30'-W

〈埋土〉黒褐色の土層群が卓越する。灰白色浮石は最上部をのぞいては床面まで多量に見られ、粒径10～150mmの塊状を示す。浮石と同様に、火山灰の大小塊やそれよりは少量であるが、黒色土塊も多い。

〈壁の状態〉直立～外傾 〈壁高〉32～60cm 〈壁溝〉南西壁沿いと南隅付近にある。幅は7～13cm、深さは3～16cmである。

〈床面・掘り方〉壁沿いをのぞいては硬く締まっている。2b住居跡の東隅付近の狭い範囲に層厚2cmの貼り床を施しているものの、大部分は2b住居跡の床面をそのまま再利用している。全体規模の掘り方を下位に伴うが、2b住居跡と重なる部分をのぞいた掘り方が本遺構に固有である。

〈柱穴〉PP1～PP4の4本柱である。PP1・PP2は隅から中に入った位置に、PP3・PP4はカマドが設置される壁とは反対の南東壁際にある(II型)。ほぼ正方形の配置になる。それらは柱痕跡を確認でき、平面形は楕円形や二辺が凸辺の長方形である。PP10やPP11は本遺構を切る新しい時期の柱穴状ビットである。

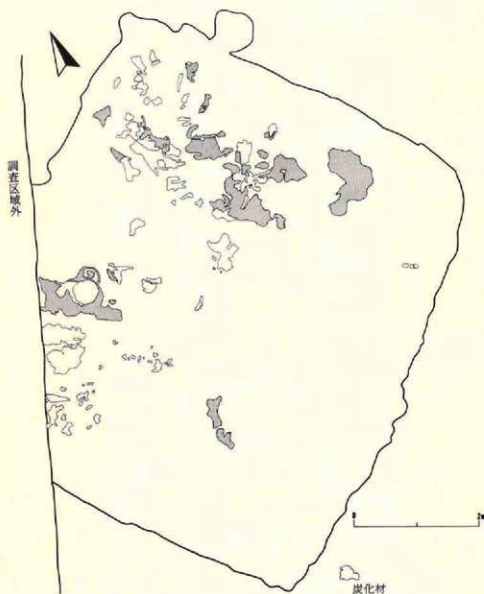


〈カマドの位置・本体〉焼土を混入した粘土質シルトの薄層が北西壁中央際に分布し、現地性焼土がその下位に検出された。検出状況や焼土の形態・位置からみて、カマド火床部と推定できる。一部が調査区域外に出るが、径は60cm以上×50cm、層厚は3cmである。

No	地点・層位	種類・図様	外 面				内 面				計測値: cm	分類	図版
			口縁部	側 部	底 部	口縁部	側 部	底 部	口縁部	側 部			
338	埋土	土路器壁	横ナデ	化粧粘土	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	22.0	(11.0)	—	11a	

第123図 D II-1 住居跡出土遺物

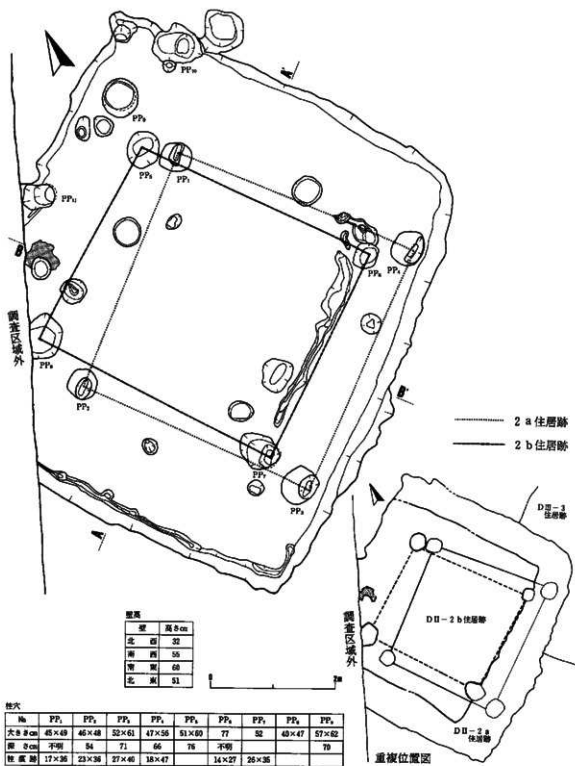
$$S = \frac{1}{3}$$

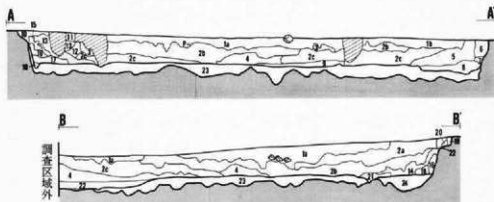


第124図 D II-2 住居跡実測図(1)

〈煙道部・煙出し部〉 調査区域外に出るため、有無を確認できない。

〈焼失〉 焼土と炭化物が床面・床面直上の層準に広範囲に分布し、とくに北半に多い。また一部では隙も床面上に分布する。炭化物は草本類を主に、材が混じる。焼土の層厚は最大3cmである。焼土・炭化物とも量的には大量ということではないが、出土する層準や広範囲な分布ということを考えると、焼失住居である可能性が高い。





- 1a・1b, 黒褐色。灰白色浮石を少量含む。
 2a・2b, 黒褐色。灰白色浮石塊・火山灰塊を少量含む。
 2c, 黒褐色。2a・2bに類似し、黒色土塊も含む。
 3, 黒褐色。
 4, 黒褐色。灰白色浮石・火山灰塊・炭化物を含むが、2層よりも少ない。
 5, 黒褐色。4層に似るが、硬土も含む。
 6・7, 黒褐色。
 8, 黒褐色～黒色。灰白色浮石・褐色土・黒色土の塊のほか、少量の粘土・炭化物を含む。
 9, 黒褐色。少量の灰白色浮石・火山灰の塊のほか、炭化物を含む。
 10・11, 黒褐色。灰白色浮石を含む。
 12, 黒褐色。
 13, 黒褐色。塊状の灰白色浮石・火山灰を含む。
 14, 黒褐色。灰白色浮石を含む。
 15, 黒色。
 16, 黒褐色。
 17・18, 黒褐色。灰白色浮石・火山灰を含む。
 19～21, 黒褐色。
 22, におい黄褐色。粘土質土。硬土を含む。
 23・24, 黄褐色～黒色。固り方硬土。

$$S = \frac{1}{50}$$

第126図 D II—2 住居跡実測図(3)

D II—2b 住居跡

〈検出状況〉 2 a 住居跡に全形を覆われる形で存在する。北東壁と南東壁が推定でき、柱穴配置を考慮に入ると、南西壁も推定できる。

〈平面形〉 長方形と推定 〈規模〉 北東～南東方向5.7m と推定 〈主軸方向・床面積〉 不明

〈壁〉 先に推定した三方の壁は 2 a 住居跡に壊されている。北西壁については分からない。

〈壁溝〉 PP 7 と PP 8 の間にある。PP 8 寄りの部分は貼り床を施されている。

〈床面・掘り方〉 中央付近の広い範囲が硬く締まっている。2 a 住居跡の側から層厚 1～3 cm の貼り床が東隅付近や PP 9 の東側の一部にも施されている。下位には全体規模の掘り方を伴う。

〈柱穴〉 PP 5～PP 8 の 4 本柱である (II 型の可能性)。柱穴が住居内で占める位置や配置形態は 2 a 住居跡に似る。PP 6・PP 7 は平面形が長方形の柱痕跡が識別できる。PP 9 は貼り床が上部の一部に及ぶ。本遺構に伴うことも考えられるが、性格は不明である。

〈カマド〉 不明である。

以上、2棟について記載したが、柱穴配置の類似性や床面の再利用ということを考えると、2b住居跡→2a住居跡へと拡張したことが考えられる。

遺物 (第127図～第129図、図版218・225・226・233・235)

〈出土状況〉埋土を中心に、床面・掘り方埋土・カマド本体から出土し、種類・量とも多い。土器と鉄製品・鉄滓・竈の羽口・石器がある。

〈土器〉土師器甕を中心に、縄文土器・坏・土師器壺・須恵器・土師器高台部が出土している。土師器甕は接合復元ができる資料が少ない。I類が卓越し、M2aなどがある。II類352はM2bである。小礫を多く含み、色調はにぶい橙色(7.5YR $\frac{1}{2}$ 周辺)である。347は鋭いヘラ状工具による刻線を胴部下端に伴う。底部はわずかしこ残っていないが、同様の刻線を伴うであろう。底部資料では木葉底2点、砂底1点のほか、窪状凹痕をもつ353がある。坏はI類が卓越する。図示例7点はI類で、剥落によって切り離し技法や再調整の有無が不明な339を除いてはすべて再調整され、A2が4点、C2が2点である。他の破片資料はI類44点、II類7点である。348は小型の土師器短頸壺である。ロクロ成形のあと静止糸切りで切り離し、胴部外面をていねいにヘラミガキしている。土師器の高台部346は身の部分の内面はヘラミガキと黒色処理が施されている。大型であり、鉢になるものかもしれない。須恵器は壺の破片2点があるにすぎない。

〈鉄製品・鉄滓〉鎌356はカマドのやや南西部の床面直上から、刀子355は埋土上部から出土している。355は茎の先端の折れた部分が重なっている。鉄滓は埋土と床面から19点492gがある。

〈竈の羽口〉破片2点がある。354は埋土から、他の小破片はカマド崩壊土から出ている。

〈その他〉不定形石器と磨製石斧の小破片が1点ずつある。

まとめと遺構の時期

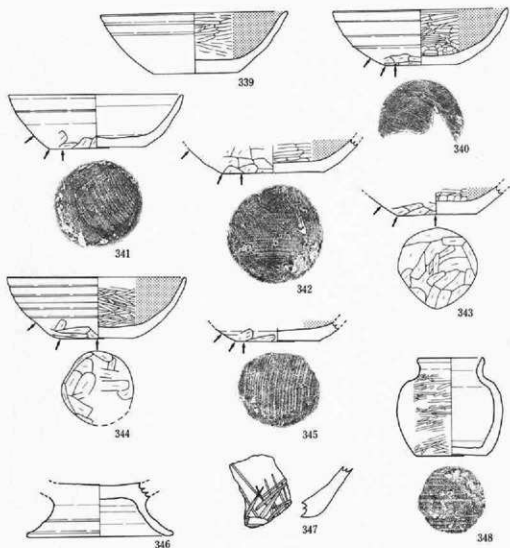
ほぼ全部の遺物が2a住居跡に固有のものと考えてよい。土師器甕349・352、坏339・340は2a住居跡と時間的に近い関係にあることが考えられる。埋土の状況とあわせ、2a住居跡は平安時代II群に分類できる。拡張ということを考えるならば、2b住居跡は2a住居跡と時間の大幅な隔たりはないであろう。

DII-3住居跡

遺構 (第130図、図版75・76)

〈検出状況・重複関係〉西隅を含む北西壁の一部と南西壁の大半は最近の削剝を受け、消失している。重複する遺構はない。

〈平面形〉いくぶん隅丸の正方形と推定 〈規模〉3.2×3.3m 〈床面積〉7.7 m^2 (推定) 〈主軸方向〉S-50°-E

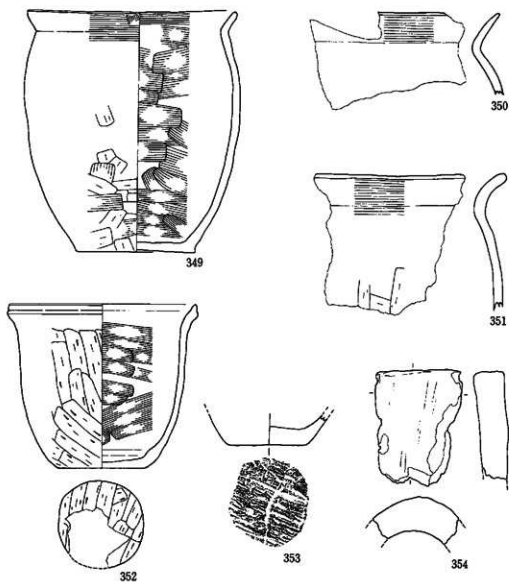


No	地点・層位	種類	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分冊	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	胴 高	底 径		
339	断面	坪	ロクロ痕	ロクロ痕	剥落のための不明	ヘラミガキ	○	○	14.9	4.8	6.8	1E	
340	カマド	H	ヘラミガキ	ロクロ痕・ヘラミガキ	静止糸切り・ヘラミガキ	*	○	○	13.9	6.4	5.8	1A2	218
341	灰面・灰面直上	H	ロクロ痕	H	* * H	*	?	?	14.0	4.3	7.6	*	219
342	埴土	H	—	ヘラミガキ	* * H	*	○	○	—	(2.2)	8.0	*	
343	埴土下部	H	—	H	ヘラミガキ	*	○	○	—	(2.2)	6.4	1C4	
344	埴土上部	H	ロクロ痕	ロクロ痕・ヘラミガキ	H	*	○	○	14.3	3.0	5.8	*	218
345	埴土下部	H	—	H *	静止糸切り・ヘラミガキ		○	○	—	(1.0)	6.7	1A2	218

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分冊	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	胴 高	底 径		
346	埴土下部	坪遺台部	—	—	ロクロ痕	—	—	ヘラミガキ	—	(4.3)	11.7		
347	埴土	土間器壁	—	剥離	—	—	ヘラミガキ	—	—	—	—		
348	埴土・埴土下部	土間器短頸器	ロクロ痕	ヘラミガキ	静止糸切り	ロクロ痕	ロクロ痕	ナデツケ	5.2	7.8	5.6		233

$$S = \frac{1}{8}$$

第127図 DII-2 住居跡出土遺物(1)



No	地点・層位	観察・図様	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	高さ	底径		
349	庭前・埋土下部	土師器類	横ナデ	ヘラケズリ	木直造	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	16.7	19.4	9.6	IM2	225
350	埋土上部	〃 〃	〃	ナデ?	—	〃	〃	—	—	—	—		
351	庭前	〃 〃	〃	ヘラケズリ	—	〃	〃	—	—	—	—		
352	庭前直上	〃 〃	ロクロ底	〃	ヘラケズリ	ロクロ底	〃	ロクロ底	15.6	13.1	7.0	IM3	226
353	埋土上部	〃 〃	—	〃	底状圧痕	—	ナデ	ナデ	—	—	6.2		

No	地点・層位	器 名	大きさ(最大): cm			特 徴	備 考	図 版
			長さ	幅	厚さ			
354	埋土	陶製口	—	—	25	(196.5)	一端を含む破片。	

$$S = \frac{1}{4}$$

第128図 DII-2 住居跡出土遺物(2)

〈埋土〉 黒褐色の土層群が優占的である。灰白色浮石を全体に含み、量も多い。とくに、床面を覆う3層中に多く認められる。粒径は最大30mmであるが、小塊が多い。

〈壁の状態〉 ゆるやかな外傾 〈壁高〉 22～25cm 〈壁溝〉 調査できた範囲には検出されていない。

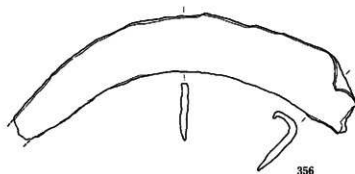
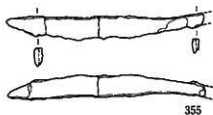
〈床面・掘り方〉 P1とP2に挟まれた部分や北東壁際の床面は凹凸があつて軟らかく、掘り方を確認できない。他はほぼ平坦で硬く、下位に掘り方を伴う。

〈柱穴〉 伴わない。

〈カマドの位置〉 南東壁中央と南隅との中間 〈カマド本体〉 多くの礫と粘土質シルトで構築されているが、崩壊がいちじるしい。両側壁の一部と火床部が確認でき、下位には浅い円形の掘り込みを伴う。使用される礫は粒径12～30cmの亜角礫・亜円礫である。〈煙道部・煙出し部〉 掘り込み式である。粒径20～36cmの扁平な亜角礫を側壁に、粒径16～32cmのいくぶん厚みのある礫を天井部に使用し、粘土質シルトで被覆しているが、主に天井部の礫が崩壊・移動している。底面はほぼ水平に伸びている。

〈付属施設〉 貯蔵穴P1が東隅にある。平面形は長方形に近く、断面形は底面が小さい

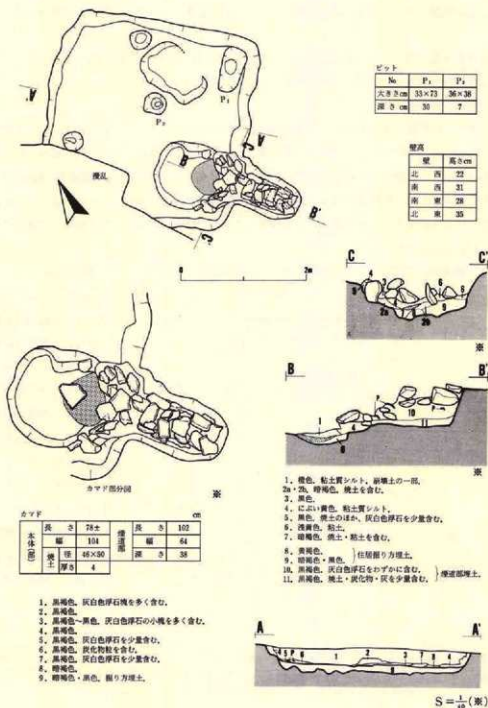
ために掘り鉢状になる。埋土は、上部が住居跡埋土から連続する黒褐色土、下部が火山灰の小塊を多く含む暗褐色土である。内面には黄色のシルトを2cmの厚さで貼り付けている。円形の小ピットP2は床面中央からわずかに北東寄りにある。断面形は掘り鉢状であるが、浅い。内部は還元状態を呈して黒色に変化している。



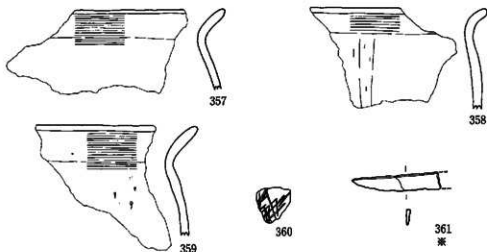
No	地点・層位	図	大きさ(最大): cm			量	特 徴	備 考	図
			長さ	幅	厚さ				
355	埋土上層	刀子	(106)	厚: 12	幅: 3	(8.7)	刃先・茎とも折れた部分が付着し、二重になる。		235
356	床面直上	鏝	(183)	31	4	(70.8)	先端部をわずかに欠く。		235

$$S = \frac{1}{2}$$

第129図 DⅡ-2 住居跡出土遺物(3)



第130図 D II-3 住居跡実測図



No	地点・層位	種類・群別	外 面				内 面				計測値: cm	分級	図説
			口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部			
357	煙道部	土師器	鉄ナデ	ヘラナデ	—	鉄ナデ	ヘラナデ	—	—	—	—	—	—
358	煙道部	鉄	鉄	鉄	—	鉄	鉄	—	—	—	—	—	—
359	煙道部	鉄	鉄	鉄	—	鉄	鉄	—	—	—	—	—	—
360	攪乱	鉄	—	刻線	—	—	鉄	—	—	—	—	—	—

No	地点・層位	器 種	大きさ(最大): cm			備 考	図説
			長さ	幅	厚さ		
361	攪乱	刀子	(4.7)	(8)	厚: 2	刃先を含む破片。	—

$$S = \frac{1}{2}(\text{米}) \cdot \frac{1}{2}$$

第131図 D II—3 住居跡出土遺物

遺物 (第131図)

〈出土状況〉埋土を主に、カマド本体・煙道部・床面・掘り方埋土から出土しているが、量はそれほど多くはない。またQ2部分が攪乱を受け、その部分から出土した少量の遺物は、本遺構に固有のものと考えた。土器・鉄製品・鉄滓・石器がある。

〈土器〉すべて破片であるが、土師器甕が主体を占めるほか、坏・縄文土器がある。土師器甕はI類が卓越する。360は刻線を伴う胴部下端の破片である。坏はI類26点、II類5点がある。

〈鉄製品・鉄滓〉刀子361は攪乱部分から出ている。鉄滓は、6点602gが埋土のほかに煙道部や攪乱部分から出土している。

〈その他〉使用痕のある剥片1点がある。

まとめと遺構の時期

出土遺物から本住居跡の所属時期を決定することは困難であるが、住居形式の比較や埋土の状況から、平安時代II群に分類できる。

D II—4 住居跡

遺構（第122図、図版76・77）

〈検出状況・重複関係〉DⅡ-1住居跡（平安時代）の東隅を含むほぼ1/2の部分の埋土の上に貼り床を施して構築している。そのほかには重複する遺構はない。

〈平面形〉部分的には床面を掘りすぎているが、壁溝が残ることから、ほぼ正方形になることが推定できる。〈規模〉2.4×2.4m（推定）〈床面積〉5.2㎡（推定）〈主軸方向〉N-57°-E

〈埋土〉灰白色浮石塊を含む黒褐色土の単層である。

〈壁〉北東壁と南東壁はDⅡ-1住居跡のそれを再利用している。そのほかの壁は把握できなかった。〈壁高〉3cm 〈壁溝〉南東壁の大部分と北西壁の一部に認められる。

〈床面〉全体にいくぶん硬い。下位のDⅡ-1住居跡の床面との高低差は5～8cmである。

〈カマドの位置〉北東壁中央 〈カマド本体〉崩壊が著しく、粘土質シルトが火床部の上に厚く堆積している。両側壁には芯材になる礫がいくらか内側に傾いて埋設されているが、1個ずつしか残っていない。火床部は良く焼け、奥には竈の羽口（365）が炉側先端部を下に向けて埋設されていた。支脚になるものである。また崩壊土中には大型の土製品が含まれている（364・366）。断面が方形形状のもので、縦に割れた状態で出土している。〈煙道部・煙出し部〉伴わない。

遺物（第132図、図版240）

〈出土状況〉埋土とカマド本体・貼り床中から出土しているが、量は多くない。土器と竈の羽口・土製品がある。

〈土器〉土師器壺と縄文土器がある。図示例にはⅠ類ⅡとⅡ類2aがあり、ともにカマド本体の崩壊土から出ている。

〈竈の羽口・土製品〉上述のように、羽口365は支脚へ転用されている。364・366は接合しないが同一個体であろう。当初は羽口と考えていたが、断面が四角形すぎることと他の羽口とは胎土が異なることから別種類とみておく。なお、図版では竈の羽口のなかに入れてある。

まとめと遺構の時期

図示例は本遺構に伴ったまたは時間的に近い関係にある。DⅡ-1住居跡よりは時間的に後のものであるが、平安時代Ⅱ群に分類できるであろう。

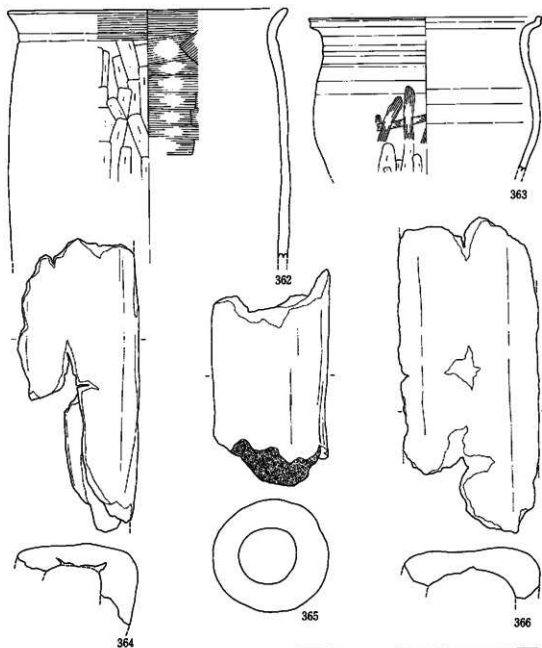
DⅢ区

DⅢ-1住居跡

遺構（第133図、図版77・78）

〈検出状況・重複関係〉重複するCⅢ-4・DⅢ-2の各住居跡（ともに平安時代）を切っていることが遺構検出面で確認できた。

〈平面形〉隅丸長方形 〈規模〉2.9×3.6m 〈床面積〉8.8㎡ 〈主軸方向〉S-25°-W



No	地点・層位	形制・特徴	外 面			内 面			計 測 値 : cm		分級	図版
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 径	高さ		
362	カマド跡出土	土師器類	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	22.4	(19.8)	—	113
363	カマド跡出土	※ 8	ロクロ底	ヘラケズリ	—	ロクロ底	ロクロ底	—	18.5	(11.3)	—	121

No	地点・層位	形 種	大きさ(最大): cm		重量g	特 徴 備 考	図版
			長さ	幅			
364	カマド	不明	(227)	(95)	29 (390.8)	断面は方形。366と同一形状。	240
365	カマド	縄目口	(172)	90×92	27 (785.8)	通風孔径は44×46cm。がね先埋部は細くなり、底縁が付着する。	240
366	カマド	不明	(246)	(110)	28 (595.8)		240

S = $\frac{1}{3}$

第132図 DⅡ-4 住居跡出土遺物

〈埋土〉黒褐色の土層群が卓越する。粒状から最大20mm±の多くの黄褐色火山灰を埋土上・中部を中心に含み、少量は下部にも見られる。9層に含まれる灰白色浮石はDⅢ-1住居跡の埋土のものである。

〈壁の状態〉直立〜緩やかな外傾 〈壁高〉32〜35cm 〈壁溝〉カマド・貯蔵穴P1をのぞいた部分に存在する。幅は15cm、深さは10cmである。

〈床面・掘り方〉全体が硬く締まっている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉伴わない。

〈カマドの位置〉南壁の東隅寄り 〈カマド本体〉礫と粘土質シルトを構築材にする。側壁は、2、3個の扁平な礫をそれぞれに立て、粘土質シルトで被覆している。礫の粒径は12〜33cmである。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。粒径15〜35cmの礫を片側に4ないし5個立てて側壁とし、粒径40〜45cmの礫をその上に渡して天井部を作っている。礫は扁平なものを使う。煙出し部に相当する部分にも天井石が存在することから考えると、煙は先端へ導かれたものであろう。底面は緩やかに傾斜して上がり、半ばから先端にかけてはほぼ水平である。

〈付属施設〉貯蔵穴P1はカマドの西隣りにある。平面形はややいびつな円形で、断面形は浅皿状になる。埋土は黒褐色土で、火山灰や焼土の大小塊を多く含む。底面には掘り方を伴う。

〈その他〉現地性の焼土が南半の広い範囲や北隅・東隅付近に認められる。壁際の埋土上・中部から床面中央へ漸次傾斜して下がって行き、床面と接する状態を示している。一部では草本類や木炭を伴うが、少量である。それらの一部がP1の埋土上に載っていることからP1の埋没後に形成されたことを知ることができる。

遺物（第134図、図版218・225）

〈出土状況〉埋土を主に、床面直上・P1・カマド本体・煙道部・掘り方埋土から出土しているが、量は多いものではない。土器と鉄滓・剝片石器がある。

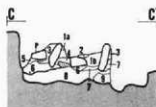
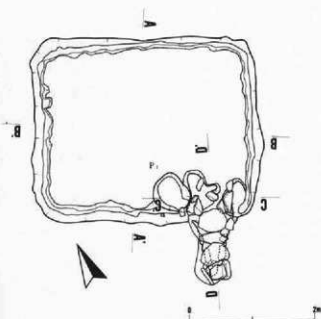
〈土器〉破片数の多い方から順に、土師器甕・縄文土器・坏・須恵器がある。土師器甕はI類が卓越し、L5cほかがある。368は口縁部内面に「+」のへう書をもつ。坏はII類B0の367以外は破片で、I類17点、II類8点である。須恵器370は壺下半の大型破片で、他には器種不明の小破片1点がある。

〈鉄滓〉5点93gが埋土・床面・カマド本体から出土している。

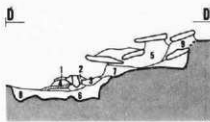
〈その他〉石匙など3点の剝片石器がある。

まとめと遺構の時期

坏367は煙道部の天井石の下にわずかにもぐり込むように存在し、須恵器370も煙道部にわずかに残るシルトの下位にあった。図示例は本遺構と共伴もしくは時間的に近い関係にあるので

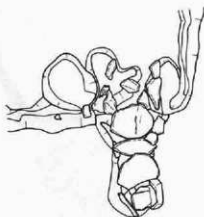


- 1a～3. によい黄褐色、粘土質シルト。
4. 黄褐色。
5. 黒色。
6. 暗褐色、粘土の小塊、炭化物を含む。
7. 黒褐色。
8. 黄褐色～黒色、住居廻り方礫土。
9. 黒褐色、火山灰塊を含む。



1. 黄褐色、粘土。
2. によい褐色、小塊状の硬土・粘土のほか、炭化物を含む。
3. 黒色、粘土・硬土を含む。
4. 黒褐色、粘土・硬土を含む。
5. 黒褐色、炭化物・硬土を含む。
6. 暗褐色、粘土の小塊を含む。

4・6・8はカマド断面図と共通。



カマド部分図

ピット

No.	P.
大きさcm	51×60
深さcm	21

壁高

	壁	西	南	東	北
高さcm	32	39	32	35	

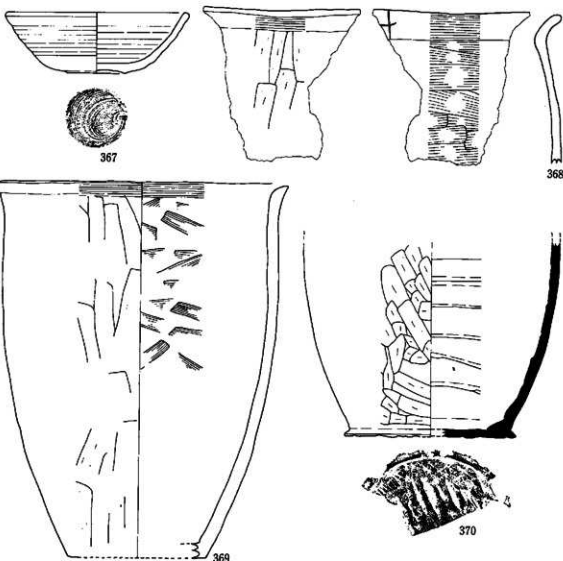
カマド

本体色	長さ	幅	高さ	長さ	幅
土	64	68	32	112	68
灰	32	32	3	30	30

1. 黒褐色、黄褐色火山灰・黒色土塊を少量含む。
2. 黒褐色、黄褐色火山灰を含む。
3a・3b. 黒褐色、黄褐色火山灰・褐色土の小塊を少量含む。
4. 黒褐色、炭化物粒を少量含む。
5. 黒褐色、黄褐色火山灰の小塊を全体に含む。
6. 黒褐色、火山灰塊を含む。
7a. 黒褐色、黄褐色火山灰をわずかに含む。
7b. 黒褐色、黄褐色火山灰を上部に層状に含む。
8. 黒褐色、炭化物粒を含む。
9. 黒褐色、灰白色浮石の小塊を含むほか、炭化物が多い。
10. 黒褐色、粘土・炭化物粒少量を含む。
11. 暗褐色。
12. 黒色。
13. 黒褐色。
14. 暗褐色。
15～17. 黒褐色。
18. 黒褐色、黄褐色火山灰をわずかに含む。
19・20. 黒褐色、黄褐色火山灰を含む。
21. 上部は焼土層。
22・23. 黄褐色～黒色、掘り方礫土。

$$S = \frac{1}{40} (\text{率})$$

第133図 DIII-1住居跡実測図



No	地点・部位	種類	外面			内面			計測値: cm			分厚	図録
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底		
367	埋込部	杯	ロクロ痕	ロクロ痕	面転み切り痕	ロクロ痕	×		14.7	4.9	4.7	126	218

No	地点・部位	種類・特徴	外面			内面			計測値: cm			分厚	図録
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底		
368	埋込部	土師器	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—	—	—	—
369	ホマド・ア1・掘出し部	—	—	—	—	—	—	—	23.4	30.0	11.0	115	225
370	埋込部	灰土器	—	—	—	—	—	—	—	(15.3)	13.7	—	—

$$S = \frac{1}{3}$$

第134図 DⅢ-1 住居跡出土遺物

あろう。さらに埋土の状況や重複関係から、平安時代Ⅴ群に分類できる。

DⅢ-2 住居跡

遺構（第135図・第136図、図版79）

〈検出状況・重複関係〉数多くの遺構と重複している。DⅢ-3住居跡・DⅢ-13住居状遺構（ともに縄文時代）・DⅢ-102落とし穴よりは新しい。北壁中央部はDⅢ-1住居跡（平安時代）に切られ、DⅢ-14住居状遺構（平安時代）は本遺構の埋土上に構築される。

〈平面形〉南壁がやや凸凹形になるが、ほぼ正方形（規模）7.0×7.5m（床面積）45.9㎡

〈埋土〉最上部の2層は大小塊が集合した灰白色浮石層である。その下位の3層にも灰白色浮石の小塊や一部に薄層が見られるが、量的には多いものではない。下半で卓越する4層は塊状の火山灰や黒色土を全体に含む。そのほかは黒褐色土・黒色土が優占する。

〈壁の状況〉直立～わずかに外傾（壁高）27～53cm（壁溝）伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は中央付近をはじめ、全体に硬い。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉多くの柱穴状ピットが存在する。そのなかには住居跡埋土を掘り込んで床面にまで達しているものが数個ある。また灰白色浮石を埋土に含むものが9個ある。しかし配置や大きさ・深さの点では本遺構の柱穴になるものはない。

〈カマド〉検出されていない。DⅢ-1住居跡に切られている北壁中央にあった可能性が高い。

遺物（第137図）

〈出土状況〉大部分が埋土上部～下部から、残りは掘り方埋土・床面・柱穴状ピットから出土している。種類・数とも多く、土器と鉄製品・鉄滓・砥石・陶器・古銭・石器がある。

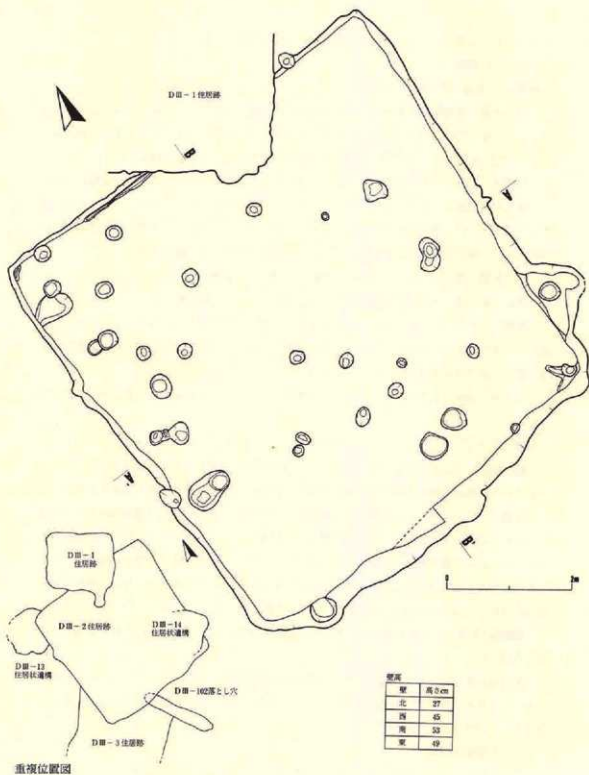
〈土器〉坏371をのぞいては破片で、数の多い方から順に、縄文土器・土師器甕・坏・土師器手づくね土器・土師器小型壺・須恵器がある。土師器甕はⅠ類が卓越する。373・376は鋭いヘラ状工具による刻線を胴部下端に伴う小破片である。坏は図示例も含めⅠ類が卓越する。Ⅰ類は破片も含めるとA2・B0が各1点、C4が3点である。372は坏Ⅰ類で、外面に墨書の一部が認められる。縄文土器は190点と多い。残りの種類は1～3点と少数ずつである。

〈鉄製品・鉄滓〉刀子の茎の部分と推定される破片が埋土から、鉄滓は3点117gが埋土と床面から出土している。

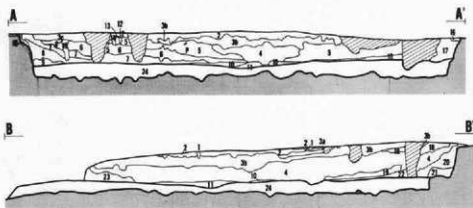
〈その他〉砥石の小破片が埋土から、永楽通宝と掘り鉢の小破片1点ずつが埋土最上部から出土した。それ以外には、石鏃・不定形石器ほかの剥片石器16点、磨製石斧の小破片と磨石Ⅰ類1点ずつがある。

まとめと遺構の時期

中世の遺物はほぼ検出面と同レベルから出土したものである。DⅢ-1住居跡との重複から



第135図 D III-2 住居跡実測図(1)



- | | |
|--------------------------|-------------------|
| 1. 黒褐色。灰白色浮石を含む。 | 8~10. 黒褐色。 |
| 2. 灰白色・浅黄色。大型の塊状の浮石。 | 11. 暗褐色。 |
| 3a. 黒褐色。灰白色浮石の薄層がみられる。 | 12. 黒褐色。 |
| 3b. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を部分的に含む。 | 13. 黒色。 |
| 3c. 黒褐色。灰白色浮石をわずかに含む。 | 14. 黒褐色。 |
| 4. 黒褐色。火山灰層・黒色土を全体に含む。 | 15~17. 黒褐色。 |
| 5. 黒色。 | 18~20. 黒色。 |
| 6. 黒褐色。火山灰の小塊を含む。 | 21~23. 黒褐色。 |
| 7. 黒色。 | 24. 黄褐色～黒色。掘り方埋土。 |

第136図 DIII-2 住居跡実測図(2)

S = $\frac{1}{60}$

はそれよりも時間的に先のものであることが明らかであることや埋土の状況・出土遺物から、平安時代I群に分類できる。

DIII-3 住居跡

遺構(第138図、図版79・80)

〈検出状況・重複関係〉平安時代の遺構群の調査を終え、“地山”まで検出面を下げる過程で検出した。DII-2・DIII-2の各住居跡(ともに平安時代)に切られ、北東壁全部と北西壁の約半分のほか床面の一部も消失しているが、柱穴を検出でき、全形を推定できる。そのほかDIII-102落とし穴に床面まで切られ、DII-251・252溝(時期不明)にも上部の一部を切られている。

〈平面形〉四隅のうち、南隅一つが残存する。ややいびつな長方形になるものと推定できる。

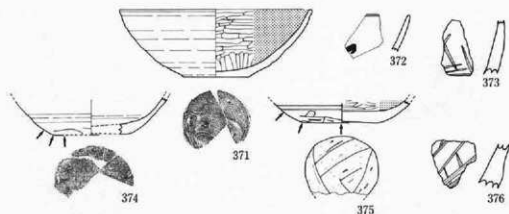
〈規模〉9.0(推定)×5.0m 〈床面積〉38.9m²(推定)

〈埋土〉上部の2層はV層中塚浮石起源である。下部は黒褐色土が卓越するが、それらはVI層起源である。

〈壁の状態〉PP5とPP6の間が直立するほかは外傾する。PP7とDIII-102落とし穴の間は掘りすぎているため、壁が不明である。〈壁高〉32~50cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面〉全体に硬く、一部は非常に硬く締まっている。

〈柱穴〉PP1~PP9の9本柱である。PP1・PP3・PP7・PP8はDII-2・DIII-2の



No	地点・層位	種類	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 一 底	口縁部	胴部	底 部	口 一 底	口縁部	胴部	底 部		
371	埋土	杯	ロクロ底	ロクロ底	回転糸切り痕	ヘラミダキ	○	—	—	—	15.4	5.4	5.3	I Bb	
372	埋土	片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
374	埋土	片	—	ロクロ底 横ヘラミ ダキ	静止糸切り+ヘラミダキ	ロクロ底か	詳細不明	—	—	—	(2.8)	(6.6)	1A2		
375	埋土	片	—	ロクロ底	ヘラミダキ	ヘラミダキ	○	—	—	—	(1.6)	(6.6)	1C1		

No	地点・層位	種類・器種	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 一 底	口縁部	胴部	底 部	口 一 底	口縁部	胴部	底 部		
373	埋土	土師器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
376	埋土下部～底面	片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

$$S = \frac{1}{3}$$

第137図 DIII-2 住居跡出土遺物

各住居跡の掘り方面に検出された。四隅とその各中間、そして中間の2個を結ぶ間にさらに1個を配する。配置は全体としては長軸線がねじれた長方形になる。これは、PP1・PP2・PP9・PP6～PP8をむすんだ北東半が長方形であるのに対し、PP3～PP5の南西壁際の3個がその長軸方向からわずかにずれるためである。

〈炉〉床面残存部には存在しない。

遺物 (第139図、図版207・212)

〈出土状況〉埋土のほかに床面直上から出土しているが、少量である。土器と石器がある。

〈土器〉縄文土器の破片だけである。図示した12点以外は9点である。I群の類と類・類、II群1類・類がすべてである。

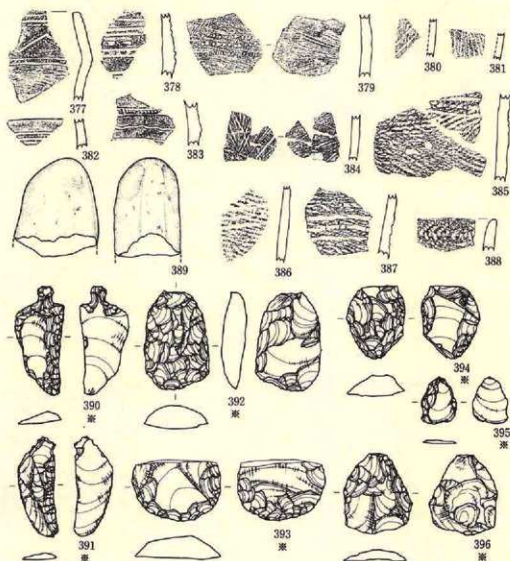
〈石器〉剥片石匙は縦形石匙2点・不定形石器4点・石筥1点、礫石器は磨石I類1点で、すべて図示している。

まとめと遺構の時期

CII-3 住居跡ほかとの住居形式の類似性や出土遺物・埋土から、縄文時代前期II群1類(早稲田6類担当)期に分類できる。



第138図 DIII-3 住居跡実測図



No	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
377	埋土中部	深鉢	口縁部	貝殻模線圧痕文・沈線文・条痕文	ミダキ		1群3類	棕色	207
378	灰面直上	〃	腹部	沈線文・刺突文	〃		〃	比J3・黄色	207
379	埋土	〃	〃	条痕文・刺突列3列	条痕文		1群4類	〃	207
380	埋土下部	〃	〃	沈線文	剥落	〃	〃	棕色	
381	埋土下部	〃	〃	〃	〃		〃	〃	
382	埋土下部	〃	〃	貝殻模線圧痕文・沈線	ミダキ		1群3類	〃	207
383	埋土	〃	〃	沈線文・刺突列・刺突文	〃		〃	比J3・黄色	207
384	埋土	〃	〃	沈線文・条痕文	条痕文		1群4類	比J3・黄色	207
385	灰面直上	〃	〃	平行沈線文・円形小刺突文（沈線内）	ミダキ	繊維少量	1群1類	黒褐色	207
386	灰面直上	〃	〃	〃・中1条押し引き沈線文	〃	〃	〃	287上同一器体	
387	灰面直上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	207
388	埋土下部	〃	口縁部	筋束第1模形状刺突文	〃	繊維少量	1群10類	〃	

$$S = \frac{1}{2}(\text{準}) \cdot \frac{1}{3}$$

第139図1 DIII-3 住居跡出土遺物

No	地点・層位	層位	大きさ(最大): cm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	附 属
			長さ	幅	厚さ				
389	埋土	磨石1個	(78)	67	52	(315.0)	輝石安山岩, An 3	一組を含む遺品。機械室2箇組合	
390	埋土	磨石2個	98	26	6	8.2	磨石泥岩, De 3		212
391	床面直上	#	53	20	4	4.4	磨石質硬質砂岩, De 1	横いノッチ・つまみ部小割痕	#
392	埋土	不定形石群	52	34	12	26.0	#	#	#
393	床面直上	#	(32)	48	12	(39.4)	#	5	#
394	埋土	#	(30)	31	11	(19.6)	磨石泥岩, De 3	5.内い合う2辺階段状割痕・転用?	#
395	埋土	#	25	19	2	9.6	磨石質硬質砂岩, De 1	2	
396	埋土	#	43	36	5	18.7	#	2	

第139図 2 DⅢ-3 住居跡出土遺物

DⅢ-4 住居跡

遺構 (第140図, 図版80・81)

〈検出状況・重複関係〉灰白色浮石の塊の分布から住居跡の存在が確認できていたが、輪郭がはっきりしないためにグリッド単位で掘り下げながら平面形を把握した。したがって残存する壁よりも壁高はさらに高いものである。北隅で重複するDⅢ-101落とし穴を切っている。

〈平面形〉隅丸長方形 〈規模〉3.5×3.5m 〈床面積〉9.3㎡ 〈主軸方向〉S-41°30'-E 〈埋土〉灰白色浮石の大小塊を多量に含む黒褐色の土層群が主体を占める。浮石は埋土上部から床面直上まで含まれる。とくに中央から西隅にかけての範囲に多く、粒径100mm以上の大型のものを多く含む。それに対し南東側半分では大塊が少ない。

〈壁の状態〉直立〜外傾。南東壁の外傾がいちじるしい。〈壁高〉29~40cm 〈壁溝〉カマドの両側の一部をのぞいて存在する。幅は13~25cm、深さは7~13cmである。

〈床面・掘り方〉全体が硬く締まっている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

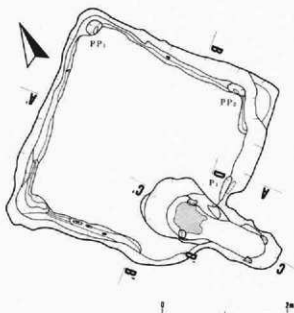
〈柱穴〉PP1とPP2が北隅と東隅にあるが、柱穴にはならない。

〈カマドの位置〉南東壁中央と南隅との間 〈カマド本体〉残存状態は良くない。床構築土と同じ黒褐色土で作られた右側壁の一部が残る。火床部の前は浅く円形に掘りくぼめられている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。側壁や天井部の構築材である粘土質シルトほかの崩壊土が認められるものの、残存状態は良くない。底面は緩やかに傾斜して上がって行く。煙出し部は両側壁に角礫1個ずつを立て、粘土質シルトで被覆している。左側壁のものは底面からほぼ直立している。礫の粒径は14cmと27cmである。

〈付属施設〉カマドの左脇にあるP1は壁の奥へ斜めに深く入り込む楕円形の筒状のビットである。類似の形態のビットは南東9mの位置にあるEⅢ-1住居跡にもあり、貯蔵穴の一種であろう。

遺物 (第141図)

〈出土状況〉埋土を主に、床面〜床面直上・カマド本体・掘り方埋土・P1・煙道部からやや多い量が出土している。土器と鉄製品・鉄滓・竈の羽口がある。



柱穴

No	大きさcm	深さcm
PP1	29×27	25
PP2	15×30	34

壁高

壁	北西	南西	南東	北東
高さcm	29	37	39	40

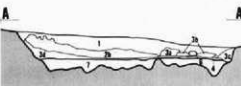
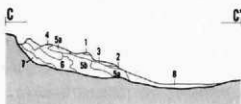
カマド

本体(部)	長さ	幅	厚さ	煙道部	長さ	幅	深さ
	76	92	40×56		114	70	48

ピット

No	大きさcm	深さcm
P1	43	不明

1. 褐色、粘土質シルト。
2. 黒色。
3. 黒褐色、灰白色浮石を少量含む。
4. 黒色、少量の灰白色浮石のほか、炭化物を含む。
- 5a・5b. 土に黄褐色、粘土質シルト、粒状の機土・炭化物を少量含む。
6. 灰色、粘土質シルト、機土・炭化物を含む。
7. 褐色。
8. 灰色、粘土質シルト、機土を含む。

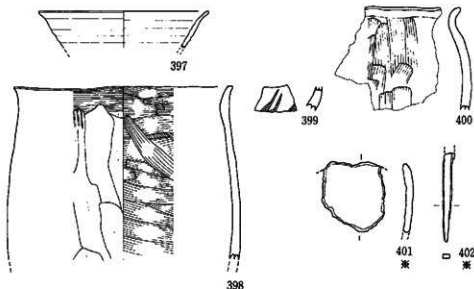


- 1a. 明赤褐色。
- 1b. 赤褐色。
2. 黒褐色、右側壁機保存。
- 3a~3c. 黒色、カマド側り方機土。
4. 黄褐色～黒色、住居側り方機土。

1. 黒褐色、灰白色浮石を少量含む。
- 2a・2b. 黒褐色、灰白色浮石を多量に含む、特に2bに多い。
- 3a~3c. 黒褐色、灰白色浮石の上に小機を含むが、量的には少ない。
4. 黒色、3層に転る。
5. 暗褐色。
6. 黒褐色。
7. 黄褐色～黒色、側り方機土。

$$S = \frac{1}{40} (\%)$$

第140図 DⅢ-4 住居跡実測図



No	地点・層位	種類	外 面			内 面			計測値: cm			分類	図説
			口縁部	胴部	底 部	口 縁	底 部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部		
397	床面・埋土層	杯	口縁部	口縁部	—	口縁部	—	×	13.6	(12.9)	—	II	

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値: cm			分類	図説
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口縁部	口縁部	口縁部		
398	カマド	土師器	口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	13.6	(12.9)	—	II	
399	埋土	—	—	胴部	—	—	—	—	—	—	—	—	
400	埋土下部	—	ナデ	ヘラナデ	—	ナデ	ヘラナデ	—	—	—	—	—	

No	地点・層位	器 種	大きさ(最大): mm			備 考	図説
			長さ	幅	厚さ		
401	カマド崩壊土	不明	(37)	(33)	3.5	鉄を一辺残している。内筒する板状のもので、筒の一部か。	
402	埋土	釘	(47)	5	3	角釘の頭部と推定。	

$$S = \frac{1}{2}(\text{長さ}) \times \frac{1}{2}$$

第141図 DIII-4 住居跡出土遺物

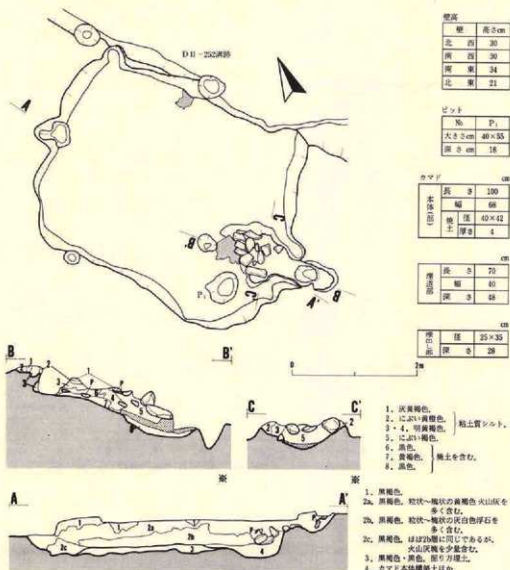
〔土器〕 397・398を除いては破片で、土師器甕が主体を占めるほか、杯・縄文土器・土師器手づくね土器・須恵器がある。土師器甕はⅠ類が卓越し、Ⅰ4aなどがある。399は鋭いヘラ状工具による刻線を胴部下端に伴う。底部資料は木葉底2点、砂底1点がある。杯は397がⅡ類がある。色調はにぶい黄褐色(10 YR 7/4)周辺で、器壁は薄い。破片ではⅠ類51点、Ⅱ類12点がある。須恵器は甕の胴部2点がある。

〔鉄製品・鉄滓〕 401は内湾気味の板状の製品であることや縁があることから鍋かとも推定されるが、確実ではない。402は一端を失っている。釘にしては扁平すぎるであろう。鉄滓はカマド崩壊から大型の1点700g、埋土ほかから7点58g、あわせて8点758gである。

〔輪の羽口〕 小破片1点が埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

埋土の状況や出土遺物から、平安時代Ⅱ群に分類できる。



第142図 D III-5 住居跡実測図

$$S = \frac{1}{48} (\text{㎡})$$

D III-5 住居跡

遺構 (第142図、図版81・82)

〈検出状況・重複関係〉北東壁の約 $\frac{1}{2}$ はD II-251溝 (時期不明) に切られ、消失している。埋土上部にはD III-155焼土遺構 (時期不明) が形成されている。

〈平面形〉かなりいびつな隅丸長方形 〈規模〉3.2×3.7~4.3 m 〈床面積〉12.9㎡ (推定)

〈主軸方向〉S-47°-E

〈埋土〉黒褐色のいくつかの土層群で構成される。上半を占める2 a層には黄褐色火山灰、下半の2 b層には灰白色浮石が多く含まれる。それらは粒状から塊状 (最大粒径20mm) にみら

れる。

〈壁の状態〉直立～外傾。いくぶん起伏がある。〈壁高〉21～34cm 〈壁溝〉調査した部分には検出されていない。

〈床面・掘り方〉床面はそれほど硬いものではない。全体規模の掘り方を伴うものであろう。

〈柱穴〉伴わない。

〈カマドの位置〉南東壁中央と南隅との中間と推定 〈カマド本体〉崩壊が激しいが、粒径20～35cmの礫多数と粘土質シルトで構築されている。両側壁の一部が確認でき、礫のいくつかは原位置にある。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。本体と同様の粘土質シルトで側壁や天井部が作られ、残存状態は良い。先端からやや本体に寄った部分は粘土質シルトが円形に切り取られており、煙出し部になる。底面はやや急傾斜で上がっている。

〈付属施設〉貯蔵穴P1がカマドの右隣り、南隅にある。カマド本体の構築礫や同起源の焼土の下位に検出されている。平面形が楕円形気味の浅い筒状のビットである。埋土は、上部が黒褐色土、下部が褐灰色土で、それらは焼土の小塊を多く含む。

遺物（第143図・第144図、図版236・240・241）

〈出土状況〉埋土上部～下部を中心に、床面直上・カマド本体・煙道部から出土しているが、量はそれほど多いものではない。土器と鉄製品・鉄滓・竈の羽口・砥石がある。

〈土器〉土師器壺が主体を占めるほか、坏・須恵器がある。土師器壺はⅠ類が卓越し、M4・L2・L4dほかがある。Ⅱ類404はM3aである。木葉底は406のほか4点がある。408は土器の把手が抜け落ちたものと推定した。坏はすべて破片で、Ⅰ類19点、Ⅱ類4点である。須恵器は壺と甕？の破片2点である。

〈鉄製品・鉄滓〉鋤あるいは鍬先410はカマド右横の埋土半ば付近から出土している。鉄滓は1個4gが埋土から出土している。

〈竈の羽口・砥石〉羽口411はやや細い。接合しない破片はさらに多くある。炉側先端部は細くなり、熔解して青黒色に変化している。409は砥石である。ともに埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

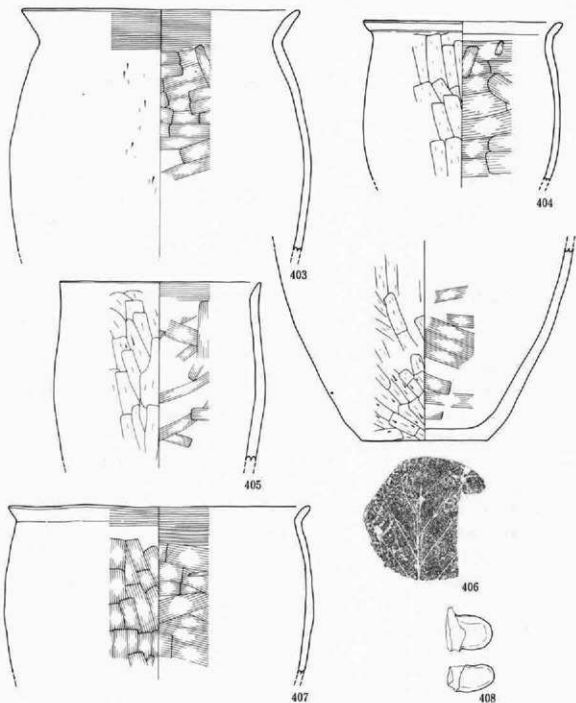
埋土の状況や出土遺物から、平安時代Ⅳ群に分類できる。

DⅢ-6 住居跡

遺構（第145図、図版83）

〈検出状況・重複関係〉Ⅴ層を全体的に掘り下げていった際に、硬い床面が一部露出し、共伴する多くの柱穴から確認できた。PP5は一部が重複するDⅢ-53ビット（時期不明）を埋土から切っている。

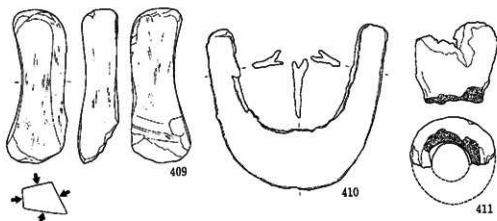
〈平面形〉柱穴配置からは長方形と推定できる。〈規模〉柱穴間の計測では4.2±×4.9m±



No.	地点・層位	種類・器種	外				内				計測値: cm				分	図版
			口縁部	胴部	底部	肩部	口縁部	胴部	底部	肩部	口径	底径	高さ	重量		
403	カマド>埋土下部	土師器 甕	横ナデ	ヘラナズリ	—	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	22.2	(19.3)	—	112		
404	カマド埋土上>埋土	#	ロクロ灰	#	—	—	ロクロ灰	#	—	—	16.0	(12.5)	—	180		
405	カマド>埋土上部	#	ヘラナズリ	#	—	—	横ナデ	#	—	—	16.1	(14.2)	—	150		
406	カマド・埋土上~下部	#	—	#	木葉底	—	#	ナデ	—	—	—	(15.3)	9.9	—		
407	埋土	#	横ナデ	ヘラナデ	—	—	横ナデ	#	—	—	24.1	(13.3)	—	114		
408	埋土	土師器 磁肥手	—	—	—	—	—	—	—	—	底径2.1×2.7高93.0					

第143図 DIII-5 住居跡出土遺物(1)

S = $\frac{1}{3}$



No	地点・層位	器種	大きさ(最大):cm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
409	埋土上部	灰石	121	45	47	229.0	玻璃質灰岩, R Y 2	丸形。4面を使用。表面中央は凹曲	241

No	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
410	埋土上部	磨光	133	—	—	199.8	ほぼ完成。耳幅144。刃長45。刃部受け幅13。耳厚3.5(すべてmm)	239
411	埋土	磨研口	(64)	—	29	(98.0)	破片。外徑64mm。通孔径38mm	240

$$S = \frac{1}{4}$$

第144図 DIII-5 住居跡出土遺物(2)

〈埋土〉 層厚2～10cmの黒褐色土が床面を覆っているが、全体で確認できたものではない。

〈壁〉 把握できなかった。〈壁溝〉 PP 6とPP 7に挟まれた部分にあるが、短く、確実性に乏しい。

〈床面・掘り方〉 全体に硬い。一部は浅い掘り方を伴い、火山灰塊を含む黒褐色土を床構築土にしている。そのほかはV層を床面にしている。

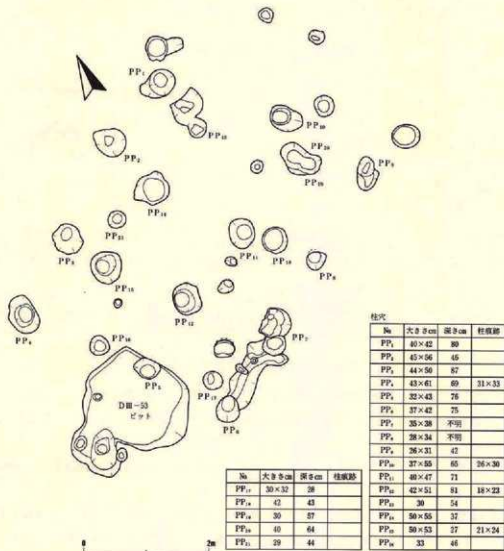
〈柱穴〉 PP 1～PP 10が外側に配置される。PP 5とPP 10を結ぶ東西の線上にほぼ載るPP 11・PP 12もそれらとともに柱穴を構成するものであろう。深度は42～80cmと深い。PP 7とPP 8は計測漏れがある。しかしそれらも深いピットであることが写真から読み取ることができる。柱痕跡と掘り方が識別できたのはPP 1だけである。以上のほかに、PP 13～PP 21の9個の深い柱穴が内側にある。先の一群に伴うものもあるのかもしれないが、具体的な例をあげるができない。

〈炉・カマド〉 それに類するものは伴わない。

遺物

〈出土状況〉 上述のような検出状況であり、薄く残った埋土・床面・柱穴から、土師器甕・坏・縄文土器の破片があわせて26点が出土しただけである。

まとめと遺構の時期



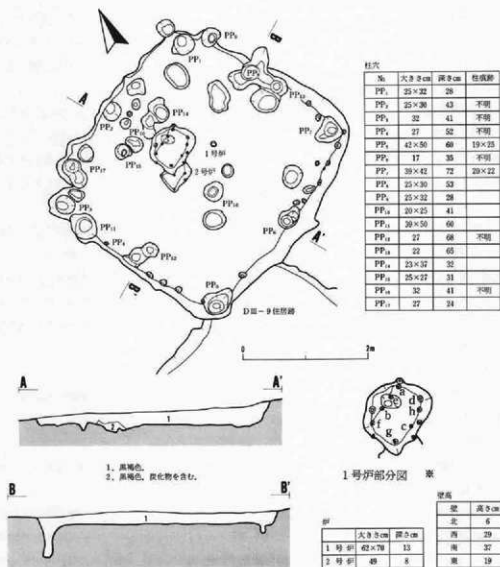
第145図 D III-6 住居跡実測図

住居形態と出土遺物からは平安時代以降のものであることが明らかである。住居形式や占地の点で、D III-7 住居跡ほかの近世後半あるいはそれ以降のものとの関連も考えられるが、所属時期の確実なことは不明である。

D III-7 住居跡

遺構（第146図、図版82～84）

〈2棟の重複〉柱穴配置や新旧関係のある炉の存在から、2棟がほぼ同位置で重複していることを知ることができる。新期を7 a 住居跡、古期を7 b 住居跡として記載する。



$$S = \frac{1}{49} (\text{※})$$

第146図 DIII-7 住居跡実測図

〈検出状況・重複関係〉重複するDIII-9住居跡（時期不明）を切っている。DIII-8住居跡（縄文時代）・DIII-105落とし穴とは一部が上下に重なる位置関係にあるが、直接の切りあいはない。

DIII-7 a 住居跡

〈平面形〉ややいびつな隅丸長方形 〈規模〉3.7×3.7～4.0m 〈床面積〉11.9m²

〈埋土〉黒褐色土のほぼ単層である。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉6～37cm 〈壁溝〉伴わない。径7～12cmの円形の浅い小ピットが斜面上方になる南側約1/2の壁際に数多く存在するが、壁溝と類似の機能をもつことが考えられる。〈床面・掘り方〉壁の大部分や床面はV層黒褐色土である。床面は軟らかく、掘り方は伴わない。

〈柱穴〉PP1～PP8の8本柱である。四隅とその中間の壁際に1個ずつ配置される。柱痕跡と掘り方を識別できるのは、PP2～PP7の6個である。PP3・PP4は柱痕跡・掘り方とも方形である。以上のほかに、PP16やPP17は柱痕跡をもつもので、先の柱穴群と組みあわせて考えることができるのかもしれない。とくにPP16はPP2とPP6を結んだ配置を考えればほうが良いのかもしれない。

〈炉〉1号炉を伴伴する。床面中央からわずかに北寄りにあり、重複する2号炉を切っている。平面形は凸辺方形状で、深度は13cm±と浅い。南隅には粒径15cm±の垂角礫2個があり、少量の焼土と炭化物を下位に伴っている。そのほか、内部の壁際や壁には径6cm±の円形小ピットが多くある。四隅にあるものの深さは10～15cmで、ほぼ直立している。それらのうち、bとcを結んだ部分を境にして2～3cmの高低差が底面に認められる。これはa～dを四隅にもつ炉とe～hをもつ炉が重複した結果生じた可能性が強い。

DⅢ-7 b住居跡

〈平面形〉北壁は7a住居跡に切られて消失しているが、残りの壁と柱穴配置からは隅丸の長方形を推定できる。〈規模〉3.3±(推定)×4.0m 〈床面積〉10.5㎡

〈埋土〉7a住居跡に先行するため、固有の埋土は不明である。

〈壁・床面〉北壁を除いた三方の壁や床面は7a住居跡と共有一再利用の関係にあることが柱穴配置や重複形態から推定できる。

〈柱穴〉PP9～PP12・PP5～PP7・PP13の8本柱である。四隅とその中間の壁際に1個ずつを配置するのは7a住居跡と共通し、PP5～PP7の3個は同住居跡と共有一再利用の関係にある。PP12はPP4に切られているために本遺構の柱穴にしたが、PP11—PP12—PP5を結んだ線は直線ではなく、やや内側には入り込む形になる。PP12は柱痕跡と掘り方を識別できる。PP10と重複するPP14やPP9とPP11を結ぶ線上にほぼ載るPP15も先の一群と何らかの関係をもつことが考えられる。

〈炉〉伴伴する2号炉は床面中央からわずかに北西に寄った位置にある。平面形は不整形形で浅く、北隅を含む一部を1号炉に切られている。その部分には炭化物を含む灰が15×23cmの範囲に広がっているが、薄層である。三隅にある円形小ピットは径5cm±、深さ5～10cmで、ほぼ直立している。

遺物 (第332図、図版242)

直接の切り合いは確認できなかった。

〈平面形〉 ややいびつな長方形。東隅と南隅が隅丸になる。〈規模〉 2.4×3.8m 〈床面積〉 9.1m²

〈埋土〉 VI層をほりこんで構築し、上部はV層に覆われていることがグリッド壁で観察できる。黒褐色土が壁際を占めるほかはVI層起源の黒色土の単層に近い。

〈壁の状態〉 上・中部はV層、下部はVI層を壁にする。全体に直立気味であるが、北西壁は外傾する。〈壁高〉検出面では17～28cmであるが、北西壁は55cmの壁であることがグリッドの断面で観察できる。〈壁溝〉 伴わない。

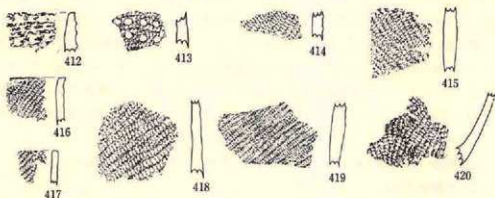
〈床面・掘り方〉 全体に硬いが、非常に硬く締まっているというほどではない。“地山”を床面にするほか、周辺部の広い範囲には床構築土を伴うが、層厚は1～2cmと薄い。

〈柱穴〉 PP1～PP7のうち、6個で構成される。四隅と長辺の壁の中央付近に1個ずつ配置される。PP6とPP7は一部が重なり合う形で検出されている。一方が柱穴でないか、あるいはそこの柱穴を作り替えたことが考えられる。PP8・PP9の性格は不明である。PP10は本遺構よりも新しいものである。

〈炉〉 伴わない。

遺物 (第148図)

〈出土状況〉 縄文土器片10点が埋土から、円盤状土製品1点がPP1から出土している。



No.	地点・層位	器種・部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
412	埋土	器身	押し引き平行波線文	ミガキ	織物多量	II群1類		
413	埋土	口縁部	円形刺突列・LR	凹凸	〃	II群10類		
414	埋土	〃	LR (O段多量)	粗	〃	〃		
415	埋土	〃	RL	ミガキ	〃	〃		
416	埋土	口縁部	やや小型、LR	〃	〃	〃	418と同一個体?	
417	埋土	〃	〃	〃	〃	〃		
418	埋土	器身	LR (O段多量)	〃	〃	〃		
419	埋土	〃	〃 (〃)	〃	〃	〃		
420	埋土	器身	胴部下端・丸底?・LR	〃	〃	〃		

S = $\frac{1}{3}$

第148図 DIII-8 住居跡出土遺物

〈土器〉すべて破片である。10点とも胎土には繊維を含む。420は尖底土器の胴部下端である。412はⅡ群1類である。

〈円盤状土製品〉図示していないが、繊維を含む深鉢の胴部破片を素材にし、やや不整形気味に打ち欠いている。1/2弱が残存し、直径68mm、厚さ7mmである。

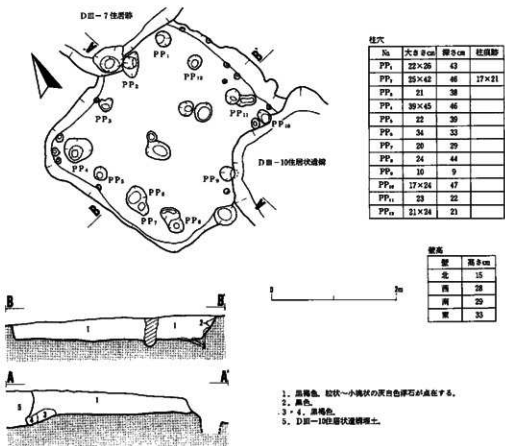
まとめと遺構の時期

DⅢ-3住居跡ほかの住居形式の類似性や出土遺物・層位的な検出状況からは縄文時代前期前葉Ⅱ群1類（早稲田6類相当）期に分類できる。

DⅢ-9住居跡

遺構（第149図、図版85）

〈検出状況・重複関係〉北壁が重複するDⅢ-7住居跡（近世以降）には東側約1/2を切られ



第149図 DⅢ-9住居跡実測図

ている。南東壁を中心にした範囲で重複しているDⅢ-10住居状遺構（時期不明）との新旧は把握できなかった。また、DⅢ-8住居跡（縄文時代）と一部が重なり合って上位にあるが、直接の切り合いは確認していない。

〈平面形〉二つの隅を失っているが、ややいびつな正方形であることが推定できる。〈規模〉 $3.0 \times 3.2\text{m}$ 〈床面積〉 7.6m^2

〈埋土〉黒褐色土のほぼ単層に近い。粒状から小塊状の灰白色浮石少量が点在する。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉 $15 \sim 33\text{cm}$ 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉Ⅴ層黒褐色土を床面にし、全体が軟らかい。掘り方は認められない。

〈柱穴〉PP1～PP12が配置としては適当である。1個しかない南壁をのぞいては四隅とその中間に2個ずつを配している。PP1は柱痕跡と掘り方を識別できる。PP6とPP7は重複するが、深度からはPP6が適当であると考えられる。床面中央にある4個のピットはいずれも浅く、先の一群とは異なるものである。

〈カマド・炉〉伴わない。DⅢ-10住居状遺構との重複部分に存在した可能性は少ない。

〈その他〉草本類の炭化物が中央からわずかに北壁に寄った床面に密着して長形状に分布している。規模は $63 \times 115 \sim 150\text{cm}$ で、層厚は非常に薄い。小規模な焼土を部分的に伴い、現地性のものと推定した。

遺物

〈出土状況〉26点の土器片が埋土から出土しているだけである。

〈土器〉土師器類14点は胴部破片である。坏はⅠ類4点、Ⅱ類1点がある。縄文土器は7点である。

まとめと遺構の時期

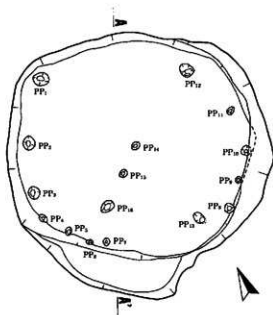
カマドをもたないことや柱穴が壁際に多数がある点は平安時代の住居形式から逸脱する。したがって平安時代以降の時期で、重複するDⅢ-7住居跡以前としか推定できない。

DⅢ-11住居跡

遺構（第150図。図版86・87）

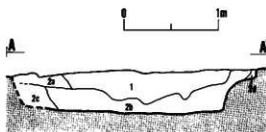
〈検出状況・重複関係〉縄文時代早期日計式押型文期のDⅢ-12住居跡から南南西 12m ±の位置にある。周辺は現代の削剝を受け、表土の下位が“地山”になっている。重複する遺構はない。

〈平面形〉東壁は弧状、それ以外の三方の壁は凸辺隅丸で、方形状になる。しかし、南壁は上部から $15 \sim 25\text{cm}$ の深さで張り出す。埋土は住居跡上部と同じもので、いちおう伴うものと考えておく。〈規模〉 $2.4 \times 2.8\text{m}$ で、張り出し部を含めると $2.8 \times 2.8\text{m}$ である。〈床面積〉 4.5m^2 （張り出し部は除外）



柱穴

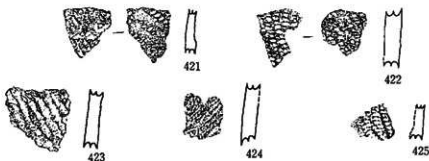
No.	大きさcm	深さcm
PP ₁	17	17
PP ₂	15	13
PP ₃	14	13
PP ₄	10	8
PP ₅	10	5
PP ₆	7	6
PP ₇	7	6
PP ₈	11	不明
PP ₉	8	4
PP ₁₀	11	2
PP ₁₁	9	3
PP ₁₂	15	16
PP ₁₃	15×10	14
PP ₁₄	9	8
PP ₁₅	8	5
PP ₁₆	15	5



壁高

壁	北	西	南	東
高さ cm	47	27	54	41

1. 黒褐色～黒色。
2a. 褐色～暗褐色。 } 丹波火山灰。
2b～2d. 褐色。



No.	地点・部位	種類	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分級	備考	図版
421	堆土中部	磁器	断面	丸? □ 断面面	丸?		1部6種	にぶい黄褐色	
422	堆土上面	"	"	断面斜線文	斜線文		"	"	
423	堆土	"	"	断面斜線文	平造		1部7種	"	207
424	堆土	"	"	断面文	"		"	褐色	207
425	堆土	"	"	丸?	"		"	にぶい黄褐色	

$$S = \frac{1}{4}$$

第150図 DⅢ-11住居跡実測図・出土遺物

〈埋土〉埋土中・下部にレンズ状に堆積する1層は黒褐色土で、VI層下部起源である。2 a～2 d層は褐色土と一部が暗褐色土で、汚れ火山灰である。全体に非常に硬く締まっている。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉27～54cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面〉ほぼ水平である。全体としては軟らかいが、一部には硬いところがある。

〈柱穴〉円形の小ピットが壁際に並ぶものの、北東部のPP1とPP12の間、南側のPP7とPP8の間にそれを欠く。径は7～17cm、深さは2～16cmである。壁からわずかに内側に入った位置にPP13、床面中央から南西方向へPP14～PP16の3個が並ぶ。他にくらべてやや深いPP1・PP3・PP13・PP12を結ぶ4主柱と壁柱穴で構成される可能性が高いが、壁柱穴だけであることも考えられる。PP14～PP16については位置づけが不明である。

〈炉〉伴わない。

遺物 (第150図、図版207)

〈出土状況〉縄文土器の小破片7点と剥片2点が埋土上半を占める1層から出土したにすぎない。縄文土器は胎土に繊維を含まず、特徴からみてI群6類の時期に含まれるであろう。

まとめと遺構の時期

出土遺物は少ないが、埋土の性状やI群6類土器の分布状況・出土量を考慮に入れると、その時期と推定して間違いないであろう。早期後葉の早稲田4類式・赤御堂式期に相当する。

DⅢ-12住居跡

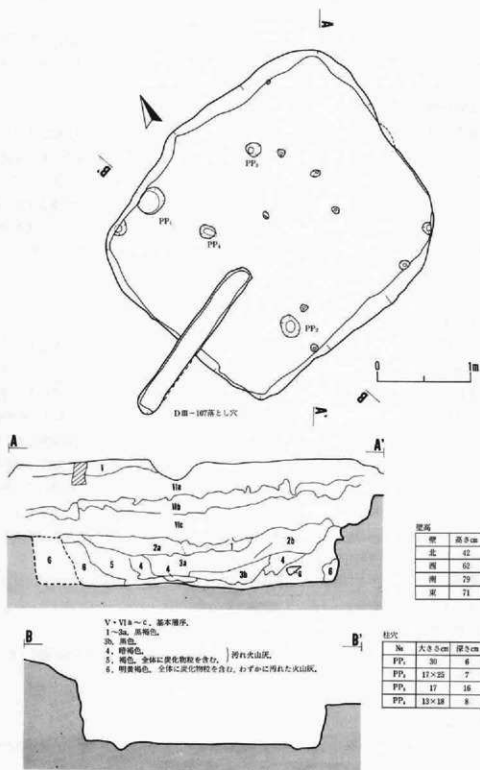
遺構 (第151図、図版86・87)

〈検出状況・重複関係〉L面とM面とを境する段丘崖から移行する緩斜面に構築されている。上位面での遺構精査を終了し、“地山”まで掘り下げて遺構の有無を確認する際にDⅢ-107落とし穴を検出し、精査した。しかし、その東半分が“地山”とは異なる土を掘り込んでいることから重複する遺構が予想され、精査を進めた結果住居跡として確認できた。東側はグリッド壁を残していたために、V層から下位との層位的な関係を観察できた。

〈平面形〉隅丸の台形状 〈規模〉2.4～2.7×2.9～3.2m 〈床面積〉7.3㎡

〈埋土〉土層断面から確認できる掘り込み面は“地山”Ⅶ層である。埋土と“地山”はⅥc層とした黒褐色土に厚く覆われている。その上位はⅥb層・Ⅵa層と続き、“地山”から65cm±上位に中礫浮石起源のV層を確認している。Ⅵa層は多くの黄褐色浮石を含む。基本層序のⅥ層としている。南部浮石に起源する黒褐色土である。Ⅵb層はにおい黄褐色土で、大量の黄褐色浮石を含む。Ⅵc層は黒褐色土である。Ⅵb層・Ⅵc層はⅥ層とⅦ層の間に形成された再堆積層あるいは漸移層であろう。

埋土は、汚れ火山灰が壁際には厚く、床面にはそれよりは薄く堆積する。汚れの少ない6層は西壁の隅から北壁・東壁寄りにとくに厚い。“地山”に比べるとわずかにルーズであることと



第151図 DIII-12住居跡実測図

土器片や炭化物粒を含むことから識別できる。上部から下部にかけては黒褐色土と黒色土とが構成する。1層と2a層、2b層と3a層との層理面は漸移的で不明瞭である。3a・3b層はVIc層に似た層相を示す。埴土は全体が緻密で、非常に硬く締まっている。

〈壁の状態〉ほぼ直立 〈壁高〉42～79cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉ほぼ平坦である。壁際をのぞいては非常に硬く締まった面が広がる北半は炭化物を含む汚れ火山灰の薄層を床構築土にする。南壁は明黄褐色砂質土が壁下半から床面を構成し、軟らかい。

〈柱穴〉円形の小ピットを壁際に伴う部分があるが、数が少なく、不規則であることから壁柱穴としては疑問が残る。径は8～20cm、深さは3～4cmである。PP1～PP4はやや大きな柱穴状ピットであるが、規則的でないことや浅いことから柱穴としては不適当である。また、PP3の南東部にもいくつかの小ピットがあるが、柱穴にはならないと考える。

〈炉〉伴わない。

遺物（第152図・第153図・第372図、図版207・208・212～215）

〈出土状況〉遺物量は少ない。壁際に厚く堆積した汚れ火山灰や床面からの出土が主で、一部が層から出ている。縄文土器と石器がある。

〈土器〉日計式押型文とそれに伴う縄文土器があるが、すべて破片で、43点を数える。押型文29点、縄文7点、胴部下端や底部で無文6点、押型文か沈線文かはっきりしないもの1点(444)である。接合するものがあり、個体数は押型文2点、縄文1点が確認できる。口縁部資料は439(押型文)と445(縄文)の2点で、ともに横位の平行沈線文を伴う。底部資料は4点で、452が底径1.5cmと小さな平底、448・449が丸底になるものであろう。胴部資料の446は下部が外へ膨らみ気味の器形をもつ。押型文は重層V字状文と模式図1(図42)の2種類がある。胎土は、わずかな量の繊維を含む例が多いほか、小礫や砂を含むものがある。色調は、押型文・縄文とも橙色～にぶい黄橙色や黒褐色がある。

〈石器〉剥片石器は不定形石器4点、微細刻離痕を伴う剥片1点、剥片2点がある。礫石器は磨石I類4点とそれに形状や大きさは類似するものの使用面が認められないもの1点がある。

まとめと遺構の時期

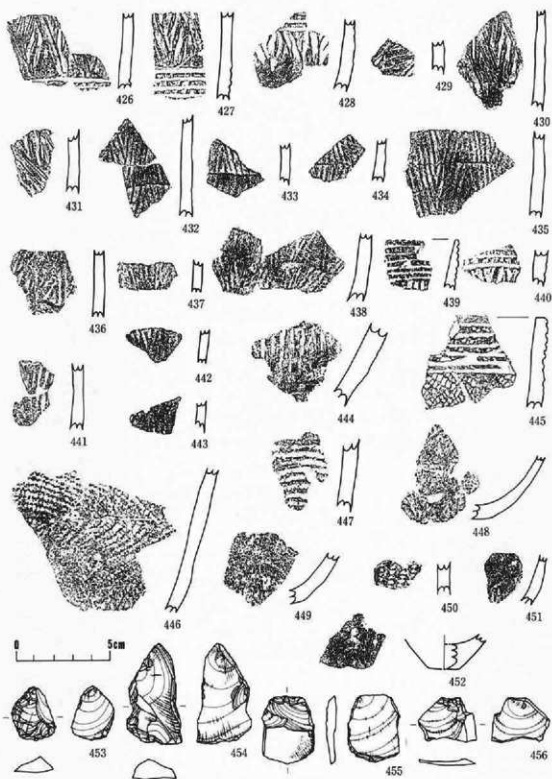
出土遺物や検出層位から、縄文時代早期前葉I群1類(日計式押型文相当)期に分類できる。

EⅡ区

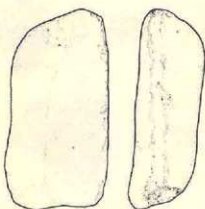
EⅡ-1住居跡

遺構(第154図)

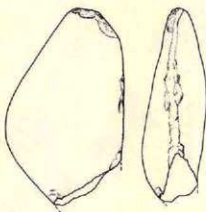
〈検出状況・平面形・規模〉南東隅を含む一部が調査できただけで、そのほかは調査区域外にある。隅丸方形の平面形を推定できるものの、規模は不明である。



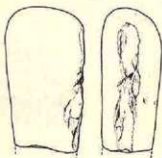
第152圖 DIII—12住居跡出土遺物(1)



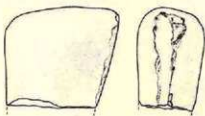
457



458



459



460

No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分	装	備	考	図解
426	壁間内れ火山灰	深鉢	胴部	横位平行沈線文・横式1 (B942)	粗	繊維微量	1	群1	褐色		207
427	床面	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		207
428	壁間内れ火山灰	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		207
429	床面	〃	〃	横式1	〃	〃	〃	〃	〃		207
430	壁間内れ火山灰	〃	〃	〃	平滑	〃	〃	〃	によい褐色		207
431	埴土	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		207
432	壁間内れ火山灰	〃	〃	重層V字状文 (横式6)	〃	〃	〃	〃	付着物		207
433	内れ火山灰	〃	〃	〃	ミガキ	〃	〃	〃	〃		207
434	壁間内れ火山灰	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		208
435	床面	〃	〃	〃	平滑	〃	〃	〃	によい褐色		208
436	埴土	〃	〃	〃	粗	〃	〃	〃	〃		
437	埴土	〃	〃	〃	平滑	〃	〃	〃	褐色		
438	床面	〃	〃	〃	粗	〃	〃	〃	〃		208
439	床面直上	〃	口縁部	横位平行沈線文・押型文	平滑	〃	〃	〃	黒褐色		208
440	火山灰	〃	胴部	〃	粗	〃	〃	〃	褐色		208
441	床面	〃	〃	押型文	〃	繊維微量	〃	〃	によい褐色		
442	床面	〃	〃	〃	ミガキ	〃	〃	〃	〃		
443	埴土	〃	〃	一部に押型文	〃	〃	〃	〃	〃		
444	床面	〃	〃	下部、沈線文か押型文か区別不能・ミガキ	〃	〃	〃	〃	褐色		208
445	壁間内れ火山灰	〃	口縁部	横位平行沈線文・RL・LR(?)・羽状織文	〃	〃	〃	〃	黒褐色		208
446	壁間内れ火山灰	〃	胴部	LR・RL羽状織文の上をミガキ	平滑	〃	〃	〃	によい褐色		
447	埴土	〃	〃	ミガキ	粗	〃	〃	〃	褐色		208
448	壁間内れ火山灰	〃	胴・底	沈線、無文・ミガキ	粗	繊維微量	〃	〃	〃		208
449	床面	〃	胴部	〃	〃	〃	〃	〃	〃		208
450	埴土	〃	〃	RL	〃	〃	〃	〃	黒色		
451	壁間内れ火山灰	〃	〃	下部、ミガキ	粗	〃	〃	〃	褐色		208
452	床面	〃	底部	直径1.5cmの平底・尖底を切ったものか・ミガキ	〃	〃	〃	〃	〃		208

$$S = \frac{1}{s}$$

第153図 1 DIII-12住居跡出土遺物(2)

No	地 点・層 位	部 類	大きさ(最大) : mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図 録
			長さ	幅	厚さ				
453	床面	不定形石片	30	21	8	4.1	磁質泥岩, De 3	2	212
454	床面	"	54	29	10	13.4	"	2。右側縁は曲線状断面	212
455	壁際付れ火山灰	"	36	27	5	7.2	"	2。右側縁と先端部90°に近い鋭角調整	212
456	埋土	"	(24)	31	3	(2.4)	磁質黄緑質泥岩, De 1	5。曲線状断面	213
457	床面	磨石 I 類	158	82	32	800.0	輝石安山岩, An 2	横断面 12 × 18mm	214
458	最下層付れ火山灰	"	(156)	95	49	(798.0)	"	横断面 7 × 7mm	215
459	埋土(壁際)	"	(118)	63	48	(606.0)	"	12cm, 両面に浅い刻線	214
460	埋土	"	(80)	91	54	(602.0)	" An 3	17cm, "	214

第153図 2 D III-12住居跡出土遺物(3)

〈埋土〉 2層の黒褐色土を觀察できる。上層は粒状～粒径30mmの塊状の灰白色浮石を含む。

下層も灰白色浮石をふくむが、少量で、粒径も小さい。そのほか焼土や炭化物を含む。

〈壁の状態〉 外傾 〈壁高〉 18～22cm

〈床面・掘り方〉 床面の詳しいことはわからないが、北東側へ緩やかに下がっている。掘り方は伴わない。

〈壁溝・柱穴・カマド〉 調査できた部分には検出されていない。

遺物

〈出土状況〉 土師器甕 I 類・II 類あわせて 5 点、坏 I 類 2 点の破片が埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

住居跡として処理してきたが、現段階では住居跡とする積極的な理由をあげることができない。床下に掘り方を伴わないこと、焼土と炭化物の薄層が床面直上に分布するあり方は周辺に数多く存在する焼土を伴うピットに類似し、住居跡でない可能性も強い。したがって遺構登録や記載は E II-1 住居跡のままにするが、住居数の中には含めないことにする。平安時代の遺構であることは確実である。

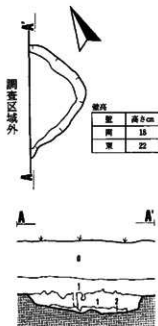
E II-2 住居跡

遺構 (第155図, 図版88)

〈検出状況・平面形・規模〉 東隅を含む一部を調査できただけで、そのほかは調査区域外にある。隅丸方形の平面形を推定できるものの、規模は不明である。

〈埋土〉 黒色・黒褐色の土層群が卓越する。灰白色浮石の小塊や火山灰塊が全体に含まれ、浮石は中・下部の 5 層に多い。

〈壁の状態〉 直立～緩やかな外傾 〈壁高〉 54cm



- 0・1. 基本遺構。
1. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を多く含む。
2. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を含むが少ない。焼土・炭化物を含む。

$$S = \frac{1}{80}$$

第154図 E II-1 住居跡実測図

〈床面・掘り方〉ほぼ平坦である。掘り方を下位に伴う。

〈壁溝・柱穴・カマド〉調査できた範囲には検出されていない。

遺物

〈出土状況〉土師器甕Ⅰ類・Ⅱ類あわせて3点、坏Ⅰ類3点、縄文土器1点の破片が埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

上述のEⅡ-1住居跡と同様に部分的な調査である。掘り方を伴うことや住居跡によくみられるような埋土構成を示す点からは、住居跡の可能性が高い。しかし、方形のピットの可能性も否定すること

とはできず、遺構登録や記載はEⅡ-2住居跡のままにし、住居数のなかに含めないことにする。平安時代の遺構であることは確実である。

EⅢ区

EⅢ-1住居跡

遺構（第156図、図版88・89）

〈検出状況・重複関係〉重複する遺構はない。

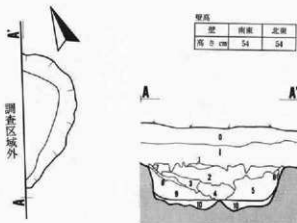
〈平面形〉隅丸正方形 〈規模〉3.0×3.2m 〈床面積〉6.9㎡ 〈主軸方向〉S-33°30'-E
〈埋土〉南西壁にみられるわずかな暗褐色土をのぞいては黒褐色・黒色の土層群で構成される。多量の灰白色浮石を全体に含み、浮石塊の最大粒径は80mmと大きい。

〈壁の状態〉わずかに外傾 〈壁高〉40~52cm 〈壁溝〉西壁を含む北西壁の約90%の部分と南西壁のほぼ全部、北隅付近に存在する。幅は12~25cm、深さは3cmである。

〈床面・掘り方〉ほぼ平坦で、全体が硬く締まっている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉伴わない。

〈カマドの位置〉南東壁の東隅寄り 〈カマド本体〉残存状態は良くない。崩壊土は火山灰と粘土質シルトの大塊がマトリックスで、黒褐色土が混じる。その下位は灰白色浮石を含む層厚5~9cmの黒褐色土である。左側壁は粒径10~18cmの角礫・亜角礫5個、右側壁はそれよりも

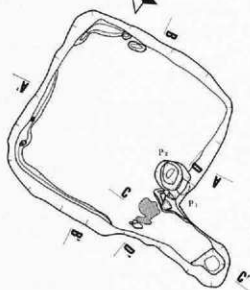


第155図 EⅡ-2住居跡実測図



○炭化物

焼土・炭化物分布状況



1. 黒褐色。灰白色浮石を少量含む。
2. 黒褐色。灰白色浮石塊を全体に多量に含む。
3. 黒褐色～黒色。灰白色浮石塊のほか、焼土・炭化物を含む。
- 4a. 黒褐色。
- 4b. 暗褐色。
5. 黒褐色。灰白色浮石・炭化物を含む。
6. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を全体に含む。
7. 黒褐色。
8. 黒色。灰白色浮石を全体に含む。
9. 黒褐色。灰白色浮石を少量含む。
10. 黒褐色。焼土塊を全体に含む。
11. 黒色。灰白色浮石の小塊のほか、炭化物を含む。
12. 黒色。焼土・炭化物を含む。
13. 黄褐色～黒色。細り方焼土。

壁高

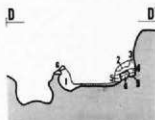
壁	北西	南西	南東	北東
高さ cm	48	50	44	52

カマド

本体(部)	長さ	50	煙道部	長さ	132	煙口部	径	22×28
	幅	80		幅	66		高さ	80
	厚さ	34×40		厚さ	64			



1. 黒褐色。灰白色浮石塊のほか、粘土質シルト塊を含む。
2. によい黄褐色。 } 粘土質シルト。
3. 褐色。
4. 黒色。灰白色浮石と、粘土質シルトの小塊ほかを含む。
5. 黒褐色。
6. 赤褐色。焼土卓越。
7. 黒色。灰白色浮石を含む。
8. 黒褐色。火山灰や褐色土の塊のほか、焼土・炭化物を含む。
- 9・10. 褐色。
11. 黒褐色。
12. 褐色。河れ火山灰。
13. 黒色。
14. 不明。



1. 褐色。焼土を含む。
2. 褐色。粘土質シルト。
3. 黒色。粘土質シルトの小塊を含む。
4. 暗褐色。
5. 褐色。

ピット

No	P ₁	P ₂
大きさ cm	22×不明	45×46
深さ cm	20	48



$$S = \frac{1}{48} (\text{※})$$

第156図 EⅢ-1 住居跡実測図

小さな2個の礫が芯材として原位置を保ち、火山灰に被覆されている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。底面はわずかに傾斜して下がり、円形のビットを煙出し部に伴う。その境は、火山灰が礫1個と土師器甕の大型の破片を被覆して天井部を作り、良く残っている。その部分の天井部の高さは28cmで、内壁はよく焼けている。また、長軸方向に走る浅い溝が煙道部底面中央に掘り込まれていたが、実測図に記入されていないこととField Cardにも具体的な計測値が記入されていないため、規模等は不明である。

〈付属施設〉重複するビットP1・P2がカマド左側壁に隣接してある。P1は平面形が楕円形で、南東壁が住居跡壁の奥へ潜り込む袋状ビットである。P2は円筒形で、底面は中央がいちだん低くなっている。2基の新旧関係は次のようになる。P2の埋土は黒褐色土が厚く堆積した上に層厚4cm±のシルト質粘土が認められ、カマド構成礫の動いたものがその上に載る。P1はP2の南東壁の上・中部を埋土から切っていて、その部分ではP2の最上部と同じシルト質粘土を貼って壁を造り出している。以上のことから、P1はP2よりも新しく、その構築の際にP2を閉塞したことが考えられる。

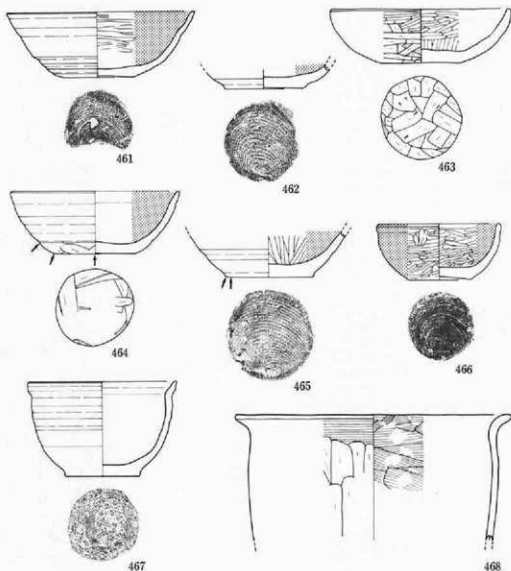
〈その他〉現地性の焼土が埋土下部から床面の層準にかけて広く分布し、草本類や材の炭化物を部分的に伴う。壁隙では、焼土が床面よりも9cm上位やや高い位置にあるものの、そのほかでは2～3cm上位が一般的である。層厚は1.5cm±と薄い。その下位から床面の間には灰白色浮石を含む黒褐色土が堆積している。

遺物（第157図～第160図、図版219・226・239・240）

〈出土状況〉埋土中・下部を中心に、煙道部・床面直上・埋土上部・カマド本体からいくぶん多い量が出土している。土器と鉄製品・鉄滓・土製品がある。

〈土器〉土師器甕が主体を占め、そのほかには坏・土師器壺・土師器手づくね土器・土師器碗・須恵器・縄文土器がある。土師器甕はI類が卓越し、M1a・M1b・L2・L4a・L5bほかがある。467・470はII類で、SとM1bである。467はいちおう甕として分類した。481・482は胴部下端へ底部の外面に鋭いヘラ状工具による刻線を伴う。坏の図示例は463を除いてはI類である。B0・B3・C4がある。破片ではI類42点に対してII類7点がある。I類は1点のB0と2点のC4を含む。463は、外面が口縁部のヘラミガキのほかは底部も含めてヘラケズリされ、内面はヘラミガキされているが、黒色処理の有無は不明である。器形や厚い器壁はロクロ使用のものと異なる面があり、ロクロ不使用のものと推定した。466は坏よりも一回り小型で、底部外面を除いてはヘラミガキされ、両面が黒色処理された甕である。土師器の壺や手づくね土器は480も含めて破片である。壺は内外面がヘラミガキされた小型のものである。須恵器は甕の破片1点である。

〈鉄製品・鉄滓〉図示していないが、刀子と断面が方形の細い棒状のものの破片が埋土から

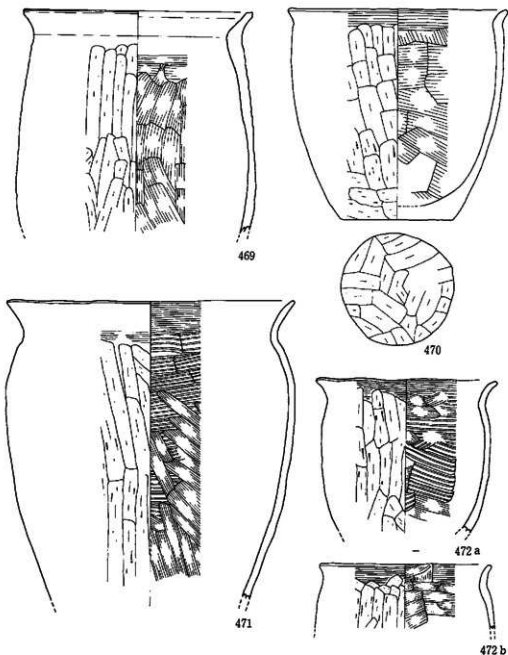


No	地 点・ 層 位	種 類	外 面			内 面		計 測 値 : cm			分 類	図 解
			口縁部	胴 部	底 部	口 一 周	黒色処理	口 径	口 縁 高	底 径		
461	カマド跡裏土・床面	坪	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	ヘラミダキ	○	15.0	5.2	5.3	1B9	
462	埋土	#	—	#	#	#	○	—	(1.5)	6.2	#	
463	埋土下部	#	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	#	—	14.5	4.3	6.6	219	
464	埋土	#	ロクロ痕	ロクロ痕 ヘラミダキ	#	#	○	13.5	5.0	6.4	1C4	
465	埋出し部上部	#	—	ロクロ痕	回転糸切り+ヘラミダキ	#	○	—	(3.4)	7.0	1B3	
466	埋土下部	碗	ヘラミダキ	ヘラミダキ	回転糸切り+ヘラミダキ	#	○	10.0	4.5	5.0		

No	地 点・層 位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 解
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 径	口 縁 高	底 径		
467	埋土下部～床面直上	土師器	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	12.0	7.5	6.0	1B5	
468	埋土・床面直上	#	横ナデ	ヘラミダキ	—	横ナデ	ヘラミダキ	—	22.1	(10.0)	—		

S = $\frac{1}{2}$

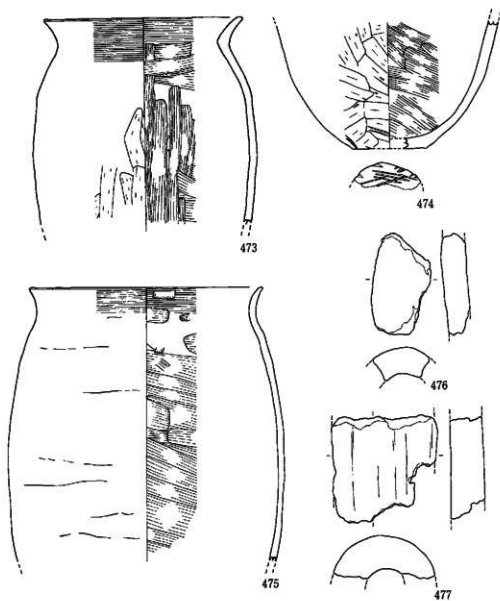
第157図 E III-1 住居跡出土遺物(1)



No	地 点 ・ 層 位	種類・図様	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 解
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 径	胴 径	高 度		
469	カマド跡・硬土・埋土	土師器類	ロクロ痕	ヘラケズリ	—	ロクロ痕	ヘラナデ	—	16.3	(17.5)	—	IIIc2	—
470	埋土・産道跡埋土	■	横ナデ	■	ヘラケズリ	横ナデ	■	割落	17.5	16.9	9.0	IMc1	226
471	埋土下部埋土カマド	■	■	■	—	■	肩毛目ナデ	—	23.0	(23.7)	—	IIc2	—
472a	埋土下部	■	■	■	—	■	肩毛目	—	14.5	(12.3)	—	IMc1	226
472b	埋土下部・産道跡埋土	■	■	■	—	■	ヘラナデ	—	13.8	(5.1)	—	—	—

S = $\frac{1}{3}$

第158図 E III-1 住居跡出土遺物(2)

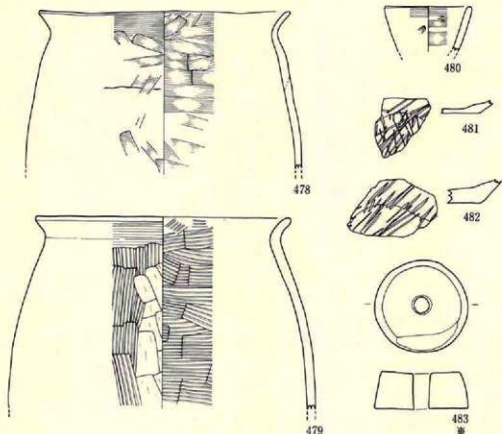


No	地点・層位	種類・群別	外面			内面			計測値: cm		参照
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	高さ	
473	弥生前期土器上部	土師器	横ナデ	ヘラナデ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	35.8	(36.4)	112
474	埴土	—	—	ヘラナデリ+割線	割線	—	—	ナデ	—	(9.9)	6.0
475	埴土下部	—	横ナデ	ナデ	—	横ナデ	ナデ	—	38.6	(33.8)	114

No	地点・層位	種類	大きさ(最大): cm			重量g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
476	埴土上部	輪切口	(8.1)	—	2.0	(34.9)	破片。熱を受けていることからみて、伊勢川流域近く。	
477	埴土	—	(7.7)	—	27	(18.0)	外径85・通風孔径34(以上mm、推定値)。破片。	

S = $\frac{1}{2}$

第159図 EⅢ-1 住居跡出土遺物(3)



No	地点・層位	種類・図様	外 面			内 面			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	胴径	底径		
478	埋土部埋土・埋土	土師器	横ナデ	ナデ	—	ナデ	ナデ	底径	29.9	(12.5)	—	II2	
479	カマド右側部	?	横ナデ	刷毛目+ナズリ	—	ナデ+刷毛目	刷毛目	—	29.4	15.3	—	II2	
480	埋土	土師器	?	ナデ	—	横ナデ	ナデ	—	7.9	(2.4)	—		
481	埋土	土師器	—	刷毛目	刷毛目	—	—	—	—	—	—		
482	埋土	?	—	?	?	—	—	—	—	—	—		

No	地点・層位	類 種	大きさ(最大): mm			重量g	特 徴 ・ 備 考	図版
			上面径	下面径	厚さ			
483	埋土最下部	紡錘車	42	58	19	56.8	円孔径9mm。宛形。	240

第160図 E III-1 住居跡出土遺物(4)

$$S = \frac{1}{2}(\ast) \cdot \frac{1}{3}$$

出ている。鉄滓は49個1,807gが埋土中部を中心に出土し、最大の個体は275gを測る。

〈土製品〉476・477は甕の羽口の破片で、埋土からのものである。477は多量の鉄滓とともにあったものである。他に小破片2点がある。483は一部を欠く土製紡錘車である。

まとめと遺構の時期

鉄滓や甕の羽口は廃棄物である。出土状況からは土器の多くも一緒に廃棄されていることが推定できる。埋土の状況や出土遺物から、平安時代II群に分類できる。

E III-2 住居跡

遺構（第161図。図版89）

〈検出状況・重複関係〉現代に受けた削割が著しく、下底部が残った掘り方から存在を確認できた。重複する遺構はない。

〈平面形〉隅丸正方形 〈規模〉
3.6×3.7m 〈床面積〉13.1m²
〈主軸方向〉不明

〈埋土〉掘り方埋土の一部が観察できたにすぎない。灰白色浮石は北西壁付近を中心にみられるが、少量である。

〈壁・壁高・壁溝〉不明

〈床面・掘り方〉床面は削割されて不明である。掘り方は全体規模のものである。

〈柱穴〉いくつかの柱穴状ビットがあるが、主柱穴とはならない。

〈カマド〉煙道部・煙出し部も含めて、痕跡は確認できない。

〈付属施設〉不整楕円形気味のビットP1が北隅にある。埋土は2層の黒褐色土で、層厚5cmの上層は火山灰の小塊を多量に含んでいる。それと重複するような状態で北側が落ち込んでいる。P1とは異なるビットの可能性があり、P2としておく。P1は共伴する貯蔵穴であろう。

遺物

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、土師器甕の破片11点が掘り方埋土・P1・柱穴状ビットから出土しているにすぎない。

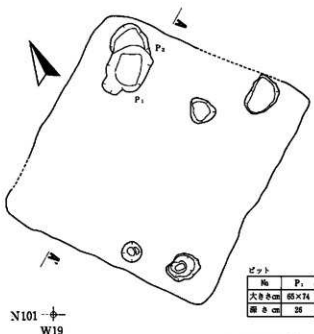
まとめと遺構の時期

掘り方埋土に灰白色浮石を含むことから、平安時代Ⅲ群に分類できる。

EⅣ区

EⅣ-6住居跡

遺構（第162図。図版90～92）

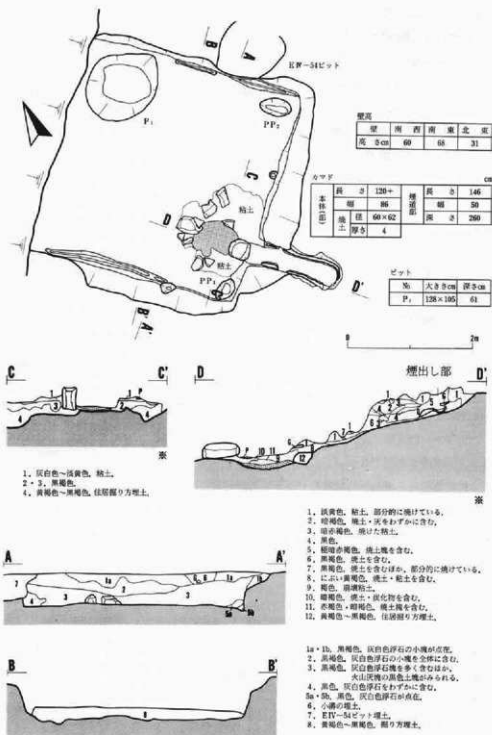


1. 黒褐色・黒褐色。掘り方埋土。灰白色浮石を少量含む。



第161図 EⅢ-2住居跡実測図

S=1/40



第162図 EIV-6 住居跡実測図

S = $\frac{1}{40}$ (※)

〈検出状況・重複関係〉北西壁全部を含む一部は最近の削剝をうけて消失している。南東壁が重複しているEⅣ-54ピット（平安時代）には切られている。

〈平面形〉方形基調 〈規模〉4.0m×不明 〈床面積〉不明 〈主軸方向〉S-50°30'-E

〈埋土〉黒色土が壁際下部を占めるほかは黒褐色の土層群で構成される。灰白色浮石は全体に含まれ、最上部をのぞいては量的に多い。粒状から最大80mm±の大塊まであり、下部ほど大型のものが多く。

〈壁の状況〉直立～外傾。南西壁・南東壁は上半の外傾が著しい。〈壁高〉31～68cm 〈壁溝〉調査した範囲では南西壁と北東壁沿いの一部にある。幅は8～20cm、深さは4～9cmである。

〈床面・掘り方〉床面は小さな凹凸があるものの、全体としては平坦である。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉PP1とPP2が東隅と南隅に検出されたが、形態が不安定なうえに浅く、主柱穴としては不適当である。

〈カマドの位置〉南東壁中央と南隅との中間 〈カマド本体〉残存状態は良くない。崩壊したシルト質粘土や粒径15～43cmの亜角礫・亜円礫多数が火床部の上を覆っている。礫のうち、1、2個は原位置にあるが、ほとんどが動いている。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。残存状態は比較的よい。側壁や天井部は本体同様のシルト質粘土を最大層厚7cmと厚く貼って作り、径15cmの煙出し部が先端部からいくぶん本体寄りに穿たれている。煙出し部には粒径10～20cmの礫4個が検出されたが、それらは上部の施設を作っていたものであろう。

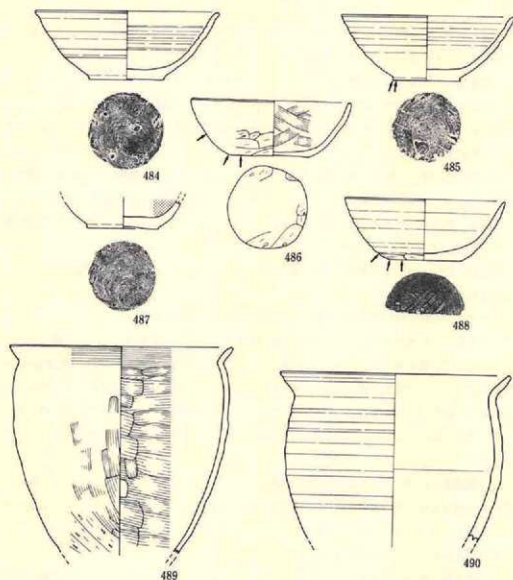
〈付属施設〉貯蔵穴P1が削剝された崖線近くの北東壁際にある。円筒形のピットで灰白色浮石の小塊を全体を含む層厚10cm±の黒褐色土が上部を占めるが、埋土の大半は火山灰塊を含む暗褐色土である。埋土はややルースである。

遺物（第163図・第164図、図版226）

〈出土状況〉埋土と埋土下部を中心に、床面直上～床面・カマド本体・P1・煙道部・掘り方埋土からやや多くの量が出土している。土器と石器がある。

〈土器〉破片数の多い方から順に、縄文土器・土師器壺・坏がある。土師器壺はⅠ類が卓越し、M1b・L1・L2などがある。490・492はⅡ類M1aである。493は木葉底で、破片資料では砂底が1点ある。坏は5点を図示した。Ⅰ類はB01点、Ⅱ類はA2・B0・B3が1点ずつである。485の底部周辺の再調整は断続的・部分的である。486はわずかにクロコ痕を残し、体部下半から底部周辺が再調整されているが、切り離し技法は不明である。破片資料はⅠ類26点に対しⅡ類11点で、Ⅰ類にB01点がある。縄文土器は384点出土している。

〈剥片石器〉石鏃3点が埋土と床面から出土している。

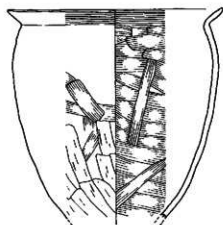


No	地点・層位	種類・用途	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 取
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	胴 高	底 径		
484	埋土～表面	坪	ロクロ痕	ロクロ痕	回転未切り	ロクロ痕	×	×	14.7	5.5	5.9	IIa	
485	埋土直上～表面	#	—	—	回転未切り+ヘラケズリ	ロクロ痕	×	×	13.9	5.2	5.4	IIa	
486	埋土下部～表面	#	ユビナデ	ユビナデ+ヘラケズリ	ヘラケズリほか	ユビナデ	×	×	12.7	4.4	6.4		
487	コマド新填土上	#	—	ユビナデ	回転未切り	ヘラミガキ	○	—	(2.1)	5.8	1.9		
488	埋土	#	ロクロ痕	ロクロ痕+ヘラケズリ	静止切り離し+ヘラケズリ	ロクロ痕	×	×	12.8	4.8	5.8	IIa2	

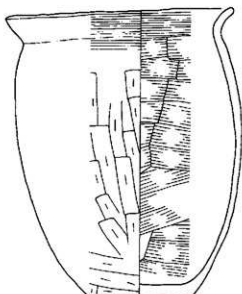
No	地点・層位	種類・用途	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 取
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	胴 高	底 径		
489	埋土下部～表面	土師器類	横ナデ	ナデ+ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	17.8	(16.3)	—	IMa	
490	表面	#	ロクロ痕	ロクロ痕	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	18.4	(13.3)	—	IMa	

S = $\frac{1}{4}$

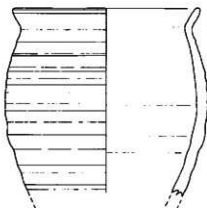
第163図 EIV-6 住居跡出土遺物(1)



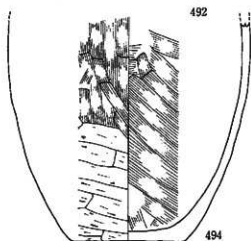
491



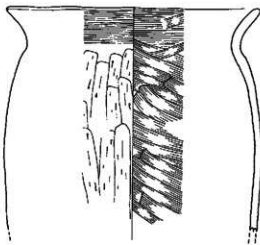
493



492



494



495

No	地点・層位	種類・形状	外 径			内 径			計 測 値 : cm			分 類	図 版
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 径	胴 径	底 径		
491	カマド跡出土	上野器	横ナデ	ナデ+ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	17.2	(26.4)	—	III	
492	カマド跡出土	—	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	15.9	(15.0)	—	III	
493	堀土〜灰部	—	横ナデ	ヘラケズリ	木炭	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	18.3	22.6	8.4	III	296
494	カマド跡	—	横ナデ	ナデ+ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	(17.4)	9.6	—	
495	堀土	—	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	(28.2)	17.8	—	III	

第164図 EIV-6 住居跡出土遺物(2)

S = $\frac{1}{2}$

まとめと遺構の時期

埋土からの488・495以外の図示例は埋土～床面や床面・カマドなどから出土している。埋土の状況や出土遺物から、平安時代Ⅱ群に分類できる。

EⅣ-7住居跡

遺構（第165図、図版91・92）

〈検出状況・重複関係〉重複するEⅣ-8住居跡（平安時代）に全形を覆われ、層厚11cmの貼り床を施されている。北西壁は最近の削剝のため、あるいは自然に消滅し、把握できない。

〈平面形〉隅丸方形と推定 〈規模〉2.6m×不明 〈床面積〉不明 〈カマド主軸方向〉S-90°-E

〈埋土〉面有の埋土については不明である。

〈壁の状態〉消失した北西壁をのぞいても下部がわずかに残っているにすぎない。

〈壁高〉8～11cm 〈壁溝〉床面が残存している部分には検出されていない。

〈床面・掘り方〉カマド前面が非常に硬く締まっている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉カマド前面にある柱穴はEⅣ-8住居跡のPP1である。他に柱穴はない。

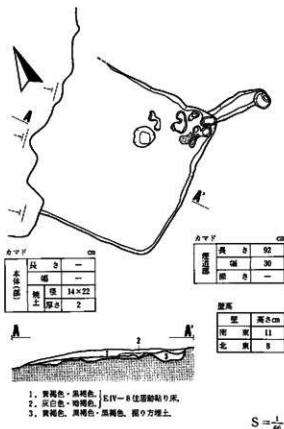
〈カマドの位置〉東隅 〈カマド本体〉シルト質粘土の小規模な広がり火床部が確認できる。火床部は小規模で、層厚も薄い。〈煙道部・煙出し部〉削剝のため、形態は不明である。底面はわずかに傾斜して下がり、円形小ピットを先端に掘り込んで煙出し部としている。なお、EⅣ-8住居跡の側からの明確な貼り床は煙道部には確認できなかった。

遺物

〈出土状況〉上述のような検出状況であり、土師器寛11点、縄文土器4点の破片が埋土と掘り方埋土から出土しているだけである。

まとめと遺構の時期

本遺構は平安時代に分類できる。同時代のEⅣ-8住居跡よりも時間的には先であるものの、小群での区分は不明である。



第165図 EⅣ-7住居跡実測図

EⅣ-8 住居跡

遺構（第166図、図版93）

〈検出状況・重複関係〉北壁全部と西壁の北側半分・東壁の一部は最近の削剝を受け、消失している。また、EⅣ-9住居跡と重複する部分の壁は土層断面中に観察できただけで%は確認できなかった。重複するEⅣ-7・E-9の各住居跡（ともに平安時代）を切っているが、EⅣ-59ピット（時期不明）との新旧は不明である。

〈平面形〉隅丸方形を基調とする。〈規模〉6.0m×不明 〈床面積〉不明 〈主軸方向〉S-72°30'-E

〈埋土〉黒褐色土の単層に近い。火山灰が粒状～小塊状に全体に含まれるほか、少量の炭化物が散在する。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉9・23cm 〈壁溝〉調査した範囲には検出されなかった。

〈床面・掘り方〉中央から西側へはわずかに下がって行く。EⅣ-7住居跡の全形を覆って貼り床をし、EⅣ-9住居跡との重複部分から南西壁付近にも貼り床が認められる。掘り方は伴わない。

〈柱穴〉位置・配置・規模から、PP1～PP4の4本柱を想定できる。柱穴は隅や推定の隅から内側に入った位置にあり（I型）、いくぶん台形状になる。

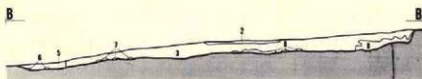
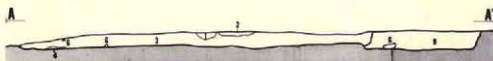
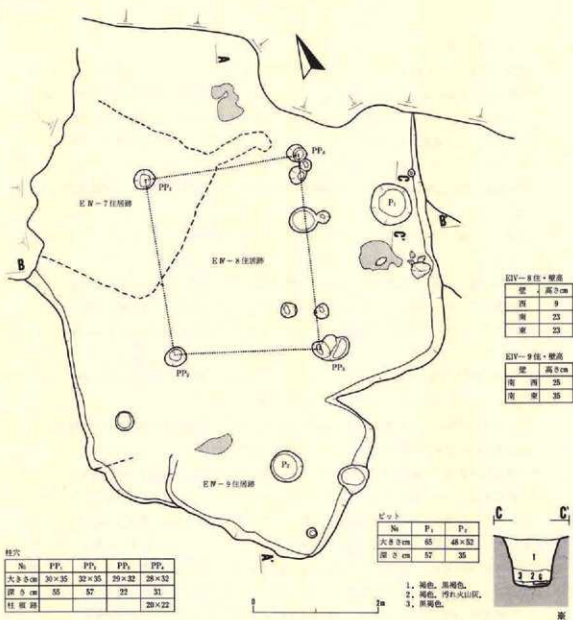
〈カマド〉円形の焼土が東壁中央と南隅との中間と推定される付近に検出された。壁との間には粒径30cmの垂角礫が埋設されており、右側壁の構築材とみられる。周辺に分布する礫はカマド構築材が崩壊・移動した一部と推定できる。焼土は径48×68cm、層厚5cmである。それらの状態や貯蔵穴P1が左隣りに存在することからみて、焼土をカマドの火床部としてよいであろう。そのほか推定される北壁中央際にも焼土がある。径は40×57cm、層厚は5cmである。あるいはカマド火床部かも知れないが、具体的なことはわからない。なお、その南東には最大粒径32cmの垂角礫のほか、粒径の小さな破碎垂角礫・角礫が床面直上に多量に分布している。礫は焼け、マトリックスになる黒褐色土は多くの炭化物を含んでいる。起源は不明である。

〈付属施設〉貯蔵穴P1がカマド左隣りにある。円筒形のピットで、埋土は黒褐色土と褐色土で構成され、全体にルースである。

遺物（第167図、図版236）

〈出土状況〉埋土からの出土が大部分で、少量が床面やP1・掘り方埋土から出ている。量は少ない。土器と鉄製品・砥石がある。

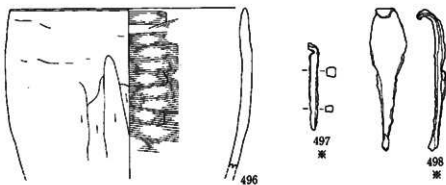
〈土器〉破片数の多い方から順に、縄文土器・土師器壺・坏・須恵器がある。土師器壺はI類だけであり、L5（496）がある。496は胴部が内湾気味に立ちあがったま口唇部に収斂し、明確な口縁部を伴わない鉢に似た器形になる。破片では砂底が1点ある。坏はI類11点、須恵



1. 褐色。
2. 黒褐色。
3. 黒褐色、炭化物粒が点在。
4. 明褐色、硬土。
5. 6. 褐色。
7. 褐色、火山灰混入。
8. 黒褐色、炭化物を含む。
9. 黒褐色、褐色土層・硬土粒が点在。
- 1~8. 図IV-8住居跡埋土。
9. 図IV-9住居跡埋土。

第166図 EIV-8・9住居跡実測図

$$S = \frac{1}{40} (\text{cm})$$



No.	地点・層位	種類・名称	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分析	図版
			口縁部	胴部	形	底 部	口縁部	胴部	形	底 部	口 径	底 径	高 度		
496	灰土・埋土	土師器製	不明	ヘラケズリ	—	ナデ	ナデ	—	—	—	18.9	(12.9)	—	116	

No.	地点・層位	器 種	大 小 寸 (最大) : mm			重量 : g	特 徴 ・ 備 考	図版
			長 寸	幅 寸	厚 寸			
497	埋土	釘	45	5	3	4.0	方形。跡を平らにしてすり上げ、底部にする。	236
498	埋土	鈎	85	20	2	11.1	方形。端は不明瞭。刃部長43mm。刃先が大きく鈍直。	236

第167図 EⅣ-8 住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{4}(\text{長}) \cdot \frac{1}{2}$$

器は壺2点の破片がある。

〈鉄製品〉鈎498と釘497は埋土からの出土である。498は茎部の開寄りの裏面に鉄片が付着し、二重になる。

〈磁石〉1点が埋土から出土している。大きさが38×60mm、厚さが12mmの不整形な凝灰岩の両面に浅い擦痕が認められる。

まとめと遺構の時期

重複する平安時代のEⅣ-7・EⅣ-9の2棟の住居跡よりは時間的に後の同時代のものであることが分かるものの、小群については出土遺物が少ないことや埋土からも判断が困難である。

EⅣ-9 住居跡

遺構 (第166図、図版92)

〈検出状況・重複関係〉EⅣ-8住居跡(平安時代)と北側約1/2ほどが重複し、埋土から切られている。

〈平面形〉隅丸正方形と推定 〈規模〉2.6×(推定)2.8m 〈床面積〉6.2㎡(推定)

〈埋土〉黒褐色土の単層である。粒径10～80mmの火山灰の大小塊が全体に散在するほか、黒色土の大塊を含む。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉25・35cm 〈壁溝〉残存部には検出されていない。

〈床面・掘り方〉床面はいくらか硬い。全体規模の掘り方を下位に伴う。EⅣ-8住居跡と重複する部分は、層厚10cm以上の貼り床が同住居跡の側から施されている。

〈焼土〉径50cmの現地性焼土が推定される北西壁中央からわずかになかに入った位置にある。上はEⅣ-8住居跡の貼り床に覆われている。位置的にはカマド火床部の可能性が強い。

〈その他〉中央部付近にあるP2は床面の下に検出された。円筒形のやや浅いピットで、埋土は汚れ火山灰が卓越する。本遺構との関係は不明である。

遺物

〈出土状況〉EⅣ-8住居跡に切られていることもあって量は少ない。埋土を中心に、床面と掘り方から土器が出土している。

〈土器〉すべて破片で、数の多い方から順に、縄文土器・土師器壺・坏がある。土師器壺はⅠ類・Ⅱ類あわせて14点、坏はⅠ類3点、Ⅱ類1点である。縄文土器は44点である。

まとめと遺構の時期

本遺構は平安時代に分類できる。重複する同時代のEⅣ-8住居跡よりは時間的に先であるが、小群での区分は出土遺物や埋土からも不明である。

EⅣ-10住居跡

遺構（第168図、図版93・94）

〈検出状況・重複関係〉1棟の住居跡と考えて精査をすすめたところ、北東壁や南東壁が予想された位置よりも外方へ膨らみ、いびつな形になることがわかった。それは本遺構の埋土を掘り込んで構築されたEⅣ-11住居跡（平安時代）と重なっているためである。南東隅で重複するEⅣ-107落とし穴を切っているが、南西壁西隅寄りでも重複するEⅣ-54ピット（平安時代）との新旧関係は不明である。

〈平面形〉わずかに隅丸の正方形と推定 〈規模〉4.3×4.4m 〈床面積〉16.9㎡（推定）

〈埋土〉黒褐色土の土層群が卓越する。黄褐色火山灰の小塊が南西壁寄りの上部を占める8層の一部に集中する。

〈壁の状態〉直立～外傾 〈壁高〉22～40cm 〈壁溝〉残存する部分では北西壁と南西壁沿いの一部にあり、それぞれは短い。幅は8～20cm、深さは6～11cmである。

〈床面・掘り方〉小凹凸が中央にあり、床面はそれほど硬くはない。EⅣ-11住居跡と重複する床面の一部はわずかに低くなっている。これは同住居跡に削られたためと考えられる。

〈柱穴〉PP1が検出されただけである。

〈カマド〉焼土が南東壁南隅よりの部分に検出されたが、位置的にはEⅣ-11住居跡内に入る。径は30×40cm、層厚は3cmである。また南隅寄りの南東壁外は検出面よりもわずかに低く、ひとつの隅を含む方形になり、楕円形の張り出し部を伴う。埋土は、粘土質シルトの小塊やその焼けたもの・炭化物を含む黒褐色土である。そこから下がった壁の上部には粘土質シルトが貼り付いた状態で残存する。それらの状況からは張り出し部がカマド煙道部であること、

その方向や位置からは上述の焼土がカマド火床部の残存部であることが推定できる。残存状態や方向からはEⅣ-11住居跡に伴う可能性は少なく、同住居跡に床面まで切られていることを考えるならば本遺構に伴うものといえるであろう。

〈付属施設〉P1が北西壁寄りにある。楕円形の浅皿状のビットで、埋土は火山灰の小塊や炭化物を少量含む黒褐色土の単層である。貯蔵穴、あるいはそれに類するものであろう。

遺物（第169図、図版236）

〈出土状況〉埋土を中心に、床面や掘り方埋土・PP1から少量が出土している。土器と鉄製品・鉄滓・石器がある。

〈土器〉図示例以外は破片であり、数の多い方から順に、縄文土器・土師器甕・坏・須恵器がある。土師器甕はすべてⅠ類である。砂底が1点ある。坏はⅠ類B0の2点499・501のほかは破片で、Ⅰ類39点・Ⅱ類7点がある。500は須恵器の甕である。縄文土器は138点である。

〈鉄製品・鉄滓〉目釘付手鐲502は木質の柄が両端に残っている。木質は表面に厚く、裏面に薄い。目釘は裏面から打ち込まれ、現存長は14mmである。刃部は中央から一端へやや寄った部分の磨減が著しい。鉄滓は3個395gが埋土から出土している。

〈その他〉トランシェ様石器1点がある。

まとめと遺構の時期

黄褐色火山灰が灰白色浮石を伴わずに単独で埋土中に存在することから、平安時代Ⅴ群に分類できる。

EⅣ-11住居跡

遺構（第168図、図版93・94）

〈検出状況・重複関係〉EⅣ-10住居跡（平安時代）の埋土を切って構築されている。南東壁をえぐり込むような形で重複するEⅣ-58ビット（時期不明）とは新旧関係が不明である。位置や同ビットの形状からは共伴する可能性も考えられるが、確実なことはわからない。

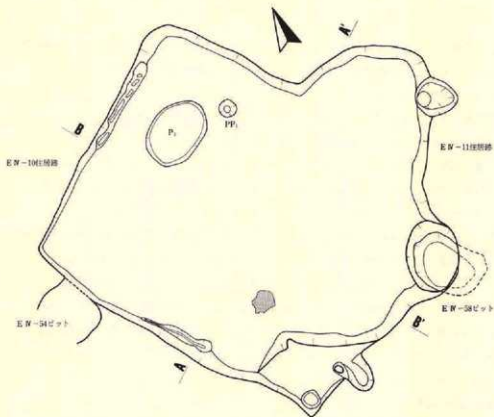
〈平面形〉かなりいびつな長方形状と推定 〈規模〉3.5（推定）×4.6m 〈床面積・主軸方向〉不明

〈埋土〉黒褐色土が卓越する。北東壁寄りに厚く堆積する6a・6b層は火山灰塊を多く含む。灰白色浮石や黄褐色火山灰は含まれない。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉25～42cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は小凹凸がある。EⅣ-10住居跡との重複部分はその床面をわずかに削っていることが高低差から考えられる。浅い掘り方を下位に伴うが、壁寄りの一部ではそれを欠く。

〈柱穴〉伴わない。



壁高 EIV-10 住

壁	高さcm
北西	22
南西	37
北東	40

壁高 EIV-11 住

壁	高さcm
南西	25
南東	42
北東	38

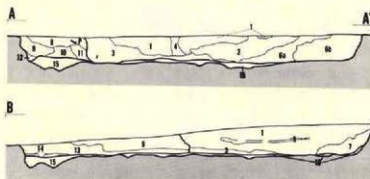
ピット

No	P1
大きさcm	80×112
深さcm	16



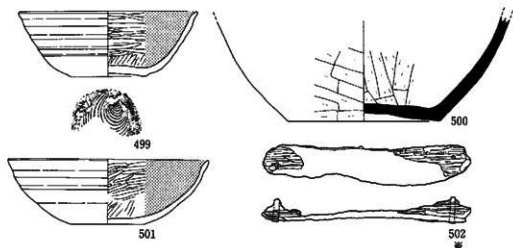
0 2m

重複位置図



- 1～3. 黒褐色。炭化物が点在。
 4・5. 黒色。
 6a・6b. 黒褐色。火山灰塊を多く含む。
 7. 黒褐色。
 8. 黒褐色。小塊を主にした黄褐色火山灰を含むほか、炭化物がみられる。
 9～12. 黒褐色。
 13. 黒褐色。黄褐色火山灰が一部にみられる。
 14. 黒褐色。
 15. 黄褐色・黒褐色。極り方埋土。
 1～7. E IV-11住居跡固有。
 8～14. E IV-10住居跡固有。
 15. 両住居跡の境界が一部不明。

第168図 EIV-10・11住居跡実測図



No	地点・層位	種類	外 面				内 面				計測値: cm				分級	図版
			口縁部	胴部	底	部	口一辺	底色処理	口縁	器高	器径	口縁	器高	器径		
499	掘り方埋土・埋土	坏	ロクロ痕	ロクロ痕	同底糸切り		ヘラミガキ	○		14.3	5.2	6.3	180			
501	灰土・埋土	II				同底糸切り				16.0	5.2	6.0				

No	地点・層位	種類・群別	外 面				内 面				計測値: cm				分級	図版
			口縁部	胴部	底	部	口縁部	胴部	底	部	口縁	器高	器径	口縁		
502	埋土	須恵寺型	—	ヘラミガキ	ナデ	ナデ	ナデ				—	(8.0)	12.0			

No	地点・層位	群 種	大きさ(最大): cm			特 徴	備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
502	埋土	須恵寺式群	111	20	2	14.9	宛形。両端に接る木質部分の厚さは13cm、中央の溝部分幅は14cm。	236

第169図 EⅣ—10住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{8}(\text{米}) \cdot \frac{1}{2}$$

〈カマド〉推定での南西壁の壁際に検出された焼土は上述のようにEⅣ—10住居跡に伴う可能性が高い。それ以外にはカマドの存在や痕跡を示すものは検出されていない。

遺物(第170図)

〈出土状況〉埋土から出土し、量的には多いものではない。土器と石器がある。

〈土器〉破片数の多い方から順に、土師器甕・縄文土器・坏がある。土師器甕はすべてⅠ類で、LⅠなどがある。坏はⅠ類2点、Ⅱ類1点の破片があるだけで、Ⅰ類の503は墨書の一部が体部に残る。

〈その他〉ビース・エスキュー1点が埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

平安時代Ⅴ群のEⅣ—10住居跡よりも時間的に後のものであることを確認している。しかし同時代に含まれる可能性が高いことは埋土の性状や出土遺物から推定できる。住居跡の平面形がいびつな点やカマドを伴わない点では平安時代の住居跡としているものから逸脱する。性格を推測する手がかりがないので、住居跡の名称のままとし、平安時代でも最新期のⅠ棟と考えておく。

F II区

F II-1 住居跡

遺構 (第171図。図版95)

〈検出状況・平面形・規模〉 大半は調査区域外にあり、東隅を含む北東壁と南東壁の一部が調査できたにすぎない。方形になることが推定できるものの、平面形や規模の詳細は不明である。

〈埋土〉 黒褐色の土層群が卓越する。最上部には黄褐色火山灰の小塊が点在する。その下位は多くの灰白色浮石を全体に含み、とくに南東壁寄り最下部に多い。

〈壁の状況〉 直立 〈壁高〉 26・28cm 〈壁溝〉 調査できた部分の壁沿い全体にみられる。幅は10～15cm、深さは3～15cmである。

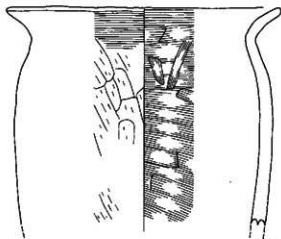
〈床面・掘り方〉 床面は硬く、掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉 主柱穴となるものは調査できた部分にはない。

〈付属施設〉 貯蔵穴P1が東隅にある。平面形は不整形形で、北側がやや張り出す形になる。



503



504

壁は内湾あるいは外傾し、底面は小凹凸があるとともに、北側へ傾斜して下がっている。また深さ13cmの不整形な落ち込みが北東壁が調査区域境と接するところにある。埋土は明黄褐色・淡い黄色ほかの粘土質シルトで、その一部は焼けている。性格や位置づけは不明である。

遺物 (第172図。図版232)

〈出土状況〉 上述のような検出状況のため、量は少ない。埋土を中心に、少量が掘り方埋土から出土している。土器と土製品・石器がある。

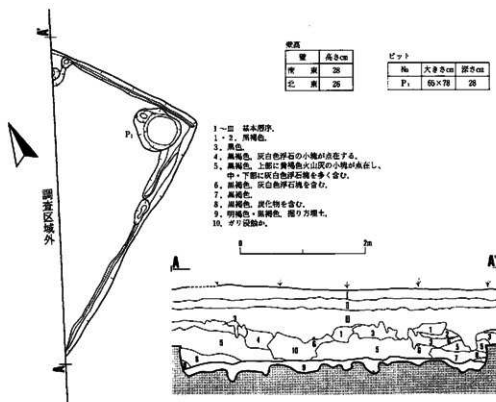
〈土器〉 土師器の壺と鉢・坏・縄文土器があり、破片がほとんどである。

No.	地点・層位	種類	外 面				内 面				計 測 値 : cm				分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 縁 部	口 縁 部	黒色粘層	口 縁 部	黒色粘層	口 縁 部	黒色粘層	口 縁 部	黒色粘層		
503	埋土	坪	—	口 縁 部 黒・灰砂	—	—	ヘタミガキ	○	—	—	—	—	—	—		

No.	地点・層位	種類・器名	外 面				内 面				計 測 値 : cm				分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 縁 部	口 縁 部	黒色粘層	口 縁 部	黒色粘層	口 縁 部	黒色粘層	口 縁 部	黒色粘層		
504	埋土	土師器壺	横ナデ	ヘタケズリ	—	横ナデ	ヘタナデ	—	—	—	22.6	(17.3)	—	—	113	

$$S = \frac{1}{9}$$

第170図 EIV-11住居跡出土遺物



第171図 F II-1 住居跡実測図

土師器はⅠ類だけである。坏はⅠ類B1の505のほかに、Ⅰ類・Ⅱ類とも3点ずつの破片があり、Ⅰ類はB0とA2を含むが、A2は掘り方埋土からの出土である。土師器鉢506の体部外面はヘラケズリの後に細い工具で強くナデている。底部は少ししか残っていないが、砂底になるであろう。

〈土製品〉507は土鈴である。鈕は上部を失っていて、穴の有無は分からない。器面は凹凸があり、粗雑な作りである。

〈その他〉磨石Ⅱ類1点がある。

まとめと遺構の時期

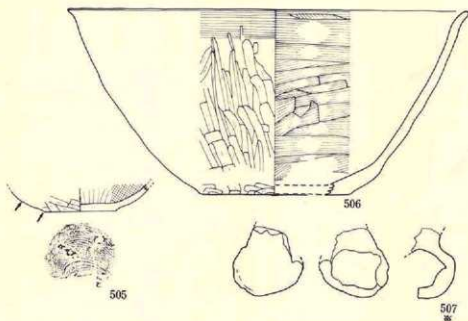
埋土の状況から平安時代Ⅳ群に分類できる。

FⅢ区

FⅢ-1 住居跡

遺構（第173図・第174図、図版96・97）

〈検出状況・重複関係〉灰白色浮石を含む層がプラン中央の広い範囲に径3.0×3.6mの不整



No	地点・層位	種類	外面				内面				計測値: cm		分類	図版
			口縁部	胴部	底	部	口・一底	黒色結塊	口縁	器高	口径	底径		
505	埋土	杯	—	ロクロ 底+ヘラ アズリ	回転糸切り		ヘラミガキ	○	—	(1.8)	5.7	1.8		

No	地 点 ・ 層 位	種類・器種	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分類	図版
			口縁部	胴 部	底 部		口縁部	胴 部	底 部		口 径	器 高	底 径		
506	埋土	土師器鉢	横ナデ	ヘラケズリ	砂盛		横ナデ	ヘラナデ	ナデ		32.1	14.7	12.0		232

No	地点・層位	種類	大きさ(最大): mm				重量g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	高さ	底径			
507	埋土	土鈴	(38)	32	5~7	(11.8)		器の上縁欠失。器体は約1/2が残存し、一文字形の透し穴の一端縁破。	

第172図 F II - 1 住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{2}(\text{底}) \cdot \frac{1}{2}$$

楕円形に分布していることを遺構検出時に確認できた。重複する遺構はない。

〈平面形〉やや隅丸の台形状 〈規模〉3.9×4.4~4.7m 〈床面積〉15.4m² 〈主軸方向〉S-7°-E

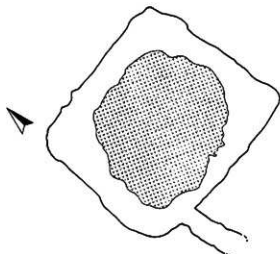
〈埋土〉褐色・暗褐色土が壁際の一部を占めるほかは黒褐色の土層群が卓越する。浮石層は凹レンズ状の堆積を示し、下底部の最も低いところは床面から7cm土上位である。最大層厚は24cmで、葉層が発達している。下部は粗粒部上位に細粒部が載り、中部は極細粒の1~10mmの葉層数層が認められる。上部は粗粒部が卓越するが、極細粒部に間に挟む。浮石層の下位の4a・4b層は灰白色浮石の小塊が点在する。

〈壁の状態〉直立~外傾。東壁と南壁の上部がとくに外傾する。〈壁高〉20~57cm 〈壁溝〉カマドの両脇と北西隅寄りの北壁際の一部をのぞいた部分にある。幅は8~17cm、深さは3~6

cmである。

〈床面・掘り方〉床面は全体に硬い。
全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈カマドの位置〉南壁の南西隅寄り〈カマド本体〉崩壊が著しいが、両側壁の芯材になる礫3個が煙道部寄りに原位置を保つほか、礫5個が崩壊土とともに検出されている。粒径20cmの垂角礫を「ハ」字に立て、シルト質粘土で被覆している。火床部は薄層である。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式で、底面は緩やかに傾斜して上がって行く。煙出し部には長楕円形の浅いピットを伴う。煙道部の側壁や天井部も本体と同じシルト質粘土で構築され、崩壊土が土層断面に観察できる。



第173図 FⅢ-1住居跡灰白色浮石
分布状況

遺物(第175図、図版226・227)

〈出土状況〉すべての遺物が灰白色浮石下位からの出土である。埋土を主に、カマド・煙道部から出ている。土器と石器があるが、量は多くない。

〈土器〉土師器壺が主体を占め、そのほかには坏・縄文土器・須恵器がある。土師器壺はすべてⅠ類で、M2・L1などがある。砂底の破片は1点である。坏は508を含めⅠ類である。須恵器は壺?の破片が1点あるだけである。

〈その他〉磨石Ⅰ類1点がある。

まとめと遺構の時期

508・509は本遺構と共伴あるいは時間的に近い関係にある。埋土の状況とそれらから、平安時代Ⅰ群に分類できる。

FⅣ区

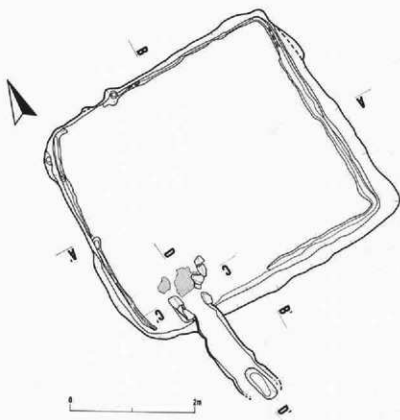
FⅣ-5住居跡

遺構(第176図・第177図、図版97~99)

〈2群の柱穴〉新旧関係のある2群6個の柱穴が検出された。しかし、それに対応するカマドほかの作り替えの痕跡などは認められない。柱穴群の帰属から、新期を5a住居跡、古期を5b住居跡とするが、記載は柱穴の項で区別するだけで、他は共通のものとする。

〈重複関係〉FⅣ-116落とし穴をわずかに切っている。

〈平面形〉隅丸正方形に近い。〈規模〉6.9×6.5~7.1m 〈床面積〉42.7㎡ 〈主軸方向〉N



全平尺		cm
長	3	100
幅		60
地土	厚さ	39×67
		2

cm	
長	160
幅	32
深さ	54

cm	
長	25×60
幅	24

断面	
壁	高さcm
北	30
西	40
南	57
東	51

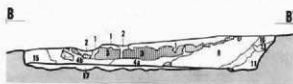
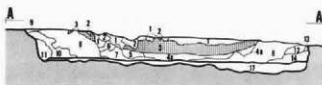


1. 黒褐色。粘土を少量含む。
2. 黒褐色。
3. 黒色。粘土層を含む。
4. 黒褐色。粘土を全体に含む。
5. 黒褐色。焼けた粘土を含む。
6. 暗褐色。
7. にぶい黄褐色。粘土。
8. 赤褐色。焼けた粘土。
9. 黒褐色。粘土を含む。
10. 黒褐色。焼けた粘土を含む。
11. 赤褐色。
12. 黒褐色。
13. 黒色。炭化物が卓越し、焼土を含む。



1. 黒褐色。
2. 黄褐色。
3. 赤褐色。焼土。

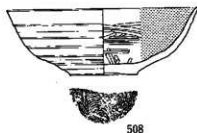
※



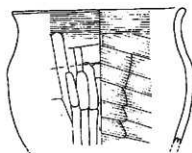
1. 暗灰黄色。灰白色球かの浮石を多量に含む。
2. 黒色。灰白色浮石を含む。3層起部。
3. 灰白色・灰黄色。にぶい黄色。浮石。細粒砂部～粗粒部まで。
- 4a. 黒褐色～黒色。灰白色浮石の小塊が点在するほか、黒色土塊を含む。
- 4b. 黒褐色。4a層に似るが、黒色土塊を含まない。
5. 黒色。
6. 黒褐色～黒色。灰白色浮石を含む。
7. 黒褐色。
8. 黒褐色。火山灰を含む。
9. 灰褐色。
10. 灰色。
11. 褐色。
12. 黒褐色。
13. 暗褐色。
14. 黒色。
15. 黒褐色。
16. 黒色。
17. 黄褐色～黒褐色。顔り万理土。

$$S = \frac{1}{40} (\text{※})$$

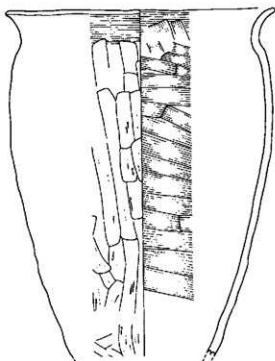
第174図 FⅢ-1 住居跡実測図



508



509



510

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値 : cm			分級	図録
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
508	カマド跡層土・埋土	杯	口縁部欠	口縁部欠	底面未切り	ヘラミダキ	○		15.2	5.3	5.4	100	

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値 : cm			分級	図録
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
509	カマド跡層土	土師器・甕	横ナデ	ヘラミダキ	—	横ナデ	ヘラミダキ	—	13.9	(10.7)	—	102	226
510	カマド>床面直上	—	—	—	—	—	—	—	21.6	(28.5)	—	111	227

第175図 FⅢ-1 住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{2}$$

—37'—W

〈埋土〉黒褐色～黒色の土層群で構成される。10mm土を主にした灰白色浮石の小塊を全体に含むが、中部を占める2層にとくに多くみられ、その上位・下位には少量である。

〈壁の状態〉全体がいくぶん外傾する。〈壁高〉37～51cm 〈壁溝〉カマド部分をのぞいて一周し、柱穴状小ピット多数を内部に伴う。幅は10～25cm、深さは8～22cmである。

〈床面・掘り方〉床面は全体に非常に硬く締まっている。北隅—PP1の南西隅—PP7を結んだ線を境にして低い段差があり、北東壁にかけての部分は他にくらべて2～4cm高くなる。「ベッド状」に傾するものである。全体規模の掘り方を下位に伴う。

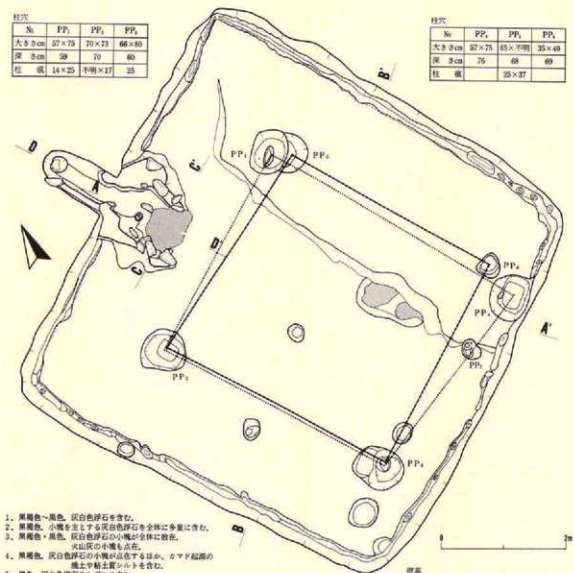
〈柱穴〉2群の柱穴が確認できる(I型)。5 a 住居跡に伴うのはPP1～PP4である。PP1

柱穴

No	PP ₁	PP ₂	PP ₃
大きさcm	57×75	70×73	66×60
深さcm	59	70	60
柱径	14×25	半明×17	25

柱穴

No	PP ₄	PP ₅	PP ₆
大きさcm	57×75	65×半明	35×40
深さcm	75	68	69
柱径		25×37	



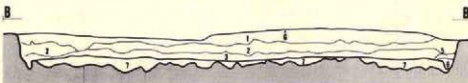
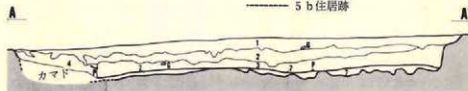
1. 黒褐色～黒色。灰白色浮石を含む。
2. 黒褐色。小塊を主とする灰白色浮石を全体に多量に含む。
3. 黒褐色～黒色。灰白色浮石の小塊が全体に散在。
4. 黒褐色。灰白色浮石の小塊が点在するほか、カマド跡跡の焼土や粘土質シルトを含む。
5. 黒色。灰白色浮石をわずかに含む。
6. 黒褐色。
7. 黄褐色～黒褐色。軽り方焼土。

----- 5 a 住居跡

----- 5 b 住居跡

壁高

壁	北西	南西	南東	北東
高さcm	37	43	51	48



本体(一部)	長さ	150+
	幅	110±
	柱径	60×70
	厚さ	8

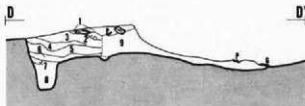
構造部	長さ	116
	幅	65
	厚さ	29

増設部	径	25×26
	厚さ	56

第176図 FIV-5 住居跡実測図(1)



1. 灰黄色・暗褐色。粘土と暗褐色・焼土が混じる。
2. 灰黄色。粘土。
3. 黄褐色・黒褐色の粘土。住居壁方埋土。



1. 黒褐色。粘土・焼土・炭化物を含む。
2. 明黄褐色～浅黄色。粘土。
3. 褐色～暗褐色。粘土・焼土・炭化物を含む。
4. 暗褐色。灰を含む。
5. 暗褐色。粘土を多く含む。
6. 暗褐色。
7. 浅黄色。焼けた粘土。
8. 黒褐色。粘土・焼土を含む。
9. 暗褐色～暗褐色。粘土・焼土・炭化物・灰を含む。

第177図 FIV—5 住居跡実測図(2)

$$S = \frac{1}{49}$$

は5b住居跡のPP5を切っている。PP1～PP3は各隅から内側に入った位置にあるのに対し、PP4は南東壁際に位置するため、台形に近い配置になっている。PP2とPP3は5b住居跡のものを再利用している。5b住居跡はPP5・PP2・PP3・PP6の4個を伴う。PP5とPP6は貼り床の下に検出された。各隅から内側に入った位置にあるものの、PP3とPP6は南東壁へだいお寄っている。ほぼ正方形の配置になる。柱痕跡を識別できるのはPP1～PP3・PP5の4個で、長方形・楕円形・円形に近い平面形になる。掘り方の平面形は長方形・凸辺方形・不整凸辺長方形・不整楕円形・方形である。

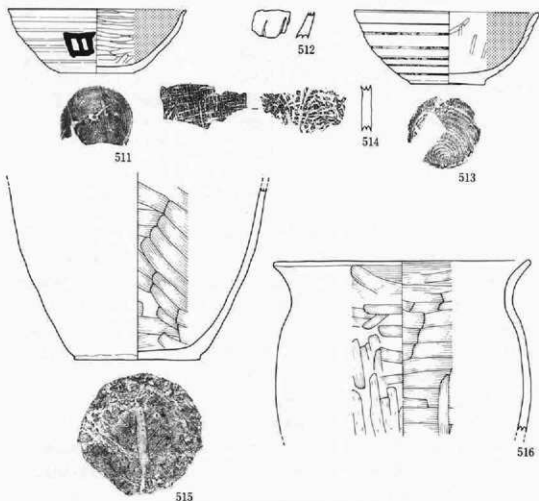
〈カマドの位置〉北西壁中央 〈カマド本体〉 礫と粘土質シルトを構築材にするが、崩壊して火床部の上を厚く覆う。側壁の芯材として原位置を保つ礫は少数である。礫の粒径は20～32cmである。焚き口は層厚2cm±の灰白色粘土を半月状に貼りつけている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。底面はほぼ水平で、煙出し部には円形の深い小ピットを掘り込んでいる。

〈その他〉不整形な浅い落ち込みが床面中央からやや東寄りの「ベッド状」の部分に接して存在する。底面が焼けた結果、円形状の焼土がほぼ接するように2カ所に形成されている。南東側の焼土は粘土質土を含む暗褐色土に半円状に囲まれている。径は40×60cmと27×48cmで、ともに薄層である。炉あるいは何らかの工作用施設であることが考えられる。

遺物 (第178図・第179図、図版219・226・227・236)

〈出土状況〉埋土を中心に、床面やカマド・掘り方埋土・柱穴から出土し、量も多い。土器と鉄製品・鉄滓・石器がある。

〈土器〉破片数では縄文土器がもっとも多く、次いで土師器壺・坏・須恵器の順である。土師器壺はI類が卓越し、M3・L2などがある。519は口縁部下位の外面に「×」のヘラ書に伴う。514は胴部の破片である。外面はヘラミガキ状の細い擦痕が縦横に施され、内面は不規則な叩き目が見られる。色調は外面が黒褐色、内面が橙色で、薄手であるが硬い。512は胴部下端に



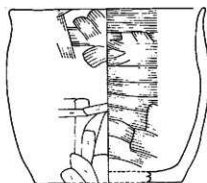
No.	地点・層位	種類	外 面				内 面				計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底	部	口一底	底	部	部	口径	胴高	底径		
511	坪面直上	坏	口タロ灰	口タロ灰	口タロ灰	口タロ灰	口タロ灰	口タロ灰	口タロ灰	口タロ灰	14.2	5.1	6.0	1B	219
513	埋土・掘り方埋土	〃	〃	口タロ灰	〃	〃	〃	〃	〃	〃	14.7	5.8	6.0	〃	〃

No.	地点・層位	種類・図様	外 面				内 面				計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底	部	口縁部	胴部	底	部	口径	胴高	底径		
512	埋土上部	土師器	—	刻線	—	—	ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—
514	埋土	〃	—	細い横線状	—	—	たたき目	—	—	—	—	—	—	—	—
515	埋土	〃	—	ナデ	本葉底	—	ヘタナデ	ナデ	—	—	(13.8)	10.1	—	—	—
516	ムラサキ埋土・埋土	〃	横ナデ	〃	—	横ナデ	〃	—	—	—	20.6	(13.8)	—	1L2	—

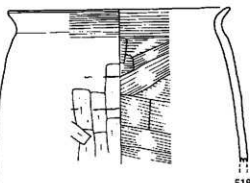
第178図 FIV—5 住居跡出土遺物(1)

S = $\frac{1}{3}$

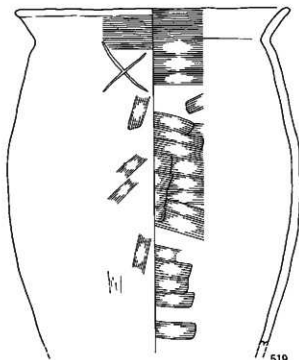
刻線を伴う。木葉底は515・517のほかは4点がある。坏511・513はともにI類B0である。511は体部外面に墨書を伴う。横位に書かれた「日」である。破片ではI類43点、II類3点があり、I類B0が1点含まれている。須恵器は壺の破片1点である。縄文土器は破片数842点と多く、



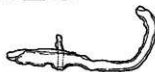
517



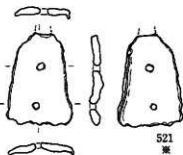
518



519



520
素



521
素

No	地 点 ・ 層 位	種類・形状	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分類	図 取
			口縁部	胴部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部		
517	増土	土師器鉢	ナデ	ナデ+ヘラケ ズリ	木製底	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	(15.8)	13.9	(11.6)	1363	227
518	増土上部・下部	※	横ナデ	ヘラケズリ	—	※	※	—	17.7	(12.3)	—	112	
519	増土・コマド・灰下	※	※	ナデ+ヘラケ	—	※	※	—	(22.8)	(26.5)	—	※	236

No	地 点 ・ 層 位	種 類	大 小 (最大) : cm			重量g	特 徴 ・ 備 考	図 取
			長さ	径	厚さ			
520	増土表面	銅金具	(74)	19	3	(18.5)	一側を欠失。蓋状部分は高さ6cm。蓋状部分の横断面は内側。縦長17cm。	236
521	※	※	(48)	(36)	5	(19.8)	蓋状の部分欠失。銅線はわずかに内側に折れ曲がる。孔径3mm。	236

$$S = \frac{1}{4} (\text{素}) \cdot \frac{1}{4}$$

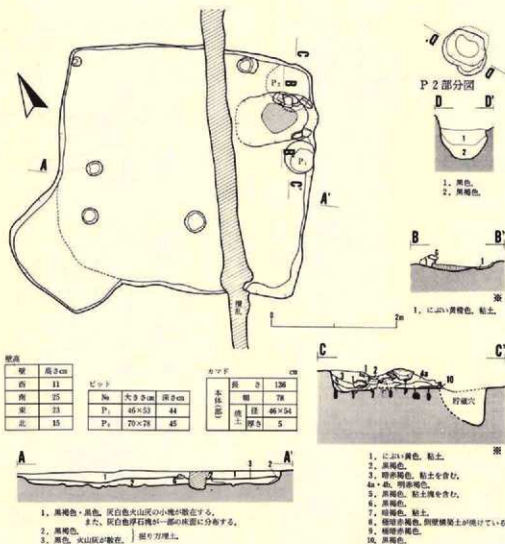
第179図 FIV-5 住居跡出土遺物(2)

後期初頭～前葉の一群が主体である。

〈鉄製品・鉄滓〉 520・521はQ 3の南西壁際の床面に一緒にあったものである。宮城県宮下遺跡の出土品に類似するものがあり、鞍金具の一種と報告されている。そのほかに、断面が方形の棒状の破片が埋土から出ている。鉄滓は、5点29gが埋土から、3点12gが床面から出土している。

〈その他〉 不定形石器 1点が埋土から出土している。

まとめと遺構の時期



S = $\frac{1}{40}$ (cm)

第180図 FIV-6 住居跡実測図

掘り方埋土から出土したものの以外は5a住居跡に固有のものといえる。埋土の状況や出土遺物から平安時代Ⅱ群に分類でき、2棟は時間的に近い関係にあるものと考ええる。

FⅣ-6住居跡

遺構(第180図、図版99・100)

〈検出状況・重複関係〉中央部から東寄りの一部が最近の削剝を受けている。重複する遺構はない。

〈平面形〉西隅が隅丸方形に外方へ張り出している。埋土や床面は住居跡のそれから連続する。床面は住居跡床面に比べると軟弱で、わずかに傾斜している。掘りすぎている可能性も否定できず、共伴については不明としておく。平面形は、その部分を含まなければ、ややいびつな正方形に近い。なお、規模や床面積は張り出し部をのぞいて計測している。〈規模〉3.9×4.1m 〈床面積〉14.1㎡(推定) 〈主軸方向〉S-59°-E

〈埋土〉黒褐色～黒色土の単層である。灰白色浮石の小塊(最大粒径20mm±)が中央から南隅にかけての床面上の広い範囲に分布しているほか、埋土にも散在する。

〈壁の状態〉直立～外傾 〈壁高〉11～25cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面はやや硬い。全体規模の掘り方を下位に伴い、黒褐色土と黒色土の混じったものを床構築土にしている。

〈柱穴〉柱穴状ピット5個が検出されているが、柱穴として適当なものはない。

〈カマドの位置〉東壁中央と東隅との中間 〈カマド本体〉崩壊が著しく、粘土質シルトや粘土・最大粒径30cm±の礫が火床部の上を覆っている。芯材になる粒径15～20cmの礫4個が側壁の付け根にあって原位置を保っている。火床部はよく焼けている。なお焚き口も含め、深さ6cmの楕円形の浅いくぼみを下位に伴っている。〈煙道部・煙出し部〉伴わない。

〈付属施設〉カマド右隣りにある貯蔵穴P1を共伴する。円筒形で、埋土は下部と上部がカマド崩壊土起源の暗褐色土・にぶい黄褐色土で、中部が黒色土である。ピットP2はカマド左側壁下から東隅にかけて検出された。平面形は不整形気味、断面は摺り鉢状になるが、壁の一部はオーバーハングする。埋土は黒色土・黒褐色土である。貼り床されていたかどうかについては明らかでないが、カマドよりも時間的に先のものであることは確実である。本遺構との関係は不明である。

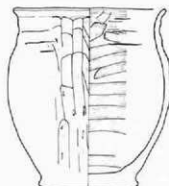
〈その他〉小規模なものを主にした焼土が床面直上や埋土上・中部に分布し、全体の%の範囲に広がる。一部は炭化材や草本類を伴う。中央が床面直上、周辺はそれよりも上位という分布のあり方は多くの例にみられることである。焼土の層厚は一般に薄い、最大は5cmである。

遺物(第181図～第183図、図版227・228・241)

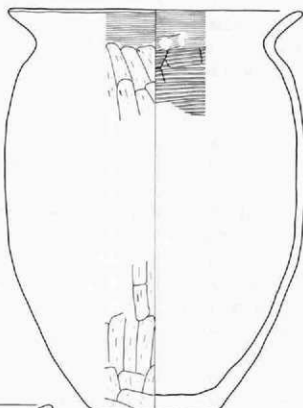
〈出土状況〉図示した土器522～529をはじめカマド崩壊土からの出土がもっとも多いほか、



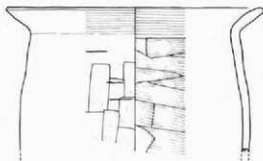
522



523



524



525

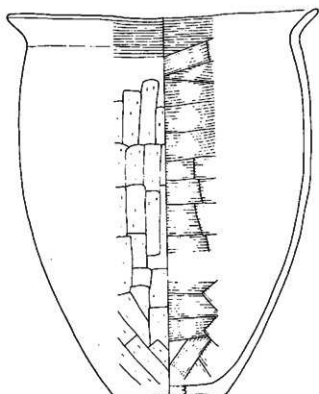


No	地点・層位	種類・器種	外 面				内 面				計 測 値 : cm				分級	図紙
			口縁部	胴部	底	部	口縁部	胴部	底	部	口縁部	胴部	底	部		
522	カマド崩壊土・埋土	杯	ロクロ模	ロクロ模	剝落不明		ヘラミガキ	〇			14.0	5.0	5.8	1E		

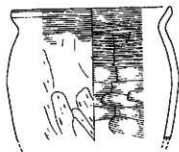
No	地点・層位	種類・器種	外 面				内 面				計 測 値 : cm				分級	図紙
			口縁部	胴部	底	部	口縁部	胴部	底	部	口縁部	胴部	底	部		
523	カマド崩壊土・埋土	土師器 甕	横ナデ	ヘラミガキ	砂流		横ナデ	ヘラミガキ	ナデ		12.2	14.3	8.0	1M2	228	
524	カマド・灰土・P 1	〃	〃	〃	木葉形	〃	〃	斜色目ナデ	〃		23.6	32.0	10.2	113	227	
525	カマド埋土・崩壊土	〃	〃	〃	一	〃	〃	ヘラミガキ	一		21.0	11.5	—	111		

第181図 FIV-6 住居跡出土遺物(1)

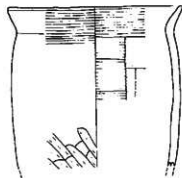
S = $\frac{1}{2}$



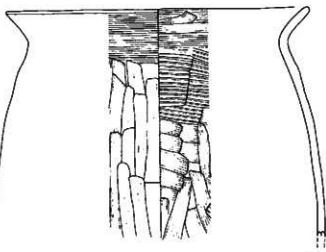
526



527



528



529

No	地点・層位	種類・器形	外			内			計測値: cm			図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径	
526	カマド前出土	土器器形	横ナデ	ヘラナズリ	不明	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	24.9	30.6	9.0	1L1 227
527	"	"	"	ナデ+ヘラナズリ	—	"	横毛目+ナデ	—	12.9	(19.5)	—	1M2
528	"	"	"	"	—	"	ヘラナデ	—	14.0	(12.8)	—	"
529	"	"	"	"	—	"	横毛目+ナデ	—	24.2	(18.2)	—	1L2

S = $\frac{1}{3}$

第182図 FIV—6 住居跡出土遺物(2)

埋土・床面・掘り方埋土・P1から出ている。土器と縄の羽口・石製品がある。

〈土器〉土師器壺が主体を占め、そのほかには縄文土器・坏ほかがある。土師器壺はⅠ類が卓越し、M2・L1・L2などがある。524は胴部外面に化粧粘土を伴う。砂底は523以外に1点、木葉底は524以外に4点の破片がある。坏522はⅠ類であるが、底部が剝落しているために切り離し技法は不明である。破片ではⅠ類18点、Ⅱ類5点があり、Ⅰ類B0が1点含まれている。その他の土師器としては高台付坏と小型の壺と推定できる破片が1点ずつある。

〈縄の羽口〉小破片1点がカマド崩壊土から出土している。

〈石製品〉530は、軟質な白色細粒凝灰岩の素材に彫刻し、人間の右足を表現している。足首の部分は起伏があり、その部分で終止しているのかあるいは破損なのか明確でないが、HN-2住居跡から出土している類似資料（第38図97）を参考にすると前者の可能性が高い。5本の指は表面と側面からの刻みによって表現されているが、小指を欠いている。踝の下位に相当する部分の右側縁と裏面の土踏まずからやや指寄りに相当する部分はやや深くえぐり込まれている。

まとめと遺構の時期

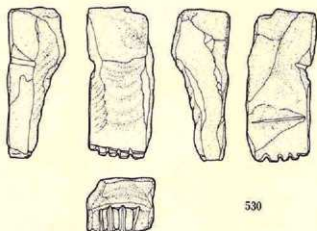
石製品530は、掘り方埋土から出土していることと造形感覚の点ほかからみて平安時代の遺物と考えられる。図示例の土器は本遺構と共伴あるいは時間的に近い関係にある。埋土の状況やそれらから、平安時代Ⅱ群に分類できる。

FⅣ-7住居跡

遺構(第184図、図版100・101)

〈検出状況・重複関係〉

東端は第1次調査区域の西端に接していて、そのときの粗掘りによって壊されたことが考えられる。西端は明確な壁が把握できなかった。しかし南北の壁が存在すること、炉を伴うことか



No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	高さ				
530	掘り方埋土	足形石製品	81	37	34	47.5	白色細粒凝灰岩、G 17	足首に相当する部分を欠失している。	241

第183図 FⅣ-6住居跡出土遺物(3)

$$S = \frac{1}{2}$$

ら住居跡と判断した。2基のピット（縄文時代）と重複する。FⅣ-53ピットの埋土最上部には非常に硬く締まった火山灰の薄層が認められ、本遺構から施された貼り床である可能性が強く、本遺構が新しいものと考えておく。FⅣ-52ピットは形態や埋土が隣接するFⅣ-53ピットに類似することやPP4に切られていることから、貼り床の確認はできなかったものの、やはり本遺構のほうが新しいと考えておく。

〈平面形・規模〉正確な形状や規模は不明である。南北で2.4～3.5mを測る。

〈埋土〉暗褐色土の大塊を全体に含む黒褐色土が卓越する。1・2層はⅦ層下部起源の浮石塊を含む。

〈壁の状態〉直立～外傾 〈壁高〉11・21cm 〈壁溝〉検出されていない。

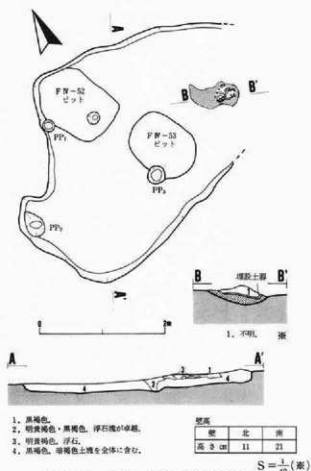
〈床面〉FⅣ-53ピットの上の貼り床と考えられる部分は硬く締まっているが、その他の床面は軟らかい。

〈柱穴〉PP1～PP4の4個がある。PP2は位置からいって本遺構に伴うかどうか疑問である。PP3は59cm土と深い。それらの位置づけは不明である。

〈炉〉埋設土器を伴う径34×78cm・層厚9cmの焼土がFⅣ-53ピットの東側に広がる。土器はほぼ横位に近い状態で埋設され、西方向に開口する。下底部は比較的残存状態がよいものの、上部は破損が著しい。

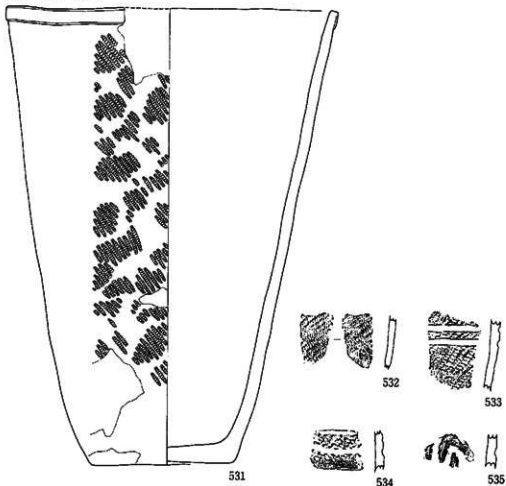
遺物（第185図、図版208）

〈出土状況〉炉埋設土器を除いては少量の遺物が埋土から出土しているにすぎない。土器と



第184図 FⅣ-7 住居跡実測図

26.5・36.5・(11.2)



No	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分類	備考
531	炉埋設土器	胴部	全形	折り返し状の口縁部。地文は横位RL	ミガキ		IV群13類	208
532	埴土	片	胴部	LR	LR		I群6類	にぶい褐色
533	埴土	片	片	平行波線・LR	ミガキ		IV群	
534	埴土	片	片	片・LR・一部磨面				
535	埴土	片	片	縦文・沈線				

第185図 FIV-7 住居跡出土遺物

$S = \frac{1}{3}$

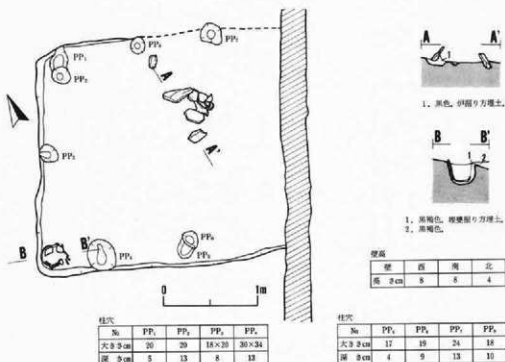
石器がある。

〈土器〉 531は炉埋設土器である。それ以外はすべて破片で、縄文土器56点、土師器壺22点、坏2点がある。縄文土器は後期初頭～前葉の一群のほかは早期I群6類が1点だけある。

〈剥片石器〉 使用痕のある剥片1点が出土している。

まとめと遺構の時期

正確な平面形や規模を把握できないまま遺物を取り上げており、土師器壺や坏は遺構外のも



第186図 FIV-8 住居跡実測図

のが混入したものであろう。531からは縄文時代後期初頭～前葉の時期の住居跡と考えられる。

FIV-8 住居跡

遺構 (第186図、図版101・102)

〈検出状況・重複関係〉 東壁があったと推定される部分は水道管理設溝に壊されていて不明である。また、北壁は東側約3mを消失している。重複する遺構はない。

〈平面形〉 やや隅丸の正方形と推定 〈規模〉 2.5×2.6m (推定) 〈床面積〉 6.1㎡ (推定)

〈埋土〉 黒褐色土の単層で、炭化物を全体に含む。

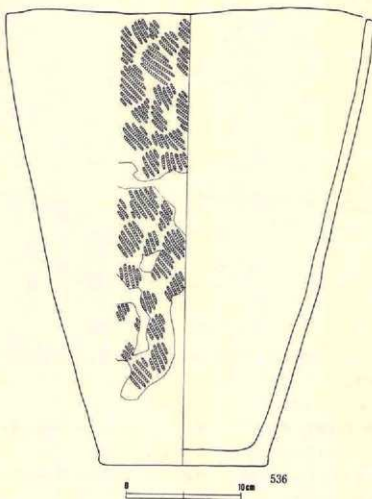
〈壁の状態〉 VI層が壁で、下部が残るだけである。〈壁高〉 4～8cm 〈壁溝〉 残存部には検出されていない。

〈床面〉 壁と同様、VI層を床面にしている。炉の北東部から北壁の推定部分にかけては非常に硬く締まっているが、それ以外は軟らかい。

〈柱穴〉 PP1～PP8の8個の柱穴状ピットが壁沿いに検出されている。深度は4～13cmと浅いが、位置からいって柱穴になるものとする。ただ PP1とPP2、PP5とPP6は重なり、それぞれの1個が柱穴になるものであろう。

〈炉〉 石囲い炉が中央から東寄りに位置する。構成礫は8個で、そのうちの1個は二つにひ

32.3・39.5・14.7



No.	地点・層位	図種	部位	断面 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
536	埋壁	採跡	全形	LR	ミガキ		IV群13類		209

S=不定

第187図 FIV-8 住居跡出土遺物

び割れしている。西側は礎を欠くが、もともとのかあるいは抜き取りによるものなのかは不明である。内部の焼土は小規模で、薄層である。

〈埋壙〉西隅に位置する。深鉢を直立させて埋設し、上半は床面よりも上に出ている。

遺物（第187図、図版209）

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、量は少ない。埋壙536以外には縄文土器片30点（埋壙の破片も含む）があり、すべて後期初頭～前葉の一群である。

まとめと遺構の時期

本遺構の時期決定資料としては埋壙536がある。536は後期の深鉢と推定され、本遺跡の後期の土器の在り方や分布からは初頭～前葉の時期内のものである可能性が高い。

FⅣ-9 住居跡

遺構（第188図、図版102・103）

〈2棟の重複〉2基のカマド・4基の貯蔵穴・貼り床の存在から、同形・同規模の2棟が重複していることが考えられる。新期を9 a 住居跡、古期を9 b 住居跡として記載する。

〈重複関係〉上記の重複以外はない。

FⅣ-9 a 住居跡

〈平面形〉隅丸のややいびつな長方形 〈規模〉2.8×3.4m 〈床面積〉11.7㎡ 〈カマド主軸方向〉N-65°-E

〈埋土〉3層黒褐色土が卓越し、粒状から塊状の灰白色浮石を全体に多量に含む。

〈壁の状態〉壁は9 b 住居跡と共有一再利用の関係にあることが考えられる。外傾している。

〈壁高〉23～30cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉大部分が9 b 住居跡の床面の上に直接床を貼っている。層厚は5cm±である。P4の上の貼り床はわずかに沈降している。固有の掘り方はない。

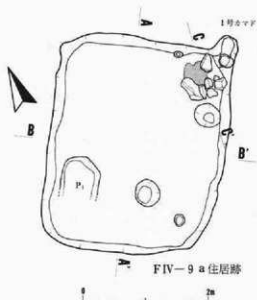
〈柱穴〉3個の柱穴状ビットが検出されたが、主柱穴にはならない。

カマド：1号カマドを共伴する。〈位置〉北東隅 〈本体〉崩壊が著しく、構築材である粒径10～45cmの亜角礫・亜円礫多数が散在し、原位置にある側壁の芯材は一部である。〈煙道部・煙出し部〉楕円形の浅い掘り込みで、短い。底面は大きな凹凸があるが、水平である。煙出し部への施設は確認できない。

〈付属施設〉南西隅にある貯蔵穴P1を共伴する。P1は、平面形が不整長方形の深いビットで、9 b 住居跡に伴うP2の埋土を掘り込んで壁や底面にし、さらにはP3を切っている。平面形は確認できたものの、部分的な図化しかできなかったため、正確な規模は不明である。

FⅣ-9 b 住居跡

〈平面形・規模・床面積〉床面やカマドの位置・貯蔵穴からは9 a 住居跡と同形・同規模と



ピット

No	大きさcm	深さcm
P ₁	62×不明	50
P ₂	78×115	17
P ₃	90×110	56
P ₄	110×155	63
P ₅	38×45	12

1号カマド

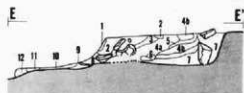
本体部	長さ		煙道部	長さ	
	幅	深さ		幅	深さ
土	40×43	6	45	36	16



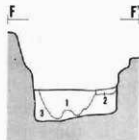
1. 黒褐色、粘土を含む。
2. 暗赤褐色。
3. 稀暗褐色。



1. 暗赤灰色。
2. におい赤褐色、焼土を含む。



1. 黒色。
2. におい黄褐色、粘土。
3. 暗赤褐色、焼土。
- 4a・4b. 黒褐色、焼土を含む。
5. 明赤褐色、焼土卓越。
6. 明赤褐色・暗赤褐色、焼土卓越。
7. 黒色、焼土粒を含む。
8. 褐色、粘土粒を含む。
9. におい赤褐色。
10. 明褐色・暗赤褐色。
11. 黒褐色。
12. 黒褐色、褐色粒を含む。

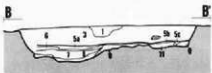
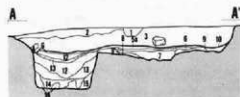


2号カマド

本体部	長さ		煙道部	長さ	
	幅	深さ		幅	深さ
焼土	46×54	8	138	50	35

1. 黒褐色、火山灰層を多く含む。
2. 黒褐色、火山灰の大塊と炭化材を含む。
3. 暗褐色、火山灰層を含む。

1. 黒色。
2. 黒褐色・黒色、灰白色浮石が点在する。
3. 黒褐色・黒色、粒状～塊状の灰白色浮石を全体に少量に含むほか、黒色土塊がみられる。
4. 黒褐色。
- 5a. 褐色・黒褐色。
- 5b. におい黄褐色、粘土。
- 5c. 褐色、粘土を含む。
6. 黒色。
7. 暗褐色、火山灰層を含む。
8. 黒褐色、炭化物・灰を含む。
9. 黄褐色～黒褐色、9b住居跡隣り方埋土。
10. 黒褐色、火山灰を含む。
11. 明赤褐色・暗赤褐色。
12. 稀暗褐色、炭化物・火山灰層を含む。
13. 黒褐色、褐色土や黒色土の塊を含む。
14. 暗褐色、火山灰や黒褐色土の塊を含む。
15. におい黄褐色・褐色、砂質。



壁高

壁	高さcm
西	26
南	30
東	23
北	25

第188図 FIV-9 住居跡実測図

$$S = \frac{1}{48} (\text{米})$$

考えられる。〈主軸方向〉 S-61°30'-E

〈埋土〉 固有の埋土を欠く。

〈壁の状態・壁高・壁溝〉 壁は住居跡と共有一再利用の関係にある。壁溝は伴わない。

〈床面・掘り方〉 床面は、大部分が9 a 住居跡の貼り床に直接覆われている。硬く締まっている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

カマド：2号カマドを共伴する。〈位置〉 東壁中央から南寄り 〈本体〉 良く焼けた火床部が残っているにすぎない。その上への貼り床の有無は確認できなかった。〈煙道部・煙出し部〉 掘り込み式である。底面はほぼ水平である。粒径17~30cmの角礫5個が本体に近い部分に検出され、うち2個は側壁にへばりつくようにしてある。また先端部には粒径20cmと30cmの礫2個が上下に重なっているが、煙出し部の施設に使われたことが考えられる。

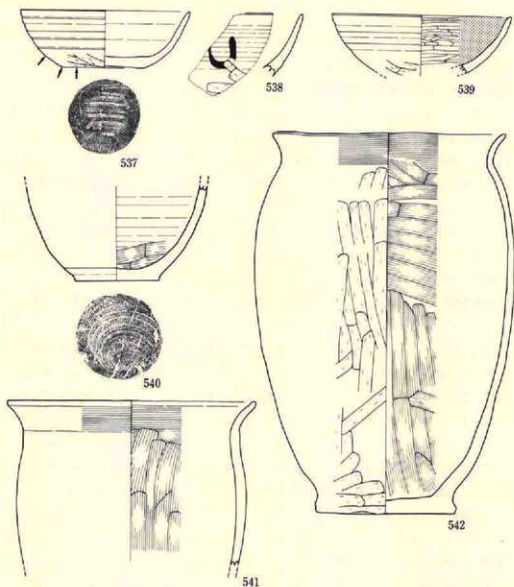
〈柱穴〉 伴わない。

〈付属施設〉 P2~P5の4基のピットを共伴するものと推定した。貼り床の有無を確認できなかったP3をのぞいては9 a 住居跡の貼り床下に検出された。平面形は、P2が凸辺長方形~楕円形状、P3・P4が隅丸長方形、P5が隅丸方形である。深度はP3・P4が深く、P2・P5は浅い。P2の内部には板材とみられる大型の炭化材が南東壁際にへばり付くように存在するが、下位に焼土を伴うとともに壁上部が若干焼けていることから、現地性のものと確認できる。P3は、埋土が火山灰の大塊を含む暗褐色土である。貼り床の有無を確認できないうちに掘り下げてしまったが、重複するP2に切られていることから、貼り床が存在したことが考えられる。北壁に接して存在するP4の埋土は暗褐色土~黒褐色土である。P5は2号カマドの左隣りにある。焼土起源の赤褐色土が内部に充填されている。以上のうち、P3とP4は規模や深さ・位置の点から貯蔵穴と考えられる。P2もそれに類するものかもしれないが、P5については不明である。

遺物（第189図・第190図、図版219・227・236）

〈出土状況〉 埋土を主に、P1~P5・カマド本体（1号・2号とも）・床面・煙道部（2号）から出土し、量も多い。土器・鉄製品・石器・土製品がある。

〈土器〉 破片数の多い方から順に、縄文土器・土師器壺・坏・須恵器がある。土師器壺はI類が卓越し、II類は540以外に確認できない。I類はL1・L2などがある。541の胴部外面は化粧粘土が塗られ、調整技法は不明である。II類540はM1である。坏539はI類であり、体部下端にヘラケズリを伴うものの底部を失っている。537・544はII類A2である。538はII類の破片で、墨書を伴うが判読はできない。そのほかに、2棟あわせて、I類20点、II類8点の破片があり、9 a 住居跡にはI類B0が1点ある。須恵器は壺の破片3点が2棟から出土している。縄文土器は326点で、後期初頭~前葉の一群が主体である。

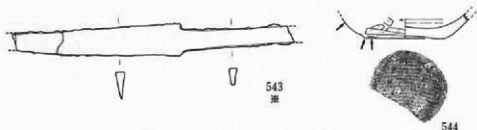


No	地点・層位	種類	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分類	図版
			口縁部	胴 部	底 部	口 縁 部	底 部	底 部	口 径	器 高	底 径		
537	壁面層	杯	ロクロ底	ヘラナズリ	静止糸切り+ヘラナズリ	ロクロ底	×	×	13.6	4.5	6.5	IIA2	219
538	埋土下部	片	ロ	ロ	ロ	×	×	×	—	—	—	II	
539	P1埋土・埋土	片	ロ	ロ	ロ	ヘラミダナ	○	○	14.4	(4.6)	—	IE	

No	地点・層位	種類・副種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分類	図版
			口縁部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 径	器 高	底 径		
540	壁面層・埋土下部	土器片	—	ロクロ底	同断糸切り	—	ロクロ底+ナデ	ナデ	—	(7.5)	6.8		
541	1号カマド縁上	片	横ナデ	化粧粘土	—	横ナデ	ヘラナデ	—	19.9	(13.1)	—		
542	埋土上・中層	片	ロ	ヘラナズリ	ナデ	ロ	ロ	ナデ	18.6	30.5	11.2	227	

$$S = \frac{1}{2}$$

第189図 FIV-9 住居跡出土遺物(1)



No	地点・層位	種類	外			内		計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底	口一底	黒色結核	口径	底径	深径		
544	P2埋土	坪	—	ロクロ 痕+ヘラ テズリ	静止糸切り+ヘラテズリ	ロクロ痕	×	—	(1.8)	6.2	IIA2	

No	地点・層位	器種	大きさ(最大): mm			重量g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
543	埋土上部	刀子	(143)	身: 17	棟: 5	(23.9)	両端を欠失。茎部は9mm。開明部。両面平造り。	236

第190図 FIV-9 住居跡出土遺物(2)

$$S = \frac{1}{2}(\text{米}) \cdot \frac{1}{3}$$

〈鉄製品〉刀子543は埋土からの出土である。

〈その他〉剥片石器は使用痕のある剥片、礫石器は磨石Ⅰ類とⅡ類が1点ずつある。そのほか縄文時代後期初頭～前葉と推定される土偶の破片がある。

まとめと遺構の時期

9 a 住居跡に固有の遺物は埋土・P1・1号カマド・床面、9 b 住居跡に固有の遺物はP2～P5・2号カマド・床面から出土のものである。出土遺物や埋土の状況から、9 a 住居跡は平安時代Ⅱ群に分類できる。重複形態からは9 b 住居跡もそれと時間的に大きな隔たりはないものと推定する。

GⅢ区

GⅢ-1 住居跡

遺構 (第191図、図版104・105 a)

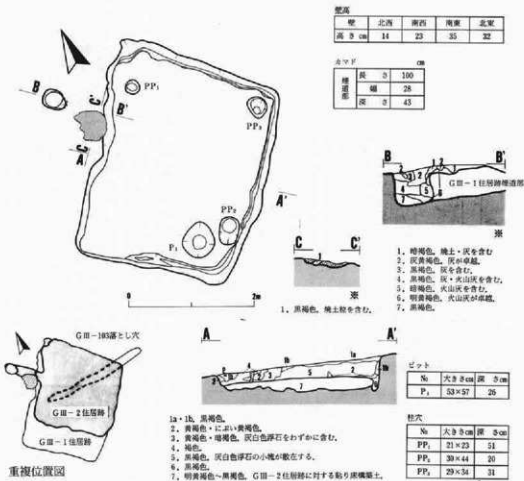
〈検出状況・重複関係〉北東側約3/4は下位にあるGⅢ-2住居跡(平安時代)の全形を覆い、埋土に貼り床して構築している。重複するGⅢ-103落とし穴を切っている。

〈平面形〉わずかに台形気味の隅丸方形 〈規模〉2.6×3.3～3.5m 〈床面積〉7.8㎡ 〈主軸方向〉N-40°30'-W

〈埋土〉黄褐色～暗褐色土が北西壁寄りを占めるほかは黒褐色土が卓越する。灰白色浮石は小塊を主とし、主に6層中に散在する。

〈壁の状態〉GⅢ-2住居跡との重複部分のうち、北東壁・南東壁は同住居跡の壁を再利用している。直立～やや外傾する。〈壁高〉14～35cm 〈壁溝〉南西壁沿いの約1/2と北西壁沿いのをぞいで存在する。幅は10～15cm、深さは5～19cmである。

〈床面・掘り方〉床面はいくぶん軟かい。下位のGⅢ-2住居跡の床面直上まで埋めて床を



第191図 G III-1 住居跡実測図

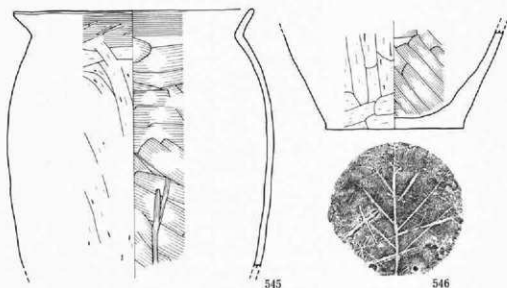
構築する。構築土の層厚は20cm±である。また、G III-2 住居跡と重複しない南西部は掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉 PP1～PP3の3個の柱穴が検出されている。PP1とPP3は位置や大きさ・深さの点で柱穴として適当とも考えられるが、対になるものがない。PP2はそれらに埋土は似るが、位置や深さの点で柱穴とするには疑問がある。

〈カマド本体〉 住居内にはカマドの痕跡は認められない。〈煙道部・煙出し部〉 G III-2 住居跡煙道部の上半を床構築土と同じ土で埋め戻している。深度は10cm±と浅く、底面は緩やかに下がりながら煙出し部の円形小ピットへ移行する。

〈付属施設〉 南隅近くにややいびつな円形の浅皿状ピットP1がある。深度はやや浅いが、貯蔵穴に類するものであろう。

遺物 (第192図、図版228)



No	地点・層位	種類・器種	外 面				内 面				計測値 : cm			分層	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	口径	高さ	底径		
545	埋土	土師器甕	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	19.3	(20.5)	—	11.2	22.8		
546	埋土	—	—	ヘラケズリ	木葉底+ヘラ書	—	ナデ	ナデ	—	(7.7)	11.0				

$$S = \frac{1}{3}$$

第192図 GⅢ-1 住居跡出土遺物

〈出土状況〉埋土を中心に、床面や煙道部から出土しているが、量は少ない。土器と鉄滓がある。

〈土器〉土師器甕が主体を占め、次いで坏・縄文土器の順に多い。土師器甕はⅠ類だけで、Ⅱなどがある。545は、横ナデされている口縁部の外面に浅い斜位の沈線状の刻みが不規則な間隔ながら一周して認められる。546は木葉底で、「×」のヘラ書がある。坏はⅠ類5点、縄文土器は1点の破片があるにすぎない。

〈鉄滓〉3点20gが埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

平安時代Ⅱ群に分類でき、同時代のGⅢ-2住居跡よりは時間的に後のものである。

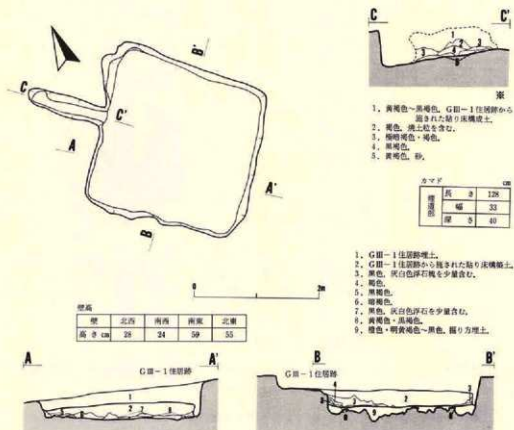
GⅢ-2住居跡

遺構（第193図、図版105bc）

〈検出状況・重複関係〉GⅢ-1住居跡（平安時代）に全形を覆われる形で重複し、切られている。またGⅢ-103落とし穴を切っている。

〈平面形〉隅丸のほぼ正方形 〈規模〉2.5×2.6m 〈床面積〉5.7m² 〈主軸方向〉N-40° 30'-W

〈埋土〉固有の埋土はGⅢ-1住居跡の床構築土の下位に薄く残るにすぎない。黄褐色～黒



第193図 G III-2 住居跡実測図

$$S = \frac{1}{40} (\text{米})$$

色のいくつかの層があるが、3層は灰白色浮石小塊を少量含む。

〈壁の状態〉直立 〈壁高〉24～59cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は軟かい。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉伴わない。

〈カマド位置・本体〉北西壁中央の壁際には、層厚5cmの炭化物が105×135cmの広い範囲の床面に密着する状態で分布し、粒径10cmと17cmの2個の粘土塊を伴っている。しかし焼土は検出されず、カマド本体とみることは疑問が残る。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式で、底面は緩やかに傾斜して下がって行く。上半はG III-1 住居跡によって埋め戻され、先端部は同住居跡の煙出し部によって切られている。

遺物

〈出土状況〉上述のような検出状況であり、遺物は出土していない。

まとめと遺構の時期

平安時代に分類でき、同時代のGⅢ-1住居跡よりは時間的に先のものである。小群での区分は不明である。

GⅢ-3住居跡

遺構（第194図、図版105d・106a）

〈検出状況・重複関係〉北西壁の大部分を含む壁寄りの範囲は床面下まで最近の擾乱を受けている。また東隅の壁も擾乱されている。重複する遺構はない。

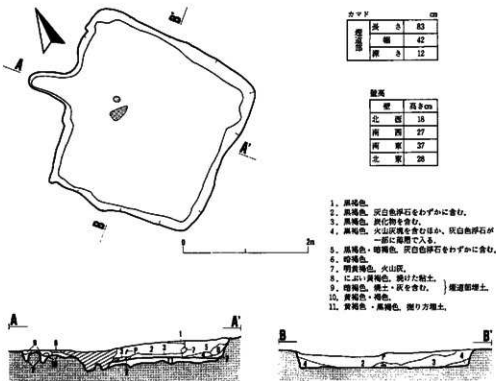
〈平面形〉やや隅丸の台形状 〈規模〉2.8×2.4～2.9m 〈床面積〉6.3㎡ 〈主軸方向〉N-45°-W

〈埋土〉黒褐色土が卓越する。灰白色浮石の薄層が南東壁と北東壁寄りの埋土下部に認められ、灰白色浮石の小塊がその上部に点在する。

〈壁の状況〉わずかに外傾 〈壁高〉18～37cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は硬い。浅い掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉伴わない。



第194図 GⅢ-3住居跡実測図

〈カマドの位置〉北西壁の中央 〈カマド本体〉攪乱のためほとんどが消失し、火床部と構築材の一部である粘土質シルトが小規模に残るにすぎない。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式と推定される。底面ほぼ水平に伸びるが、凹凸がいちじるしい。煙出し部にに伴う施設は検出されていない。

遺物（第195図）

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、量は少ない。土器と鉄滓が埋土から出ている。

〈土器〉すべて破片で、数の多い方から順に土師器甕・坏・縄文土器がある。土師器甕23点はⅠ類である。坏547はⅠ類である。剥落の著しい部分が多く、切り離し技法や再調整が不明である。破片ではⅠ類6点、Ⅱ類2点がある。

〈鉄滓〉1点3.3gがある。

まとめと遺構の時期

削剥されている部分が多いが、灰白色浮石層が層状に認められる部分があることから、平安時代Ⅰ群に分類できる。

GⅢ-4 住居跡

遺構（第196図、図版106b・107ab）

〈検出状況・重複関係〉耕作に伴う攪乱を床面や壁に多く受けている。重複するGⅢ-104落とし穴は床面下に検出された。

〈平面形〉ややいびつな隅丸方形 〈規模〉5.3×5.4m 〈床面積〉25.5㎡ 〈主軸方向〉S-39°-E

〈埋土〉黒褐色土のほぼ単層に近い。微量の灰白色浮石塊が混入する。

〈壁の状態〉直立～外傾 〈壁高〉12～37cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は中央部が非常に硬く締っているが、周辺部は軟かい。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉PP1～PP4の4本柱である。PP1・PP2は隅よりも奥に入った位置にあり、PP3・PP4はカマドが設置された壁際に寄る。カマドが南隅に近いので、PP3はカマドの内側に位置し、台形状の配置になる（Ⅲb型）。



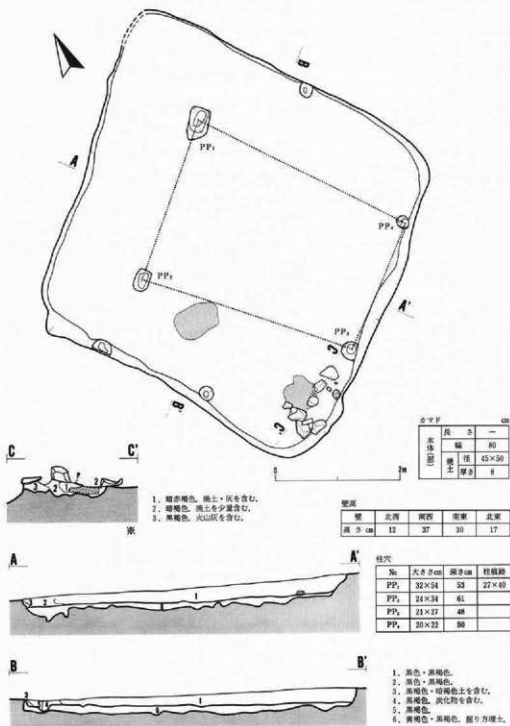
547

〈カマドの位置〉南東壁のもっとも南隅寄り 〈本体〉崩壊し、構築材である数多くの礫が火床部の前面にまで散乱し、原位置にある礫はほとんどない。火床部は良く焼けている。〈煙道部・煙出し部〉伴わ

No	地点・遺位	種類	外 図				内 図				計 測 値 : cm				分級	記号
			口縁形	胴部	底	口一底	黒色粘土	口縁	胴部	底	口縁	胴部	底	口縁		
547	埋土	坏	口縁破損	口縁破損	口縁破損	口縁破損	口縁破損	口縁破損	口縁破損	口縁破損	15.0	5.3	(7.0)	1.8		

$$S = \frac{1}{4}$$

第195図 GⅢ-3 住居跡出土遺物



$$S = \frac{1}{40} (\text{単位})$$

第196図 G III-4 住居跡実測図

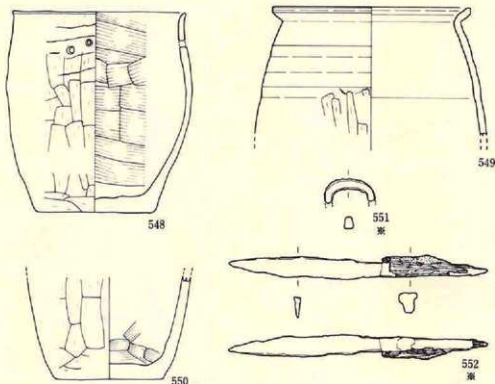
ないものであろう。

〈付属施設〉中央から南西壁に寄った部分の床面の径50×70cmの範囲が焼けている。炉のような機能をもつものであろう。

遺物（第197図。図版228・236）

〈出土状況〉埋土を中心に、少量が床面・カマド・掘り方埋土から出土している。土器・鉄製品・縄の羽口・石器がある。

〈土器〉土師器甕が大部分で、その他には坏と縄文土器がある。土師器甕はⅠ類が卓越し、M4などがある。549はⅡ類L1bである。砂底が破片で1点ある。坏はⅠ類の破片2点があるだけで、うち1点はC4である。



No	地点・層位	種類・器種	外面			内面			計測値: cm			図版
			口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口径	唇高	底径	
548	カマド附埋土・埋土	土師器甕	ナデ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	13.8	15.9	9.2	1M1 228
549	埋土	Ⅱ	ロクロ底	ロクロ底+ヘラケズリ	—	ロクロ底	ロクロ底	—	(15.9)	(10.2)	—	ⅡL2
550	埋土・カマド附埋土	Ⅱ	—	ヘラケズリ	凹凸	—	ナデ	ナデ	—	8.1	8.6	

No	地点・層位	器種	大きさ(最大): mm			重量g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
551	床面	縄文鉄製品	残存径: 27	5	(3.0)	1/2が欠角。断面形は方形。		
552	床面	刀子	140	身: 11	棟: 4	12.5	光面。刀部長69・茎部長71・茎部幅8 (以上, mm)	236

第197図 GⅢ-4 住居跡出土遺物

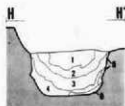
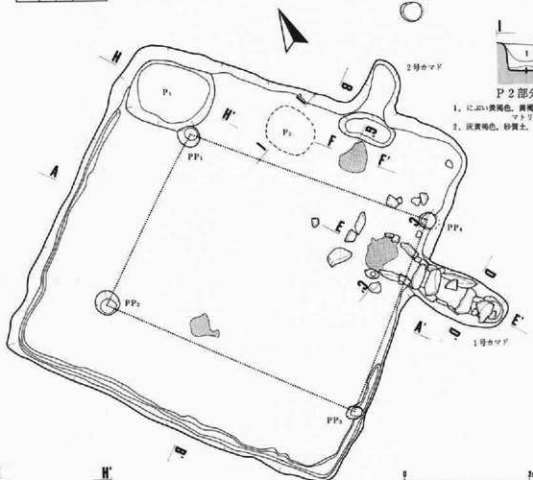
$$S = \frac{1}{3} (\text{cm}) \cdot \frac{1}{3}$$

1号カマド				cm			
本体 (土)	長さ	96+	埋没部	長さ	148	埋没部 径	33×33
	幅	67		幅	74		53
	径	47×57		径	71		
	厚さ	6					



P 2 部分図

1. 灰黄褐色。黄褐色厚石塊がマトリックス。
2. 灰黄褐色。砂質土。



1. 黒褐色。黄褐色火山灰が点在する。
2. 黒褐色。少量の灰白色厚石と黄褐色火山灰の小塊を含むが、割合がやや多い。
3. 黒褐色。
4. 黒褐色・黒色。
5. 黄褐色・火山灰。
6. 褐色。

壁高

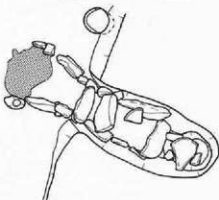
壁	高さcm	3号カマド				cm			
北西	24	本体 (土)	長さ	—	埋没部 径	長さ	(182)	埋没部 径	32×35
南西	63		幅	—		幅	60		41
南東	66		径	39×54		径	46		
北東	51		厚さ	3					

ピット

No	P ₁	P ₂	P ₃
大きさcm	105×130	70×80	40×92
深さcm	81	49	23

柱穴

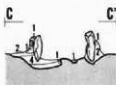
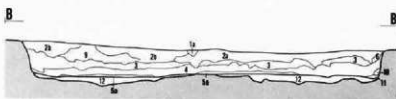
No	PP ₁	PP ₂	PP ₃	PP ₄
大きさcm	34	38×40	20×29	27
深さcm	79	92	37	75



1号カマド部分図

第198図 G III—5 住居跡実測図(1)

$$S = \frac{1}{40} (\text{坪})$$



1. 灰白色。粘土・粘土質シルト。
2. 黒褐色。粘土・火山灰を含む。
3. 黒褐色。機土・炭化物を少量含む。
4. 暗褐色。火山灰を含む。

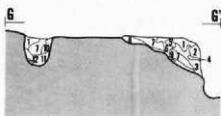
- 1a・1b. 黄色。
- 2a・2b. 黒褐色。
3. 黒褐色。大小の灰白色浮石塊のほか、火山灰を含む。
4. 黒褐色。火山灰の小塊を全体に多く含む。
- 5a・5b. 黒褐色・黒色。
6. 黒褐色～黒色。粒状～小塊状の黄褐色火山灰を含む。
7. 黒褐色。
8. 黒褐色。火山灰の小塊が散在するほか、黒色土塊を含む。
9. 黒褐色。灰白色浮石塊少量が点在。
10. 黒色。灰白色浮石を少量含む。
11. 黒褐色。
12. 黄褐色・暗褐色。住居跡り方曜土。



1. 暗褐色。粘土・機土・炭化物を含む。
2. 黒褐色。粘土を少量含む。
3. 淡黄色。機土質シルト。
4. 濃い黄褐色～褐色。粘土・機土を含む。
5. 黒色。灰を含む。



1. 黄褐色・黒褐色。住居跡り方曜土。



- 1～3. 黒褐色。
- 4・5. 黄色。
6. 黒褐色。
7. 濃い黄褐色。粘土・機土塊を含む。
8. 褐色。
9. 黒褐色。炭化物を含む。
10. 黒褐色。灰を含む。
11. 黒褐色。
12. 濃い黄褐色。流れ火山灰。

第199図 G III—5 住居跡実測図(2)

$$S = \frac{1}{40} (\text{米}) \cdot \frac{1}{40}$$

〈鉄製品〉 刀子552は基部に木質の柄の一部が付着している。

〈鶴の羽口〉 小破片1点が埋土から出土している。

〈その他〉 石鏃あるいは尖頭石器と考えられる破片1点がある。

まとめと遺構の時期

埋土の状況や土師器甕548から、平安時代のⅡ群に分類できるものと考ええる。

GⅢ-5 住居跡

遺構 (第198図・第199図。図版107～109)

〈2棟の重複〉 カマドと貯蔵穴が2基ずつ検出されている。それらは新旧関係があり、2棟の住居跡の重複と考えておく。新期を5a住居跡、古期を5b住居跡として掲載する。

GⅢ-5 a 住居跡

〈平面形〉 ややいびつな隅丸正方形 〈規模〉 5.7×5.5～6.0m 〈床面積〉 29.7㎡ 〈主軸方位〉 S-40°30'-E

〈埋土〉 黒褐色の土層群が卓越する。2種類の火山灰が確認できる。灰白色浮石の大小塊は主に中・下部に含まれ、中部を占める3層に多い。粒状～小塊状の黄褐色火山灰は上部の一部に認められるだけである。

〈壁の状態〉 直立～わずかに外傾 〈壁高〉 24～66cm 〈壁溝〉 西側約 $\frac{1}{2}$ に存在する。幅は12～22cm、深さは7～19cmである。

〈床面・掘り方〉 床面は全体が非常に硬く締まり、小凹凸がいちじるしい。ただ、2基のカマドに挟まれた東隅付近の床面がいくぶん軟弱である。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉 PP1～PP4の4本柱である。PP1・PP2が北隅・西隅から内側に入った位置にあるのに対し、PP3・PP4は1号カマドが設置された南東壁際に存在し、長方形の配置になる(Ⅲa型)。柱痕跡は確認できず、掘り方の平面形は円形～方形である。

カマド：1号カマドを共伴する。〈位置〉 南東壁の中央からわずかに北東寄り 〈本体〉 残存状態は良い。扁平な亜角礫を立てて側壁の芯材とし、シルト質粘土で被覆している。天井部や側壁の一部の礫は周辺部に散在している。火床部は良く焼けている。〈煙道部・煙出し部〉 掘り込み式である。底面は急傾斜で立ち上がったあと、水平になり、煙出し部のピットへ続く。側壁・天井部とも礫を構築材とし、側壁はシルト質粘土で固めているほか、礫間の隙間を埋めるように土師器甕の破片を配している。天井部は構成礫を一部欠いているが、本来は全体を天井石に覆われていたものであろう。煙出し部ピットには12～28cmの礫多数が上下に重なって検出され、その下位からは完形の土師器甕(566)が口縁部を下に斜めに傾いた状態で出土している。

〈付属施設〉 北隅にある貯蔵穴P1を共伴する。平面形が凸辺隅丸長方形の大型で深いピットである。埋土は黒褐色の土層群が卓越し、上・中部の1・2層には黄褐色火山灰と灰白色浮

石の小塊が点在する。全体にルースな堆積である。

〈その他〉PP2とPP3を結んだ線の内側のPP2寄りの床面が焼けている。径が40×50cm、層厚が1～2cmの不整形であり、炉のような機能をもつことが考えられる。また、それとは別に、小規模な焼土の広がりや北東壁寄りの部分を中心とした埋土下部の層準の4カ所に検出された。部分的には少量の炭化材や炭化した草本類を伴っている。P1の南東壁に接して検出された焼土はP1の壁にへばりつくようにほぼ半ばまで落ちこんでいる。焼土の層厚は1～3cmである。現地性が異地性かの判断はつかないが、少なくとも住居の焼失に関連するものではない。

GⅢ-5b住居跡

〈検出状況〉2号カマドとP2から存在を確認できるものの、5a住居跡と壁や床面の共有・一再利用の関係があるのかどうかははっきりしない。したがって、平面形や規模・床面積ほかは不明である。

〈主軸方向〉N-49°-E

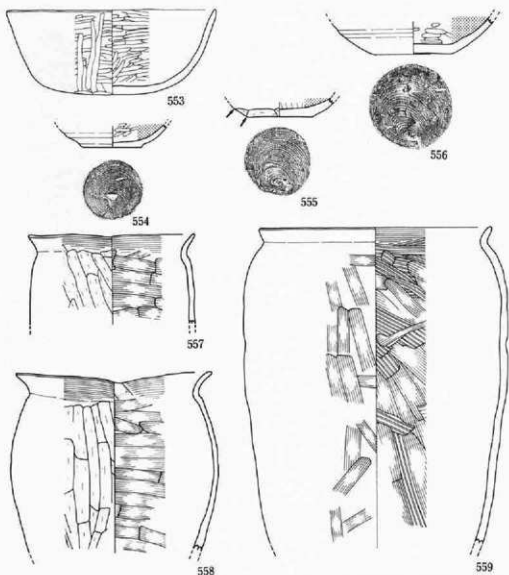
カマド：2号カマドを共伴する。〈位置〉北東壁中央から南東寄り 〈本体〉良く焼けた火床部が残るだけである。その上への貼り床の有無は確認できなかった。火床部と壁にはさまれた部分に、ビットP3がある。ひょうたん形の浅いビットで、粒径12～25cmの垂角・垂円礫6個と少量の粘土質シルト塊が入っている。一部の礫は焼けており、2号カマドの構築材に起源するものの可能性がある。しかし、ビットへの貼り床の有無が確認できなかったため、確実な点は不明である。〈煙道部・煙出し部〉壁上半を斜めに削り出したあとは水平な“地山”へ移行し、煙出し部である円形小ビットを先端に伴う。

〈付属施設〉2号カマドの左隣りにある貯蔵穴P2を共伴する。上は5a住居跡によって貼り床を施されている。円筒形の深いビットで、埋土は、Ⅶ層下部起源の浮石塊をマトリックスにする土が上半と最下部、砂質土が下半を占める。

遺物（第200図～第203図、図版218・228・229・236・237・240・241）

〈出土状況〉完形品やある程度の復元ができる土師器壺が1号カマド煙道部から多く出土している。そのほかには、床面や埋土・埋土下部・1号カマド・P1・P3・PP4・2号カマド煙道部・掘り方埋土から出ている。土器と鉄製品・鉄滓・磁石・土製品がある。

〈土器〉土師器壺が主体を占め、そのほかには坏・縄文土器・須恵器がある。土師器壺は図示例も含めてすべてⅠ類と考えられるものである。M2・L3b・L4cなどがある。560・565のほかには5点の砂底の破片がある。562は口縁部の内面に雑なヘラ書「+」がみられる。坏は、553以外はⅠ類であり、B0が2点、B2とC4が1点ずつある。553はロクロ不使用である。丸底風の平底をもつ大型のもので、内外面がヘラミガキされている。須恵器は壺の破片1点があ

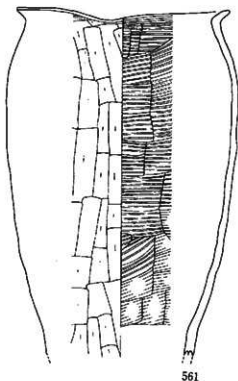
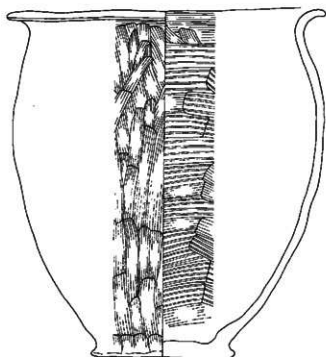


№	地点・層位	種類	外 面				内 面				計測値 : cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁部	胴高	底径		
553	埋土下部	杯	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	○	○	16.8	6.7	—	—	218	
554	埋土	?	—	口タロ底	口タロ底	口タロ底	?	○	○	—	(1.7)	4.8	1.0	—	
555	埋土	?	—	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	?	○	○	—	(1.2)	5.2	1.0	—	
556	埋土最下部	?	—	口タロ底	口タロ底	口タロ底	?	○	○	—	(2.5)	6.4	1.0	—	

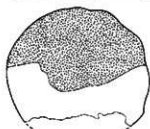
№	地点・層位	種類・図種	外 面				内 面				計測値 : cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁部	胴部	底 部	底 部	口 縁部	胴高	底径		
557	床面>埋土	土器器身	ヘラミダキ	ヘラミダキ	—	ヘラミダキ	ヘラミダキ	—	—	—	13.4	(7.1)	—	1M2	
558	床面	?	?	ヘラミダキ	—	?	?	—	—	—	15.6	(14.3)	—	?	
559	1号カマド煙道部ほか	?	?	ヘラミダキ	—	?	ヘラミダキ	—	—	—	18.6	(25.1)	—	11A 229	

第200図 G III-5 住居跡出土遺物(1)

S = $\frac{1}{3}$



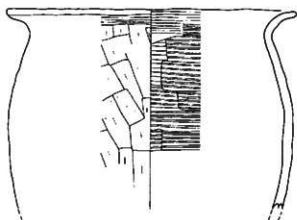
561



560



562
米

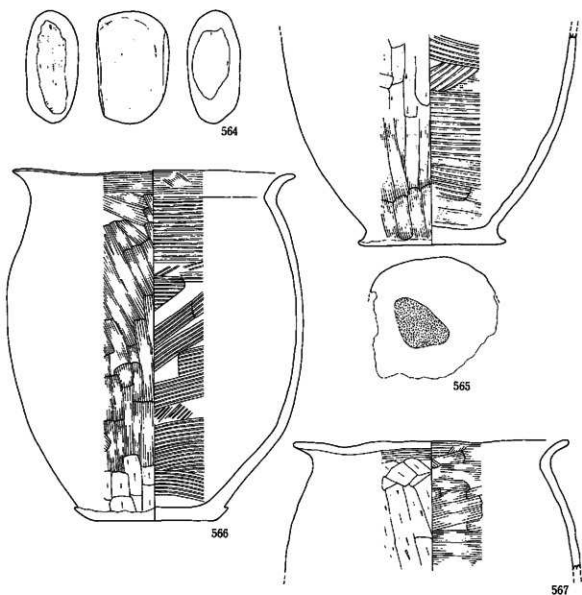


563

No	地点・層位	種類・形状	外 面				内 面				計 量 値 : cm			分類	図取
			口縁部	胴部	底部	肩部	口縁部	胴部	底部	肩部	口径	器高	器径		
549	掘出し層土層・埋土	土師器蓋	横ナデ	ヘラナデ	砂底	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	25.6	27.8	11.5	1L3	228
561	1号カマド埋込部	#	#	ヘラナズリ	—	#	#	#	—	—	17.1	(27.7)	—	1L4	
562	カマド	#	#	—	—	ヘラ筋	—	—	—	—	—	—	—	—	
563	1号カマド・埋込部	#	#	ヘラナズリ	—	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	23.2	(15.9)	—	1L3	228

$$S = \frac{1}{2}(\text{米}) \cdot \frac{1}{3}$$

第201図 GⅢ-5 住居跡出土遺物(2)

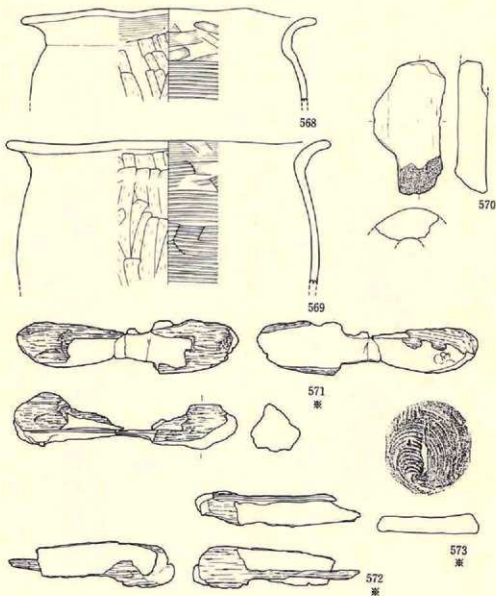


№	地 点 ・ 層 位	種類・器名	外 面			内 面			計 測 値 : cm		台帳	図版	
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	器 高			
565	1号カマド煙道部	土師器製	—	ヘラケズリ+ナデ	砂漉	—	刷毛目	ナデ	—	(16.7)	(11.7)		
566	1号カマド煙道し部	※	横ナデ	ヘラナデ+ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	※	※	22.6	27.9	10.0	(13)	229
567	1号カマド煙道部	※	※	ヘラケズリ	—	※	ヘラナデ		22.0	(10.3)	—		

No	地点・層位	部 類	大 小 (最大) : mm			重量g	石 材 名	特 徴 ・ 備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
564	埴土	磁石	90	58	42	275.0	磁砂質黄灰岩(石質黄灰岩?)、Gs	4面を使用。主要使用面は両側面。	241

第202図 GⅢ-5 住居跡出土遺物(3)

S = $\frac{1}{4}$



No	地 点 ・ 層 位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm		分節	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	唇 高		
568	1号カマド壁面	土師器	横ナデ	ヘラナデ	—	横ナデ	彫毛目ナ	—	23.6	(7.4)	—	
569	1号カマド	土	ヘラナデ	—	—	彫毛目	—	—	26.0	(11.4)	—	

No.	地点・層位	器 種	大きさ(最大): mm			重量g	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
570	堀土	輪切口	187	(55)	34	(118.0)	炉前先端部を含む破片。先端は磨滅し、底厚がわずかに付着。	
571	貯蔵穴P1底面	貝釘式手磨	117	29	39	27.3	光沢。幅は本質部を含む破片。身幅は14~19mm。	237
572	貯蔵穴P1底面	土	(89)	(23)	(16)	(9.9)	硬質。幅は本質部を含む破片。身幅は16mm。	236
573	床面	円盤状土製品	54	54	20	29.4	完全。FF1部の底面を破打によって、円盤状に磨削。	240

第203図 G III—5 住居跡出土遺物(4)

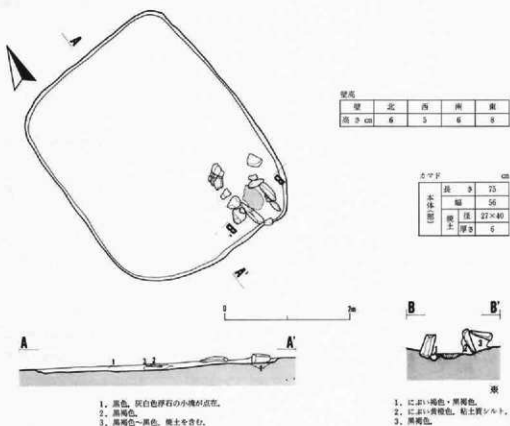
$$S = \frac{1}{2} (\text{※}) \cdot \frac{1}{3}$$

るにすぎない。

〈鉄製品・鉄滓〉目釘式手鎌2点がP1の底部から出土した。P1の底部は砂質土まで達しているために木質の柄が良く保存されている。571は柄とともに身部も残存状態が良い。柄は両端を刃部側まで幅広く覆うとともに最大の厚さが中央になるように山形に作り、目釘を裏面から打ち込んでいる。右端は「コ」字状に作られ、右手で持った場合の指先の保護を計っているものと考えられる。背部は狭く、また裏面は薄く木質が残る。釘は角釘で、一端に観察できる。他端のものは錆の下にあることをX線写真で確認している。刃部は中央が磨減し、湾曲が著しい。572は残存状態があまり良くないうえに一端を含む部分を失っている。571とは、柄の表面の端が厚い点は同じであるが、そのままの厚さで背部を覆う点が異なる。また、「コ」字状の作りは572もつようである。鉄滓は10点359gが埋土や床面・1号カマド本体から出ている。

〈磁石〉564は亜円腰を素材にしている。両側縁が主使用面で平坦面を生じているが、両面の使用はそれほど著しいものではない。

〈土製品〉炉側先端部を含む竈の羽口の破片570と坏I類の底部を利用した円盤状土製品573



$$S = \frac{1}{40} (\text{衆})$$

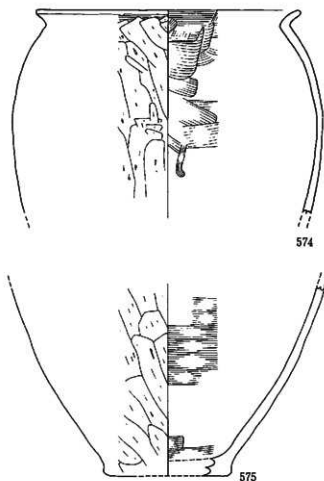
第204図 GⅢ-6 住居跡実測図

がある。

まとめと遺構の時期

遺物の大部分は5 a 住居跡に固有のもので、2号カマド煙道部からのものなど少量が5 b 住居跡に固有であろう。566をはじめ5 a 住居跡に共伴するものが多い。埋土の状況や出土遺物から、5 a 住居跡は平安時代Ⅳ群に分類できる。5 b 住居跡は時間的には5 a 住居跡よりも先のものであるが、小群での区分は不明である。

GⅢ-6 住居跡



遺構(第204図、図版109・110)

〈検出状況・重複関係〉
重複する遺構はない。

〈平面形〉 隅丸台形状
〈規模〉 3.1×3.2~3.9m
〈床面積〉 10.7㎡ 〈主軸方向〉 S-12°-E

〈埋土〉 3層に区分したが、ほぼ単層といってよい。粒径10mm±の灰白色浮石の小塊が点在する。

〈壁の状態〉 最下部しか確認できないが、外傾している。〈壁高〉 5~8cm 〈壁溝〉 伴わない。

〈床面・掘り方〉 VI層を床面に使い、軟弱である。掘り方は伴わない。

〈柱穴〉 伴わない。

〈カマドの位置〉 南壁の南東隅寄り 〈本体〉 粒徑

No	地点・用位	種類・器種	外 形				内 形				計 測 値 : cm		分 類
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	口 径	底 径	
574	カマド	土師器 甕	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—	21.1	(16.3)	11a
575	埋土	—	—	—	—	砂面か	—	—	—	—	(15.0)	(10.2)	—

第205図 GⅢ-6 住居跡出土遺物

S = $\frac{1}{3}$

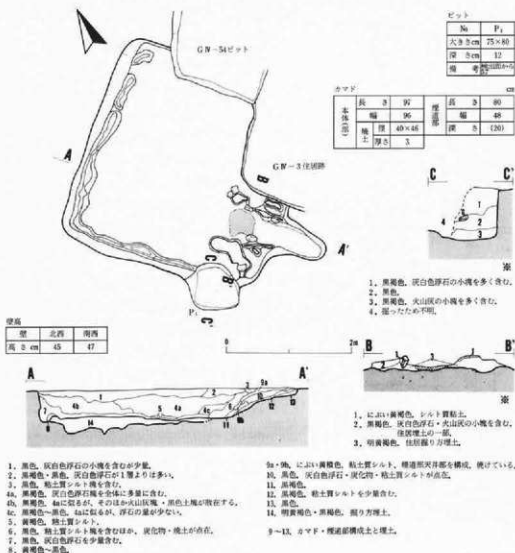
14～47cmの礫を埋設して側壁を作っている。両側壁の残存状態は良好であるが、構成礫の一部が前面の床面・床面直上に散在している。火床部は小規模で、薄層である。〈煙道部・煙出し部〉検出されていない。

遺物（第205図）

〈出土状況〉埋土が薄く、量は非常に少ない。土器と石器が埋土とカマドから出ている。

〈土器〉土師器甕と坏がある。土師器甕は図示例以外は破片5点があるにすぎない。すべてⅠ類でL4dがある。砂底は1点である。坏はⅠ類B0の破片1点が出ている。

〈その他〉磨石Ⅱ類がある。



第206図 G III-7 住居跡実測図

$$S = \frac{1}{40} (\text{米})$$

まとめと遺構の時期

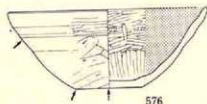
遺物が少ないが、カマド本体からの574や埋土の状況から推定して、平安時代Ⅱ群に分類できる。

GⅢ-7住居跡

遺構（第206図、図版110・111）

〈検出状況・重複関係〉重複するGⅣ-3住居跡・GⅣ-54ピット（ともに平安時代）に切られ、東隅を含む北東壁と南東壁の多くの部分を失っている。

〈平面形〉やや隅丸の正方形と推定 〈規模〉3.4×3.4m 〈床面積〉10.4㎡（推定）〈主軸方向〉S-44°-E



〈埋土〉黒褐色・黒色の土層群が卓越する。灰白色浮石は小塊を主に全体的に含まれるが、埋土の主体を占める4a・4b層に多量にみられる。同層では粒径20mm±の小塊が主体で、最大は50mmである。

〈壁の状態〉直立 〈壁高〉45・47cm 〈壁溝〉残存する南西壁と北西壁沿いに存在する。幅は10～20cm、深さは7～13cmである。

〈床面・掘り方〉床面は硬い。全体規模の掘り方を下位に伴い、北西部が深くなる。

〈柱穴〉伴わない。

〈カマドの位置〉南東壁中央から南西寄り〈本体〉礫とシルト質粘土で構築されているが、全体に崩壊がいちじるしい。側壁の芯材になる礫は左側壁のつけ根の1個が原位置にあるにすぎず、右側壁のつけ根には礫の抜き取り痕が残る。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。底面はやや急傾斜で立ち上がったあと、緩やかに傾斜して上がってゆく。側壁はよく焼け、貼りつけられたシルト質粘土が一部に残る。煙出し部はピ

No.	地点・層位	種類	外 面				内 面				計測値：cm			分層	図版
			口縁部	胴部	底	口一底	黒色鉛筆	口底	器底	底底	口底	器底	底底		
576	埋土上・下部	灰	ヘラミダキ	ヘラクスリ	剥落・ヘラクスリと推定。	ヘラミダキ	○	16.0	6.2	3.4	1C	4b			

No.	地点・層位	図 種	大きさ(最大)：mm		重量g	特 徴 ・ 備 考	図版
			長さ	幅・厚さ			
577	壁面直上	鉄線	(118)	幅：7	—	(厚：9) 端を欠失。煎茶式。根は尖鋭式。身は4×5mm。	236

第207図 GⅢ-7住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{2}(\text{※}) \cdot \frac{1}{1}$$

ットを伴わず、煙道部からそのまま移行する。側壁や天井部はシルト質粘土で構築され、よく焼けている。天井部は残存状態が良い。

〈付属施設〉 ほぼ南隅に貯蔵穴P1を伴う。P1は壁を外方へ掘り込んで作られている方形状のピットで、埋土は黒褐色と黒色土の3層で構成されている。上部は灰白色浮石の小塊を含むが、中・下部には認められない。下部は火山灰の小塊のほか、粘土質シルトの大塊が多く含まれている。壁は直立し、底面は平坦である。なお、底面は住居跡床面よりも12cm低いだけである。

遺物（第207図、図版236）

〈出土状況〉 埋土を中心に、床面・カマド・掘り方埋土から出土しているが、量は少ない。土器と鉄製品・鉄滓・石器がある。

〈土器〉 576を除いてはすべて破片である。土師器甕が主体を占めるほか、坏・甕以外の土師器・縄文土器がある。土師器甕71点は全部Ⅰ類である。坏はC4の576も含めてⅠ類だけであるが、576以外は4点があるにすぎない。甕以外の土師器としては鉢と手づくね土器の破片がある。

〈鉄製品・鉄滓〉 鉄鍔577はP1と南西壁の間の床面直上から出土した。鉄滓は1点140gがカマド崩壊土から出ている。

〈その他〉 埋土下部から出土した磨石Ⅰ類1点がある。

まとめと遺構の時期

埋土の状況や重複関係・出土遺物から、平安時代Ⅱ群に分類できる。

GN区

GN-3住居跡

遺構（第208図、図版111～113）

〈検出状況・重複関係〉 重複するGN-110落とし穴を切っている。北西壁から南西壁の一部で重複するGIII-7住居跡・GN-54ピット（ともに平安時代）も切っている。

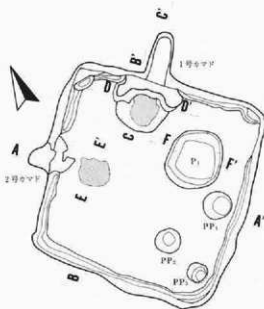
〈平面形〉 隅丸方形 〈規模〉 3.0～3.4×3.1～3.4m 〈床面積〉 8.5㎡ 〈主軸方向〉 1号カマド：N-38°30'-E 2号カマド：N-49°30'-W

〈埋土〉 黒褐色土が卓越する。レンズ状に堆積し、床面を覆う3層には灰白色浮石塊やⅦ層起源火山灰塊が散在する。灰白色浮石は南西壁際最下部の5層や北東壁際最下部の11層にも少量が含まれる。

〈壁の状況〉 ほぼ直立 〈壁高〉 36～40cm 〈壁溝〉 カマド部分と東隅の一部を除いて存在する。幅は15～20cm、深さは6～9cmである。

〈床面・掘り方〉 床面は全体に硬い。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉 柱穴状ピットはPP1～PP3の3個が検出された。深さは32～53cmと深いのが、位置

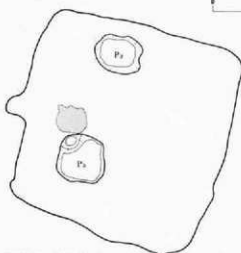


1. 黒褐色。火山灰塊のほか、少量の灰白色浮石を含む。
2. 暗褐色。火山灰・炭化物を含む。
3. 黄褐色。砂質。

1号カマド				cm	
本体(部)	長さ	83	横断面	長さ	81
	幅	164		幅	37
	高さ	42×50		深さ	28
	厚さ	4			

壁面		高さcm
南	西	40
南	東	36
北	東	39

ビット				
No	P ₁	P ₂	P ₃	
大きさcm	85×85	67×75	83×85	
深さcm	75	30	25	

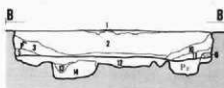
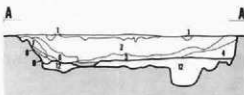


2号カマド				cm
本体(部)	長さ	—	横断面	—
	幅	—		—
	高さ	43×51		—
焼土	厚さ	5		



1. 黒褐色・黒色。
2. 黒褐色。粘土質シルトの小塊を含む。
3. 黒褐色・黒色。灰白色浮石をわずかに含む。
4. 黒褐色・黒色。

掘り方に検出されたビット



1. 浅黄色。
2. にぶい褐色・褐色。
3. 黒褐色。一部は焼けている。
4. 黄褐色。
5. 暗褐色。褐色土塊や黄褐色土塊を含む。
6. 黄褐色・黒褐色。

1. 黒色。
2. 黒褐色。
3. 黒褐色。灰白色浮石塊・火山灰塊が散在する。
4. 黒色。炭化物を含む。
5. 黒褐色。灰白色浮石をわずかに含む。
6. 黒褐色。
7. 浅黄色～黒褐色。粘土質シルト、灰壁積層土。
8. 黒褐色。焼土をわずかに含む。
9. 黒褐色。
10. 黒褐色。粘土質シルト・火山灰塊を含む。
11. 黒褐色。灰白色浮石をわずかに含む。
12. 黄褐色～黒褐色。掘り方埋土。
13. 黒褐色。P₁埋土。
14. 不明。P₁埋土。

第208図 GIV-3 住居跡実測図

$$S = \frac{1}{\phi} (\text{東})$$

〈カマド〉2基のカマドがあるが、残存状態からは新旧関係が不明である。残存状態のよい方を1号カマド、もう1基を2号カマドとして記載する。

2号カマド：〈位置〉北西壁中央 〈本体〉火床部と壁にへばりつくように残存する粘土質シルトが痕跡を示す。シルトの層厚は10cm±である。〈煙道部・煙出し部〉重複するGⅢ-7住居跡の埋土をわずかに掘り込み、本体から連続するシルト部分が煙道部に相当する。煙出し部に伴う施設は確認できない。

以上の3基のビットのうち、P1は共存する。P2とP3は本遺構と共存するものの廃絶されたのか、あるいは時間的に先に存在し、本遺構とは無関係なビットなのかは2基のカマドの新旧関係がはっきりしないこともあって不明である。

〈出土状況〉埋土を中心に、掘り方埋土・ピット・床面直上・1号カマド本体から出土しているが、量は少ない。土器と鉄滓・石器がある。

〈鉄灌〉 3点74gが埋土下部から出土した。




578

遺構の時期を決定できる遺物を欠くが、重複するGⅢ-7住居跡

No	地 点 ・ 部 位	備 考	外 部		内 部		計 測 値 : cm			分類	国 旗	
			□緑部	□灰部	□一定	□黄色部	□緑部	□灰部	□黄色部			
578	P3埋土	坏	-	□クロ灰+腐苔	-	□タタキ	○	-	-	-		

第209圖 GIV—3 住居跡出土遺物

よりも時間的に後のものであることや埋土の状況から、平安時代Ⅱ群に分類する。

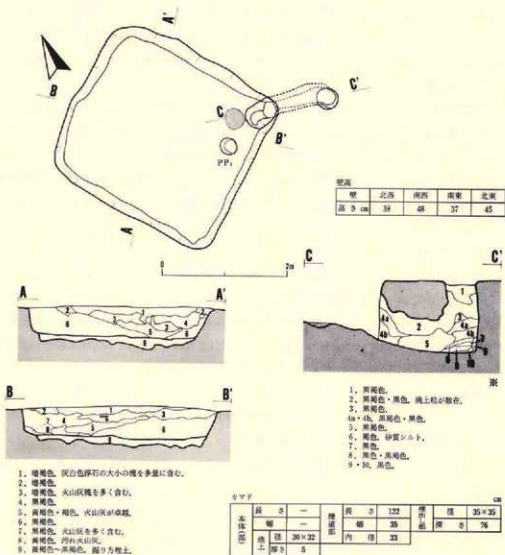
GⅣ-4 住居跡

遺構 (第210図、図版113・114)

〈平面形〉 隅丸正方形 〈規模〉 2.8×3.0m 〈床面積〉 6.4㎡ 〈カマド主軸方向〉 S-78°

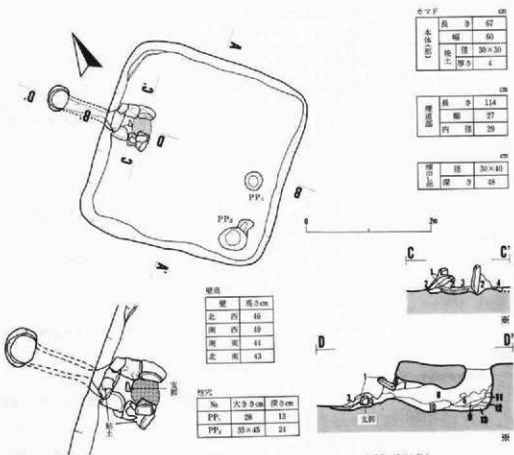
—E

〈埋土〉 上部は暗褐色土が占める。中・下部は黒褐色の土層群が卓越するが、部分的には黄褐色～褐色土が堆積する。最上部の1層は灰白色・灰黄色浮石の大小塊を多量に含み、最大粒

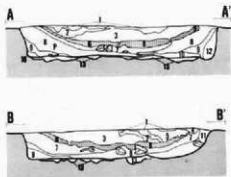


第210図 GⅣ-4 住居跡実測図

$$S = \frac{1}{40} (\text{家})$$



カマド部分図



1. におい・赤褐色。焼けた粘土。
2. 黒褐色・暗褐色。粘土を含む。
3. 明赤褐色。粘土質シルト。
4. 褐色・黒色。住居掘り方埋土。
5. 黒褐色。粘土を含む。
- 6・7. 黒色。
8. 黒色・黒褐色。粘土質シルトの小塊を全体に含む。
9. 褐色・汚れた黄土。
- 10・11. 黒褐色。黄土を含む。
12. 黒色。
13. におい・黄褐色。粘土質シルト。

1. 褐色。火山灰と黒色土が混じる。
2. 暗褐色。灰白色浮石の火山灰の小塊が散在。
3. 黒褐色。灰白色浮石塊を全体に含む。
4. 灰白色浮石・暗褐色。灰白色浮石が卓越。
5. 明黄褐色。焼けた火山灰。
6. 灰白色・淡黄色。浮石。
7. 暗褐色・黒褐色。灰白色浮石を少量含む。
8. 黒褐色・暗褐色。火山灰を多く含む。
9. 黒褐色。
10. 明黄褐色・暗褐色。火山灰が卓越。
11. 黒褐色。
12. 不明。
13. 黒褐色・黄褐色。掘り方埋土。

$$S = \frac{1}{40} (\text{cm})$$

第211図 GIV-5 住居跡実測図

径200mmの大塊が多い。

〈壁の状態〉わずかに外傾 〈壁高〉37～48cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は硬い。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉柱穴状ピットはカマドの西にPP1が検出されただけである。

〈カマドの位置〉東隅 〈本体〉火床部が円形に残るだけで、崩壊土とかは認められない。

〈煙道部〉くり抜き式である。底面は緩かに傾斜して下がったあと、半ば付近から先はほぼ水平になる。

遺物

〈出土状況〉少量の土器が埋土から出土しているにすぎない。

〈土器〉すべて破片である。縄文土器が15点、土師器壺Ⅰ類が9点、坏Ⅰ類が1点である。

まとめと遺構の時期

遺構の時期を決定できる遺物を欠くが、埋土の状況から、平安時代Ⅱ群に分類する。

GN-5 住居跡

遺構（第211図、図版114～116）

〈検出状況・重複関係〉灰白色浮石が住居跡平面形内に円形に広がっていることを検出時に確認している（図版116a）。南西壁がGN-112落とし穴と重複し、それを切っている。

〈平面形〉隅丸正方形 〈規模〉3.1×3.1m 〈床面積〉7.7㎡ 〈主軸方向〉N-48°-W

〈埋土〉灰白色浮石が埋土上面から中部にかけて層として凹レンズ状に堆積する。最大厚は11cmである。その上位の暗褐色・黒褐色土は灰白色浮石塊を含み、3層に多い。5層とした廃棄火山灰は北壁中央部付近の狭い範囲に分布する。浮石層の下位は黒褐色土が卓越し、灰白色浮石の小塊を少量含んでいる。

〈壁の状態〉直立～わずかに外傾 〈壁高〉43～49cm 〈壁溝〉北隅の部分にだけ認められる。幅は15cm、深さは不明である。

〈床面・掘り方〉全体規模の掘り方を下位に伴うが、浅い。

〈柱穴〉柱穴状ピットはPP1とPP2が検出されたが、主柱穴を構成するものではない。

〈カマドの位置〉北西壁中央 〈本体〉側壁は、芯材になる礫の一部が倒れているものの比較的良く残り、壁に接してある天井石1個も原位置を保っている。礫は粒径が20～30cmの亜角礫・亜円礫である。それらを被覆する粘土質シルトは少量が認められるにすぎない。なお、火床部の奥には粒径10cmの亜角礫を埋設し、支脚としている。〈煙道部・煙出し部〉くり抜き式で、底面は傾斜して下がったあと、水平に伸びて煙出し部に移行する。

〈その他〉粒径12～24cmの亜角礫・亜円礫21個が中央の広い範囲の埋土下部の層準に分布していた。

遺物 (第212図、図版219)

〈出土状況〉 少量が埋土から出土しているだけである。灰白色浮石層の上位から5点、下位から7点、単に埋土として取り上げたもの9点である。土器と鉄製品・石器がある。

〈土器〉 坏579以外は破片である。土師器壺はI類3点、縄文土器は9点である。坏は579がI類B0で、体部に「貞」の墨書がある。破片は5点ともI類で、そのうち1点はC4である。なお、「貞」の墨書はCⅢ-5住居跡からも出土している (第112図323)。

〈鉄製品〉 目釘式手鐲580は埋土下部からの出土である。

〈その他〉 凹石1点がある。

まとめと遺構の時期

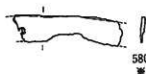
埋土の状況や坏579からは平安時代I群に分類できる。

GⅣ-6住居跡

遺構 (第213図、図版116・117)

〈検出状況・重複関係〉 本遺構が存在する周辺は“地山”までおよぶ削削を現代に受けていて壁上半に相当する部分を失っている。GⅣ-113落とし穴と重複して切っているほか、GⅣ-56ピット (時期不明) も切っているものと推定する。

〈平面形〉 わずかに隅丸の正方形 〈規模〉 3.4×3.5m 〈床面積〉 11.5㎡ 〈主軸方向〉 N-25°-W



〈埋土〉 残存するのは下部に相当する部分である。

灰白色浮石層が床面直上まで凹レンズ状に入る。浮石層は葉層が4層観察できるが、粗粒部が卓越する。最大層厚は12cmである。その下位は黒褐色土と黒色土が優占する。浮石層の下位を占める3層は浮石塊のほかに炭化物粒を多く含む。また、床面を直接覆う4層にも炭化物粒が多い。

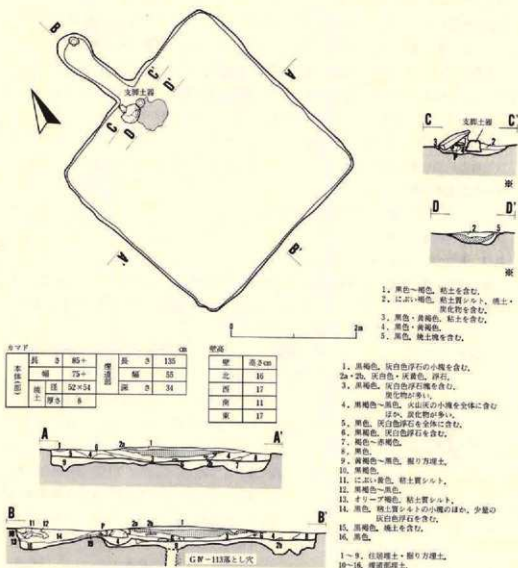
〈壁の状態〉 直立 〈壁高〉 11~17cm 〈壁溝〉 伴わない。

No	地点・層位	種類	外		内		計測値: cm				分級	図版			
			口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	高さ	底径	口径					
579	床面直上	坏	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	高さ	底径	口径	14.8	5.2	5.1	130	219

No	地点・層位	種類	大きさ(最大): cm		重量: g	特徴・備考	図版
			長さ	幅			
580	埋土下部	目釘式手鐲	(58)	14	2	(3.5) 両端を欠失。中央部は磨滅しているほかに欠失がある。	

$$S = \frac{1}{2}(\text{米}) \cdot \frac{1}{2}$$

第212図 GⅣ-5住居跡出土遺物



第213図 GIV-6 住居跡実測図

〈床面・掘り方〉床面は全体が軟かい。全体規模の掘り方を下位に伴い、壁寄りの周辺部が深い。

〈柱穴〉伴わない。

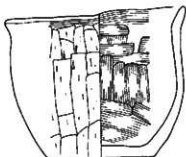
〈カマドの位置〉北壁中央 〈本体〉残存状態が良くない。粒径15cmと34cmの礫のほかいくつかが火床部に重なってみられるが、原位置を保つものではない。火床部は良く焼け、土師器製の小型のもの(581)を伏せ、支脚としている。〈煙道部・煙出し部〉削刺がいちじるしい

ため形態は不明である。底面はやや急傾斜で下がっていき、煙出し部にかかわる施設は確認できない。

〈その他〉11個の礫が床面の広い範囲に散在している。安山岩を主に一部が砂岩の粒径13~35 cmの角礫・亜角礫で、焼成を受けている礫は4個である。形状や石質・焼成を受けていること・出土層位・カマド本体が残っていないことからカマド本体の構築礫が起源で、住居廃棄時あるいはそれに近い時期にカマドの破壊があったことが推定できる。

遺物 (第214図、図版229)

〈出土状況〉カマド本体と床面直上・埋土・掘り方埋土から土器が出土しているが、量は少ない。



〈土器〉土師器甕と縄文土器・坏がある。土師器甕は図示例も含めてすべてⅠ類で、S1などがある。581・582以外の破片は42点である。581は木葉底である。図示はしていないが、胴部の内外面をヘラケズリする例と砂底が1点ずつある。坏はⅠ類6点、縄文土器は10点の破片があるにすぎない。

まとめと遺構の時期

埋土の状況から、平安時代Ⅰ群に分類できる。

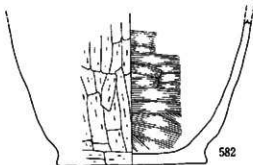
GⅣ-7 住居跡

遺構 (第215図・第216図、図版118~120)

〈2棟の重複〉新旧関係がある2基のカマドや貼り床・複数の貯蔵穴の存在から、同形・同規模の2棟の重複であることを知ることができる。新期を7a住居跡、古期を7b住居跡として記載する。

GⅣ-7a 住居跡

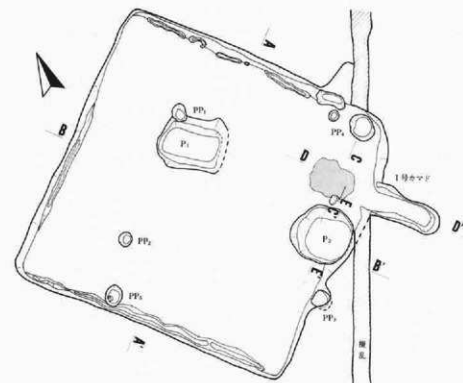
〈平面形〉わずかに隅丸の正方形 〈規模〉
4.6×4.7m 〈床面積〉20㎡ 〈主軸方向〉S



No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	径 高	底 径		
581	カマド支脚	土師器甕	横ナデ	ヘラケズリ	木葉底	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	14.4	11.9	8.5	131	229
582	カマド・床面直上	〃	—	〃	ミガキ	—	〃	〃	—	(11.4)	12.0		

$$S = \frac{1}{4}$$

第214図 GⅣ-6 住居跡出土遺物



ビット

No.	P ₁	P ₂
大きさcm	80×100	87×96
深さcm	60	46

1号カマド

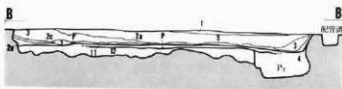
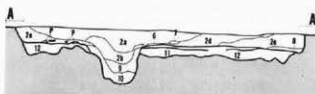
本体部	長さ	幅	高さ
土	63	74	5

2号カマド

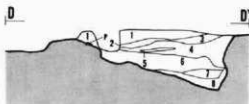
本体部	長さ	幅	高さ
土	110	52	60



1. 暗褐色。焼土を含む。



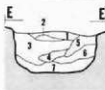
1. 黒褐色。
- 2a. 黒褐色。大小の灰白色浮石・火山灰塊を全体に多く含むほか、黒色土塊が点在する。
- 2b. 黒色。ほぼ2a層と同じ。
- 3c. 黒色。2a層に似るが、灰白色浮石の量がいくぶん少ない。
- 3d. 黒褐色～黒色。2a層に似るが、灰白色浮石量はそれよりも少ない。
- 3e. 黒褐色。
3. 黒色。灰白色浮石を含むが、微量。
4. 暗褐色。炭化物・火山灰を含む。
5. 黒褐色・黒色。炭化物を含む。
6. 黄褐色。
7. 褐色。
8. 黒色・黒褐色。灰白色浮石の小塊を僅かに含む。
9. 黒色・黒褐色。灰白色浮石が点在。
10. 上より黄褐色。
11. 黒褐色。灰白色浮石を僅かに含む。7a住居跡からの貼り床。
12. 黄褐色～黒褐色。7b住居跡側より埋土。



1. 暗褐色。粘土塊を含む。
2. 反褐色・褐色。焼けた焼土。
3. 黒褐色。粘土少量含む。
4. 灰黄色・暗褐色。粘土が卓越。焼土を含む。
5. 上より赤褐色。焼土。
6. 黒褐色・暗褐色。焼土を含む。
7. 黒色。焼土を僅かに含む。
8. 黄褐色・黒色。火山灰が卓越。

柱穴

No.	PP ₁	PP ₂	PP ₃	PP ₄	PP ₅
大きさcm	22×28	22	23×27	35×47	27×35
深さcm	40	27	不明	27	24



1. 黒褐色。炭化物を含む。
2. 黒色。
3. 黒褐色。
4. 上より黄褐色。炭化物を含む。
5. 黒褐色。
6. 暗褐色・黒色。
7. 黒色。

溝

$$S = \frac{1}{40} \text{ 米}$$

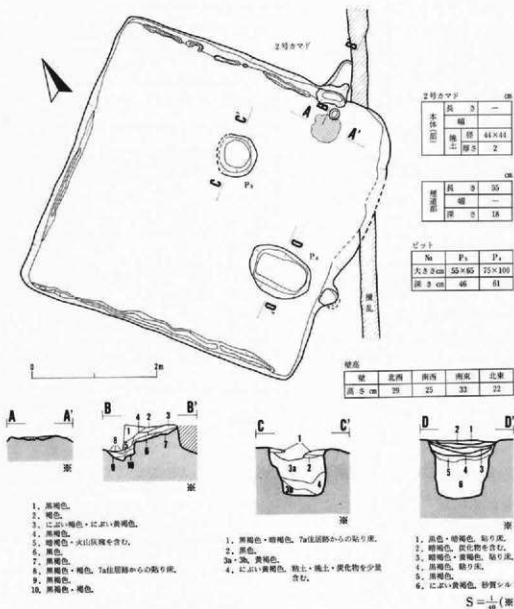
第215図 GIV-7 a住居跡実測図

—42°30'—E

〈埋土〉 黒褐色土・黒色土が卓越する。灰白色浮石塊と火山灰塊が全体に多く含まれるほか、黒色土塊が点在する。浮石塊の最大粒径は40mm±で、10～30mm±が主体である。

〈壁の状態〉 直立～外傾 〈壁高〉 22～33cm 〈壁溝〉 南東壁をのぞいた三壁沿いに存在するが、断続的である。幅は7～17cm、深さは9～12cmである。

〈床面・掘り方〉 床面は7 b 住居跡の床面の上へ層厚5cm±の貼り床を施し、非常に硬く良



第216図 GIV-7 b 住居跡実測図

く締っている。貼り床は、北東壁以外の三方の壁沿いの狭い範囲をのぞいたほぼ全面に施されていたと推定されるが、一部を掘りすぎている。P3の一部や2号カマド火床部の一部なども覆っている。貼り床以外の部分は7b住居跡と共有一再利用の関係にある。なお、貼り床構築土は、黒色土・黒褐色土をマトリックスにし、Ⅷ層起源火山灰や暗褐色土を混じえた土、あるいはⅧ層火山灰をマトリックスにして黒褐色土を混じえた土であるが、ともに灰白色浮石の小塊を含む。

〈柱穴〉PP1とPP2が隅から内側に入った位置にある。位置や大きさ・深度などの点から主柱穴と考えられる。PP3は深さに計測漏れがあるが、南東へいちじるしくオーバーハングする浅いビットで柱穴としては不適当である。2主柱式の例はOⅢ-1住居跡にもある。

カマド：1号カマドを共伴する。〈位置〉南東壁中央と東隅の中間 〈本体〉煙道部との境は水道管埋設溝によってほぼ床面まで破壊されている。崩壊した粘土質シルトが火床部を厚く覆い、側壁は残存しない。火床部は良く焼けている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。底面は急角度で傾斜して下がっている。埋土上・中部の4層は粘土が卓越するが、天井部を構成していた一部であろう。煙出し部に伴う施設は確認できない。

〈付属施設〉P1とP2の2基を共伴する。P1は中央部からやや北寄りにある。平面形は隅丸の不整長方形で、深度は深い。東壁がP3と重複している。P2は1号カマドの右隣りにある円筒形のビットである。

〈その他〉現地性の大規模な焼土が1号カマド・2号カマド付近と北隅付近の埋土下部から床面直上に形成されていた。それらは一面に連続するものではなく、いくつかのまとまりとして把握される。層厚は4～8cmである。炭化材を伴わないことから住居の焼失に関係するものとは考え難い。

GN-7b住居跡

〈平面形・規模・床面積〉7a住居跡の貼り床の範囲と2号カマド・P4の位置からは7a住居跡と同形・同規模のものと考えられる。〈主軸方向〉N-47°30'-E

〈埋土〉固有の埋土は欠く。

〈壁・壁溝〉壁は7a住居跡と共有である。壁溝が存在したかどうかは不明である。

〈床面・掘り方〉全体に硬く良く締っている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉PP2は7a住居跡の貼り床を掘り込んでいる。しかし、再利用かどうかはわからないため、PP2と本遺構との関係は不明である。PP1の部分は貼り床を掘りすぎており、それとの関係が不明である。

カマド：2号カマドを共伴する。〈位置〉北東壁中央と東隅の中間 〈本体〉火床部が残存するだけであり、西側半分が7a住居跡の貼り床に覆われていた。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み

式である。煙道部へ移行する壁際のくぼみは壁溝であろう。煙道部は先端の一部が水道管理設備によって壊されている。底面はゆるやかに傾斜して上がる。煙出し部に伴う施設は確認できない。

〈付属施設〉P3とP4を共伴する。P3は床面中央からわずかに東寄りに位置する円筒形のピットである。7a住居跡の貼り床が一部を覆っている。P4は南東壁寄りにある。平面形は凸辺隅丸長方形で、壁はほぼ直立している。埋土上部には3枚の貼り床が認められる。3層と4層は接するが、1層と3層の間には薄層を挿む。埋土がルースなために床面が沈降するのに伴って床を貼り替えた結果と考えられる。

遺物（第217図・第218図、図版219・236・237・240・241）

〈出土状況〉埋土を中心に、1号カマド本体・P1～P3・床面・掘り方埋土から出土している。量はやや多い。土器と鉄製品・鉄滓・轆の羽口・砥石がある。

〈土器〉土師器壺が主体を占め、縄文土器・埴・須恵器・甕以外の土師器がある。土師器壺はⅠ類が卓越し、S1・L2・L4aなどがある。Ⅱ類の586はM1bである。砂底は589以外に1点がある。埴はⅠ類が卓越する。図示例ではA2・B0・C4が1点ずつで、破片28点にはB0が1点含まれる。Ⅱ類は15点の破片があり、A2が2点含まれている。小型の甕587は須恵器の可能性が高い。それ以外は須恵器は破片1点、縄文土器は破片72点がある。甕以外の土師器には高台付埴592と小型の壺の破片がある。

〈鉄製品・鉄滓〉紡錘車598は床面、刀装具（鞘）597は埋土から出土している。596は両端へ向って細くなっていくことから刺突具の一種と考えられる。鉄滓は3点385gが埋土と床面直上から出ている。

〈轆の羽口〉593は炉側先端部を含む大型のもので、外形の断面は凸辺方形状である。

〈砥石〉594・595は小型の円礫を素材にし、割れ面を使用している。それ以外には小破片1点が埋土から出土している。

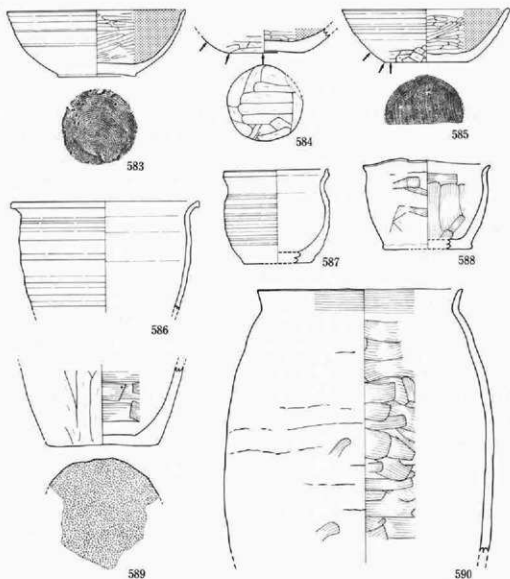
まとめと遺構の時期

大部分の遺物は7a住居跡に固有であり、P3と掘り方埋土からのものが7b住居跡に固有と考えられる。図示例では583・587・591が7b住居跡とより密接な関係がある。それ以外の図示例は7a住居跡との関係が強い。埋土の状況や出土遺物からは7a住居跡は平安時代Ⅱ群に分類できる。2棟の時間的な隔りはそれほど大きいものではないことが重複形態から推定できよう。

GN-8住居跡

遺構（第277図、図版120）

〈検出状況・重複関係〉本住居跡が存在する周辺は現代における削削が“地山”までおよん

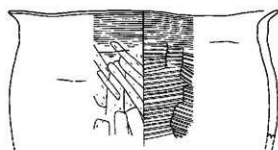


No	発 掘 場 所	種 類	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分 類	図 号
			口縁部	胴部	底 部	取 手	口 縁部	胴部	底 部	取 手	口 縁部	胴部	底 部		
583	P 3 埋土	杯	ロタロ模	ロタロ模	—	回転糸切り	ヘタミダキ	—	—	—	14.3	5.3	6.3	1B2	219
584	埋土	?	—	ヘタケズリ	—	ヘタケズリ	?	—	—	—	—	(1.4)	6.0	1C4	
585	1号カマド附横土	?	ロタロ模	ロタロ模	—	静止糸切り+ヘタケズリ	?	—	—	—	13.5	4.2	6.7	1A2	

No	発 掘 場 所	種 類	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分 類	図 号
			口縁部	胴部	底 部	取 手	口 縁部	胴部	底 部	取 手	口 縁部	胴部	底 部		
586	1号カマド附横土	土師器	ロタロ模	ロタロ模	—	—	ロタロ模	ロタロ模	—	—	15.2	(8.6)	—	3M2	
587	P 3 埋土	直器形器?	?	?	—	?	?	?	—	—	8.2	7.4	(15.4)		
588	埋土・P 1 埋土	土師器	ナデ	ナデ+ヘタケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	10.3	7.3	7.0	1S1	
589	埋土・P 1 埋土	?	—	ヘタケズリ	砂底	—	ヘタケズリ	?	—	—	(6.5)	8.9	—		
590	1号カマド・底面はか	?	横ナデ	不明+ナデ	—	横ナデ	?	—	—	—	16.4	(21.0)	—	1T4	

$$S = \frac{1}{3}$$

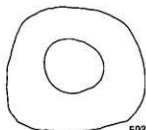
第217図 GIV-7 住居跡出土遺物(1)



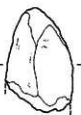
591



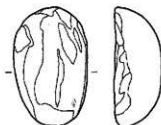
592



593



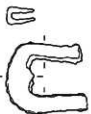
594



595



598



597



595



596

No	地点・層位	種類・素材	外 面				内 面				計測値: cm	分製	図版
			口縁部	胴部	底部	肩部	口縁部	胴部	底部	肩部			
591	堀土・P3堀土	土師器	横ナデ	ヘラナデ	—	—	横ナデ	横ナデ	—	—	21.5 (10.3)	—	113

No	地点・層位	種類	外 面				内 面				計測値: cm	分製	図版
			口縁部	胴部	底部	肩部	口縁部	胴部	底部	肩部			
592	PP1堀土	高台付杯	—	—	ヘラミガキ+黒色粘土	—	ヘラミガキ	—	—	—	1.6	8.0	—

$$S = \frac{1}{2} (\text{cm}) \cdot \frac{1}{2}$$

第218図1 GIV-7 住居跡出土遺物(2)

No	地 点 ・ 層 位	器 種	大きさ(最大):mm			重量g	石 材 名	特 徴 ・ 備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
594	埋土	磁石	(56)	36	30	(50.5)	細砂質凝灰岩(石質凝灰岩), G 5	一面を欠失。2面使用。	241
595	F 3 埋土	〃	63	39	36	85.0	〃	完整。平面面が主使用面。側面も一部使用	241

No	地 点 ・ 層 位	器 種	大きさ(最大):mm			重量g	特 徴 ・ 備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
593	灰面直土	鏡筒口	(136)	外径:42×39	(82.0)	(82.0)	伊勢先周部を含む部分。通風孔径 42 mm。先端は鉄棒を多く付着する。	240
596	埋土	不明	(69)	4~7	3	(5.4)	西端を欠失。断面は正方形~長方形。中央が互く、西端へ細くなる。	236
597	埋土	刀鏡具	42	36	3	18.0	完整。	237
598	灰面	紡錘車	(163)	紡錘径:38×61	(44.0)		紡錘の一面を欠失。紡錘の径は 6 mm。紡錘の厚さ 4 mm。	237

第218図 2 GIV-7 住居跡出土遺物

でいる。本遺構は、本来は堅穴式であったものがその際に削剝を受け、柱穴だけが残ったものと推定した。したがって、およその平面形と規模・柱穴について推定できる以外は不明であり、固有の遺物もない。現状では重複する遺構はない。

〈平面形〉長方形の本体部に正方形の張り出し部を伴う。〈規模〉本体部の柱穴間は2.0 m~2.3×3.1~3.2m、張り出し部のそれは1.1~1.3×1.2~1.4mを測る。

〈柱穴〉PP1~PP7が本体部のもので、PP8・PP9の2個がPP1・PP7と結んで張り出し部を作る。PP8・PP9は直径が他に比べると小さい。掘り方と柱痕跡が識別できるのはPP4・PP6・PP7の3個である。なお、本体部の西側約半分の中央にPP10がある。掘り方と柱痕跡が識別できるとともに、埋土が先の一層と同じで、大きさや深さもそれに近似した値をもつ。相伴するものと考え、配置的にみて、どのような役割りをもつかは分からない。

まとめと遺構の時期

住居形式からみて、中世に属するものと推定する。

H III区

H III-1 住居跡

遺構 (第219図)

〈検出状況・重複関係〉重複するH III-251溝(時期不明)に切られ、南東壁全体を含む一部が残存するにすぎない。

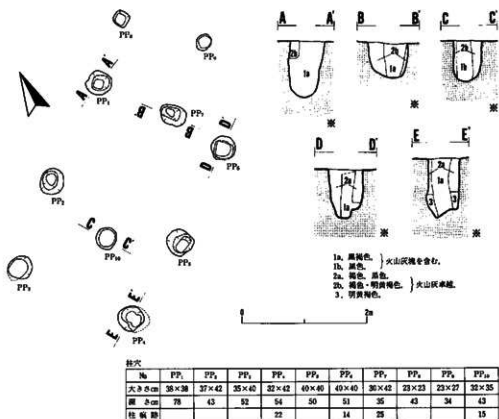
〈平面形・規模〉方形を基調とすること以外は不明である。北東壁・南東壁間では5.0mを測る。

〈埋土〉当初、H III-251溝の一部と考えて掘り進めたため、2層の黒褐色土を北東側約半分に観察できたにすぎない。

〈壁の状態〉直立~わずかに外傾 〈壁高〉52cm 〈壁溝〉残存部には検出されていない。

〈床面・掘り方〉南西側約半分は掘りすぎがあり、北東側半分しか床面は確認できないが、軟かい。浅い掘り方を下位に伴う。

〈柱穴・カマド・壁溝〉残存部には検出されていない。



第277図 GIV-8 住居跡実測図

〈その他〉南東壁際の床面の小規模な範囲が焼けて赤色に変化している。

遺物

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、少量が埋土から出土しているにすぎない。土器と陶器があるが、すべて破片である。

〈土器〉破片数の多い方から順に、土師器甕・坏・縄文土器がある。土師器甕はⅠ類が卓越する。坏はⅠ類2点、Ⅱ類1点だけである。

〈陶器〉摺り鉢の小破片1点がある。

まとめと遺構の時期

遺構の時期を決定する資料を欠き、所属時期は不明としておく。

HⅢ-2 住居跡

遺構 (第220図、図版121・122)

〈検出状況・重複関係〉重複するHⅢ-3住居跡(平安時代)を切っている。GⅢ-251溝(時期不明)には西側部分の壁の一部を切られている。

〈平面形〉わずかに隅丸の台形状 〈規模〉4.3×4.3~4.8m 〈床面積〉18.2㎡ 〈主軸方

向) S-12°30'-W

〈埋土〉黒褐色土・黒色土が卓越する。2種類の火山灰を含み、上部の2層に灰白色浮石、南壁寄りの4a・4b層に黄褐色火山灰が点在するが、いずれも少量である。ともに再堆積であり、層的には逆転している。なお5層の焼土は埋土中に形成された現地性のものである。

〈壁の状態〉直立 〈壁高〉38~72cm
〈壁溝〉カマドの両側の一部をのぞいて存在する。幅7~18cm、深さ5~20cmである。

〈床面・掘り方〉床面は全体に硬く締っている。ほぼ全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉いくつかの柱穴状ビットがあるが、主柱穴を構成するものはない。PP1とPP4についてはHⅢ-3の住居跡の項で記載する。

〈カマドの位置〉南壁中央と南西隅との中間 〈本体〉側壁は比較的良好に残っている。

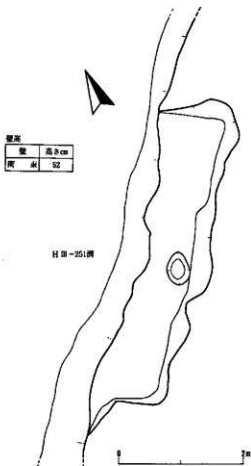
粒径12~30cmの亜角・亜円礫を立てて芯材にし、シルト質粘土で被覆する。火床部は良く焼けている。〈煙道部・煙出し部〉幅広の浅く短いもので、急傾斜で上ったあと緩傾斜の上りになる。煙出し部に関する施設は確認できない。

〈付属施設〉床面中央部と北壁の中間に貯蔵穴P1がある。平面形はわずかにいびつな長方形で、壁は直立する。埋土は汚れ火山灰が卓越する。

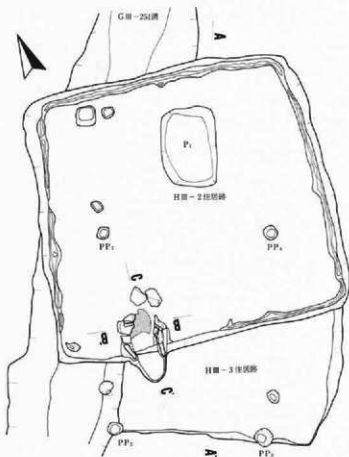
〈その他〉草本類を主にした炭化物が埋土下部から床面の層中に分布する。北東隅と南西隅を結んだ線の東側に広がるが、小規模ないくつかのまとまりとしてみられる。一部では焼土と炭化材を伴っている。樹種の鑑定結果はケヤキ・ナラ・カヤとなっている。分布や焼土の状態からは現地性か廃棄物かの識別が困難である。

遺物 (第221図)

〈出土状況〉埋土下部~床面を中心に、カマド・P1・柱穴状ビット・掘り方埋土から出土



第219図 HⅢ-1 住居跡実測図



カメラ

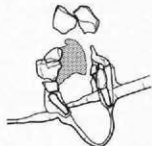
本体 (部)	長	78	幅	50	
	幅	76		深	22
	地盤	42×		深	5
	厚さ	5			



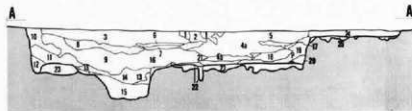
1. 黒色、褐色。
2. 黒褐色、粘土・炭化物を含む。
3. 黄褐色、粘土。
4. 暗赤褐色、粒状の焼土・炭化物を含む。
5. 黒褐色、褐色土塊を含む。
6. 黒褐色、焼土を含む。
7. 黄褐色、焼土を含む。
8. 暗褐色、焼土粒を含む。
9. 黒褐色。



1. 黄褐色、汚れ火山灰、焼土少量を含む。
2. 暗褐色、焼土・炭化物塊を少量含む。
3. におい赤褐色、焼けた粘土。
4. におい褐色、粘土質シルト。
5. 黒褐色・黄褐色、住居跡方障土。



カメラ部分図 案



1. 黒色。
2. 黒褐色、灰白色浮石が点在する。
3. 黒褐色。
- 4a. 黒色、黒褐色、少量の黄褐色火山灰が点在する。
- 4b. 黒褐色、粘土。
5. 明赤褐色、焼土。
6. 黒褐色・暗褐色、焼土・炭化物を含む。
7. 黒色、黒褐色。
- 8~10. 黒褐色。
11. 黒褐色、焼土・炭化物・灰を含む。
12. 黒褐色。
13. 黄褐色、火山灰。
14. 黒褐色、火山灰塊のほか焼土・炭化物を含む。
15. におい黄褐色、汚れ火山灰・炭化物を含む。
16. 黒褐色、炭化物を含む。
- 17~20. 黒褐色。
21. 黄褐色、焼土・炭化物を含む。
22. 黒色、木炭。
23. 明赤褐色~黒褐色、HIII-2住居跡、掘り方障土。
24. 黒褐色、灰白色浮石の小塊を含む。
25. 暗褐色・黒褐色、HIII-3住居跡、掘り方障土。

- 1~23. HIII-2住居跡埋土・掘り方障土。
- 24~25. HIII-3住居跡埋土・掘り方障土。

壁高 HIII-2住居跡		壁高 HIII-3住居跡	
壁	高さcm	壁	高さcm
西	38	南	14
南	45	東	21
東	72		
北	66		

ピット	
No.	P1
大きさcm	67×125
深さcm	55

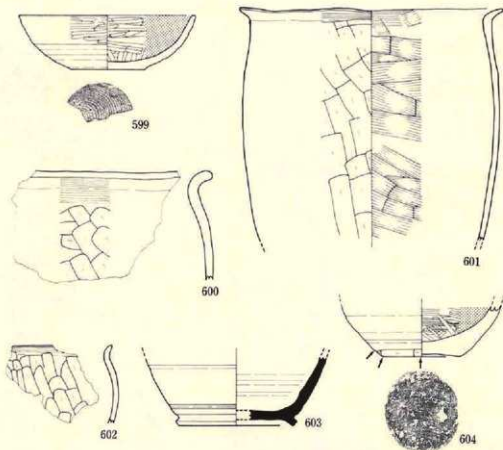
柱穴			
No.	大きさcm	深さcm	備考
PP1	19×19	25	HIII-2 (15cm深)
PP2	20×24	24	
PP3	27×28	50	
PP4	21×21	35	HIII-3 (15cm深)

$$S = \frac{1}{40} (\text{cm})$$

第220図 HIII-2・HIII-3住居跡実測図

しているが、量は少ない。土器と石器がある。

〈土器〉土師器甕が主体を占め、そのほかには坏・須恵器・甕以外の土師器・縄文土器がある。土師器甕はⅠ類が卓越し、Ⅰ5aなどがある。砂底が破片で2点ある。坏はⅠ類B0の599以外はⅠ類5点の破片があり、B0を1点含んでいる。須恵器は壺603のみである。604は体部下端～底部全面が再調整され、内面はヘラミガキと黒色処理が施されている。器壁の厚さからは坏とするには疑問が残る。そのほかには内外面をヘラミガキした坏または甕の小破片がある。



No	地点・層位	種類・器種	外面				内面				計測値：cm			分類	図取
			口縁部	胴部	底	部	口一底	黒色処理	口縁部	底	口縁部	底	底径		
599	埋土下部	坏	ヘラミガキ	ロタロ痕	回転あ切り		ヘラミガキ	○	14.1	4.3	6.6	110			
No	地点・層位	種類・器種	外面				内面				計測値：cm			分類	図取
			口縁部	胴部	底	部	口一底	黒色処理	口縁部	底	口縁部	底	底径		
600	床面	土師器甕	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—	—	—	—		
601	埋土下部～床面直上	ロ	ロ	ロ	—	ロ	ロ	—	—	—	21.1	(18.5)	—	115	
602	埋土下部・P1埋土	ロ	ロ	ロ	—	ロ	ロ	—	—	—	—	—	—		
603	埋土上部	須恵器壺	—	ロタロ痕	ナデ	—	ロタロ痕	ロタロ痕	—	(5.4)	9.2	—	—		
604	埋土下部	土師器	—	ロタロキナズリ	ヘラケズリ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	(4.2)	6.9	—	—		

$$S = \frac{1}{3}$$

第221図 HⅢ-2 住居跡出土遺物

〈その他〉凹石1点が床面直上から出土している。

まとめと遺構の時期

出土遺物や埋土の状況から、平安時代Ⅳ群に分類できる。

HⅢ-3 住居跡

遺構（第220図、図版121）

〈検出状況・重複関係〉重複するHⅢ-2住居跡（平安時代）・GⅢ-251溝（時期不明）に床面下位深く削刺され、南隅を挟んだ南壁と東壁が部分的に残るにすぎない。

〈平面形・規模〉方形であるものの、平面形の詳細や規模はわからない。

〈埋土〉黒褐色土の単層である。粒状の火山灰を全体に含むほか、灰白色浮石の小塊を少量含む。

〈壁の状態〉直立〜わずかに外傾 〈壁高〉14〜21cm 〈壁溝〉残存部には伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は軟かい。浅い掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉南壁を切るようにしてPP2とPP3がある。それらとHⅢ-2住居跡内にあるPP1・PP4を結ぶとわずかにいびつな長方形になり、配置的には支柱穴として適当と考えられる。しかし、PP2・PP3に比べると、PP1とPP4が22〜55cmほど深くなることやPP1とPP4への貼り床はみられないことが疑問として残るものの、他の例でも深度のバラツキが大きいものがあり、4本柱と考えても支障ないであろう。

遺物

〈出土状況〉ごく少量の土器片が出土したことを調査時に確認しているが、HⅢ-2住居跡の遺物の一部が混入しているため記載を省略する。

まとめと遺構の時期

平安時代に分類できるが、詳細は不明である。

HⅢ-4 住居跡

遺構（第222図・第223図、図版122・123）

〈2棟の重複〉新旧関係がある2期のカマドと2群の柱穴配置が存在する。したがって、同一平面で、壁・床面・大部分の柱穴を共有一再利用する関係にある2棟を想定し、新期を4a住居跡、古期を4b住居跡として記載する。

HⅢ-4 a 住居跡

〈検出状況・重複関係〉東隅を含む一部はHⅢ-5住居跡（平安時代）に床面下位まで切られている。HⅢ-6住居跡（中世）の床面の一部は本遺構の埋土中に作られている。また、北隅はHⅢ-3住居跡（平安時代）と接するが、重複かどうかは把握できなかった。

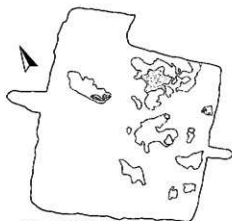
〈平面形〉わずかに隅丸の長方形と推定 〈規模〉4.6×5.5m 〈床面積〉22.9㎡（推定）〈主

軸方向) N-51°30'-W

〈埋土〉黒褐色土・黒色土が卓越する。主体を占める1層は灰白色浮石の小塊を全体に多く含むほか、火山灰や黒色土の小塊が散在する。

〈壁の状態〉ほぼ直立 〈壁高〉23~51cm 〈壁溝〉北隅や2号カマドの北東部をのぞいた部分に存在し、2号カマド煙道部がある下方にも認められる。幅が12~30cm、深さは5~15cmで、部分的には30cmと深い。

〈床面・掘り方〉床面は周辺部がいくぶん軟かいものの、硬くよく締っている。小凹凸がいちじるしい。全体規模の掘り方を下位に伴う。



焼土・炭化材分布状況

第222図 HⅢ-4 住居跡実測図(1)

〈柱穴〉PP1~PP4の4本柱である。PP1・PP2は隅から奥に入った位置に、PP3・PP4の2個はカマドが設置される壁の反対壁を切る状態の位置にある(Ⅱ型)。PP3は4b住居跡に伴うPP5を切っている。PP1・PP2・PP4は4b住居跡と共有一再利用の関係にある。PP1・PP2・PP4は柱痕跡と掘り方が識別でき、柱痕跡の平面形は長方形・長楕円形である。

カマド：1号カマドを共伴する。〈位置〉北西壁中央〈本体〉崩壊がいちじるしい。シルト質粘土や崩壊・移動した礫が火床部の上を覆っていることと両側壁のつけ根に残る粒径15cmと22cmの2個の礫が原位置を保つことからは芯材として礫が使われていたことが推定できる。燃焼部は円形に浅くくぼみ、カマドのための掘り方埋土を下位に伴う。火床部は大型で、層厚も厚い。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。不整形小ピットが本体寄りの部分にあるほか、底面は全体に凹凸がある。緩やかな傾斜で上がり、先端に達する。煙出し部に伴う施設は確認できない。

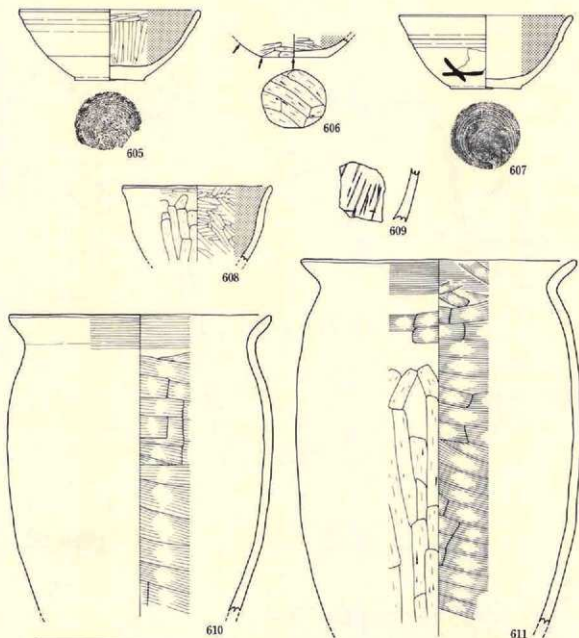
〈その他〉焼土が埋土下部から床面直上の層準の広い範囲に分布する。一部では木炭をその上下に伴い、草本類がみられる部分もある。現地性のものである。

HⅢ-4 b 住居跡

〈平面形・規模・床面積〉柱穴配置や2号カマドの位置からは4a住居跡と同形・同規模のものと推定できる。〈主軸方向〉S-51°30'-E

〈埋土〉煙道部をのぞいては固有のものをもたない。

〈壁・壁溝・床面・掘り方〉壁と床面は4a住居跡と共有一再利用の関係にあるものと推定する。したがって7a住居跡の項で述べた掘り方は時間的に先である本遺構に固有のものと考えるべきであろう。壁溝については不明である。



No	地点・層位	種類・原形	外 面			内 面			計測値：cm		分厚	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 一 底	黒色処理	口 径	口 縁 高	底 径		
605	埋土	杯	ロクロ織	ロクロ織	回転糸切り	ヘタミダキ	○	14.4	5.6	5.6	1B	
606	1号カマド前填土		—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	#	○	—	(1.1)	5.3	1C4	
607	埋土へ床面・掘り方	#	ロクロ織	ロクロ織+黒漆	回転糸切り	#	○	13.8	5.8	5.7	1B6	
608	埋土・床面	土師器鉢	ヘタミダキ	ヘラケズリ	—	#	○	(11.6)	(6.0)	—		

No	地 点 ・ 層 位	種類・原形	外 面			内 面			計 測 値 : cm		分厚	図版
			口縁部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 径	口 縁 高・底 径		
609	1号カマド前填土	土師器壺	—	刷毛	—	ナデ	黒漆	—	—	—		
610	埋土へ伏面	#	横ナデ	化粧粘土	—	横ナデ	ヘラナデ	—	21.1	(23.5)	—	1L2
611	カマド前填土→埋土	#	#	ヘラケズリ	—	#	#	—	22.6	(29.4)	—	#

第224図 HⅢ-4 住居跡出土遺物(1)

S = $\frac{1}{3}$

〈柱穴〉PP1・PP2・PP4・PP5の4本柱である。(Ⅲa型)。PP5以外は4a住居跡と共有一再利用の関係にある。PP5はPP3に切られ、貼り床されていた。

カマド：2号カマドを共伴する。〈位置〉南東壁中央からわずかに南西に寄った部分〈本体〉まったく痕跡は認められなかった。煙道部との境には壁溝が掘られていることを考えると、完全な破壊のあとに新期住居跡の床面を部分的に再構築しているのであろう。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。わずかに傾斜して下がり、先端部は楕円形状の浅いくぼみになる。

遺物 (第224図・第225図、図版229)

〈出土状況〉埋土を中心に、カマド本体・床面・掘り方埋土・柱穴から出土し、量は比較的多い。土器と鉄製品・鉄滓・土製品・石器がある。

〈土器〉土師器甕が主体を占め、次いで坏・縄文土器・甕以外の土師器・須恵器の順に多い。土師器甕はⅠ類がほとんどで、Ⅱなどがある。610は化粧粘土のために胴部外面の調整痕をみることができない。609は刻線を伴う胴部下端の破片である。坏は図示例も含めてすべてⅠ類である。605・607のほかにもB0は破片1点がある。607は胴部に墨書をもつが、破損していることもあって判読できない。甕以外の土師器としては608などがある。608は底部を欠くが、クロロ不使用である。器高が大きく、小型の鉢として分類した。そのほかに、高台付坏と小型の甕の破片が1点ずつある。須恵器は甕の破片1点だけである。

〈鉄製品・鉄滓〉目釘式手鎌612のほか、角釘の脚部と推定される2点が埋土から出ている。鉄滓は1点100gが埋土から出土している。

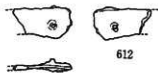
〈土製品〉全体の1/3ほど残存する土球がある。直径が30mmで、土師器に似た色調や胎土・焼成である。

〈その他〉尖頭石器ほか2点の剥片石器と敲石1点がある。

まとめと遺構の時期

遺物はすべて4a住居跡に固有のものである。埋土の状況や重複関係・出土遺物から、4a住居跡は平安時代Ⅱ群に分類できる。4b住居跡は、重複形態からみて、4a住居跡とはそれほど大きな時間の隔たりはないものと推定する。

HⅢ-5住居跡



遺構 (第226図、図版123・124)

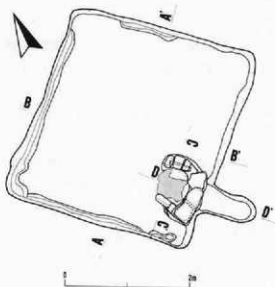
〈検出状況・重複関係〉重複するHⅢ-4住居跡(平安時代)を切っている。

〈平面形〉わずかに隅丸のややいびつな正方形形状 〈規

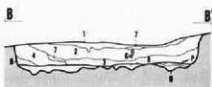
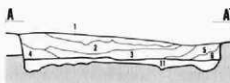
No	地点・層位	図	大きさ(最大):mm			重量g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
612	埋土	目釘式手鎌	(30)	36	2	(2.5)	一隅を喰ひ破片。目釘がわずかに残っている。	

$$S = \frac{1}{2}$$

第225図 HⅢ-4住居跡出土遺物(2)

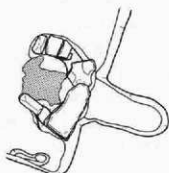


北 北西	カマド		北 北東	竈	
	長さ	幅		長さ	幅
	98	45×52		90	46
土	厚さ	4	土	厚さ	38



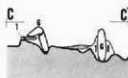
1. 黒色。炭化物粒が点在。
2. 黒褐色。灰白色浮石・炭化物粒が点在。
3. 黒色・黒褐色。炭化物粒が点在。
- 4・5. 黒褐色。
6. 黒色。粒状の灰白色浮石が点在するが少量。
7. 黒色・黒褐色。
8. 黒褐色。火山灰層を含む。
9. 褐色。汚れた火山灰。

掘り方増上。



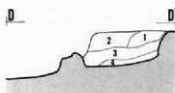
カマド部分図

壁	北西	南西	南東	北東
高さ cm	34	32	43	32



竈

1. 黒褐色。火山灰の小塊を含む。



竈

1. 黒色・黒褐色。粘土質シルト塊を多く含む。
2. 黒色。黒褐色。粘土質シルトの小塊が散在する。
3. 黒色。
4. 黒褐色。



重複位置図

$$S = \frac{1}{40} (\text{※})$$

第226図 HIII-5 住居跡実測図

模) 3.1×3.3m 〈床面積〉 9.1m² 〈主軸方向〉 S-46°-E

〈埋土〉 黒色と黒褐色の土層群で構成される。灰白色浮石は主体を占める2層と壁隙の一部にみられる6層に含まれるが、小塊が少量点在するだけである。

〈壁の状態〉 ほぼ直立 〈壁高〉 32~43cm 〈壁溝〉 北西壁と南西壁沿いにあるほか、北東壁隙に短かく掘り込まれている。幅は10~20cm、深さは一般に浅く数cm程度であるが、HⅢ-4住居跡と重複する部分では15cmとやや深い。

〈床面・掘り方〉 南東側半分が非常に硬く締っているのに対し、残りの半分はやや軟かい。小凹凸がみられる。全体規模の掘り方を下位に伴う。

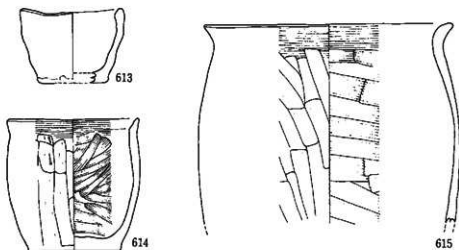
〈柱穴〉 伴わない。

〈カマドの位置〉 南東壁中央から南西寄り 〈本体〉 残存状態はやや良好である。側壁は砂岩と粘土質シルトで構築されている。天井石はつけ根の部分に28×60cmの板状の砂岩が残り、二重になっている。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉 掘り込み式である。底面はわずかに傾斜しながら先端へ上がって行く。煙出し部のための施設は確認できない。

遺物 (第227図、図版229・233)

〈出土状況〉 埋土を中心に、床面・床面直上・掘り方埋土から出土しているが、量はそれほど多くはない。土器と鉄滓がある。

〈土器〉 数量は土師器甕が圧倒的に多く、次いで坏・甕以外の土師器・縄文土器がある。土師器甕はすべてI類で、S2・L4cなどがある。砂底と木葉底は各1点である。坏は14点の



No	地点・層位	種類・器種	外				内				計測値: cm			分限	図版
			口縁部	胴部	底	底	口縁部	胴部	底	底	口径	高さ	底径		
613	床面・埋土	手づくね土器	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	8.2	5.9	5.8		233
614	埋土	土師器甕	横ナデ	ヘラナデ	ナ	ナ	横ナデ	ヘラナデ	ナ	ナ	10.5	10.5	7.4	152	229
615	床面・埋土	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	19.8	(15.9)	—	114	

$$S = \frac{1}{2}$$

第227図 HⅢ-5住居跡出土遺物

破片すべてがⅠ類で、1点のB0を含む。壺以外の土師器としては613や手づくね土器の破片がある。

〈鉄滓〉1個36gが埋土から出土した。

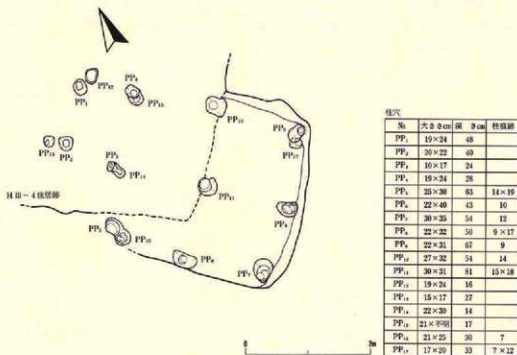
まとめと遺構の時期

埋土の状況や重複関係・出土遺物から、平安時代Ⅱ群に分類できる。

HⅢ-6 住居跡

遺構（第228図、図版124）

〈検出状況・重複関係〉HⅢ-4住居跡（平安時代）の南隅を含む部分で重複することを出時に確認していた。しかし平面形が不明瞭なため、HⅢ-4住居跡に切られているピットと想定し、住居跡を先に精査したところ、同住居跡のものとは考えられない柱穴複数が床面に規則的にみつかったことや2号カマド煙道部の埋土を切る柱穴PP10を伴うことから、同住居跡よりも新しい住居跡があることを確認できた。しかし、床面のレベルから考えると、北西側約半分の床面はHⅢ-4住居跡の埋土にあったことになるが、先のような調査順であったため、確認はできなかった。柱穴配置は新旧2群があるが、一部の柱穴を再利用するなど、形態的にはほぼ類似するものである。新期を6a住居跡、古期を6b住居跡として記載する。なお、埋土は新期住居跡に固有のもの、壁や床面は再利用の関係を通して共有するものと考え、まとめ



第228図 HⅢ-6 住居跡実測図

て記載する。

〈埋土〉黒褐色土の単層で、火山灰の小塊を少量含む。

〈壁の状態〉ほとんど消失している南西壁をのぞいては外傾している。〈壁高〉20～22cm 〈壁溝〉床面を把握できた部分には検出されていない。

〈床面・掘り方〉床面はやや軟かい。掘り方は伴わない。

〈カマド・炉〉床面が残る部分にはない。HⅢ-4住居跡との重複部分にもカマドは存在しなかったが、炉の有無は確認できていない。

HⅢ-6 a 住居跡

〈平面形・規模〉床面や壁の約半分を失っているために推定になるが、張り出し部を除いた部分は2.9×3.3mの方形で、張り出し部は85×120～145cmの台形になる。

〈柱穴〉2群の配置を識別した理由は、HⅢ-4住居跡床面上で深い方のPP1がPP12を切っていたこと、PP2とPP13、PP3とPP14ほかの例のように2個が重複あるいは接する場合、一方が10～33cm深くなることからであり、深い柱穴の一群を新期とした。張り出し部を除いた部分はPP3～PP11の9本柱である。四隅とその中間の壁際、そして真中に1個が配置される。張り出し部は北側に付き、PP1とPP2の2個がPP3・PP4と結ばれる。PP6～PP8・PP10・PP11は古期の6 b 住居跡の柱穴の再利用である。またPP5～PP11は柱痕跡と掘り方が識別できるが、PP1～PP4については不明である。

HⅢ-6 b 住居跡

〈平面形・規模〉張り出し部をのぞいた部分は2.9×3.1mの方形で、張り出し部は80～120×150cmの台形である。

〈柱穴〉張り出し部を除いた部分はPP6～PP8・PP10・PP11・PP14～PP17の9本柱である。張り出し部はPP12とPP13の2個がPP14・PP15と結ばれる。配置は6 a 住居跡の場合と同様である。

遺物

〈出土状況〉上述のような検出状況であったこともあり、土師器壺Ⅰ類3点と縄文土器1点の破片が出土しているにすぎない。

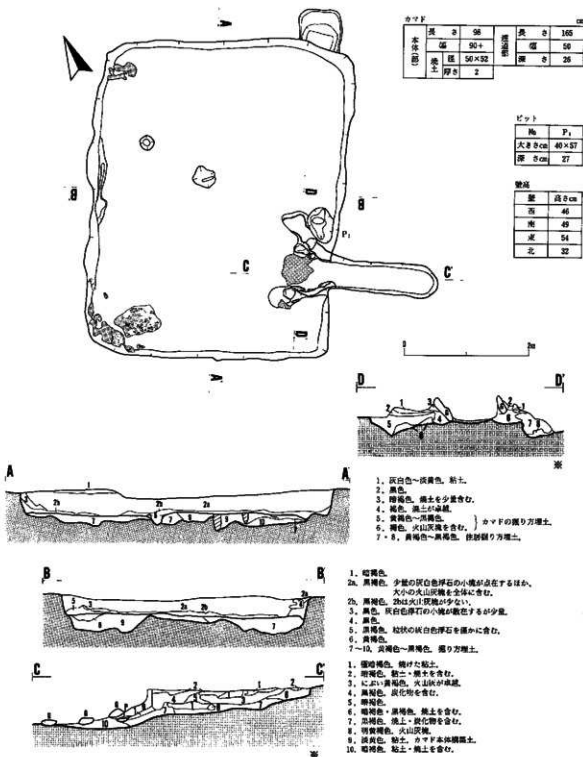
まとめと遺構の時期

住居形式や重複関係から、中世に分類するが、具体的な時代については不明である。

HⅢ-7 住居跡

遺構（第229図、図版125・126）

〈出土状況・重複関係〉北東隅寄りの東壁で重複するHⅢ-53ビット（平安時代）に切られている。



第229図 H III-7 住居跡実測図

$S = \frac{1}{45}$ (概)

〈平面形〉わずかに隅丸の長方形 〈規模〉4.0×5.1m 〈床面積〉18.0㎡ 〈主軸方向〉S—60°—E

〈埋土〉主体を占めるのは2a・2b層の黒褐色土である。粒状あるいは小塊を主にした火山灰を全体に含み、とくに2a層に多い。灰白色浮石は粒径10mmの小塊が少量点在する。

〈壁の状態〉ほぼ直立 〈壁高〉32~54cm 〈壁溝〉図には一部しか表現されていないが、北壁から左まわりにみた西壁の中央部までの部分と南壁沿いにみられる。幅が狭いうえに浅く、不明瞭である。

〈床面・掘り方〉カマド前面から中央にかけての床面は周辺部に比べるといくぶん高く、非常に硬く締っている。周辺部はやや軟かい。全体規模の掘り方を下位に伴うが、周辺部がとくに深くなる。

〈柱穴〉伴わない。

〈カマドの位置〉東壁中央から南寄り 〈本体〉崩壊土が厚く堆積し、粒径10~25cmの礫多数が散在していた。右側壁は3個の扁平な礫を一列に並べるほか、1個の亜円礫が原位置を保っている。左側壁には3個の礫が残るが、右側壁ほどは整然としていない。それらの礫は粘土質シルトで被覆されている。燃焼部の下には住居の掘り方とは区別されるカマドの掘り方がある。火床部は良く焼けている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。緩やかに傾斜して上がり、先端部寄りやや急傾斜になる。煙出し部のための施設は確認できない。

〈付属施設・その他〉カマド左隣りに楕円形状の浅いピットP1を伴う。方形の浅い落ち込みが北壁の東隅寄りの外側に張り出すような形であり、底面は住居の方へ傾斜し下がっている。重複や共存については不明である。

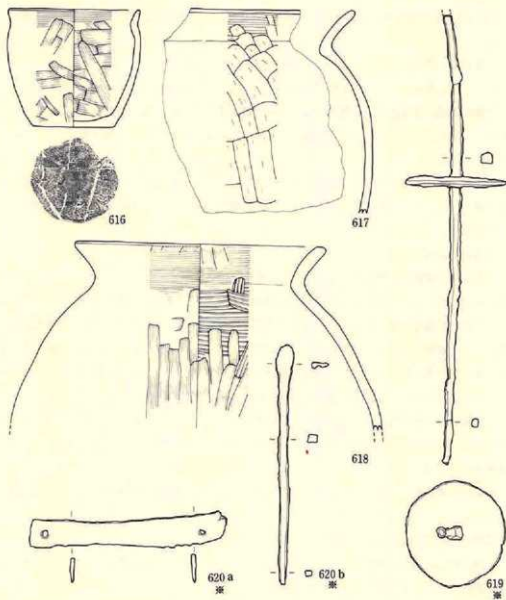
写真には東隅寄りに貯蔵穴状ピットが写っている。これは精査時に誤認によって床面を掘り下げたもので、ピットではない。

遺物（第230図。図版229・237）

〈出土状況〉埋土を中心に、掘り方埋土・カマド本体・床面・煙道部から出土している。量は比較的多い。土器と鉄製品・鉄滓がある。

〈土器〉土師器壺が主体を占め、そのほかには坏・縄文土器・土師器甕がある。土師器壺はI類が卓越し、S2などがある。木葉底は616以外に2点、砂底は1点の破片がある。坏はすべて破片で、I類48点・II類7点である。I類はB02点がある。618は土師器の壺として分類した。胴部外面はヘラナデとして図示しているが、軽いヘラケズリとみる方が良いかもしれない。そのほかには小型の壺の破片がある。

〈鉄製品〉紡錘車619・目釘式手鐲620a・鉄鐲620bは埋土上部~下部のものである。鉄滓は2点23gが床面と埋土下部から出土している。



No	地点・層位	種類・器種	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分 類	図 解
			口縁部	胴部	底 部	水取部	口縁部	胴部	底 部	水取部	口 径	器 高	底 径		
616	埋土下部	土器甕	横ナデ	ナデ	水取部	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	ナデ	ナデ	10.6	9.3	6.5	152	229
617	埋土部	〃	〃	ヘラナデ	—	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	—	—	—	—	—
618	ヒマダ新埋土	土器甕	〃	ヘラナデ	—	〃	横毛目ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	(20.0)	(13.8)	—	—	—

No	地 点 ・ 層 位	器 種	大 小 (最大) : mm		重量g	特 徴 ・ 備 考	図 解		
			長	幅					
619	埋土上部	短冊杵	(249)	13~15	(51.4)	一端を欠失。筋溝の径 6mm。	237		
620a	埋土下部	目釘式手鐲	106	13~15	2	10.4	先形。刃部はわずかに磨減し。内湾。目釘穴 2 個。	237	
620b	埋土中部	鉄鏝	127	8	9.5	3	8.9	刃部。無蓋式。柄は軸状。身は 3.5×5×3×7mm。	237

$$S = \frac{1}{2} (\text{長}) \cdot \frac{1}{3}$$

第230図 HⅢ-7 住居跡出土遺物

まとめと遺構の時期

平安時代の住居跡である。埋土の状況からはⅡ群に分類できる。

HⅢ-8 住居跡

遺構 (第231図、図版126・127)

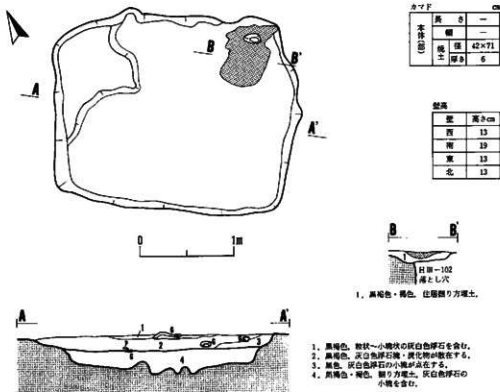
〈検出状況・重複関係〉 上半は現代の削剝を受けて消失している。重複するHⅢ-102落とし穴はカマドと推定される焼土下に検出されている。

〈平面形〉 やや不整の長方形 〈規模〉 1.8~2.1×2.5m 〈床面積〉 4.3㎡ 〈主軸方向〉 N-25°-E

〈埋土〉 黒褐色土と黒色土で構成される。灰白色浮石の小塊が全体に散在する。なお、同浮石は掘り方埋土にも少量が点在している。

〈壁の状態〉 外傾~直立 〈壁高〉 13~19cm 〈壁溝〉 伴わない。

〈床面・掘り方〉 中央から南壁にかけての広い範囲の床面が周辺に比べると10cmほど低くな



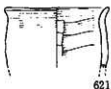
第231図 HⅢ-8 住居跡実測図

る。床面はやや軟かい。西壁寄りの部分を除いて深い掘り方を伴う。

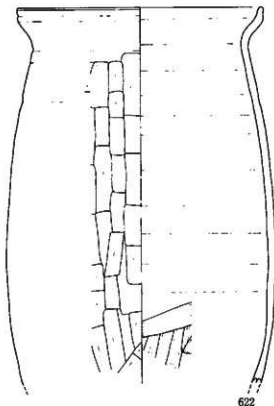
〈カマドの位置〉北壁の東端 〈本体〉崩壊したシルトやシルト質粘土が火床部を覆っていたが、層厚は薄い。側壁は把握できなかった。火床部は良く焼けていて、北壁寄りの部分には粒径13cmの三角形の亜角礫1個が埋設されているが、支脚であろう。〈煙道部・煙出し部〉伴わない。

遺物 (第232図)

〈出土状況〉埋土を中心に、床面・カマド本体・掘り方埋土から土器が出土しているが、量は少ない。



621



622

〈土器〉土師器甕が主体を占め、そのほかには坏・縄文土器がある。土師器甕は622を除いてはすべてⅠ類である。622はⅡ類Ⅰaで、色調はにぶい黄褐色である。破片資料には、砂底1点、木炭底2点がある。坏はすべて破片で、Ⅰ類が2点、Ⅱ類が6点である。

まとめと遺構の時期

埋土から、平安時代Ⅲ群に分類する。

HⅢ-9住居跡

遺構 (第233図・第234図、図版127~129)

〈検出状況・重複関係〉全体的な削刺がいちじるしく、壁下部から床面にかけの部分が残存している。重複する遺構はない。

〈平面形〉隅丸の台形状 〈規模〉

5.2~5.4×5.1~5.7m 〈床面積〉26.2㎡

〈主軸方向〉N-56°30'-E

〈埋土〉削刺を受けていることと床面が炭化材や焼土に覆われた焼失住居であるため、層厚15cm土の黒褐色土が中央付

No	地点・層位	種類・形態	外 面			内 面			計測値: cm	分類	図説
			口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面			
621	埋土	土師器甕	隅ナデ	ナデ	—	隅ナデ	ヘラナデ	—	8.4 (4.8)	—	151
622	埋土・床面	A	ロクロ底	ヘラナデ	—	ロクロ底	ロクロナデ	—	19.7 (30.0)	—	151

$$S = \frac{1}{9}$$

第232図 HⅢ-8住居跡出土遺物

近で確認できただけである。灰白色浮石の小塊が全体に散在している。

〈壁の状態・壁高〉14~17cm 〈壁溝〉北東壁の大部分と南東壁の一部をのぞいて存在する。
幅・深さとも15cmであるが、一般に浅い。

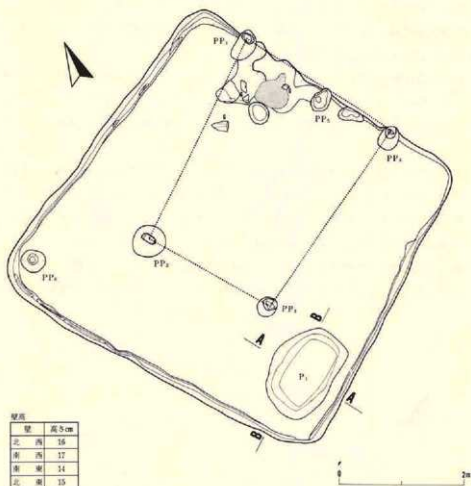
〈床面・掘り方〉床面は、PP4・PP3・PP2を結んだ延長線が北西壁とぶつかる内側で、カマドの左脇をのぞいた部分が非常に硬く良く締っている。これはその外側の板敷部分に対応する土間の部分であったためと考えられる（「まとめ」の項で後述）。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉PP1~PP4の4本柱である。PP2・PP3は隅から床面中央に大分寄った位置、PP1とPP4はカマドが設置された北東壁を切るような位置にある（Ⅲa型）。配置形は台形である。柱痕跡と掘り方が識別でき、柱痕跡の平面形は楕円形・長方形・不整形である。PP1とPP4の中間に位置するPP5、西隅にあるPP6の性格については明らかでない。

〈カマドの位置〉北東壁中央からやや北西寄り 〈本体〉崩壊したシルト質粘土が火床部を覆い、原形をまったくとどめていない。大小の礫数個が周辺に散在するが、構築礫の一部であらう

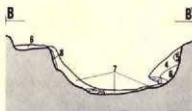
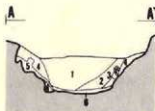


第233図 HⅢ-9 住居跡実測図(1)



壁高	壁	高さcm
北西	16	
南西	17	
南東	14	
北東	15	

ピット	No.	P1
大きさcm	103	145
深さcm	65	



カマド	cm
本体部	
長さ	80+
幅	—
高さ	53×58
焼土厚さ	2

1. 黒褐色・黒色、灰白色浮石の小塊を全体に含むほか、炭化物粒がみられる。
2. 黒褐色。
3. 褐色、焼けている。
4. 黄褐色、粘土と火山灰の塊を含む。
5. 明黄褐色、火山灰。
6. 明褐色、焼土・炭化物を含む。

柱穴

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6
大きさcm	30×50	50×32	27×32	31×40	28×42	35×40
深さcm	65	72	58	56	35	32
柱径cm	14×21	10×25	20×24	15×19		

$$S = \frac{1}{40} (\text{東})$$

第234図 HIII-9 住居跡実測図(2)

う。〈煙道部・煙出し部〉検出されていない。削剝を受けて消失している可能性もある。

〈付属施設〉南隅にP1がある。平面形は隅丸凸辺長方形で、壁は直立～外傾する。底面には炭化した板材が落ち込んでおり、周辺状況からは床の板材に上を覆われていたことが考えられる。

〈焼失〉大量の炭化物が床面直上から床面にかけて分布する。材を主にするもので、床面の項で述べた土間と推定される部分の外側に大型の材が良く残るほか、床面中央から北東壁にかけて広がる材には細かいものが多い。焼土はほぼ全体に広がり、その上に載る炭化材も多い。材に比べると草本類は少ない。P1の北西と北東には床の板材と考えられるものが比較的多くまわって分布する。P1の開口部に接するように幅18～37cmの板が並んで3枚検出され、長いもので110cm残っている。方向はほぼ南東壁に平行する。同方向の板材はP1のほぼ底面にも3枚ほどが並んで落ち込んでいる。P1の北東部には先の一群よりもわずかに北を向いた幅20～32cmの板材4枚が幅120cmの間に並び、長いものは130cmを測る。Field Cardには「根太と思われる材」を伴うとあるが、それについては不明である。また、PP1とPP2には焼けた柱の一部が残っている。材43点の樹種鑑定の結果は、1点のナラをのぞいてはすべてクリである。

〈その他〉南東壁沿いに分布する炭化材をとりのぞいたところ、灰白色粘土塊をマトリックスにして火山灰や黒色土の塊を含む土が層厚5～7cmで床面を覆っていた。先の板敷きの部分と何らかの関連をもつものであろう。その粘土が焼けているかどうかについては観察記録がないため不明である。

遺物（第235図～第237図、図版219・220・234・237・243）

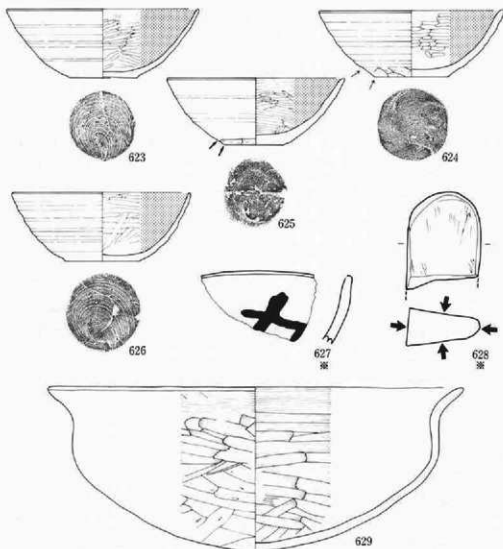
〈出土状況〉炭化材や焼土に載るような状態で土器の破片が分布していたほか、その下に検出された床面の直上やカマド本体・P1から出土している。量はいくぶん多く、土器と鉄製品・磁石・獣骨がある。図示例では626・628・635を除いては炭化材や焼土下位から出ている。

〈土器〉土師器壺が主体を占めるほか、坏・須恵器・縄文土器・埴以外の土師器がある。土師器壺はⅠ類のみで、L1・L2・L4cなどがある。坏はⅠ類が卓越する。図示例はすべてⅠ類で、B0・B1とも2点ずつがある。627は墨書を伴う破片である。そのほかの破片資料ではⅠ類29点、Ⅱ類6点があり、Ⅰ類は1点のB0を含む。須恵器は壺633以外は破片8点がある。629は¼周割の破片から図上復元したものである。色調は橙色の部分が多く、胎土は小礫を多く含み、焼成は良好である。土師器の鍋として分類した。

〈鉄製品〉環状鉄製品635は焼失に伴う焼土中から出土した。

〈磁石〉628は埋土から出土した。

〈獣骨〉図版243に掲載。北西壁中央のやや南側の壁寄りの床面から出土した。非常にもろいため、バインダーで固めたあと、土ごと切り取っている。現存長16.6cm、最大幅6.2cmである。



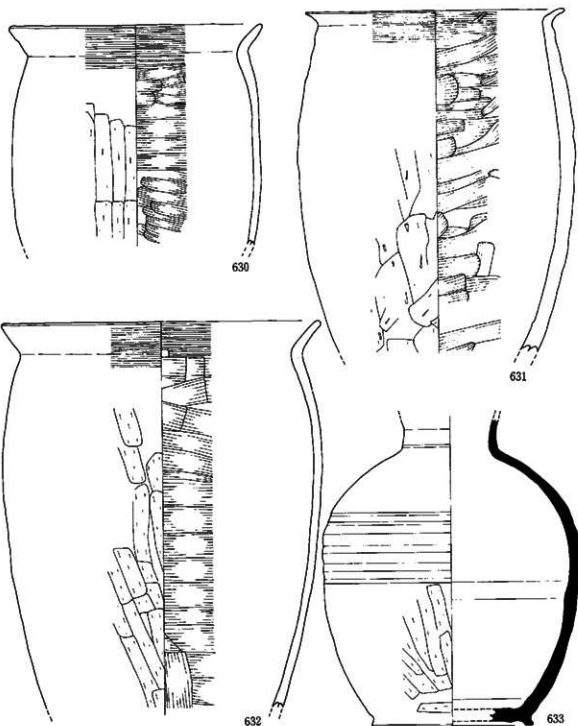
No	地 点 ・ 層 位	種 類	外 面			内 面		計 測 値 : cm			分厚	図版
			口縁部	胴 部	底 部	口 一 帯	黒色処理	口 径	器 高	底 径		
623	灰面直上・焼土上	群	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	ヘラミダナ	○	15.5	5.4	5.9	1.00	219
624	灰面直上	群	ロクロ痕	ロクロ痕	ナメズリ	群	○	14.9	5.2	5.8	1.01	
625	カマド	群	群	群	群	群	○	14.2	5.3	4.7	群	219
626	焼土	群	群	ロクロ痕	群	群	○	14.4	5.5	6.0	1.01	219
627	カマド・焼土	群	群	ロクロ痕	ナメズリ	群	○	—	—	—		220

No.	地点・層位	種類・群	外面			内面			計測値: cm			分厚	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	高さ	底径		
629	カマド・焼土	土師群	横ナデ	ナデ+ヘラミダナ	ヘラミダナ	横ナデ	ヘラミダナ	ヘラミダナ	(33.2)	13.9	—		

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大): mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
629	焼土	磁石	(52)	39	23	(46.1)	細砂質凝灰岩(石質凝灰岩) G. 5	小型。一端を欠失。4つの使用面。	

$$S = \frac{1}{2} (\text{底}) \cdot \frac{1}{2}$$

第235図 HⅢ-9 住居跡出土遺物(1)



No	地 点・ 層 位	器種・ 器種	内 面						計 測 値 : cm		分類	図解
			外 面		内 面		口 縁 部		口 縁 部	口 縁 部		
630	カマド・灰面直上	土師器	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	20.3	(17.5)	—	1L1
631	カマド灰面土	土	—	—	—	—	—	—	(25.7)	(27.2)	—	1L4
632	カマド灰面土中	土	—	—	—	—	—	—	(25.6)	(30.8)	—	1L2
633	灰土・灰面直上	灰土器	—	ロクロ灰ナデ	—	—	ロクロ灰	ロクロ灰	—	(24.4)	(13.0)	234

第236図 HⅢ-9 住居跡出土遺物(2)

$S = \frac{1}{1}$

種名の同定はしていない。

まとめと所属時期

平安時代に分類できるが、小群には区分できない。

H III—10住居跡

遺構（第238図、図版129・130）

〈検出状況・重複関係〉現代の削剝がいちじるしく、最下部が残るだけである。重複する遺構はない。

〈平面形〉わずかに隅丸の長方形 〈規模〉 $2.7 \times 3.2\text{m}$ 〈床面積〉 7.7m^2 〈主軸方向〉S—64°—E

〈埋土〉最下部が観察できたにすぎないが、黒褐色土・黒色土が卓越する。粒状～小塊状の灰白色浮石や褐色土が散在する。

〈壁の状態〉最下部が残るだけである。〈壁高〉4～9cm 〈壁溝〉西壁の約 $\frac{1}{2}$ と北壁にあるが、断続的である。北壁際は小ピットを内部に伴う。

〈床面・掘り方〉床面は非常に硬く締っていて、小凹凸がある。全体規模の掘り方を下位に伴う。

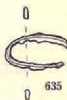
〈柱穴〉PP1やPP2が検出されたが、主柱穴になるものではない。

〈カマドの位置〉東壁中央と南隅の間 〈本体〉痕跡は火床部の上や周辺の床面上に小規模に広がるシルトにみられる。火床部は小規模で、薄層である。〈煙道部・煙出し部〉削剝され、先端部寄りの部分を失っている。緩かに傾斜して上がっている。

〈付属施設〉ピットP1がカマド左隣りにあり、PP1に切られている。平面形はほぼ円形で、やや浅い。埋土は住居跡掘り方埋土に類似し、焼土塊や炭化物を含む。貼り床の有無は確認できなかったが、カマド崩壊土下位にあったことや埋土・位置からは本遺構に伴伴するピットで、意図的に埋め戻されたことが推定される。

遺物（第239図、図版230・240）

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、量は少ない。埋土を中心に、カマド本体・P1・掘り方埋土から出土している。土器と土製品・石器がある。

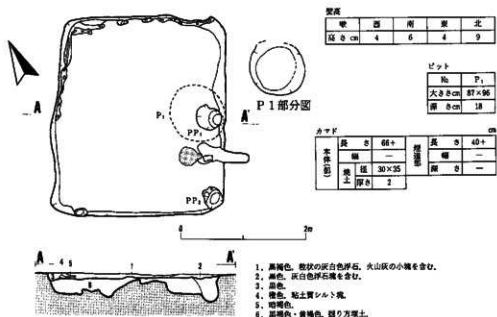


〈土器〉土師器甕がほとんどを占め、坏はI類1点、縄文土器は3点の破片があるにすぎない。土師器甕は図示例も含めてすべてI類で、L2などがある。636は胴部に化粧粘土が塗られ、調整がみえない部分がある。木葉底は636以外に1点である。

No.	地点・単位	器種	大きさ(最大):mm			数量	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
635	焼土中	破片鉄製品	(36)	18	2	(3.1)	一部を欠落、素材の厚は5.5mm.	237

第237図 H III—9 住居跡出土遺物(3)

S = $\frac{1}{4}$
634 欠番



第238図 HⅢ—10住居跡実測図

〈土製品〉 土玉637はカマド埋土から出土している。

〈その他〉 敲石1点がある。

まとめと遺構の時期

カマドから出土している636・637は本遺構に共伴または時間的に近い関係にある。それらや埋土の状況から、平安時代Ⅱ群にいちおう分類する。

HⅣ区

HⅣ—6住居跡

遺構（第240図。図版130・131）

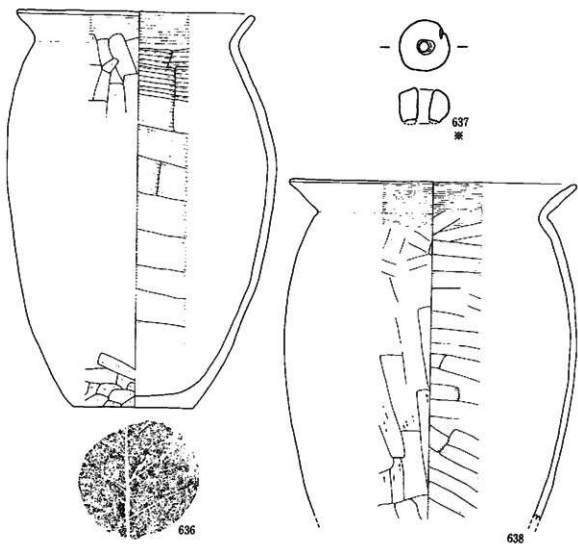
〈検出状況・重複関係〉 現代の削刺がいちじるしい。ほぼ床面だけが残存するが、東側の約半分は床面も浅く削られている。重複する遺構は現状ではない。

〈平面形〉 ほぼ正方形 〈規模〉 6.1×6.0～6.3m 〈床面積〉 38.0㎡ 〈主軸方向〉 S—0°—E W

〈埋土〉 削刺を受けているため、層厚2～3cmの灰白色浮石が、床面中央から北西の部分では径140×270cmの範囲、反対側の南東部では小規模に分布するほか、床面がいくぶんくぼんだ部分に堆積していることを確認できる以外は不明である。

〈壁の状態・壁高〉 削刺により不明 〈壁溝〉 伴わないであろう。

〈床面・掘り方〉 床面は東側の大半を削刺されている。残存部では中央の広い範囲が硬く締



No	地 点・層 位	数量・種類	外 径						内 径						計 測 値 : cm	分 割	図 版
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部	口 縁 部	胴 部	底 部			
636	カマド・埋土	土師器類	横ナデ	ヘラケズリ	木炭跡	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	19.8	13.4	9.6
637	カマド・埋土	土	横ナデ	ヘラケズリ	木炭跡	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	横ナデ	ヘラナデ	ナデ	23.9 (26.7)	—	—

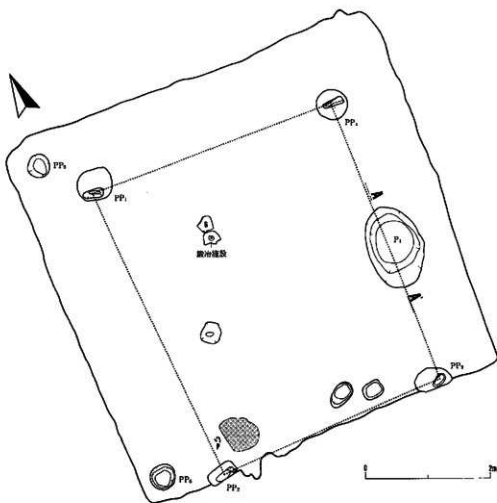
No	地 点・層 位	器 種	大 小 (最大) : cm				重量 g	特 徴	備 考	図 版
			長さ	幅	厚さ	底径				
637	カマド埋土	土器	13	13	(13)	(1.2)	—	表面わずかに欠く。孔径3mm。にびい黄褐色。縞で紋質を作り。	—	240

第239図 HⅢ-10住居跡出土遺物

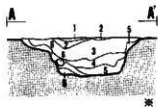
$$S = \frac{1}{1} (\text{※}) \cdot \frac{1}{1}$$

っている。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉PP1～PP4の4本柱である。PP1・PP4が二つの隅から内側に入った位置にあるのに対し、PP2・PP3はカマドが設置された南壁際にある（Ⅲa型）。4個は柱痕跡と掘り方



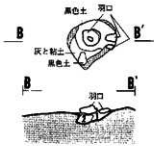
No	P ₁
大きさcm	65×135
深さcm	40



1. 黒褐色。灰白色浮石混。
2. 灰白色。灰白色。浮石。
3. 黒褐色。
4. 黒褐色。火山灰の小塊を含む。
5. 黄褐色。塊状の黒色土。暗褐色土を含む。
6. 黒褐色。火山灰の小塊を含む。

柱穴

No	大きさcm	深さcm	柱径cm
PP ₁	48×55	40	14×32
PP ₂	23×48	33	11×32
PP ₃	35×60	42	13×25
PP ₄	50×50	21	11×32
PP ₅	35×37	19	
PP ₆	40×40	31	



1. 黒色。
2. 褐色。灰中浮石を含む。

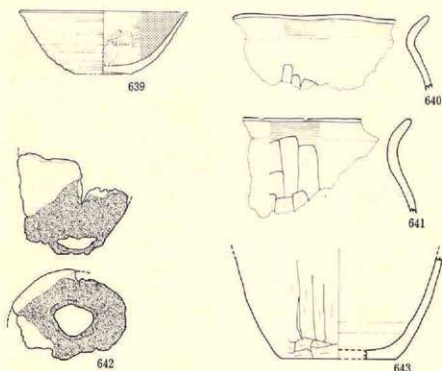
$$S = \frac{1}{40} (\text{米})$$

第240図 HIV-6 住居跡実測図

が識別でき、柱穴痕の平面形は長方形や楕円形である。北西隅と南西隅にある PP5・PP6 の位置づけは不明である。

〈カマドの位置〉南壁中央と南西隅の中間 〈本体〉構築土の一部が火床部を覆っていたが、小規模なうえに薄層である。火床部は大規模で、良く焼けている。〈煙道部・煙出し部〉削剝のため、存在の有無も含めて不明である。

〈付属施設〉床面中央からやや東寄りに貯蔵穴 P1 がある。平面形は不整な楕円形で、壁は下半がほぼ直立、上半が外傾する。埋土は、灰白色浮石の薄層が上部にあり、その下位は黒褐色土が卓越し、黄褐色土が最下部に認められる。浮石は床面上に分布するものと同一である。



No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値：cm			分層	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口縁部	高さ	口径		
639	カマド・床面	坏	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	ヘタミガキ	○		(13.5)	5.0	(4.6)	1層	

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値：cm			分層	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口縁部	高さ	口径		
640	カマド	土師器様	横ナデ	ヘタケズリ	—	横ナデ	ヘタケズリ	—	—	—	—		
641	掘り方埋土	テ	テ	テ	—	テ	テ	—	—	—	—		
643	カマド	テ	—	テ	ナデ	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	8.1	(9.2)		

No	地点・層位	器 種	大きさ(最大)：mm			重量g	特 徴 ・ 備 考	図版
			長さ	外径	底径			
642	掘出施設	輪郭口	(84)	(95)	51	(137.0)	片断先端部を含む。先端へ細くなる。破断し、発掘〜ガラス質に硬化。	249

第241図 HIV-6 住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{8}$$

したがって、住居の埋没過程とP1のそれにはいくぶん時間的な間隙があることが考えられる。

中央からわずかに北西へ寄った床面に、不整形円形ピットがある。径が19×21～26cm、深さ7cmである。内部を充填する土は多量の炭化物を含む漆黒土で、中央からはフィゴ羽口(642)が炉側先端部を下にして突き刺さるような状態で出土している。壁の上部は焼けている。また、粒径22cmの扁平な亜角礫がピットと接して北側の床面に密着していた。ピットは鍛冶にかかわる施設と考えられる。

遺物(第241図、図版240)

〈出土状況〉 上述のような検出状況のため、少量が、カマド本体を中心に、床面・掘り方埋土・PP2・鍛冶施設から出土しているにすぎない。土器と轆の羽口がある。

〈土器〉 土師器甕が大部分を占め、縄文土器・坏の順に多い。土師器甕はI類が卓越し、II類は643以外は破片で2点である。643は色調が橙色の硬い土器で、内面に黒斑を伴う。坏は639以外の破片8点もI類で、639のほかにもB0が1点ある。

〈轆の羽口〉 642は炉側先端部を含む破片である。

まとめと遺構の時期

検出状況からみて、掘り方埋土以外から出土したものの多くは共伴または時間的に近い関係にあるであろう。床面を覆う灰白色浮石層の存在からは平安時代I群に分類できる。

I III区

I III-1 住居跡

遺構(第242図・第243図、図版132・133)

〈検出状況・重複関係〉 調査区中央にある浅い埋没谷の縁近くに検出された。重複する遺構はない。

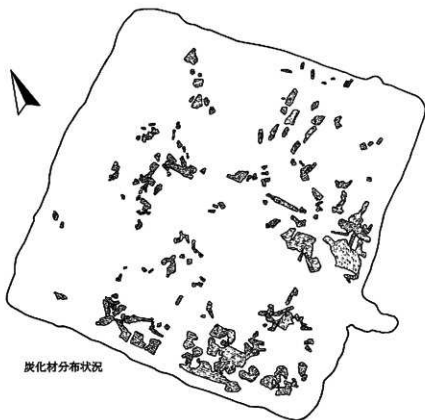
〈平面形〉 わずかにいびつな方形 〈規模〉 5.1～5.4×5.3～5.5m 〈床面積〉 25.9㎡ 〈主軸方向〉 S-44°-E

〈埋土〉 暗褐色～黒色の土層群で構成される。火山灰塊は中・下部の暗褐色土に含まれるが、量的には多いとはいえない。また灰白色浮石や黄褐色火山灰は認められない。

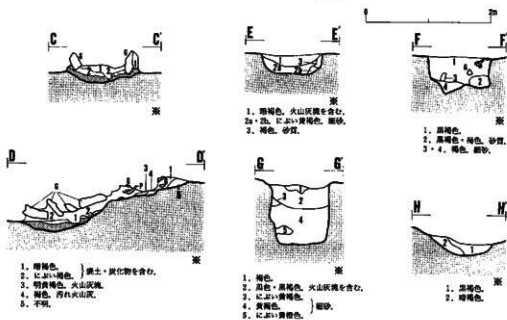
〈壁の状態〉 直立～わずかに外傾 〈壁高〉 31～55cm 〈壁溝〉 北西壁の西隅寄りにわずかに伴う。

〈床面・掘り方〉 カマド前面から床面中央にかけての範囲は非常に硬く良く締り、小凹凸がみられる。周辺部は軟かい。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉 PP1～PP4の4本柱である。PP1とPP2は隅から内側に入った位置にあり、PP3とPP4はカマドが設置された南東壁際にある(Ⅲa型)。配置形は台形状である。柱痕跡と掘り方が識別でき、柱痕跡の平面形は円形・長楕円形・方形である。PP5～PP8の4個は掘り

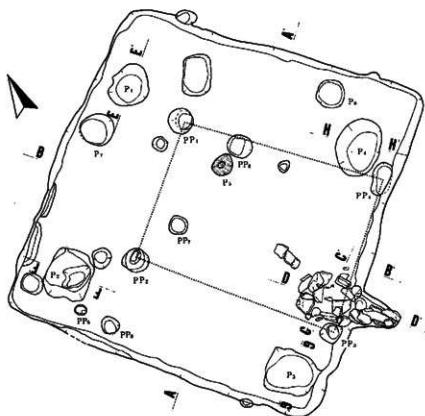


炭化材分布状況



第242図 I III-1 住居跡実測図(1)

$S = \frac{1}{40}$ (米)



柱穴

No	大きさcm	深さcm	柱痕跡
PP ₁	40×41	62	23×25
PP ₂	35×40	89	15×24
PP ₃	34×38	78	19×21
PP ₄	26×30	50	20×21

カマド

本体(土)	長さ	幅	深さ
	92	75	
		74	7

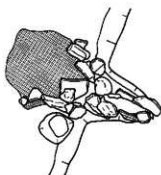
カマド

長さ	幅	深さ
54	62	20

2m



1. 黒色・黒褐色。
2. 黒褐色。
- 3a・3c. 灰褐色。
- 3b. 黒色。
- 4a・4c. 黒褐色。
- 4b. 暗褐色。
5. 黒褐色。
6. 暗褐色。
7. 灰褐色。炭化物を少量含む。
- 8・9. 黒褐色。
10. 黄褐色～暗褐色。掘り方礫土。



カマド部分図

壁高

壁	北西	南西	南東	北東
高さcm	41	31	48	55

ビット

No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
大きさcm	57×72	70×80	78×82	70×90	36×38	45×45	50×55	
深さcm	21	30	66	16	12	44	51	
備考								壁下層下

第243図 IⅢ-1 住居跡実測図(2)

$$S = \frac{1}{40} (\text{東})$$

方面で検出された柱穴状ピットである。

〈カマドの位置〉南東壁中央からやや南西寄り〈本体〉側壁の芯材・天井部には多数の礫が使用されていたと考えられるが、大部分は崩壊・移動し、粘土質シルトとともに火床部の上を覆っている。原位置を保つのは両側壁のつけ根と右側壁に埋設された数個である。粒径は10～48cmで、シルト岩やレキ岩を少数含む。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。本体同様、粒径15～34cmの礫をもちいて側壁を作るが、原位置にあるものは少ない。底面はゆるやかに傾斜して上がり、先端に達する。煙出し部に伴う施設は確認できなかった。

〈付属施設〉四隅からわずかに入った位置にP1～P4が1個ずつある。平面形は不整円形・楕円形・不整形で、深度にはバラつきがある。P4は浅皿状ピットである。P6は円筒形ピットでP4の北にある。以上の5基は同時存在と考えられ、P1～P4は貯蔵穴であろう。P7・P8は掘り方面で検出された。P7はP1の西隣りにある円筒形のピットである。P8はP1の東隣りにあり、長方形の深いピットである。本遺構との関連は埋土についての記載がなく不明である。P5は床面中央からわずかに北寄りに位置する。径30×38cmの小円形の浅皿状ピットである。埋土は上位から明黄褐色土・黒色土・黒褐色土の順であるが、浅い。粒径3cm土の焼けた破砕礫2個が出土している。底面は“地山”の砂が焼けて灰色になり、還元状態を示している。

〈焼失〉多量の炭化材が粗密はあるものの床面の全体に分布する。材にともなう形での焼土はほとんど認められないが、材をとりのぞいた床面中央が小規模に焼けている。南西壁際には現位置を保つと考えられる板材が北西～南東方向にみられる。残存状態が良く、床面にほぼ密着して検出された。幅が22・30・55cm、推定値ではあるが長さが95・100cm、厚さが3～3.5cmの板材を推定できる。そのほか、丸材も出土しているが、いずれも径7cm土である。樹種の鑑定結果は、上述の板材がクリ、他の多くもクリであるほか、ケヤキや針葉樹が一部に含まれている。

〈その他〉幅15～25cm、深さ13cmの溝がPP6の西側の壁上部から南西方向へ約3.5mほどまっすぐに伸びて消滅している。底面は自然の傾斜面にあわせ、先端部へ向って緩やかに下がっている。本遺構に伴う溝とも考えられるが、断定はできない。

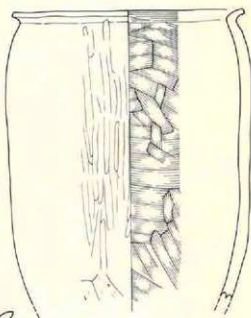
遺物（第244図～第246図、図版233・237・238・242）

〈出土状況〉埋土を中心に、床面・床面直上・煙道部・掘り方埋土・カマド本体・ピットから出土している。各種の遺物があり、量はいくぶん多い。土器と鉄製品・鉄滓・銅製品・輪の羽口・砥石・堅果類・石器がある。

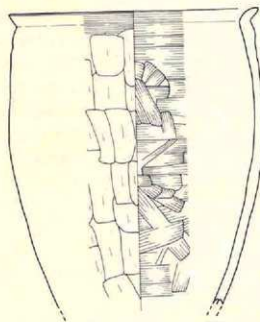
〈土器〉土師器壺が主体を占め、次いで縄文土器・坏・須恵器の順に多い。土師器壺はほぼ全部がⅠ類といってよく、Ⅱ類は1点の破片を確認できたにすぎない。Ⅰ類にはS3・M1b・



644



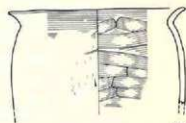
645



646



647

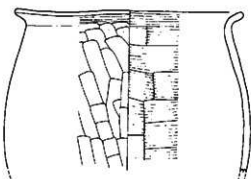


648

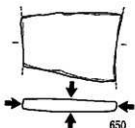
No.	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 版
			口 縁 形	胴 形	底 形	口 縁 形	胴 形	底 形	口 径	胴 高	底 径		
644	床面・灰層直上	土師器コップ形土師	ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂底	ナデ	ナデ	ナデ	8.0	9.3	6.8	233	
645	カマドノP3・埋土	土師器壺	ナデ	ナデ+ケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	18.6	(22.2)	—	114	
646	カマドノ埋込部	—	横ナデ	ヘラケズリ	—	—	—	—	20.9	(23.5)	—	—	
647	床面直上・P2埋土	—	—	—	—	—	—	—	12.5	(4.7)	—	153	
648	掘り方埋土	—	—	—	—	—	—	—	14.2	(7.8)	—	1M1	

$$S = \frac{1}{2}$$

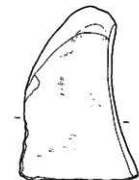
第244図 I III-1 住居跡出土遺物(1)



649



650



651

L4c などがある。坏はすべて破片で、I類7点、II類1点があり、I類はB02点を含む。須恵器は壺の破片3点である。そのほかには土師器のコップ形の土器644があり、底部は砂底である。

〈鉄製品・鉄滓・銅製品〉各種の鉄製品が壁際の床面・床面直上を主に、ピットや埋土から出土している。器種と点数は、釘が3点、刀子と目釘式手鎌・挟着式手鎌が各2点、鎌と鉋が各1点、器種不明が5点で、合計16点である。不明のなかには釘?2点が含まれている。そのうち、充形あるいはそれに近いのは3点の釘を含め7点、いくぶん破損部分が多いのが2点、残る7点は破片である。652・654・655・657は南西壁際の床面・床面直上から出土し、そのうち652と654は西隅に隣接して存在していた。659は北西壁中央の壁際の床面、660は北東壁中央の壁際の床面直上、658はP3のカマド側の開口部に接する床面、653はP2の底面直上、656はカマド右隣りの埋土中部からの出土である。そのほか、床面・P2埋土から1点ずつ、埋土から4点が出ている。3001は654と同一器種で、挟着式手鎌として分類した。

鉄滓は1個17gが埋土から出ている。銅製品は厚さ1mmの薄い板状の小破片で、P3埋土からの出土である。

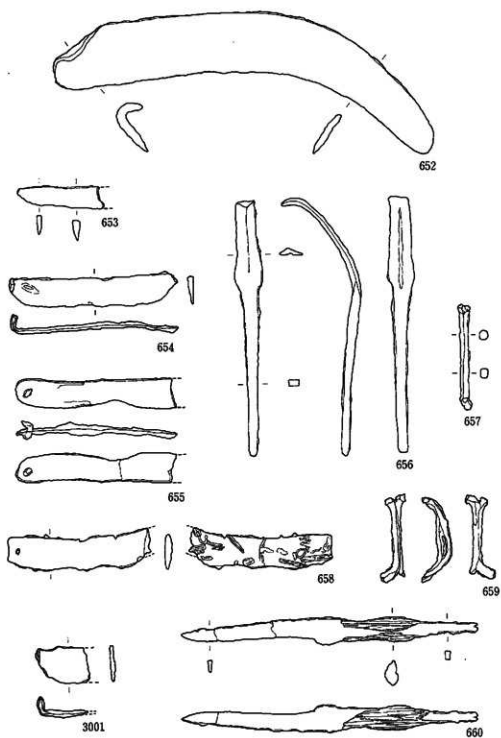
〈磁石〉651は床面、650は煙道部埋土からの出土である。

No	地点・部位	種類・器種	外		内		計		分類	図版
			口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部		
649	カマド基壇部・埋土	土師器	横ナデ	ヘラナデ	横ナデ	ヘラナデ	横ナデ	ヘラナデ	18.3 (12.7)	—

No	地点・部位	種類・器種	大きさ(最大):mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
650	煙出し部	磁石	(25)	54	8	(22.1)	白色細粒凝灰岩、G17	両端を欠失、非常に薄い(4面を使用)。	—
651	床面	?	91	81	24	158.9	細砂質凝灰岩(石質凝灰岩)、G5	笠形。4面を使用するが、右面は一部欠失。	242

第245図 IⅢ-1住居跡出土遺物(2)

$$S = \frac{1}{2}(\text{長さ}) \times \frac{1}{2}$$



$S = \frac{1}{2}$

第246圖 I III-1 住居跡出土遺物(3)

No	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	特徴・備考	図表
			長さ	幅	厚さ			
652	床面直上	鉄	206	9.3	4	82.8	定形。基部の折り返しは左。	237
653	P ₂ 或面直上	刀子	(42)	(12)	4	(4.1)	刀先を含む破片。	
654	床面	手鐲	(91)	16	2	(7.2)	両端をわずかに欠失。両端を折り返していると推定。断面二等辺三	237
655	床面直上	目釘式手鐲	(88)	11~17	2	(7.5)	一端を欠失。目釘は一部残存し、断面が折れ曲がっている。	237
656	埋土中部	鉄	137	身:14	身:3	19.0	定形。身は外反。鈍明瞭。裏面は幅2mmの溝。茎は5~7×88mm	238
657	床面	釘	(56)	4.5	5	(3.7)	断面欠失の釘と推定。	
658	床面	目釘式手鐲	(76)	16	2	7.1	一端を欠失。刀部凸刃部。目釘穴1個。	237
659	床面	釘	48	5	8	4.0	角釘。本が巻着。	
660	床面直上	刀子	158	13	4	15.5	定形。幅は刀元の身幅。両は明瞭。両面平造り。本質が両面に付着。	238
3001	埋土下部	手鐲	(29)	20	2	(3.2)	一端を含む破片	

第246図 2 I III-1 住居跡出土遺物 (4)

〈その他〉クルミ1点が埋土から出土している。そのほかには石鏃や石鏃・磨石Ⅱ類が1点ずつある。

まとめと遺構の時期 焼失住居であることを考慮に入れると、掘り方埋土から出土している648を除いた図示例の土器や652~655・657~660の鉄器・651の砥石は本遺構に共伴または時間的に近いものと考えてよいであろう。2種類の火山灰を埋土中に欠くことや出土遺物から、平安時代Ⅶ群に分類する。

I III-2 住居跡

遺構 (第247図、図版133・134)

〈検出状況・重複関係〉灰白色浮石が住居跡平面の中央に円形に広がることを検出面において確認できた。重複するI III-56ビット (平安時代) には北東隅を切られている。

〈平面形〉隅丸の長方形で、とくに南東隅が丸味をおび、東壁は凸出である。〈規模〉3.6×4.2m 〈床面積〉12.4m² 〈主軸方向〉N-81°-E

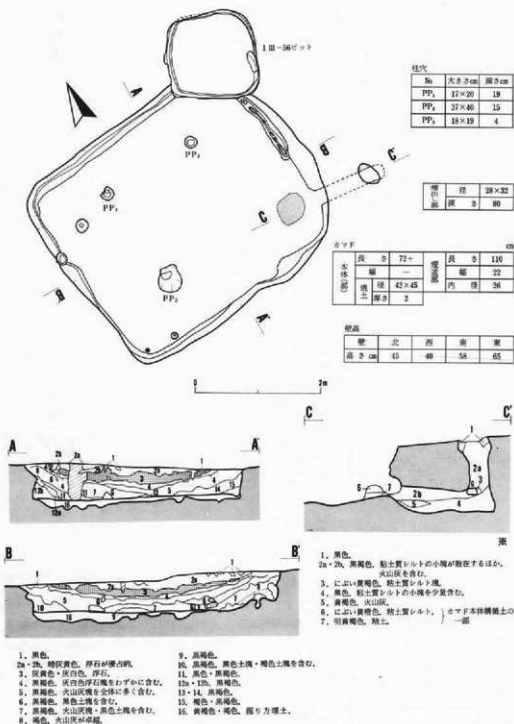
〈埋土〉上部3層の灰白色浮石層は単層である。最大層厚は20cmである。その上位の2a・2b層も多量の浮石塊を含む。下位は黒褐色土・黒色土が優占し、火山灰塊や黒色土塊を全体に含む。

〈壁の状態〉直立~外傾。部分的に凹凸がみられる。〈壁高〉40~65cm 〈壁溝〉北側約半分に伴う。幅10~20cm、深さ4~10cmである。

〈床面・掘り方〉カマドを含む東側約半分の床面は非常に硬く締っている。そのほかはいくぶん軟かい。掘り方は東壁寄りの部分には認められない。

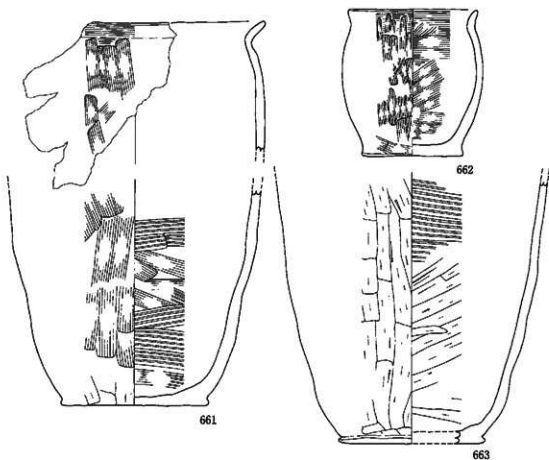
〈柱穴〉PP1~PP3の3個が隅から内側へ入った位置にある。仮に柱穴とすると配置的にはもう1個がカマド前面に存在することが考えられるが、検出できなかった。PP1~PP3の大きさや深さからみて、主柱穴とするには疑問がある。

〈カマドの位置〉東壁の南東隅寄り 〈本体〉崩壊がいちじるしい。火床部上を粘土質シルトと1個の亜角礫が覆っているが、量的に少なく小規模である。火床部の層厚はきわめて薄い。〈煙道部・煙出し部〉くり抜き式である。急傾斜で下がったあとはほぼ水平に伸びて煙出し部



第247図 I III-2 住居跡実測図

S = $\frac{1}{40}$ (素)



No.	地点・層位	数量・器種	外 面						内 面						計測値: cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
661	断面直上・埋土	土師器類	横ナデ	ナデ×ケズリ	ヘラケズ	横ナデ	ナデ	ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	—	—	—	—	—	—	IIa	
662	掘り方埋土・カマド	〃	〃	ヘラナデ	木葉底	〃	ヘラナデ	〃	ヘラナデ	〃	ナデ	(10.4)	11.7	8.9	152	230			
663	埋土部・カマド・埋土	〃	—	ヘラケズリ	ナデ	—	横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	—	—	—	(20.8)	(11.7)			

第248図 I III-2 住居跡出土遺物

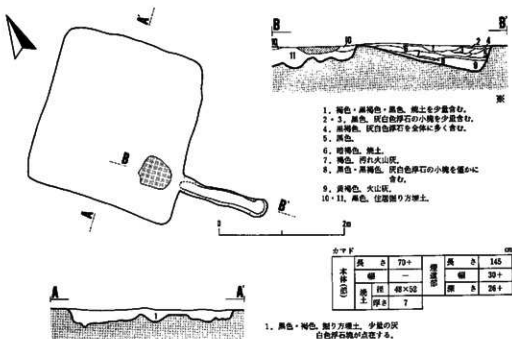
$S = \frac{1}{4}$

に達する。天井部や側壁は良く焼けている。

〈付属施設〉平面が不整長方形気味のやや小さく浅いビットが壁をえぐり込むような形で南壁の中央からわずかに東寄り位置にあることが Field Card に記載されている。実測図に記入がなく、大きさや深さは不明である。同様の例はD III-4 住居跡ほかにもみられる。相伴するビットであるが、性格については不明である。また、垂角礫を主にした大小の礫26個が住居中央の広い範囲の埋土下部から床面にかけて分布している。粒径は10～45cmとバラつきがある。

遺物（第248図、図版230）

〈出土状況〉灰白色浮石の上位からは土師器壺I類13点と縄文土器1点の破片が出土しているだけで、主体を占めるのはその下位からのものである。しかし、量はあまり多くなく、埋土



第249図 I III-3 住居跡実測図

$S = \frac{1}{40}$ (米)

下部のほか、床面直上～床面・カマド本体・掘り方礫土・煙道部からの出土である。土器と堅果類がある。

〈土器〉土器器臺が大部分を占め、それ以外には坏Ⅰ類4点、縄文土器7点の破片があるにすぎない。土器器臺は図示例も含めてすべてⅠ類で、S2・L2などがある。また砂底の破片1点がある。

〈その他〉クルミ1点がカマド本体から出ている。

まとめと遺構の時期

灰白色浮石が埋土に層状に存在することから、平安時代Ⅰ群に分類する。浮石層下位から出ている661や663は本遺構と共伴あるいは時間的に近い関係にあることが考えられる。

Ⅰ III-3 住居跡

遺構 (第249図、図版134・135)

〈検出状況・重複関係〉現代の削刺がいちじるしく、ほぼ掘り方が残存するだけである。床面はカマドの前面にわずかに残っているにすぎない。したがって、固有の埋土や壁については不明である。重複する遺構は現状ではない。

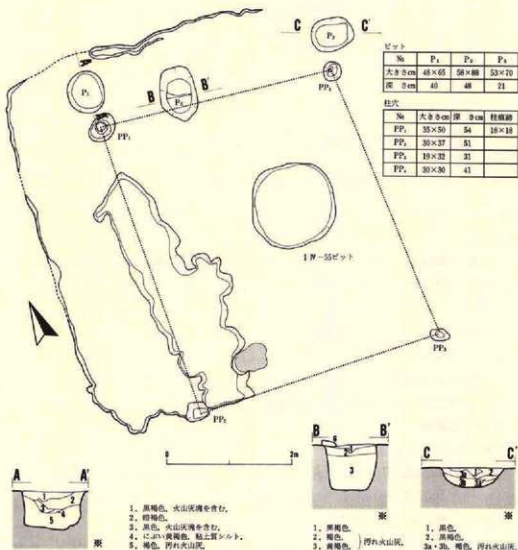
〈平面形〉隅丸方形 〈規模〉2.3×2.6m 〈床面積〉6.4m 〈主軸方向〉S-48°-E

〈壁溝〉伴わない可能性が大きい。

〈床面・掘り方〉床面については上述した。全体規模の掘り方を下位に伴う。掘り方埋土には粒径10～30mmの灰白色浮石の塊が点在する。

〈柱穴〉検出されていない。

〈カマドの位置〉南東壁中央と南隅の中間 〈本体〉火床部とその上を覆う層厚2～3cmの粘土質シルトが残るにすぎない。火床部は良く焼けている。〈煙道部・煙出し部〉上部を削剥されているため形態は不明である。埋土は黄褐色～黒色の多くの層で構成され、上部や下部の一



第250図 I IV-4 住居跡実測図

部に灰白色浮石塊を含む。底面は緩やかに傾斜して下がっている。

遺物

〈出土状況〉 上述のような検出状況のため、量は少なく、土師器甕Ⅰ類9点と坏Ⅰ類2点の破片が床面から、縄文土器片1点が掘り方埋土から出土しているだけである。土師器甕には砂底1点がある。

まとめと遺構の時期

掘り方埋土に灰白色浮石を含んでいることから、平安時代Ⅲ群に分類する。

ⅠⅣ区

ⅠⅣ-4 住居跡

遺構（第250図、図版135・136）

〈検出状況・重複関係〉 削剝がいちじるしい。東側約 $\frac{1}{2}$ は掘り方も含めて削剝され、西側は掘り方埋土が残るにすぎない。正確な平面形や規模・床面積は不明であるが、4個が残る柱穴やP3をもとに推定できる。埋土や壁の状態・壁高・壁溝については不明である。重複するⅠⅣ-55ピット（時期不明）の埋土上部は本遺構の掘り方埋土であり、ピットを切っていることが確認できる。

〈平面形〉 ほぼ正方形 〈規模〉 6.0×6.6m 〈床面積〉 39.0㎡ 〈主軸方向〉 S-8°-W
〈柱穴〉 PP1～PP4の4個が検出された。PP1・PP4は隅から内側に入った位置にあるものと推定でき、PP2・PP3の2個はカマドが設置された南壁際にある（Ⅲa型）。配置形はややいびつな長方形である。

〈カマドの位置〉 南壁中央からやや西寄り 〈本体〉 火床部下部が残るだけである。層厚は4cmである。〈煙道部・煙出し部〉 存在の有無も含めて不明である。

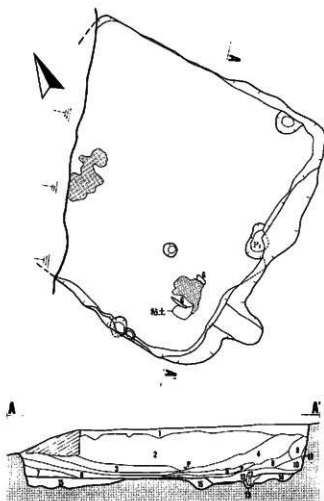
〈付属施設〉 P1～P3の3個が共存することが考えられる。3基は埋土に共通性があり、P1・P3は下半、P2は大部分がⅣ層上・下部起源の汚れ火山灰や浮石である。平面形は、P1が楕円形、P2・P3が不整な方形あるいは凸辺長方形形状である。P1・P2が円筒形の断面を示すのに対し、P3は浅皿状に近い。3基の時間的な先後関係は貼り床の有無が確認できないため、不明である。

遺物

〈出土状況〉 上述のような検出状況のため、量は少なく、土師器甕Ⅰ類9点と坏Ⅰ類1点の破片がP3から、土師器甕6点と坏Ⅰ類1点の破片・鉄滓1個8㍱が掘り方埋土から出土しているにすぎない。

まとめと遺構の時期

平安時代の遺構であるが、小群の分類はできない。



カマド					cm
本体 (部)	長	さ	88+	奥	さ
	幅		58	幅	57
	深		48×58	深	47
	厚	さ	2		

竈高

壁	高さcm
西	73
南	69
東	51

ピット

No	P ₁
大きさcm	56×不明
深	さcm 12

- 1・2. 黒色。
3. 黒色。黒褐色。
4. 黒褐色。 } 少量の灰白色厚石の小塊が
5. 黒色。 } 散在する。
6. 黒褐色。 黒色。炭化物を含む。
7. 黒褐色。
8. 灰色。
9. 黒褐色。 } 少量の灰白色厚石の小塊が散在す
10. 灰色。 } るほか、炭化物を含む。
11. 黒褐色。
12. 灰黄色・明黄褐色。粘土質シルト。
13. におい黄褐色。汚れ火山灰。
14. におい黄褐色・褐色。 } カマド本体附帯土の一部。
15. 明黄褐色～黒褐色。 } カマド構成線の周り方埋土。

第251図 JⅣ-3 住居跡実測図

$$S = \frac{1}{60}$$

JⅣ区

JⅣ-3 住居跡

遺構 (第251図。図版136・137)

〈検出状況・重複関係〉北西方向へ下がる若干の緩斜面に作られている。ひとつの隅を含む北西部は現代の削削を受け、消失している。重複する遺構は現状ではない。

〈平面形〉 隅丸の台形状と推定。南壁にくらべると、消失している北壁がいくぶん短かいものである。〈規模〉 4.2×4.4m 〈床面積〉 15.4㎡ (推定) 〈主軸方向〉 S—33°—E

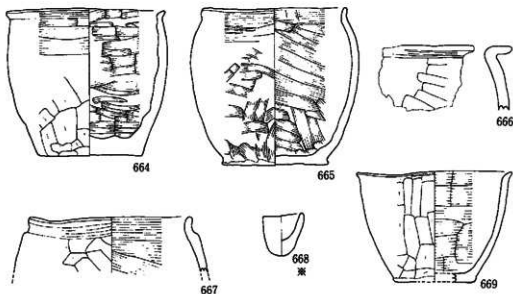
〈埋土〉 黒褐色土・黒色土が卓越する。灰白色浮石の小塊が西壁寄りの部分に主に含まれるが、少量である。主体を占める1・2層には同浮石は含まれない。

〈壁の状態〉 直立。南壁は上半が外傾する。〈壁高〉 51~73cm 〈壁溝〉 残存部には検出されていない。

〈床面・掘り方〉 床面は全体的に硬い。中央部から南壁寄りの一部はⅧ層火山灰を直接床面にし、それ以外は掘り方を伴う。

〈柱穴〉 残存部には検出されていない。

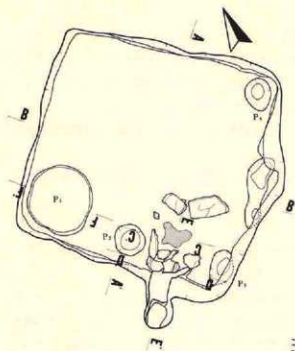
〈カマドの位置〉 南壁中央と南西隅の中間 〈本体〉 崩壊がいちじるしい。側壁の芯材の一部である粒径17cmと30cmの扁平な砂岩が火床部をはさんだ両側に埋設されている。崩壊土は粘土質シルトを主とし、最大層厚は9cmである。粒径18~26cmの扁平な亜角・亜円の砂岩5個がカマドの東西の床面の広い範囲に散在している。石質や形状・焼けている点では本体の構築材である可能性が強い。〈煙道部・煙出し部〉 壁外へ張り出すが短い。底面は急傾斜で上がって



No.	地点・層位	種類・用途	外			内			計測値: cm			分層	図版
			口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口径	口径	高さ		
664	F1埋土	土師器壺	ナデ	ナデナゲズリ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	12.7	11.7	6.2	152	230
665	埋土下部	Ⅱ	横ナデ	ナデ	Ⅱ	横ナデ	Ⅱ	Ⅱ	11.6	12.4	8.5	152	
666	埋土下部	Ⅱ	Ⅱ	ヘラケズリ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	—	—	—		
667	埋土下部	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	ヘラナデ	Ⅱ	13.0	(4.5)	—		
668	床面直上	土師器ミニチュア	—	—	—	—	—	—	2.1	2.2	丸底	233	
669	埋土上・下部	土師器壺	ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂底	ナデ	ナデ	ナデ	12.4	8.9	6.4	154	231

$$S = \frac{1}{2}(\text{米}) \cdot \frac{1}{2}$$

第252図 J IV—3 住居跡出土遺物



壁高

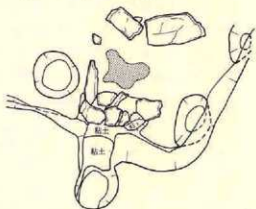
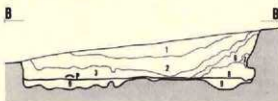
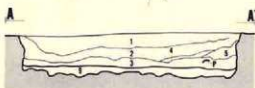
壁	北西	南西	南東	北東
高さ cm	33	54	77	46

カマド

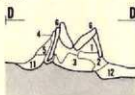
本体色	長さ	幅	高さ	厚さ	長さ	幅	高さ	厚さ
焼土	90+	87	33×48	4	77	44	32	

ピット

No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
大きさ cm	105×118	50×52	37×60	40×50	
深さ cm	55	14	17	25	



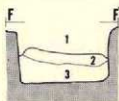
カマド部分図



1. 黒色。
2. 黒褐色。黒色土塊を全体に含むほか、炭化物が散在する。
3. 黒褐色。火山灰の小塊。多くの炭化物を全体に含む。焼土も散在する。
4. 褐色。
5. 黒色・黒褐色。炭化物を含む。
6. 褐色。
7. 褐色。汚れ火山灰。
8. 黒褐色。火山灰塊を含む。
9. 黄褐色～暗褐色。掘り方埋土。

- 1 黒褐色。火山灰や焼土の小塊を全体に含む。
2. 褐色。
3. 黒色。
- 4・5. 褐色。粘土質シルト。
6. 黄褐色。粘土質シルト。
7. 黒褐色。

- 8a・8b. 明黄褐色。シルト質粘土。
9. 黒褐色。粒状のシルト質粘土を含む。
10. 黒褐色。シルト質粘土の小塊を多く含む。
11. 褐色。黄褐色。
12. 黄褐色。住居床構築土。



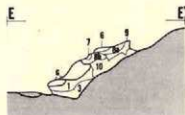
※

1. 褐色。汚れ火山灰。
2. 黄褐色。汚れ火山灰。
3. 明黄褐色・黄褐色。住居掘り方埋土。

1. 黒褐色。大小の火山灰塊を含む。
2. 明黄褐色・黄褐色。住居掘り方埋土が沈降したもの。
3. 明黄褐色。浮石質火山灰。



※



※

$$S = \frac{1}{40} (\text{※})$$

第253図 KIV-1 住居跡実測図

行く。煙出し部に伴う施設は確認されていない。

〈付属施設〉ピットP1がカマドの左側、南壁中央の床面にある。平面形が不整円形のやや浅いピットで、南側は壁をわずかにえぐり込んでいる。EⅢ-1住居跡ほかの例からみて、相伴するピットである。

カマド付近から約3 m 南々東に、方形のKN-51ピット（平安時代）がある。位置関係やKN-1住居跡の例を参考にすると、屋外に相伴するピットと考えられる。

〈その他〉径45×95cm・最大層厚6cmの不整形な現地性焼土が床面中央から北西寄りに形成されている。炉のような機能をもつものであろう。

遺物（第252図、図版230・231・233）

〈出土状況〉埋土を中心に、カマド本体・床面、床面直上・P1・掘り方埋土から出土している。量はいくぶん多い。土器と鉄滓がある。

〈土器〉土師器壺が大部分を占め、次いで数量の多い方から順に、須恵器・坏・土師器ミニチュアがある。土師器壺は図示例も含めてすべてI類で、S1bなどがある。砂底は4点の破片がある。須恵器は壺7点、坏はI類4点の破片があり、B0を1点含む。668は土師器のミニチュアである。

〈鉄滓〉1個400gが埋土から出土している。

まとめと遺構の時期

664・665・668は本遺構と相伴または時間的に近い関係にあることが考えられる。埋土の状況や出土遺物から、平安時代II群に分類する。

KN区

KN-1住居跡

遺構（第253図、図版137～139）

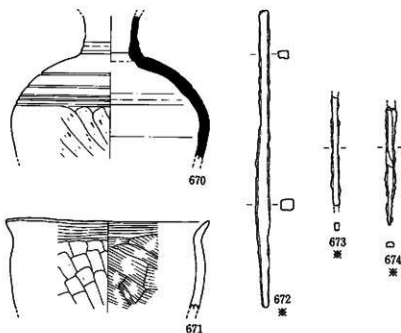
〈検出状況・重複関係〉北西方向へ下がる若干の緩斜面に作られている。残存状態は良好である。重複する遺構はない。

〈平面形〉隅丸の台形状 〈規模〉3.7～4.1×3.4～3.9m 〈床面積〉12.0㎡ 〈主軸方向〉S-39°-W

〈埋土〉黒褐色土・黒色土が卓越する。中部を占める2層は黒色土塊を全体に含む。床面を覆う3層は火山灰の小塊や炭化物を多く含む。灰白色浮石や黄褐色火山灰は認められない。

〈壁の状態〉南東壁の中央部がやや不規則に張り出す。南東壁が外傾するほかはほぼ直立して立ち上がり、上部がわずかに外傾する。〈壁高〉33～77cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面はカマド前面から中央部付近が硬く良く締っているが、周辺部はやや軟かい。全体規模の掘り方を伴うが、中央から南東壁に寄った一部は非常に浅い。



No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図 録
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	胴 高	底 径		
670	埋土・埋土下部	須弥鉢	—	ロクロナズリ	—	—	ロクロ痕	—	—	(11.3)	—		234
671	埋土	土師器	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	16.3	(6.9)	—	1M1	

No	地点・層位	器 種	大 小 寸 (最大) : cm			重量 g	特 徴 ・ 備 考	図 録
			長さ	幅	厚 さ			
672	埋土中部	鉄鍔	154	身: 7	身: 6	18.0	定形。有茎の鉄鍔式。茎部長42mm。	236
673	埋土	不明	(38)	4.5	4.9	(2.2)	舟形状の破片。	
674	P3埋土	?	(29)	4	4	(1.8)	丸形状の破片。	

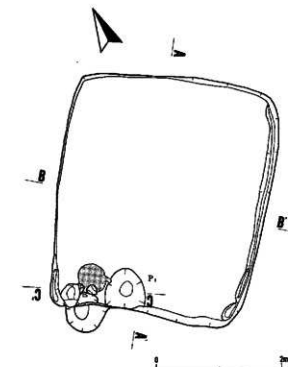
第254図 KIV-1 住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{2}(\text{底}) \cdot \frac{1}{3}$$

〈柱穴〉伴わない。

〈カマドの位置〉南西壁中央と南隅の中間 〈本体〉比較的確存状態が良い。両側壁は板状の大きな砂岩ほかを「ハ」字状に埋設し、天井石を上に渡している。それを被覆している粘土質シルトが一部に認められる。煙道部寄りの天井石1個は折れた状態で検出された。またカマド前面には構築礫2個が床面に密着している。火床部はよく焼けている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。粘土質シルトが天井部を作り、それを欠く先端部が円形の煙出し部になる。本体寄りの部分は残存状態が特に良好である。底面は急傾斜で上がって行き、よく焼けている。

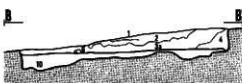
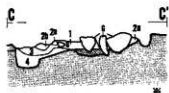
〈付属施設〉円筒形の貯蔵穴P1が西隅にある。埋土のうち、1層は住居跡埋土下部から連続するものである。2層は住居跡掘り方埋土で、上面は硬い。3層はⅡ層下部起源の浮石質火山灰である。埋土からは次のように考えることができる。3層は土師器の破片2点が入っているもののほぼ汚れない層で、P1を埋め戻したものである。その上部を2層で埋めて床面と



壁	北西	南西	南東	北東
高さ cm	8	34	37	10

ピット	
N ₁	P ₁
大きさ cm	55×63
深さ cm	24

カマド				ク		
本体部	長さ	65+		煙道部	長さ	42
	幅	80+			幅	63
	土	性	40×42		深さ	12
	厚さ	6				



1. 黄褐色。粘土質シルト。焼土を含む。
- 2a・2b. 1. 黄褐色。粘土質シルト。2bは焼土を含む。
3. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を散ら含む。
4. 不明。

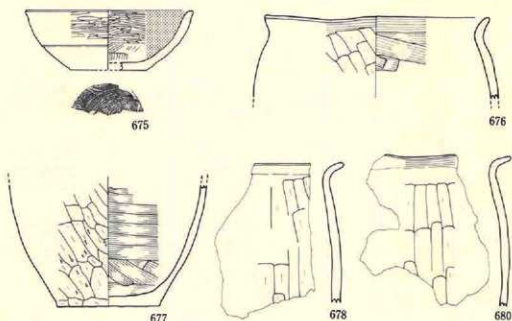
1. 黒色～黒褐色。
2. 黒色。
- 3a・3b. 黒褐色。粒状の灰白色浮石を含む。3bは浮石が多い。
4. 黒色。
5. 黒色～黒褐色。
6. 黒褐色。
7. 暗赤褐色。焼土が卓越。
8. 黒褐色。焼土を含む。
9. 黒褐色。
10. 黄褐色～黒色。住居廻り方壁土。灰白色浮石の小塊が散在する。

$$S = \frac{1}{40} (\text{東})$$

第255図 LIV-1 住居跡実測図

していたが、3層がルースであったため沈降している。したがって、P1はある時期までは共存する貯蔵穴として使われていたが、途中で廃絶され、埋め戻されたものであろう。カマドの右脇には平面形が円形のP2、左脇には楕円形のP3、東隅には円形のP4がある。ともに深度は浅い。P3は南東壁をわずかにえぐり込むように作られている。ともに共存するピットで、貯蔵穴のような機能をもつものであろう。

煙道部先端から約1 m 南西に、円筒形のKN-52ピット (平安時代) がある。位置関係やJ



No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値：cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 縁	底	底 部	口 径	器 高	底 径		
675	床面直上	坏	ヘラミガキ	コクロ模	回転糸切り	ヘラミガキ	○	—	13.5	4.7	6.1	1B	

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値：cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 縁	底	底 部	口 径	器 高	底 径		
676	床面	土師器 甕	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	(18.9)	(6.5)	—	1L6	
677	カマド跡埋土中	H	—	H	ヘラケズリ	—	H	ナデ	—	(9.7)	8.2		
678	カマド跡埋土中	H	ナデ	H	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—		
680	カマド跡埋土中	H	H	H	—	H	H	—	—	—	—		

第256図 LIV-1住居跡出土遺物

$$S = \frac{1}{b}$$

679 欠番

IV-3住居跡の例を参考にと、屋外に共伴するピットと考えられる。

遺物（第254図、図版234・238）

〈出土状況〉埋土を中心に、床面・カマド・P1・P2・掘り方埋土から出土しているが、量は多くない。土器と鉄製品・礫石器がある。

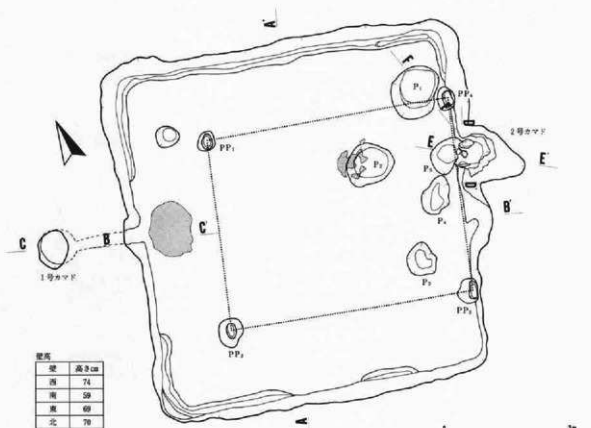
〈土器〉土師器甕が主体を占め、次いで数量の多い方から順に、須恵器・縄文土器・坏がある。土師器甕はM1bの671を含めてほぼ全部がⅠ類で、Ⅱ類は破片1点が確認できるにすぎない。坏はⅡ類の破片1点だけである。須恵器は壺670のほか、甕3点、壺1点の破片がある。

〈鉄製品〉図示例3点のほか、細く、断面が方形の破片1点がP3埋土から出ている。

〈その他〉磨石Ⅱ類2点がある。

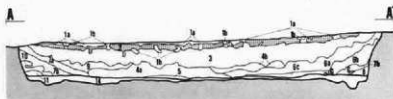
まとめと遺構の時期

残存状態が良好であるにもかかわらず、2種類の火山灰が埋土に認められないことや出土遺物

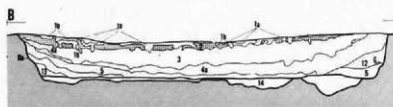


壁高

壁	高さcm
西	74
南	59
東	69
北	70



1号カマド				cm	
本体部	長さ	85+	構造部	長さ	166
	幅	—		幅	25
	高さ	65×87		内径	40
	厚さ	15			



構造部	
長さ	47×61
厚さ	90

2号カマド					cm	
本体 (部)	長 さ		構造部	長 さ (60)		
	幅			幅 89		
	高さ			内 径 75		
	厚さ					

- 1a. 黒褐色。灰白色砂石を少量に含む。
 1b. 黒色。
 2. 灰白色・灰黄色。砂石。
 3. 黒褐色。上部の一部に灰白色砂石を含む。
 4a・4b. 黒褐色。塊状の火山灰・黒色土を全体に含むほか、炭化物が散在する。
 5. 黒褐色。汚れ火山灰を全体に含む。
 6a・6b. 黒褐色。汚れ火山灰を含むほか、黒色土塊が見られる。
 7a・7b. 黒褐色。火山灰塊を含む。
 8・9. 黒褐色。
 10. 褐色。火山灰が卓越。
 11. 黒色。砂質。
 12. 黒褐色。
 13. 黒褐色。焼土を含む。
 14. 褐色～黒褐色。固り方硬土。

ピット

No	大きさcm	深さcm
P ₁	70×87	50
P ₂	65×77	不明
P ₃	45×52	13
P ₄	45×63	21
P ₅	45×60	14

柱穴

No	大きさcm	深さcm	柱底跡
PP ₁	28×30	32	17×25
PP ₂	40×46	36	15×25
PP ₃	32×39	37	13×28
PP ₄	29×38	36	16×25

第257図 OII-1 住居跡実測図(1)



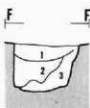
1. にぶい黄褐色。粘土質シルト。
2. 黒色。
3. 黒色。粘土質シルト塊・少量の焼土を含む。
4. 灰褐色。粘土質シルト。
- 5a・5b. 黒褐色。粘土質シルトを含む。
6. 灰褐色。
7. 暗褐色。
8. 赤褐色・黄褐色。焼土。
9. 黒色。
10. にぶい褐色。粘土質シルト。焼土を少量含む。
11. にぶい黄色。粘土質シルト。
12. 黒色。にぶい褐色。カマド本体構築土の一部。



1. 暗褐色。
2. 暗褐色。焼土を含む。
3. 黒褐色。粘土質シルト塊を含む。
4. 黒褐色。
5. 暗赤褐色。焼土。
6. 黒褐色。少量の粘土・粘土質シルトを含む。
7. にぶい黄褐色。粘土。
8. 暗褐色。焼土・粘土を含む。



1. にぶい赤褐色。焼土を含む。
2. 黒褐色。粘土質シルト。
3. 暗褐色。焼土・細砂を少量含む。
4. 黒色。焼土・灰化物を含む。
5. 明黄褐色。砂質。住居掘り方埋土。



1. 黒褐色。細砂を含む。
2. にぶい黄褐色。細砂・火山灰塊の小塊を散在。
3. にぶい黄褐色。細砂。

第258図 O II-1 住居跡実測図(2)

$$S = \frac{1}{40}$$

から平安時代Ⅶ群に分類する。

L IV 区

L IV-1 住居跡

遺構 (第255図。図版139・140)

〈検出状況・重複関係〉 北西方向へ傾斜する緩斜面に検出された。この住居跡からO III-1・2住居跡(ともに平安時代)の間約85mには住居跡が検出されていない。重複する遺構はない。

〈平面形〉 隅丸の長方形状 〈規模〉 3.1~3.3×3.8m 〈床面積〉 11.3㎡ 〈主軸方向〉 S-33°-W

〈埋土〉 黒褐色土・黒色土が卓越する。レンズ状に堆積して床面を覆う3a層やそれに類似する3b層は粒状の灰白色浮石を全体に含む。また掘り方埋土にも灰白色浮石の小塊が散在している。

〈壁の状態〉 ほぼ直立 〈壁高〉 8~37cm 〈壁溝〉 斜面上方の南東壁沿いと西隅の部分にある。幅15cm、深さ3~7cmである。

〈床面・掘り方〉 床面は軟かい。全体規模の掘り方を下位に伴い、周辺部が深い。

〈柱穴〉 伴わない。

〈カマドの位置〉南西壁の西端 〈本体〉崩壊し、残存状態は良くない。崩壊土はシルト質粘土である。右側壁の芯材である粒径15cmと32cmの角礫と亜円礫が残っている。火床部には粒径10cmの亜角礫が埋設され、支脚になる。〈煙道部・煙出し部〉平面形が半円状の浅いくぼみである。煙出し部のための施設は確認できない。

〈付属施設〉平面形が不整形の浅いピットP1がカマド左脇にある。カマド崩壊土下位に検出され、共伴する。

西隅から西へ約5mの位置に、平面形が隅丸長方形のLN-51ピット（平安時代）がある。位置関係やKN-1住居跡などの例を参考にすると、屋外に共伴するピットと考えられる。

〈その他〉小規模な焼土を伴った炭化材や炭化草本類がカマドから住居中央にかけての範囲の床面に分布するが、少量である。樹種の鑑定結果はクリと種類不明の広葉樹・カヤである。

遺物（第256図）

〈出土状況〉量は少なく、床面～床面直上・カマド本体・埋土から土器が出土している。

〈土器〉土師器壺が大部分を占め、次いで坏・須恵器の順である。L4cの676も含め、土師器壺はすべてI類である。坏はI類B0の675以外にはI類2点、II類1点の破片があり、II類はC0である。須恵器は壺？の破片1点だけである。

まとめと遺構の時期

埋土や掘り方埋土に含まれる灰白色浮石の存在から、平安時代Ⅲ群に分類する。

OⅡ区

OⅡ-1住居跡

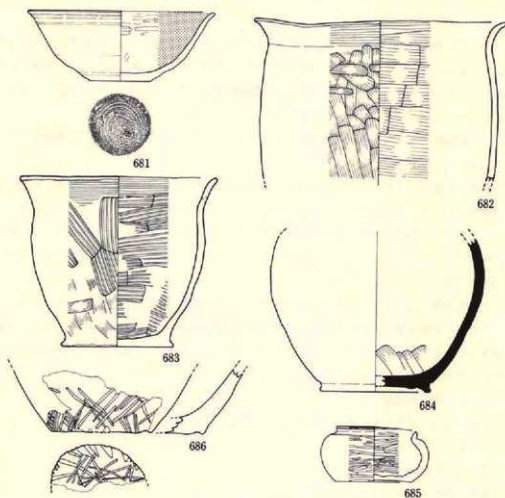
遺構（第257図・第258図、図版140・141）

〈検出状況・重複関係〉これまで記述してきた平安時代住居跡群とは占地を異にし、H面として分類した南端の狭い張り出し部頂部に立地する。OⅢ-1・OⅢ-2・PⅡ-1の各住居跡も同様である。北東端で重複する円筒形落とし穴OⅢ-52（115）ピットを切っている。

〈平面形〉隅丸の正方形に近いが、北壁に比べると南壁の長さがわずかに短い。〈規模〉5.4～5.8×5.7m 〈床面積〉26.2㎡ 〈主軸方向〉1号カマド：N-75°-W 2号カマド：S-75°-E

〈埋土〉最上部には灰白色浮石が層として堆積する。最大層厚は10cmである。その下位は褐色～黒色土で構成され、黒褐色土が優占的である。塊状の火山灰や黒色土のほか、汚れ火山灰が全体的に含まれる。

〈壁の状態〉東壁は直立する。他の壁は全体あるいは上半が外傾する。〈壁高〉59～74cm 〈壁溝〉北壁とそれがつくる二つの隅からのびる西壁・東壁の一部・南西隅を挟んだ西壁・南壁沿いの一部にある。幅は20～30cm、深さは3～12cmである。



No.	地点・層位	種類・図様	外 面			内 面			計測値: cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 部	底 部	黒色結層	口 径	胴 高	底 径		
681	埋土下部	片	ロクロ底	ロクロ底	蹄形未切り	ヘラミガキ	○		15.0	5.5	5.9	1組	

No.	地点・層位	種類・図様	外 面			内 面			計測値: cm			分級	図版
			口縁部	胴部	底 部	口 部	底 部	黒色結層	口 径	胴 高	底 径		
682	1号カマド埋通部・床面	土師器変	横ナデ	ヘラナデ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	20.3	(12.7)	—	1組	
683	1号カマド埋通部・床面	〃	〃	刷毛目+ナデ	ナデ	〃	刷毛目	ナデ	15.8	13.0	9.0	1組	230
684	埋土下部	灰青器変	—	ロクロ+ナデ	ナデ	—	ロクロ+ナデ	ヘラナデ	—	(12.3)	8.6		
685	埋土下部	土師器埋通部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	6.5	4.4	6.0	233	
686	埋土	土師器変	—	刷毛目	刷毛目	—	ヘラナデ	—	—	(4.7)	(6.0)		

第259図 OII-1 住居跡出土遺物(1)

$$S = \frac{1}{3}$$

〈床面・掘り方〉床面はカマド前面から中央部を中心とした範囲が硬く締っているが、周辺部は軟かい。全体規模の掘り方を下位に伴うが、浅い。

〈柱穴〉PP1～PP4の4本柱である。PP1とPP2は隅から内側に入った位置にあるのに対

し、PP3とPP4の2個は2号カマドが設置された東壁際にある(Ⅱ型・Ⅲa型)。配置形は長方形である。いずれも掘り方と柱痕跡が識別できる。柱痕跡の平面形は楕円形～長方形である。

〈カマド〉2基のカマドが存在し、新期を1号カマド、古期を2号カマドとする。

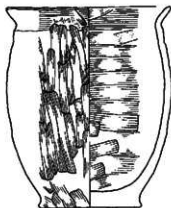
1号カマド：〈位置〉西壁のほぼ中央 〈本体〉崩壊し、構築材であるシルト質粘土が火床部の上や右側に広がっている。火床部は良く焼けている。〈煙道部・煙出し部〉くりぬき式である。底面は緩やかに傾斜して下がり、先端部がオーバーハングする。

2号カマド：〈位置〉東壁中央からわずかに北寄り 〈本体〉火床部や崩壊土がまったく認められないのは作り替えの際に破壊されたためであろう。〈煙道部・煙出し部〉壁を円筒形状に掘り込んである。上半は不規則な掘り込みで緩やかに外傾する。粒径32cm土の礫を側壁に沿って向かいあわせに立てて埋設している。その間には焼土が形成されていないことから燃焼部とは考え難い。側壁は良く焼けていて粘土が上部の一部に残る。

〈付属施設〉貯蔵穴P1が北東隅にある。平面形は隅丸の凸辺方形で壁は直立し、深度も深い。2号カマドの前面や側方にP2～P5の4個のピットがある。平面形は不整形で、深度は計測漏れのあるP2を含めて浅い。P2は内部の一部や接する住居床面が焼けている。P3からは土師器壺の破片10点が出土している。いちおう共伴するピットと考えておくが、性格については不明である。

遺物(第259図・第260図、図版230・233)

〈出土状況〉埋土下部を中心に、床面～底面直上・1号と2号カマドの煙道部・1号カマド本体・P4・掘り方埋土から出土している。それほど多い量ではない。土器・鉄滓・石器がある。



687

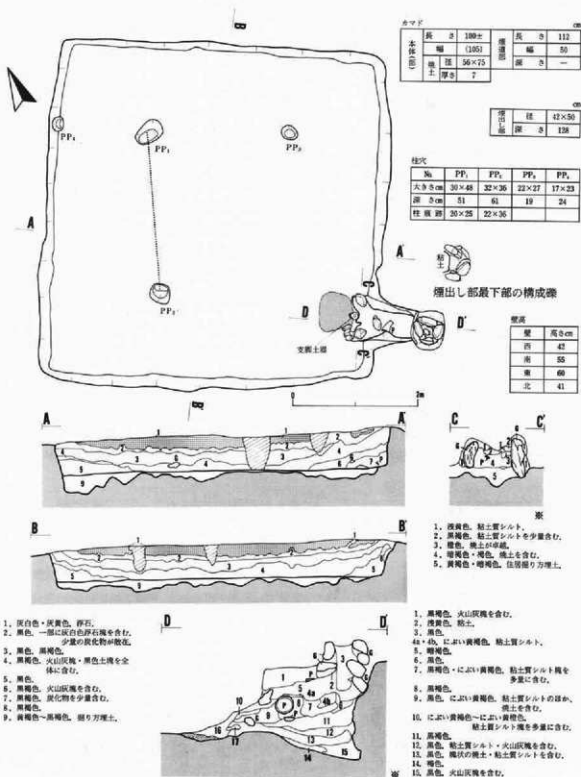
〈土器〉土師器壺が主体を占め、次いで縄文土器、須恵器・坏・土師器壺の順に多い。土師器壺は図示例も含めてⅠ類以外は確認できない。M1a・M2・L1などがある。686は胴部下端～底部にヘラ状工具による刻線を伴う。破片では砂底2点がある。坏はⅠ類B0の681以外は破片で、Ⅰ類・Ⅱ類とも2点ずつと少ない。須恵器は壺684のほか破片9点がある。685は小型の土師器短頸壺で、略球形である。内外面はていねいにヘラミガキされている。

〈鉄滓〉2点30gが埋土中部・下部から出土している。

No.	地点・層位	種類・器種	外 形					内 容					計測値：cm		分属	数量
			口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面		
687	2号カマド煙道部	土師器壺	破ナゲ	ヘラナゲ	木炭底	破ナゲ	ヘラナゲ	ナゲ				13.2	16.6	8.2	IM2	230

$$S = \frac{1}{3}$$

第260図 OⅡ-1住居跡出土遺物(2)



第261図 O III-1 住居跡実測図

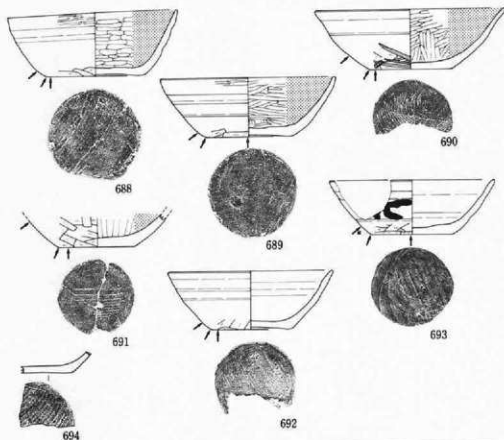
$S = \frac{1}{40}$ (率)

〈その他〉不定形石器 1点がある。

まとめと遺構の時期

灰白色浮石層が埋土最上部を覆い、遺物はすべてその下位からの出土である。住居跡は平安時代Ⅰ群に分類できる。

Ⅲ区



No	地点・層位	種類	外 形			内 面		計 測 値 : cm	分 類	図 取
			口縁部	胴部	底 部	口一底	底 部			
688	支脚(下位)	坏	ヘタミダ キ	ロタロ腹 +ヘラズ ズリ	静止糸切り+ヘラケズリ	ヘタミダキ	○	13.6 5.1 7.8	IA2	219
689	支脚(上位)	〃	〃	〃	縁部全面ヘラケズリ	〃	○	14.0 4.7 7.0	IC1	219
690	カマド	〃	ロタロ腹	〃	縁部糸切り+ヘラケズリ	〃	○	15.3 4.8 (5.5)	IB2	
691	床面	〃	—	ヘラケズ リ	静止糸切り+ヘラケズリ	〃	○	— (3.2)	6.0	IA2
692	埋土下部	〃	ロタロ腹	ロタロ腹 +ヘラケ ズリ	〃	ロタロ腹	×	13.3 4.7 (5.2)	IIA2	219
693	埋土下部・床面	〃	〃	〃	ヘラケズリ	〃	×	12.2 4.3 6.4	IIA2	230
694	埋土下部	〃	—	〃	静止糸切り+ヘラケズリ	ヘタミダキ	○	— — —	IA2	

$$S = \frac{1}{3}$$

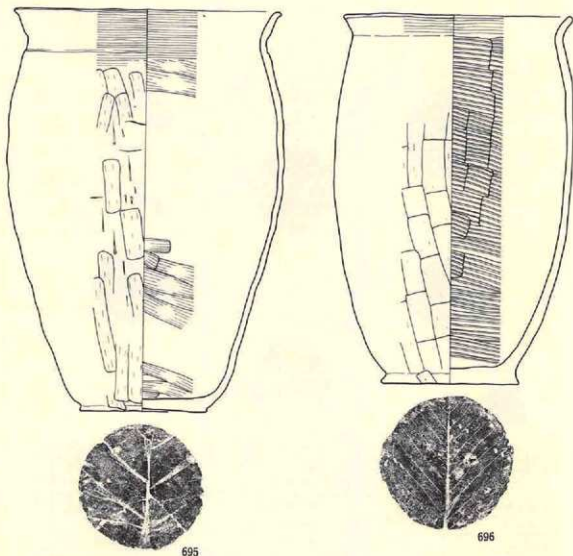
第262図 Ⅲ-1 住居跡出土遺物(1)

〇Ⅲ-1 住居跡

遺構 (第261図, 図版141~143)

〈検出状況・重複関係〉 残存状態は良好である。灰白色浮石が円形に広がっているのが検出面で確認できた。重複する遺構はない。

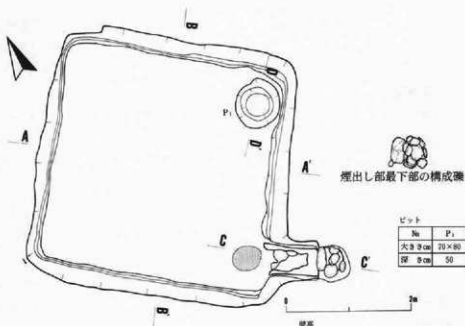
〈平面形〉 ほぼ正方形 〈規模〉 5.3×5.4m 〈床面積〉 26.2㎡ 〈主軸方向〉 S-62°30'-



No	地点・層位	種類・図様	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	胴 高	底 径		
695	検出部・カマド	土師器類	横ナデ	ナゲナズリ	木葉底	横ナデ	ヘリナデ	ナデ	21.3	32.6	10.2	IIA	230
696	検出部	ナ	ナ	ヘリナズリ	ナ	ナ	細毛目	ナ	18.4	29.5	11.0	IIA	230

第263図 〇Ⅲ-1 住居跡出土遺物(2)

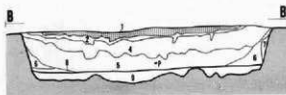
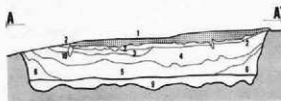
$S = \frac{1}{2}$



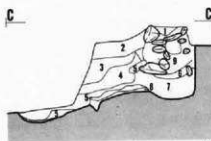
ピット	No	P1
大きさ cm	70×80	
深さ cm	50	

カマド				cm			
本体部	長さ	—	煙道部	長さ (128)	煙口部	径	45×52
	幅	—		幅	64	深さ	75
	径	45×45		深さ	—		
	厚さ	3					

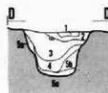
壁高	壁	西	南	東	北
高さ cm	40	71	70	68	



1. 灰白色・灰黄色、砂石。
2. 黒色・黒褐色、灰白色砂石塊を少量含む。
3. 黒褐色。
4. 黒色。
5. 黒褐色、塊状の火山灰・黒色土を含む。
6. 黒色。
- 7・8. 黒褐色。
9. 不明、住居跡より万葉土。



1. 暗褐色。
- 2・3. 黒褐色。
4. 黒色。
5. 浅黄色、シルト質粘土。
6. 灰黄色、シルト質粘土。
7. 黒褐色、焼土・シルト質粘土を少量含む。
8. 暗褐色、焼土を少量含む。
9. 不明。



1. 黒色、黒褐色。
 2. 黒色。
 3. 黒色・黒褐色。
 4. 黒色。
- 5a~5c. 黒褐色、黄褐色土塊を含む。

$$S = \frac{1}{48} (\text{米})$$

第264図 O III-2 住居跡実測図

E

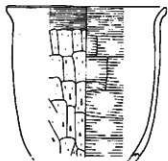
〈埋土〉灰白色浮石が層として最上部に堆積している。最大層厚は20cmで、下位から上位へ、粗粒部・細粒部・極細粒部の葉層が発達している。その下位は黒褐色や黒色の土層群で構成されている。レンズ状に堆積し、床面を覆う4層は塊状の火山灰や黒色土を全体に含んでいる。

〈壁の状態〉直立〜わずかに外傾 〈壁高〉41〜60cm 〈壁満〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は全体に硬いが、中央の広い範囲がとくに硬く、小凹凸がいちじるしい。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉PP1とPP2は隅から内側へ入った位置にある。掘り方と柱痕跡が識別でき、柱痕跡の平面形は楕円形である。PP3は先の2個とともに主柱穴を構成する位置にある。しかし、もう1個のピットが検出されていないこと、掘り方を伴わないうえにPP1・PP2にくらべて32cm以上も浅いことから、主柱穴の一部と考えることは難かしい。したがって、PP1とPP2の2主柱式と考える。

〈カマドの位置〉東壁の南隅寄り〈本体〉半分以上は崩壊しているが、煙道部寄りの部分は残存状態が良好である。粒径28cmと40cmの扁平な亜円礫各1個を埋設した上をシルト質粘土で被覆して側壁としている。その部分ではシルト質粘土で構築された天井部も良く残っている。火床部の上には、粒径13cmの扁平な亜円礫1個を置いた上に2個の坏(688・689)を重ねて伏せた状態で支脚としている。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。本体から連続する天井部が若干沈降しながらも良く残っている。底面はやや急傾斜で下がっている。本体寄りの天井部には完形の土師器の壺(696)を横に渡している。煙出し部は最下部がオーバーハングする。上半部は礫を円形〜半円状に最大4段に組んでシルト質粘土で被覆している。最上段は粒径27〜33cmの4個の礫を円形に組み、煙道部との境はその下底部に接するように長さ55cmの長大な礫を橋状に渡している。最下段は煙道部側を開け、粒径12〜27cmの礫8個を配して半円状にしている。最下部での外径は43×55cm、内径は25cmである。



遺物(第262図・第263図、図版219・220・230)

〈出土状況〉カマド本体・煙道部を中心に、埋土・床面から出土しているが、図示例以外は土師の破片少量があるにすぎない。

〈土器〉土師器壺・坏・須恵器・縄文土器がある。土師器壺は図示例も含めてすべてI類で、L2などがある。695は頸部に低い段が形成されている。695・696は木葉底であ

No.	地点・層位	種類・形状	外 径				内 径				計測値: cm	分級	図版
			口縁部	肩	胴部	底	口縁部	肩	胴部	底			
697	埋土	土師壺	横ナデ	ヘラナデ	—	横ナデ	ヘラナデ	—	—	—	12.9 (12.0)	—	[M]

$$S = \frac{1}{3}$$

第265図 OⅢ-2 住居跡出土遺物

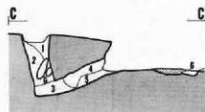
壁高

壁	高さcm
北西	36
南西	11
南東	7
北東	36



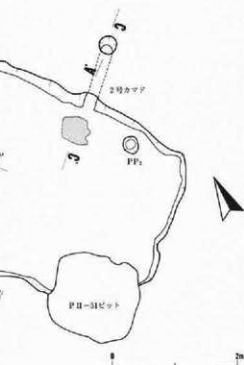
1. 灰黄褐色。粘土質シルト。
2. にぶい黄褐色。粘土質シルト。
3. 褐色。
4. 黒色。粘土が層状にみられる。
- 5a・5b. 赤褐色。粘土。増殖物。
6. 褐色。
7. 黒色。
8. 暗褐色。少量の焼土を含む。
9. 暗褐色。
10. 赤褐色。焼土を多く含む。

※



※

1. 黒色。粘土層を含む。
2. 浅黄褐色。粘土質シルトが卓越。
3. 黒色。粘土と砂を少量含む。
4. にぶい黄褐色。粘土質シルト。
5. 浅黄褐色。にぶい黄褐色。粘土。灰化した土の質を多量に含む。
6. 黒色・黄褐色。住居跡が埋土。



1号カマド

cm

本体部	長さ	60+	煙道部	長さ	115
	幅	—		幅	58
	径	37×60		径	48
	厚さ	5			

2号カマド

cm

本体部	長さ	70+	煙道部	長さ	104	煙道部	長さ	27×28
	幅	—		幅	20		幅	68
	径	40×46		内径	17			
	厚さ	5						



- 1・2. 黒褐色。
3. 黒色。
4. 褐色。汚れた山灰。
5. 褐色。部分的に焼けている。
6. 黒褐色。粘土質シルトを含む。

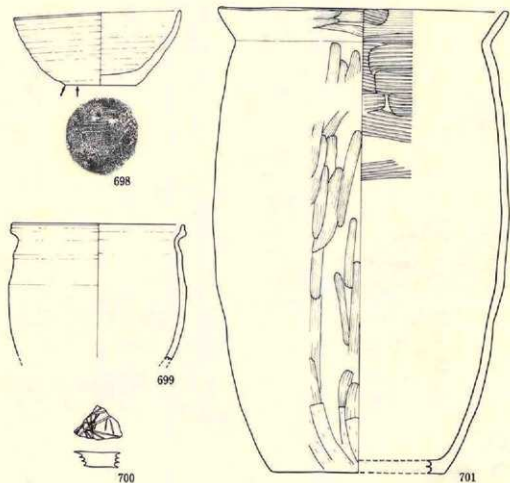
7. にぶい黄褐色。粘土質シルト。
8. 黄褐色。火山灰。
9. 黒色・黄褐色。掘り方埋土。

$$S = \frac{1}{40} (\text{率})$$

第266図 P II-1 住居跡実測図

る。坏はⅠ類が多い。Ⅰ類にはA 2が4点、B 2が1点、Ⅱ類にはA 2・C 4が1点ずつある。690は底部外面に非常に浅い「メ」のヘラ書を伴う。図示例以外にはⅠ類11点の破片がある。須恵器は壺の破片2点だけである。

まとめと遺構の時期



No	地点・層位	種類・器種	外面			内面			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
698	1号カマド原遺部	坪	ロクロ痕	ロクロ痕	静止曲切り+ヘラケズリ	ロクロ痕	×	—	13.4	8.0	5.8	IIA	220

No	地点・層位	種類・器種	外面			内面			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
699	1号カマド原遺部・環土	土師器壺	ロクロ痕	刮落	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	13.9	(10.6)	—	IIIM	
700	環土	Ⅱ	—	刮落	—	ナデ	—	—	—	—	—		
701	1号カマド原遺部・本体	Ⅱ	横ナデ	ヘラナデ	—	横ナデ	刮毛目	—	23.3	36.9	(8.8)	IIc	231

$$S = \frac{1}{3}$$

第267図 P II—1 住居跡出土遺物(1)

灰白色浮石層が埋土最上部を覆い、遺物はすべてその下位からの出土である。支脚として使われていた罎688・689、煙道部の天井部に使われていた土師器甕696は本住居跡に共伴する。またそれ以外の図示例も共伴または時間的に近い関係にあることが考えられる。平安時代Ⅰ群に分類できる。

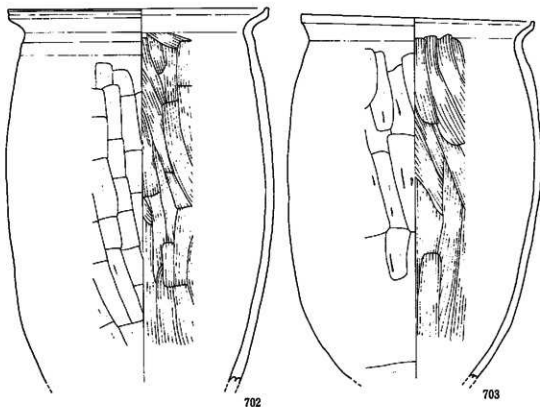
0Ⅲ-2 住居跡

遺構（第264図、図版143～145）

〈検出状況・重複関係〉 灰白色浮石が円形に分布していることを検出面で確認できた。重複する遺構はない。

〈平面形〉 わずかに隅丸の正方形 〈規模〉 4.0×4.1m 〈床面積〉 12.2㎡ 〈主軸方向〉 S—57—E

〈埋土〉 最上部は灰白色・灰黄色の浮石が層として堆積し、最大層厚は16cmである。その下



No.	地点・層位	観察・図写	外 面				内 面				計測値：cm	分限	図版
			口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部			
702	1号カマド煙道部・本体	土師器甕	ロクロ底	ヘラケズリ	—	ロクロ底	ヘラナデ	—	29.9	(29.9)	—	III	233
703	1号カマド煙道部・本体	—	—	—	—	—	—	—	18.6	(29.2)	—	III	231

$$S = \frac{1}{4}$$

第268図 PⅡ-1 住居跡出土遺物(2)

位は黒褐色土と黒色土が占める。レンズ状に堆積し、床面を覆う5層は塊状の火山灰や黒色土塊を含む。埋土構成や性状は隣接するOⅢ-1住居跡によく似ている。

〈壁の状態〉わずかに外傾 〈壁高〉40~71cm 〈壁溝〉カマドの部分のをぞいて存在する。幅は15~20cm、深さは7cm±である。

〈床面・掘り方〉床面は中央の広い範囲が非常に硬くよく締り、小凹凸がみられる。周辺部はいくぶん軟かい。全体規模の掘り方を下位に伴う。

〈柱穴〉伴わない。

〈カマドの位置〉東壁の南隅寄り 〈本体〉崩壊した構築材が火床部を覆うが、層厚10cm±と薄いシルト質粘土で、礫は伴わない。〈煙道部・煙出し部〉掘り込み式である。煙道部の底面は緩やかに傾斜して上がり、煙出し部は円形の掘り込みを伴う。天井部・側壁はシルト質粘土で構築され、残存状態は良好である。煙出し部は亜円・亜角礫を円形~楕円形に配して最大6段に組み、その間隙をシルト質粘土で充填している。最上段は、粒径17~20cmの亜円礫3個と煙道部側にあつて橋状に渡した37cmの長大な礫1個の計4個で円形状に組んでいる。外径は45×50cm、内径が14×20cmである。最下段は、粒径16~43cmの礫12個を楕円形状に組み、外径が50×57cm、内径が20×22cmである。

〈付属施設〉貯蔵穴P1が北東隅にある。平面形は円形で、壁は下半が直立、上半がいくぶん外傾した円筒形になっている。埋土は黒色土・黒褐色土である。

遺物 (第265図)

〈出土状況〉埋土を中心に、床面~床面直上・煙道部・掘り方埋土から出土しているが、量は非常に少ない。土器と鉄滓がある。

〈土器〉土師器壺が主体を占めるものの、I類M1bの697のほかはI類の破片36点があるにすぎない。坏はI類の破片3点があり、B0を1点含む。縄文土器片は17点である。

〈鉄滓〉1点9gが埋土下部から出土した。

まとめと遺構の時期

灰白色浮石層が埋土最上部を構成し、遺物はすべてその下位からの出土である。平安時代I群に分類できる。

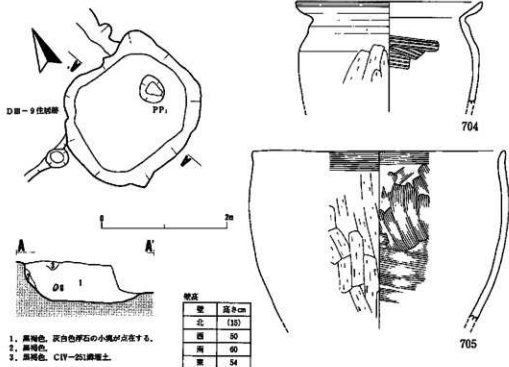
PⅡ区

PⅡ-1住居跡

遺構 (第266図、図版145・146)

〈検出状況・重複関係〉調査区の最南端に検出された。南隅で重複するPⅡ-51ビット (時期不明) には切られ、東隅で重複するPⅡ-52ビット (縄文時代) を切っている。

〈平面形〉いびつな長方形 〈規模〉3.1~3.3×4.1m 〈床面積〉11.0m² (推定) 〈主軸方向〉



1. 黒褐色、灰白色浮石の小塊が点する。
2. 黒褐色。
3. 黒褐色。CIV-251燐埋土。

No	地 点 ・ 層 位	種類・特徴	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分類	図面
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部		
704	埋土下部	土師器類	口縁部	ヘラケズリ	—	口縁部	ヘラナデ	—	14.9	(2.1)	—	ⅡB1	
705	埋土上部	土師器類	口縁部	横ナデ	—	口縁部	—	—	20.2	(13.5)	—		

$$S = \frac{1}{4}$$

第269図 DIII-10住居状遺構実測図・出土遺物

1号カマド：N-40°-W 2号カマド：N-50°-E

〈埋土〉 黒褐色土が卓越する。灰白色浮石や黄褐色火山灰は含まれない。

〈壁の状態〉 外傾 〈壁高〉 7～38cm 〈壁溝〉 伴わない。

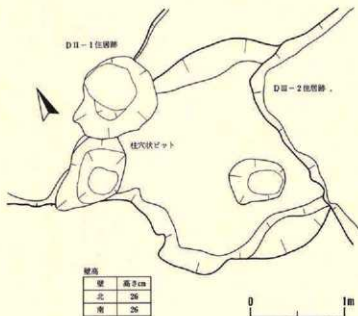
〈床面・掘り方〉 床面は全体的に軟かい。全体規模の掘り方を下位に伴い、南東側約1/2の部分で深くなっている。

〈柱穴〉 PP1・PP2は7～8cmと深度が浅く、柱穴としては疑問である。

〈カマド〉 2基のカマドを伴う。新期を1号カマド、古期を2号カマドとして記載する。

1号カマド：〈位置〉 北西壁中央 〈本体〉 崩壊し、残存状態は不良である。火床部上には崩壊した焼土が厚く堆積している。火床部は浅くくぼんだなかに形成されている。〈煙道部・煙出し部〉 掘り込み式である。底面はいくぶん急傾斜で下がり、先端部は外傾がいちじるしい。天井部は土師器壺の大型破片多数をいくぶん乱雑に並べ、粘土質シルトで被覆している。

2号カマド：〈位置〉 北東壁中央 〈本体〉 良く焼けた火床部が床面上に検出されただけで



第270図 DIII-13住居跡実測図

ある。〈煙道部・煙出し部〉くりぬき式である。底面は急傾斜で下がり、煙出し部には円形のピットが掘り込まれている。天井部や煙出し部の側壁は良く焼けている。

〈付属施設〉1号カマドの左脇に小型の浅い円形ピットがあることがField Cardや写真から確認できるが、実測図に記入されていない

ため、規模や深さは不明である。埋土は木炭片を多く含んだ黒褐色土の単層である。

遺物（第267図・第268図、図版220・231・243）

〈出土状況〉700を除いた図示例は1号カマドの燃焼部や煙道部から出土している。それ以外は量が少なく、埋土・掘り方埋土・2号カマド煙道部からの出土である。土器と堅果類がある。

〈土器〉土師器甕が主体を占めるほか、坏・縄文土器が少量出土している。土師器甕は、699や702・703が1号カマド煙道部の天井部の構築材として使用されていたため、I類とII類が同じような出土量になる。I類はL2、II類はM・L1がある。700はI類の胴部下端の破片で、刻線を伴っている。砂底は破片1点がある。坏は、II類A2の698以外にはI類の破片8点があるにすぎない。

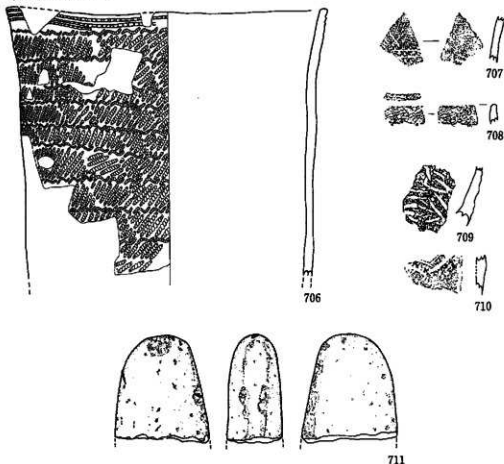
〈堅果類〉炭化した多量のトチの実が2号カマドの煙道部先端から煙り出し部にかけての部分から出土した（図版243）。

まとめと遺構の時期

700を除いた図示例の土器は本遺構に共伴する。また、トチの実も、共伴または時間的に近い関係にあることが考えられる。平安時代に分類できるものの、小群としての区分は不明である。

2. 住居状遺構

(25.7)・(21.7)・一



No	地点・層位	器種	部位	図形 / 外面	内面	防土	分	備考	図版
706	堀土	鉢鉢	口・胴	口縁部押し引き沈線文・LR・破格文	ナデ	縦線多い	1群1個		206
707	堀土	#	胴部	平行沈線文・単線斜線文	斜線文		1群5個	褐色	208
708	堀土	#	口縁部	口縁部RL・RL	RL		1群6個	にぶい褐色	
709	堀土	#	胴部	胴部下端。沈線文	ミダキ	縦線多い	1群1個		
710	堀土	#	#	胴部状?沈線文・RL	胴部		1群6個	推定	

No	地点・層位	器種	大きさ(最大):cm	重量g	石材名	特徴・備考	図版
711	堀土	灰石1個	長さ 86 幅 75 厚さ 44	371.0	輝石安山岩, An2	一筋含む破片。縦断面は1個。幅17mm	

$S = \frac{1}{3}$

第271図 DⅢ-13住居状遺構出土遺物

5棟を住居状遺構として分類している。

DⅢ-10住居状遺構

遺構(第269図。図版85)

〈検出状況・重複関係〉CⅣ-251溝(時期不明)には最上部をわずかに切られている。北西壁を中心にした部分が重複するDⅢ-9住居跡(時期不明)との関係は、土層断面では本遺構

が埋土を切っているようにも観察できるが、確実な点はわからない。

〈平面形〉 隅丸凸辺長方形で、わずかにいびつである。〈規模〉1.9×2.2m〈床面積〉2.1m²

〈埋土〉 黒褐色土の単層に近い。粒状から小塊状の灰白色浮石を含むが、ごく少量である。浮石は床面上にもわずかに分布する。

〈壁の状態〉 外傾～内湾気味 〈壁高〉50～60cm 〈壁溝〉 伴わない。

〈床面・掘り方〉 軟らかい。掘り方は認められない。

〈柱穴・カマド・炉〉 伴わない。PP1は柱穴にはならない。

遺物（第269図）

〈出土状況〉 埋土と床面から少量が出土している。土器と鉄滓がある。

〈土器〉 土師器甕や鉢・坏・縄文土器がある。土師器甕はⅡ類M1aの704以外は破片で、Ⅰ類が16点である。705は土師器の鉢として分類した。坏は破片で7点あり、Ⅰ類が6点、Ⅱ類が1点で、Ⅰ類はB0を1点含む。

〈鉄滓〉 3個21.9gが埋土下部から出土している。

まとめと遺構の時期

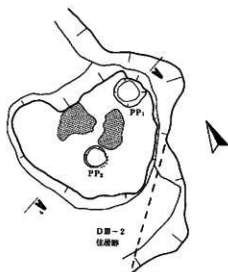
重複するDⅢ-9住居跡との新旧関係も不明であり、所属時期の推定は困難である。平安時代あるいはそれよりもわずかに後のものと推定するが、確実ではない。

DⅢ-13住居状遺構

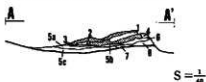
遺構（第270図、図版87）

〈検出状況・重複関係〉 重複するDⅢ-2住居跡（平安時代）に東側を、大型の柱穴状ビット2個に西側を切られている。

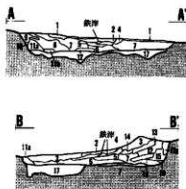
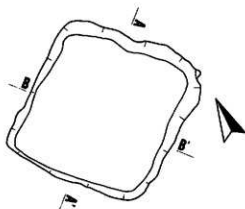
〈平面形〉 円形状あるいは凸辺の方形になるものと推定 〈規模〉 南北で2.5m 〈床面積〉



1. 黒色。
2. 黒褐色。
3. 黒色。炭化物を微かに含む。
4. 灰黄褐色。炭化物を含む。一部剥けている。
- 5a～5c. に近い黄褐色。5cは一部が剥けている。
6. 黒褐色。
7. 黒色。
8. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を全体に含む。



第272図 DⅢ-14住居跡実測図



壁高	壁	高 (cm)
北	西	13
南	西	17
南	東	33
北	東	41

12. 黒褐色。灰黄色厚石塊を含む。
 13. 黒褐色。
 14. 黒褐色。灰白色厚石を含む。
 15. 黒褐色。
 16. 黒色。灰黄色厚石を塊状に含む。
 17. 黄褐色～黒色。掘り方雑土。

1. 黒褐色。
 2. 黒褐色。灰黄色厚石の小塊を少量含む。
 3. 黒褐色。灰白色・灰黄色厚石塊を多く含む。
 4. 黒色。灰黄色厚石を少量含む。
 5・6. 黒褐色。
 7. 黒褐色。灰黄色厚石の小塊のほか、褐色土塊を含む。
 8. 黒色。灰白色厚石を含む。
 9. 暗褐色。 } 汚れた火山灰。
 10. 褐色。
 11a・11b. 黒褐色。

第273図 E III—3 住居状遺構実測図

不明

〈埋土〉黒褐色土の単層である。

〈壁の状態〉外傾 〈壁高〉26cm 〈壁溝〉残存部には伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は軟かく、ゆるやかな凹凸がある。掘り方は認められない。

〈柱穴・炉ほか〉中央からやや南寄りに、大きさが45×60cm、深さ19cmの凸辺方形の小ピットがある。柱穴や炉は残存部には伴わない。

遺物 (第271図。図版208・209)

〈出土状況〉深鉢706ほかの縄文土器と石器が埋土から出土しているが、量は少ない。

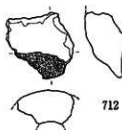
〈土器〉深鉢706は上半をある程度復元できたものである。それ以外は破片45点があり、早期

はI群5類と6類の707・708のほかには3点だけで、残りは前期のII群1類の709・710など繊維を多量に含むものである。

〈石器〉磨石I類711がある。そのほかには黒曜石の剥片1点が出土している。

まとめと遺構の時期

大型であることから住居状遺構としたが、壁や床面の状態に



712

No.	地点・層位	層	大きさ(最大):mm			数量	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
712	埋土	埋土口	—	—	25	(46.45)	破片。伊賀先細部は増解。	

第274図 E III—3 住居状遺構出土遺物

$S = \frac{1}{2}$

は居住施設と考え難い面もあり、不整形のピットとして分類した方が適切なのかもしれない。706ほかの出土遺物を手がかりにし、本遺構は縄文時代前期前葉Ⅱ群1類（早稲田6式相当）期に分類できる。

DⅢ-14住居状遺構

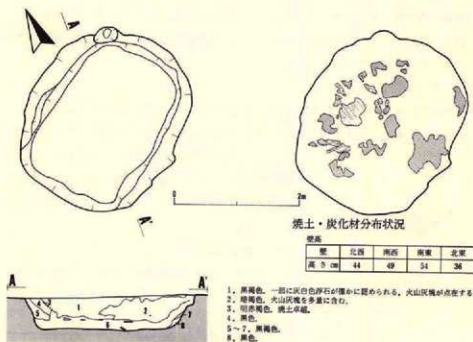
遺構（第272図）

〈検出状況・重複関係〉DⅢ-2住居跡（平安時代）のQ₄を精査中、焼土を伴った多量の炭化材が埋土中・下部に分布することを確認した。廃棄物と判断して掘り進めたところ、それらの下位に非常に硬く締った床面が広がるとともに、DⅢ-2住居跡の南東隅寄りの東壁を掘り込んでいる直角の隅が本遺構に伴うものであることが明らかになり、住居状遺構とした。なおこの遺構の上位をDⅢ-153焼土遺構（時期不明）が覆っている。

〈平面形・規模〉上述のような検出状況のため、いくつか掘りすぎがある。正確な形状や規模は不明であるが、直角のひとつの隅を伴うことから方形の平面形が考えられ、炭化材の分布状況等から判断して一辺が最大でも2mを越えないことを推定できる。

〈埋土〉DⅢ-153焼土遺構の下位に保存されていた部分の観察では、多量の灰白色細粒浮石を含む黒褐色土が床面を直接覆っている。

〈壁の状態〉東隅は外傾している。〈壁高〉29cm 〈壁溝〉残存部には伴わない。



第275図 EⅣ-12住居状遺構実測図

〈床面〉非常に硬く良く締まっている。DⅢ-2住居跡床面よりは12cm±上位にある。

〈柱穴〉PP1の位置づけは不明である。PP2は本遺構を切っている。

〈カマド〉伴わない。

〈その他〉上述の炭化材や焼土は残存部で90×25cmの範囲に広がり、層厚は6cmである。それらを取り除いたところ、灰白色のシルト質粘土の薄層に覆われた不整形な2基の現地性焼土が隣り合うように床面に形成されていた。1基は径20×43cm、別の1基は径35×45cmで、層厚は2～3cmである。

遺物

〈出土状況〉上述のような検出状況のため、少量の土器が埋土から出土したにすぎない。

〈土器〉すべて破片である。土器器Ⅰ類7点、同Ⅱ類1点、坏Ⅰ類3点、同Ⅱ類1点、縄文土器11点がある。

まとめと遺構の時期

平安時代Ⅱ群に分類できる。

EⅢ-3住居状遺構

遺構〔第273図、図版90〕

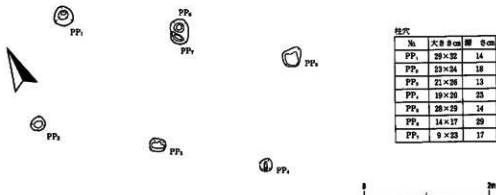
〈検出状況〉西側1/2以上が最近の削刻を受け、壁や埋土上部を失っている。

〈平面形〉隅丸正方形 〈規模〉2.4×2.5m 〈床面積〉4.5㎡

〈埋土〉黒褐色・黒色の土層群が卓越する。灰白色浮石は上半に多いが、床面を覆う層にも少量が含まれる。最大粒径30mmの塊状を示す小塊が主である。

〈壁の状況〉多くの部分が外傾する。〈壁高〉13～41cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面はほぼ平坦である。締ってはいるものの、それほど硬いものではない。全体規模の掘り方を伴うが、中央から南東の掘り込みは浅い。



第276図 GⅢ-8 掘立柱建物跡実測図

〈柱穴・カマド〉伴わない。

遺物（第274図、図版239）

〈出土状況〉埋土から出土しているが、鉄滓以外は土器と隴の羽口が少量あるにすぎない。

〈土器〉すべて破片である。土師器甕Ⅰ類とⅡ類21点、坏Ⅰ類4点、須恵器壺1点、縄文土器7点がある。

〈鉄滓〉埋土中部を中心にほぼ集中して出土した。41点1,706gと多い。重量は、最小が2.5g、最大が250gである。

〈隴の羽口〉炉側先端部を含む破片712が鉄滓とともに出土している。

まとめと遺構の時期

多量に出土した鉄滓は廃棄物である。埋土の性状から、平安時代Ⅱ群に分類できる。

EⅣ-12住居状遺構

遺構（第275図、図版95）

〈検出状況・重複関係〉重複するEⅣ-108落とし穴を切っている。

〈平面形〉凸辺隅丸長方形 〈規模〉2.4×2.9m 〈床面積〉3.8㎡

〈埋土〉黒色・黒褐色の土層群が卓越する。灰白色浮石は1層の上部に観察できるが、ごく少量である。2層は火山灰の小塊を多量に含む。

〈壁の状態〉外傾して立ち上がり、とくに上半の外傾が著しい。〈壁高〉36～54cm 〈壁溝〉伴わない。

〈床面・掘り方〉床面は平坦である。掘り方は伴わない。

〈カマド・柱穴〉伴わない。

〈その他〉焼土と炭化材が広い範囲に分布する。中央では13～17cm、壁際では30cmほど床面から上位に広がり、壁際が高く、床面中央が低い凹面状の堆積状態を示す。壁の一部が焼けていることや状態からは現地性のものと考えられる。焼土は最大層厚5cm土と厚く、炭化材は厚さ1～2cmである。

遺物

〈出土状況〉少量の遺物が埋土から出土している。土器と石器がある。

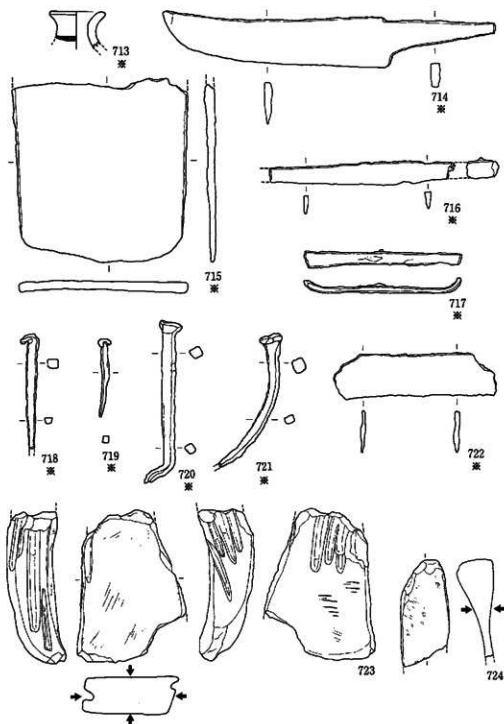
〈土器〉すべて破片で、土師器甕Ⅰ類16点と縄文土器47点がある。

〈石器〉磨石Ⅰ類がある。

まとめと遺構の時期

埋土の性状や出土遺物から平安時代Ⅱ群に分類できる。

3. 掘立柱建物跡



$$S = \frac{1}{2}(\text{葉}) \cdot \frac{1}{2}$$

第278図1 柱穴状ビット出土遺物(1)

No	地点・層位	種類・素材	外 面				内 面				計 測 値 : cm			分 類	図 版
			口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部		

No	地点・層位	器 種	大 小 (最大) : mm			重量g	特 徴 ・ 備 考		図版
714	埋土層上部	刀子 (小刀)	177	身長: 26	幅: 4	54.50	身長118mm・両面平造り・両端明瞭		238
715	埋土	鍔	(98)	93	4	(95.6)			238
716	埋土	刀子	—	身長: 9	幅: 3	(36.71)	接合しない破片・焼痕伴う		238
717	埋土	不明	(83)	8	3	(4.63)	細く薄い板状・両端ゆるやかに曲がるが、その先欠		238
718	埋土	釘	(58)	6	5	(5.38)	角釘。新鋭釘		238
719	埋土	?	42	4	4	1.57	?	?	238
720	埋土	?	87	7	5	11.88	?	方頭釘	238
721	埋土	?	(77)	7	6	(10.25)	?	?	238
722	埋土	不明	(87)	22	2	(13.58)	両端欠・厚み均一		238

No	地点・層位	器 種	大 小 (最大) : mm			重量g	石 材 名	特 徴 ・ 備 考	図版
723	埋土	砥石	122	88	40	400.00	粗砂質凝灰岩(石質凝灰岩), G 5	4面の使用面と有溝部	241
724	埋土	?	85	40	29	73.00	?	?	241

第278図 2 柱穴状ピット出土遺物 (2)

G III—8 掘立柱建物跡 (第276図)

〈検出状況・重複関係〉 周辺に分布する平安時代の住居跡の検出面では存在に気がつかなかったが、検出面をさらに下げた「ダメ押し」時に見つかった。柱穴は他遺構とは重複しない。

〈規模・平面形〉 桁行2間×梁行1間の長方形。

〈柱穴〉 埋土は7個に共通し、灰白色浮石の小塊を少量含む黒褐色土である。深度が13～29cmと浅いのは、上述のような検出状況のために上部を削刺したためであろう。PP 6 と PP 7 はほぼ同位置でわずかにずれて存在する。柱穴間は1.75～1.95mを測る。

遺物は出土していない。

まとめと遺構の時期

柱穴埋土に灰白色浮石を含む点から、平安時代に属するものと推定しておく。

4. 柱穴状ピット群

遺構 (付図2, 図版201～203)

500個以上の柱穴状ピットがL面のC II～C IV・D II・D IIIの各区に検出された。東西約37m、南北約53mの範囲に限定された分布状況である。1/100全体図と柱穴個別の計測値を付図2に示したが、柱穴を検討し、建物跡を把握する作業はおこなうことができなかった。ここでは観察したいいくつかの点を箇条書きにして記載する。

1. 柱穴状ピットのすべてが柱穴であるとは断定できないが、多くは建物跡の柱穴であると

推定した。

2. 柱痕跡と掘り方が識別できたものは多くはないが、計測表に示している。

3. 縄文時代や平安時代の遺構と重複する場合、ほとんどの例がそれらを切っていることを観察している。しかし、それ以外の遺構、例えば、近世後半以降と推定されるDⅢ-7住居跡や所属時期不明のCⅣ-251・DⅡ-251・252溝などとの重複例の新旧関係は把握できなかった。

4. CⅣ区からDⅡ区にかけて集中するピット群は北東-南西方向にのびる長さ約16m、比高差31cmほどの段差によって区切られているようにみうけられる。その南東部が削剝を受けているために確実なことは言えないが、建物跡の構築に伴う何らかの施設なのかもしれない。

5. 柱穴状ピットの分布は西側が調査区域外にも広がるであろう。東側は削剝を受けているために確実なことは言えないが、仮に同様の密集度で存在したとしたならば、4で述べた段差のすぐ東側の部分ならばその下底部が残存する確率は高いにもかかわらず、検出されていない。

6. 少数であるが、図示例以外に、精査や実測をしていないものがある。

遺物（第278図・第332図、図版238・241・270）

遺物は、大区画名と301からの分類番号をつけたピットごとに取り上げている。しかし、実測図への記入漏れがあり、整理し直した新番号と対応させることができないものがある。ここでは、遺物の種類・器種と何個のピットから何点が出土しているかを一括して記載する。

〈永楽通宝〉1個1点 〈寛永通宝〉3個4点 〈鉄製品〉12個14点。器種別の内訳は、小刀1点（714）・刀子1点（716）・鍬先？1点（715）・釘5点（718～721ほか）・器種不明6点（717・722ほか）である。〈キセルの唇首〉1個1点 〈磁石〉2個2点（723・724）〈漆の塗り紙〉5個6点。そのうちの1個からは漆の固化したものとみられる薄い膜状の小破片1点が出土している。〈徳利〉1個1点（713）〈貝〉4個5点。種名は不明である。〈動物の角？〉1個1点

5. ピット

表中に、→補足とあるものは次に一括して説明を加えている。重複する遺構との関係は、新→旧→不明→のように、ピットを基準にして表わしている。

補足説明

〈検出状況・重複関係〉

CⅢ-65ピット：「ダメ押し」としたのは遺構・遺物の有無の最終確認のため、Ⅶ層上面まで掘り下げたことを指す。CⅢ-66ピットほかでも同様の意味である。

IⅣ-55ピット：IⅣ-4住居跡の側から貼り床が施されていることから、本ピットと重複関係があると考えた。しかし、住居内にピットをもつ他住居跡例（KⅣ-1住居跡ほか）と比較すると、共存関係まで積極的に否定するものではない。

〈平面形〉

DⅢ-53ピット：西端の部分が外方へ張り出す形になり、別ピットとの重複も考えられる。

DⅢ-55ピット：灰白色浮石は南西部に張り出すピット状の落ち込みにも含まれていたが、本ピットの一部あるいは重複する別ピットとは考えなかった。

EⅢ-51ピット：北西部の外方に張り出し、EⅡ-53ピットとも接する部分は検出面よりも10cm低くなっている。埋土は灰白色浮石を含む黒褐色土であるが、形態や底面のレベルからみて、本ピットあるいはEⅡ-53ピットの一部とは考え難い。

〈埋土〉

CⅡ-52ピット：6層と7層が指交状に堆積するなど、自然堆積の層相を示す。

DⅢ-51ピット：4層は黒褐色土、5層は明黄褐色シルトである。ともに焼土と炭化物のほかに多くの土師器甕の破片を含み、5層からは少量の鉄滓も出土している。5層は、性状や混入物からみて、カマド構築土が廃棄されたものの可能性がある。

DⅢ-56ピット：粒径40cmと45cmの亜円・亜角礫2個が一部重なり合う状態で床面から12～14cm上位にみられた。

EⅣ-57ピット：粒径は、灰白色浮石は10mm、Ⅷ層火山灰は10～40mmが主体を占める。

HⅢ-53ピット：層相と残存状況・形態を考慮すると、底面を含む部分が削刻され、掘り方埋土を観察した可能性が高い。

IⅣ-55ピット：1・2層はIⅣ-4住居跡の床構築土である。下位の4層がルーズなために沈降している。

CⅢ-62(103)ピット：黒褐色土を半分掘りあげ、ほとんど汚れないⅧ層火山灰を確認した段階で浅いピットと判断して掘り上げた。その後、さらに掘ることができることが分かったが、断面を残しての観察はできなかった。

〈底面〉

CⅡ-56ピット：P1(40×46cm、深さ22cm)はピット埋土下部から連続する汚れ火山灰を埋土にしている。

CⅡ-57ピット：P1とP2は不整形で浅い。副穴かどうかは不明。

CⅡ-61ピット：北東壁部分は径52cm・深さ6cm(底面より)の小円形ピットになっている。

DⅢ-51ピット：11層は掘り方埋土の可能性がある。その場合、ゆるやかに波打つが平らな底面になる。

EⅡ-53ピット：径100×120cm・深さ12cmの方形の落ち込みが内側にあり、焼土はその内部に形成されている。

EⅡ-54ピット：P1は径20cm・深さ21cm。本ピットとの関係は共伴も含めて不明である。

HⅡ-62ピット：全体規模の掘り方を伴う。掘り方の深さは8～12cmである。

IⅢ-56ピット：小規模な現地性焼土が底面に形成され、カヤあるいはススキとみられる草本類の炭化物が一面に分布する。中央付近の一部には少量の材も伴う。

CⅢ-62 (103) ピット：P 1 (径18cm・深さ14cm)は底面のほぼ中央にある。

CⅢ-64 (104) ピット：P 1 (径18cm・深さ16cm)は底面のほぼ中央にある。

CⅢ-67 (105) ピット：P 1 (径20cm・深さ10cm)は底面のほぼ中央にある。P 1の東壁には細長い礫一個が埋置されて直立している。

DⅢ-52 (109) ピット：P 1 (径15cm・深さ20cm)は底面中央からやや東寄りに位置する。

OⅢ-52 (115) ピット：P 1 (径25cm・深さ6cm)は底面中央からやや東寄りに位置する。

〈出土遺物〉

EⅡ-52ピット：図示例10点はすべてI類である。底部を欠く例が多いが、体部半ばからヘラケズリされる特徴が共通する。C 4が3点、A 2が1点である。

EⅢ-56：土師器甕のうち、1点は胴部下端に刻みを伴う。

EⅢ-57ピット：土師器甕と坏I類の破片1点ずつは焼土中から出土した。

CⅢ-62 (103) ピット：上記のほか、縄文土器の破片は埋土中部などから10点が出土し、すべて胎土に繊維を含んでいる。

〈所属時期〉

CⅡ-53ピット：縄文時代後期前葉以降。

〈備考〉

CⅢ-59・CⅢ-61ピット：いちおう2基のピットとして分離したが、周辺も不規則に掘り込まれており、形態的な安定感にとほしい。

EⅡ-52ピット：焼土は全体に形成されている。底面直上～14cm上位にあり、層厚は5cmである。

EⅡ-53ピット：焼土がみられる部分は100×120cmの不整形になり、周辺部よりも8～12cm低い。

EⅢ-51ピット：焼土は北東壁寄りに形成され、底面から10cm上位にあつて層厚は8cmである。

EⅢ-52ピット：焼土は底面から7cm上位に形成され、層厚は5cmである。

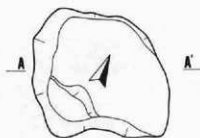
EⅢ-53ピット：焼土は底面直上に形成され、層厚は2cmである。細かな炭化材が南壁際に広がる。

EⅢ-54ピット：焼土は底面から5cm上位に形成され、層厚は4cmである。

EⅢ-56ピット：焼土は底面から10～13cm上位に形成され、層厚は3cmである。

遺構名	B II-51ピット	C II-51ピット	C II-52ピット
押 図	遺構：第279図 a 遺物：第296図	遺構：第279図 b 遺物：第296図	遺構：第279図 c 遺物：第296図
図 版	遺構：146 cd 遺物：215・220	遺構：147 a	遺物：147 cd 遺物：209・213
検出状況 重複関係	東壁を削削されている。不明→ B II-1 住居跡		不明→C II-53ピット
平面形	不整形	ほぼ円形	ほぼ円形
開口部径	123×146cm	120×135cm	176×196cm
深 さ	36～57cm	10～21cm	138～146cm
埋 土		褐色～黒色の土層群	上半は黒色土と汚れ火山灰がマトリックスの土、下半は褐色と黒褐色の土層群で構成。 →補足
壁	外傾	直立～外傾	内傾して立ち上がり、平ば～上部で外傾。
底 面	南隅が一段高くなっている。	大小の凹凸がみられる。	平坦
出土遺物	灰725～727が埋土最下部から出土。埋土からは土師器の破片3点、縄文土器18点(729)磨製石斧728が出土。	縄文土器片3点のほか、削器730が埋土から出土。	図示した731～733の縄文土器のほかにも、早期・前期・後期～晩期の土器片13点が出土。不定形石器734は埋土上部から。
所属時期	土器・埴土の平安時代	不明	形態・埴土・土器の縄文時代
備 考			フラスコ形ピット

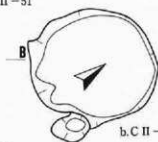
遺構名	C II-53ピット	C II-54ピット
押 図	遺構：第279図 d 遺物：第296図	遺構：第279図 d 遺物：第296図
図 版	遺構：147 ef 遺物：209	遺構：147 ef 遺物：213
検出状況 重複関係	新→C II-54ピット。不明→C II-52・55ピット。	重複するC II-53ピットに切られ、底面近くが残っているにすぎない。
平面形	円形	残存部では円形
開口部径	154×161cm	(残存部径) 93×97cm
深 さ	85～95cm	検出面から125cm
埋 土	褐色～黒色の土層群で構成。壁隙は汚れ火山灰が卓越。	薬理が発達し、水平に堆積。
壁	わずかに内傾して立ち上がるが平ばからは外傾。	いくぶん外傾
底 面	凹レンズ状	緩やかな凹凸がわずかにある。
出土遺物	図示した3点のほか、7点の縄文土器片と1点の割片が出土。7点のうち、竈竈を含む5点のほか、後期前葉の1点がある。	図示した738・739の土器片は早期。740は不定形石器である。
所属時期	形態・埴土・土器の縄文時代 →補足	重複関係の縄文時代
備 考	フラスコ形ピット？	



a. B II-51



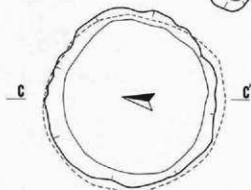
1. 黒褐色。火山灰粉を含む。
2. 灰黄褐色。浅黄色浮石塊・灰白色浮石塊を含む。
3. 灰黄褐色。2層に似るが、浮石は少量。
4. 黄褐色。汚れ火山灰が卓越。
5. 暗褐色。淡黄色浮石を含む。
6. 黄褐色。火山灰塊が卓越。



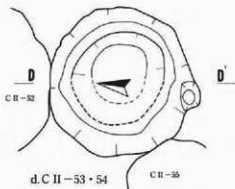
b. C II-51



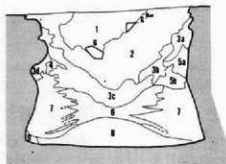
1. 黒褐色。
2. 暗褐色。
3. 黒色。
4. 暗褐色。
5. 褐色。汚れ火山灰。
6. 黒色。



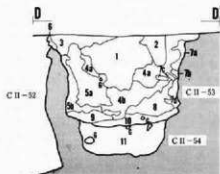
c. C II-52



d. C II-53・54



1. 黒色。
2. 黒褐色。
- 3a~3d. 暗褐色。汚れ火山灰がマトリックス。
- 4~5a. 褐色。
6. 黒褐色。炭化物粒を含む。
7. 褐色~黒褐色。火山灰・細砂・黒褐色土ほかの層層が堆積。
8. 黒褐色。炭化物粒を含む。
9. 黒褐色。



- 1~3. 黒色。
- 4a. 暗褐色。
- 4b. 暗褐色。下部に粘土を含む。
- 5a~5d. 褐色。汚れ火山灰。5bは機土を含む。
6. 暗褐色。
- 7a~7d. 褐色。汚れ火山灰。一部は火山灰。
- 8~10. 褐色。
11. 暗黄褐色~黒褐色。褐色土・黒褐色土・パミスの層層が堆積。

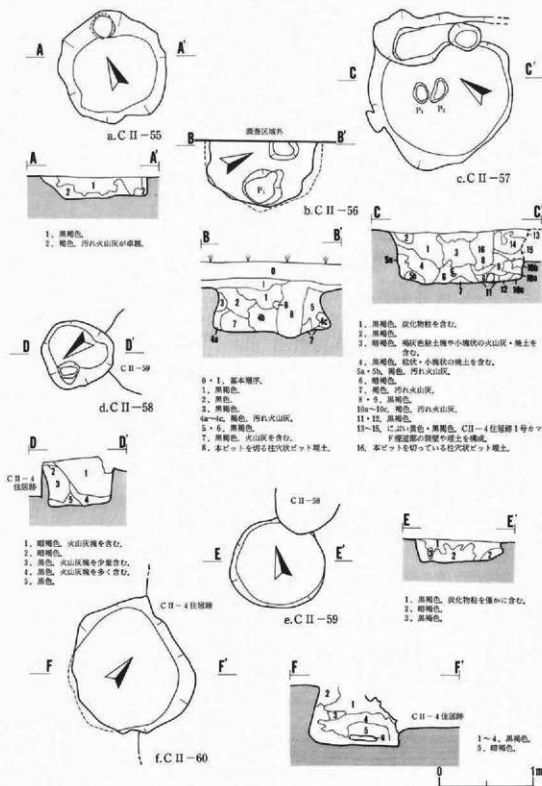
1~10はC II-53、11はC II-54の埋土。



第279図 ビット実測図(6)

遺構名	C II-55ピット	C II-56ピット	C II-57ピット
挿 図	遺構：第280図 a 遺物：第296図	遺構：第280図 b 遺物：第296図	遺物：第280図 c 遺物：第296図
図 版	遺構：147 b	遺構：148 ab 遺物：209・213	遺構：148 cd
検出状況 重複関係	不明→C II-53ピット（切っている可能性が高い）	北西部はほどが調査区域外へ出る。	旧→C II-4 住居跡（1号カマドの煙道部に北東部を埋土から切られている。）
平 面 形	わずかに傘がんだ円形	円形あるいは楕円形と推定	不整形円形
開口部径	115×115cm	115cm×不明	152×159cm
深 さ	20～24cm	40～46cm	49～55cm
埋 土	黒褐色土が上半、汚れ火山灰が卓越する褐色土が下半を占める。	黒褐色土や黒色土が上半、汚れ火山灰や火山灰を含む黒褐色土が下半を占める。	下部の壁際や底面は汚れ火山灰が卓越。上半はC II-4 住居跡煙道部埋土がみられる。
壁	小凹凸がいちじるしい。	内傾	直立～外傾
底 面		ゆるやかに波打つ →補足	ほぼ平坦。中央部に小ピット2個 →補足
出土遺物	早期中葉の741のほか、早期1点、後期または晩期2点の縄文土器片が出土。	図示した4点の縄文土器片のほか、早期1点、縄文土器5点、後期または晩期5点の破片が出土。746のほかに剣片が1点。	図示した3点の縄文土器片のほか、縄文土器5点が埋土から出た。底面からは後期と推定される高台部が出た。
所属時期	不明	形態・土器ほか縄文時代と推定。晩期以降か。	形態・土器ほか縄文時代と推定。後期以降か。
備 考			

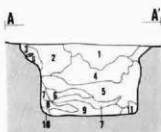
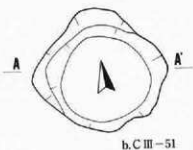
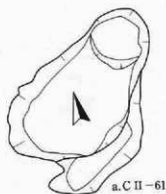
遺構名	C II-58ピット	C II-59ピット	C II-60ピット
挿 図	遺構：第280図 d	遺構：第280図 e 遺物：第297図	遺構：第280図 f
図 版	遺構：148 e	遺構：149 ab	遺構：148 f
検出状況 重複関係	新→C II-59ピット。不明→柱穴状ピット（P1）	旧→C II-58ピット	旧→C II-4 住居跡
平 面 形	不整形円形	円形	不整形円形
開口部径	74×78cm	92×98cm	132×142cm
深 さ	48～51cm	10～24cm	60cm
埋 土	暗褐色土と黒褐色土で構成され、大小の火山灰塊が散在する。	黒褐色土が上半、暗褐色土が下半を構成	黒褐色の土層群と南壁際から下部を占める暗褐色土が構成
壁	直立	直立～内傾	内傾～外傾。小凹凸がある。
底 面	平坦	南東側約1/3はわずかに高くなる。	ほぼ平坦
出土遺物	キセル破片とみられる銅片1点が埋土から出土	図示した750のほか、繊維を含む縄文土器片1点が埋土から出土。	なし
所属時期	不明。近世以降の新しい時期であろう。	埋土の縄文時代と推定	重複関係の平安時代またはそれ以前。埋土・形態は縄文時代と推定
備 考			



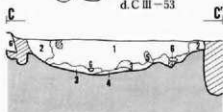
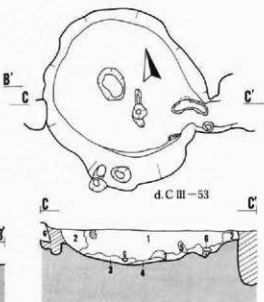
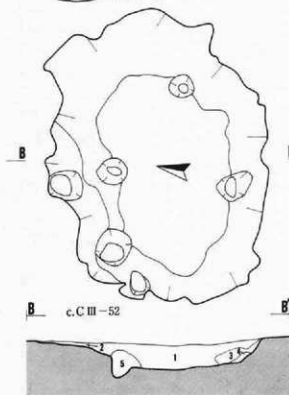
第280図 ピット実測図(7)

遺構名	C II-61ビット	C III-51ビット	C III-52ビット
挿 図	遺構：第281図 a 遺物：第297図	遺構：第281図 b 遺物：第297図	遺構：第281図 c 遺物：第297図
図 版	遺構：149 c 遺物：215	遺構：149 ef	遺構：149 d
検出状況 重複関係			
平 面 形	洋梨形に似た不整形	いくぶんいびつな円形	不整形円形
開口部径	110×195cm	132×145cm	245×315cm
深 さ	25～40cm	76cm	32cm（最深部）
埋 土	黒褐色土と汚れ火山灰で構成	褐色・暗褐色の土層群が優占。埋土上・中部には炭化したタルミの細片少量が含まれていた。	火山灰の小塊を少量含む黒褐色土が卓越
壁	直立	直立するが、上部が強く外傾。	外傾するが不規則
底 面	ゆるやかな凹凸 一補足	平坦	ゆるやかな凹凸 } 小ビットが 多い。
出土遺物	図示した以外では、752の同一個体破片 6 点と使用痕のある割片 1 点が出土。	図示した縄文土器片 3 点以外には、早瀬と推定される 4 点、横紐土器片 5 点、時期不明土器片 2 点、使用痕のある割片 1 点。	図示した以外に、横紐を含む 4 点と後期？ 1 点の縄文土器片、土師器破片 6 点、同坏片 1 点が出土。
所属時期	遺物・埋土の縄文時代早期の可能性	遺物・形態・埋土の縄文時代前期前葉	不明
備 考		¹⁴ C 年代測定	

遺構名	C III-53ビット	C III-55ビット	C III-56ビット
挿 図	遺構：第281図 d 遺物：第297図	遺構：第281図 e	遺構：第281図 f 遺物：第298図
図 版	遺構：150 a 遺物：209	遺構：150 b	遺構：150 e 遺物：209
検出状況 重複関係	旧→C II-4 住居跡・柱穴状ビット	新→C III-1 住居跡・C III-56ビット	新→C III-1 住居跡。埋土中に構築。旧→C III-55ビット
平 面 形	ほぼ円形	ほぼ円形	ほぼ円形
開口部径	163×190cm	66×77cm	72×73cm
深 さ	37cm（最深部）	30cm	27cm（最深部）
埋 土	黒褐色土が卓越。火山灰と汚れ火山灰が底面を覆う。	黒色土と黒褐色土で構成。粒径 17～25cm の垂角礫 3 個を含んでいる。	黒色土が優占する。
壁	ゆるやかな外傾	外傾→内湾	直立気味→ゆるやかな外傾
底 面	凹レンズ状	ほぼ平坦	凹レンズ状
出土遺物	図示した以外に、縄文土器片 16 点があり、そのうち 14 点は横紐を含む。割片は 2 点出土。	なし	図示した 4 点のうち、769 は粒径 27 cm の細長い環に接して出土。そのほか横紐を含む縄文土器片 4 点が出土
所属時期	埋土・遺物の縄文時代前期前葉と推定	不明	土器の縄文時代後期末葉
備 考			

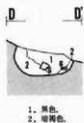
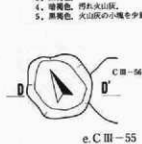


1. 黒色。
2. 暗褐色。
3. 褐色。汚れ火山灰。
4. 暗褐色。
5. 暗褐色。炭化物粒を少量含む。
6. 黒褐色。
7. 褐色。汚れ火山灰。
8. 暗褐色。
9. 黒褐色。炭化物粒を少量含む。
10. 褐色。粗砂。
11. 暗褐色。

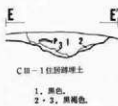


1. 黒褐色。
2. 暗褐色。
3. 褐色。汚れ火山灰。
4. 黄褐色。火山灰。
5. 褐色。
6. 黒色。

1. 黒褐色。火山灰の小塊を少量含む。
2. 暗褐色。焼土を含む。
3. 黒褐色。
4. 暗褐色。汚れ火山灰。
5. 黒褐色。火山灰の小塊を少量含む。



1. 黒色。
2. 暗褐色。



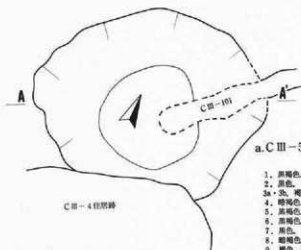
1. 黒色。
- 2・3. 黒褐色。



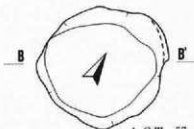
第281図 ピット実測図(8)

遺 構 名	CⅢ-54ビット	CⅢ-57ビット	CⅢ-58ビット
挿 図	遺構：第282図 a 遺物：第297図	遺構：第282図 b 遺物：第298・299図	遺構：第282図 c 遺物：第297・298図
図 版	遺構：150 cd 遺物：215	遺構：151 ab 遺物：209・213・215	遺物：209
検出状況 重複関係	旧→CⅢ-4住居跡・柱穴状ビット。不明→CⅢ-101墓とし穴	新→CⅢ-1住居跡	
平 面 形	不整形円形	わずかにいびつな円形	わずかにいびつな円形
開口部径	250×210 (推定) cm	130×137cm	75×95cm
深 さ	75cm (最深部)	41～63cm	28～34cm
埋 土	汚れ火山灰が壁跡の一部を占めるほかは黒褐色土・黒色土が卓越する。	汚れ火山灰が壁跡と底面上の一部を占める。黒褐色土が卓越する。	暗褐色土の単層
壁	急激、あるいはゆるやかな外傾	直立～内傾のあと直立し、上部で外傾。	外傾
底 面	小凹凸がある。	東側へ下がっている。	平坦
出土遺物	図示したほかにも縄文土器片11点が出土。うち早期5点、縄文土器3点がある。使用痕のある銅片2点と不定形石器1点も出土。	図示した以外にも40点の縄文土器片が出土し、うち32点は縄文を含む。	762のほか、I群 類と 類の縄文土器片が各1点ずつ出土。
所属時期	埋土・遺物の縄文時代前期前葉と推定	遺物・埋土・形跡の縄文時代前期前葉	不明
備 考	圓形鉢状のビット	¹⁴ C年代測定	

遺 構 名	CⅢ-59ビット	CⅢ-60ビット	CⅢ-61ビット
挿 図	遺構：第282図 d	遺構：第283図 a	遺構：第282図 e
図 版		遺構：150 f	
検出状況 重複関係	CⅢ-61ビットと連続するような状態で検出		CⅢ-59ビットと連続するような状態で検出
平 面 形	楕円形	ほぼ円形	円形
開口部径	282cm×不明	82×85cm	92×92cm
深 さ	40cm	16cm	46cm
埋 土	黒褐色土が卓越	暗褐色土と黒色土で構成	黒褐色土
壁	ゆるやかな外傾	外傾	外傾
底 面	大小の凹凸	平坦	凹凸
出土遺物	なし	なし	なし
所属時期	不明	埋土の縄文時代と推定	不明
備 考	→補足		→補足

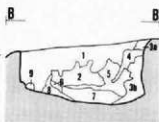


a. C III-54

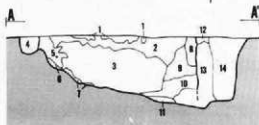


b. C III-57

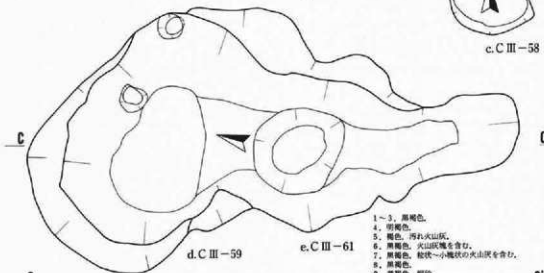
1. 黒褐色。
2. 黒色。
- 3a・3b. 褐色、汚れ火山灰。
4. 暗褐色。
5. 黒褐色、炭化物粒を僅かに含む。
6. 黒褐色。
7. 黒色。
8. 暗褐色。
9. 褐色、汚れ火山灰。



c. C III-58



1. 褐色。
2. 黒褐色。
3. 黒色。
4. 本ピットを切る柱状状ピット層土。
5. 暗褐色。
6. 褐色。
7. 暗褐色。
8. 黒色。
- 9・10. 黒褐色。
11. 明黄褐色、火山灰。
- 12~14. 本ピットを切る柱状状ピット層土。



d. C III-59

e. C III-61

- 1~3. 黒褐色。
4. 明褐色。
5. 褐色、汚れ火山灰。
6. 黒褐色、火山灰塊を含む。
7. 黒褐色、粒状~小塊状の火山灰を含む。
8. 黄褐色。
9. 黄褐色、細砂。
- 10・11. 黒褐色、細砂を含む。



0 1m

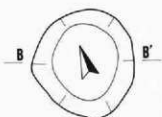
第282図 ピット実測図(9)

遺 構 名	CⅢ-63ビット	CⅢ-65ビット	CⅢ-66ビット
採 回	遺構：第283図 b 遺物：第299図	遺構：第283図 c	遺構：第283図 d
図 版	遺構：151 ef	遺構：151 d	遺構：152 b
検出状況 重複関係		旧→柱穴状ビット。「ダメ押し」時に検出したため、浅い。→補足	「ダメ押し」時に検出。V層を切 って構築。
平 面 形	ほぼ円形	ややいびつな円形	円形
開口部径	110×116cm	94×100（推定）cm	72×85cm
深 さ	35cm	13～17cm	32cm
埋 土	1・2層とも灰白色浮石のほかに 焼土、1層では木炭も含む。	黒褐色土の単層。焼土の小塊とと もに木炭片を含むが、量的には少 量である。	黒褐色土の単層。粒径18～24cmの 重石4個を埋土に含む。
壁	外傾	外傾	直立
底 面	いくぶん凹レンズ状	ほぼ平坦	平坦
出土遺物	782のほか、縄文土器片5点、土師 器杯の高台部破片が出土。	なし	縄文土器の細片1点が出土。
所属時期	不明。埋土と遺物から平安時代以 降であることは推定できる。	不明。検出面や埋土からみて、縄 文時代の可能性が大。	不明。検出面や埋土からみて、縄 文時代の可能性が大。
備 考			

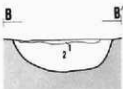
遺 構 名	DⅢ-51ビット	DⅢ-53ビット	DⅢ-54ビット
採 回	遺構：第283図 e 遺物：第300図	遺構：第283図 f	遺構：第283図 g
図 版	遺構：153 cd 遺物：231・232	遺構：152 d	遺物：153 b
検出状況 重複関係		旧→DⅢ-6住居跡	
平 面 形	わずかにいびつな円形	ダルマ形（不整形）	→補足 ほぼ円形
開口部径	147×168cm	180×200cm	123×128cm
深 さ	70cm（最深部）	6～12cm	15～23cm
埋 土	上部の1・3層は小塊状の、中部 の6・7層は粒状～小塊状の灰白 色浮石を含む。→補足	黒褐色土が卓越。	黒褐色土が卓越。
壁	外傾～ゆるやかな外傾	外傾	直立～外傾
底 面	中央部から南東が凹む。→補足	ほぼ平坦	凹レンズ状
出土遺物	5・6層から図示例をはじめ、多 くの土師器片が出土。杯は1期の 破片18点。鉄滓は2点11g。	繊維を含む縄文土器片1点、土師 器器壁破片8点が出土	なし
所属時期	埋土・遺物から平安時代	不明。DⅢ-6住居跡自体の所属 時期も不明。	不明
備 考			



a. C III-60



b. C III-63



1. 黒褐色。灰白色浮石を少量、焼土・炭化物粒をいくぶん多く含む。
2. 黒色～黒褐色。灰白色浮石・焼土を少量含む。



1. 黒色。
- 2・3. 暗褐色。



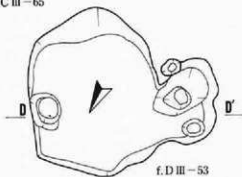
e. D III-51



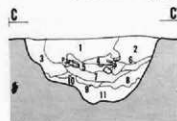
c. C III-65



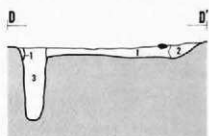
d. C III-66



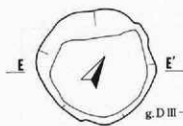
f. D III-53



1. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を全体に含む。
2. 黒褐色。
3. 黒褐色。灰白色浮石のほか、少量の焼土・炭化物を含む。
4. 黒褐色。焼土・炭化物のほか、多くの土器片を含む。
5. 暗褐色。シルト、焼土・炭化物のほか、多くの土器片・少量の鉄滓・礫を含む。
- 6・7. 黒褐色。粒状～小塊状の灰白色浮石を含む。
8. 黒色～黒褐色。灰白色浮石・炭化物を少量含む。
9. 黒色。焼土を少量含む。
10. 黒色。
11. 黒褐色。火山灰を含む。



1. 黒褐色。
2. 黒色。
3. 本ピットを切る柱状状ピットの埋土。



g. D III-54



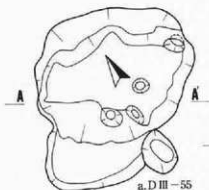
1. 黒色。
2. 褐色。汚れ火山灰の塊。
- 3a・3b. 黒褐色。
4. 褐色。汚れ火山灰。

0 1m

第283図 ピット実測図00

遺構名	DⅢ-55ビット	DⅢ-56ビット	EⅡ-51ビット
挿 図	遺構：第284図 a	遺構：第284図 b	遺構：第284図 c 遺物：第301図
図 版	遺構：154 a b	遺構：154 c	
検出状況 重複関係			調査区域外へ出るため、形態や大きさは不明。
平 面 形	わずかにいびつな円形 →補足	隅丸方形で、一辺が凸辺になる。	
開口部径	160×170cm	114×128cm	
深 さ	17～27cm	23～35cm	23～29cm
埋 土	黒褐色土・黒色土で構成。2・3層は粒状～小塊状の灰白色浮石を含む。	少量の灰白色浮石と木炭粒を含む →補足 黒褐色土の単層	黒褐色土群で構成。僅占する2層は粒状～小塊状の灰白色浮石を含む。
壁	外傾。凹凸がある。	直立	外傾
底 面	西側へ傾斜して下がる。	北東部約½が低くなる。	
出土遺物	土師器破片8点、縄の羽口破片2点、鉄釘1点、縄文土器片2点、剥片1点が出土。	土師器破片3点と縄文時代後期前葉の土器片2点が出土。	土師器葉は図示例のほか6点の破片が出土。
所属時期	埴土・遺物の平安時代	埴土・遺物の平安時代の可能性	埴土・遺物の平安時代
備 考			

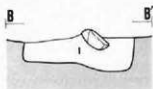
遺構名	EⅡ-52ビット	EⅡ-53ビット	EⅡ-54ビット
挿 図	遺構：第284図 d 遺物：第301・302図	遺構：285図 a	遺構：第284図 e
図 版	遺構：154 ef 遺物：220	遺構：155 a～c	遺構：154 d
検出状況 重複関係		旧-EⅢ-51ビット	
平 面 形	不整形円形	わずかにいびつな長方形	楕円形状
開口部径	86～160×210cm	142～157×195cm	102×140cm
深 さ	27～33cm	12～24cm	24～27cm
埋 土	黒褐色土が卓越。灰白色浮石塊を含む。	黒褐色・黒色の土層群で構成。4・6・7層が灰白色浮石を含む。	黒褐色土の単層で、灰白色・灰黄色浮石の大小の塊を多く含むほか、炭化物粒がみられる。
壁	ゆるやかな外傾	直立→外傾	直立→外傾
底 面	小凹凸がある。	2段構造 →補足	南へわずかに傾斜して下がる。 →補足
出土遺物	806をはじめとする、埴土上に破片で多量に出土。→補足	遺物は埴土下位の7層からも出土。土師器葉17点、埴土1点、埴土2点の破片のほか、縄文土器片3点が出土。	土師器葉3点、埴土1点、縄文土器1点が出土し、いずれも小破片である。
所属時期	埴土・遺物・形態の平安時代	埴土・遺物・形態の平安時代	埴土・遺物の平安時代
備 考	埴土ビット →補足	埴土ビット。掘り方 →補足	



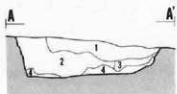
a. D III-55



b. D III-56



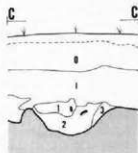
1. 黒褐色。少量の灰白色浮石の破片、巨礫を含む。



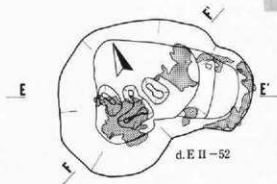
1. 黒色。
2. 黒褐色。粒状～小塊状の灰白色浮石を全体に含む。
3. 黒褐色。粒状の灰白色浮石を含む。
4. 黒褐色。



c. E II-51



- 0-1. 基本層序。
1-3. 黒褐色。
2は、粒状～小塊状の灰白色浮石を少量含む。



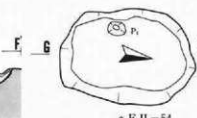
d. E II-52



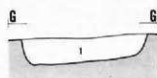
1. 黒褐色。粒状～小塊状の灰白色浮石を全体に多く含むほか、多くの炭化粒がみられる。多量の珪を含む。
2. 黒褐色。
3. 黒褐色。1と同様の浮石を上部に含む。焼土塊も少量みられる。
4. 黄褐色。シルト。



1. に近い褐色。汚れた焼土。
2. 黒褐色。灰白色浮石の小塊を含む。
3. 黒色。細砂状。
4. 黒褐色。焼土・炭化物を含む。
5. 暗褐色。



e. E II-54



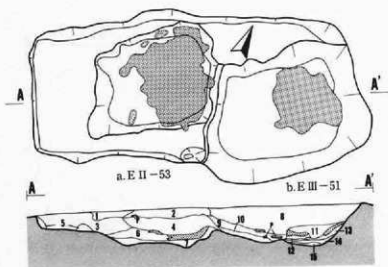
1. 黒褐色。灰白色浮石塊を多量に含む。



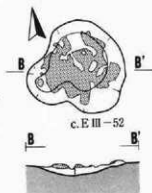
第284図 ビット実測図(1)

遺 構 名	E III-51ピット	E III-52ピット	E III-53ピット
挿 図	遺構：第285図 b 遺物：第302図	遺構：第285図 c	遺構：第285図 d
図 版	遺構：155 c・ef	遺構：155 d	遺構：156 a
検出状況 重複関係	新→E II-53ピット	上部は削剥されている。	
平 面 形	隅丸の台形状 一補足	ダルマ形	不整形
開口部径	136×146～177cm	103×107cm	109×112cm
深 さ	16～37cm	11cm	5 cm
埋 土	黒褐色土・黒色土ほかで構成。9層が灰白色浮石を含むもの。E II-53ピットに比べると少量	焼土下位の黒褐色土が観察できる。塊状の灰白色浮石と火山灰を多量に含む。	黒褐色土の単層で、灰白色浮石の大小の塊を多量に含む。間には焼土層をはさむ。
壁	ゆるやかな外傾	凹レンズ状	凹レンズ状
底 面	東側へ傾斜して下がっている。		
出土遺物	図示例のほか、土師器破片34点が埋土から底面にかけて出土。それ以外には、器種不明の鉄製品の破片1点がある。	土師器壺3点・坏I類1点の破片、鉄棒1点16.1gが1層から出土	なし
所属時期	埋土・遺物・形態○平安時代	埋土・遺物・形態○平安時代	埋土・形態○平安時代
備 考	焼土ピット 一補足	焼土ピット 一補足	焼土ピット 一補足

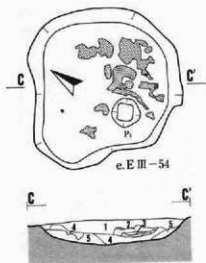
遺 構 名	E III-54ピット	E III-55ピット	E III-56ピット
挿 図	遺構：第285図 e	遺構：第285図 f	遺構：第285図 g
図 版	遺構：156 b	遺構：156 c	遺物：156 d
検出状況 重複関係	旧→柱穴状ピット (P1)		旧→柱穴状ピット (P1)
平 面 形	不整形形状	不整形	不整形
開口部径	156×177cm	102×120cm	120×157cm
深 さ	26cm	32cm	29cm
埋 土	黒褐色・黒色土で構成。灰白色・灰黄色の浮石を全体的に含むが、量的にはそれほど多くはない。	黒色・黒褐色土が卓越	焼土下位の黒褐色土は粒状～小塊状の灰白色浮石を含む。
壁	浅皿状	外傾	外傾
底 面		平坦	波打つ。
出土遺物	土師器壺の破片2点と鉄棒7点53.9gが埋土から出土。	なし	土師器壺10点、須恵器壺1点、坏I類2点、縄文土器2点が出土し、いずれも破片 一補足
所属時期	埋土・遺物・形態○平安時代	不明	埋土・遺物・形態○平安時代
備 考	焼土ピット 一補足		焼土ピット。小ピット 一補足



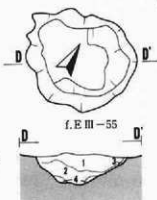
1. 黒色。
2. 黒色～黒褐色。
3. 黒色。焼土・炭化物を含む。
4. 黒色。粒状～塊状の灰白色浮石を多く含む。
5. 黒褐色。
- 6・7. 黒褐色。灰白色浮石を少量含む。6・7の層裡面には木炭と焼土の層を伴う。
8. 黒色。
9. 黒褐色。粒状の灰白色浮石・土餅片を含む。
10. 黒色。
11. 黒色～黒褐色。焼土・炭化物を少量含む。
- 12～15. 不明。



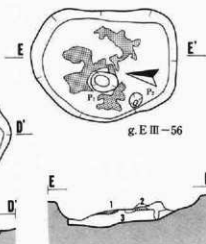
1. 黒褐色。塊状の灰白色浮石と火山灰を多量に含む。



1. 黒褐色。粒状～塊状の灰白色浮石を含むが、量的にはそれほど多くはない。焼土・炭化物を含む。
2. 黒褐色。灰白色浮石を含む。
3. 黒褐色。焼土・炭化物を含む。
4. 黒色。灰白色浮石の小塊を含む。
5. 黒褐色。



1. 黒色。
2. 黒褐色。塊状の黒色土・火山灰を含む。
3. 黒褐色。
4. 黄褐色。火山灰。



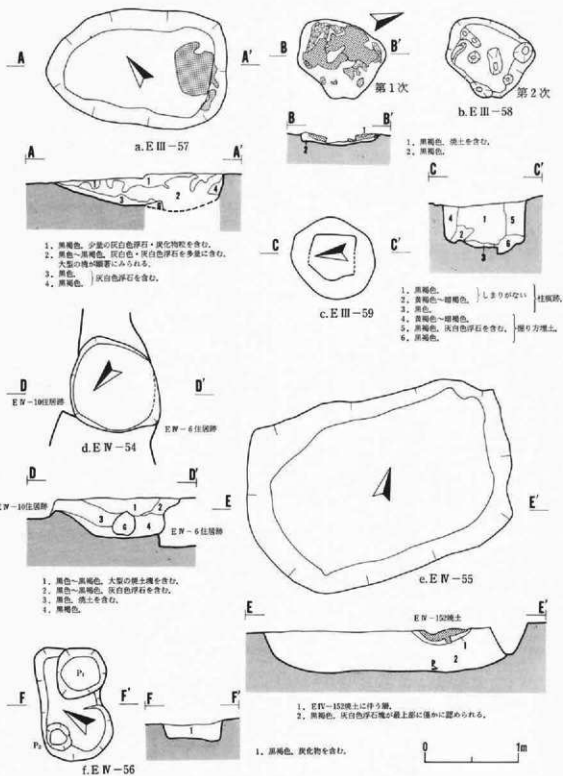
1. 明赤褐色。汚れた焼土。
2. 黒褐色。焼土塊を含む。
3. 黒褐色。粒状～小塊状の灰白色浮石を全体に含む。



第285図 ピット実測図(12)

遺構名	EⅢ-57ピット	EⅢ-58ピット	EⅢ-59ピット
挿 図	遺構：第286図 a	遺構：第286図 b	遺構：第286図 c
図 版	遺構：156 ef	遺構：157 ab	遺構：157 cd
検出状況 重複関係		彫刻がいちじるしく、ほぼ下底部 が残るにすぎない。	
平 面 形	凸辺方形～楕円形状	不整形方形	ほぼ円形
開口部径	125×190cm	72×93cm	87×87cm
深 さ	40cm（最深处）	9cm	53cm（最深处）
埋 土	黒褐色・黒色土層群で構成。2層 は灰白色・灰黄色の浮石を多量に 含む。	焼土・炭化材の上下位とも黒褐色 土で構成。灰白色細粒浮石の小塊 を少量含む。	柱痕跡とみられる部分は最下部の 3をのぞいては非常に軟質。廻り 方埋土の一部に灰白色浮石を含む。
壁	直立～外傾	浅皿状。底面には小凹凸がある。	直立
底 面	南東へ傾斜して下がる。		凹凸をもち、南側へ下がっている。
出土遺物	土師器壺34点、坏Ⅰ類2点、坏Ⅱ 類1点が埋土から出土している が、いずれも破片。一補足	なし	柱痕跡埋土最上部から坏Ⅰ類の小 破片1点が出土。
所属時期	埋土・遺物・形態の平安時代	埋土・形態の平安時代	埋土・遺物の平安時代と推定
備 考	焼土ピット 一補足	焼土ピット 一補足	柱穴状ピット 一補足

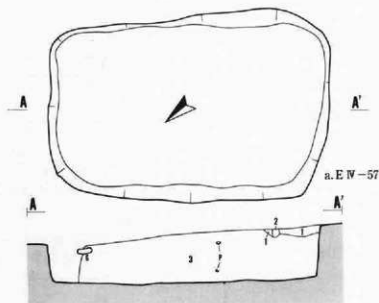
遺構名	EⅣ-54ピット	EⅣ-55ピット	EⅣ-56ピット
挿 図	遺構：第286図 d	遺構：第286図 e 遺構：第302図	遺構：第286図 f
図 版	遺構：157 e	遺構：158 ab	
検出状況 重複関係	新→EⅣ-6住居跡。不明→EⅣ -10住居跡	旧→EⅣ-152焼土遺構	
平 面 形	いくぶんいびつな円形	凸辺隅丸長方形であるがややいび つ	ややいびつな隅丸長方形
開口部径		186×285cm	64×120cm
深 さ		43cm	14～20cm
埋 土	黒褐色・黒色土層群で構成。1は 最大粒径10cm程度の焼土塊。2は 灰白色浮石を含む。	黒褐色土のほぼ厚層。灰白色浮石 は小塊状で最上部にごく少量が認 められるにすぎない。	黒褐色土の単層で、少量の炭化物 を含む。
壁		ゆるやかに外傾	外傾
底 面		平坦	ゆるやかな凹凸
出土遺物	土師器壺の破片4点と縄文土器片 3点が埋土から出土。	図示したほかには縄文土器片が28 点、土師器の破片7点、坏Ⅱ類 の破片1点が出土。	縄文土器7点のほか、土師器は壺 1点と甕？1点が出土し、いずれ も破片。
所属時期	埋土・遺物の平安時代と推定	形態・遺物の平安時代と推定	不明
備 考		形態は隣接するEⅣ-57ピットに 類似する。	柱穴状ピットP1とP2とは、共 伴・重複も含めて関係不明。



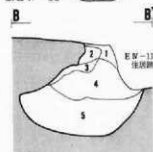
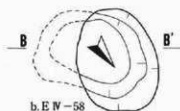
第286図 ビット実測図(3)

遺構名	E IV-57ピット	E IV-58ピット	E IV-59ピット
挿 図	遺構：第287図 a 遺物：第302図	遺構：第287図 b	遺構：第287図 c
図 版	遺構：158 c・e	遺構：158 d・f	遺構：157 f
検出状況 重複関係		不明→E IV-11住居跡（共存かどうか不明）	旧→E IV-153焼土遺構。不明→E IV-8住居跡
平 面 形	隅丸長方形	楕円形	いくぶん隅丸の長方形と推定
開口部径	190×300cm	61×112cm	100cm×不明
深 さ	40～55cm	100cm	31cm
埋 土	卓越する黒褐色土 3 層は塊状の灰白色厚石・VII層火山灰の大小塊を全体に多量含む。 →補足	浅黄色細砂を含む暗褐色土が卓越する。	黒褐色の単層
壁	ほぼ直立	北半は外傾。南半はいちじるしく奥へ入り込む。	外傾
底 面	平坦。下位に掘り方を伴う。	両曲	ゆるやかな凹凸
出土遺物	同系列のほかにも、後期主体の縄文土器片が254点と多い。土師器は竈などの破片 8 点が、竈の羽口は小破片 1 点が出土	縄文土器片 2 点、土師器の破片 2 点が出土	縄文土器片 5 点が出土
所属時期	埴土・遺物の平安時代	不明。遺物からは平安時代以降の可能性が大きい。	不明
備 考			焼土が、南東壁寄りの部分の35×90cmの範囲に分布。 →補足

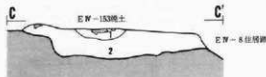
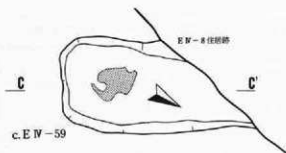
遺構名	F III-51ピット	F IV-51ピット	F IV-52ピット
挿 図	遺構：第287図 d	遺構：第287図 e 遺物：第303図	遺構：第287図 e
図 版	遺構：158 g	遺物：213	遺構：159ab
検出状況 重複関係			旧→F IV-7住居跡
平 面 形	隅丸正方形に近いが、1 辺が凸辺になる。	不整な隅丸長方形	隅丸長方形に近いが、一辺が凸辺になる。
開口部径	130×140cm	144×195cm	90×130cm
深 さ	11cm	10cm	58cm (F IV-7住居跡床面から)
埋 土	黒色～黒褐色土の単層	黒褐色土の単層	VII層火山灰の大小塊が全体に含まれ、とくに下半に多い。
壁	外傾	直立	直立～外傾
底 面	平坦	凹凸	ほぼ平坦
出土遺物	なし	なし	なし
所属時期	不明	不明	縄文時代で、F IV-53ピットと同時期と推定
備 考			形や埋土が隣接する F IV-53ピットに似る。



- 1・2, 黒褐色。
3, 黒褐色。塊状の灰白色浮石と火山灰を全体に多量に含む。



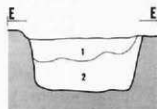
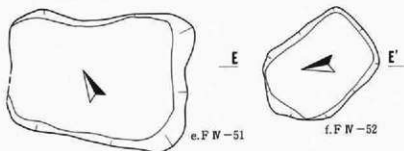
- 1, 黒褐色。
2, 褐色。
3, 黒褐色。
4・5, 暗褐色。浅黄色細砂を含む。
一部では細砂が卓越する。



- 1, E IV-153機土に伴う層。
2, 黒褐色。火山灰塊を含む。



- 1, 黒色～黒褐色。

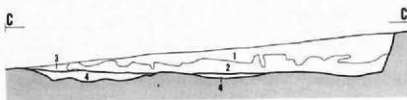
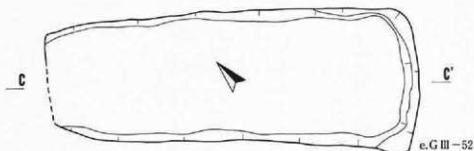
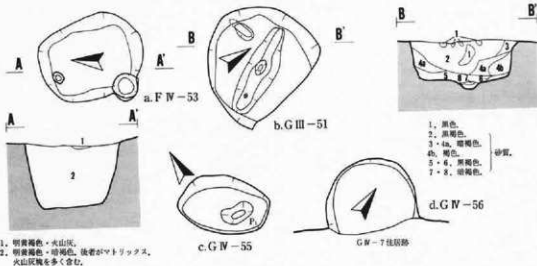


- 1, 明黄褐色・黒褐色。底部がマトリックス、
大小の火山灰塊を含む。
2, 明黄褐色・暗褐色。浅黄の大型塊がマト
リックス、大小の火山灰塊を多量に含む。

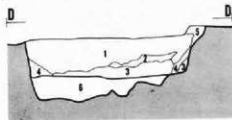
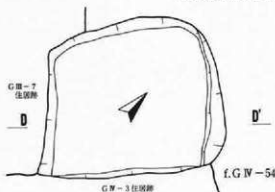
第287図 ビット実測図(4)

遺構名	FIV-53ビット	GIII-51ビット	GIII-52ビット
挿 図	遺構：第288図 a	遺構：第288図 b	遺構：第288図 e
図 版	遺構：159 c	遺構：159 e・g	遺構：159 d
検出状況 重複関係	旧→FIV-7住居跡	旧→FIII-251溝跡	
平 面 形	隅丸長方形に近いが、一辺が凸凹になる。	不整形円形	隅丸長方形。北西壁の大部分を消失
開口部径	85×110cm	107×120cm	97～146×395cm
深 さ	69cm (FIV-7住居跡床面から)	38～51cm	40cm (最深部)
埋 土	Ⅶ層火山灰堆を多く含む暗褐色土の単層。1層はⅦ層火山灰で非常に硬く、貼り床と考えられる。	黒褐色や暗褐色の砂質土が卓越	1層は灰白色浮石のほかに暗紫灰色砂状粒子の集合したものを全体に含むが、後者の起源や性質は不明
壁	わずかに外傾	わずかに外傾	外傾
底 面	北側へいくぶん傾斜して下がる。	平坦で、一部が溝状にくぼむ。	ゆるやかな凹凸。部分的な貼り床があり、下位に掘り方を伴う。
出土遺物	なし	なし	なし
所属時期	重複関係の縄文時代で、後期前葉あるいはそれ以前	不明	埋土・形迹の平安時代と推定
備 考			

遺構名	GIV-54ビット	GIV-55ビット	GIV-56ビット
挿 図	遺構：第288図 f	遺構：第288図 c	遺構：第288図 d
図 版	遺構：159 f・160 a		遺構：160 b
検出状況 重複関係	新→GIII-7住居跡。旧→GIV-3住居跡	「ダメ押し」時に検出。底部近くのみ確認	「ダメ押し」時に検出。GIV-7住居跡には切られている可能性が大。底部近くのみを確認
平 面 形	ややいびつな方形	不整形円形状	円形と推定
開口部径	165×190cm	62×98cm	96cm×不明
深 さ	55cm	23～35cm	12cm
埋 土	卓越するのはⅦ層火山灰の大小塊を多数に含むにように黄褐色土。火山灰の最大粒径は100mm土。	黒褐色の単層	Ⅵ層に似た層相の黒色土の単層
壁	外傾	外傾	} 浅皿状
底 面	ほぼ平坦。全体規模の掘り方を伴う。	いくぶん傾斜して南側へ下がる。	
出土遺物	土師器製の破片2点が底面から出土し、うち1点は砂意。	縄文土器片1点が出土	なし
所属時期	重複関係・形態・遺物の平安時代	不明	不明
備 考			



1. 黒色。灰白色浮石・暗紫灰色砂状粒子・細砂を含む。
2. 黒褐色。
3. 黒褐色。汚れ火山灰塊を含む。
4. 黄褐色～黒褐色。固り方埋土。



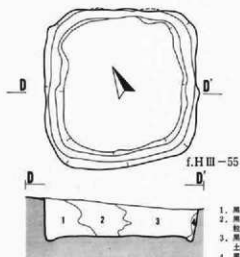
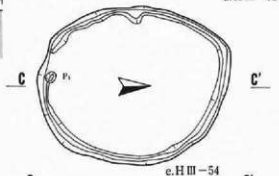
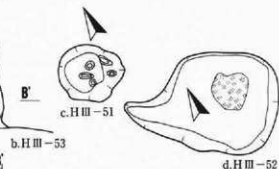
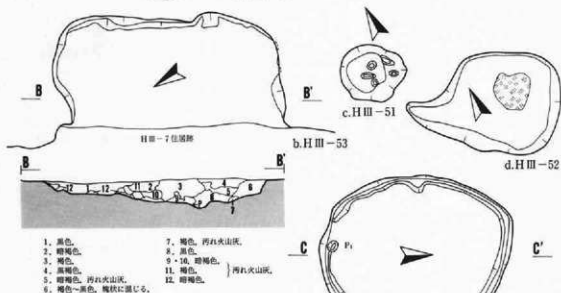
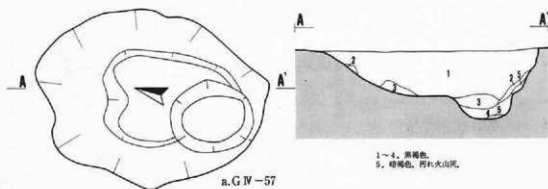
1. に近い黄褐色。大小の火山灰塊を多量に含む。
2. 灰黄色。砂質。
3. 暗褐色。火山灰塊を含む。
- 4・5. 黒褐色。
6. 黄褐色～黒褐色。固り方埋土。

0 1m

第288図 ピット実測図(15)

遺構名	GⅣ-57ピット	HⅢ-51ピット	HⅢ-52ピット
挿 図	遺構：第289図 a 遺物：第303図 1	遺構：第289図 c	遺構：第289図 d
図 版	遺構：160 cd	遺構：160 e	
検出状況 重複関係	「ダメ押し」時に検出。		
平 面 形	いびつな楕円形	いびつな円形	不整形
開口部径	190×248cm	60×70cm	110×165cm
深 き	50～74cm	13～17cm	4～11cm
埋 土	黒褐色の土層群が卓越。汚れ火山灰は壁際や底面直上の一部を構成。	多量の木炭を含む黒色土の単層	黒色土の単層。層厚 1 cm 土の木炭層が中部に広がり、上位に灰白色浮石の薄層が認められる。また焼土塊も多量に伴う。
壁	外傾	浅皿状。底面には小凹凸がある。	浅皿状
底 面	南壁寄りが円形ピット状に一段低くなる。		
出土遺物	図示例のほかに、繊維を含む縄文土器片 1 点が出土。	なし	土師器壺 11 点、坏皿類 1 点、縄文土器 1 点が出土し、いずれも破片。
所属時期	埋土・遺物の縄文時代前期前半と推定	不明	埋土・遺物で平安時代
備 考		多量の木炭を含む点は隣接する HⅢ-52ピットに似る。	焼土ピットか。 →補足

遺構名	HⅢ-53ピット	HⅢ-54ピット	HⅢ-55ピット
挿 図	遺構：第289図 b	遺構：第289図 e	遺構：第289図 f
図 版	遺構：160 f	遺構：161 ab	遺構：161 cd
検出状況 重複関係	新→HⅢ-7 住居跡		
平 面 形	隅丸長方形が基本形と推定	わずかにいびつな楕円形	隅丸方形
開口部径	240cm×不明	166×202cm	160～170cm
深 き	14～30cm	25～33cm	28～42cm
埋 土	細分可能であったが、汚れ火山灰が多く、褐色～黒色土が不規則な地層を示す。 →補足	最上部をのぞいては、Ⅶ層起源の火山灰や汚れ火山灰の大小塊を全体に含む。	灰白色浮石が全体に点在するが、小塊が主である。2層は粒状や塊状のⅦ層火山灰を含む。
壁	直立～外傾	直立	直立
底 面	不規則な凹凸を示すのは掘り方の底面のためであろう。	ゆるやかな凹凸。中央部付近では掘り方を伴う。	平坦
出土遺物	坏Ⅰ類とⅡ類の破片が各 1 点ずつ出土	土師器壺 3 点、坏Ⅰ類 1 点、縄文土器 1 点が出土し、いずれも破片である。	土師器壺 22 点、坏Ⅰ類 2 点、縄文土器 2 点が出土し、いずれも破片である。
所属時期	埋土の補足説明・遺物で平安時代	形態・遺物で平安時代	形態・埋土・遺物で平安時代
備 考		壁溝がほぼ一周。P 1 は共伴しない。	壁溝が一周する。



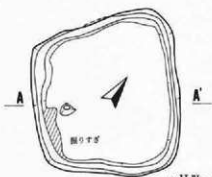
- 1, 黒褐色, 灰白色浮石の小塊が点在する.
2, 黒褐色, 小塊主体の灰白色浮石を少量含むほか, 粒状~塊状の火山灰がみられる.
3, 黒褐色, 灰白色浮石の小塊が点在するほか, 黒色土塊を含む.
4, 黒褐色, 火山灰の小塊を含む.

0 1m

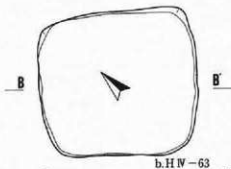
第289図 ビット実測図(16)

遺構名	HIV-62ピット	HIV-63ピット	I III-51ピット	I III-52ピット
構 造	遺構：第290図 a	遺構：第290図 b	遺構：第290図 c	遺構：第290図 d
図 版	遺構：162 a～c	遺構：162 d	遺構：162 e	遺構：162 f
検出状況 重複関係	上部を削制されている。 新→HIV-109塚とし穴	削制がいちじるしく、底 面の一部も失なわてい る。		
平 面 形	隅丸台形	隅丸方形	楕円形	楕円形
開口部径	126×171×156cm	152×168cm	107×132cm	142×175cm
深 さ	16cm	(掘り方) 6～17cm	15～24cm	31cm
埋 土	小塊を主にした灰白色浮 石やVII層火山灰が全体的 に含まれ、少量が点存す る。	掘り方埋土＝底面構築土 以外では黒褐色土の薄層 を観察できたにすぎな い。	黒色土の単層	黒色土の単層。粒径40cm 土の重角礫2個が遺った 状態で底面直上に検出 された。
壁	直立～外傾	不明	浅皿状	浅皿状
底 面	南西壁端が不規則に高く なるほかはほぼ平坦 →補足	ゆるやかな凹凸をもつ か？		
出土遺物	土師器甕の破片5点と縄 文土器片2点が埋土から 出土。	土師器甕の破片2点と鐵 線を含む縄文土器1点が 埋土から出土。	なし	土師器甕の破片3点が埋 土から出土。
所属時期	形態・埋土・遺物の平安 時代	形態・遺物の平安時代	不明	
備 考	壁溝が一同。南西壁沿い では一部を掘りすぎたた め、幅が広い。			

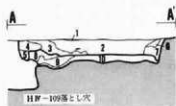
遺構名	I III-53ピット	I III-54ピット	I III-55ピット
構 造	遺構：第290図 e	遺構：第290図 f	遺構：第290図 g
図 版	遺構：163 a	遺構：163 b	遺構：163 c
検出状況 重複関係			
平 面 形	円形	ほぼ円形	いびつな楕円形
開口部径	96×100cm	138×142cm	85×132cm
深 さ	25cm	18～22cm	12cm
埋 土	黒色土の単層で、炭化物やVII層火 山灰塊を少量含む。	黒色土の単層	黒色土の単層
壁	浅皿状。中央部付近にある小ピ ットは径12cm・深さ4cm	直立～外傾	浅皿状。底面はゆるやかな凹凸 を示す。
底 面		ほぼ平坦	
出土遺物	後期または晩期に属する縄文土器 片1点が埋土から出土。	土師器甕の破片2点が埋土から出 土。	土師器甕の破片2点が埋土から出 土。
所属時期	不明	不明	不明
備 考			



a.HW-62



b.HW-63

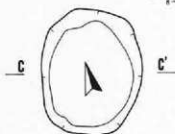


HW-109 断面

1. 黒褐色、火山灰の小塊を少量含む。
2. 黒色～黒褐色、灰白色砂石の小塊が点在するほか火山灰の小塊を少量含む。
3. 黒褐色、火山灰の小塊を少量含む。
4. 黒色、粒状～小塊状の灰白色砂石が点在する。
5. 黒色、硬質粘土。
6. 暗褐色。
7. 黒色～黒褐色。
- 8～10. 黄褐色～黒色、細り方粘土。



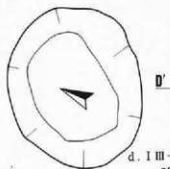
1. 黒褐色。
2. 明黄褐色～黒色、塊状の火山灰、汚れた火山灰がマトリックス。
3. 黄褐色～黒色、黒色土がマトリックスで、大小がある塊状の褐色土・火山灰を含む。(2・3は細り方粘土。)



c.I III-51



1. 黒色。



d.I III-52



1. 黒色。



e.I III-53



1. 黒色、炭化物・火山灰塊を少量含む。



f.I III-54



1. 黒色。



1. 黒色。



g.I III-55



第290図 ピット実測図(17)

遺構名	I III-56ビット	I III-57ビット	I III-58ビット
挿 図	遺構：第291図 a	遺構：第291図 b	遺構：第291図 c
図 版	遺構：163 ef	遺構：164 ab	遺構：163 d
検出状況 重複関係	新→I III-2 住居跡		
平 面 形	阪丸方形	円形	いびつな楕円形
開口部径	140×141cm	136×136cm	95×125cm
深 さ	48～56cm	69cm	24～30cm
埋 土	Ⅶ層火山灰と浮石の大小の塊が全体に含まれる。	Ⅶ層起部の火山灰や汚れ火山灰が中。下部では卓越する。	黒褐色土の単層で、微量の炭化物を含む。
壁	直立→わずかに内傾	外傾	外傾
底 面	西側がわずかに高いが、ほぼ平坦 →補足	東壁際にみられる楕円形の落ち込みは掘りすぎの可能性はある。そのほかは平坦	平坦
出土遺物	土師器壁の破片 1 点と縄文土器片 1 点が埋土から、土師器壁の破片 1 点が底面から出土。	土師器壁の破片 3 点が埋土から出土。	なし
所属時期	形態・遺物の平安時代	不明	不明
備 考	壁溝が一周する。		

遺構名	I III-59ビット	I IV-55ビット	KIV-51ビット
挿 図	遺構：第291図 d	遺構：第291図 e	遺構：第291図 f
図 版	遺構：164 c	遺構：164 ef	遺構：165 ab
検出状況 重複関係		旧→I IV-4 住居跡 →補足	
平 面 形	円形	円形	阪丸正方形
開口部径	77×77cm	130×134cm	195×200cm
深 さ	14～19cm	54～59cm	92～98cm
埋 土	黒褐色土の単層。木炭を多量に含み、とくに上半に多い。	中・下部を占める 4 層はⅦ層下位起部の粘土質シルトで、人為的な埋め灰しに伴うもの →補足	Ⅶ層火山灰の大小の塊を含む黒褐色・黒色土が中・下部に分布。下部の 9 層に灰白色浮石がみられる。
壁	直立	円筒形	ほぼ直立。開口部の一部が外傾する。
底 面	ゆるやかな凹凸		平坦
出土遺物	なし	なし	土師器壁 48 点、坏 1 類 1 点が埋土から出土し、いずれも破片。要底部 1 点は砂底。
所属時期	不明	不明	形態・埋土・遺物の平安時代
備 考			I IV-3 住居跡と共存すると推定。



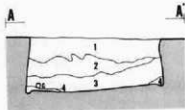
a. I III-56



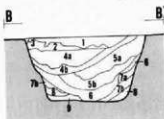
b. I III-57



c. I III-58



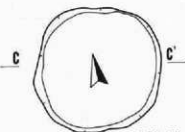
1. 黒褐色。火山灰層を多く含む。
2. 褐色。隆状の火山灰と浮石を多く含む。
3. 暗褐色。火山灰・浮石の小塊を含む。
4. 黒色。炭化物を含む。



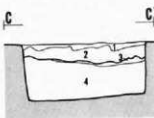
1. 黒色～黒褐色。火山灰を多量に含む。
2. 黄褐色。汚れ火山灰。
3. 暗褐色。
- 4a・4b. 黄褐色～黒褐色。
- 5a・5b. 黄褐色～暗褐色。火山灰が卓越。
6. 黒色。
- 7a・7b. 褐色。汚れ火山灰。
8. 黒色。
9. 明黄褐色。火山灰が卓越。



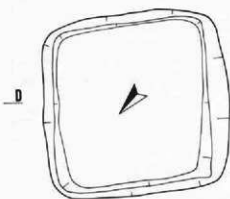
d. I III-59



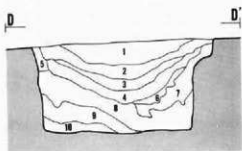
e. I IV-55



1. 黄褐色～黒褐色。
2. 黄褐色。
3. 黒色。
4. 浅黄色。粘土質シルトがマトリックス。



f. K IV-51



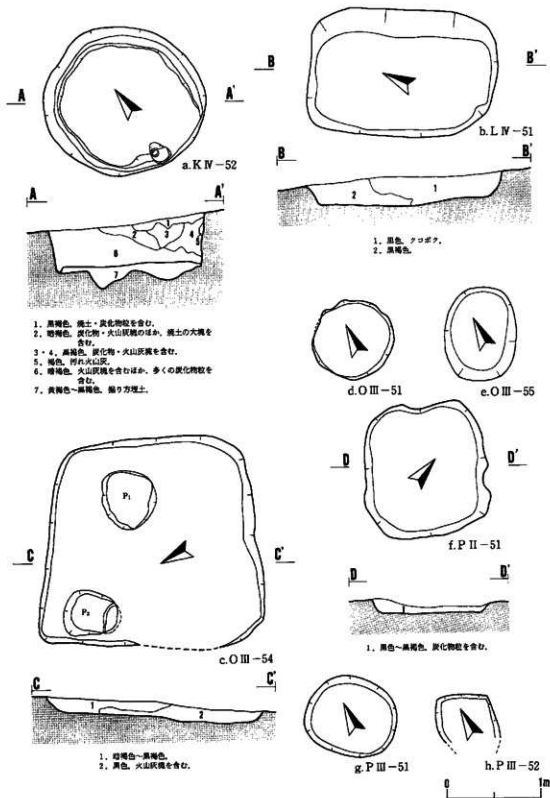
1. 黒色。
- 2・3. 黒褐色。
4. 黒色。
- 5・6. 黒褐色。
7. 黒色。
8. 黒褐色。火山灰層を含む。
9. 黒色。灰白色浮石を多く含む。
10. 黒色。火山灰層が卓越。

0 1m

第291図 ピット実測図(1)

遺構名	KIV-52ビット	LIV-51ビット	OIII-51ビット
挿 図	遺構：第292図 a	遺構：第292図 b	遺構：第292図 d 遺物：第303図
図 版	遺構：165 cd	遺構：164 d	遺構：166 c 遺物：210
検出状況 重複関係			「グ×押し」時に検出したもので、下部のみが残存
平面形	ややいびつな円形	隅丸長方形	円形
開口部径	157×172cm	135×200cm	81×84cm
深 さ	40～50cm	21～30cm	14～17cm
埋 土	炭化物が全体に含まれるほか、粒状～塊状の焼土が上・中部に含まれる。	1 層のクロボクは灰白色浮石起源と推定	黒色土の単層で、VII層起源の汚れた火山灰が大塊状に含まれる。
壁	わずかに外傾	浅皿状。底面はゆるやかな凹凸	浅皿状
底 面	平坦。全体親縁の廻り方を伴う。	北半分は浅い廻り方を伴う。	
出土遺物	土師器壺 3 点、須恵器壺 1 点が埋土から出土し、いずれも破片。	なし	図示例831は潰れた状態で底面から出土したもの。略完形。
所属時期	形態・遺物で平安時代	平安時代と推定	遺物の編年時代晩期
備 考	KIV-1 住居跡に共存するものと推定。	LIV-1 住居跡に共存するものと推定。	

遺構名	OIII-54ビット	OIII-55ビット	P II-51ビット
挿 図	遺構：第292図 c	遺構：第292図 e	遺構：第292図 f
図 版	遺構：166 d		
検出状況 重複関係			新→P II-1 住居跡
平面形	隅丸台形	楕円形	いびつな隅丸方形
開口部径	220×195～240cm	76×100cm	131×135cm
深 さ	11～16cm	14cm	8～15cm
埋 土	暗褐色～黒色土で構成。2 層はVII層火山灰塊を含む。	黒褐色土の単層。灰白色浮石と木炭を含むが、微量。	黒色～黒褐色土の単層
壁	外傾	浅皿状	浅皿状。木炭の層が底面のほぼ全体を覆っていた。
底 面	南西側へ傾斜して下がる。		
出土遺物	土師器壺 3 点、坏 I 類 27 点、坏 II 類 1 点、縄文土器 1 点が出土し、いずれも破片。	土師器壺の破片 1 点が埋土から出土。	なし
所属時期	形態・遺物で平安時代	不明。平安時代か？	不明
備 考	P 1 (径 57×62cm・深さ 29cm) の位置づけは不明。P 2 は焼瓦か。		



第292図 ビット実測図(19)

遺構名	OⅢ-53ビット	PⅢ-51ビット	PⅢ-52ビット
挿 図	遺構：第293図 a	遺構：第292図 g 遺物：第303図	遺構：第292図 h
図 版	遺構：166 ab	遺構：167 e	
検出状況 重複関係			南側を掘りすぎたため、形態や規模などは不明。
平 面 形	わずかにいびつな円形	わずかにいびつな円形	不整な方形か？
開口部径	375×410cm	86×98cm	65cm×不明
深 さ	125～140cm	29cm	12cm
埋 土		黒褐色土の単層。微量の炭化物を含む。	黒褐色土の単層。焼土の薄層を中部に挟むほか、微量の灰白色浮石・炭化物を含む。
壁	開口部が外傾するほかはわずかに内傾や内湾	直立	} 浅皿状
底 面	ほぼ平坦	平組	
出土遺物	土師器壺の破片7点、坏Ⅰ類の破片1点が主に埋土上部から出土。	図示例のほかには、土師器壺の破片1点が埋土から出土。	なし
所属時期	形態・埋土・遺物の平安時代	不明	不明。灰白色浮石が認められる点では平安時代の可能性がある。
備 考	同タイプのなかでは最大規模		

EⅢ-57ビット：焼土は南東壁寄りの位置に形成され、円形である。焼土は上下の2層が確認できる。下位の焼土は底面が直接円形状に焼けている。灰や木炭がその上を1.5～3cmの厚さで覆い、上位の焼土はその上に形成されているが、薄層である。

EⅢ-58ビット：焼土は底面から3cm上位に形成され、層厚は4cmである。北西部を中心とした壁際に多量の本炭を伴い、一部は大型である。木炭は焼土を挟んだ上下に認められる。

EⅢ-59ビット：柱痕跡とみられる部分の平面形はいびつな方形で、47cmの大きさである。埋土の性状や硬さなどで掘り方とは明瞭に区別できる。単独で存在する大型のもので、柱穴状ビットに分類できるが、どのような性格のものかは分からない。

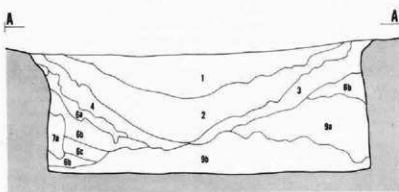
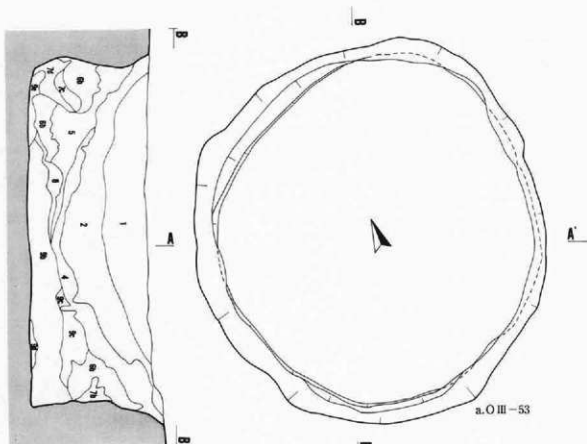
EⅣ-59ビット：焼土は現地性のものと推定したが、確実なことは不明である。

HⅢ-52ビット：EⅡ・EⅢ区の焼土ビットとは異なり、現地性焼土の明瞭な広がり認められない。

CⅢ-62 (103) ビット～OⅢ-52 (115) ビットの5基：調査時はビットとして分類し、登録してきた。しかし、後に検討を加えた結果、落とし穴として再分類し、2種類の遺構番号を与えている。

〈その他〉

表に記載したほかに、DⅡ-1住居跡（平安時代）の埋土を切っている1基がある。遺構名



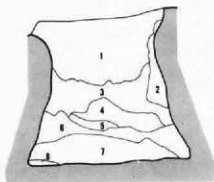
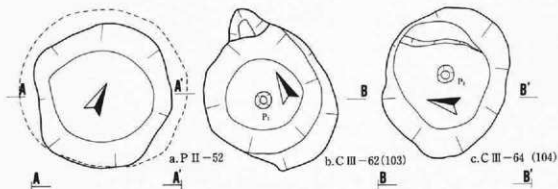
- 1・2. 黒褐色。
 3. にぶい黄褐色。浮石混入。
 4. にぶい黄褐色～黒褐色。浮石塊を多く含む。
 5. にぶい黄褐色～黒色。浮石塊を多く含む。
 6a～6c. 黒褐色～黒色。一部に灰白色浮石塊を含む。
 7a～7c. 褐色。 } 汚れ火山灰。
 7d. 黄褐色。
 8. にぶい黄褐色。
 8a～8c. にぶい黄褐色～黒色。浮石塊がマトリックス。
 9a～9c. 明褐色～黒色土が混じる。

0 1m

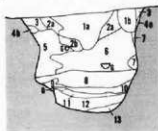
第293図 ピット実測図(20)

遺構名	PⅡ-52ピット	CⅢ-62 (103) ピット	CⅢ-64 (104) ピット
挿 図	遺構：第294図 a	遺構：第294図 b 遺物：第299図	遺構：第294図 c 遺物：第299図
図 版	遺構：167 cd	遺構：151 c 遺物：209・210・216	遺構：152 a・c 遺物：215
検出状況 重複関係	旧→PⅡ-1 住居跡	堀土断面図を作成しないで掘り上げている。	
平面形	いびつな円形	開口部が崩壊し、ややいびつな円形	いびつな円形
開口部径	125×150cm	(132)×150cm	128×160cm
深 さ	160cm	120cm	105cm
埋 土	黒褐色・黒色土が優占	黒褐色土が最上部を占め、その下位は汚れ火山灰が卓越する。 →補足	上半は褐色～黒色土、下半は汚れ火山灰や褐色土などが優占的。
壁	} フラスコ形	外傾	外傾しているが、不規則な凹凸。
底 面		平坦。副穴 P 1 がある。 →補足	いくぶん凹凸。副穴 P 1 →補足
出土遺物	なし	図示例は黒褐色土から出土。そのほか783と同一個体で接合しない32点ほかがある。 →補足	図示例のほか縄文土器片3点が埋土から出土。いずれも破損を含み、図示例と同時期
所属時期	形態・埋土の縄文時代	遺物・形態の縄文時代前期前葉またはそれ以前。	遺物・埋土・形態の縄文時代前期前葉またはそれ以前
備 考		円筒形落とし穴 →一括補足	円筒形落とし穴 →一括補足

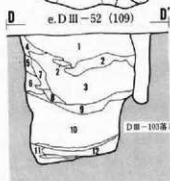
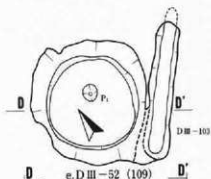
遺構名	CⅢ-67 (105) ピット	DⅢ-52 (109) ピット	OⅢ-52 (115) ピット
挿 図	遺構：第294図 d	遺構：第294図 e 遺物：第301図	遺構：第295図 a
図 版	遺構：152 ef・153 a	遺構：153 ef 遺物：210・215	遺構：167 ab
検出状況 重複関係	旧→CⅢ-11住居跡	旧→DⅢ-103落とし穴	旧→OⅢ-1住居跡
平面形	いびつな円形	ほぼ円形	ほぼ円形
開口部径	160×195cm	127×132cm	190×200cm
深 さ	119cm	126～137cm	127cm
埋 土	上半は黒褐色土、下半は黄褐色～褐色土が卓越。下半は埋土火山灰起源が優占する。	上半は暗褐色・黒褐色土、下半は埋土下の浮石起源の明褐色土が卓越する。	黒褐色・黒色土が上下部とも中央を占めるが、重層や中部中央黄褐色・暗褐色系の土が卓越。
壁	外傾し、中部から開口部へ大きく開く。	内傾気味に立ち上がり、上半は直立～内傾。	内傾して立ち上がり、中・下部から外傾に転じる。
底 面	平坦。副穴 P 1 →補足	東側へ傾斜して上がる。副穴 P 1 →補足	ほぼ平坦。副穴 P 1 を伴う。 →補足
出土遺物	なし	図示した押型文は埋土から出土。埋土上部からは縄文を含む縄文土器片2点が出土	円筒下層式 d と推定される土器片1点が埋土最上部から出土したが、掘入であろう。
所属時期	埋土・形態のCⅢ-62・64ピットと同時期と推定。	埋土・形態のCⅢ-67ピットと同。	埋土・形態のCⅢ-67ピットと同。
備 考	円筒形落とし穴 →一括補足	円筒形落とし穴 →一括補足	円筒形落とし穴 →一括補足



- 1a・1b. 黒色。
2a. 黒褐色。炭化物を少量含む。
2b～4b. 黒褐色。
5. 暗褐色。
6. 黒色～黒褐色。
7. 褐色。汚れ火山灰。
8. 褐色。汚れ火山灰。
9. 暗褐色。
10. 褐色。浮石・汚れ火山灰・細砂を含む。
11. 黒色。
12. 褐色。
13. にぶい黄色。細砂。



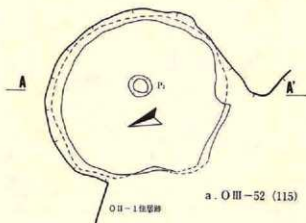
1. 黒色～黒褐色。
2. 暗褐色。汚れ火山灰。
3. 黒褐色。明褐色土の塊を含む。
4・5. 黒褐色。
6. 褐色。
7. 黒褐色。粒状の暗褐色土を含む。
8. にぶい黄褐色。



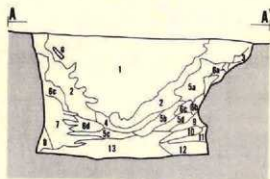
1. 黒褐色。
2・3. 暗褐色。
4. 黒褐色。
5. 褐色。汚れ火山灰。
6. 暗褐色。
7. 暗褐色。
8. 暗褐色。
9. 褐色。
10. 明褐色。浮石。
11. 黒褐色。
12. 明褐色。

0 1m

第294図 ピット実測図(2)



a. O III-52 (115)



- | | | |
|----------------------|---------------------|----------|
| 1. 黒色。 | 6c. 黄褐色。 | } 汚れ火山灰。 |
| 2・3. 暗褐色。 | 6d. にぶい黄褐色。 | |
| 4. 黒色。 | 7. 明黄褐色。浮石。 | |
| 5a・5b. 暗褐色。汚れ火山灰が卓越。 | 8. にぶい黄褐色。 | |
| 5c. 暗褐色。 | 9. 10. 黒褐色。 | |
| 5d. 暗褐色・明黄褐色。 | 11. にぶい黄褐色。汚れ火山灰卓越。 | |
| 6a. 明黄褐色。火山灰塊。 | 12. 黒褐色。炭化物粒を僅かに含む。 | |
| 6b. 黄褐色。浮石層。 | 13. 黒色。 | |



第295図 ピット実測図(2)

を与えていないが、集計上は1基として数えている。不整円形の浅皿状ピットで、径は125cm×不明、深さは10cmである。所属時期は不明である。

6. 落とし穴

溝状の落とし穴は形状を記号化している。これは、開口部の平面形をI型とII型、縦断面形をA～D、横断面形を1～3に分類し、その組み合わせから溝I A 1のように表わしたものである(「まとめ」の項を参照)。なお、一補足とあるのは次に一括して説明を加えている。重複する遺構との関係は、新→旧→不明→のように、落とし穴を基準にして表わしている。

補足説明

〈検出状況・重複関係〉

D III-104落とし穴：「ダメ押し」としたのは、平安時代を主

とした遺構群の精査のあと検出面を下げて遺構の有無を確認して行ったことを指す。最終的には全面をⅧ層上面まで下けている。D III-105落とし穴ほかでも同様の意味である。

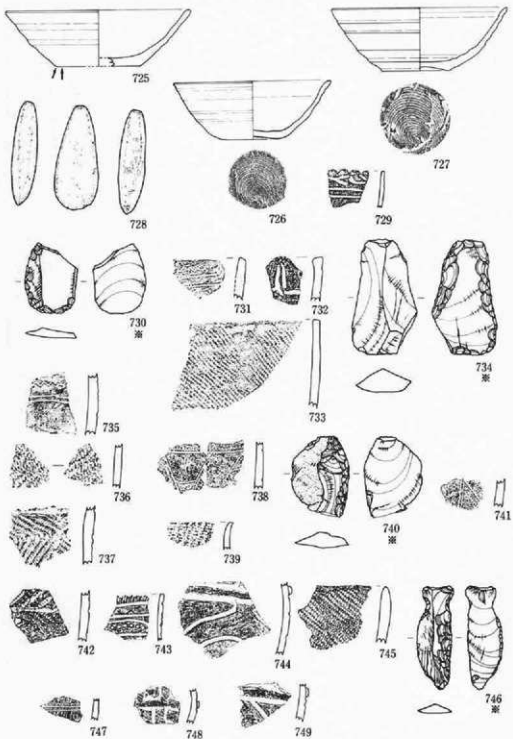
P III-101～105・108落とし穴：Ⅵ層より上位の堆積物が厚く、Ⅶ層を検出面とするとその下底部しか確認できなかった。

〈副穴〉

副穴の計測値は下記のもの以外は表や図中に記載している。

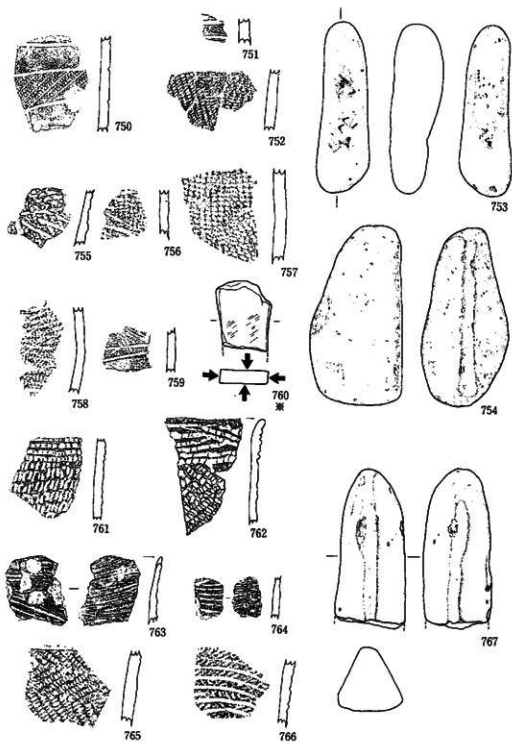
K III-101落とし穴：P 1 (径9cm・深さ11cm)・P 2 (径・深さとも7cm)・P 3 (径9cm・深さ7cm)・P 4 (径7cm・深さ27cm)・P 5 (径8cm・深さ12cm)・P 6 (径・深さとも6cm)

K III-102落とし穴：P 1 (径10cm・深さ18cm)・P 2 (径11cm・深さ10cm)・P 3 (径12cm・



$$S = \frac{1}{2}(\text{mm}) \cdot \frac{1}{2}$$

第296図 ビット出土遺物(2)

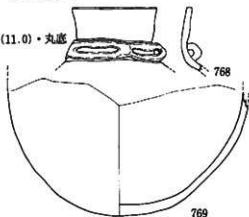


第297図 ビット出土遺物(3)

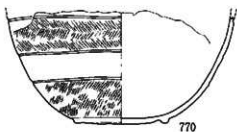
$$S = \frac{1}{2}(\text{cm}) \cdot \frac{1}{2}$$

6.8 • (4.5) • —

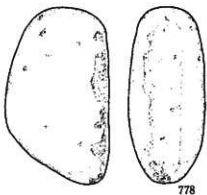
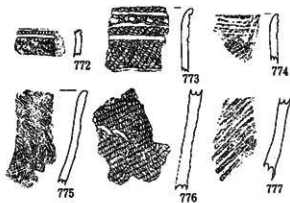
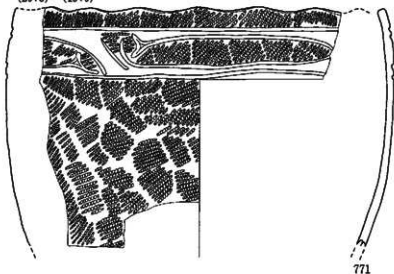
— • (11.0) • 丸底



— • (9.0) • 7.5

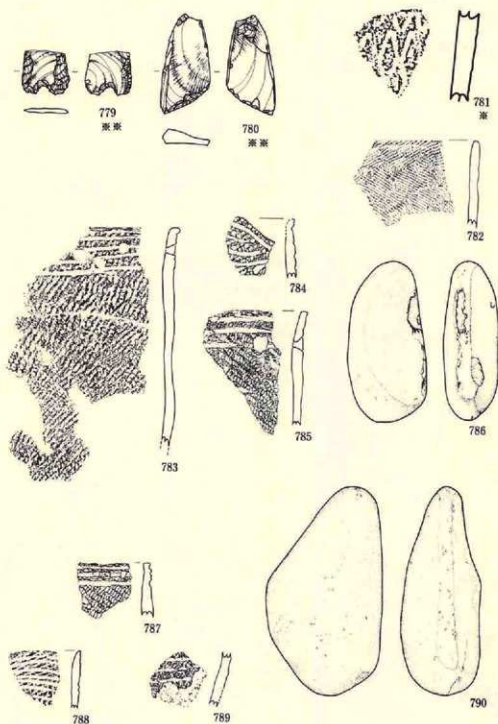


(29.6) • (19.0) • —



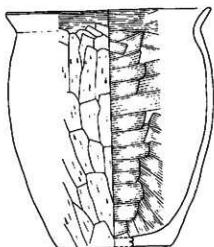
S = $\frac{1}{2}$

第298図 ビット出土遺物(4)

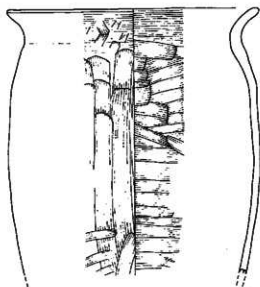


第299図 ピット出土遺物(5)

$$S = \frac{1}{1}(\text{栗}) \cdot \frac{1}{2}(\text{栗栗}) \cdot \frac{1}{3}$$



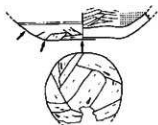
791



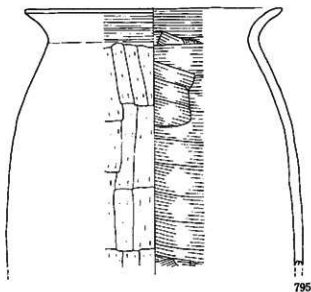
792



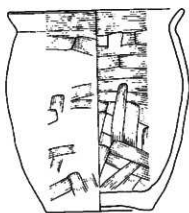
793



794



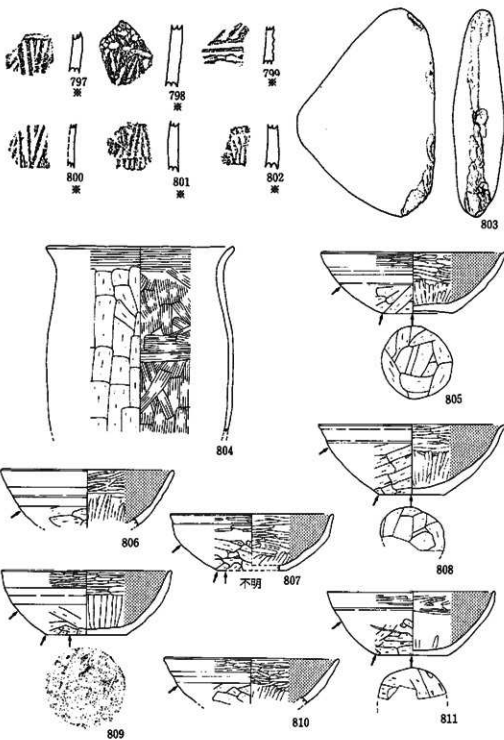
795



796

S = $\frac{1}{2}$

第300図 ビット出土遺物(6)



$$S = \frac{1}{2}(\text{素}) \cdot \frac{1}{2}$$

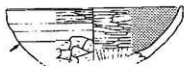
第301図 ビット出土遺物(7)



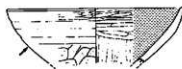
不明 812



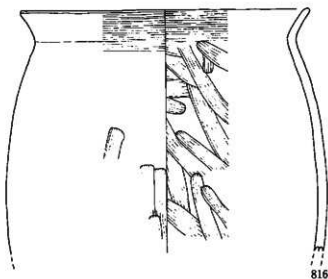
813



814



815



816



817



818



819



820



821



822



823



824



825



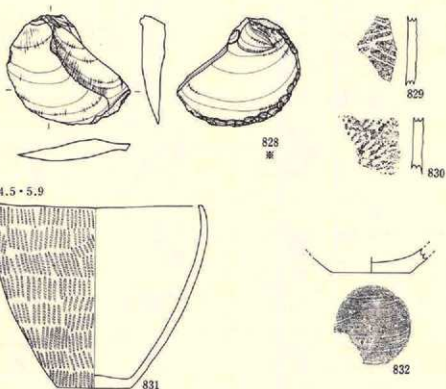
826



827

第302図 ビット出土遺物(8)

S = $\frac{1}{2}$



16.5・14.5・5.9

No.	地点・層位	種類・図柄	外 面				内 面				計 測 値 : cm				分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	口 一 辺	底 部	口 一 辺	口 径	口 径	口 径	口 径	口 径		
725	E II-51, 埋土下層	片	ロクロ痕	ロクロ痕	面転糸切り+ヘラケズリ	ロクロ痕	×	14.9	4.4	5.6	100	100	100	100		
726	〃	〃	〃	〃	面転糸切り	〃	×	12.6	4.6	4.6	100	100	100	100		
727	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	14.1	5.0	5.5	〃	〃	〃	〃		
794	D III-51, 埋土下層	〃	—	ロクロ痕+ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミダキ	〇	—	(1.4)	6.0	100	100	100	100		
805	E II-52, 埋土	〃	ヘラミダキ	ロクロ痕+ヘラケズリ	〃	〃	〇	14.8	4.9	5.6	〃	〃	〃	〃		
806	〃	〃	ロクロ痕	ロクロ痕+ヘラケズリ	—	〃	〇	14.0	(4.5)	—	〃	〃	〃	〃		
807	〃	〃	ヘラミダキ	ヘラケズリ	ヘラケズリ (詳細不明)	〃	〇	13.1	4.5	(5.6)	100	100	100	100		
808	〃	〃	ロクロ痕	〃	ヘラケズリ	〃	〇	15.0	5.6	(5.3)	〃	〃	〃	〃		
809	〃	〃	ヘラミダキ	ロクロ痕+ヘラケズリ	面転糸切り+ヘラケズリ	〃	〇	13.6	5.1	6.5	100	100	100	100		
810	〃	〃	〃	ロクロ痕+ヘラケズリ	—	〃	〇	14.0	3.6	—	〃	〃	〃	〃		
811	〃	〃	〃	ロクロ痕+ヘラケズリ	ヘラケズリ (全面か)	〃	〇	13.4	5.1	(5.6)	100	100	100	100		
812	〃	〃	〃	ロクロ痕+ヘラケズリ	ヘラケズリ (詳細不明)	〃	〇	14.0	4.9	(4.8)	〃	〃	〃	〃		
813	〃	〃	〃	ロクロ痕+ヘラケズリ	—	〃	〇	14.2	(4.6)	—	〃	〃	〃	〃		
814	〃	〃	〃	ロクロ痕+ヘラケズリ	—	〃	〇	14.2	(4.2)	—	〃	〃	〃	〃		
815	〃	〃	〃	ロクロ痕+ヘラケズリ	—	〃	〇	14.2	(4.3)	—	〃	〃	〃	〃		
832	D III-51, 埋土	〃	—	—	面転糸切り	ロクロ痕	×	—	(1.2)	6.3	100	100	100	100		

No.	地点・層位	種類・図柄	外 面				内 面				計 測 値 : cm				分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	口 一 辺	底 部	口 一 辺	口 径	口 径	口 径	口 径	口 径		
791	D III-51, 埋土下層	土師製	横ナデ	ヘラケズリ	ナデ	横ナデ	ヘラナデ	側 部	側 部	16.4	18.9	(18.9)	100	100		
792	〃	〃	〃	ヘラナデ	—	〃	〃	—	—	20.2	(21.1)	—	100	100		
793	〃	〃	〃	ヘラケズリ	—	〃	〃	—	—	13.8	(6.5)	—	100	100		
795	D III-51, 埋土	〃	〃	ヘラナデ	—	〃	〃	—	—	20.6	(20.7)	—	100	100		
796	〃	〃	〃	ナデ	木製底	〃	ナデ	ナデ	ナデ	14.2	16.1	8.5	100	100		
804	E II-51, 埋土	〃	〃	ヘラケズリ	—	〃	ヘラナデ	—	—	18.1	(14.7)	—	〃	〃		
816	E III-51, 埋土・埋土	〃	〃	ナデ+化粧粘土	—	〃	〃	—	—	23.1	(19.3)	—	100	100		

第303図 1 ピット出土遺物(9)

$$S = \frac{1}{2} (\text{cm}) \cdot \frac{1}{3}$$

No.	地点・層位	発掘部位	器形・外面	内面・胎土	分形	備考
729	第II-51. 埴土	鉢	口縁部 小波状口縁・三叉文・横位平行沈線・LR	ミガキ	V群1層	
731	C II-52. 埴土上部	深鉢	波状口縁・沈線文・小刻突文・口唇内面は刻目文	ミガキ	1群3層	735と同一体
732	埴土下部	深鉢	波状口縁・沈線文・LR・研磨痕	ミガキ	V群1層	
733	埴土	深鉢	LR	ミガキ	後・晩期	
735	C II-53. 埴土	深鉢	波状口縁・平行沈線文・3個1組の小刻突文	ミガキ	1群3層	731と同一体
736	埴土上部	深鉢	LR	ミガキ	1群6層	
737	埴土	深鉢	横位沈線文・結束線1個羽状縁文(口縁多条)	センイ灰	1群1層	
738	C II-54. 埴土	深鉢	沈線文と主にそれに沿う貝殻割縁圧痕文	ミガキ	1群3層	にぶい黄褐色
739	埴土	口縁部	LR	ミガキ	1群3層	
741	C II-55. 埴土	深鉢	沈線文とそれに沿う貝殻割縁圧痕文	ミガキ	1群3層	
742	C II-56. 埴土	深鉢	刻文・横位沈線文と斜位押し引き沈線文。吻文磨痕	ミガキ	1群1層	にぶい黄褐色
743	埴土	鉢	口縁部 小波状口縁。刻目文(口唇)・沈線文・内面割突文	ミガキ	V群	にぶい黄褐色
744	埴土	深鉢	研磨痕。横帯・沈線文・朱塗り	ナデ	IV群10層	褐色
745	埴土	口縁部	RL	ミガキ	後・晩期	にぶい黄褐色
747	C II-57. 埴土	深鉢	沈線文とそれに沿う貝殻割縁圧痕文	ミガキ	1群3層	
748	埴土	深鉢	深い横帯(縦文流文)・沈線文・磨損縁文・LR	ミガキ	IV群4層	
749	埴土	深鉢	研磨痕。横帯・沈線文・朱塗り	ミガキ	IV群10層	褐色
750	C II-59. 埴土	深鉢	沈線文・附加線LR+R	ミガキ	IV群9層	
751	C II-61. 埴土	深鉢	横位平行沈線文	ナデ	1群3層	にぶい黄褐色
752	埴土	深鉢	RL	ミガキ	1群6層	
755	C III-51. 埴土	深鉢	横位・斜位平行沈線文	ミガキ	1群1層	同一層体
756	埴土	深鉢	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
757	埴土	深鉢	RLR	ミガキ	1群10層	
758	C III-52. 埴土	深鉢	横位・斜位平行沈線文・RL?	ミガキ	1群1層	胴下部。
759	埴土	深鉢	横位平行沈線文・磨損縁文・RL	ミガキ	後・晩期	
761	C III-53. 埴土	口縁部	横位平行押し引き沈線文・ループ文(磨痕)	ミガキ	1群1層	口唇部欠失
762	C III-58. 埴土	深鉢	横位・斜位平行押し引き沈線文・磨損縁圧痕文	ミガキ	1群3層	
763	C III-54. 北朝期	深鉢	深い波状口縁。条痕文	条痕文	1群4層	にぶい褐色
764	埴土	深鉢	条痕文	ミガキ	1群4層	にぶい褐色
765	埴土	深鉢	横位沈線文・非結束羽状縁文(RL)	ミガキ	1群1層	
766	埴土	深鉢	横位平行沈線文	ミガキ	ミガキ	胴下部
768	C III-56. 埴土	深鉢	無文	ミガキ	IV群15層	
769	埴土	鉢	丸底。無文・ミガキ	ミガキ	ミガキ	
770	埴土	鉢	低い高台。横位平行沈線・LR・RL	ナデ	ミガキ	
771	埴土	深鉢	口・胴 小波状口縁。三叉文・LR	ミガキ	ミガキ	
772	C III-57. 埴土上部	深鉢	無文・刻目文	ミガキ	1群3層	褐色
773	C III-57. 埴土	口縁部	横位平行沈線文・刻突文・LR	ミガキ	1群1層	
774	埴土	深鉢	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
775	埴土	深鉢	磨り戻し縁文?	ミガキ	1群10層	
776	埴土	深鉢	LR (口縁多条)	ミガキ	ミガキ	
777	埴土	深鉢	下部。磨痕文?	ミガキ	ミガキ	
781	C III-58. 埴土	深鉢	ネガティブな具装形文・模式11 (図46)	ミガキ	ミガキ	
782	C III-58. 埴土	口縁部	L	ミガキ	IV群	
783	C III-62. 埴土上部	深鉢	横位平行沈線文・L	ミガキ	1群1層	
784	埴土	深鉢	波状口縁部。沈線文・押し引き沈線文	ミガキ	ミガキ	
785	埴土	深鉢	横位平行沈線文・RL	ミガキ	ミガキ	
787	C III-64. 埴土上部	深鉢	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
788	埴土最上部	深鉢	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
789	埴土	深鉢	下部。低い押し引き沈線文	ミガキ	ミガキ	
797	D III-52. 埴土	深鉢	押型文・模式2 (図46)	ミガキ	1群1層	にぶい褐色
798	埴土	深鉢	押型文・模式3・横位平行沈線文・LR	ミガキ	ミガキ	
799	埴土	深鉢	押型文	ミガキ	ミガキ	
800	埴土	深鉢	重層V字状文	ミガキ	ミガキ	
801	埴土	深鉢	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
802	埴土	深鉢	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
817	E IV-55. 埴土	深鉢	LR	ミガキ	1群6層	にぶい黄褐色
818	埴土	深鉢	条痕割縁文	ミガキ	ミガキ	灰褐色
819	埴土	口縁部	LR	ミガキ	不明	
820	E IV-57. 埴土	深鉢	平行沈線・磨損縁文・LR	ミガキ	IV群8層	
821	埴土	深鉢	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
822	埴土	深鉢	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
823	埴土下部	深鉢	磨損縁・RL	ミガキ	IV群14層	
824	埴土	深鉢	無文・磨損縁	ミガキ	IV群2層	

第303図 2 ピット出土遺物(10)

No	地点・層位	種類	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分度	備考	図面
825	E IV-57, 埋土	陶器	胴部	沈線・磨面縄文・RL		ミゾキ	IV群8類	826と同一関係	
826	E IV-57, 埋土	#	#	#	#	#	#	#	
827	E IV-57, 埋土	#	口縁部	LR	#	#	IV群13類		
829	G IV-57, 埋土	#	胴部	横段平行沈線・底体不明	#	#	不明		
830	G IV-57, 埋土	#	#	底体不明	平滑	縦線手取	IV群16類		
831	O III-51, 灰面直上	#	略定形	LR		ミゾキ	V群5類		210

No	地点・層位	種類	大きさ(最大):cm			重量g	石材名	特徴・備考	図面
			長さ	幅	厚さ				
728	B II-51, 埋土	磨製石斧	84	35	20	88.0	チャート質淡褐色磨灰岩, G 2	定形。両刃・両凸刃	215
730	C II-51, 埋土	不定形石器	(37)	28	4	(5.7)	磨灰質硬質泥岩, De 1	5	
734	C II-52, 埋土上部	#	61	34	12	(25.9)	磨灰質硬質泥岩, G 3	5	213
740	C II-54, 埋土	#	(43)	31	9	(11.9)	磨灰泥岩, De 3	5	213
746	C II-56, 埋土	磨製石斧	58	19	5	5.8	#	#	213
753	C II-61, 埋土	礫石	137	42	40	209.0	輝石安山岩, An 2	両面に浅い凹み	213
754	C II-61, 埋土	礫石 1 個	143	73	70	689.8	#	#	215
760	C III-52, 埋土	礫石	37	30	-	14.45	細砂質磨灰岩(石質磨灰岩), G 5	小型。使用面 4 面	
767	C III-54, 埋土	礫石 1 個	(128)	57	45	(33.6)	輝石安山岩, An 2	使用面 2 面・幅 10cm・11cm	215
778	C III-57, 埋土	#	142	83	62	1811.0	#	使用面 26×126cm・小凹面直	216
779	C III-57, 埋土上部	不定形石器	(23)	25	2	(2.3)	磨灰質硬質泥岩, De 1	5. ノッチを含む	
780	C III-57, 埋土	#	53	26	8	10.8	#	#	213
786	C III-62, 埋土	礫石 1 個	137	63	44	450.0	輝石安山岩, An 2	使用面 12×100mm	216
790	C III-64, 埋土下部	#	167	92	63	1131.0	#	使用面 17×121cm	215
803	D III-51, 埋土上部	#	166	111	42	928.0	#	#	215
828	F IV-51, 灰面	不定形石器	57	62	12	38.7	磨灰泥岩, De 3	2. 凸凹	213

第303図 3 ビット出土遺物①

深さ10cm)・P 4 (径9cm・深さ12cm)・P 5 (径8cm・深さ7cm)

P III-101落とし穴：P 1 (径7×19cm・深さ不明)・P 2 (径7cm・深さ9cm)・P 3 (径7cm・深さ12cm)・P 4 (径4cm・深さ不明)・P 5 (径3cm・深さ不明)

P III-102落とし穴：P 1 (径4cm・深さ不明)・P 2 (径7cm・深さ4cm)・P 3 (径8cm・深さ5cm)・P 4 (径6cm・深さ不明)・P 5 (径8cm・深さ5cm)・P 6 (径10cm・深さ4cm)

P III-103落とし穴：P 1 (径10cm・深さ7cm)・P 2 (径6cm・深さ不明)・P 3 (径や×10cm・深さ不明)・P 4 (径9cm・深さ6cm)

P III-104落とし穴：P 1 (径28cm・深さ6cm)・P 2 (径6cm・深さ14cm)・P 3 (径・深さとも5cm)・P 4 (径4cm・深さ6cm)

P III-105落とし穴：P 1 (径5cm・深さ9cm)・P 2 (径4cm・深さ9cm)・P 3 (径3cm・深さ7cm)・P 4 (径7cm・深さ10cm)・P 5 (径3cm・深さ6cm)・P 6 (径6cm・深さ5cm)・P 7 (径4cm・深さ9cm)・P 8 (径4cm・深さ8cm)

P III-106落とし穴：P 1 (径5cm・深さ13cm)・P 2 (径5cm・深さ10cm)・P 3 (径4cm・深さ15cm)・P 4 (径5cm・深さ15cm)

P III-107落とし穴：P 1 (径5cm・深さ9cm)・P 2 (径4cm・深さ14cm)・P 3 (径4cm・深さ14cm)・P 4 (径5cm・深さ14cm)

P III-108落とし穴：P 1 (径4cm・深さ15cm)・P 2 (径5cm・深さ13cm)・P 3 (径5cm・深さ15cm)

〈出土遺物〉

CⅡ-101落とし穴：埋土上部・中部・最下部からⅠ群6類・Ⅱ群1類など11点が出土。

〈備考〉

CⅢ-101落とし穴ほか：○番号・○アルファベットは配列状況を示し、図39に対応する。

OⅢ-108落とし穴：図示例以外の土器片も同簡下層式dである。

遺構名	C II-101落とし穴	C III-101落とし穴	C III-102落とし穴
挿 図	遺構：第304図 a 遺物：第321図	遺構：第304図 b	遺構：第304図 c 遺物：第321図
図 版	遺構：168 a・c 遺物：209・216	遺構：168 b・f	遺構：168 d・g 遺物：210
検出状況 重複関係	旧→C II-4 住居跡。南半の上半部を切られている。	不明→C III-54ピット。検出面まで残るのは一部。	
形 状	溝 I D 3。北端の壁は直立に近い。	溝 I。北東端は凹凸はあるもののほぼ直立。	溝 II A 2
規 模	開口部 46~74×364cm	19~25×176cm	57~93×183cm
横 底 部	5~10×350cm	15×175cm	30×158cm
深 さ	135cm	64cm	78~94cm
埋 土	上半・下半とも暗褐色の汚れ火山灰が卓越。6層は葉層が発達。	汚れ火山灰が上・中部・最下部に認められる。	黒褐色土が卓越。2層はV層起源の土を含む。
底 面	中央部付近に比べると両端が低い。ゆるやかな起伏がある。	凹面	南半はゆるやかな斜面になる。
副 穴	なし	なし	P 1~P 4の4個を検出。
出土遺物	縄文土器(833ほか)と凹石が出土。 →補足	なし	縄文土器は839・840のほかには11点出土。
分 類	I L 1	I S 2	I L 2
備 考		D III-103~107の5基と一群を構成。ほぼ等間隔で並ぶ。①→補足	

遺構名	C IV-101落とし穴	D III-101落とし穴	D III-102落とし穴
挿 図	遺構：第304図 d	遺構：第305図 a	遺構：第306図 a
図 版	遺構：168 e・169 a	遺構：169 b・e	遺構：169 c・h
検出状況 重複関係	北端の崖近くに出。北東側は上部を失っている。	旧→D III-4 住居跡。南端は同住居跡の床面下に存在。	新→D III-3 住居跡(縄文時代前期前葉)。旧→D III-2 住居跡
形 状	溝 I C 2	溝 I D 3。北端の壁はほぼ直立に近い。	溝 I A 2。南東端の壁は大きな凹凸がある。
規 模	開口部 39~50×225cm	84~92×353cm	64~71×393cm
横 底 部	17~27×202cm	15~25×361cm	21~37×364cm
深 さ	79~89cm	125~133cm	128~137cm
埋 土	汚れ火山灰が中・下部を占めている。	黒色・黒褐色土が上・中部、火山灰や浮石が下部を構成する。	黒色・黒褐色土が上半、火山灰や浮石・黒色土が下半を構成。
底 面	ゆるやかな起伏があり、中央部付近が低い。	ゆるやかな起伏があり、両端寄りの部分が低くなる。	ほぼ平坦
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	縄文土器片2点が1層上部から出土。1点はV群1類。
分 類	I S 1	I L 1	I L 1
備 考		V層を切っている。	

遺構名	DⅢ-103落とし穴	DⅢ-104落とし穴	DⅢ-105落とし穴
挿 図	遺構：第304図 c	遺構：第305図 b	遺構：第305図 c
図 版	遺構：169 d・170 a	遺構：169 f・170 b・d	遺構：169 g・170 cd
出土状況 重複関係	円筒形Ⅰ型の葺とし穴DⅢ-52(109)の埋土と壁を切っている。	「ダメ押し」の段階でVI層下部に 検出し、下半のみ残存→補足	「ダメ押し」の段階でVII層上部に 検出。下半のみ残存。
形 状	溝ⅠDⅠ。北東端の壁の上半はほぼ直立	溝ⅠDⅠ	溝ⅠCⅠ。南西端の壁は上半が外傾する。
規 模	開口部 26×147cm	30×35×152cm	18×24×177cm
横 底 部	13×155cm	14×18×161cm	14×172cm
深 さ	73～77cm	66～71cm	20～45cm
埋 土	黒褐色土と黒色土で構成される。	黒褐色土・黒色土が上・中部、暗褐色土・褐色土が下部を構成。	黒褐色土が卓越する。
底 面	中央部から南西端へゆるやかに傾斜して上がっている。	凹面	中央部から南西端へ向い薄白しながら上がっている。
割 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	ⅠS2	ⅠS2	ⅠS2
備 考	CⅢ-101・DⅢ-104～107の5基とほぼ等間隔で並ぶ。①	CⅢ-101・DⅢ-103・105～107の5基とほぼ等間隔で並ぶ。①	CⅢ-101・DⅢ-103・104ほか5基とほぼ等間隔で並ぶ。①

遺構名	DⅢ-106落とし穴	DⅢ-107落とし穴	DⅢ-108落とし穴
挿 図	遺構：第305図 d 遺物：第321図	遺構：第305図 e	遺構：第305図 f
図 版	遺構：170 d e・171 a	遺構：170 d・171 b	遺構：171 cd
出土状況 重複関係	「ダメ押し」の段階で検出。グリッド壁の観察ではV層を切っている。	「ダメ押し」の段階で検出し、下半のみの残存。DⅢ-12住居跡(縄文時代早期)を切る。	「ダメ押し」の段階でVI層中に検出。下半のみ残存。
形 状	溝ⅠC2。北東端の壁は上半が直立。	溝ⅠB1	溝ⅠD2。両端の壁は内傾～内西。
規 模	開口部 22×168cm	24×182cm	35×46×252cm
横 底 部	15～19×160cm	20×174cm	9～17×208cm
深 さ	(土層断面では) 114cm	61cm	56～73cm
埋 土	黒色土が卓越する。最下部は火山灰の薄層である。	黒褐色土の単層である。	黒色土が卓越する。
底 面	北東壁寄りの部分が高い。	北東方向へわずかに傾斜して下がっている。	中央部から南西端へ向い緩やかに傾斜して上がっている。
割 穴	なし	なし	なし
出土遺物	縄文土器片841は2層から出土。	なし	なし
分 類	ⅠS2	ⅠS2	ⅠM
備 考	CⅢ-101・DⅢ-103～105・107の5基とほぼ等間隔で並ぶ。①	CⅢ-101・DⅢ-103～106の5基とほぼ等間隔で並ぶ。①	

遺構名	EⅢ-101落とし穴	EⅢ-102落とし穴	EⅢ-103落とし穴
採 取	遺構：第306図 b	遺構：第306図 d	遺構：第307図 a
図 版	遺構：171 e f	遺構：171 g・172 c	遺構：172 a・f
検出状況 重複関係	「ダメ押し」段階で検出され、下半のみ残存。旧-EⅡ-210方形周溝		「ダメ押し」の段階でVI層中に検出。上部を削削している。
形 状	溝 I C 1。ゆるやかな弧状。南端の壁はわずかに内湾して立ち上がったあと、上部がやや外傾。	溝 I D 2 両端の壁の上半は直立へわずかに外傾。	溝 I B 2。
規 模	開口部	60~74×341cm	56~72×364cm
底 部	5~12×290cm	14~39×379cm	22~32×350cm
深 さ	55~92cm	117~120cm	110~118cm
埋 土	黒褐色土と黒色土で構成されている。	上半は黒色・黒褐色土、下半は汚れ火山灰・火山灰が卓越。	黒褐色土が上・中部、火山灰や浮石・黒色土が下部を構成。
底 面	凸面状の両曲を示し、両端部が低い。	南西側約60cmがやや低くなる。	ほぼ平坦
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I M	I L 1	I L 1
備 考			

遺構名	EⅣ-104落とし穴	EⅣ-107落とし穴	EⅣ-108落とし穴
採 取	遺構：第306図 c	遺構：第307図 b 遺物：第321図	遺構：第307図 c
図 版	遺構：172 b・g	遺構：172 d・173 a 遺物：216	遺構：172 e・173 b
検出状況 重複関係	大部分は削削され、下部のみ残存。	旧-EⅣ-10住居跡	全体的に EⅣ-12住居状遺構に切られ、両端以外は下半の残存。
形 状	溝 I D 1	溝 I D 2。北東端の壁は凹凸が激しい。	溝 I D 1。南西端の壁は内湾して立ち上がったあと、外傾。
規 模	開口部	30~46×312cm	23~32×257cm
底 部	9×327cm	6~11×325cm	10~15×272cm
深 さ	39~66cm	117~136cm	82~110cm
埋 土	黒色土が卓越する。汚れ火山灰が上部、浮石が下部に入る。	黒褐色土・黒色土が上半、火山灰や褐色土が下半を構成する。	黒色・黒褐色土が卓越する。
底 面	南西方向へわずかに傾斜して上がって行く。	北東側は起伏が激しいうえ、傾斜して先端へ下がって行く。	凹面
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	1層から縄文土器 I 群 類の破片 1点が出土。	円盤状土製品842のほか、縄文土器片 3点が埋土から出土。	なし
分 類	I L 1	I L 1	I M
備 考			

遺 構 名	FⅢ-101落とし穴	FⅢ-102落とし穴	FⅣ-115落とし穴	
挿 図	遺構：第307図 d	遺構：第308図 a	遺構：第308図 b 遺物：第321図	
図 版	遺構：173 c d	遺構：173 e・h	遺構：173 f・174 a 遺物：209	
検出状況 重複関係		「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している可能性大。	「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している可能性大。	
形 状	溝ⅠD3	溝ⅠD2。両端の壁は内湾して立ち上がったあと、直立気味。	溝ⅠD3。南端の壁は内湾して立ち上がったあと、ほぼ直立。	
横 断 面	開口部	23～38×335cm	45～57×187cm	50～75×204cm
	底 部	12～24×348cm	13～22×176cm	8～22×207cm
	深 さ	62～72cm	87～102cm	105～118cm
埋 土	黒褐色土が上部、火山灰や浮石が中部、砂質土や細砂が下部を構成。	黒色土・暗褐色土・火山灰・黒褐色土で構成される。	上半は黒色土、壁際や下半は火山灰が卓越する。	
底 面	全体的には南西方向へわずかに傾斜している。	ほぼ平坦。	全体的には北端へ向ってゆるやかに傾斜して下がる。	
副 穴	P1～P3が長軸方向に並ぶが、不規則。	P1～P3が長軸方向に並ぶが、不規則。	明示していないが、2個の痕跡を北半に確認。	
出土遺物	なし	なし	縄文土器片843は埋土下部から出土。	
分 類	I L 1	I S 2	I S 1	
備 考		FⅣ-115ほかと一群を構成。㊦	FⅣ-116ほかと一群を構成。㊦	

遺 構 名	FⅣ-116落とし穴	GⅢ-101落とし穴	GⅢ-102落とし穴	
挿 図	遺構：第308図 c	遺構：第308図 d	遺構：第308図 e	
図 版	遺構：173 g・174 b	遺構：174 c d	遺構：174 e～g	
検出状況 重複関係	「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している可能性大。旧FⅣ-5住居跡	南東端をのぞいては崖の斜面にあり、下部のみ残存。	西端をのぞいてはFⅢ-251溝に上部を切られている。	
形 状	溝ⅠD2。両端の壁上半は直立する。	溝Ⅰ1。南東端の壁は外傾して立ち上がるが、上部が内傾。	溝ⅠC1	
横 断 面	開口部	43～61×135cm	54×175cm	30～46×206cm
	底 部	10～15×151cm	21×171cm	15～23×197cm
	深 さ	92～107cm	77cm	90cm
埋 土	黒色土と黒褐色土で構成。	砂質土や細砂で構成される。	砂質土が卓越する。	
底 面	中央部から南西側にかけての部分が高い。	ゆるやかな起伏がある。	全体的には南東端へ向ってゆるやかに傾斜して下がっている。	
副 穴	Field Card には、夜跡らしいもの1個ある、と記載。	P1・P2が長軸をほぼ3等分した位置にある。	P1～P3が中央部付近にほぼ等間隔で一直線に並ぶ。	
出土遺物	なし	なし	なし	
分 類	I S 2	I S 2	I S 1	
備 考	FⅣ-115ほかと一群を構成。㊦	GⅢ-102と一対。㊦	GⅢ-101と一対。㊦	

遺構名	GⅢ-103落とし穴	GⅢ-104落とし穴	GⅢ-105落とし穴
挿 図	遺構：第309図 a	遺構：第309図 b	遺構：第309図 d
図 版	遺構：175 a b	遺構：175 c d	遺構：175 e f
検出状況 重複関係	西側約3/4はGⅢ-2住居跡の床面下にあり、上半を消失。	全体がGⅢ-4住居跡の床面下にあり、上半を消失している。	
形 状	溝 I D 1	溝 I D 3	溝 I D 2
規 模			
開口部	17~25×354cm	57~68×275cm	30~50×342cm
底 部	8~20×383cm	7~18×292cm	10~14×413cm
深 さ	102cm	81~88cm	95~130cm
埋 土	黒褐色土が卓越。	黒褐色土や火山灰が主に上半、砂質土が主に下半を構成する。	黒褐色・黒色土が上・中部、砂質土が下部を構成する。
底 面	西端から東端へ向ってゆるやかに傾斜して上がっている。	ほぼ平坦	両端寄りの部分が急傾斜で上がっている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I L 1	I M	I L 2
備 考			

遺構名	GⅢ-106落とし穴	GⅢ-107落とし穴	GⅣ-109落とし穴
挿 図	遺構：第310図 a	遺構：第308図 f	遺構：第309図 c
図 版	遺構：175 g	遺構：176 a・c	遺構：176 b・f
検出状況 重複関係	「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している可能性大。	「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している可能性大。	
形 状	溝 I D 1	溝 I D 2。両端の壁は強く内傾や内湾	溝 I A 2。両端の壁の外傾はわずかである。
規 模			
開口部	30~40×338cm	53×195cm	45~55×256cm
底 部	14~20×384cm	13~17×240cm	20~29×227cm
深 さ	85~115cm	86~115cm	70~76cm
埋 土	暗褐色~黒色土が上・中部、砂質土や細砂が下部を構成する。	黒色土・黒褐色土が卓越する。	黒色土・黒褐色土が卓越し、汚れ火山灰が下部の壁隙に堆積。
底 面	全体的には東端へゆるやかに傾斜して上がっている。	両端寄りの部分が高くなる。	ゆるやかな起伏があり、全体的には南東側へ下がっている。
副 穴	なし	図示していないが、2個の痕跡を確認。	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I L 1	I M	I M
備 考			GⅣ-111と一対。③

遺構名	GIV-110落とし穴	GIV-111落とし穴	GIV-112落とし穴
種類	遺構：第310図 b	遺構：第310図 c	遺構：第310図 d
図版	遺構：176 d・g	遺構：176 e・177 a	遺構：177 b
検出状況 重複関係	GIV-3住居跡に切られ、北西側 は上半を失っている。	「ダメ押し」の段階で検出し、上 部を削削している可能性大。	旧-GIV-5住居跡
形状	溝 I C 2	溝 I C 3。南東端の壁は内湾して 立ち上がったあと、直立。	溝 II A。北東壁はほぼ直立するが、 南西壁は直立して立ち上がったあ と、外傾する。
開口部	50～81×250cm	41～56×251cm	50～64×217cm
底部	14～29×235cm	15～22×244cm	30～39×167cm
深さ	80～91cm	74～80cm	81～90cm
埋土	黒色土・黒褐色土が卓越する。	黒色土・黒褐色土が卓越し、砂が 最下部を占める。	黒褐色土・黒色土が卓越する。
底面	凹面	ほぼ平坦	ゆるやかな起伏がある。
副穴	なし	P1～P4が長軸方向に並ぶ。や や不規則で、南東側に片寄る。	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分類	IM	IM	IS 2
備考		GIV-109と一対。⑨	GIV-114と一対。⑦

遺構名	GIV-113落とし穴	GIV-114落とし穴	GIV-115落とし穴
種類	遺構：第311図 a	遺構：第311図 b	遺構：第311図 c
図版	遺構：177 c・178 a	遺構：177 e・178 b	遺構：178 c
検出状況 重複関係	西端をのぞいてはGIV-6住居跡 に上部を切られている。	「ダメ押し」の段階で検出し、上 部を削削している可能性大。	「ダメ押し」の段階で検出し、上 部を削削している可能性大。
形状	溝 I D 1。西端の壁は内傾して立 ち上がったあと、すぐ直立。	溝 II A 1。南東端の壁はわずかに 内傾気味の立ち上がり。	溝 I D 1
開口部	18～25×337cm	47～55×180cm	24～35×290cm
底部	10～16×360cm	24～38×157cm	10～15×288cm
深さ	110cm	70～86cm	107～115cm
埋土	汚れ火山灰の層を挟んだ上下は 黒色土が占める。	黒色土・黒褐色土が卓越する。	汚れ火山灰の層が下部にみられる ほかは黒色土・黒褐色土。
底面	凹面	凹面状にややくぼむ。	わずかに凸面になる。
副穴	なし	P1～P3が長軸方向に等間隔で 並ぶ。	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分類	IL 1	IS 2	IM
備考		GIV-112と一対。⑦	

遺構名	HⅢ-101落とし穴	HⅢ-102落とし穴	HⅣ-108落とし穴
平面図	遺構：第312図a	遺構：第312図c	遺構：第311図d
図版	遺構：177d・f	遺構：179a	遺構：179bc
検出状況 重複関係		上部の一部をHⅢ-8住居跡に切られている。	削刺を受け、上部を失っている。
形状	溝I B 2。両端の壁は凸凹がある。	平面形はいびつな円形。	平面形はほぼ円形。壁はわずかに内傾して立ち上がったあと、上部で外傾する。
規模 開口部	72~88×355cm	75×100cm	87×99cm
底面	12~22×318cm	58×58cm	63×70cm
深さ	145~154cm	94cm	88cm
埋土	上部は黒色土。中部は火山灰、下部は砂で主に構成される。	上半は黒褐色土。下半は火山灰を含む暗褐色土や浮石・細砂で構成。	上半は黒色土・黒褐色土。下半は汚れ火山灰が卓越する。
底面	南西側方近くがわずかに低い。	ほぼ平坦	ほぼ平坦。
副穴	なし	P 1 (径6cm・深さ21cm) が底面ほぼ中央にある。	P 1 (径6cm・深さ5cm) が底面中央にある。
出土遺物	なし	なし	なし
分類	I L 1	円筒形Ⅱ型	円筒形Ⅱ型
備考		⑤	⑤

遺構名	HⅣ-109落とし穴	HⅣ-110落とし穴	HⅣ-111落とし穴
平面図	遺構：第311図e	遺構：第311図f	遺構：第312図b
図版	遺構：179d・f	遺構：179e・180a	遺構：178d・f
検出状況 重複関係	削刺を受け、上部を消失している。古→HⅣ-82ビット。	削刺を受け、上部を消失している。	削刺を受け、上部を消失している。
形状	平面形はほぼ円形。壁は内傾して立ち上がったあと、半ばから外傾に転じる。	平面形はほぼ円形。壁は内傾して立ち上がったあと、直立～外傾に転じる。	溝I B 2。壁は、東端が上部に擾乱による段差を伴う。
規模 開口部	76±×92cm	72×80cm	22~47×317cm
底面	72×75cm	60×70cm	11~14×288cm
深さ	50~54cm	70~74cm	57~80cm
埋土	暗褐色土・黒色土が卓越するほか、火山灰や浮石が入る。	上半は黒褐色土。壁隙や下半は浮石が卓越する。	汚れ火山灰と浮石が卓越する。
底面	ほぼ平坦。	壁隙がやや高くなる。	西端方向へゆるやかに傾斜して下がっている。
副穴	P 1 (径3cm・深さ4cm)・P 2 (径4cm・深さ6cm) が中央からずれた位置にある。	P 1 (径13cm・深さ27cm) が中央やや東寄りにある。	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分類	円筒形Ⅱ型	円筒形Ⅱ型	I M
備考	⑤	⑤	

遺 構 名	HIV-112落とし穴	HIV-113落とし穴	HIV-114落とし穴
挿 図	遺構：第313図 a	遺構：第312図 d	遺構：第312図 e
図 版	遺構：178 e・g	遺構：180 b c	遺構：180 d e
検出状況 重複関係	削刻を受け、上部を消失している。 旧-HIV-83ピット	削刻を受け、上部を消失している。	削刻がいちじるしく、下部が残存 しているだけである。
形 状	溝 I D 1。北端の壁の内傾わずか。 平面形は中央でやや屈折。	平面形は円形。壁は内傾～外傾す るが、ゆるやかである。	平面形はほぼ円形。壁は内湾気味 に立ち上がり、一部は上部が直立。
規 模 開口部	20～40×310cm	64×70cm	62×67cm
底 部	12×326cm	60×62cm	62×67cm
深 さ	71～78cm	43～56cm	36cm
埋 土	黒色土と黒褐色土・汚れ火山灰で 構成される。	上部は黒色土・黒褐色土が占める が、下部は火山灰起源の土や浮石 である。	汚れ火山灰が卓越する。
底 面	北半がやや低くなる。	北壁寄りの部分が高くなっている。	ほぼ平坦
副 穴	なし	P 1 (径5cm・深さ11cm)・P 2 (径 6cm・深さ17cm) が中央部付近に ある。	P 1 が中央部付近にある。
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I L 1	円筒形 II 型	円筒形 II 型
備 考		⑤	⑤

遺 構 名	I III-101落とし穴	J III-101落とし穴	K III-101落とし穴
挿 図	遺構：第313図 b	遺構：第313図 f	遺構：第313図 c
図 版	遺構：181 a・c	遺構：181 b・h	遺構：181 d e・182 a b
検出状況 重複関係	検出時に上部を削刻している。	検出時に上部を削刻している。	検出面はVI層である。
形 状	溝 I B 1	溝 II B 1	溝 I A 2
規 模 開口部	17～25×253cm	43～57×162cm	50～67×261cm
底 部	17～246cm	24～27×152cm	15～45×236cm
深 さ	50～76cm	56～62cm	62～82cm
埋 土	黒色土と黒褐色土で構成されてい る。	2層の黒色土で構成されている。	黒色土・黒褐色土が卓越する。2 層はV層起源である。
底 面	ほぼ平坦	ほぼ平坦	わずかに凹面
副 穴	なし		P 1～P 6がある。P 1～P 4は 南半でジグザグに並ぶ。P 5・P 6は位置的に疑問 →補足
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I M	II S 2	I M
備 考			隣接するK III-102と一対。⑥

遺 構 名	KⅢ-102落とし穴	KⅢ-103落とし穴	KⅢ-104落とし穴
種 別	遺構：第313図 d	遺構：第313図 e	遺構：第314図 a
図 版	遺構：181 f・182 a・c	遺構：181 g・182 d	遺構：183 a・184 a
検出状況 重複関係	検出面はⅥ層である。		
形 状	溝ⅠB 2。南端の壁はわずかに内傾して方ち上がったあとと直立。	溝ⅡA 3	溝ⅡA 2
規 模			
開口部	42×52×262cm	55×64×170cm	65×92×196cm
底 部	22×35×249cm	25×30×143cm	32×38×150cm
深 さ	70～73cm	109～113cm	117～128cm
埋 土	黒色土・黒褐色土が卓越する。2層はⅤ層起源である。	上半は黒色土。下半は黒色土のほかに火山灰や砂質土が混じる。	最上部は汚れ火山灰が載る。上半は黒色土、下半は暗褐色土はかで構成。
底 面	中央部から南端へ向ってわずかに高くなっている。	北西方向へゆるやかに傾斜して下がっている。	南西方向へゆるやかに傾斜して下がっている。
副 穴	P 1～P 5が北半にあり、ジグザクに並ぶ。	なし	P 1が北西端寄りにある。P 1は直立する。
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I M	II S 2	II S 2
備 考	隣接するKⅢ-101と一対。④	KⅢ-104と一対。④	KⅢ-103と一対。④

遺 構 名	LⅣ-101落とし穴	LⅣ-102落とし穴	LⅣ-103落とし穴
種 別	遺構：第314図 b	遺構：第314図 d	遺構：第314図 e
図 版	遺構：183 d・184 b	遺構：183 d・184 d	遺構：183 d・184 e
検出状況 重複関係	「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している可能性大。	「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している可能性大。	「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している可能性大。
形 状	溝ⅠD 3	溝ⅠD 3	溝ⅠD 3
規 模			
開口部	31×45×195cm	34×48×196cm	34×46×190cm
底 部	10×14×209cm	10×17×192cm	9×13×205cm
深 さ	62～87cm	72～93cm	85～96cm
埋 土	上半は黒褐色土と暗褐色土・下半は火山灰と黒色土で構成。	LⅣ-101と類似の構成。	LⅣ-101と類似の構成。
底 面	ゆるやかな起伏があり、北東端寄りの部分がかなり高くなる。	南西側がゆるやかな斜面になる。	わずかに凹面
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I S 1	I S 1	I S 1
備 考	隣接するLⅣ-102・103と平行して並び、一群を構成。④	隣接するLⅣ-101・103と平行して並び、一群を構成。④	隣接するLⅣ-101・102と平行して並び、一群を構成。④

遺構名	MⅢ-101落とし穴	NⅢ-101落とし穴	NⅢ-102a落とし穴
挿 図	遺構：第314図c	遺構：第315図a	遺構：第315図d
図 版	遺構：183b・184f	遺構：183c・184g	遺構：186a
検出状況 重複関係			単独の遺構を想定して掘り進めたところ、先行する落とし穴が埋没したあと、その埋土を掘り込んで構築する1基の存在を土層断面に観察できた。新期を102a、古期を102bとする。 102aは102bよりも一回り小型のものとして推定される。グリッド壁にかかる部分の計測値は、開口部幅119cm・底部幅12cm・深さ176cmである。倒壁は軟質な堆積物を掘り込むため、埋没後のズレ等が考えられ、不規則なものとなっている。なお、V層を切っていることが観察できる。
形 状	溝ID2。両端の壁は内湾して立ち上がったあと、外傾する。	溝ID2。北西端の壁はわずかに内傾して立ち上がるだけ。	
規 模 開口部	62～75×390cm	38～55×318cm	
模 式 底 部	10～17×375cm	12～17×304cm	
深 さ	110～117cm	110～130cm	
埋 土	暗褐色土・黒色土のほか、火山灰が最下部占める。	上半の壁際と中部は汚れ火山灰が占める。	
底 面	西側は平坦であるが、東側はゆるやかな斜面になる。	北西方向へ傾斜して下がっている。	
副 穴	なし	なし	不明
出土遺物	なし	なし	
分 類	IL1	IM	
備 考			

遺構名	NⅢ-102b落とし穴	NⅣ-101落とし穴	NⅣ-102落とし穴
挿 図	遺構：第315図d	遺構：第315図c	遺構：第315図b
図 版	遺構：184c・186a	遺構：184h	遺構：185a・186b
検出状況 重複関係	旧-NⅢ-102a落とし穴		
形 状	溝ID2	溝ID2。短軸断面の上半の開口はわずかである。	溝IC2。北西端の壁はわずかに内湾して立ち上がる。
規 模 開口部	65～92×325cm	26～39×340cm	25～30×164cm
模 式 底 部	13～25×385cm	9～14×367cm	11～16×170cm
深 さ	(検出部から) 135～172cm	98～108cm	64～74cm
埋 土	102aが黒色土や黒褐色土が卓越するのに対し、上部をのぞいては汚れ火山灰や浮石ほかが卓越。	黒色土と黒褐色土が卓越する。	上半は黒色土や黒褐色土、下半は火山灰や黒褐色土で構成。
底 面	南端寄りの部分は急斜面である。	東方向へゆるやかに傾斜して下がっている。	北西方向へゆるやかに傾斜して下がっている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	IL1	IL1	IS2
備 考			隣接するNⅣ-103と平行して並び、一対。㊟

遺構名	NⅡ-103落とし穴	OⅢ-101落とし穴	OⅢ-102落とし穴
挿 図	遺構：第317図 c	遺構：第316図 a	遺構：第316図 c
図 版	遺構：185 a・186 d	遺構：185 b・186 e	遺構：185 b・186 f
検出状況 重複関係			
形 状	溝 I B 1	溝 I D 2。平面形はわずかに弧状になる。	溝 I D 2。南西端の壁の内湾はわずかに。平面形はやや弧状。
規 模			
開口部	24~33×170cm	52~87×320cm	70~85×277cm
底 部	10~14×168cm	17~20×355cm	10~26×284cm
深 さ	58~70cm	110~1163cm	110~137cm
埋 土	2層の黒色土で構成されている。	暗褐色土・黒色土のほか、火山灰や浮石・砂質土が構成。	上・中部は黒色系が占め、下部は汚れ火山灰を多く含む。
底 面	中央部から南東端へはゆるやかに傾斜して上がっている。	両直し、北東端寄りの隅がきわだって高くなる。	起伏があり、全体的に北東方向へ高くなっている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I S 2	I L 1	I M
備 考	関係する NⅡ-102 と平行して並び、一対。㊸	OⅢ-103 と一対。㊸	OⅢ-105 と一対。㊸

遺構名	OⅢ-103落とし穴	OⅢ-104落とし穴	OⅢ-105落とし穴
挿 図	遺構：第316図 b 遺物：第321図	遺構：第316図 d	遺構：317図 a 遺物：321図
図 版	遺構：186 c・g	遺構：186 b・188 a	遺構：187 a・188 b 遺物：210 216
検出状況 重複関係			
形 状	溝 I D 2	溝 II C 2	溝 I D 3
規 模			
開口部	59~75×307cm	56~72×167cm	65~80×260cm
底 部	14~22×326cm	10~21×160cm	10~23×282cm
深 さ	123~135cm	137~150cm	94~117cm
埋 土	黒色土・黒褐色土が卓越するが中・下部には汚れ火山灰や砂が堆積。	褐色土・黒褐色土・黒色土で構成される。	上半は黒色土、下半は汚れ火山灰が卓越する。
底 面	凹面状。	直立する P 1~P 3 がややズレながらも長軸方向へ直線的に並ぶ。	起伏がいろいろしい。北東側隅が高くなる。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	図示例のほかに縄文土器片 7 点が出土。 →補足	なし	図示例のほかに縄文土器片 10 点埋土上部から出土
分 類	I L 1	I S 2	I M
備 考	OⅢ-101 と一対。㊸	PⅢ-106 ほかと一対。㊸	OⅢ-102 と一対。㊸

遺構名	OⅢ-106落とし穴	OⅢ-107落とし穴	OⅢ-108落とし穴
挿 図	遺構：第317図 b 遺物：第321図	遺構：第317図 d	遺構：第317図 e 遺物：第321図
図 版	遺構：187 a・188 d	遺構：187 b・188 e	遺構：187 c・188 f 遺物：210・213
検出状況 重複関係		「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している。	
形 状	溝 I D 3	溝 I D 2	溝 I D 2
掘 開 口 部	64～71×234cm	27～58×260cm	60～65×232cm
掘 底 部	12～22×260cm	12～20×280cm	10～14×266cm
深 さ	115～128	58～94cm	112～136cm
埋 土	上半は黒色土・黒褐色土、下半は火山灰や砂質土が卓越。	上半は黒色土と火山灰ほか、下半は黒色土と浮石で構成。	上半は黒色土・黒褐色土、下半は汚れた火山灰と浮石が卓越。
底 面	ほぼ平坦で、両端寄りの部分がやや高い。	凹面。北東側がやや高い。	ゆるやかな起伏がある。北側が高くなる。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	図示例のほかに縄文土器片？点が出土。 →補足
分 類	I M	I M	I M
備 考	OⅢ-108と一対。㊸		OⅢ-106と一対。㊸

遺構名	OⅢ-109落とし穴	OⅢ-110落とし穴	OⅢ-111落とし穴
挿 図	遺構：第318図 a	遺構：第318図 b	遺構：第318図 c
図 版	遺構：187 d・188 g	遺構：188 c・189 c	遺構：188 h・189 f
検出状況 重複関係		南西側は検出の際に上部を削削している。	
形 状	溝 I C 3	溝 I C 1	溝 I D 3
掘 開 口 部	43～76×365cm	20～35×284cm	37～48×212cm
掘 底 部	10×407cm	17×291cm	11～16×245cm
深 さ	168～205cm	96～110cm	95～111cm
埋 土	黒色土・黒褐色土が卓越し、浮石が入る。	黒色土が卓越し、下部を汚れた火山灰が占める。	上半は黒褐色土と暗褐色土、下半は火山灰と黒褐色土で構成。
底 面	わずかな起伏がある。	わずかに凹面	凹面。南東側が高くなる。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I L 2	I M	I M
備 考		V層を切っている。	OⅢ-112と一対。㊸

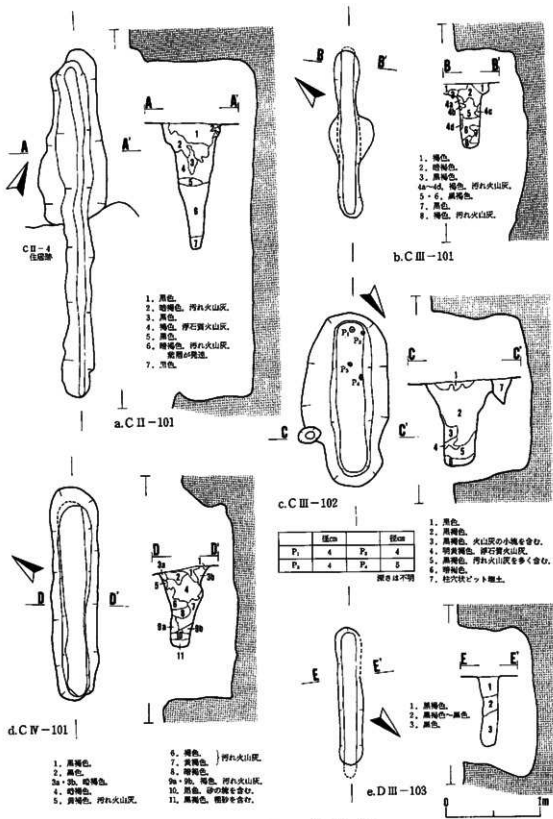
遺構名	OⅢ-112落とし穴	OⅢ-113落とし穴	OⅢ-114落とし穴
挿 図	遺構：第318図 d	遺構：第319図 a	遺構：第318図 e
図 版	遺構：189 a・g	遺構：189 b・190 a	遺構：189 d・190 b
検出状況 重複関係			「ダメ押し」の段階で検出し、上部を削削している。
形 状	溝 I D 2	溝 I D 3	溝 I B 1
規 模			
開口部	47～68×217cm	44～49×233cm	12～26×137cm
底 部	12～16×243cm	14～23×256cm	8～18×135cm
深 さ	101～126cm	95～121cm	59～63cm
埋 土	黒色土・黒褐色土が卓越し、下部の一部に汚れ火山灰が堆積。	黒色土と黒褐色土が卓越する。汚れ火山灰が下部に堆積する。	2層とも黒色土である。
底 面	凹面状。南東側が段差を伴って高くなる。	凹面状で、南東側が高くなり、全体の高低差がいちじるしい。	ほぼ平坦であるが、北西端へ向ってわずかに傾斜している。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	縄文土器片 1 点が埋土上部から出土。		
分 類	I M	I M	I S 2
備 考	OⅢ-111と一対。④		PⅢ-111と一対。⑤

遺構名	PⅢ-101落とし穴	PⅢ-102落とし穴	PⅢ-103落とし穴
挿 図	遺構：第319図 b	遺構：第319図 c	遺構：第319図 d
図 版	遺構：189 e・193 a	遺構：190 c・193 a	遺構：190 h・193 a
検出状況 重複関係	下底部のみが残存する。→補足	下底部のみが残存する。→補足	下底部のみが残存する。→補足
形 状	溝。底部幅が広い。	溝。底部幅が広い。北西端は底面も失っているであろう。	溝
規 模			
開口部	55～66×260cm	66×(225cm)	30×257cm
底 部	44～50×247cm	56×(214cm)	22～28×250cm
深 さ	3～35cm	最深部11cm	2～12cm
埋 土	黒色土を確認している。	黒色土を確認している。	汚れ火山灰を少量含む黒色土を確認している。
底 面	わずかに凹面	わずかに起伏がある。	わずかに起伏がある。
副 穴	P 1～P 5 が長軸方向の中央に直線的に並ぶ。→補足	P 1～P 6 があるが、不規則な配置。→補足	P 1～P 4 が長軸方向の中央に直線的に並ぶ。→補足
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I M	不明	I M
備 考	PⅢ-102ほかと一群。②	PⅢ-101ほかと一群。②	PⅢ-102ほかと一群。②

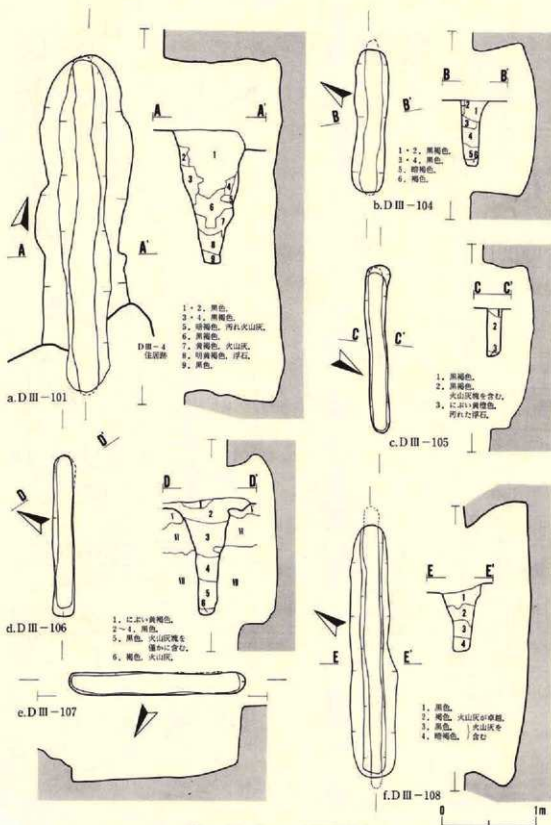
遺構名	PⅢ-104落とし穴	PⅢ-105落とし穴	PⅢ-106落とし穴
挿 図	遺構：第319図 f	遺構：第320図 a	遺構：第319図 e
図 版	遺構：190 d・191 a・193 a	遺構：190 e・191 b・193 a	遺構：190 f・191 c d
検出状況 重複関係	下部のみが残存する。→補足	下部のみが残存する。→補足	
形 状	溝。側壁は起伏がある。	溝 I B 1	溝 II A 2
規 模			
開口部	24×65×364cm	54×95×331cm	72×80×187cm
底 部	30×46×355cm	37×50×325cm	10×16×140cm
深 さ	9～48cm	41～77cm	103～132cm
埋 土	黒色土と火山灰・汚れ火山灰で構成される。	黒色土が卓越し、壁際や下部に火山灰・汚れ火山灰が堆積。	黒色土・黒褐色土・黄褐色土で構成される。
底 面	全体的には南方向へ傾斜している。	ほぼ平坦	ほぼ平坦
副 穴	南半の長軸方向の中央に並ぶ P 2～P 4 がある。P 1 は副穴でない。→補足	P 1～P 8 があるが不規則→補足	P 1～P 4 が長軸方向の中央に等間隔で規則的に並ぶ。→補足
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	I L 1	I L 1	I S 2
備 考	PⅢ-103ほかと一群。㊸	PⅢ-104ほかと一群。㊸	PⅢ-107ほかと一群。㊸

遺構名	PⅢ-107落とし穴	PⅢ-108落とし穴	PⅢ-109落とし穴
挿 図	遺構：第319図 g 遺物：第321図	遺構：第320図 b	遺構：第320図 c
図 版	遺構：190 g・191 e	遺構：191 f・192 a b	遺構：191 g・192 c
検出状況 重複関係		下部のみが残存する。→補足	
形 状	溝 II A 2	溝 I A 1	溝 I B 1
規 模			
開口部	48×55×156cm	18×24×125cm	26×41×158cm
底 部	10×155cm	12×110cm	15×20×148cm
深 さ	97～112cm	22～35cm	72～84cm
埋 土	黒色土・黒褐色土が卓越し、火山灰が中部の壁際にみられる。	2層の黒色土が確認できる。	黒色土が卓越し、汚れ火山灰や火山灰が壁際に占める。
底 面	わずかに起伏がある。	ほぼ平坦	起伏がある。北西側が凹む。
副 穴	P 1～P 4 が長軸方向の中心に等間隔で規則的に並ぶ。→補足	P 1～P 3 が長軸方向の中心に等間隔で規則的に並ぶ。→補足	なし
出土遺物	図示例の縄文土器片 2 点が埋土中部から出土。	なし	なし
分 類	I S 2	I S 3	I S 2
備 考	PⅢ-106ほかと一群。㊸	PⅢ-107ほかと一群。㊸	PⅢ-110と一対。㊸

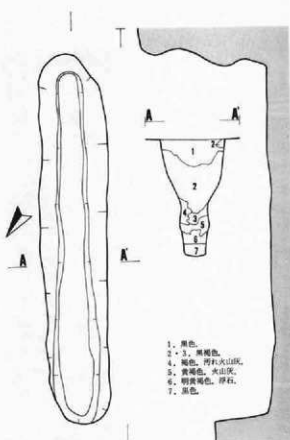
遺構名	PⅢ-110落とし穴	PⅢ-111落とし穴
構図	遺構：第320図 d	遺構：第320図 e 遺物：第321図
図版	遺構：192 d・f	遺構：192 e・g 遺物：215
出土状況 重複関係		
形状	溝 I C 2。北西端の壁はいちじるしく外傾する。	溝 I B 3。南東端の壁はわずかに内傾して立ち上がり、外傾。
規模		
開口部	23～35×171cm	28～35×150cm
底部	13～21×134cm	14～19×145cm
深さ	72～85cm	73～83cm
埋土	黒色土が卓越し、壁際は、上半が火山灰、下半は砂が堆積。	黒色土・黒褐色土が卓越し、火山灰や汚れ火山灰が壁際を占める。
底面	北西方向へわずかに傾斜する。	北西端へ向って傾斜している。
副穴	なし	なし
出土遺物	縄文土器片 1 点が埋土下部から出土。	凹石 1 点が埋土から出土 (856)。
分類	I S 2	I S 2
備考	PⅢ-109と一対。⑦	OⅢ-114と一対。⑧



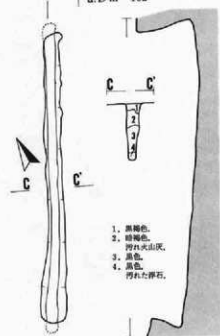
第304図 落とし穴実測図(8)



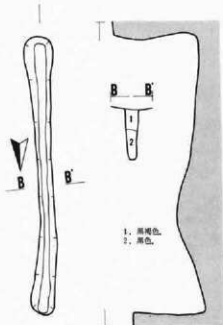
第305図 落とし穴実測図(9)



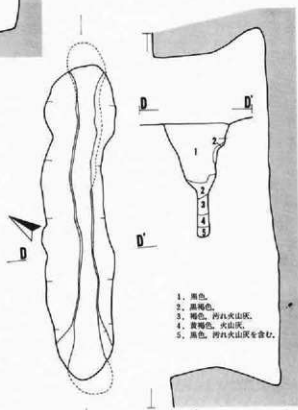
a.D III-102



c.E III-104



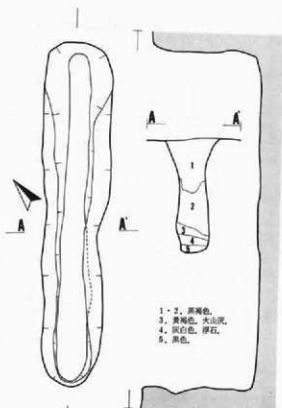
b.E III-101



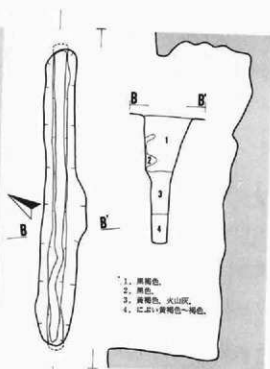
d.E III-102

0 1m

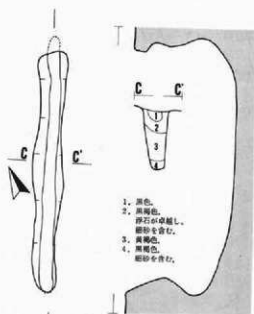
第306図 落とし穴実測図⑩



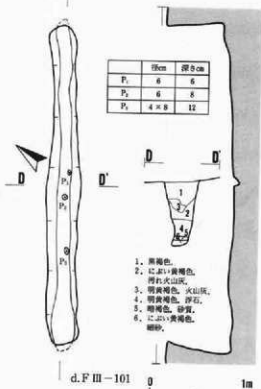
a. E III-103



b. E IV-107



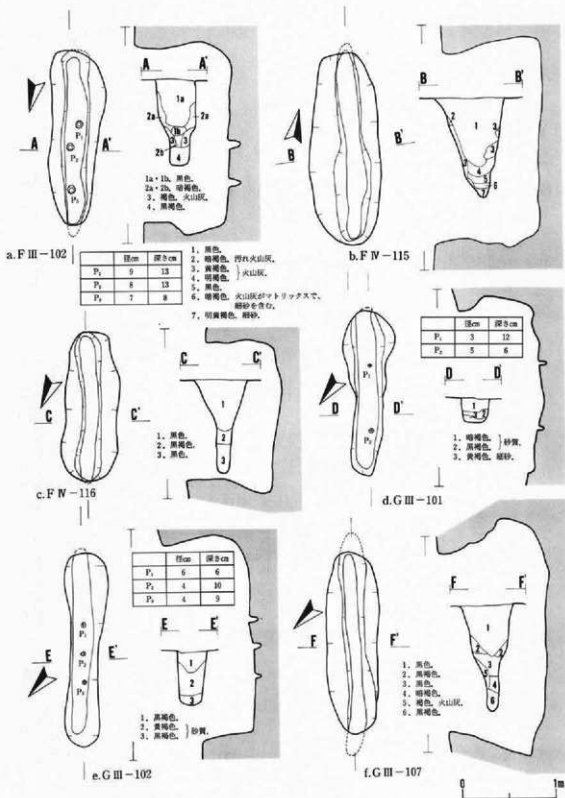
c. E IV-108



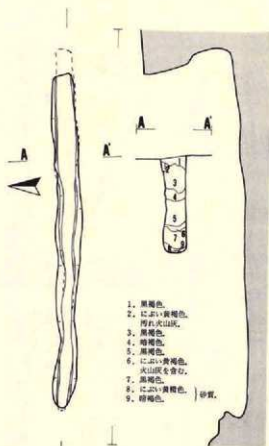
d. F III-101

0 1m

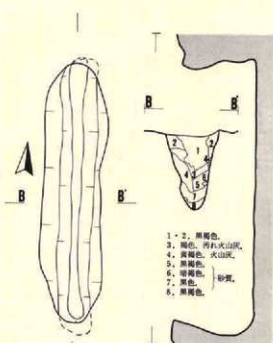
第307図 落とし穴実測図(II)



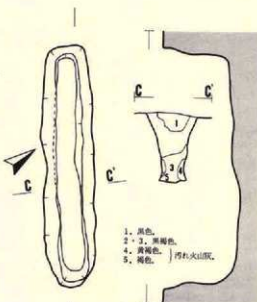
第308図 落とし穴実測図(2)



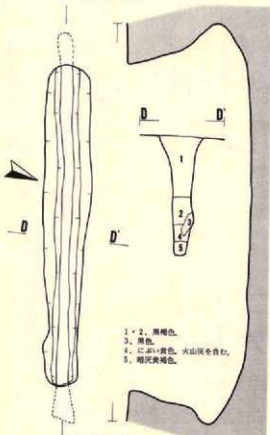
a.G III-103



b.G III-104



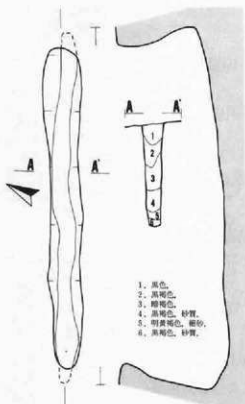
c.G IV-109



d.G III-105

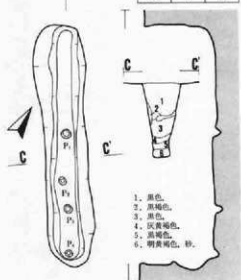
0 1m

第309図 落とし穴実測図(1)

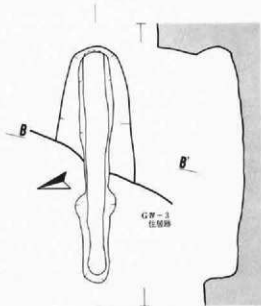


a.G III-106

	径cm	深さcm
P ₁	10	8
P ₂	8	3
P ₃	10	8
P ₄	8	5



c.G IV-111

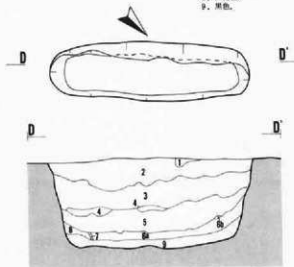


b.G IV-110



- 1・2. 黒色。
3. 黄褐色。
4・5. 黒色。
6. 黄褐色。
7. 褐色。汚れた火山灰。
8. 黄褐色。

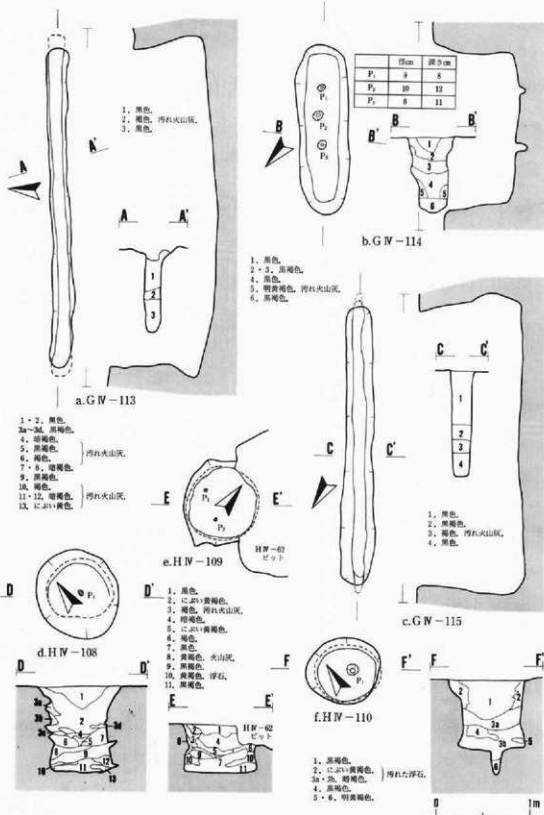
1. 黄褐色。
2. 黒色。
3～5. 黄褐色。
6a. 黄褐色。
6b. 褐色。
7. 黒色。
8. 黄褐色。
9. 黒色。



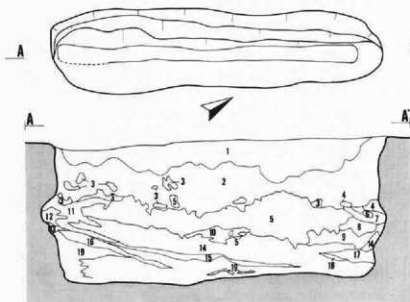
d.G IV-112

0 1m

第310図 落とし穴実測図(14)



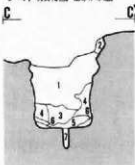
第311図 落とし穴実測図(5)



a.H III-101

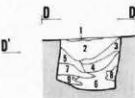
- 1・2, 黒色。
- 3, 暗褐色。汚れ火山灰。
- 4, 黄褐色。
- 5, 黄褐色。火山灰が卓越。
- 6, 黄褐色。
- 7, 黒色。
- 8, 黄褐色～黒色。
- 9, 黄褐色。火山灰がマトリックス、砂が混じる。
- 10, 黒色。
- 11, 黄褐色～黒色。
黒色土がマトリックス。
- 12, 黄褐色。
- 13, 黄灰色～灰黄色。砂。
- 14, 灰黄色。黒色土を含む砂。
- 15, 灰黄色～黒褐色。砂質。
- 16, 灰黄色～にぶい黄色。
砂がマトリックス。
- 17, 明黄褐色。少量の砂を含む。
- 18, 灰黄色～黒色。
- 19, 灰黄色。黒色土がマトリックス。

- 1, 黒褐色。
- 2, 褐色。汚れ火山灰。
- 3, 暗褐色。火山灰を含む。
- 4・5, 褐色。浮石が卓越。
- 6・7, 明黄褐色。細砂が卓越。



c.H III-102

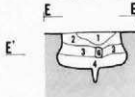
- 1, 黒色。
- 2, 黒褐色。
- 3, 暗褐色。
- 4, 黄褐色。
- 5・6, 暗褐色。火山灰卓越。
- 7, 黄褐色。
- 8・9, 明黄褐色～褐色。
汚れた浮石。



d.H IV-113

	径cm	深さcm
P ₁	10	19

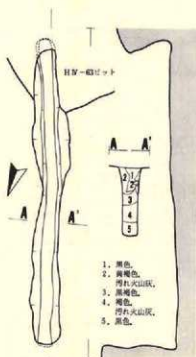
- 1, 暗褐色。
- 2, 褐色。汚れ火山灰。
- 3, 黄褐色。
- 4, 褐色。汚れ火山灰。



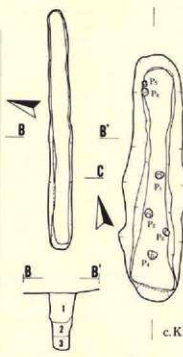
e.H IV-114

0 1m

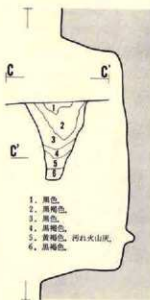
第312図 落とし穴実測図①



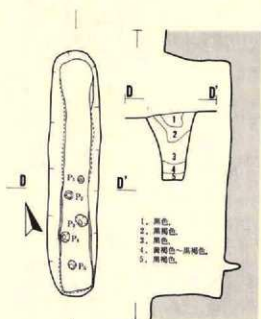
a. HW-112



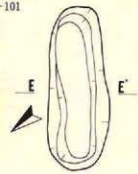
b. I III-101



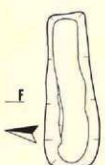
c. K III-101



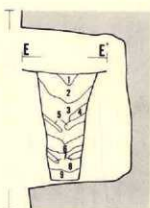
d. K III-102



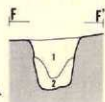
e. K III-103



f. J III-101

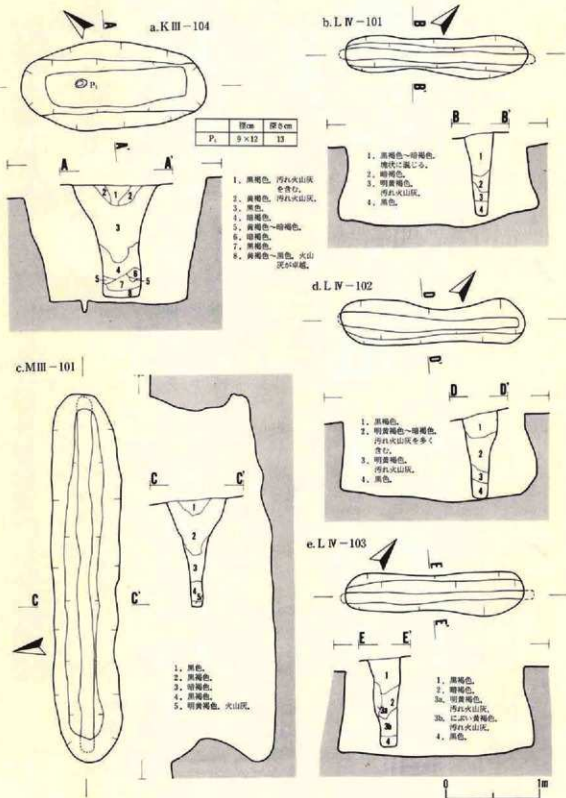


1. 不明。
2～4. 黒色。
5. 黄褐色～黒色。
火山灰がマトリックス。
6・7. 黄褐色。火山灰。
8. 黄褐色～黒色。
9. 明黄褐色～黒色。砂質。

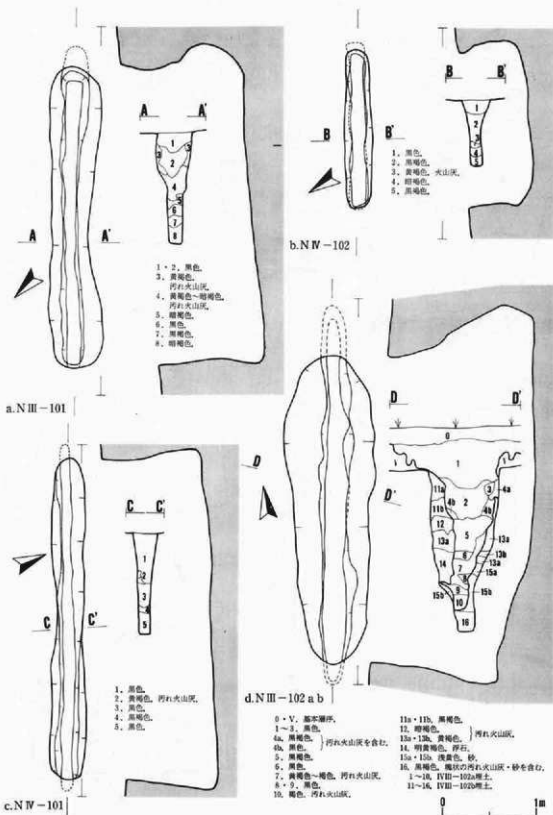


0 1m

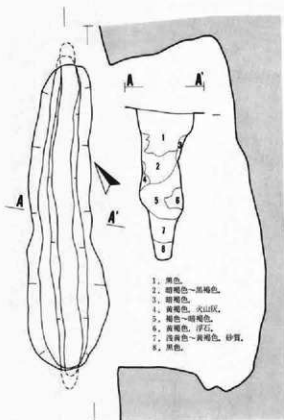
第313図 落とし穴実測図(7)



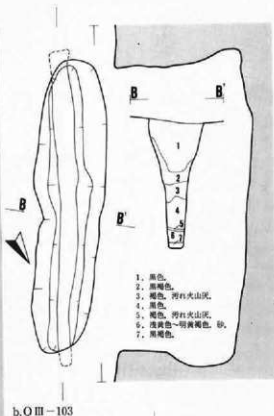
第314図 落とし穴実測図(10)



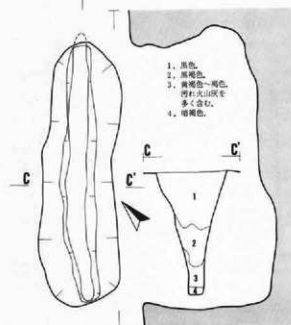
第315図 落とし穴実測図(9)



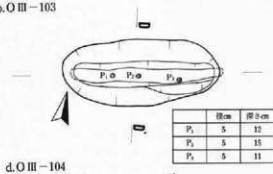
a.O III-101



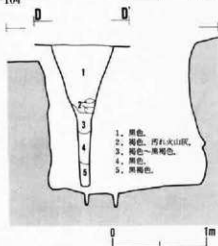
b.O III-103



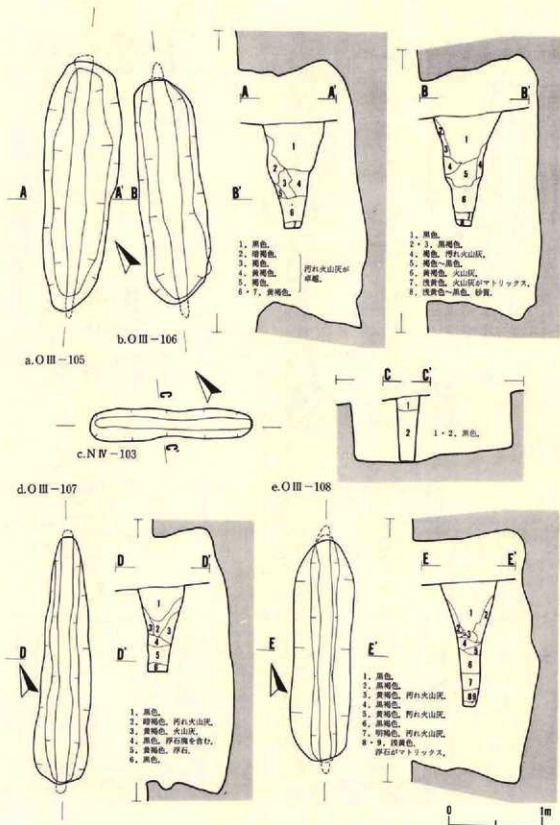
c.O III-102



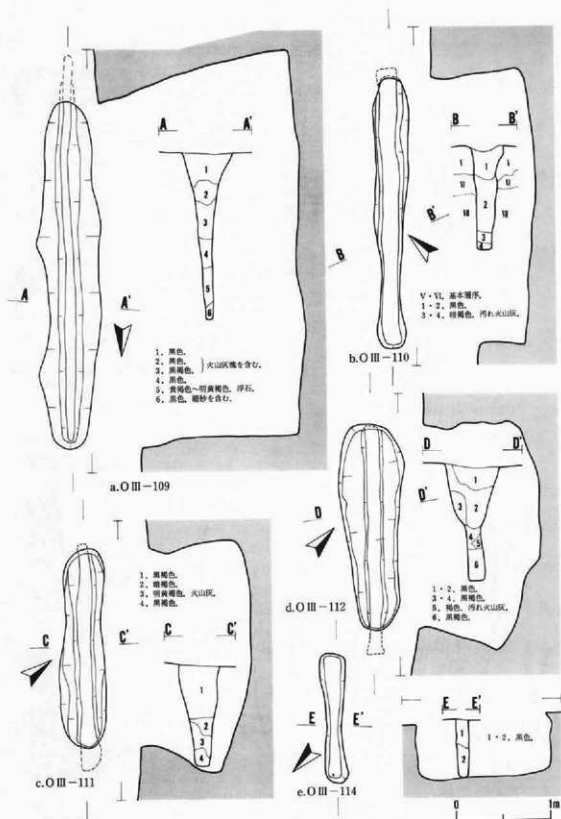
d.O III-104



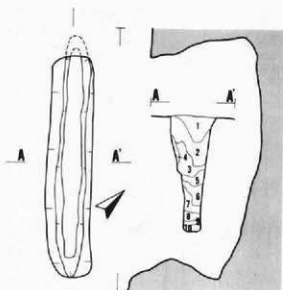
第316図 落とし穴実測図(20)



第317図 落とし穴実測図(2)



第318図 落とし穴実測図(2)

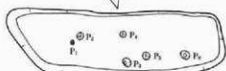


a. O III-113

- 1~3, 黑色。
- 4・5, 黑褐色。
- 6, 黑褐色・黑色。
- 7, 褐色。汚れ火山灰。
- 8, 黑色。
- 9, 褐色・黑色。
- 10, 黑色。



b. P III-101



c. P III-102

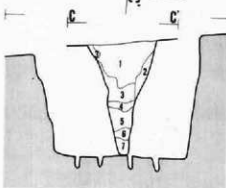


d. P III-103



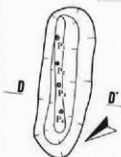
e. P III-106

- 1, 黑色。
- 2, 明黄褐色。
- 3, 黄褐色・黑褐色。
- 4, 黑色。
- 5, 黄褐色・黑褐色。
- 6, 黑色。
- 7, 黄褐色・黑褐色。



f. P III-104

- 1, 黑色。
- 2, 褐色。火山灰。
- 3, 黄褐色。
- 4, 黑色。
- 5, 黑褐色。

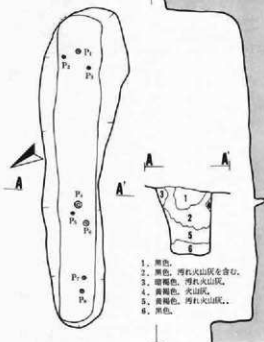


g. P III-107

0 1m

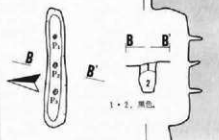
第319図 落とし穴実測図(2)

a. P III-105



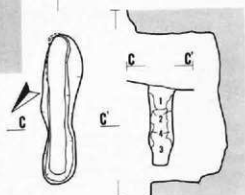
1. 黒色。
2. 黒色。汚れ火山灰を含む。
3. 暗褐色。汚れ火山灰。
4. 黄褐色。火山灰。
5. 黄褐色。汚れ火山灰。
6. 黒色。

b. P III-108



1. 黒色。
2. 褐色。汚れ火山灰。
3. 黒色。
4. 黄褐色。火山灰に細砂を含む。

c. P III-109





第321図 1 落とし穴出土遺物(2)

No.	地点・層位	器種	器位	器形 / 外面	内面	土分	備考	図版
833	C II-101, 埋土	鉄器	銅部	原形不明	鉄鋼文	I 群 6 類	に、よい黄褐色	
834	#, 埋土上部	#	口縁部	やや小皿。LR (O 段多量)	ミガキ	鉄線少量	II 群 10 類	
835	#, 埋土中部	#	銅部	横位平行沈線文・器面磨耗	#	鉄線少量	II 群 1 類	209
836	#, 埋土最下部	#	#	LR	#	#	II 群 10 類	
837	#, 埋土中部	#	#	下皿。原形不明	#	#	#	209
839	C III-102, 埋土上部	#	口縁部	口縁部 LR・細線広い縦線文・LR	#	#	#	210
840	#, 埋土最上部	#	銅部	横位平行沈線文・LR (O 段多量)	#	#	II 群 1 類	210
841	D III-106, 埋土下部	#	口縁部	押し引き沈線文・LR	#	#	#	
843	F IV-115, #	#	#	張文・狭い押し引き沈線文	#	鉄線少量	II 群 3 類	209
844	O III-103, 埋土上部	鉄器	銅部	横位筋束第 1 羽状縦文・筋部	#	#	II 群 9 類	
845	#, #	#	#	#・扉蓋	#	#	#	
846	O III-105, 埋土上部	#	口縁部	連続周回文・更細筋束・筋部・筋束第 1 部羽状縦文	#	鉄線多い	II 群 7 類	210
847	#, #	#	#	筋束体正底・LR みえる	#	鉄線少量	#	
848	#, #	#	銅部	多輪筋束体	#	#	II 群 9 類	推定
850	O III-108, #	#	口縁部	筋束体正底	#	#	II 群 7 類	210
852	O III-106, #	#	#	LR・更細筋束・筋部・刺突文	#	#	#	
853	#, #	#	銅部	多輪状沈線文・横位筋束文	#	#	II 群 9 類	
854	F III-107, 埋土中部	#	#	原形不明	#	#	#	推定
855	#, #	#	#	縦位筋束文・LR	模	#	#	?

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):cm 長さ 幅 厚さ	重量g	特 徴	備 考	図版
842	E IV-107 埋土	行轡状土製品	39 30 7	9.86	凸辺長方形・RL		216

No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):cm 長さ 幅 厚さ	重量g	石 材 名	特 徴	備 考	図版
838	C II-101, 埋土上部	凹石	133 63 31	440.9	輝石安山岩, An 2			216
849	O III-106, 埋土最上部	有孔石製品	56 23 -	10.64	粘板岩, Ne 1	自然磨。一端に小孔・両面磨削穿孔		214
851	O III-108, 埋土上位	石鏃	44 20 3	2.2	地質燧石, De 3	両面磨削		213
856	F III-111 埋土	凹石	106 87 33	342.8	輝石安山岩薄岩, Yo	両面に凹み		215

第321図 2 落とし穴出土遺物(3)

7. 周溝

E II-201 方形周溝

遺構(第322図。図版193・194)

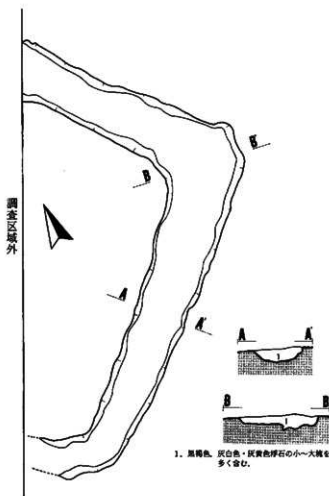
〈検出状況・重複関係〉北西側が調査区域外に出るため、部分的に調査できたにすぎない。

E III-101 落とし穴と一部が重複し、それを切っている。

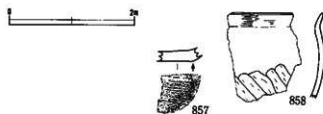
〈平面形〉やや隅丸の方形。南隅をすぎ、南西部へ入ったところから浅くなって溝を追えなくなる。もともとが途切れている形状なのか後に溝を消失しているものか判断できかねる。

〈埋土〉黒褐色土の単層である。部分によって多少はあるものの、灰白色浮石の大小塊を全体によく含む。大塊が多く、最大は18cmで、10cm前後が主体を占める。浮石塊は底面まで分布する。

〈規模〉北東-南西方向は6.15mである。北西-南東方向は最大4mが残っている。〈幅〉



1. 黒褐色、灰白色・灰黄色礫石の小へた穴を多く含む。



上端幅は63～105cmである。南隅付近が狭く、東隅が最も広い。下端幅は38～87cmである。〈深さ〉北西端の調査区域外に出る部分は21cmを測る。北東部東隅付近から南東部の部分は底面の凹凸が著しく、数値では表わさないが、北東壁部分寄り是一般に浅い。

〈断面の形状〉浅皿状〈底面〉全体的に凹凸が著しい。

遺物(第322図)

坏Ⅰ類A2の857と土師器甕858の2点が出土したが、ともに破片である。

遺構の時期

埋土や形態から平安時代Ⅱ群に分類できる。

Ⅲ—201円形周溝

遺構(第323図、図版194・195)

〈検出状況・重複関係〉

平安時代の住居跡群とはやや離れたⅢ区に検出された。重複する遺構はない。

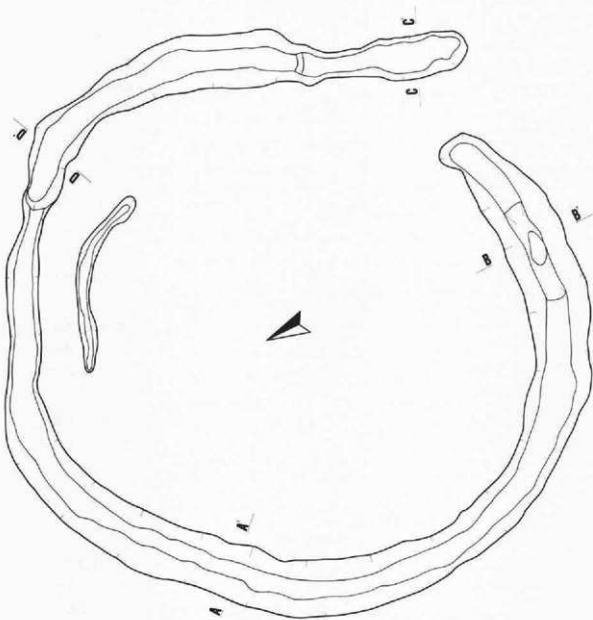
〈平面形〉ほぼ円形であ

No.	地点・層位	種類	外 周				内 周				計測値: cm				分層	図版
			口縁部	側 壁	底 部	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底		
857	埋土	坏	—	—	停止糸切り+ヘラケズリ	ヘラミガキ	—	—	—	—	—	—	—	—	1A2	

No.	地点・層位	種類・特徴	外 周				内 周				計測値: cm				分層	図版
			口縁部	側 壁	底 部	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底	口 底		
858	埋土	土師器甕	横ナデ	ヘラケズリ	—	横ナデ	ナデ	—	—	—	—	—	—	—		

$$S = \frac{1}{2}$$

第322図 EⅡ—201方形周溝実測図・出土遺物



1. 溝底。黄褐色土山灰の
土層を含む。
2. 黒色。灰白色浮石を多く含む。
3. 灰白色～緑黄色。浮石層。
4. 黒色。灰白色浮石の土層を多く含む。
5. 黒色。埴輪火山区やタロボタの土層のほかに、
灰白色浮石を含む。
6. 黒色。埴輪火山区の土層を多く含む。
7. 褐色。埴輪土山灰。
8. 黒色土。埴輪土山灰の土層を含む。



る。南の部分が途切れ、110cmほど間隔が開く。その南東端はやや浅くなるとともに円からは少しずれた直線状になる。そのため、互いの弧の先端はわずかにずれた形で対峙する。

〈埋土〉色調と粒径の異なる二種類の火山灰が認められる。上位を占める黄褐色火山灰は周溝が切れる北東端から左回りの方向へ約4.6mの限定された範囲に分布する。黒褐色土がマトリックスで塊状に含まれる。最大層厚は14cm、薄い部分は5cm程である。大塊が主体で、最大粒径60mmである。灰白色浮石は、黄褐色火山灰が分布するところでは、上位から同層10～15cmの黒褐色土層（灰白色浮石の小塊を少量含む）一灰白色浮石層と続く。層厚は5～10cmである。極細粒から粗粒までの粒径の違いがあり、葉層が発達している。西から北にかけては黄褐色火山灰が欠き、灰白色浮石が最上部を占めるとともに、最大層厚が20cmと厚くなる。北西部の観察では、上位から極細粒一粗粒一極細粒の順になり、上位の極細粒部ではおよそ19層の葉層が認められる。北側の一部や東側では層状の堆積はみられず、マトリックスである黒褐色土に大塊として入る。

以上述べてきた灰白色浮石層の下位は、上位から黒色土がマトリックスで灰白色浮石の大塊を含む層、最下部は火山灰と黒色土の大小塊を含む黒褐色土の順になるのが深いところでは一般的である。最下部層は住居跡埋土によくみられるものである。黄褐色火山灰や灰白色浮石がよく認められるのは本遺構が深い埋没谷に構築され、斜面下部に位置していたからであろう。

〈規模〉外径は南北9.3m、東西9.5mである。〈幅〉上端幅は30～103cmである。狭いのは部分的で、一般には70～90cm±である。下端幅は20～55cmである。〈深さ〉16～64cmである。北から西・南西にかけての部分が一般的に深い。

〈断面の形状〉深い部分はV字状になる。浅い部分は長方形状である。

〈底面〉全体的に大きな起伏を伴うほか、小凹凸がみられる。

〈その他〉弧を描いた細い溝が周溝の北から北東にかけての内側60～70cmのところにある。長さは285cm（弧両端を結ぶ直線で計測）、幅15～20cm、深さ10～23cmで、断面形はV字状である。埋土は、上部が大塊、下部が粒状の灰白色浮石を含む黒褐色土である。周溝に沿ってあることや埋土からは本遺構に相伴する可能性が強いが、機能・性格は明らかでない。なお実測・写真撮影を終えたあと、周溝の内側全体を掘り下げたが、そのほかには付属する施設は認められなかった。

遺物

出土遺物は土師器製の細片1点だけである。

遺構の時期

埋土や形態から平安時代Ⅳ群に分類できる。

MⅢ-201方形周溝

遺構（第324図、図版194～196）

〈検出状況・重複関係〉西側の大半が調査区域外に出るため、部分的に調査できたにすぎない。重複するMⅢ-202円形周溝を切っている。そのほかには重複する遺構はない。

〈平面形〉隅丸（凸凹）方形。隅はかなり丸みをおびる。ほぼ南の部分が途切れ、270cm±間隔が開く。東からの溝が途切れ再びはじまる部分ではMⅢ-202円形周溝とほぼ重なるように掘り込んでいることを調査時には確認し、Field Cardにも記載している。しかし実測図には掘りあげた状態での記録しかなく、間隔の正確な計測値は不明である。

〈埋土〉黒褐色土の土層群で構成される。色調と粒径の異なる2種類の火山灰が認められる。黄褐色火山灰が上位に、灰白色浮石が下位に位置する。前者は明確な塊状にはならず、不定形な集合としてみられる。後者は粒状から最大40mm±の塊状である。両者のマトリックスである2層と4層との関係は、5カ所での断面観察のうち4カ所では直接の上下、1カ所では層厚7cm±の黒褐色土を挟んで上下に位置している。最下部の5層は火山灰の大塊を含んでいる。

〈規模〉調査できた部分からは東西が最低でも12m 前後はあることが推定できる。〈幅〉上端幅は75～115cm、下端幅は44～82cmである。〈深さ〉38～48cmである。溝が途切れる部分を挟んだ両側は浅くなる。

〈断面の形状〉浅皿状やU字状、V字状である。

〈底面〉東から北へと順次下がって行く。底面は緩やかな凹凸があり、重複している付近から西側は小凹凸がある。

遺物

土師器甕の細片1点が埋土から出土しただけである。

遺構の時期

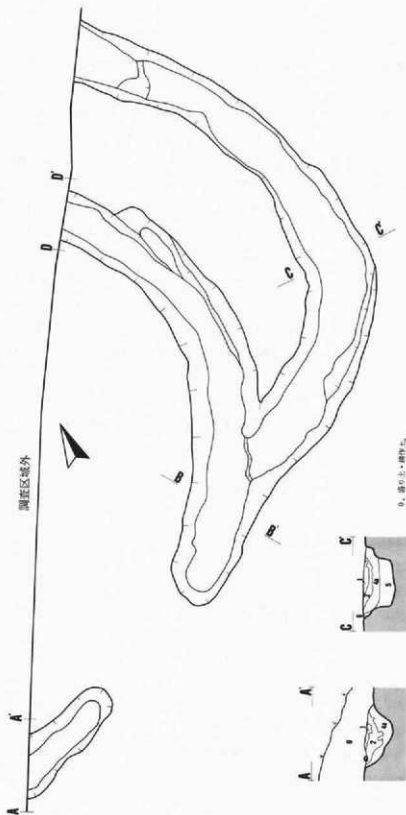
埋土や形態から、平安時代Ⅳ群に分類できる。

MⅢ-202円形周溝

遺構（第324図、図版195・196）

〈検出状況・重複関係〉MⅢ-201方形周溝の場合と同様である。重複する同遺構には切られている。

〈平面形〉円形と推定できる。しかし、一周せずほぼ南側の部分が途切れている。MⅢ-201方形周溝と重複するために東端を失い、最大4mほど途切れることになる。ただMⅢ-201方形周溝との共有・再利用という関係が考えられるため、確実な点は不明である。重複部分では本遺構の底面がMⅢ-201方形周溝のそれよりも3～7cm低くなっている。MⅢ-201方形周溝の項で述べたように、途切れた西側の部分の端は本遺構に伴うもので、その先80～100cm前後のところから切られているものであろう。



0. 盛り土・耕作土。
 1. 黒褐色。黒褐色火山灰を多く含む。
 2. 黒褐色。黒褐色火山灰を多く含む。
 3. 黒褐色。黒褐色火山灰を多く含む。
 4a. 黒褐色。灰白色砂石の大小塊を含む。
 4b. 黒褐色。4a層に褐色土が混じる。
 5. 黒褐色。黒褐色火山灰の大量の混入。
 6. 黒褐色。灰白色砂石の小塊を少量含む。



第324図 MIII-201・MIII-202周溝実測図

〈埋土〉 基本的にはMⅢ-201方形周溝と同様であるが、上部に入る黄褐色火山灰を欠き、灰白色浮石を含む黒褐色土4層が検出面に見出される。MⅢ-201方形周溝と比較し、4層は厚く、5層はほぼ同じ厚さである。

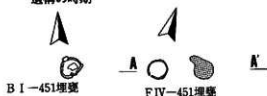
〈規模〉 10m 前後の直径が推定できる。〈幅〉 上端幅は60～115cm、下端幅は35～65cmである。

〈深さ〉 38～57cmである。しかし途切れた部分の西側の端は11cmと浅く、西側へ順次下がつて行く。

〈断面の形状〉 不整形なU字状 〈底面〉 MⅢ-201方形周溝と比べ、大小の凹凸が著しい
遺物

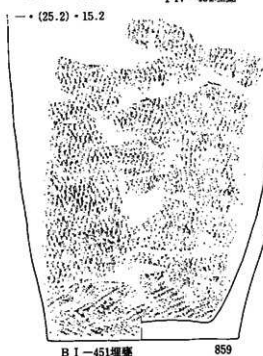
出土していない。

遺構の時期



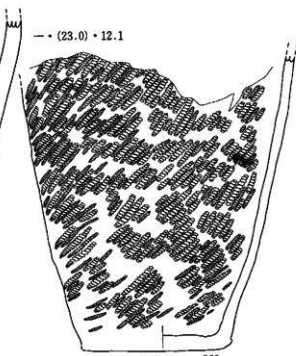
—・(25.2)・15.2

—・(23.0)・12.1



B I-451埋室

859



F IV-451埋室

860

No	地点・遺位	調査単位	遺構・包圍	遺物・外周	内周	出土分	調査	備考
859	B I-451, 埋室	調査	調査	多量腐食体・下層L・円筒状の遺物	平接	調査多い	11月10日	下層式部等
860	F IV-451, 埋室	調査	調査	EL (員条編文)	ミガキ	IV群14個	推定	210

$$S = \frac{1}{40} (\text{米}) \cdot \frac{1}{2}$$

第325図 B I-451・F IV-451埋室実測図・出土遺物

埋土や形態・重複関係から、平安時代Ⅱ群に分類できる。

8. 埋甕

2基の埋甕を検出した。1基はL面のBⅠ区、もう1基はM面のFⅣ区にある。

BⅠ-451埋甕

遺構・遺物（第325図、図版196・210）

上半を欠いた深鉢が直立した状態でBⅠe9のⅥ層中に検出された。明瞭な掘り込みは確認できなかったが、単体の埋甕と推定した。土器859は縄文時代前期中葉～末葉の時期に属するものであろうが、地文しか残らないため詳細はわからない。

FⅣ-451埋甕

遺構・遺物（第325図、図版196・210）

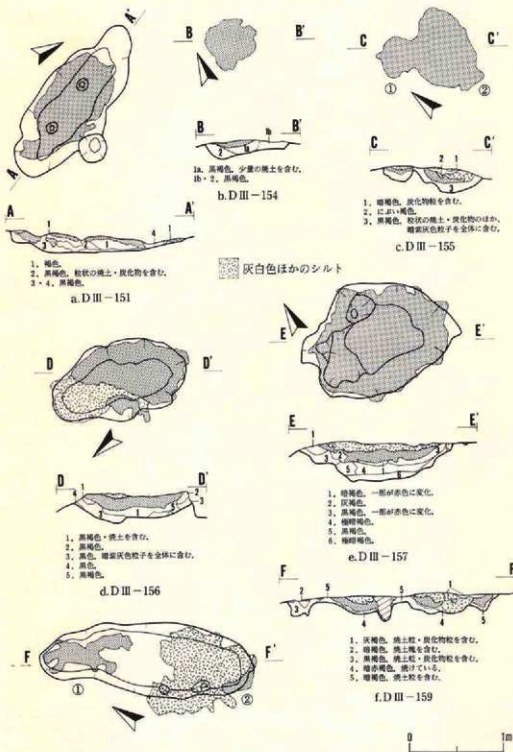
上半を欠いた深鉢が直立した状態でFⅣj6のⅥ層中に埋設されていた。27cmの距離を置いた東北東には径19×27cmの円形状の現地性焼土が存在する。共伴も含め、密接な関係にあることが推定される。焼土の層厚は3cmである。土器860は縄文時代後期に属するものであろうが、粗製土器であるため時期の詳細はわからない。

9. 焼土遺構

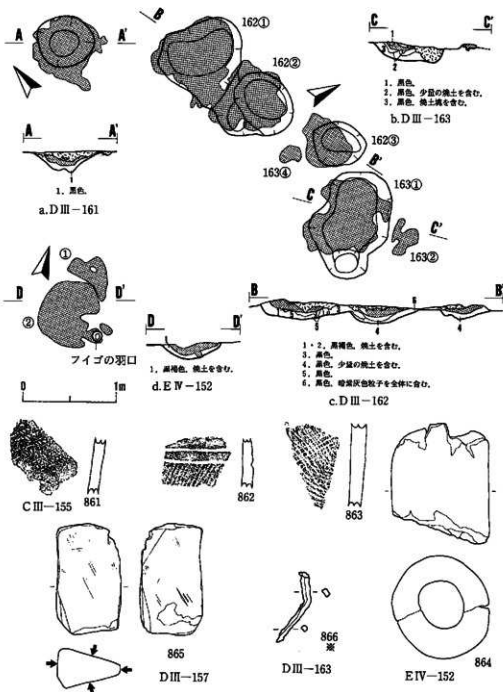
37基が検出されている。しかし、CⅢ-155ほか9基は2～6基が集合したものを1基として数えており、実際の数は53基とすることができる。分布は、L面はいちだん低いBⅠ区に2基があるほか、CⅢ・DⅡ・DⅢの各区に30基（81%）が集中する。M面は北部のEⅣ・FⅣの2区に3基、H面はOⅢ区に2基がある。平面形は、不整形のものをもっとも多いほか、円形や楕円形・方形などである。大きさは、最小が11×20cm、最大が120×158cmである。焼土の厚さは2～14cmである。なんらかの構築物を上に伴うかどうかは明らかではない。ただ灰白色の軟質なシルトや明褐色灰土ほかのシルト・粘土質土が焼土上の一部あるいは全部を覆う例が10基にみられ、その一部は焼けて橙色に変化している点に注意する必要がある。その例はDⅡ・DⅢ区のものに限られている。また、埋土中あるいは下底部に暗紫灰色や紫灰色の物質を伴う例がDⅢ区の5基にみられた。これは細砂状のものであるが、何であるかは知ることができなかった。それほど深くないピットや部分的な掘り込みを伴う例は15基と多い。

所属時期を確実に明らかにできる例はない。ただ、竈の羽口を伴うEⅣ-152が重複関係と遺物から平安時代のものと推定できる。さらに、「ダメ押し」時にⅥ層中に検出されたCⅢ-157・158・161～163・DⅢ-164・165の7基は縄文時代に属する可能性が強い。

以下、表形式で記載する。遺構の図や写真は第326図・第327図、図版197・198に、出土遺物



第326図 焼土遺構実測図(1)



No.	地点・層位	調査部位	器形／外面	内面	胎土	分級	備考	図版
861	C III-155. 焼土下位	底部	半部斜縄文の上をミガキ・細く鋭い短柱線状	ミガキ	黒褐色	II群10類		
862	E IV-152. 焼土中	中	斜縄文・RL	中	中	IV群9類		
863	中	中	縞点文?	平滑	黒褐色	II群10類		

$$S = \frac{1}{2} (\text{cm}) \cdot \frac{1}{3}$$

第327図 1 焼土遺構実測図(2)・出土遺物(1)

No	地 点・層位	器 物	大きさ(最大):cm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
865	DⅡ-157	磁石	88	52	30	175.0	黒色磁石, De 4	丸形。使用面4面	242

No	地 点・層位	器 物	大きさ(最大):cm			重量g	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
864	EⅣ-152, 焼土中	埴輪口	(86)	—	23	(270.8)	外径78cm・通風孔径30cm	240
866	DⅢ-163焼土中	釘	40	4	3	1.65	角釘。頭部がつぶれている	

第327図 2 焼土遺構出土遺物(2)

は第327図・図版240・242に一部を掲載した。遺跡中における位置は遺構配置略図に図示している。

No	遺 構 名	グリット	層位	平面形	大きさ cm	厚さ cm	備 考
1	BⅠ-151	BⅠe8	V層	不 整 円 形 状	26×30	3	
2	BⅠ-152	BⅠd8	"	ひょうたん形	26~37×57	4	
3	CⅢ-151	CⅢco	VI層	不 整 形	45×58	3	焼土上面からチップ数点出土。
4	CⅢ-152	"	"	"	45×55	不明	柱穴状ビットが下位に存在する。
5	CⅢ-153	CⅢdo	"	"	66×182	5	
6	CⅢ-154	CⅢao	CⅢ-1住埋土上	"	37×56	7	径径25cmの三角錐が南側のやや離れた位置に斜めに立っている。共存するものかもしれない。
7	CⅢ-155①	CⅢhs	VI層	"	30×63	4	調査して2基が存在。CⅢ-155②の下位には柱穴状ビットがある。遺物861は焼土直下から出土し、伴うものではない。
	CⅢ-155②	"	"	"	40×80	9	
8	CⅢ-156	CⅢfs	VI層	"	50×60	8	
9	CⅢ-157	CⅢgs6	"	"	30×35	6	柱穴状ビットに切られている。「ダメ押し」時に検出。
10	CⅢ-158	"	"	"	35×41	7	" "
11	CⅢ-159	CⅢj6	CⅢ-7住埋土上	"	75×110	4	
12	CⅢ-160	"	CⅢ-8住埋土上	"	55×70の 範囲	3	小規模な6基が集合した状態。
13	CⅢ-161	CⅢis	VI層	"	11×20	1cm残	柱穴状ビットに切られている。「ダメ押し」時に検出。
14	CⅢ-162	"	"	"	23×33	2	「ダメ押し」時に検出。
15	CⅢ-163	CⅢis6	"	"	20×38	2	"
16	DⅡ-151	DⅡb9	DⅡ-1住埋土上	不 整 円 形 状	42×57	8~15	深さ20cmの浅皿状の掘り込みを伴う。
17	DⅡ-152	DⅡd9	一部DⅡ-252 埋土上	不 整 形	53×54	2	深さ14cmの掘り込みを伴う。粘土質土のブロックをわずかに伴う。
18	DⅢ-151	DⅢb3	VまたはVI層	"	63×130	8	小規模なシルト質粘土を北部に伴う。不整長楕円形のビット(径80×197cm、深さ20cm)を下位に伴う。

19	DⅢ-152①	DⅢ c 3	DⅢ-14住居状	#	37×46	8	灰白色粘土質シルト（極細粒）を伴う。深さ24cmの掘り込みを伴うものか。
	DⅢ-152②	#	建物の上位	#	45×48	16	
20	DⅢ-153①	DⅢ e 2	不明	#	66×不明	9	77×128cmの範囲に大小4カ所、最低2基は存在。一部は削刺を受けて不明。それぞれが掘り込みを伴うが、凹凸があって最大11cmと浅い。プランは把握できない。
	DⅢ-153②	#	#	#	36×不明	2	
21	DⅢ-154	DⅢ e 2	V層	不整円形状	54×56	5	ビット（長さ90cm・深さ14cm）を下位に伴う。
22	DⅢ-155①	DⅢ e 3	DⅢ-5住居土上	不整円形	30×43	5	2基はほぼ焼している（平面図は上部の灰白色シルトを区別しないて表現しているために連なる）。灰白色や焼けている褐色のシルトを焼土上に伴う。焼土下位は暗紫灰色（5P3/1~4/1）を混入する黒褐色土。①は深さ16cm、②は深さ25cmの掘り込みを伴うが、平面図は不明。
	DⅢ-155②	#	#	不整円形状	55×96	9	
23	DⅢ-156	DⅢ e 4	V層よりも上位か	不整楕円形状	75×125	12	北面は、灰白色シルトが焼土を覆う。楕円形のビット（径85×150cm・深さ36cm）を下位に伴う。下底部5層に紫灰色の物質を含む。
24	DⅢ-157	DⅢ h 4	#	#	129×158	14	灰白色シルトが全面を覆う。シルトは焼けて褐色に変化している部分がある。焼土東側には木炭粒が多く分布する。焼土下位の5層黒褐色土は暗紫灰色の物質を含む。不整楕円形状のビット（径129×170cm・深さ40cm）を下位に伴う。遺物は、瓦盤が焼土に突き刺さる状態で、また砥石と鉄釘が焼土に埋まる東側から出土した。
25	DⅢ-158	DⅢ c 6	V層	不整円形	23×25	5	
26	DⅢ-159①	DⅢ d 7	#	不整形	32×95	9	②はほぼ全面を灰白色シルトに覆われている。長楕円形状のビット（径80×228cm・深さ20cm）を下位に伴うが、凹凸がいちじるしい。
	DⅢ-159②	#	#	#	50×93	10	
27	DⅢ-160	DⅢ b 7	CⅡ-251調理土上	不整円形	65×72	12	最下部の黒褐色土は暗紫灰色の物質を含む。深さ24cmの掘り込みを伴う。
28	DⅢ-161	DⅢ c 8	V層	#	65×65	6	上を覆う灰白色シルトは下平が焼けて藍色に変化している。円形のビット（径54×58cm・深さ22cm）を下位に伴う。
29	DⅢ-162①	DⅢ a 9	#	不整形	84×92	9	①は黄褐色やそれが著しく汚れた暗褐色の粘土質シルトが上を覆う。②は下底部に暗紫灰色の物質を含む黒色土を伴う。①~④は円形〜不整円形のビット（①径88×92cm・深さ18cm、②径70×79cm・深さ18cm、③径49×56cm・深さ15cm）を下位に伴う。①と②はほぼ連なる。④は③の南側に隣接するもので、⑤と一連かもしれない。
	DⅢ-162②	#	#	#	66×75	11	
	DⅢ-162③	#	#	#	47×60	7	
	DⅢ-162④	#	#	不整円形	15×23	—	
30	DⅢ-163①	DⅢ a 9	#	不整形	55×85	6	①は明褐色シルトで上を覆われている。①は不整楕円形状のビット（径84×114cm・深さ18cm）を下位に伴う。②は小規模で、①と一連のものと考えてもよいかもしれない。遺物は、角釘一本（866）が焼土中から出土している。
	DⅢ-163②	#	#	#	25×34	3	
31	DⅢ-164	DⅢ a 5	V層	凸辺方形状	20×25	6	「グメ押し」時に検出。
32	DⅢ-165	#	#	方形状	24×24	8	#

33	EN-150①	EN j 3	EN-55ビット 埋土上	凸辺方形状	54×70	8	①②は一連のもので、①は深さ15cmの掘り込みを下位に伴う。遺物は、竈の羽口(864)が①の東端に突き刺った状態で、また鉄屑3個137gが焼土中から出土している。焼土には粘土塊が混入している部分がある。
	EN-150②	#		不整形	27×52	8	
34	EN-153①	EN e 5	EN-59ビット の埋土上	円形	24×30	5	①と②は約28cm離れている。紫灰色(5Y6/1)の物質を下底部に伴う。②は浅いビットを下位に伴う。遺物は、縄文土器片(862・863)が焼土中から出土している。
	EN-153②	#		方形状	45×52	6	
35	FN-156	FN f 4	V層	円形状	29×36	4	焼土に接する河東郡の約100×100cmの竈跡が非常に覆くしまっている。周辺に存在するFⅡ-7・同8の2基の縄文時代後期の住居跡を考慮にいとると、住居跡の跡と東端の一部である可能性がある。
36	OⅢ-151	OⅢ f 3	V層	楕円形状	64×87	4	径21cm土の重角竈2個が焼土上に築る。
37	OⅢ-152	OⅢ g 4	#	#	50×70	不明	径35cmの重角竈が南に横して存在する。

補足説明：No29DⅢ-162とNo30DⅢ-163は、大きくは4基が東北東～西南西約3.5mの長さのなかにならんで存在し、一連のものと考えられる。

10. 溝跡

溝跡は、L面とM面に5条ずつ、計10条が検出された。ガリ浸蝕によって生じたと考えられる3条以外について記載する。

CⅡ-251溝跡

遺構(第328図)

〈検出状況・重複関係〉L面のCⅡ・DⅢ区に存在する。北東端は崖へ収斂する。重複するDⅢ-10住居状遺構(時期不明)の埋土を切っているが、DⅢ-160焼土遺構(時期不明)は本遺構の埋土上に形成されている。

〈方向〉南西から北東へ向ってゆるやかに傾斜して下がり、崖へ落ちる北東端は急傾斜である。

〈長さ〉約24m 〈上端幅〉35～160cm 〈下端幅〉10～85cm 〈深さ〉10～130cm 〈横断面形〉U字状や逆台形状

〈埋土〉黒褐色系の土が主体を占める。

遺物(第330図)

〈出土状況・種類〉867をはじめとする縄文土器の破片は深くなる北東端から出土しているが少量である。そのほかには、砥石870や環状の鉄製品871・剥片石器がある。

まとめと遺構の時期

形態的にみて、ガリ浸蝕によるものかもしれない。重複する遺構の時期が不明なこともあり、

所属時期は推定できない。

D II-251溝跡

遺構（第328図、図版199）

〈検出状況・重複関係〉L面のD II・D III区に検出された。D II-252溝跡はD III f 3付近から北西部が2条になり、その北側をD II-251溝跡として分離した。両端が確認できるが、途中の一部がD II-252溝跡と重なり合うために不明になる。2条の新旧関係は不明である。

〈方向〉南東～北西方向へ伸びている。

〈長さ〉約14m 〈上端幅〉30～110cm 〈下端幅〉20～40cm 〈深さ〉15～30cm 〈横断面形〉U字状

〈埋土〉にぶい橙色や黒褐色・灰褐色などのシルト質土で構成される。

遺物（第330図）

〈出土状況・種類〉少量の縄文土器や埴・鉄製品873がある。

まとめと遺構の時期

D II-252溝跡とともに、人工物であるとは必ずしも断言できない面がある。所属時期は不明である。

D II-252溝跡

遺構（第328図、図版199）

〈検出状況・重複関係〉L面のD II～D IV区に検出された。南東端は削刺を受けている。また、南東端は一部が2条になるが、分離はしていない。重複するD III-5住居跡（平安時代）を切るが、D II-152焼土遺構（時期不明）は本遺構の埋土上に形成されている。D III区では多くの柱穴状ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

〈方向〉南東から北西へ向ってゆるやかに傾斜して下がっていく。北西端は調査区域外へ伸びている。

〈長さ〉約39m（現存長）〈上端幅〉70～270cm 〈下端幅〉20～120cm 〈深さ〉45～90cm 〈横断面形〉U字状やV字状

〈埋土〉灰褐色や褐色・黒褐色ほかのシルト質土で構成される。

遺物（第330図、図版213・238）

〈出土状況・種類〉いくぶん多い量の遺物が出土している。土器はすべて破片で、縄文土器や土師器・埴・須恵器がある。鉄製品880は鉄鏃である。鉄滓は5点173gがある。轡の羽口は879のほかに5点の破片、砥石は876のほかに1点の破片、剃片石器は877・878のほかに2点が出土している。

まとめと遺構の時期

南東端は形態が安定感に欠け、人工物であるとは必ずしも断定できない面がある。平安時代の住居跡よりは新しいものの、所属時期は不明である。

FⅢ-251溝跡

遺構（第328図、図版200）

〈検出状況・重複関係〉L面とM面の境はL面が大きく削割され、崖を作っている。その崖に沿うような状態で、FⅢ・GⅢ区に検出された。重複するGⅢ-51ピット（時期不明）とGⅢ-102落とし穴を切っている。

〈方向〉南西から北東へゆるやかに傾斜しながら下がっている。北東端は崖を掘り込んで消滅している。

〈長さ〉約44m 〈上端幅〉70～320cm 〈下端幅〉20～90cm 〈深さ〉6～166cm 〈横断面形〉U字状・逆台形状。深い部分は底面に凹凸がある。

〈埋土〉黒褐色土や褐色・明褐色ほかのシルト質土や砂質土で構成される。

遺物（第330図、図版216）

〈出土状況・種類〉少量の遺物が出土している。土器はすべて破片である。縄文土器や土師器壺・坏・須恵器がある。そのほかには磨石Ⅱ類886と円盤状土製品887がある。

まとめと遺構の時期

形態からは人工物と推定できる。所属時期は不明である。

GⅢ-251溝跡

遺構（第329図、図版200）

〈検出状況・重複関係〉GⅢ・HⅢ区の崖に寄った部分に検出された。重複するHⅢ-2・HⅢ-3の住居跡（ともに平安時代）を切っている。HⅢ-251・IⅢ-251の2条の溝跡との新旧関係は不明である。

〈方向〉北東から南西へ向って次第に下がっていく。HⅢg4では二又に分かれ、1条はほぼ直角に曲ってHⅢ-251溝跡と重複し、別の1条はそのまま直線的に伸びてIⅢ-251溝跡と重複する。

〈長さ〉約48m 〈上端幅〉50～190cm 〈下端幅〉20～100cm 〈深さ〉14～76cm 〈横断面形〉U字状やV字状・逆台形状

〈埋土〉黒褐色や灰黄褐色・褐灰色ほかのシルト質土で構成される。上部は主に塊状の灰白色浮石を多く含む。

遺物（第330図）

〈出土状況・種類〉土器の破片が少量出土している。弥生土器881・882のほか、土師器壺・

坏・須恵器が出土している。

まとめと遺構の時期

他の溝跡と異なる点のひとつに灰白色浮土を埋土に含むことがある。重複するHⅢ-2住居跡は平安時代Ⅳ群に分類できる。それよりは時間的には新しいもので、平安時代に属する可能性がある。

HⅢ-251溝跡

遺構（第329図、図版200）

〈検出状況・重複関係〉GⅢ-251溝跡の2mほど北側に検出された。重複するHⅢ-1住居跡（時期不明）を切っているが、GⅢ-251・IⅢ-251の2条の溝跡との新旧関係は不明である。

〈方向〉北東から南西へゆるやかに傾斜して下がって行く。南西側約 $\frac{1}{2}$ は崖を掘り込んで作られ、ほぼ直角に曲った後、調査区域外へ伸びていく。IⅢ-251溝跡と重なる南西端寄りの部分は2条に分岐している。

〈長さ〉約27m 〈上端幅〉90～220cm 〈下端幅〉50～180cm 〈深さ〉98cm 〈横断面形〉U字状や逆台形状

〈埋土〉黒褐色土と黒色土が主体を占める。

遺物（第330図）

〈出土状況・種類〉土器片が出土しているが、少量である。縄文土器や土師器甕・坏・須恵器がある。

まとめと遺構の時期

形態的にみて、人工物と推定される。所属時期は不明である。

IⅢ-251溝

遺構（第329図）

〈検出状況・重複関係〉IⅢ区・JⅢ区の西側を走る。北北東端はHⅢ-251溝跡と重複し、南南西は深い埋没谷を掘り込みながら調査区域外へ伸びている。HⅢ-251溝跡との新旧関係は不明である。

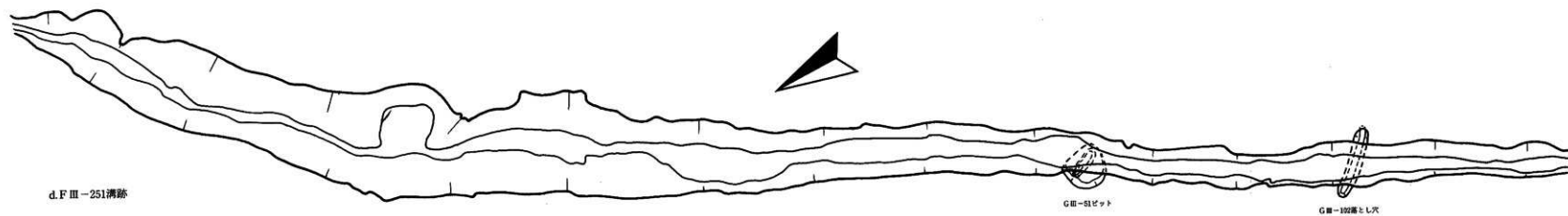
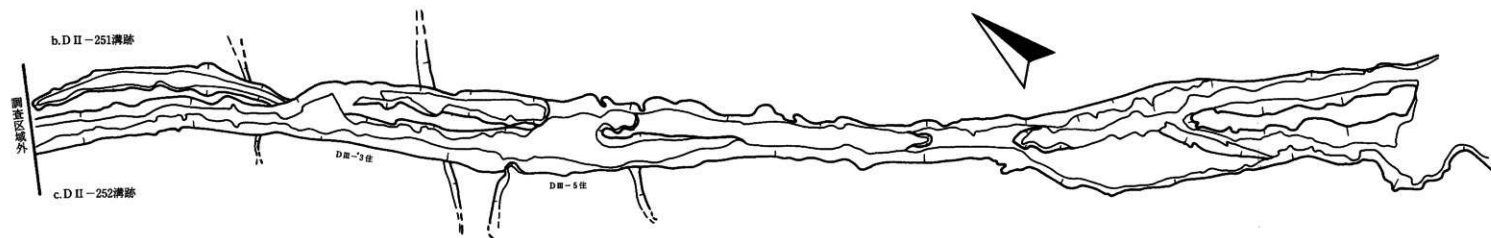
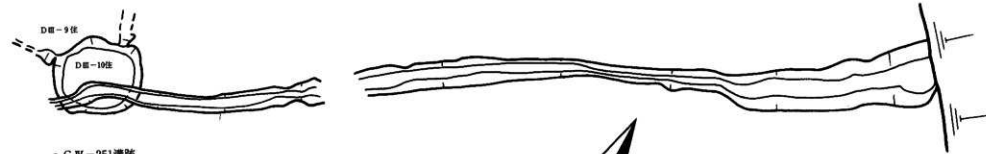
〈方向〉北北東から南南西へ向って次第に下がって行く。

〈長さ〉約63m 〈上端幅〉110～280cm 〈下端幅〉30～90cm 〈深さ〉113cm 〈横断面形〉V字状や逆台形状

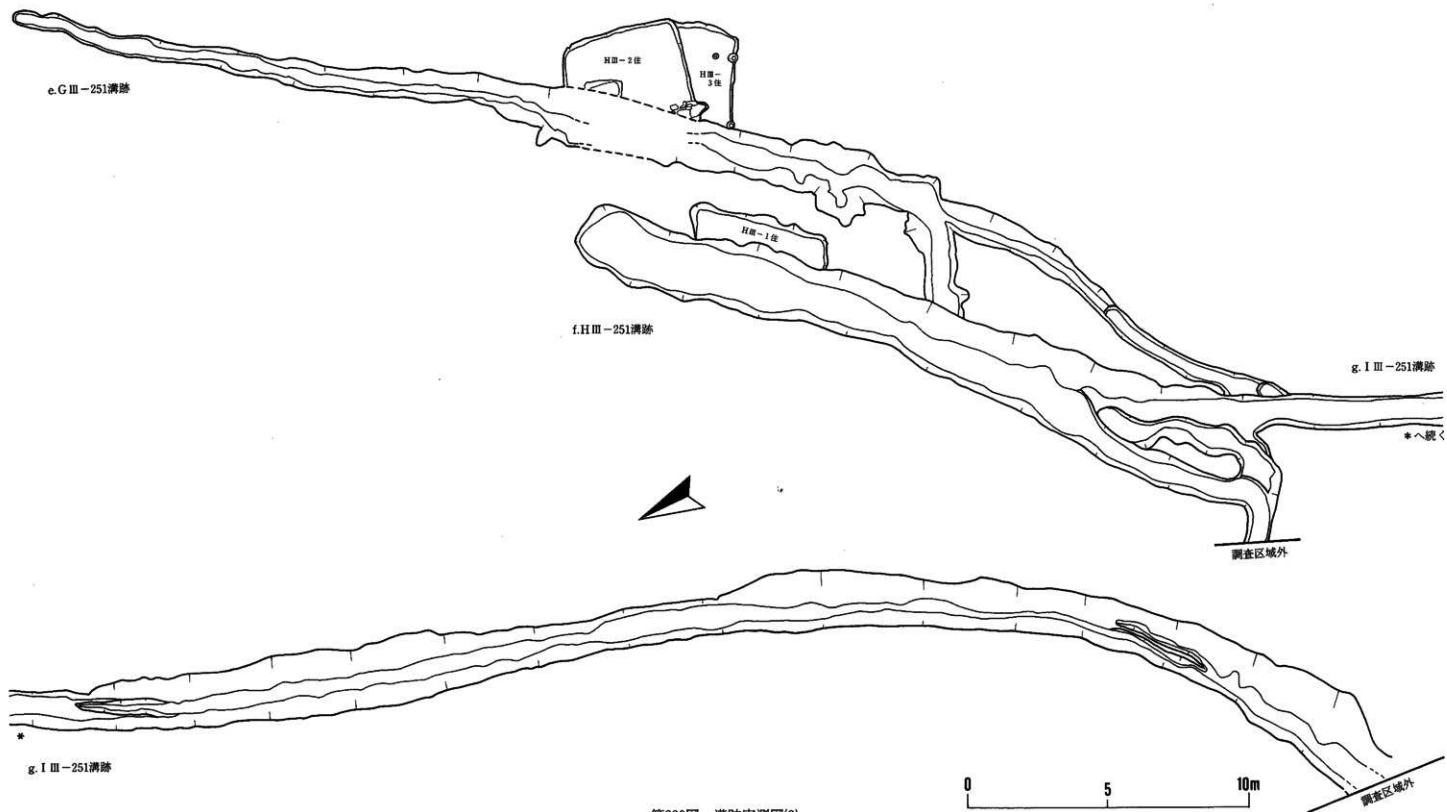
〈埋土〉黒褐色や褐灰色ほかのシルト質土や砂質土で構成される。

遺物

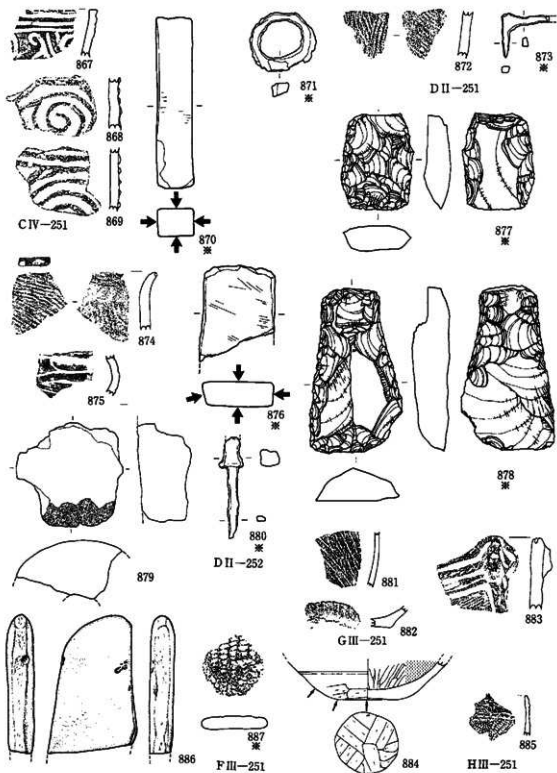
〈出土状況〉土器片が出土しているが、少量である。縄文土器や土師器甕・坏がある。



第328図 溝跡実測図(1)



第329図 満跡実測図(2)



$$S = \frac{1}{2}(\text{米}) \cdot \frac{1}{2}$$

第330圖 1 溝跡出土遺物(1)

No.	地点・層位	種類	外 面			内 面		計 測 値 : cm		分類	図解
			口 縁 部	胴 部	底 部	口 一 面	黒色紙貼	口 縁 部 高	底 部 高		

884	HⅡ-251	灰	—	ロクロ底+ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミダキ	○	—	(3.0)	5.0	IC4
-----	--------	---	---	------------	-------	-------	---	---	-------	-----	-----

No.	地点・層位	器 種	器 形	外 面	内 面	胎 土	分 類	備 考	図解
887	CⅣ-251, 最下部	漆鉢	口縁部	簡文・沈線	ミダキ		IV群9類		
888	〃 〃	〃	胴部	〃・隆起線・渦巻文	〃		IV群2類		
889	〃 〃	〃	〃	〃・〃	〃				
872	DⅡ-251, 埋土最下部	〃	〃	RL	RL		I群6類	よい褐色	
874	DⅡ-252, 埋土	〃	口縁部	口縁部押圧痕・斜線文	斜線文			〃	
875	〃 〃, 埋土上部	〃	胴部	胡蝶文・三叉文	ミダキ		V群1類		
881	GⅢ-251, 埋土	甕	胴部	総赤文	ナダ		弥生土層	末期	
882	〃 〃	〃	底部	〃	ナダ			〃	
883	HⅡ-251, 〃	漆鉢	口縁部	波状口縁・垂下隆帯・沈線・LR	ミダキ		IV群11類		
885	〃 〃	〃	〃	小部, 細い沈線・LR	〃		IV群14類		

No.	地点・層位	器 種	大 小 寸 (最大) : mm			重量g	石 材 名	特 徴 ・ 備 考	図解
			長 寸	幅	厚 寸				

879	CⅣ-251, 埋土	磁石	91	20	17	44.48	粗砂質磁灰岩(石質磁灰岩), G5	粗長い, 4面使用	
876	DⅡ-252, 〃	〃	(52)	40	19	(42.58)	〃	一端を含む破片, 4面使用	
877	〃 〃, 〃	不定形石碇	51	38	13	34.18	硬質黒岩, De 3	2. 片面面割道・一部磨しい磨耗	213
878	〃 〃, 〃	石寛輪	87	49	15	8.50	〃	〃	213
886	FⅢ-251, 〃	磨石II類	(112)	72	22	(281.8)	粗砂質磁灰岩(石質磁灰岩), G7	両側縁が鋭直面か, I類にしない	

No.	地点・層位	器 種	大 小 寸 (最大) : mm			重量g	特 徴 ・ 備 考	図解
			長 寸	幅	厚 寸			

871	CⅣ-251, 埋土	磁状鉄製品	—	8	5	10.67	径30×34cm	
873	DⅡ-251, 〃	平明鉄製品	(26)	(24)	5	(2.40)	断面方形・折れ曲った一端は残	
879	DⅡ-252, 埋土上部	輪切口	(82)	—	42	(215.4)	磨研した伊勢先輪部を含む破片	
880	〃 〃, 埋土	鉄鏃	(52)	14	9	(7.12)	基形いい, 身欠	236
887	FⅢ-251, 〃	円盤状土製品	35	35	7	21.20	縁辺打ち欠き・RL	216

第330図 2 溝跡出土遺物(2)

まとめと遺構の時期

形態的にみて、人工物と推定される。所属時期は不明である。

11. 墓 墳

3基の墓墳がM面のKN区・LV区に検出された。北側からKN-401・LV-401・LV-402の各墓墳が7m×9mの間隔を置いてほぼ一直線に並ぶ。検出面はVI層である。出土遺物888・889からはすくなくとも平安時代以降に属することが推定できるが、確実な時期は不明である。

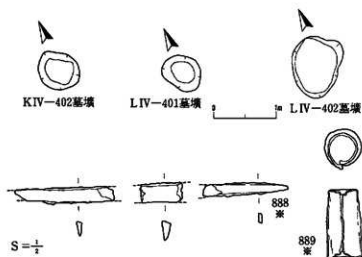
KN-401墓墳

遺構・遺物 (第331図)

平面形がややいびつな円形のピットで径は60×70cm、深さは24cmである。黒褐色土の単層で、粉状の骨片をごく少量含んでいる。出土遺物はない。

LV-401墓墳

遺構・遺物 (第331図)



No.	地点・層位	器種	大きさ(最大): mm			量	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
888	LIV-402, 埋土上層	刀子?	—	身: 9 柄: 5	3.25	墓槽 6 cm.		
889	" , 埋土	筒状鉄製品	35	外径: 19	1.5	15.97	完形。鉄板を折り曲げ、筒にしている。	238

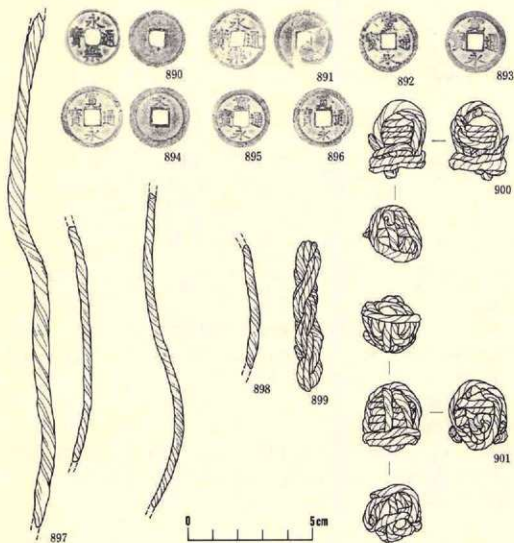
第331図 墓墳実測図・出土遺物

平面形がややいびつな円形のピットで、径は55×65cm、深さは20cmである。黒褐色土の単層で、粉状の骨片をごく少量含んでいる。出土遺物はない。

LIV-402墓墳

遺構・遺物 (第331図・図版238)

平面形がややいびつな円形のピットで、径は87×98cm、深さは20cmである。黒褐色土の単層で、粉状の骨片を少量含み、3基のなかではもっとも量的に多い。出土遺物には刀子888・筒状の鉄製品889・土師器壺の細片1点がある。



No	地 点 ・ 層 位	紙	直径 mm	重量 g	図 版
890	DⅢ-2住。埋土上部	永通通寶	23.0	(1.47)	242
891	柱穴状ピット群	〃	(24.5)	2.23	〃
892	〃	寛永通寶	34.7	3.35	〃
893	〃	〃	34.9	3.37	〃
894	〃	〃	25.3	3.45	〃
895	CⅢ-2住。1号伊直面	〃	23.95	3.28	〃
896	柱穴状ピット群	〃	24.55	3.13	〃

第332図 遺構内出土古銭・漆塗り紙

VI 遺構内外の遺物とまとめ(1)―遺物―

この章で取り上げるのは、1. 平安時代とそれ以降の住居跡と住居状遺構から出土した該期以外の遺物、2. 遺構外から出土した遺物、である。1を分離して掲載したのは、主に縄文時代の遺物が出土量の主体を占める例が少なからずあるためである。図示や記載は1と2を区別しないで種類別・器種別におこなう。縄文土器・弥生土器・平安時代の土器・剥片石器・石斧と礫石器・土製品・石製品・金属製品類があるが、そのうち、縄文土器・平安時代の土器をのぞいては若干の「まとめ」をあわせておこなっている。

1. 縄文土器

群として時期別到大別し、類としてそれらのなかを細分する。

I群：早期を中心とする一群

1類。押型文（第339図・第361図、図版248・255）

〈分布など〉分布はL面に限定される。BⅠ区・BⅡ区で10点、CⅢ区・DⅡ区・DⅢ区で8点、あわせて18点があるにすぎない。

〈器種・器形〉すべて深鉢の破片と推定される。

〈施文〉重層V字状文（932ほか）・斜線入りの逆V字状文（940・941）・斜格子目文（2001）ほかがある（「まとめ」の項で後述）。浅い平行沈線を伴うのは936・943・2001で、2001は口縁部である。940は長さ2.8cmの原体を回転させている。

〈色調・胎土など〉色調は橙色やにぶい橙色である。胎土は植物性繊維（以下、繊維と省略）を含む例と含まない例とがあり、含む例でも、いくらか多く含む2002以外は少量あるいは微量である。内面はみがかれていて平滑なものとやや荒れているものがある。

〈相当する型式名〉早期前葉の日計式押型文に相当する。

2類。貝殻腹縁圧痕文が主文様を構成する一群（第339図・第340図、図版248）

文様意匠や施文方法のちがいによって細分する。

a. 貝殻腹縁圧痕文を横位・縦位・斜位に施文して文様を構成する（944～961）。

〈分布など〉M面のGⅣ区とL面のDⅢ区から出土した2点を除いては、17点がL面でも一段低いBⅠ区の狭い範囲のⅥ層に分布が片寄る。図示例は同一個体の破片を含むであろう。

〈器種・器形〉すべて破片で、全体を知ることができるものはない。深鉢と推定され、口縁部は、944が不均整波状、949が楕円形の刻みが増えられるため小波状になる。

〈施文〉944・945・947～949の例をみると、口縁部文様帯は数条の貝殻腹縁圧痕文を口唇と

平行にめぐらせ、胴部は同じ原体を斜位に施文している。胴部破片では954ほかのような縦位の施文もある。950は口縁部文様帯を構成せず左下がりの貝殻腹縁圧痕文が旋文されるのであろう。口端部へ施文されるのは944・948・950である。貝殻腹縁圧痕文以外では、951が横2列（現存）の刺突文を伴い、961が外面に条痕文を残している。

〈色調・胎土など〉色調は明黄褐色・灰黄褐色・にぶい黄橙色が主で、黒褐色が一部にある。繊維をわずかに含むのは945・949・953である。内面はみがかれて平滑なものと荒れているものがある。

b. 貝殻腹縁連続波状文・貝殻腹縁押し引き文の文様をもつもの（962～964）

〈分布など〉L面のBⅠ区・DⅢ区、M面のFⅣ区の0層とⅥ層から1点ずつ出土しているにすぎない。

〈器種・器形〉深鉢と推定される胴部破片だけである。

〈施文〉前者の文様をもつものは962・963、後者は964である。

〈色調・胎土など〉色調はにぶい黄褐色・にぶい褐色・黒褐色である。胎土に繊維を含まず、963・964は小礫をやや多く含む。

c. 短い貝殻腹縁圧痕文によって羽状の文様を構成するもの（965）

〈分布など〉L面の平安時代住居跡から1点が出土した。

〈器種・器形〉深鉢と推定される胴部破片である。

〈施文〉連続小刺突文をはさんだ上下が羽状になる。

〈色調・胎土など〉色調はにぶい黄橙色で、胎土は繊維を含まない。内面は条痕文を伴う。

〈2類に相当する型式名〉三つに細分したが、aは早期中葉寺の沢式、bは中葉吹切沢式、

cは推定であるが蜚沢AⅡ式に相当するであろう。

3類。貝殻腹縁圧痕文・沈線文・刺突文などの文様構成要素をもつ一群（第333図・第340図～第342図・図版244・248）

押し引き沈線文の有無によって細分できる。

a. 押し引き沈線文を伴わないもの（902・966～993・997）

〈分布など〉分布はL面に限定され、しかもB区～D区の南北ほぼ90mの範囲である。Ⅵ層や0～Ⅱ層・平安時代の住居跡ほかから出土しているが量は少ない。

〈器種・器形〉器形全体を知ることができる資料はなく、底部資料も欠いている。口縁部が内湾するものと外傾するものがあり、キャリパー形の深鉢になるであろう。902・966ほかは波状口縁である。

〈施文〉貝殻腹縁圧痕文と沈線文・刺突文・小突起・刻み・微隆帯が文様の構成要素である。沈線文は口縁部・胴部の文様を構成し、直線・曲線のほか小波状（902・981・987・988）があ

る。また入組状(902)・方形(975)のモチーフをつくる。貝殻腹縁圧痕文は、沈線に沿い平行するもの、沈線間を充填するもの、沈線に付着し斜行する短いものがある。971は矢羽状になる。969は深い角度で施文し、沈線的な表現をしている。また、口端部(966・974)・口唇部内面(902・968・970)・微隆帯上(902・967ほか)に施文して刻みを付す例がある。971の口唇部内面の刻みは篋状工具によるものである。円形刺突文を伴う瘤状突起は波状部頂部(902・967)や入組状沈線文が入り組む部分(902)のほか口縁部につく。刺突文は、円形小刺突(972)・斜位の刺突(902)・断面が三角形のもの(980)がある。980の刺突は次に述べるbに共通する。施文位置は、横に並んだ2個1対が平行する沈線や微隆帯の間、上下の2個1対が微隆帯を挟んだ位置、沈線や貝殻腹縁圧痕文の屈曲部、沈線上である。微隆帯は沈線に挟まれ、貝殻腹縁による刻みが加えられる(902・988など)。

〈色調・胎土など〉色調は橙色・にぶい黄橙色を中心に、黒褐色が一部にある。胎土には纖維を含まない。内面はていねいにみがかれ、平滑なものが多い。

b. 押し引き沈線文を伴うもの(994～996・998～1013)。

〈分布など〉分布はL面に限定され、A区～E区の南北約120mの範囲である。BⅠ区にもっとも多い。Ⅵ層やⅦ～Ⅷ層・平安時代の住居跡から出土しているが量は少ない。

〈器種・器形〉器形の全体を知ることができる資料はない。キャリバー状の深鉢になる995・996は口縁部が内湾、994はわずかに外傾する。994・996は波状口縁で、996は小型である。

〈施文〉文様構成要素はaに似るが、aにみられる沈線とともに押し引き沈線を伴う。押し引き沈線は994をのぞいては断面が方形あるいは三角形の工具によるものである。994は丸棒状の工具をもちいている。沈線や押し引き沈線は口縁部・胴部の文様を構成し、直線・曲線のほか小波状(995・998・999)・入組状(1003)の文様意匠がある。996は口端部にも押し引き沈線を伴う。貝殻腹縁圧痕文はaと同様である。999・1007はaでは貝殻腹縁圧痕文で構成される文様を押し引き沈線文や沈線でおきかえている。小刺突を伴うのは999・1003・1009であり、999・1009は押し引き沈線文の施文工具と同じものを刺突している。994・995は口唇部内面に、998は胴部外面に刻みを伴う。1013の外面は条痕文を伴う。

〈色調・胎土など〉色調・胎土・内面はaとほぼ同じである。

〈3類に相当する型式名〉二つに細分したが、aは早期中葉物見台式、bは同じく明神裏Ⅲ式に相当するであろう。

4類。沈線文をもつ一群(第342図・第343図。図版248・249)

施文方法の違いから三つに細分する。すべて深鉢と推定されるものの胴部破片で、器形全体を知る資料はない。色調や胎土については最後に一括して記載する。

a. 沈線文だけが文様を構成するもの(1014～1028)

〈分布など〉分布はL面のBⅠ区・CⅢ区・DⅢ区に限定され、CⅢ区が中心である。Ⅵ層や0層・Ⅶ層上面・平安時代の住居跡ほかから出土しているが、少量である。

〈施文〉斜行あるいは縦位の沈線文がみられる。沈線はやや幅広く、深い。1014は横位の沈線1条(現存)、1022は3条の横位平行沈線、1023は条痕と横位の沈線1条を伴う。1023～1026は内外面、他は内面に条痕を伴う。1026は沈線の間隔が広い。

b. 沈線と短沈線あるいは刺突文が文様を構成するもの(1029～1033、1032は欠番)

〈分布など〉L面のCⅢ区・DⅢ区から4点が出土しているだけである。

〈施文〉1031は浅い沈線とやや深い沈線の間短沈線を配する。1033は斜行する平行沈線間を爪形と指頭状の刺突で充填する。1029は内外面に条痕を伴い、外面は浅い沈線と半截あるいは劣截の竹管による横位の刺突列による文様をもつ。竹管文はやや乱雑である。1030は横位の竹管文3条がめぐるほか、条痕が外面にみられる。

c. 条痕文あるいは擦痕を内外面にもつもの(1034～1038)

〈分布など〉分布はL面のBⅠ区とCⅢ区に限定される。Ⅵ層と0層から出土しているが、6点と少ない。なお、1037の同一個体はDⅢ-3住居跡からも出土している。

〈施文〉1037は施文工具が不明であるが、他は貝殻条痕文であろう。

〈4類の色調・胎土など〉色調はにぶい黄橙色・明黄褐色のものがほとんどである。胎土は繊維を含まない。

〈4類に相当する型式名〉三つに細分したが、早期中葉ムシリⅠ式に相当するものである。bの1030は1029に類似することからここに分類した。またbの1031・1033は青森県売場遺跡第Ⅶ群土器とされているものに近似する。

5類. 沈線と刺突文・縄文が文様を構成する一群(第343図1039～1043、図版249)

〈分布など〉L面のBⅡ区に1点、DⅢ区に3点、EⅢ区に1点が分布するにすぎない。Ⅵ層と0層・Ⅶ層上面などから出土している。なお、CⅡ-3住居跡(縄文時代)からも1点が出土し、DⅢ区からの1点と接合した(1042)。

〈器種・器形〉すべて深鉢と推定されるものの破片であり、器形の全体を知ることはできない。口縁部資料2点のうち、1039は低い波状口縁で、やや外反する。1040は詳細不明である。

〈施文〉口縁部1039・1040は沈線と縄文が文様を構成するが、縄文は内面にも施文されている。横位の平行沈線が口縁部と胴部の文様帯を区画し、口縁部は斜行する沈線文、胴部はわずかしち残存していないが縄文を伴う。胴部資料1041～1043は同一個体の破片である。横位の平行沈線間、あるいはそれと縄文帯の間を埋めるように斜位の沈線を配し、平行沈線間の狭い部分と斜行沈線文の一端に刺突文を加える。刺突は先端の鋭い丸棒状の工具によるものと角ばったものによるものと2種類がある。5点は縄文が浅く施文される特徴がある。

〈色調・胎土など〉色調は橙色・にぶい黄橙色である。繊維が胎土に少量認められるものと認められないものがある。小礫等は含まれない。内面は平滑である。

〈5類に相当する型式名〉岩手県大渡野遺跡第2群土器b₃類や青森県売場遺跡第XV群B類(=第VII群土器)に近い一群である。2遺跡ではムシリI式と次の赤御堂式の間に位置づけているが、文様構成の特徴からみて、本遺跡例も同じような位置づけをもつであろう。

6類。縄文や撚糸文が内外面に施文される一群(第343図～第345図、図版249・250)

〈分布など〉L面のCⅢ区・DⅢ区やM面のEⅣ区が中心になり、これまでの1～5類に比べて分布域がやや広がる。それでも南北約150mの範囲を越えることはない。遺構外は0～Ⅱ層や遺構検出面であるⅦ層上面などから出土している。EⅣ区の平安時代の住居跡からも多く出ている。量としてはそれほど多いものではないが、I群のなかでは主体を占める。

〈器種・器形〉すべて深鉢と推定されるものの破片で、全体を知ることができる資料はない。口縁部は外反気味になるものと外傾するものがある。底部近くの資料1084からは尖底と推定できる。

〈施文〉

口縁部資料は隆帯の有無によって二つに細分する。

a. 隆帯を伴わないもの(1044・1045・1047～1056、胴部破片1046は1045と同一個体)

口唇部や口端部への施文は次のようになる。①押圧や刻みが口端部に加えられ、小波状になる(1044・1045・1047・1048～1050)。②小波状口縁で、口端部に刺突を伴う(1051)。③口端部に撚紐圧痕を伴う(1052)。④回転縄文が口端部に施文される(1055)。⑤口唇部に撚紐圧痕、その下位に横位の沈線を伴う(1053)。⑥半截竹管による刺突が口唇部に施文される(1056)。以上のほかに、平縁で内外面に地文だけのものがある(1054)。

b. 隆帯を伴うもの(1057・1058)

2点だけである。隆帯には刺突が加えられ、1057は縄文も施文されている。口端部への施文は、1057が回転縄文、1058が撚紐圧痕である。

胴部破片の施文は次のようになる。①単節斜縄文が内外面に施文される(1059～1087)。②①の外面に沈線を伴う(1089)。③撚糸文が内外面に施文される(1088)。①が主体を占め、原体はLRが主体である。0段多条ももちいられる。

〈色調・胎土など〉色調はにぶい黄橙色・橙色が主体である。胎土に繊維をわずかに含む例が4点あるが、ほとんどは含まない。

〈その他〉粘土帯の接合面を観察できる例がある(1059～1061)。断面形は、口縁部側が凸状、底部側が凹状になり、青森県和野前山遺跡の報告書で第6群土器について詳細に記述されているような接合方法をとっている。

〈6類に相当する型式名〉早期後葉の早稲田4類や赤御堂式といわれているものの一部に相当する。繊維をわずかに含む例や捺糸文を地文にする例も同様に考えておく。

7類。縄文や捺糸文が外面に施文される一群（第333図・第345図。図版244・250）

〈分布など〉分布は6類とほぼ同様である。

〈器種・器形〉すべて深鉢と推定されるものの破片で、器形の全体を知ることができる例はない。口縁部は外反気味のものと外傾するものがある。口端部への施文によって口縁が小波状になる例がある（904・1093～1096）。また1101は平縁ではなく、山形になるものであろう。底部や胴部下端の資料（1102～1104）からは尖底であることがわかる。

〈施文〉

内面の条痕の有無によって二つに細分する。

a. 条痕を伴うもの（1090～1092）

胴部破片3点だけである。1090は外面の上端に沈線を伴う。

b. 条痕を伴わないもの（904・1093～1097・1100～1104）

口縁部資料は次のようなものがある。①口端部への押圧痕のために小波状になる（904・1096）。②爪形の刻みが口端部に加えられる（1093～1095）。③口端部に回転縄文を伴う（1100）。④浅い沈線を伴う（1094・1095）。⑤口唇部・口唇部内外面に浅い刺突を伴う（1097）。1102～1104は底部や胴部下端の資料である。1104が捺糸文を地文にする以外は単節斜縄文が地文である。

〈色調・胎土など〉色調はにぶい黄褐色・明黄褐色が主である。1094が微量の繊維を含む以外は胎土に繊維を含まない。

〈その他〉接合面を観察できる1101は6類で同様の接合方法である。

〈7類に相当する型式名〉早期後葉早稲田4類・赤御堂式といわれるものの一部に相当する。

8類。その他（第345図1098・1099・第360図2003。図版250・255）

以上の1類～7類以外で、早期の土器と考えられるもの3点をあげる。

〈分布など〉L面のCⅢ区と同面でもいちだん低いBⅠ区・BⅡ区の0・I層・平安時代の住居跡から出土している。

〈器種・器形〉深鉢と推定されるものの破片である。1098は波状口縁になる。

〈施文〉1098は、外面が条痕文と沈線文、口端部が爪形の刻み目が施文される。1099は、外面が無文の上に横位と斜位の沈線文、口唇部が内外面とも刻み目が施文されている。破片のため、詳細は不明である。2003は斜格子状の沈線文を伴う。

〈色調・胎土など〉1098は褐色、1099・2003は黒褐色の色調をもつ。1098は微量・2003は少量の繊維を胎土に含む。

〈8類に相当する型式名〉同定することができなかったが、施文や胎土・分布などから早期

の土器と考えておく。

Ⅱ群：前期を中心とする一群

1類。沈線文・押し引き沈線文を主にした文様が口縁部～底部に施文される一群(第346図～第348図、図版250・251)

〈分布など〉分布はL面のCⅢ区・DⅢ区が中心である。そのほかにはL面でもいちだん低いBⅠ区やM面のEⅣ区・FⅣ区・HⅣ区、H面のPⅢ区などから出土しているが、量は少ない。Ⅵ層や0～Ⅱ層・平安時代住居跡などから出土している。

〈器種・器形〉すべて破片であり、器形全体を知ることができる資料はないが、深鉢以外の器種はないものと推定できる。口縁部は平縁と低い波状(1107・1108・1111ほか)とがある。底部や胴部下端の資料からは尖底であることがわかる。

〈施文〉

口縁部資料は文様構成要素のちがいによって細分できる。しかし破片にもとづくものであり、個体によっては分類群が変わる可能性がある。

a. 沈線文が口縁部文様帯を構成するもの(1105・1107・1112～1125・1127・1128)

次のようなものがある。①2～5条の平行沈線を口縁部にめぐらすもの(1107・1113～1125など)。低い波状口縁になる1107は垂下沈線を伴う。1112は斜行沈線が胴部へ伸びるが詳細は不明である。1124・1125はやや小型で、沈線がいくぶん細い。②口唇部にめぐる1条の沈線と右下がりの斜行沈線とで構成されるもの(1105、なお1110は同一個体の胴部破片)。

b. 沈線文と刺突文が口縁部文様帯を構成するもの(1106・1108・1109・1111・1126)

次のようなものがある。①平行沈線や弧状沈線・斜行沈線を施文し、その起点や末端に刺突を加えるもの(1106と同一個体の1111・1108)。②口唇部に横位2列の刺突文をめぐらした下位に斜行沈線を施すもの(1126)。③横位沈線と斜行沈線が重なる部分に刺突するもの(1109)。

c. 押し引き沈線文が口縁部文様帯を構成するもの(1140～1150・1152)

次のようなものがある。①3～5条の平行沈線をめぐらすもの(1141・1144・1145ほか)。②横位沈線と斜行あるいは弧状沈線とを組み合わせたもの(1140・1142・1143・1146・1148)。

d. 沈線文と押し引き沈線文・刺突文が口縁部文様帯を構成するもの(1151)

確認できるのは1点だけである。横位平行沈線文と斜行沈線文を主とし、刺突文はその接点に、押し引き沈線文は斜行沈線文間を埋める短沈線状の部分にみられる。

以上が口縁部資料である。底部そのものの資料はないが、胴部下端の資料があり、いくつか細分できる(1135～1139・1157～1159)。

e. 沈線文を伴うもの(1135～1139)

f. 押し引き沈線文を伴うもの(1157・1159)

B. 押し引きであるが、明瞭な沈線にはならず、連続刺突文のようにみえるもの (1158)

それらの施文は縦位や斜位が主で、横位のもの (1159) や格子目状 (1136) がある。

そのほかには沈線文や押し引き沈線文・刺突文を伴う胴部破片がある (1129~1134・1156)。1129~1132・1134は横位の平行沈線がめぐる。1134は底部近くの可能性がある。

以上の資料は、単節斜縄文 (0段多条を含む) を主に、ループ文 (1105・1110=同一個体)・羽状縄文 (1141) がある。

〈色調・胎土など〉色調は黒褐色・明褐色が主である。胎土は一般に多量の繊維を含み、その束痕が器壁にみえる例がある。内面はていねいにみがかれ、一般に平滑である。

〈1類に相当する型式名〉前期前葉早稲田6類や春日町式に相当する。

2類、尖底あるいは丸底になるとみられる胴部下部~底部にかけての一群 (1160~1170)。

〈分布など〉L面のCⅢ区を中心に、同じ面でもいちだん低いAⅠ区・BⅠ区から少量が出土している。Ⅵ層や0~Ⅱ層からの出土が主である。

〈器種・器形〉深鉢の破片である。明確な尖底は1160で、1162・1163もそれに近いものと推定できる。丸底気味になるのは1168・1169で、残りはそのいずれかがはっきりしない。

〈施文〉地文だけである。単節斜縄文と原体不明がある。

〈色調・胎土など〉色調はにぶい黄褐色や灰黄褐色ほかがある。胎土は多量の繊維を含む。

〈2類に相当する型式名〉器形や胎土・出土地点などを考慮すると、上述の1類の仲間と考えられる。

3類、葦瓦状撚糸文・沈線文・貼付文が文様を構成する一群 (第350図、図版252)

〈分布など〉L面はCⅢ区、M面はFⅣ区・GⅢ区・HⅢ区、H面はPⅢ区から出土しているが、量は少ない。

〈器種・器形〉1208は小型の鉢である。低い波状口縁になる。1216はやや小型の深鉢の破片である。1209は小型で、口縁部が強く内湾する。1212は胴部上半に強い屈折点をもつ器形が推定できる。

〈施文〉

a. 葦瓦状撚糸文・沈線文・貼付文が文様を構成するもの (1209~1211・1213・1216)

1209・1211・1213は葦瓦状撚糸文、1210は葦瓦状撚糸文と半截竹管の内側を引いた波状沈線文を伴う。1216は、半截竹管の内側をもちいた浅い刺突文が口唇部、同じ工具による波状沈線文、葦瓦状撚糸文がその下位に施文される。図示例以外には、口縁部に沈線と貼付文・葦瓦状撚糸文による文様をもつ例がある。

b. 沈線文が文様を構成するもの (1208・1212)

1208は、押し引きによる2条の横位平行沈線文が口唇部、櫛歯状工具による横位沈線文がそ

の下位に施文される。1212は半載竹管の内側を一部押し引きする沈線文と同じ工具の外側を使う押し引き状の浅い沈線文をもつ。

〈色調・胎土など〉色調は、aが明赤褐色～橙色、bが黒褐色である。胎土は、1212がやや多い量の繊維を含む以外は含まない、あるいは含んでも微量である。内面は1213以外はていねいにみがかれている。器厚は、1213が8mmとやや厚いが、他は4～6mmである。

〈3類に相当する型式名〉前期中葉大木2a式に相当する。

4類、粘土紐貼付文が口縁部文様帯を構成する一群（第350図、図版252）

〈分布〉同一個体の破片7点がPⅢ区・PⅣ区に形成された遺物包含層から出土しているにすぎない。0～Ⅱ層に含まれている。

〈器種・器形〉口縁部資料1214が下端内面に強い屈折点をもつことから、口縁部が内湾気味に大きく開き、胴部が球状に膨らむ深鉢が考えられる。平縁で、口唇部がいちじるしく肥厚する。

〈施文〉文様帯は口縁部から胴部上部に展開し、その下位は結束第1種羽状縄文を地文にする。細い粘土紐を貼り付け、横位や斜位の平行線・鋸歯状文・矢羽根状文の文様を構成する。1214は長方形の突起の剥落痕が残る。

〈色調・胎土など〉色調はにぶい橙色である。胎土は繊維をわずかに含む。器厚は6～8mmで、肥厚した口唇部は16mmである。内面はていねいにみがかれている。

〈4類に相当する型式名〉前期後葉大木5式に相当する。

5類、沈線文・貼付文・刺突文ほかが主に口縁部文様帯を構成する一群（第336図・第350図、図版247・252）

〈分布など〉H面の南端OⅢ区やPⅢ区が分布の中心である。L面のDⅢ区、M面のIⅢ区からは1点ずつが出土しているにすぎない。全体量は少ない。0～Ⅱ層から出土している。

〈器種・器形〉918は長脚付深鉢で、器形の全体を知ることができる。1232も同器種の胴部から脚部にかけての破片である。917・1227は口縁部が「く」字に折れ曲がっている。他は小破片で詳細は不明であるが、深鉢になるであろう。1222・1223は同一個体であるが、文様帯と地文帯の境の口縁部側がわずかに肥厚する。

〈施文〉

文様の種類や施文部位のちがいは次のようになる。

a. 竹管の外側、あるいは丸棒状の工具を使用して沈線文を描くもの（918・1220～1223）
文様帯は口縁部に集約され、胴部へは展開しない。918は棒状やボタン状の突起を伴う。1223は円形の貼付文が剥落している。

b. 半載竹管の内側を使用して沈線を描くもの（1227～1231）

1227と1228は同一個体かもしれない。沈線文は口縁部から胴部上部にかけて施文される。1227は棒状の突起2個、1231は突起の上半部竹管による刺突文を伴う。

c. 沈線文や突起のほかに円形竹管文が加わるもの(1225・1226)

文様帯は口縁部に集約される。1225は2個1対のボタン状突起を伴う。1226は胴部との境の口縁部側がわずかに肥厚する。

d. 半截竹管による刺突文・撚紐側面圧痕・絡条側面圧痕が口縁部文様帯を構成し、橋状突起を伴うもの(917)

e. 短沈線による口唇部への刻みを伴うもの(1224)

以上のものの地文は、単節斜縄文のほかに縦位の結束第1種羽状縄文(1226)や横位の結節回転文を伴う櫛歯状沈線文(917)がある。

〈色調・胎土など〉色調は明赤褐色・にぶい橙色・浅黄色がある。胎土には繊維を含む例が多いが、含有量は微量あるいは少量である。内面はていねいにみがかれている。

〈5類に相当する型式名〉大部分は前期末葉大木6式に相当するものと考えられる。ただ、1225はさらに新しいものかもしれない。

6類。文様帯が口縁部と胴部に分化し、それぞれ回転縄文が施文される一群(第335図・第351図。図版246・252)

〈分布など〉H面のPⅢ・OⅢ区、L面でもいちだん低いBⅠ区から出土しているが、少量である。N層やO・I層などから出土している。

〈器種・器形〉912は胴部下端～底部を欠くが、円筒形の深鉢である。1233～1237も同様の器種・器形と推定できる。1235は低い波状口縁になる。

〈施文〉

文様帯の区画の方法は2通りがある。

a. 絡条側面圧痕によるもの(1233・1234)

1234は絡条側面圧痕をはさんだ上下に撚紐側面圧痕を伴う。

b. 隆帯によるもの(912・1235～1237)

912・1235は1列、1236・1237は2列の刺突文を伴う。また912・1235は隆帯の上に回転縄文を伴う。隆帯は狭く、低い。

a・bの部位別の施文は次のようになる。口縁部が、①単節斜縄文(912・1235)・②結束第1種羽状縄文(1233・1236・1237)・③欠矢のため不明(1234)である。胴部は、①結束第1種羽状縄文(1236・1237)・②結束第2種羽状縄文(1235)・③結束第2種羽状縄文と附加条付(912)・④結束されない縦位の羽状縄文(1234)である。

〈胎土など〉胎土は繊維を含み、1233～1235は含有量が多い。内面はていねいにみがかれ、

平滑である。

〈6類に相当する型式名〉本類のうち、1233・1234は前期中葉円筒下層式bに相当する。それに対し、口縁部文様帯が1～2cmと狭い912・1235～1237は出土地点や器形・施文の点あるいは江坂(1958)の分類や青森県山崎遺跡の出土例と比較し、末葉の円筒下層式d₁に分類することができるであろう。

7類、主として撚紐や絡条体の側面圧痕が口縁部文様帯を構成する一群(第333図・第334図・第336図・第351図・第352図、図版244・245・247・252)

〈分布など〉この類の土器を主体にした包含層がH面のPⅢ区に形成されている。そのⅣ層からの出土例が中心である。そのほかにはH面のOⅢ区やL面のBⅠ区、M面のCⅡ区から出土しているが、少量である。

〈器種・器形〉916・1253～1255・1259をのぞいては円筒形の深鉢である。四単位の低い波状になる例は906・908にある。916は口縁部が大きく開き、四単位の大波状口縁になる。1253～1255は口縁部が内傾して立ち上がったあとに外傾するものである。

〈施文〉

文様帯は口縁部にあるが、区画の方法はいくつかの種類がある。

a. 低い隆帯が区画するもの(903・905～909・911・1238～1249)

隆帯の上への施文は、①刺突文や刻目文が加えられる(903・905・907・911ほか)・②撚紐や絡条体の側面圧痕を伴う(906・909・1239・1240・1248)・③施文されない(1238)がある。

b. 撚紐または絡条体の側面圧痕が区画するもの(1250・1252・1253)

1250・1252はその間に刺突文を伴う。1253はあるいは文様帯の一部かもしれない。

c. 刺突文によるもの(1254)

d. 区画帯をもたないもの(1255～1257)

e. 区画帯の有無が欠失のために不明のもの(1258・1259)

口縁部文様帯は押圧される原体によりいくつかに分けることができる。

a. 撚紐側面圧痕を伴うもの(903・906・909・911・1238・1239・1245ほか)

1239ほかは口端部へ回転縄文、1245・1246は口端部へ撚紐側面圧痕が施文される。

b. 絡条体側面圧痕を伴うもの(908・1242・1247・1248・1253～1255・1259)

c. 撚紐と絡条体の側面圧痕とが併用されるもの(905・916)

d. 口唇部が回転縄文、下位が撚紐側面圧痕によるもの(907・1243)

e. 口唇部が刺突文や刻目文、下位が絡条体や撚紐の側面圧痕あるいは両者の併用のもの(1244・1249)

f. 押し引き連続刺突文と絡条体側面圧痕を伴うもの(1254)

以上のa～eの口縁部幅は一般に狭く、区画帯をのぞくと0.6～3.7cmである。

胴部に施文される地文は各種がある。器形がよく残っているものでは、a、横位の結束第1種羽状縄文(905)、b、縦位の結束第1種羽状縄文(906)、c、縦位の木目状燃糸文(908・909)、d、縦位の燃糸文(911)、e、多軸絡条体+縦位の結節回転文(916)がある。破片資料では、a、結束第1種羽状縄文(903・907ほか)、b、結束第1種羽状縄文+単節斜縄文(1238)、c、結束第2種羽状縄文+結束第1種羽状縄文、d、単節斜縄文(1240ほか)、e、木目状燃糸文(1239ほか)、f、燃糸文(1250)、g、多軸絡条体(1242)がある。

〈胎土など〉すべてが胎土に繊維を含む。含有量は少ないものから多いものとバラツキがある。内面はみがかれて平滑なのが一般的である。

〈7類に相当する型式名〉前期末葉円筒下層式dに相当する。916・1253～1255は器形や施文から円筒下層式d₂に含まれるものとする。他は円筒式下層d₁に相当する。

8類、文様帯の区別がなく、地文だけの一群(第335図・第352図、図版246・252)

〈分布など〉H面のPⅢ区とOⅢ区のN層と0・I層から少量出土しているにすぎない。

〈器種・器形〉略丸形の915は円筒形の深鉢である。折り返し状口縁で、肥厚している。

〈施文〉915・1260とも縦位の結束第1種羽状縄文である。

〈胎土など〉少量の繊維を胎土に含む。内面はみがかれて平滑である。

〈8類に相当する型式名〉出土地点や層位・相伴土器ほかから上述の7類の仲間と考える。

9類、円筒下層式に属し、6類～8類以外の一群(第334図・第335図・第352図、図版245・246・252)

〈分布など〉H面のPⅢ区やOⅢ区を中心に、L面のBⅠ区・CⅡ区から少量出土している。

〈器種・器形〉すべて円筒形の深鉢と推定できる。910は上半がいくぶん外傾する。

〈施文〉910は口唇部が半截竹管による刺突文、その下位が縦位の結束第1種羽状縄文である。913は低い隆帯によって文様帯が区画され、口縁部はみがかれて無文、隆帯上と胴部には単節斜縄文と横位の結節回転文が施文されている。胴部資料には、結束第1種附加条付(914・1246)・結束第2種附加条付(1264)・結束第1種羽状縄文(1261・1262)・木目状燃糸文(1266)がある。

〈胎土など〉すべてが繊維を胎土に含む。含有量は少ないものからやや多いものまである。内面はていねいにみがかれて平滑なのが一般的である。

〈9類に相当する型式名〉1261・1262をのぞいては円筒下層式dの仲間であることが出土地点・層位・施文ほかから推定できる。

10類、II群1類～9類に分類できないが、前期の土器と推定される一群(第348図～第350図・第361図、図版251・252・255)

施文のちがいによって細分する。相当する型式名については一括して後述する。

a. 綾絡文が口縁部文様帯を構成するもの (1181~1189・1192・1193)

〈分布など〉L面のBⅠ・CⅢ・DⅢの各区、M面のEⅣ区・FⅣ区から出土しているが、少量である。Ⅵ層やⅦ層上面ほかから出土している。

〈器種・器形〉すべて深鉢と推定されるものの破片であるが、器形の全体を知る資料はない。

〈施文〉横位の綾絡文が口縁部に施文される。1189が1条である以外は2~6条の綾絡文がみられる。1188は綾絡文の上に単節斜縄文が重ねて施文される。1193は沈線状のものが口唇部にめぐり、小型である。1192は口端部に単節斜縄文を伴う。地文は単節斜条文(0段多条を含む)が主で、複節斜縄文が1点(1183)である。1189は口唇部に1条、間隔をおいて胴部に1条が認められる。

〈色調・胎土など〉色調はにぶい黄褐色やにぶい黄褐色が主で、1185・1192は黒褐色である。全部が胎土に繊維を含み、含有量は1183・1184が少量である以外は多量である。内面は比較的に荒れているものが多く、1185はヘラケズリされている。

b. 捺糸文が施文される口縁部破片 (1172~1176・1179)

〈分布など〉L面のBⅠ区・CⅢ区、M面のEⅣ区から出土しているが、量は少ない。Ⅵ層や平安時代の住居跡などからの出土である。

〈器種・器形〉すべて深鉢と推定されるものの破片であるが、器形の全体を知る資料はない。1173は口端部に指頭状押圧痕を伴い、小波状になる。

〈施文〉縦位や斜位の捺糸文が口縁部から施文される。1172・1174・1179のように条の太い例がある。地文以外では、1172が口端部に「×」の刻目文、1173が口端部に指頭状押圧痕、口唇部に絡条体側面圧痕を伴う。

〈色調・胎土など〉色調は明褐色や黒褐色・赤褐色などである。胎土は繊維を含む。量が多く、1175・1176は内面に繊維束痕が観察できる。内面はみがかれて平滑なものが多い。

c. 斜位捺糸文が口縁部に施文され、その下位が単節斜縄文であるもの (1178・1180)

〈分布など〉L面のBⅠ区のⅦ層から2個体の破片7点が出土したにすぎない。

〈器種・器形〉器形の全体を知ることはできないが、やや外傾する口縁部をもつ深鉢と推定できる。

〈施文〉斜行する捺糸文が幅2.5cmの口縁部文様帯を構成し、下位は単節斜縄文である。

〈色調や胎土など〉色調は橙色と褐色である。胎土は多量の繊維を含み、1178は繊維束痕を内面に観察できる。

d. 羽状縄文を地文にするもの (1190・1195・1200・1205~1207)

〈分布など〉L面のCⅡ区・DⅡ区・DⅢ区、M面のIⅣ区から出土しているが、少量であ

る。

〈器種・器形〉すべて深鉢と推定されるものの破片で、器形の全体を知る資料はない。1190・1195・1200は口縁部、他は胴部の破片である。

〈施文〉非結束の1205をのぞいては結束第1種羽状縄文を伴う。

〈色調・胎土など〉色調は橙色やにぶい黄褐色などである。胎土は多量の繊維を含む。内面はみがかれて平滑である。

e. 口縁部に刺突文を伴うもの (1171・1204)

〈分布〉2点はL面から出土している。1171はDⅢ区Ⅵ層、1204はCⅢ区のⅥ層からの出土である。

〈施文〉1171は3列の刺突文が口縁部にめぐり、その下位は単節斜縄文である。刺突文というよりも押し引き沈線状のものである。1204は沈線が口縁部と胴部の文様帯を区画するが、胴部への施文は欠失のため不明である。幅2.8cmの口縁部は1条の浅い沈線が口唇部にめぐり、半截竹管による刺突文がやや乱雑に施文されている。

〈色調・胎土など〉ともに色調は黒褐色である。胎土に含まれる繊維の量は1171が多量であるのに対し、1204は少ない。1204の内面はみがかれている。

f. a～e以外の口縁部破片 (1191・1194・1199)

〈分布など〉L面のCⅢ区・DⅢ区、M面のGⅢ区から出土した3点がある。

〈器種・器形〉深鉢の口縁部破片であるが、器形の全体を知る資料はない。

〈施文〉1191は単節斜縄文(0段多条)である。1199も単節斜縄文であろう。1194は幅5cmの広い口縁部文様帯をもつが、回転施文されているものの原体を明らかにできなかった。その下位は単節の斜縄文である。

〈色調・胎土など〉色調はにぶい黄褐色や褐色である。繊維の含有量は、1191・1194は多く、1199はやや多い。

g. その他の胴部破片 (1196・1197・1201～1203・2004・2005)

〈分布など〉L面のBⅠ・CⅢ・DⅢ・EⅢの各区、M面のFⅣ区に分布する。Ⅵ層などからの出土である。

〈器種・器形〉器形の全体を知る資料はないが、すべて深鉢の破片であろう。

〈施文〉1196・1197は同一個体である。2列の横位の綾絡文を伴う。1201はループ文、1202・1203は直前段合断りが地文である。2004は不整断糸文が横位に施文されている。2005は地文の単節斜縄文を施文した上をみがいて消している。細いが鋭く、また浅くて短い沈線状の刻みが数本ずつまとまって認められる。2005は器壁がやや厚い。

〈色調・胎土など〉色調はにぶい黄橙色や褐色である。胎土に含まれる繊維の量は、微量で

ある2004、やや多い2003以外は多い。

〈10類に相当する型式名〉型式名で分類できるかもしれないものまで同定できないままここに含んでいる可能性があるが、a～gの編年的な位置を検討してみたい。

aとした綾絡文が口縁部文様帯を構成する特徴は円筒下層式aや大木1式に知られている。撫糸文が施文されるbは熊谷(1983b)が第Ⅳ期のなかに含めている岩手県上里遺跡第Ⅱ群3類Aなどと同類の可能性があり、前期前葉のものとしてとすることができるであろう。cは熊谷(1983b)が第Ⅰ期に分類した岩手県桜松遺跡例に類似する。ただ同報告書が口縁部文様帯を撫糸文であるとしているのに対し、熊谷は斜位回転による横走縄文としている。また本遺跡例ではその下位の地文が不明である。eのうち、1171はⅡ群1類とした早稲田6類担当の仲間の可能性がある。1204は大木3式などに近いものかもしれない。gは胴部破片である。ループ文をもつ1201は熊谷(1983b)が第Ⅱ期とした岩手県小堀内遺跡例ほかにあり、また興野(1967)が分類する大木1式にもある。本遺跡ではⅡ群1類にループ文を伴うものがあるが、それに比べると1201は繊維の混入が少ないことや原体の長さに異なる点がある。2004は宮城県今熊野遺跡に類似するものがあり、大木2a式に相当する本遺跡のⅡ群3類の仲間である。2005は大木3式に相当するものかもしれない。dの羽状縄文をもつものについても、口縁部に施文されるものは前期前葉のものと推定できる。

Ⅲ群：中期に属する一群

1類、隆帯が文様を構成する一群(第352図、図版252)

〈分布など〉破片1点がM面のHN区から出土しているにすぎない。

〈器種・器形〉深鉢の口縁部を含む破片である。台形状の低い突起を伴う。

〈施文〉細い粘土紐を貼り付けた直線や弧状文が口縁部にみられる。その上や地文は無節の斜縄文である。

〈1類に相当する型式名〉中期中葉円筒上層式dに相当するであろう。

2類、沈線文と隆帯が文様を構成する一群(第352図、図版252)

〈分布〉L面のDⅢ区から出土した1点以外はM面のDN・EN・FN・HNの各区から出土しているが、量は少ない。

〈器種・器形〉すべて深鉢と推定されるものの破片であり、器形の全体を知る資料はない。口縁部資料は波状口縁が多いほか、方形(1268・1269)や半円形(1275)の突起を伴う。口唇部が肥厚する例も多い(1271・1273ほか)。なお、本類の略完形品がDN-51ピットから出土している(第66図140)。

〈施文〉

a、沈線文と隆帯による文様が口縁部から胴部上部に施文されるもの(1267～1276)

施文方法や文様構成要素の違いによってさらに細分できる。①斜位を主にした撚紐側面圧痕や刻目文が口唇部や口端部、沈線文が口縁部～胴部上部に施文される(1267・1270・1271・1274)。そのうち1270・1271は波状部の頂部に細い粘土紐が巻かれ、1267は波状部のつけ根に低い貼付文を伴う。②隆帯と沈線による文様を口縁部に伴う(1272)。詳細は不明であるが、指頭状押圧痕を伴う隆帯が波状部のつけ根につく。また波状部に細い粘土紐が貼り付けられるほか、口端部に刻みを伴う。③口唇部に刻目文、突起部に指頭状または楕円形状の押圧痕が施文された短い垂下隆帯を伴う(1268)。④突起部とそのつけ根の幅広い隆帯上に撚紐側面圧痕が施文される(1269)。頂部・側縁とも押圧痕を伴う。⑤細い粘土紐による貼付文を半円状突起の内外面に伴う。外面は渦巻文であるが、内面は斜落が多く、詳細は不明である(1275)。⑥沈線文による文様をもつ(1276)。

b. 波状部や口唇部に施文されるだけのもの(1277・1278)。

斜位の撚紐側面圧痕が口唇部に施文され、1277は細い粘土紐が波状部にめぐる。

以上のa・bの地文には無節・単節・複節の各斜縄文がある。

〈2類に相当する型式名〉中期中葉円筒上層式cに相当する。

IV群：後期に属する一群

〈分布など〉縄文土器のなかでは数量的に主体を占めるとともに分布も広範囲にわたる。L面はBⅠ・BⅡ・CⅡ～CⅣ・DⅢ・DⅣ・EⅢの各区、M面はEⅣ・EⅤ・FⅣ・GⅣ・HⅢ・HⅣ・IⅢの各区である。調査区の北端から南側へ約270mの範囲に分布し、それは調査区の南北の長さのほぼ強に相当する。なかでも量的に多いのはFⅣ区、次いでCⅢ区・EⅣ区になっている。G区から南側での出土量は少ない。FⅣ区に多いのは後期前葉に属すると推定した2棟の住居跡との関連が考えられる。平安時代の住居跡にも多数含まれ、EⅣ区やFⅣ区の住居跡などでは平安時代の土器よりも多い例が多数にある。

〈器種・器形〉復元できた土器はなく、すべて破片である。深鉢や壺がほとんどである。

〈施文〉

文様構成要素のちがいがなどで細分するが、記載のための便宜的なものである。

1類。 隆状突起を伴う一群(第353図、図版252・253)

1279～1281が口縁部、1282・1283・1285・1287～1289が胴部に伴う。1279は波状口縁である。1283は沈線で区画された磨消縄文帯の末端に伴い、1288はボタン状突起と併用される。

2類。 低い隆起線による文様をもつ一群(第353図、図版253)

断面が三角形になる低い隆起線が文様を構成する。器面は研磨されて無文である。口縁部破片1290～1293のうち1292・1293は波状口縁である。1290・1292・1293は渦巻文を伴う。胴部破片1294～1300のうち、1298は胴部下端の破片である。1294に渦巻文がみられるほかは直線であ

る。1300はボタン状突起が併用される。1296は沈線が一部にみられる。

3類。指頭状押圧痕を伴う隆起線が文様を構成する一群(第353図・第354図、図版253)

1302・1303は口縁部破片で、器面は研磨されて無文である。胴部破片1304はわずかに単節斜縄文がみられる。

4類。縄文を施文された隆起線が文様を構成する一群(第354図、図版253)

口縁部破片1305～1309のうち、1309以外は波状口縁である。1305・1308の口唇部の隆起線はやや幅が広い。地文はみられない。1306～1308は渦巻文になる。1310～1312は胴部破片で、1311と1312は同一個体である。1311はそのほかに縄文が施文されない隆起線と沈線が併用される。1312は単節斜縄文と沈線・隆起線が文様を構成する。

5類。円形竹管文が施文された隆起線が文様を構成する一群(第354図、図版253)

口縁部破片1313は大波状の折り返し状口縁である。1314～1318は胴部破片で、隆起線に沿う沈線文を伴う。1316は隆起線の上にかすかに地文がみられ、1317は単節斜縄文が施文された隆起線が併用される。

6類。沈線による文様が地文の上に描かれる一群(第354図、第355図・図版253)

1319～1344が該当する。1320や1322は波状口縁である。渦巻文の文様意匠が1319～1321・1323～1328ほかにみられる。1319～1321・1336・1337ほかは一部が地文の上を磨消されている。地文はすべて単節斜縄文で、横位と縦位のほかに斜位の回転がある。

7類。縄文が施文された折り返し状口縁をもち、胴部には磨消縄文による文様が展開する一群(第355図・第356図、図版253)

1345～1348・1350～1352が該当する。1348・1350～1352は波状口縁である。1345・1347・1348・1351は折り返し状口縁の上に沈線を伴う。胴部には沈線によって区画された磨消縄文による文様が展開する。

8類。沈線で区画された磨消縄文による文様が展開する一群(第337図・第353図・第356図・第357図、図版247・253・254)

919・1286・1349・1353～1377が該当する。縄文帯や磨消帯の幅や施文の方法、あるいは文様意匠を無視して一括している。1286は円形刺突文1個を伴う。

9類。沈線による文様が研磨されて無文の器面に展開される一群(第357図・第358図、図版254)

1378～1387・1389～1407が該当する。器種や文様意匠などを無視して一括している。他の文様構成要素を併用するものがあり、1378・1388・1390は小突起、1393は円形竹管文を伴う。1379は朱塗りである。類似する1388は一部に縄文がみられる。

10類。幅広い隆帯と沈線による文様が研磨されて無文の器面に展開される一群(第358図、図

版254)

1408～1412が該当する。先に2類として分離したものとは隆起線が異なり、幅が広いことや断面形が「L」になる特徴がある。

11類。波状口縁部の頂部に短い垂下隆帯を伴う一群(第358図、図版254)

1413と1414がある。ともに垂下隆帯の下端は指頭状の押圧痕を伴う。また1414はその上位に深い円形小刺突文を伴う。それ以外の文様構成要素としては沈線があり、一部は磨消されている。

12類。撚紐側面圧痕による文様をもつ一群(第358図・第359図、図版254)

1417～1421は口縁部破片で、研磨されて無文の器面に撚紐側面圧痕による文様が展開する。1422はやや難な刺突を伴う低い隆帯が区画した上位に撚紐側面圧痕、下位に単節斜縄文が施文されている。1423は単節斜縄文が地文で、口唇部に平行する撚紐側面圧痕3条がみられる。

13類。地文以外の文様をもたない一群(第359図、図版254)

1424・1429は折り返し状口縁で、1424は単節斜縄文がその上に施文され、1429は無文である。1425は口唇部の単節縄文帯の下位に幅広い無文帯を伴う。1426は網目状撚糸文である。

14類。上記の1類から13類と時期的には同じ仲間と考えられるその他の一群(第337図・第353図・第358図・第359図、図版254)

1301は幅広い隆帯が文様を構成し、器面は研磨されて無文である。2類とは異なる隆帯であり、10類とは沈線を伴わない点が違う。1415は波状口縁で、隆起線と沈線が文様を構成し、一部に単節斜縄文がみられる。1416は折り返し状口縁をもつ波状のもので、無文である。頂部にボタン状貼付文を伴う。1427は小さな橋状の把手2個を伴う。920は底部に浅い抉り込みを伴う無文土器の底部である。

15類。上述の1～14類よりは時間的に後出する一群(第359図、図版254)

①1428・1430～1436。胴部破片1433・1434は入組状文を伴う。1432の器表は研磨されて無文である。1428は大波状口縁になる。1435は三叉文状に深く沈刻されている。1430は円形の小突起を伴う。②磨消縄文を伴う口縁部破片(1437～1444)。小波状・波状・山形の口縁部である。1443・1444は無文の上に沈線を伴う。

〈1類～15類に相当する型式名〉1類～14類のほとんどは後期初頭～前葉の土器群で、なかでも十腰内I式や大湯式が主体を占めるのであろう。1類は鰭状突起を伴う点で、初頭に位置づけられる。2類～14類は十腰内I式や大湯式に相当するものが大部分である。ただ、8類に含めた1364は岩手県立石遺跡第Ⅲ群第3類に、1371が同第Ⅳ群第4類に類似している点があり、前者は初頭に、後者は中葉の型式に比定されるのかもしれない。15類は中葉～末葉に位置づけられるものであろう。

V群：晩期を主体にする一群

〈分布など〉L面でも一段低いBⅠ区・BⅡ区が分布の中心である。次いでL面のCⅡ区・CⅢ区・DⅢ区から出土している。M面のFⅣ・GⅢ・IⅢ・KⅢの各区、H面のOⅢ区からも出ているが、量は少ない。平安時代のBⅡ-1住居跡からの出土例を多く掲載しているが、それらは同住居跡に切られている縄文時代晩期初頭のBⅡ-2住居跡に本来は固有のものであるろう。

〈器種・器形〉ある程度復元できて器形を知ることができるのは第337図921だけで、他は破片である。深鉢や鉢・台付鉢・浅鉢・壺・注口土器がある。

〈施文〉

文様意匠の違いによって細分できる。

1類。三叉文を伴う一群（第337図・第359図・第360図、図版247・255）

921・922・1446・1447・1449～1451・1453・1455～1464・1466・1470～1472が該当する。波状口縁（1447ほか）、小波状口縁（1459ほか）、B突起ほかの小突起を伴うもの（1460・1463ほか）がある。玉抱き三叉文状の1449、入組文状の921・1451・三叉文が横方向に向かい合う1457・1459ほか、単独で文様を構成する1447、三叉文が横方向に連続する1453などがある。三叉文以外には横位の沈線文がもちいられるものが多い。

2類。平行沈線とその間の刻目文が口縁部文様帯を構成する一群（第360図・図版255）

1473・1474が該当する。半曲状文が退化したものである。口縁部1473・1474はB突起を伴う。

3類。平行沈線や刻目文・刺突文が口縁部文様帯を構成する一群（第360図、図版255）

1469・1475～1479が該当する。1469は口端部に刻目が施され、内面にも沈線がめぐる。1475は3個1対の刺突文が平行沈線の上に重なる。1476～1478は刻目文が口唇部に施文される。口縁部は、1476・1478が無文であり、1477が平行沈線を伴う。1479は文様帯を区画する平行沈線の上位に連続刺突文を伴う。口唇部の内面に沈線がめぐるのは1477・1478である。

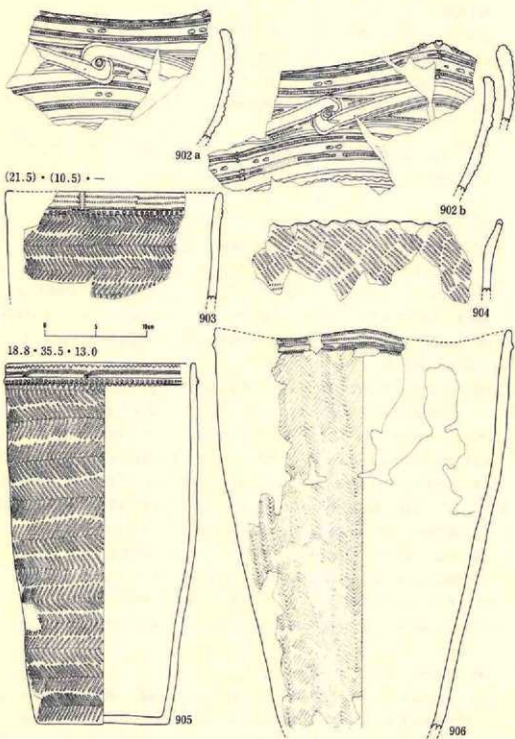
4類。1類～3類以外の文様を伴う一群（第359図・第360図、図版255）

1445・1448・1452・1454・1465・1467・1468・1480・1481がある。1445は沈線と磨消縄文が文様帯を構成する。1452は口端部に刻みを伴う突起に円形刺突文を伴う。1454は研磨されて無文の器面に沈線がみられる。1480は口縁部に平行沈線を伴う。1481は弧状の沈線内が肥厚している。

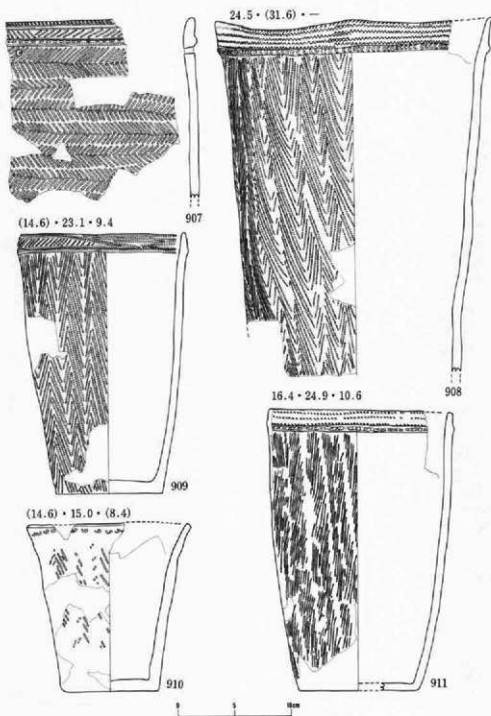
5類。粗製土器（第361図、図版255）

1482～1484がある。1482は小波状口縁である。1483は刻目、1484は小突起を口端部に伴う。

〈1類～5類に相当する型式名〉1類は晩期初頭大洞B式と一部は後期末葉を含むかもしれない。2類は前葉大洞B-C式、3類は中葉大洞C₁式に相当するであろう。4類のうち、1480・

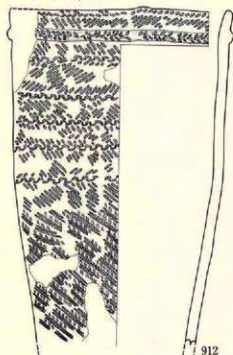


第333図 縄文土器(1)

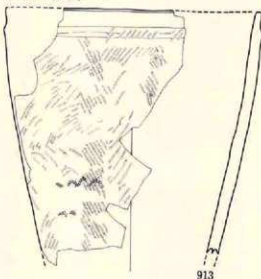


第334図 縄文土器(2)

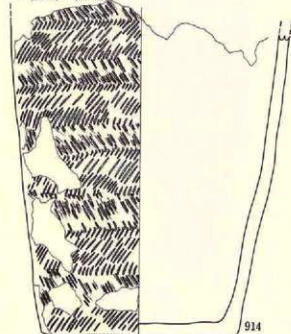
(17.8) • (26.8) • —



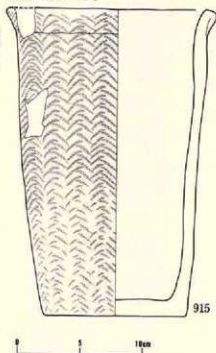
(20.5) • (25.4) • —



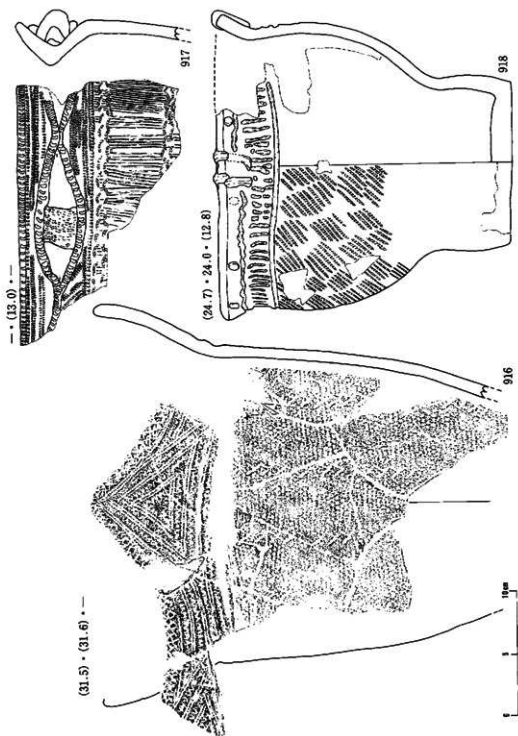
— • (26.7) • (15.8)



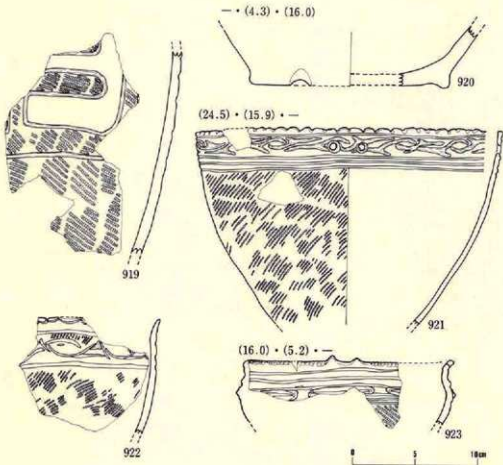
16.9 • 24.5 • 11.3



第335図 縄文土器(3)

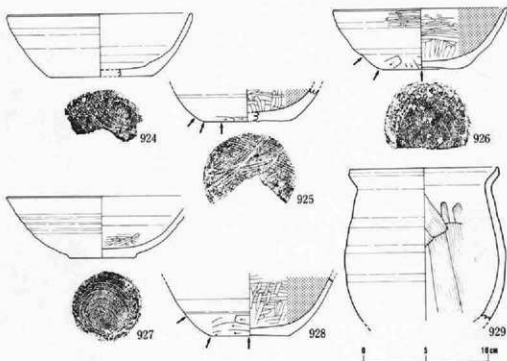


第336図 縄文土器(4)



No	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分層	備考	図版
902a	C II R, VI層	深鉢	口縁部	波状口縁。多数縦線瓦文・波状は凸状線文・刺突文・刻目文	ミガキ		I群3層	同一個体	244
903	P III f, IV層一括	〃	〃	燃結圧痕・隆帯+円形竹管文・結束羽状線文	〃	縦線多い	I群7層	〃	〃
904	C III b, VI層	〃	〃	小波状口縁。R.L	凸凹	〃	I群6層	〃	〃
905	P III e, IV層	〃	口一底	略条体と燃結圧痕・隆帯+竹管文・結束羽状	ミガキ	縦線多い	I群7層	略完形	〃
906	P III f, IV層一括	〃	口・胴	燃結圧痕・隆帯・結束第1種羽状線文取位	〃	〃	〃	〃	〃
907	P III f, IV層一括	〃	口縁部	燃結圧痕とR.L・隆帯+竹管文・結束羽状線文	〃	縦線少量	〃	〃	245
908	P III e, IV層	〃	口・胴	略条体圧痕・隆帯+竹管文・木目状磨半文	〃	縦線多い	〃	〃	〃
909	P III e, II層	〃	口一底	燃結圧痕・隆帯・木目状磨半文	〃	縦線少量	〃	〃	〃
910	P III f, II層	〃	〃	半線竹管文・結束第1種羽状線文取位・ミガキ	〃	縦線微量	〃	〃	〃
911	P III e, IV層	〃	〃	燃結圧痕・隆帯+刺突文	〃	〃	〃	〃	〃
912	P III e, IV層	〃	口・胴	強い波状・口縁部と隆帯に凸状線文・結束第2種	〃	縦線少量	〃	〃	246
913	O III R, O層	深鉢	〃	口縁部ミガキ・隆帯・無彫L・R・線路文	〃	〃	〃	〃	〃
914	P III e, IV層	〃	胴・底	結束第1種附加条付	〃	〃	〃	〃	〃
915	P III e, IV層	〃	口一底	折返し状口縁・結束第1種羽状線文取位	〃	〃	〃	略完形	〃
916	P III e, IV層一括	〃	口・胴	四波状・刻目文・略条体と燃結圧痕・縦線路文	ミガキ	〃	〃	〃	247
917	O III f, O層I層	鉢	口縁部	竹管文・燃結と略条体圧痕・縦線文・横条状	〃	縦線微量	〃	〃	〃
918	P III f, IV層一括	深鉢	口一底	垂下隆帯・円形粘付文・磨面状は凸状線・L.R	〃	〃	〃	長距行深鉢	〃
919	B I f, I層L一添	深鉢	胴部	沈線・磨面線文・L.R	〃	〃	IV群	〃	〃
920	D III a, V層上面	甕	底部	無文・強い挟り込みがある。	〃	〃	〃	〃	〃
921	B I d, VIC層	鉢	口・胴	小波状口縁。三叉状入組文・L.R	〃	〃	V群1層	〃	247
922	B II f, I層	〃	〃	沈線文・三叉文	〃	〃	〃	〃	〃
923	D III a, V層上面	〃	口縁部	小突起・口唇部連続刻目文・沈線文	〃	〃	V群2層	〃	247

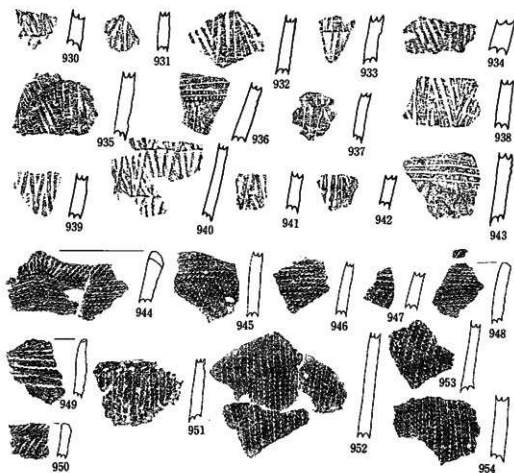
第337図 縄文土器(5)



No	地点・単位	種類	外 面			内 面		計測値・標準			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口一底	両色処理	口径	器高	底径		
924	CⅢf, O層	坏	ロクロ底	ロクロ底	押止糸切り	ロクロ底	×	14.5	5.0	8.3	ⅡA0	
925	PIId, O・I層	?	—	ロクロ底+ヘラケズリ	押止糸切り+ヘラケズ	ヘラミガキ	○	—	(2.5)	7.0	ⅡA2	
926	FIVe, I層	?	ヘラミガキ	ロクロ底+ヘラケズリ	ヘラケズリ	?	○	14.0	4.8	6.4	ⅡC4	
927	EIIb, I層	?	ロクロ底	ロクロ底	押止糸切り	ロクロ底	不明	15.2	4.9	5.3	不明	247
928	EIVd, O層	?	—	ロクロ底+ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	○	—	(4.4)	6.3	ⅡC4	

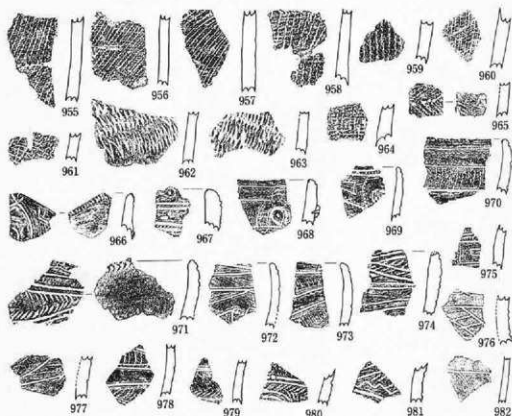
No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	器 高	底 径		
929	FIVf, I層	土師器甕	ロクロ底	ロクロ底	—	ロクロ底	ナデ	—	11.9	(12.2)	—	ⅢM1	

第338図 坏・土師器甕



No	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面胎土分	色	備考
930	B1e, VI層	鉢	胴部	押印文	褐色	I群1類	褐色
931	B1f, VII層	?	?	?	?	?	?
932	B1b, O・I層	?	?	重層V字状文	ミガキ	縦線少量	?
933	B1e, I層	?	?	?	?	縦線少量	?
934	C10c, VII層	?	?	?	?	縦線少量	?
935	C10b, O層	?	?	?	?	縦線少量	?
936	B1a, II層	?	?	肩・頸位平行波線文・細い重層V字状文	?	?	?
937	B1c, VI層	?	?	重層V字状文?	褐色	?	にぶい褐色
938	B1c, VII層下部	?	?	押印文	平滑	縦線少量	褐色
939	D1a, VII層上部	?	?	重層V字状文	?	?	にぶい褐色
940	B1e, VI層	?	?	斜線入り重V字状文・胴体長2.5cm	?	縦線少量	褐色
941	B1d, V層	?	?	?	?	?	940と同一器種
942	B1bc, O層	?	?	押印文	?	?	褐色
943	C10i, I層	?	?	肩・頸位平行波線文・押印文(磨耗)	ミガキ	縦線少量	にぶい褐色
944	B1d, I層	?	?	不均整波状口縁・肩位波線正交文	?	I群2類	にぶい黄褐色
945	B1e, VI層	?	胴部	肩位波線正交文(磨耗・削位)	?	縦線少量	?
946	B1e, VI層	?	?	?	?	?	?
947	B1d, VII層下部	?	?	?	平滑	?	黄褐色
948	?	?	口縁部	?	ミガキ	?	明黄褐色
949	GIVa, 8~II層	?	?	口縁部刻線文・肩位波線正交文(磨耗)	ナデ	?	にぶい褐色
950	B1d, VI層	?	?	肩位波線正交文(削位)	平滑	縦線少量	?
951	B1e, VI層	?	胴部	横位2列刻線文・肩位波線正交文(磨耗)	ミガキ	?	氏黄褐色
952	?	?	?	肩位波線正交文(磨耗)	?	縦線少量	?
953	?	?	?	?	平滑	?	?
954	?	?	?	?	?	?	?

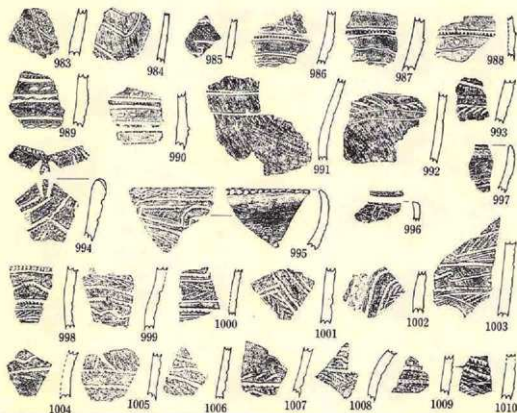
第339図 縄文土器(6)



No	地点・層位	器種	部位	図形／外面	内面	胎土	分厚	備考	図版
955	B I e, VI層	深鉢	胴部	貝殻模縁内直文(斜位)	ミダキ		1群2型	灰黄褐色	248
956	B I c, VI層			〃 (〃)	〃	縦線少量	〃	灰黄褐色	〃
957	B I f, VI層			〃 (〃)	〃	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
958	B I e, VI層下部			〃・条模文	〃	縦線微量	〃	〃	248
959	〃			〃(斜位)	〃	〃	〃	引黄褐色	〃
960	B I e, VI層			〃 (〃)	〃	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
961				〃・条模文	〃	〃	〃	〃	〃
962				貝殻模縁連続状文	平滑	〃	〃	にぶい黄褐色	248
963	D III b, VI層			〃	〃	〃	〃	〃	〃
964	B I c, VI層下部			貝殻模縁引き文	粗	〃	〃	黒褐色	〃
965	D II-1 住Q I 灰面			貝殻模縁内直文(羽状)・小刺突文	条模	〃	〃	にぶい黄褐色	248
966	D II区VI層		口縁部	貝殻模縁文・沈線文・口唇部内面縞縁刺突	ミダキ		1群3型	褐色	〃
967	D III c, VI層			沈線・刺突文・刺突文	〃	〃	〃	〃	〃
968	D III a, VI層上面			沈線文・貝殻模縁内直文・内形小突起	〃	〃	〃	〃	248
969	D III c, I・II層			〃・〃・〃・小刺突文	〃	〃	〃	〃	〃
970	D III b, VI層			〃・〃・〃・口唇部内面刺突文	〃	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
971	C II b, O層			〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
972	D III-14位			〃・〃・〃・小刺突文	〃	〃	〃	〃	〃
973	C III a, VI層			〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	248
974	B I a, O・I層			〃・〃・〃・条模文	〃	〃	〃	褐色	〃
975	B I c, VI層		胴部	〃・〃	〃	〃	〃	引黄褐色	〃
976	D III-2 灰埋土			〃・〃・〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
977	D III c, VI層			〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
978	D III f, VI層			〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
979	B I e, I層			〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	灰黄褐色	〃
980	B I a, II層			〃・〃・〃・刺突文	〃	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
981	B I f, VI層			〃・〃・〃	〃	〃	〃	黒褐色	〃
982	D III-2 住 Q, 灰面 方層土			〃・〃・〃	〃	〃	〃	褐色	〃

0 10 cm

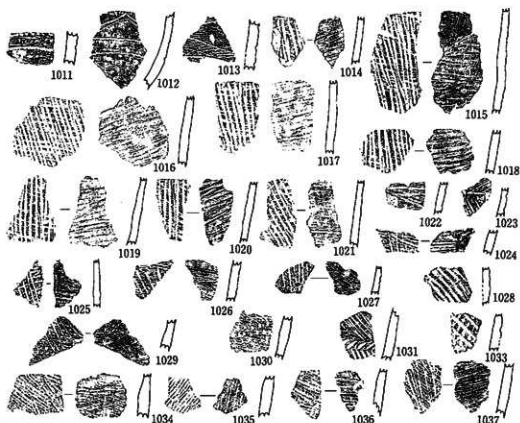
第340図 縄文土器(7)



No.	地点・層位	器種	部位	器形／外面	内面	胎土	分色	備考	図版
983	C層-4住 埋土最下部	鉢鉢	胴部	沈線文・貝敷散線直横文	ミダキ		I群3類	にぶい黄褐色	
984	DⅡ-2住 床面-灰面最上			※ ※ ※				※ ※	248
985	DⅢ区 O層			※ ※ ※ ・条痕文				褐色	
986	C層-4住 Q ₁ 埋土下部			※ ※ ※ ・小刺突文				※ ※	248
987	DⅡ-2住 Q ₁ 埋土			※ ※ ※ ・刺目文				褐色	
988	DⅡ-2住 埋土上部			※ ※ ※	剥落			にぶい黄褐色	
989	EⅡa, I・II層			※ ※ ※ ・刺突文	平滑			褐色	
990	DⅡ-2住 Q ₁ 埋土上部			※ ※ ※ ・貝敷散線正横文・刺突文				※ ※	248
991	DⅡb, VI層			※ ※ ※ ・条痕文	ミダキ			浅黄褐色	
992	BⅡf, I層			※ ※ ※	平滑			にぶい黄褐色	
993	BⅡb, O・I層			※ ※ ※	ミダキ			※ ※	
994	CⅡ区 a, O層		口縁部	波状口縁・小突起・押引沈線文・貝敷散線文				明黄褐色	248
995	BⅡ区 a, C層			押引沈線文・貝敷散線文・口唇部内面刺目文				褐色	
996	CⅡ区 i, O層			※ ※ ※ (口縁部も)				灰褐色	
997	BⅡb, O・I層			沈線文・刺目文				褐色	
998	BⅡc, VI層		胴部	押引沈線文・沈線文・貝敷散線文・刺目文				※ ※	
999				※ ※ ※ ・沈線文(矢羽根状ほか)・刺突文				にぶい黄褐色	
1000	AⅡ区, O層			※ ※ ※ ・沈線文・貝敷散線文(矢羽根状)				褐色	
1001	BⅡ区, VI層下部			※ ※ ※ ※ ※ (※ ※ ※)				黄褐色	248
1002	BⅡ区, VI層			※ ※ ※ ※ ※				褐色	
1003	BⅡ区, VI層下部			※ ※ ※ ※ ※ ・貝敷散線文・小刺突文				にぶい褐色	248
1004	BⅡ区, VI層			※ ※ ※ ※ ※	剥落			褐色	
1005	BⅡ区, VI層			※ ※ ※ ※ ※ ・貝敷散線直横文	ミダキ			浅黄褐色	248
1006	BⅡ区, VI層			※ ※ ※ ※ ※				にぶい黄褐色	
1007	BⅡ区, I層			※ ※ ※ ※ ※				※ ※	
1008	BⅡ区, VI層			※ ※ ※ ※ ※ ・沈線文				※ ※	
1009	BⅡ区, I L層			※ ※ ※ ※ ※ ・刺突文				※ ※	248
1010	BⅡ区 c, VI層			※ ※ ※ ※ ※				※ ※	

第341図 縄文土器(8)

0 10cm

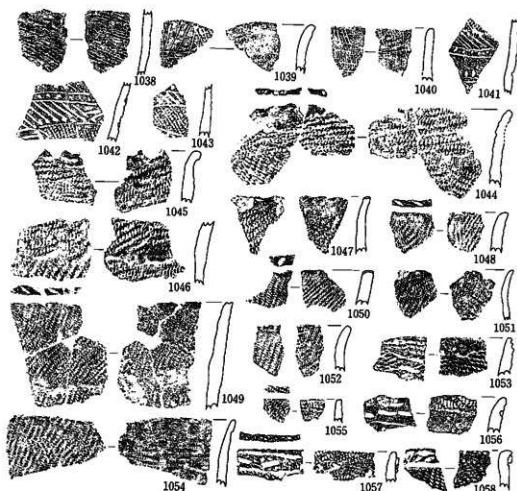


No.	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分級	備考	図番
1011	B 1 c, VI層下部	罎鉢	胴部	押引沈線文		2 中々	I 群 3 類	にぶい褐色	
1012	D Ⅱ a, VI層			・ 貝殻紋正似文					
1013	B 1 f, I 層			・ 〃 ・ 〃 ・ 条痕文					249
1014	C Ⅱ-5 住 Q ₁ 堆土			沈線文	条痕文		I 群 4 類	にぶい黄褐色	
1015	C Ⅱ j, VI層								249
1016	C Ⅱ h, 不整形落ち込み								
1017								1016 と同一形状	249
1018	D Ⅱ-2 住 Q ₁ 堆土							にぶい黄褐色	
1019									
1020	C Ⅱ f, O 層								249
1021	C Ⅱ-5 住 Q ₁ 堆土								
1022	C Ⅱ j, VI層上面								249
1023	C Ⅱ g, Ⅱ層上面			・ 条痕文					
1024	C Ⅱ b, O 層			・ 〃 ・ 〃					249
1025	C Ⅱ-6 住 カマド 左側壁			・ 〃 ・ 〃					
1026	D Ⅱ区 O 層			・ 〃 ・ 〃					
1027	B 1 e, VI層			・ 〃 ・ 〃					249
1028	C Ⅱ j, VI層			・ 〃 ・ 〃					
1029	D Ⅱ-2 住 Q ₁ 堆土			・ 〃 ・ 〃 ・ 竹管文(手織)					
1030	D Ⅱ-6 住 P ₁ 堆土			竹管文・条痕文	平磨			暗褐色	
1031	C Ⅱ j, -VI層			沈線文・短沈線					
1032	欠番				平磨		I 群 4 類	にぶい黄褐色	
1033	D Ⅱ j, VI層上部	罎鉢	胴部	沈線文・刻突文				明黄褐色	249
1034	C Ⅱ e, O 層			条痕文	条痕文			にぶい黄褐色	
1035	C Ⅱ g, O 層							灰黄褐色	
1036	C Ⅱ b, O 層							にぶい黄褐色	
1037	C Ⅱ g, VI層								249

10 cm

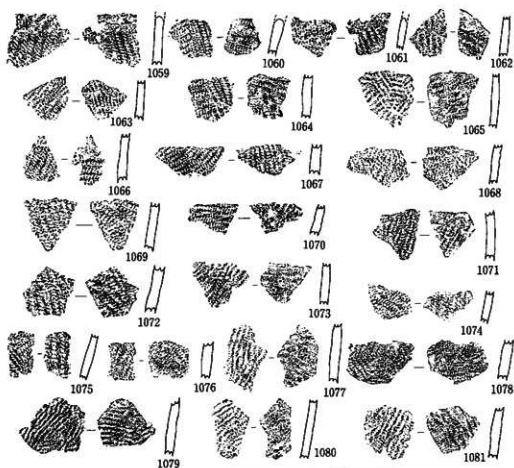
1032は欠番

第342図 縄文土器(9)



No.	地点・層位	器種・部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
1038	B I c, VI層	胴部	糸織文	糸織文		I群4類	にぶい黄褐色	249
1039	D II c, VI層	口縁部	低い波状口縁・沈線・半斜縄文?	縄文	繊維微量	I群5類	褐色	
1040	F III, 地層		〃 〃 〃 〃	〃				
1041	D III f, O層	胴部	沈線・斜文・半斜縄文?	ミガキ	繊維微量		同一層位にぶい黄褐色	
1042	C II-3位・D III a, VI層上部		〃 〃 〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
1043	D III a, O層		〃 〃 〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
1044	C III a, VI層上部	口縁部	小波状口縁(指腹状押圧痕)・LR	LR		I群6類	灰黄褐色	249
1045	C III b, VI層上部		〃 〃 (〃) 〃	〃			にぶい褐色	
1046	〃	胴部	LR	〃			1045と同一層位	
1047	C III-3位Q, 堆土	口縁部	小波状口縁(指腹状押圧痕)・LR	〃	繊維微量		縄文生層	
1048	C III c, O層		〃 (〃) 〃・LR	縄文			灰黄褐色	249
1049	C III c, O層		〃 (〃) 〃	LR			にぶい褐色	249
1050	C III-4位Q, 堆土下部		〃 (〃) 〃	〃			灰黄褐色	
1051	C III b, VI層下部		〃 〃 (斜文)・LR	〃			〃	
1052	E IV-2位 O層		口縁部折ね圧痕・口縁部斜文・LR(O縁多量)	〃	繊維微量		〃	
1053	E IV区 デメ坪		低い波状口縁・沈線正底・沈線・斜文	斜文			褐色	
1054	C III b, VI層		LR	LR			にぶい褐色	
1055	D III-2位Q, 堆土		口縁部周縁縄文・RL	RL			〃	
1056	C III d, 堆土上部		竹管による斜文	〃			〃	249
1057	E III b, I層		口縁部周縁縄文・隆帯+LR+斜文	LR			にぶい黄褐色	
1058	E IV区, II層		口縁部周縁正底・隆帯+斜文・LR	〃			灰黄褐色	249

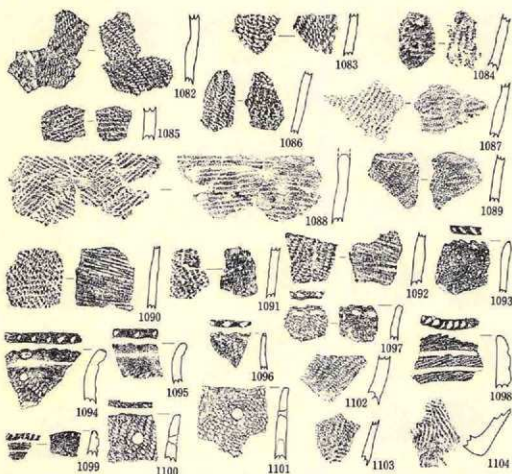
第343図 縄文土器(10)



No.	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面胎土	分	色	考	図録
1059	E IV-9 住 堀土	鉢	胴部	LR	LR	1 群 6 類	褐色		249
1060	" 堀り方堀土	"	"	"	"	"	"		
1061	E IV-10 住 Q ₁ 堀土	"	"	"	"	"	"		
1062	" Q ₂ 堀土	"	"	"	"	"	"		
1063	F IV-5 住 Q ₁ 灰面	"	"	"・LR (O 段多)	"	"	"		
1064	E IV-9 住堀り方堀土	"	"	"	"	"	"		
1065	"	"	"	"	"	"	にぶい黄褐色		249
1066	F IV-6 住 Q ₁ 堀土	"	"	"	"	"	"		
1067	E IV-9 住灰面	"	"	"	"	"	"		
1068	E IV-7 住 Q ₁ 堀土	"	"	"	"	"	"		
1069	D III-2 住 堀土上部	"	"	"	"	"	"		249
1070	D III-2 住 Q ₁ 堀土	"	"	"	"	"	"		
1071	"	"	"	RL	RL	"	"		249
1072	D III-1 住 Q ₁ 堀土下部～灰面直上	"	"	LR	LR	"	"		250
1073	E IV-5 住堀り方堀土	"	"	"	"	"	"		
1074	" 堀土	"	"	" (O 段多)	"	"	"		
1075	E IV-6 住灰面大堀土	"	"	"	"	"	"		
1076	E IV-6 住	"	"	"	"	"	"		
1077	" 堀り方堀土	"	"	"	"	"	"		249
1078	E IV-8 住 堀土	"	"	"	"	"	"		250
1079	C III-4, VI 層	"	"	"	"	縁部断面	"		"
1080	E IV-8 住 Q ₁ 堀土	"	"	"	"	"	"		"
1081	E IV-6 住 Q ₁ 灰面～灰面直上	"	"	"	"	"	"		"

0 10 cm

第344図 縄文土器(1)



No.	地点・層位	器種・部位	器形 / 外面	内面・胎土	合観	備考	図版
1082	FVd, O層	深鉢	胴部	LR			250
1083	A1j, I層	口縁	口縁	LR	I群6型	明黄色	
1084	CⅢb, VI層	口縁	口縁			にぶい黄褐色	
1085	EIVb, I層	口縁	口縁				250
1086	EIVc, II層	口縁	口縁				
1087	EIV-6位層土	口縁	口縁				
1088	EIV-9位 灰面	口縁	口縁	胎土			250
1089	DⅡ-2位 灰土	口縁	LR・沈線文	LR			
1090	CⅢb, VI層	口縁	RL	赤灰文	I群7型	褐色	
1091	CⅢb, VII層上部	口縁	口縁			にぶい黄褐色	
1092	CⅢi, O層	口縁	口縁			明黄色	
1093	EIV-11位 灰土	口縁	口縁部刻目・地文不明	ミダキ		褐色	250
1094	DⅡa, VII層上部	口縁	口縁部刻目・地文不明	ミダキ		灰褐色	
1095	CⅢ-5位Q, 埋土	口縁	口縁部刻目・地文不明	胎土		明褐色	
1096	DⅡ区V層	口縁	小波状口縁(押印痕), RL	平滑		褐色	
1097	EIVi, IV層	口縁	口縁部刻目・突文・LR	刺突文			
1098	B1a, O・I層	口縁	波状口縁, 口縁部刻目・突文・LR	ミダキ	縦線刻目	I群8型	
1099	B1f, I層	口縁	口縁部内外刻目・突文・沈線	ミダキ		灰褐色	
1100	EIVf, VII層上部	口縁	口縁部内外刻目・突文・LR	凹凸		I群7型	
1101	EIV-12位Q, 埋土	口縁	LR			明赤褐色	
1102	FⅡ-1位埋土部埋土	口縁	口縁部刻目・突文・LR	ミダキ		黄褐色	
1103	CⅢ-6位Q, 埋土	口縁	口縁部刻目・突文・LR	凹凸		にぶい黄褐色	
1104	EIVf, VII層上部	口縁	突文, 胎土	平滑			250

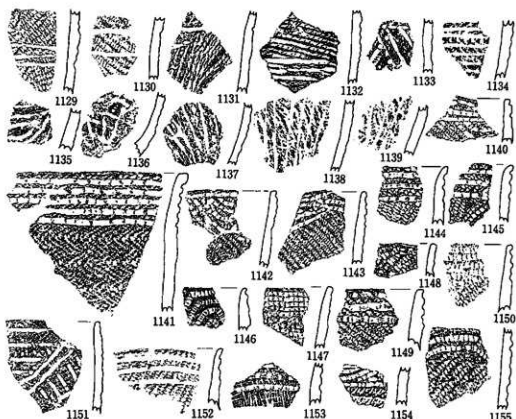
第345図 縄文土器(2)



No.	地点・層位	器種	部位	胎土・文様	内面胎土分厚	備考	図説
1105	FIV e.	鉢	口縁部	沈線文・ループ文・RL(O段多量)	ミダキ	縦線多量 口縁1部	250
1106	CIII f.	〃	〃	波状口縁。沈線文・斜交文	〃	〃	〃
1107	DIII a, I層	〃	〃	波状口縁。沈線文	〃	〃	〃
1108	CIII d, O層	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1109	CIII - 5 係 Q, 埴土	〃	〃	沈線文・斜交文・LR	〃	〃	〃
1110	FIV e.	〃	胴部	ループ文・RL(O段多量)	〃	〃	1105と同一層位 250
1111	CIII e, VI層	〃	口縁部	波状口縁。沈線文・斜交文	〃	〃	1106と同一層位
1112	CIII - 5 係 Q, 埴土	〃	〃	沈線文・LR	〃	〃	〃
1113	FIV b, O層	〃	〃	〃・LR	〃	〃	〃
1114	B I f, VI層	〃	〃	波状口縁。沈線文・RL	〃	〃	〃
1115	DIII b, V層上層	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1116	B I e, VI層	〃	〃	沈線文・RL(O段多量)	〃	〃	〃
1117	CII - 4 住地土最下部	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1118	CIII a, I層	〃	〃	沈線文・LR・LR(O段多量)	平滑	〃	250
1119	CIII e, 〃	〃	〃	〃・RL	〃	〃	〃
1120	CIII h, VI層	〃	〃	〃	ミダキ	〃	〃
1121	CIII f, O・I層	〃	〃	〃	平滑	〃	〃
1122	CII - 4 係 埴土	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1123	CIII b, VI層	〃	〃	やや小波。沈線文・LR	小凹凸	縦線少量	250
1124	CIII j, VI層上層	〃	〃	細く浅い沈線文・LR	平滑	縦線多い	〃
1125	CIII j, I・II層	〃	〃	やや小波。細く浅い沈線文・LR	粗	〃	〃
1126	CII - 4 住地土最下部	〃	〃	口唇部斜交文・沈線文	平滑	縦線多量	〃
1127	CIII e, O層	〃	胴部	沈線文・LR	ミダキ	〃	〃
1128	CIII j, VI層	〃	口縁部	〃・RL	〃	〃	〃

10cm

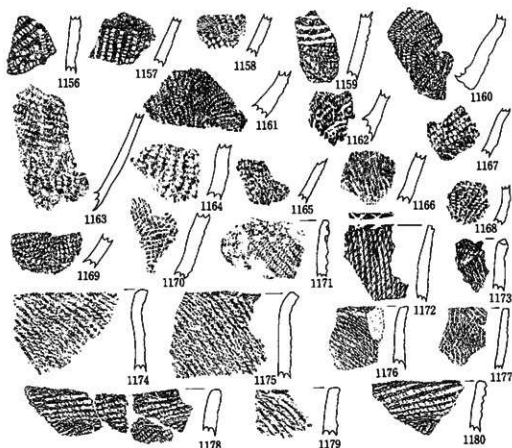
第346図 縄文土器(3)



No.	地点・層位	種類	部位	胎体 / 外面	内面	胎土	分	型	備考	図面
1129	CⅡ1, VI層	?	胴部	沈線文・LR		ミガキ	縦線多量	口唇1部		251
1130	EⅡa, O層	?	?	?	?	?	?	?		250
1131	DⅡ-2佐塚土上部	?	?	?	?	?	?	?		251
1132	DⅡb, VI層	?	?	?	?	?	?	?		250
1133	EⅡc, II層	?	?	・刺突文		?	?	?		?
1134	CⅡ1, VI層	?	?	?		?	?	?		?
1135	DⅡ-2佐塚土上部	?	?	胴部下地。沈線文・刺突文		平滑	?	?		250
1136	DⅡ1, I層	?	?	?	?	?	?	?		?
1137	FⅡc, O・I層	?	?	?		ミガキ	?	?		251
1138	CⅡ1, VI層上部	?	?	?		?	?	?		?
1139	CⅡ-7佐Q, 埴土	?	?	?		平滑	?	?		?
1140	DⅡ-1佐塚土	?	口縁部	押し引き沈線文・RL		ミガキ	?	?		?
1141	CⅡb, VI層	?	?	・筋末部1層羽状縄文		粗	?	?		251
1142	DⅡa, ?	?	?	・RL(O段多量)		ミガキ	?	?		?
1143	DⅡa, I層	?	?	波状口縁。押し引き沈線文・RL(O段多量)		?	?	?		?
1144	CⅡb, 埴土上部	?	?	押し引き沈線文・LR		?	?	?		?
1145	DⅡa, VI層	?	?	?		平滑	?	?		251
1146	DⅡb, V層	?	?	(2本1組)・RL		ミガキ	?	?		?
1147	BⅡc, I層	?	?	?		平滑	?	?		?
1148	IⅡ1, II層	?	?	?		ミガキ	?	?		?
1149	CⅡ1, VI層上部	?	?	?		?	?	?		?
1150	CⅡ1, VI層	?	?	?		?	?	?		251
1151	EⅡ-3佐Q, 埴土	?	?	・沈線文・刺突文		?	?	?		?
1152	CⅡ-7佐Q, 埴土	?	?	・LR		粗	?	?		?
1153	CⅡ1, VI層上部	?	口縁部	?		平滑	?	?		251
1154	CⅡb, VI層上部	?	?	・ループ文		?	?	?		?
1155	DⅡc, VI層上部	?	?	・LR		ミガキ	?	?		251

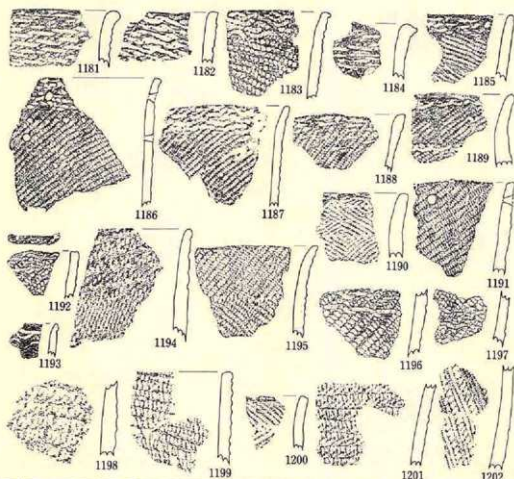
0 10cm

第347図 縄文土器Q4



No.	地点・部位	器種	部位	形状 / 外面	内面	土質	分層	備考	図号
1156	DIIIb. VI層上面	鉢	胴部	押し引き沈線文・RL	ミガキ	細粒中量	II群1層		251
1157	DIIIb. VI層			胴部下縁。押し引き沈線文・LR	粗				
1158	CIII-4住Q, 埋土上面			押し引きであるが沈線にならない	平滑				
1159	CII-1住Q, 埋土			押し引き沈線文・RL	ミガキ				
1160	CIII. O層		底面	向底。RL	凹凸		II群2層		251
1161			胴部	胴部下縁。LR	粗				
1162	CIII. VI層			尖底部。LR	ミガキ				
1163	CIII-1住Q, 埋土			押し引きであるが沈線にならない	凹凸				251
1164	CIIIb. VI層			LR	粗				
1165	CIII. VI層			RL	ミガキ				
1166	CIIIb. 上面								251
1167	AII. O層			LR					
1168	CIII. VI層			尖底部	平滑				
1169	CIIIb. 上面			尖底部。LR					
1170	DIII-2-3 O層			胴部不明	粗				251
1171	DIII. VI層		口縁部	胴位の突起列3列・RL	粗	細粒中量	I群10層		
1172	BII. 上面			胴部文・口縁部×割目文	平滑				
1173	EIV-10住床面			小波状口縁。口唇部縁部係床面・胴部文	粗				
1174	CIII. Q, 埋土			胴部文	ミガキ				
1175	EIV区 プ/埋								
1176	EIV-6住Q, 埋土								
1177	EIV-6住Q, 上面			胴部文?					
1178	BII. VI層			口縁部縁部係床面・LR。波状になるか?					
1179	EIV-9住埋土			胴部文					
1180	BII. VI層			口縁部胴部文					251

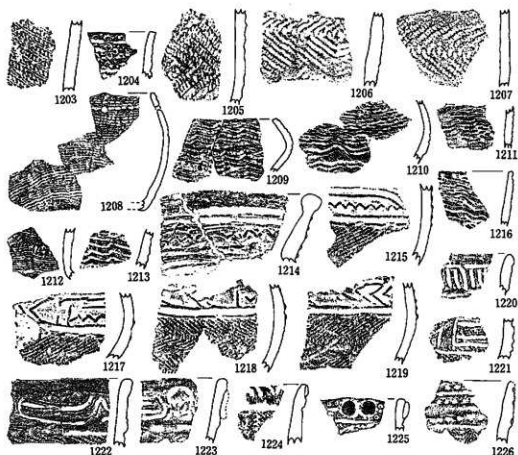
第348図 縄文土器(5)



No.	地点・層位	器種・部位	形状 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図原
1181	FIV d ₁ O層	深鉢 口縁部	口縁部綾結文・LR	ミダキ	繊維少量	目野10類	にぶい黄褐色	251
1182	EIV e ₁ 日層	〃 〃	〃 〃	粗	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
1183	DIII a ₁ O層	〃 〃	〃 〃 ・複屈折織文?	〃	〃	〃	〃	〃
1184	FIV i ₁ I層	〃 〃	〃 〃	ミダキ	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
1185	B I e ₁ VI層	〃 〃	〃 〃 ・RL	ケズリ	繊維多い	〃	黒褐色	251
1186	C III b ₁ VI層上部	〃 〃	〃 〃 ・LR (O段多条)	凹凸	〃	〃	明褐色	〃
1187	C III b ₁ VI層	〃 〃	〃 〃 ・R (〃 〃)	平滑	繊維多量	〃	にぶい黄褐色	〃
1188	D II d ₁ VI層	〃 〃	〃 〃 ・〃	粗	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
1189	D III i ₁ I・II層	〃 〃	口縁部と胴部綾結文・LR	〃	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
1190	B I b ₁ VI層	〃 〃	結束第1種羽状織文	ミダキ	〃	〃	にぶい黄褐色	〃
1191	G III c ₁ VI層	〃 〃	LR (O段多条)	平滑	繊維多い	〃	褐色	251
1192	C III i ₁ 日層	〃 〃	口縁部回折織文・口縁部綾結文	〃	〃	〃	黒褐色	〃
1193	E IV d ₁ 日層	〃 〃	小型 口縁部沈黙状・綾結文	〃	〃	〃	褐色	〃
1194	C III i ₁ VI層	〃 〃	胴体不明	粗	〃	〃	にぶい黄褐色	251
1195	B I e ₁ VI層	〃 〃	結束第1種羽状織文 (O段多条)	ミダキ	〃	〃	明赤褐色	〃
1196	C III i ₁ O層	〃 〃	胴部 綾結文2列・LR	平滑	繊維多量	〃	黒褐色	〃
1197	C III b ₁ VI層	〃 〃	〃 〃	〃	〃	〃	1196と同一器体	〃
1198	D II i ₁ VI層上部	〃 〃	ループ文	ミダキ	繊維少量	〃	褐色	251
1199	D III a ₁ VI層上部	〃 〃	口縁部 準回折織文?	〃	繊維多い	〃	〃	〃
1200	D III-2位 堀土上部	〃 〃	結束第1種羽状織文	〃	〃	〃	〃	〃
1201	E III b ₁ VI層	〃 〃	ループ文	〃	〃	〃	〃	251
1202	B I d ₁ V層	〃 〃	底部段合割り	〃	〃	〃	にぶい黄褐色	〃

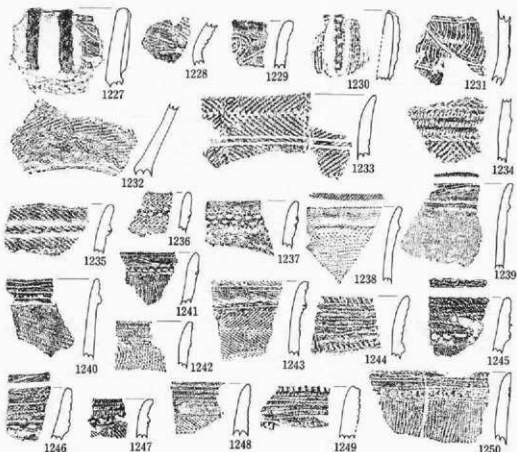
0 10 cm

第349図 縄文土器(6)



No	地点・層位	器種	部位	形状 / 外装	内装	胎土	分度	備考	図例
1203	DⅢC, VI層	鉢鉢	胴部	直筒状合部り	ミガキ	織物少量	目跡10個	にぶい黄褐色	251
1204	CⅢh, Ⅱ層	Ⅱ	口縁部	横い線位の平行沈線文と半横竹管文	Ⅱ	織物少量	Ⅱ	黒褐色	Ⅱ
1205	IⅣfg Ⅱ・I O層	Ⅱ	胴部	羽状線文 (弁結束)	Ⅱ	織物多い	Ⅱ	褐色	Ⅱ
1206	CⅡ-4 Ⅱ 1 寺ノマド 厚迫部土	Ⅱ	Ⅱ	結束部1 横羽状線文・XL+L	平滑	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	252
1207	FⅢf, Ⅱ層	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ・XL+LR	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	黒褐色	Ⅱ
1208	CⅢi, VI層	鉢	口縁部	低い波状口縁。沈線文・横位の横線状沈線文	ミガキ	織物微量	目跡3個	Ⅱ	Ⅱ
1209	FⅣa, O層	Ⅱ	口縁部	直瓦状部永文	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	褐色	Ⅱ
1210	FⅣf, Ⅱ層	Ⅱ	胴部	不整部永文・半横竹管状沈線文	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	明赤褐色	Ⅱ
1211	FⅣf, Ⅱ層	Ⅱ	Ⅱ	直瓦状部永文	ミガキ	Ⅱ	Ⅱ	1209と同一個体	253
1212	GⅢ-4 Ⅱ Q, Ⅱ層	鉢鉢	Ⅱ	半横竹管状線文 (一部押し引き状)	Ⅱ	織物少量	Ⅱ	灰褐色	252
1213	FⅣf, O層	Ⅱ	Ⅱ	直瓦状部永文	平滑	Ⅱ	Ⅱ	褐色	Ⅱ
1214	PⅢd, O・I層	Ⅱ	口縁部	口唇部肥厚。胎土結粒付文・突起部	ミガキ	Ⅱ	Ⅱ	にぶい黄褐色	Ⅱ
1215	PⅢf, Ⅱ層	Ⅱ	胴部	胎土結粒付文・結束部1 横羽状線文	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	1214と同一個体	Ⅱ
1216	HⅢa, Ⅱ層	鉢	口縁部	口唇部肥厚文・不整部永文・半横竹管状線文	ミガキ	織物少量	目跡3個	明赤褐色	Ⅱ
1217	PⅢh, O・I層	鉢鉢	胴部	胎土結粒付文・結束部1 横羽状線文	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	1214と同一個体	Ⅱ
1218	PⅢh, O・I層	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	252
1219	PⅢh, O・Ⅱ層	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
1220	DⅢi, O・I層	Ⅱ	口縁部	口唇部肥厚。沈線文	平滑	Ⅱ	目跡5個	Ⅱ	Ⅱ
1221	PⅢd, O・I層	Ⅱ	胴部	沈線文・地文付	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
1222	PⅢh, O・Ⅱ層	Ⅱ	口縁部	口唇部肥厚。沈線文・XL	ミガキ	織物微量	Ⅱ	Ⅱ	252
1223	PⅢh, I層	Ⅱ	Ⅱ	口唇部内形胎付文・沈線文	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
1224	PⅢh, O層	Ⅱ	Ⅱ	口唇部斜位刻目文・沈線文	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
1225	PⅢd, O・I層	Ⅱ	Ⅱ	2層1 斜ボタン状胎付文・円形竹管文・沈線文	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
1226	OⅢh, O・I層	Ⅱ	Ⅱ	円形胎付文・沈線文・縦位結束部1 横羽状線文	Ⅱ	織物微量	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ

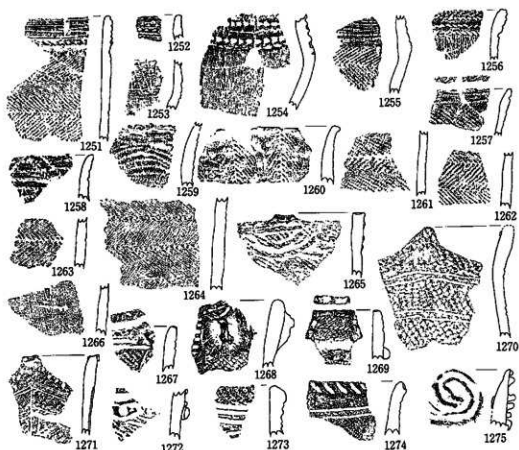
第350図 縄文土器(7)



No	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面	粘土	分類	備考	図例
1227	OⅢa, O・I層	鉢鉢	口縁部	2個1対突起・半截竹管状縁文	ミガキ	織物少量	目野5個		252
1228	OⅢa, O層	〃	胴部	半截竹管状縁文	〃	〃	〃	1227と同一個体	
1229	IⅢa, O層	〃	口縁部	口唇部隆起・半截竹管状縁文	〃	〃	〃		253
1230	PⅢ	〃	〃	貼付文の上に半截竹管状縁文・半截竹管状縁文	〃	〃	〃		〃
1231	PⅢf, O・I層	〃	胴部	半截竹管状縁文・L&R	〃	〃	〃	長筒付突鉢	
1232	PⅢb, O・I層	〃	〃	胴部下段・L&R・縁部文	〃	〃	〃		〃
1233	BⅢd, VI層上面	〃	口縁部	結糸体圧痕区画・結糸第1種羽状縁文	〃	織物多い	目野6個		252
1234	BⅢc, IⅢ層	〃	胴部	結糸体と結糸体区画・胴部縦位羽状縁文	〃	〃	〃		〃
1235	PⅢd, O・I層	〃	口縁部	RL・隆帯+RL+刺突・結糸第2種羽状	〃	〃	〃		〃
1236	OⅢb, O層	〃	〃	結糸第1種羽状縁文・隆帯+刺突	〃	織物少量	〃		〃
1237	OⅢi, O層	〃	〃	〃	〃	織物多い	〃		〃
1238	PⅢ区	〃	〃	口縁部L&R・結糸圧痕・結糸第1種羽状・L&R	〃	織物少量	〃		〃
1239	OⅢb, O・I層	〃	〃	〃	〃	織物多い	〃		〃
1240	DⅢj, O層	〃	〃	結糸圧痕・隆帯・L&R	〃	織物少量	〃		252
1241	BⅢf, VI層上面	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃
1242	PⅢa, O・I層	〃	〃	口唇部隆起・結糸体圧痕・多量結糸体	〃	〃	〃		〃
1243	PⅢa, O層	〃	〃	口唇部RL・結糸圧痕・隆帯+刺突・結糸羽状	〃	織物多い	〃		250
1244	OⅢf, V層上面	〃	〃	口唇部と隆帯羽状・結糸圧痕	〃	織物少ない	〃		〃
1245	CⅢb, O層	〃	〃	口唇部も結糸圧痕・隆帯+刺突・木目状	〃	〃	〃		〃
1246	CⅢ-1世QⅢ埋土	〃	〃	波状口縁・口唇部も結糸圧痕・隆帯+刺突	〃	織物多い	〃		〃
1247	BⅢd, I・L層	〃	〃	結糸体圧痕・隆帯+刺突・縦位結糸第1種羽状	〃	〃	〃		〃
1248	BⅢe, O・I層	〃	〃	〃	〃	〃	〃		254
1249	PⅢa, I・II層	〃	〃	口唇部と隆帯半截竹管状縁文・結糸体圧痕	〃	織物少量	〃		〃
1250	PⅢa, IV層	〃	〃	結糸圧痕・刺突・筋糸文	〃	〃	〃		253

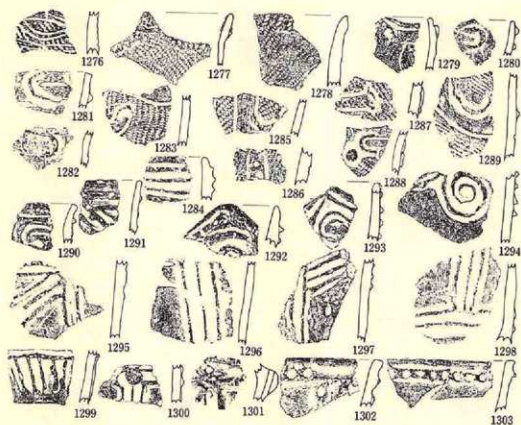
0 1 10 cm

第351図 縄文土器(14)



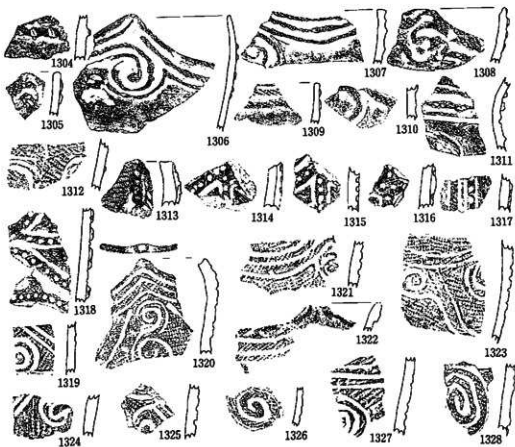
No.	地点・層位	器種・部位	群部 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
1251	P III c. IV層	胴部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線多い	日野7層	252
1252	B I a. I層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線多い	日野7層	
1253	O III a. O-I層	胴部	胴部	胴部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1254	P II d. II層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線多い	日野7層	252
1255	P III d. IV層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1256	O III a. O-I層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	253
1257	P III d. IV層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線多い	日野7層	
1258	B I d. I層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線多い	日野7層	
1259	B III b. I層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1260	O III a. O-I層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	252
1261	B I d. VI層上層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線多い	日野7層	
1262	C II-1 土Q層土	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	252
1263		口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線多い	日野7層	
1264	P III b. V層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1265	H IV f. O-II層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1266	C II-1 土Q層土	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線多い	日野7層	
1267	E V a. O層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1268	D III a. II層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	253
1269	D IV a. O層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1270	E V a. O層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1271	F IV a. II層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1272	F IV a. II層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1273	F IV a. II層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	
1274	G IV-4 土Q層土	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	252
1275	E V a. O層	口縁部	口縁部	口縁部	ミガキ	縦線少量	日野7層	

第352図 縄文土器(1)



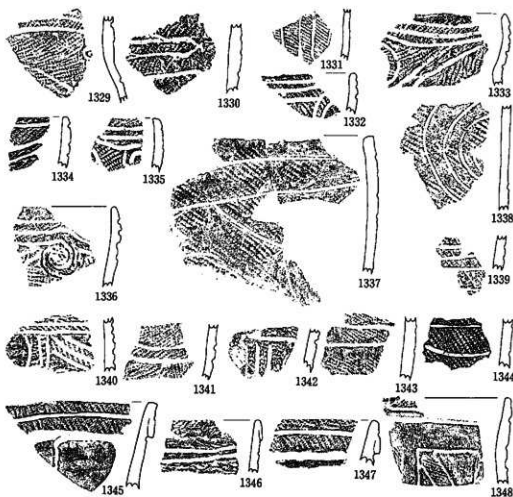
No.	地点・層位	器種・部位	飾部 / 外面	内面・胎土	分類	備考	図版
1276	EIVh,	胴部	沈線文・RL	平滑	IV群2類		252
1277	EIVi,	口縁部	頸部粘土貼付文・口唇部凹線文・RL	ミゾギ			
1278	FIVa, O層		口唇部凹線・頸部凹線・LR	平滑			
1279	EIVd,		波状口縁・縹状突起・沈線文・RL	ミゾギ	IV群1類		252
1280	EIVe, II層		縹状突起・沈線文	平滑			
1281	FIVj, I層						
1282	GIVa,						
1283	FIVh, IV層	胴部	やや小間。無文・縹状突起	ミゾギ			
1284	EIVd, II層	口縁部	縹状突起・沈線文・RL				252
1285	FIVe,	胴部	無文・縹状突起		IV群2類		253
1286	CIIIh, O層		沈線・縹状突起・内形制変文・RL		IV群1類		
1287	FIVi,		縹状突起・沈線文・LR		IV群8類		
1288	EIVe, ダメ押				IV群1類		
1289	FIVh, O・I層						253
1290	GIVh, I・II層	口縁部	無文・縹状突起(縹書文)		IV群2類		
1291	FIVh, I層						
1292	DIIIa, I・II層		波状口縁・無文・縹状突起				253
1293	EIV-III位Q, 埋土						
1294	EIVh, II層	胴部	無文・縹状突起(縹書文)				
1295	FIVa, II層						
1296	FIVb,						
1297	FIVc, O層						
1298	EIVi,						253
1299	EIV-10位Q, 埋土						
1300	CIII-7位Q,						
1301	BIIi, I層						
1302	FIVi,	口縁部			IV群3類		253
1303	FIVh,						

第353図 縄文土器(2)



No.	地点・墓位	器種	部位	器形・外面	内面	出土	分類	備考	図録
1304	FIVh. O・I層	厚胎	胴部	腰狀押圧痕を伴う輪彫線・LR	ミザギ		IV群3類		
1305	EIV-6住Q, 埴土		口縁部	波状口縁。無文・縄文施文施彫線			IV群4類		
1306	I田f ₂ . O層			波状口縁。無文・(縄文)					253
1307	FIVh. I層			波状口縁。無文・(縄文)					
1308	HIVf. O層			波状口縁。無文・(縄文)					
1309	日田-7住F, 埴土			無文・縄文施文施彫線					
1310	FIV-6住Q, 埴土		胴部	波状口縁。無文・(縄文)					
1311	EIVi. II層			輪彫線・波彫・LR					253
1312	EIVi. II層			輪彫線・波彫・LR					1311と同一個体
1313	CIII-7住Q, 埴土		口縁部	折り返し状口縁・輪彫線・円形竹管文・波彫			IV群5類		
1314	CIII. O層		胴部	円形竹管文を伴う輪彫線・波彫					
1315	CIII. II層			波状口縁。無文・(縄文)					253
1316	CIII. II層			波状口縁。無文・(縄文)					
1317	CIII. II層			波状口縁。無文・(縄文)・LR					
1318	CIII-4住Q, 埴土			波状口縁。無文・(縄文)・LR					253
1319	FIV-9住F, 埴土			波状口縁。無文・(縄文)・LR			IV群6類		
1320	FIV-5住Q, 埴土		口縁部	波状口縁・波彫(縄文)・LR・一部磨削					253
1321	FIVh. I層		胴部	波状口縁・波彫(縄文)・LR・一部磨削					
1322	FIVh. II層		口縁部	波状口縁・波彫・LR					
1323	FIVh. II層		胴部	波状口縁・波彫(縄文)・LR					253
1324	FIVa. I-II層			波状口縁・波彫(縄文)・LR					
1325	FIVc. II層			波状口縁・波彫(縄文)・LR					
1326	GIIV-1住F, 埴土下部			波状口縁・波彫(縄文)・LR					
1327	FIV. II層			波状口縁・波彫(縄文)・LR					253
1328	FVI-6住F, ベルト埴土			波状口縁・波彫(縄文)・LR					

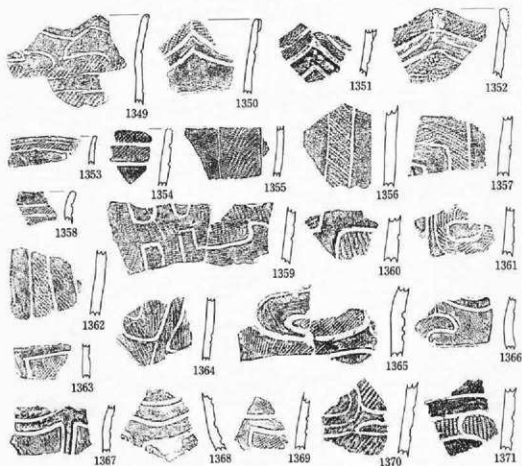
第354図 縄文土器(四)



No.	地点・層位	器種	部位	図形 / 外面	内面胎土	分	類	備考	図注
1329	FIVh, I層	鉢鉢	口部	比喩	ミガキ		IV群6類		253
1330	CⅡa, I・II層	〃	〃	〃・RL	ケズリ	〃	〃		〃
1331	EⅡb, I層	〃	〃	〃・LR	〃	〃	〃		〃
1332	FIV-3住 埋土上層	〃	口縁部	〃・R	ミガキ	〃	〃		〃
1333	FIV	〃	〃	〃・〃	〃	〃	〃		〃
1334	FIVf, O層	〃	〃	〃・RL・一部地文の上ナデ	〃	〃	〃		253
1335	EIV-6住 貯蔵穴埋土	〃	〃	〃・〃・〃	〃	〃	〃		253
1336	FIVh, I層	〃	〃	〃・LR・一部磨面	〃	〃	〃		〃
1337	HIVd, IV層	〃	〃	〃・〃・〃	〃	〃	〃		〃
1338	HIVd, IV層	〃	胴部	〃・〃	〃	〃	〃	1337と同一磨面	〃
1339	EⅤg, O層	〃	〃	〃・RL	〃	〃	〃		〃
1340	FIV-3住Q, 埋土下層	〃	〃	〃・〃・一部磨面	〃	〃	〃		253
1341	FIVh, V層	〃	〃	〃・LR	〃	〃	〃		〃
1342	FIVc, II層	〃	〃	〃・〃	〃	〃	〃		〃
1343	CⅡc, O層	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃
1344	FIVd, 〃	〃	〃	〃・LR	〃	〃	〃		〃
1345	BⅠ-1住東面	〃	口縁部	折り返し状口縁, RL (O線多量)・比喩	〃	〃	IV群7類		253
1346	FIVi, O層	〃	〃	〃・地文・比喩・一部磨面	〃	〃	〃		〃
1347	BⅠc, I層	〃	〃	〃・沈線・RL・磨面地文	ナデ	〃	〃		253
1348	DⅡa, V層上層	〃	〃	波状・折り返し状口縁, 磨面地文・RL	ミガキ	〃	〃		〃

10cm

第355図 縄文土器(2)



No.	地点・層位	器種	部位	器形／外面	内面胎土	分層	備考	図版
1349	B1f. 1層	深鉢	口縁部	波状口縁。頂部内形竹管文・磨消縄文	ミダナ	IV群8層		253
1350	CⅡ-4位1号のVド 灰土部出土	〃	〃	波状・折り返し状口縁。LR・磨消縄文	〃	IV群7層		〃
1351	DⅡ-1位Q ₁ 層土	〃	〃	〃・〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃		〃
1352	DⅡ-2位Q ₁ 層土中 部	〃	〃	〃・〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃		〃
1353	DⅡ-2位Q ₁ 層土	鉢	〃	低い波状・磨消縄文・L・内外面無地	〃	IV群8層		〃
1354	B1f. 1層	深鉢	〃	磨消縄文・LR	〃	〃		〃
1355	FVb. O層	〃	胴部	〃・RL	〃	〃		〃
1356	CⅡ-4位Q ₁ 層土	〃	〃	〃・附加条付	〃	〃		253
1357	CⅡf. O層	〃	〃	〃・〃・〃	〃	〃	1356と同一個体	〃
1358	B1e. 1層	〃	口縁部	〃・L	〃	〃		〃
1359	B1e. VⅡ層上面	〃	胴部	〃・RL	〃	〃		254
1360	CⅡj. VⅡ層上面	〃	〃	〃・LR	〃	〃		〃
1361	CⅡ-5位Q ₁ 層土	〃	〃	〃・〃	〃	〃		〃
1362	DⅡa. 1・Ⅱ層	〃	〃	〃・〃	〃	〃		〃
1363	CⅡ-7位Q ₁ 層土	〃	〃	〃・L	〃	〃		〃
1364	CⅡ-6位Q ₁ 層土	〃	〃	〃・磨消文	〃	〃	初照	253
1365	CⅡj. Ⅱ層	〃	〃	〃・L	〃	〃		〃
1366	DⅡb. O層	〃	〃	〃・R	〃	〃		254
1367	CⅡj. O・Ⅱ層	〃	〃	〃・〃	〃	〃		〃
1368	CⅡj. VⅡ層上面	〃	〃	〃・L	〃	〃		〃
1369	CⅡ-7位Q ₁ 層土下 部	〃	〃	〃・LR	〃	〃		254
1370	EⅡb. VⅡ層上面	〃	〃	〃・RL	〃	〃		〃
1371	B1区 盛土	〃	〃	〃・〃	〃	〃	中葉	〃

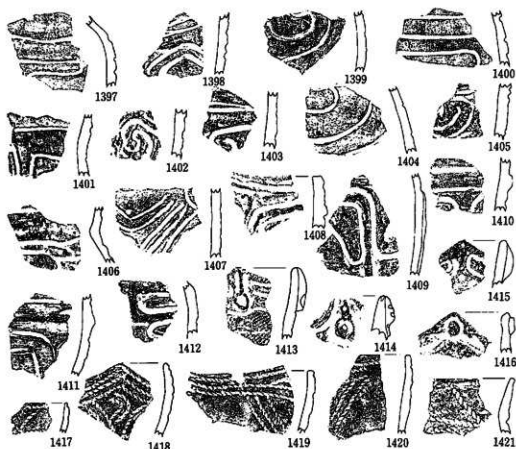
0 10cm

第356図 縄文土器(四)



№	地点・層位	器種・部位	器形 / 外面	内面胎土分層	備考	図版
1372	B Ia, I L層	深鉢 口縁部	波状口縁。磨消縄文・LR	ミガキ	IV群8類	254
1373	E IV f, I層	〃	磨消縄文・RL	〃	〃	〃
1374	C III a, VI層上面	〃 胴部	〃・LR	〃	〃	〃
1375	D III a, I・II層	〃	〃・RL	〃	資料	254
1376	H IV d, O層	〃	〃・LR	〃	〃	〃
1377	D III a, I・II層	〃	〃・LR	〃	資料	〃
1378	D III a, V層上面	甕 口縁部	無文・沈線・小突起	〃	IV群9類	〃
1379	C III-6位Q, 埋土	〃	〃・〃・突起	〃	〃	〃
1380	F IV i, 〃	深鉢	波状口縁。無文・沈線	〃	〃	〃
1381	F IV a, O・II層	〃	無文・沈線	〃	〃	〃
1382	F IV j, I層	〃	波状口縁・無文・沈線	ミガキ	〃	〃
1383	〃 O層	〃	無文・沈線	ミガキ	〃	〃
1384	D III a, I・II層	鉢	やや小型。無文・沈線	ミガキ	〃	〃
1385	D III a, 〃	深鉢	無文・沈線	〃	〃	〃
1386	F IV a, VI層上面	〃	波状口縁・無文・沈線	〃	〃	〃
1387	G IV b, O・I層	〃	無文・沈線	〃	〃	〃
1388	C III-4位Q, 埋土	〃	一部に地文・沈線・小突起	ミガキ	9類逸脱	254
1389	F IV h, I層	〃	波状口縁・やや小型。無文・沈線	ミガキ	IV群9類	〃
1390	C III f, I・II層	〃	〃・無文・沈線・小突起	〃	〃	〃
1391	F IV j, O層	〃	〃・〃・〃・頂部扁平	〃	〃	〃
1392	〃 I層	〃	無文・沈線	〃	〃	254
1393	H IV a, II層	口縁部	〃・〃・円形竹葉文	〃	〃	〃
1394	F IV i, O層	胴部	〃・〃	〃	〃	〃
1395	F IV d, 〃	口縁部	波状口縁。無文・沈線	〃	〃	〃
1396	F IV j, IV層	甕 胴部	無文・沈線	〃	〃	254

第357図 縄文土器(24)



№	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分	部	備考	図説
1397	DⅢb, 1・II層	甕	胴部	無文・沈線	スガキ		IV群9類			254
1398	IⅢa, 1層			スガキ						
1399	FⅣa, Ⅱ層			スガキ						
1400	DⅢa, V層上面			スガキ						254
1401	CⅢ, Ⅱ層	深鉢		スガキ						
1402	GⅣb, O層(盛土)			スガキ						
1403	CⅢ, O・I層			スガキ						
1404	CⅢ-4住Q, 埋土	甕		スガキ						
1405	EⅣ, Ⅱ, 1・II層	深鉢		スガキ						
1406	GⅢb, V層	甕		スガキ						
1407	GⅣ-4住埋土	深鉢		スガキ						254
1408	CⅢ-4住Q, 埋土	甕	口縁部	波状口縁・無文・幾何・沈線	ナダ		IV群10類			
1409	DⅢa, O・I層	深鉢		無文・幾何・沈線	スガキ					
1410	CⅢa, O・I(盛土)	深鉢		スガキ						
1411	DⅢa, V層上面	甕		スガキ						
1412	CⅢ-4住Q, 埋土	甕		スガキ						
1413	CⅢc, O層	深鉢	口縁部	波状口縁・垂下延帯・磨削無文・LR	スガキ		IV群11類			254
1414	CⅢb, I層			スガキ・洞部刺突文・LR・刺突文	スガキ					
1415	CⅢb, O層			スガキ・波状口縁・LR・磨削無文	スガキ		IV群14類			
1416	CⅢc, Ⅱ層			スガキ・折り返し状口縁・ボタン状突起・無文	ケズリ					254
1417	CⅣ, Ⅱ, O層(盛土)			小皿・無文・磨削正直	スガキ		IV群12類			
1418	FⅣ, Ⅱ, O層			波状口縁・無文・磨削正直						254
1419	EⅣ-6住埋土			スガキ						
1420	FⅣ, Ⅱ, IV層			無文・磨削正直						
1421	FⅣ, Ⅱ, O層(盛土)			スガキ						

0 1 10cm

第358図 縄文土器(凶)

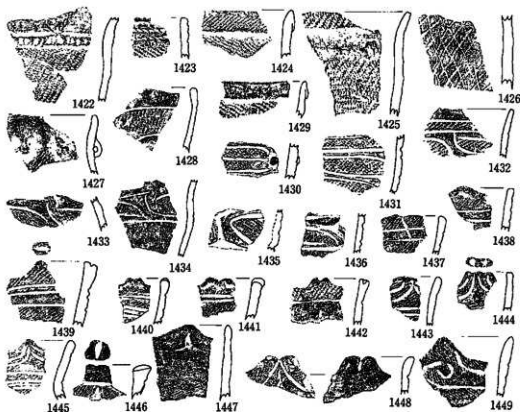
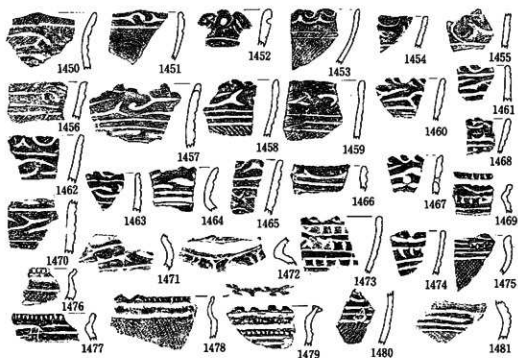


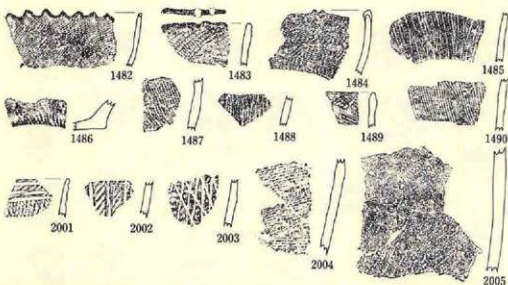
図	地点・層位	形状・部位	形状・外観	内面	胎土	分	厚	備考	図版
1422	FIV, 1	口縁部	横線正装・面突伸う縁等・RL	ミガキ		IV群12層			254
1423	FIV-6住Q, 埋土	口縁部	口縁部						
1424	CII-4住Q, 床面		折り返し口縁・LR			IV群13層			254
1425	表面		LR・口縁部の下幅広い縁文等						
1426	FIV-9住Q, 埋土	胴部	横線正装・文						
1427	BIf, I層	口縁部	口縁部・横線正装・LR			IV群14層			
1428	DIf, O層	胴部	横線正装・面突伸う縁等・LR			IV群15層			
1429	BIf, O・I層		折り返し口縁・LR			IV群15層			
1430	DIf-1住Q, 埋土	胴部	円形小突起・面突伸う縁等・LR			IV群15層			254
1431	BIf, I層		面突伸う縁等・LR						
1432	CII-4住Q, 埋土	口縁部	口縁部						254
1433	BIf, VI層上面	胴部	口縁部・横線正装・RL						
1434	BIf, O層		横線正装・面突伸う縁等・LR						
1435	DIf, O層	胴部	横線正装・面突伸う縁等・RL	横線					
1436	BIf, I層		口縁部・横線正装・LR	ミガキ					
1437	BIf, O層	口縁部	小突起・横線正装・LR						
1438	BIf, VI層上面		横線正装・面突伸う縁等・LR						
1439	BIf-1住Q, 埋土		横線正装・面突伸う縁等・LR						
1440	BIf, I層		横線正装・面突伸う縁等・LR						
1441	BIf, O・I層		小突起・横線正装・LR						
1442	CII-4住Q, 埋土		横線正装・面突伸う縁等・LR						254
1443	AIf, O層		横線正装・面突伸う縁等・LR						
1444	DIf-1住Q, 埋土		横線正装・面突伸う縁等・LR						
1445	DIf-2住Q, 埋土下層・床面		横線正装・面突伸う縁等・LR			V群5層			
1446	BIf, VI層		横線正装・面突伸う縁等・LR			V群1層			
1447	CII-4住Q, 埋土		横線正装・面突伸う縁等・LR						
1448	BIf-1住Q, 埋土		横線正装・面突伸う縁等・LR			V群5層			254
1449	BIf, O・I層		横線正装・面突伸う縁等・LR			V群1層			

第359図 縄文土器(例)



No.	地点・部位	器種・部位	器形 / 外面	内面・土	分	類	考	附
1450	B I f. VI層上面	縁部	低い波状口縁。三叉文・筋刻文・LR	ミガキ	V群1類			254
1451	B II e. I層	鉢	。 筋文・三叉文					
1452	B II-1佐Q ₂ 層土		突起・蓋部刻目文。筋文・円形刺突文・沈線		V群4類			
1453			小波状口縁。沈線・三叉文・LR		V群1類			255
1454			筋文・沈線		V群4類			
1455			胴部 三叉文・筋刻文・LR		V群1類			
1456			口縁部 筋文・LR					255
1457	D III-6佐Q ₂ 層	縁部	突起・筋文・三叉文					
1458	B II e.	鉢	B突起・三叉文・沈線・RL					
1459	B I f. O層		小波状口縁。三叉文・沈線・LR					
1460	B I e. I層		B突起・筋文・三叉文					
1461	D III-6佐床面直上		筋文・三叉文・沈線					
1462	C II d. O層	縁部	小波状口縁。筋文・三叉文・沈線					255
1463	B I d. O層	鉢	B突起・筋文・三叉文・沈線					
1464	B I-1佐Q ₂ 層土	鉢	。 三叉文・沈線					
1465	B II-1佐Q ₂ 層土	鉢	突起・沈線		V群4類			
1466	B I e. VI層上面		筋文・三叉文	ミガキ	V群1類			
1467	B I c. 層		B突起・沈線		V群4類			
1468	K III c. O層		小突起。					
1469	I III-1佐Q ₂ 層土		口縁部一部刻目文・沈線・連続刻目文	沈線	V群3類			255
1470	C III a. VI層上面	縁部	筋文・三叉文	ミガキ	V群1類			
1471	D III-6佐床面直上	注口	筋文・三叉文					
1472	C II-4佐Q ₂ 層土	底	筋文・三叉文					
1473	B I' d. I L層	鉢	口縁部 B突起・筋文・刻目文		V群2類			255
1474	B I c. I L層		筋文・三叉文					
1475	I III-1佐Q ₂ 層土		筋文・平行沈線・刺突文・LR		V群3類			
1476	C III-5佐Q ₂ 層土		口縁部連続刻目文・LR					
1477	O III b. O I層		筋文・平行沈線	沈線				255
1478	C III c. VI層上面		筋文・RL (異状)					
1479	G III a. O I層		B突起・連続刻目文・平行沈線・LR	ミガキ				
1480	B I d. O I層	胴部	平行沈線・LR					
1481	C III-7佐 Q ₂ 層土	底	沈線・一帯刻目・RL		V群4類			

第360図 縄文土器(27)



No.	地点・層位	器種・部位	形状 / 外面	内面	土質	分類	備考	図版
1482	BⅡ区, I層	鉢	口縁部 小波状口縁・L	ミゾギ		V群5類		255
1483	BⅠ区盛土	深鉢	口縁部 刻目文・LR (異条)	粗				
1484	FⅣf, O層	鉢	口縁部 刻目文・LR?	ケズリ				255
1485	IⅢa, O・I層	罐	胴部 燃糸文	ナデ	弥生土器			
1486	IⅢi, Ⅱ	Ⅱ	胴部 Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	
1487	HⅢ区 O層	Ⅱ	胴部 Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	
1488	GⅢi, I・Ⅱ層	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	255
1489	HⅢa, I層	Ⅱ	口縁部 燃紐圧痕・RL	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	
1490	Ⅱ	Ⅱ	胴部 やや小皿, 単節斜縄文	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	255
2001	DⅢb, VI層	深鉢	口縁部 平行沈線文・押型文 (斜格子目文)	平滑	織成少量	I群1類	にぶい黄褐色	
2002	CⅢh, VI層	Ⅱ	胴部 押型文 (煎茶文)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	灰黄褐色	255
2003	CⅢ-2位Q, 埋土	Ⅱ	胴下部, 斜格子状沈線文	ミゾギ		I群8類	黒褐色	
2004	FⅣd,	Ⅱ	不整燃糸文	粗		II群10類	にぶい褐色	
2005	BⅠ区盛土	Ⅱ	単節斜縄文陶文の後ミゾギ・斜い形沈線状燃糸	ミゾギ		Ⅱ	Ⅱ	

第361図 縄文土器(Ⅱ)・弥生土器

1481をのぞいては大洞B式に相当するものであろう。5類は晩期の粗製土器と推定した。

2. 弥生土器

〈分布など〉M面のHⅢ・GⅢ・IⅢの3区に限定されている。遺構内からの出土している2点もGⅢ-251溝跡のものである(第330図881・882)。

〈器種・器形〉すべて破片で、器形の全体を知る資料はない(第361図, 図版255)。

〈施文〉口縁部の破片で、燃紐側面圧痕が口唇部にみられる1489以外は地文だけである。1485~1488は縦位といくぶん斜位の燃糸文、1489は横位の単節斜縄文、1490は数条が1単位になる縦位の単節斜縄文である。

〈相当する型式名〉弥生時代でも最終末のもので、赤穴式とされているものなどに相当するであろう。上述のGⅢ-251溝跡出土のものも同様である。

3. 平安時代の土器

住居跡を中心にした平安時代の遺構がM区とN区以外の調査区のほぼ全域に分布している。それと重なるように遺構外にも土器が分布する。しかし破片がほとんどであり、坏5点と土師器壺1点を図示（第388図924～929、図版247）するにとどめ、記載は省略する。

4. 剥片石器

石鏃・尖頭器類・石鏃・不定形石器・石鏃類をこのなかを含めている。器種別に記載するが、使用される石材については個別には触れず、器種別の百分比を図8に一括して表わしている。また、観察表中の石材の産地は略号で示しているが、その対照表は529ページに掲載した。

(1) 石鏃（第362図～第364図、図版256、それ以外は個別遺構に掲載）

遺構内23点、遺構外37点、あわせて60点が出土し、49点を掲載した。完形品は23点（38％）で、大きさや重量の分布図を示している（図6）。

形態を分類すると、無茎鏃43点（72％）・有茎鏃15点（25％）・不明2点（3％）である。無茎鏃の内訳は凹基無茎鏃27点・平基無茎鏃9点・尖基無茎鏃6点・不明1点である。有茎鏃は凸基有茎鏃13点・凹基有茎鏃2点である。

特徴的ないくつかについて次に記載する。1491は鏃形鏃とされているものである。1531は凸基有茎鏃で、身部の両側縁に挟り込みを伴う。1502・1515は縁辺部だけの細部調整、他のほとんどは全面が細部調整される。アスファルトと推定される接着剤が付着するのは凸基有茎鏃に2点、尖基無茎鏃に1点がある（1523・1524・1530）。

縄文時代の遺構からの出土例は少なく、前期前葉CⅡ-3住居跡・晩期初頭AⅠ-1住居跡・前期前葉CⅢ-57ピット・CⅢ-108落とし穴から1点ずつがある。

遺構外の分布はL面に22点（61％）と多い。なかでも12点はいちだん低いBⅠ区・BⅡ区に分布する。M面から出土した12点（33％）の多くは北部のE区・F区からのものである。H面には2点（6％）があるにすぎない（表採の1点は除外）。

(2) 尖頭器類（第364図・第365図、図版257、それ以外は個別遺構に掲載）

尖頭器としては、遺構内1点と遺構外3点がある。第102図303・1539・1540は木葉状で、1540は大型のものである。1539は基部をわずかに欠失しているが、1540に類似する。1536・1537は一端を含む大型の破片である。形状や細部調整からは

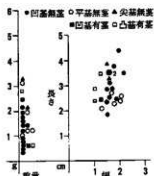


図6 石鏃計測値分布図

尖頭器あるいはそれに類するものと推定しておく。1536はアスファルトとみられる黒色の付着物を両面に伴う。1535は尖基無茎鏃に比べると幅が広く、ここに含めた。不定形石器として分類した第374図1669～1671の3点も1535の仲間と考えたほうがよいのかもしれない。

縄文時代の遺構からの出土は前期前葉CⅢ-1住居跡からの302がある。1540は平安時代のHⅢ-4住居跡からの出土である。他はL面のBⅠ区とCⅢ区から1点、M面のFⅣ区から3点が出土している。1536はI群4類（ムシリI式相当）の土器と一緒に不整形な落ち込みから出土している。

(3) 石錐（第365図、図版257、それ以外は個別遺構に掲載）

遺構内8点、遺構外7点（第365図、図版257）、あわせて15点がある。完形品は12点である。形態からいくつかに分類でき、①頭部と身部が明瞭に区別されるもの（9点）、②その区別のない棒状のもの（3点）、③不定形な剝片の一端に細部調整を施すもの（3点）がある。①は、a、頭部に比べると非常に長い身部が作り出される例（1541）とb、頭部に比べると短い身部をもつ例（第78図187・第86図218、1542～1547）がある。ただ1547はここに含めたものの、頭部と身部が不明瞭である。計測できるものでは、aは長さが46mm、重量が2.8g、bは長さが24～30mm、重量が1.4～8.7gである。②は、断面形が菱形（1548）・三角形（1550）・台形（第78図186）のものがある。長さは35～53mm、幅は7～11mm、重量は2.4～2.9gである。1548・1550が主に片面調整であるのに対し、186は両面調整である。③は、1549・1553のほか、第78図185がある。刃部の断面形は台形状・菱形・五角形で、長さは28～51mmである。

縄文時代の遺構では、晩期初頭AⅠ-1住居跡から各形態のものが1点ずつ、同期のBⅡ-2住居跡から①が出土している。

(4) 石匙（第365図～第368図、図版257・258、それ以外は個別遺構に掲載）

遺構内10点、遺構外25点、あわせて35点が出土した。形態では縦形（30点＝86％）と横形（5点＝14％）に分類できる。大きさと重量の分布図を示した（図7）。

縦形石匙は完形品が22点と多い。形態から細分が可能である。

①1側縁が凸辺で、反対縁が直線的あるいは凹辺になるもの。さらに、a、尖頭形状に収斂する例（第66図155・第139図390・391・第296図746、1554・1558ほか7点）、b、先端部が丸味をおびる、あるいは平坦な例（1555・1557ほか3点）に細分できる。

②尖頭形のもの。両側縁が尖頭形状に収斂する（1552・1556・1560）。

③両側縁が直線的で、先端部が平坦なもの（1567・1571）。

④両側縁が凸辺で、先端部が丸味をおびるもの（1570・1574・1575）。

以上のほか、折損による不明のものが4点ある。

計測値は、長さが27～91mm（平均58mm）、幅が14～32mm（平均21mm）、重量が1.1～31.3g（平

表3 石材・産地略号一覧表

石	材 名	産 地	略 号
凝 灰 岩	淡緑色凝灰岩	北上山地	古生界 G 1
	チャート質淡緑色凝灰岩	〃	G 2
	流紋岩極細粒凝灰岩	〃	新第三系・中新統 G 3
	流紋岩質中粒凝灰岩	〃	G 4
	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地	〃 〃 G 5
	白色粗粒凝灰岩	〃	G 6
	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	〃	G 7
	濃緑色細粒凝灰岩	〃	G 8
	流紋岩質極細粒凝灰岩	〃	G 9
	〃 〃 〃	〃	G 10
	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	二戸郡西部	〃 〃 G 11
	流紋岩質中粒凝灰岩	二戸一帯	〃 〃 G 12
	白色細粒凝灰岩	二戸郡西部 (安代)	〃 〃 G 13
	濃緑色細粒凝灰岩	安代町	〃 〃 G 14
	白色砂質凝灰岩	二戸郡一帯	〃 〃 G 15
	白色細粒凝灰岩	二戸郡下	〃 〃 G 16
	〃 〃	二戸一帯	〃 〃 G 17
	淡緑色珪質凝灰岩	奥羽山地	〃 〃 G 18
安 山 岩	輝綠凝灰岩	北上山地	古生界 G 19
	角閃石英安山岩	〃	新第三系・中新統 An 1
	輝石安山岩	奥羽山地	〃 〃 An 2
	〃	奥羽山地 (二戸郡)	〃 〃 An 3
	〃	〃 (七時雨周辺)	〃 〃 An 4
	角輝石安山岩	奥羽山地	〃 〃 An 5
	安山岩	安代町	〃 〃 An 6
流 紋 岩	流紋岩	〃	Ry 1
	玻璃質流紋岩	奥羽山地	〃 〃 Ry 2
	〃 〃	奥羽山地 (安代町?)	〃 〃 Ry 3
	〃 〃	二戸郡	〃 〃 Ry 4
	斜長石流紋岩	松尾 (寄木?)	〃 〃 Ry 5
泥 岩	凝灰質硬質泥岩	〃	〃 〃 De 1
	硬質泥岩	〃	〃 〃 De 2
	珪質泥岩	〃	〃 〃 De 3
	黒色泥岩	〃	〃 〃 De 4
砂 岩	凝灰質珪質泥岩	〃	〃 〃 De 5
	硬砂岩	北上山地	古生界 Sa 1
チャート	凝灰質硬砂岩	〃	Sa 2
	チャート	〃	〃 Ch 1
粘 板 岩	輝綠凝灰岩質チャート	〃	〃 Ch 2
	粘板岩	〃	〃 Ne 1
	暗緑色粘板岩	〃	〃 Ne 2
	凝灰色粘板岩	〃	〃 Ne 3
千 枚 岩	粘板岩	田山兄畑	〃 Ne 4
	千枚岩	〃	〃 Se 1
珪 岩	淡緑色凝灰質千枚岩	北上山地	〃 Se 2
	輝石珪岩	〃	〃 Hn
ホルンフェルス	粘板岩ホルンフェルス	〃	〃 Ho
滑 岩	角輝石安山岩滑岩	岩手火山・八幡平火山	第四系 Yo
鉄 石 英	〃	八幡平火山	〃 Te 1
	?	〃	〃 Te 2
黒 曜 石	曜石 (?)	〃	Ko
玉 髓	〃	〃	Gy

均10.8g)を測る。1551・1552は非常に小型な例である。刃部の調整は、①全縁辺が両面調整されるもの(1点)、②一部の縁辺が両面調整されるもの(7点)、③全縁辺が片面調整されるもの(11点)、④一部の縁辺が片面調整されるもの(7点)がある(折損により不明な4点は除く)。挟入部を両側縁に2個ずつ伴う例は1563にある。

横形石匙は5点である。身部の平面形は楕円形状(第102図305)・三角形(1579)・方形(第88図230, 1577・1578)である。全側縁あるいは一部の側縁以外の部分が細部調整されているが、230がほぼ両面調整であるほかは片面調整である。すべて完形品で、長さは31~54mm(平均40mm)、幅は37~66mm(平均52mm)、重量は4.8~38.2g(平均16.5g)を測る。

縄文時代の遺構では、前期前葉CⅢ-1住居跡から横形1点、同期のDⅢ-3住居跡から縦形(①a)2点、晩期初頭BⅡ-3住居跡から横形1点、後期と推定されるCⅡ-56ピットから縦形1点、FN-109落とし穴から縦形1点が出土している。遺構外のものとして上述の遺構以外から出土した29点の分布は、L面が17点、M面が9点、H面が3点である。M面からのものは北部のEN区に7点が集中する。

(5) 不定形石器(第368図~第367図、図版258~261、それ以外は個別遺構に掲載)

上述した石鏃・尖頭器類・石鏃・石匙と後述する石筥類以外の剥片石器をここに含めた。遺構65点、遺構外115点、あわせて180点が出土した。分類群4をのぞいては明確な細部調整があるものを刃部として分類に使用し、微細剥離痕が他の縁辺に認められる場合でも刃部数には含めていない。また微細剥離痕のみが認められる剥片数は本器種よりも多く出土しているが、DⅢ-12住居跡の1点(第152図456)をのぞいては掲載していない。

刃部の位置やそれが作る形態によって次のように分類する。

1. 一縁辺に伴うもの
2. 二あるいは三縁辺に伴うもの
3. 全部あるいは大部分の周縁に伴うもの
4. 両極剥離による2個1対または4個2対の刃部をもつもの

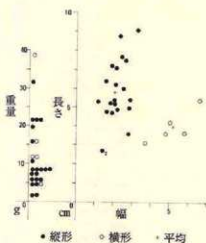


図7 石匙計測値分布図

その他				2		3	
粘板岩	5					3	13
流紋岩	13	14	13		5		2
凝灰岩	17	27	23	20	23	14	8
泥岩	17	27	23	20	23	14	8
石材	石	尖頭器類	石	石	不定形石器	石	石
	55	77	73	50	73	70	

図8 剥片石器の器種別石材百分比

5. 破損しているために不明のもの

以上のうち、4はピエス・エスキューに相当する器種である(1684~1686・1688)。また個々については観察表に分類を記載するにとどめる。

遺構外として掲載した109点の内訳は、1が8点(17%)、2が43点(39%)、3が24点(22%)、4が4点(4%)、5が20点(18%)となっている。面別の分布率は、L面が59%、M面が31%、H面が10%となり、M面の大部分は北部のEⅣ区・FⅣ区からの出土である。縄文時代の住居跡の出土例は早期前葉DⅢ-12住居跡4点(1642は本遺構出土)、前期前葉CⅢ-1住居跡1点、同DⅢ-3住居跡4点、同GⅣ-2住居跡11点、晩期初頭AⅠ-1住居跡・BⅡ-3住居跡・BⅡ-5住居跡1点がある。

(6) 石筥類(第376図~第378図、図版262・263、それ以外は個別遺構に掲載)

遺構内3点、遺構外22点、あわせて25点が出土している。石筥類としたのは必ずしも石筥に分類できないものを含んでいるためである。また不定形石器に含めている1680・1681・1683・1687の4点はこの類に含める方が適切かもしれない。1694はトランシェ様石器に相当するものかもしれない。調整は、両面調整(1689・1690ほか)・半両面調整(1691・1696ほか)・片面調整(1692~1694ほか)があり、半両面調整のものが多く、完形品21点に対し、基部を欠くもの4点である。大きさと重量の分布図は図9に示しているが、先の不定形石器に含めた4点も○で加えている。

縄文時代の遺構では前期前葉DⅢ-3住居跡から1点出土している(第139図392)。それも含めた分布はL面が76%、M面が16%、P面が8%で、M面も含めるとB区からE区の南北約120mに92%が分布する。もっとも多い区はDⅢ区で、6点が出土している。

5. 石斧と礫石器

縄文時代に属すると考えられる石斧と礫石器・平安時代の砥石を取り上げる。礫石器は、平安時代とそれ以降の住居跡・住居状遺構から出土したものは遺構外からのものと一緒に第379図~第386図に掲載し、その他は該当する遺構で図示している。ここでは該当する器種を一括してあつかい、「まとめ」とする。なお、石材については図11に占める割合を表示しており、個別には触れていない。

(1) 石斧

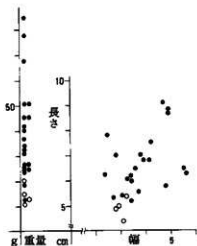


図9 石筥類計測値分布図

礫石斧・磨製石斧・打製石斧がある。

礫石斧：遺構外から出土した第379図1711がある。断面が三角形の礫を素材にし、刃部は両面を研磨している。

磨製石斧：図示した4点のほかに、13点が出土している。完形は2点（第86図215・第296図728）だけで、残りは破片である。縄文時代の遺構では、AⅠ-1・BⅡ-2の各住居跡、CⅢ-57ピットから出土している。第379図1714は擦切石斧を折り取った残りの部分である。全体を研磨したあと、両面から擦り切っている。

打製石斧：遺構外からの第383図1739が1点あるだけである。

(2) 磨石

a. 磨石Ⅰ類

長大な礫の側面を機能面とする磨石をⅠ類として分類した。特殊磨石（八木，1976）や三角柱状磨石ほかの名称で呼ばれている一群を主体としている。

51点が出土し、礫石器中ではもつとも多い。34点を掲載している。完形品が25点（49%）と多い。平面形は、長方形や楕円形状のものが大部分である。断面の形状は、おおむね三角形になるものが多いが、不整楕円形や扁平な楕円形・多角形状がある。大きさにはバラツキがあり、長さが127～187mm（平均156mm）、最大幅が51～111mm（平均77mm）、重量が365～1,305g（平均842g）となっている（図10）。機能面は、長さが61～136mm（平均112mm）、最大幅が5～30mm（平均15mm）である。機能面をふたつもつ例は6点である。薄い剝離痕を片面あるいは両面に伴う例は18点である。第382図1736は両面全体が平滑で、研磨され、一部に擦痕を伴っている。両側面は幅広い擦り面になっていて、1側面は両面から剝離が加えられている。他のものとは形態的に異なる面があるが、いちおうここに含めておく。

縄文時代の住居跡からの出土例は、早期前葉日計式押型文のDⅢ-12住居跡から4点、前期前葉早稲田6類期のCⅡ-3住居跡から2点、同CⅢ-3住居跡から1点が出土している。また同じ早稲田6類期のCⅢ-1住居跡は磨石Ⅰ類が出土せず、半円状扁平打製石器4点を伴う。このことから、磨石Ⅰ類は早期前葉～前期前葉の時間幅のなかでの存在と考えることができるであろう。

b. 磨石Ⅱ類

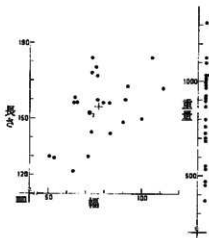


図10 磨石Ⅰ類計測値分布図

磨石Ⅰ類として分離した一群以外の磨石を主としている。15点が出土し、9点を図示した。12点(80%)が完形品である。大きさや形状にバラツキがあるが、やや扁平な楕円形～円形の亜円礫を素材にし、その片面あるいは両面に使用面があるものが主体である。第86図214・第330図886のように長大な礫の1側縁あるいは2側縁を機能面とするものは磨石Ⅰ類に入れるべきかもしれないが、平滑で、886は光沢を生じている点がⅠ類と異なり、この類に含めている。また、第380図1719は長形状の礫で、幅広い両面を機能面にする点がⅠ類とは異なる。凹石と複合しているのは2点がある。

縄文時代の住居跡では、前期前葉のCⅡ-3住居跡、晩期初頭のBⅡ-2住居跡から1点ずつ出土している。

(3) 半円状扁平打製石器

14点が出土し、13点を図示した。完形品は第383図1740・1742の2点(14%)である。第384図1505は破片で、残る一端にえぐり込みを伴う。第383図1740・1742・第384図1744は一侧縁を両面から剥離して機能面を作り出すものの、他の周縁には剥離は認められない。第103図1533や第384図1745は機能面が鋭く、ほとんど磨耗していないが、他の例は7～19mmの磨耗痕を生じている。

縄文時代からの住居跡では、前期前葉早稲田6類期のCⅢ-1住居跡の埋土下部から1点、床面から3点がほぼまとまって出土している。先の磨石との関係から推定すると、この器種の出現期を示すことが考えられる。そのほか晩期初頭のAⅠ-1住居跡埋土から1点が出土した。

(4) 凹石

磨石Ⅰ類について数量的には多く、27点が出土し、20点を図示した。完形品は21点(77%)と多い。形態や大きさ、機能部の形状にはバラツキが大きい。両面に機能部をもつのは15点である。他の器種とは、磨石Ⅰ類と1点、磨石Ⅱ類と2点が複合している。

縄文時代の遺構では、前期前葉CⅢ-1、晩期初頭のAⅠ-1、BⅡ-3の3棟の住居跡から4点出ているほか、2基のピットと落とし穴から2点ずつが出土している。

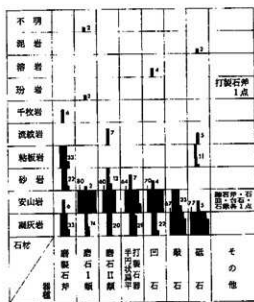


図11 礫石器の器種別石材百分比

(5) 敲石

3点と少なく、2点を図示している。3点とも扁平で、長方形形状あるいは楕円形状の礫を素材にし、1側縁か両側縁に顕著な潰痕を生じている。第386図1760は側縁が磨石としても機能している。縄文時代の遺構からは出土せず、すべて平安時代の住居跡からのものである。

(6) 石皿

遺構外からの第386図1701が1点だけである。楕円形状の平面形で、約31×48cmと大型である。片面がくぼむ。

(7) 石鍬

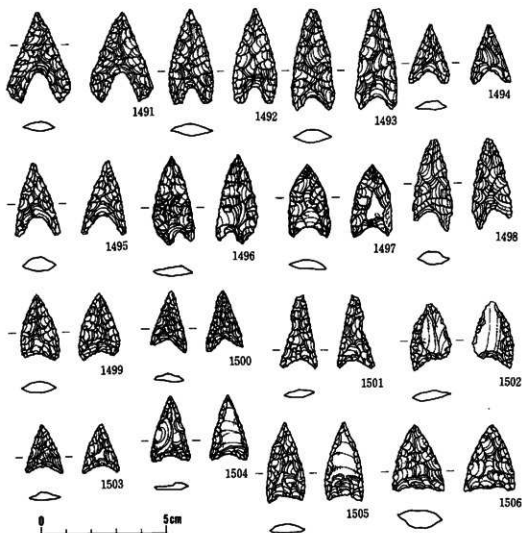
遺構外GⅡa 4 0層から1点が出土したが、図示していない。周縁の大部分を両面から打ち欠いているが、刃部は鈍い稜線になっている。長さ19.5cm、幅12.4cm、厚さ2.8cm、重量1,100gを測る。

以上、石斧と礫石器について記載した。そのうち、石斧や磨石Ⅰ類の大部分・半円状扁平打製石器・石鍬・石皿のようにほぼ縄文時代に固有の石器のほか、磨石Ⅱ類や凹石・敲石などはその時代を必ずしも特定できないものも一括して扱ってきた。擦る、叩く、あるいはその台になるような石の道具類が現代になっても使われていた例が知られており(渡辺, 1980)、平安時代からの出土のものはその出土状況も含めて詳細に吟味する必要があるのかもしれない。

(8) 砥石

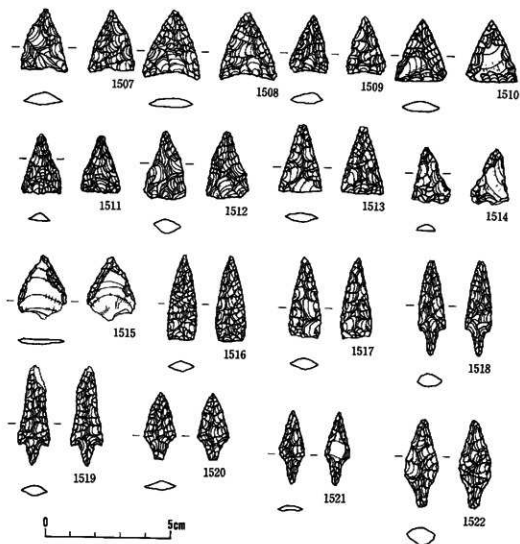
遺構内外から44点が出土している。完形品は14点(32%)にすぎず、破損品が多い。遺構からは23点が出土し、平安時代の住居跡9棟では13点がある。そのほかにはピットから1点、柱穴状ピットから3点、焼土遺構から2点、溝跡から4点が出土している。ここでは平安時代の13点について述べる。

完形は7点(54%)である。平面形は、一端または両端が凸凹形になる長方形形状や不整形・台形状・楕円形状である。断面形は使用面に規定され、長方形のものがもっとも多いほか、三角形形状・半円状などがある。大きさはバラツキがあるが、やや小型のものが多く、長方形形状あるいは方形形状のもの7点では、3面使用が1点、4面使用が5点、6面使用が1点である。6面を使う第93図250は小型の方形形状で、両面と側面のすべてを使用している。それ以外では、第202図564は楕円形状、第93図251は台形状で4面を使用するが、主使用面は両側面にある。第218図595は小型の円礫を半割し、その平坦面を使用する。同じ住居跡ではややそれに似た断面が三角形形状の第218図594が2面を使っている。後者の2点は、使用面や形状・大きさからは手にもっての使用が考えられる。第245図651は焼失住居跡であるⅠⅢ-1住居跡の床面から出土したもので、床面～床面直上の層準から出土した礫をはじめとする8点の鉄製品との関連が考えら



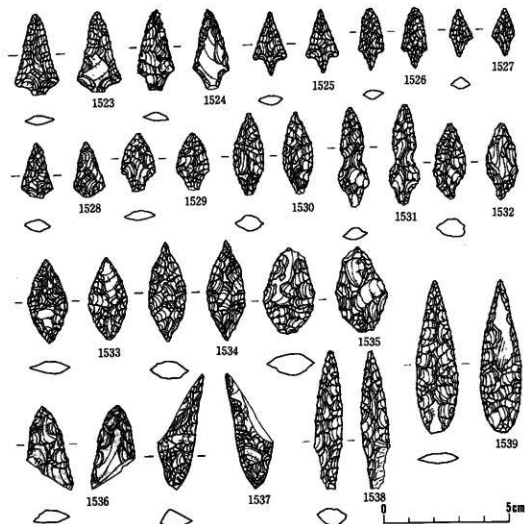
No.	地点・層位	器種	大きさ(最大) : mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1491	DⅡ1, V層上面	石鏃	35	22	4	2.5	焼灰質燧石(細粒燧石)G3	刃部無蓋	255
1492	CⅡ-6住Q, 壤土	"	38	18	5	2.0	砂状燧	Ne4	"
1493	CⅢ-6住Q, 壤土	"	40	17	5	2.7	燧石質燧石	De1	"
1494	CⅢ-5住Q, 壤土上面	"	23	16	4	0.9	燧石質燧石	De1	"
1495	PⅢc, O・I層	"	29	16	6	1.7	燧石燧石	De3	"
1496	DⅢe, V層上面	"	36	16	3	1.7	燧石質燧石	De5	"
1497	EⅣe, C層	"	29	17	3	1.5	燧石質燧石	De5	"
1498	FⅣ1, O層(燧土)I層	"	36	18	5	2.2	燧石燧石	De2	"
1499	BⅠf, VI層	"	27	16	4	1.3	燧石質燧石	De1	"
1500	BⅠa, I層	"	24	15	3	0.7	燧石燧石	De3	"
1501	EⅣe, II層	"	29	15	3	1.0	燧石質燧石	Ry2	" 左側部にノッチ
1502	EⅣ1, O・I層	"	(26)	17	3	(1.5)	燧石燧石	De3	" 縁部部欠損
1503	EⅣ-6住Q, 壤土	"	19	15	3	0.6	燧石燧石	De3	"
1504	DⅢ-2住Q, 壤土	"	26	16	3	0.6	砂状燧	Ne4	" 燧石燧石部欠損
1505	EⅣ-6住 壤土	"	32	16	3	1.5	燧石燧石	De3	"
1506	CⅢ-5住 Q, 壤土上面	"	26	21	7	3.1	燧石燧石	De3	"

第362図 石鏃(1)



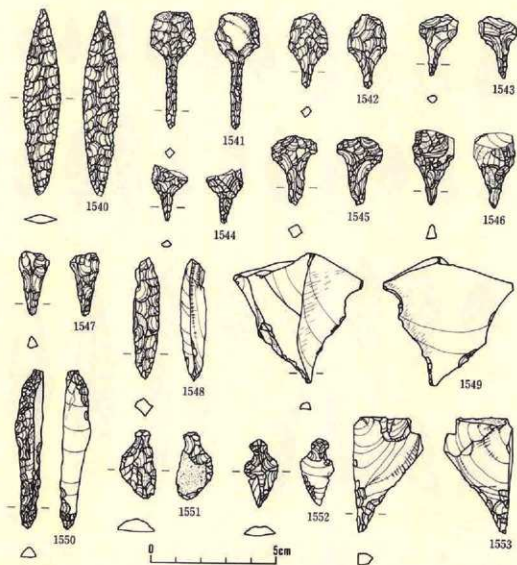
№	地点・层位	器種	大きさ(最大): cm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図 号
1507	DⅢ区 O層 壤土	石鏃	29	19	5	1.8	地質泥岩	De 3 凹基無茎。尖端部欠	
1508	EⅣ-6位, 床面	〃	(27)	23	4	(1.8)	凝灰質硬質泥岩	De 1 〃	256
1509	B I c ₂	〃	23	16	5	1.4	硬質泥岩	De 2 〃	〃
1510	CⅢa, I層	〃	24	20	4	1.2	硬質泥岩	Ry 2 平基無茎。表面部分割傷	〃
1511	DⅢa, O層	〃	23	15	3	1.0	凝灰質泥岩	G 19 〃	〃
1512	CⅢa, IV層	〃	27	17	5	2.1	凝灰質硬質泥岩	De 1 〃	〃
1513	JⅣa, O層	〃	(27)	17	3	(0.5)	凝灰質硬質泥岩	G 3 〃	〃
1514	EⅣd, O層	〃	(22)	14	3	(0.8)	凝灰質硬質泥岩	De 5 凹基無茎。基部欠。表面部分割傷	〃
1515	BⅡ-1位Q, 壤土	〃	(26)	19	2	(1.0)	凝灰質硬質泥岩	De 1 凹基欠。部分割傷	〃
1516	B I c ₂ , I層	〃	(24)	13	4	(1.6)	硬質泥岩	De 2 平基無茎。尖端部欠	〃
1517	GⅢ-4位Q, 壤土	〃	(20)	19	5	(2.0)	地質泥岩	De 3 〃	〃
1518	CⅢ-6位Q, 壤土	〃	(38)	21	4	(2.0)	地質泥岩	De 3 凸基有茎。〃	〃
1519	IⅢ-1位Q, 壤土	〃	(40)	13	4	(2.0)	凝灰質硬質泥岩	De 1 凹基有茎。基部欠	〃
1520	DⅢ区 O層	〃	(27)	13	4	(1.0)	地質泥岩	De 3 凸基有茎。基部欠	〃
1521	BⅡ-1位壤土	〃	29	10	2	0.7	地質泥岩	De 3 〃	〃
1522	B I d, VI層	〃	35	13	7	2.8	凝灰質硬質泥岩	De 5 〃	〃

第363圖 石鏃(2)



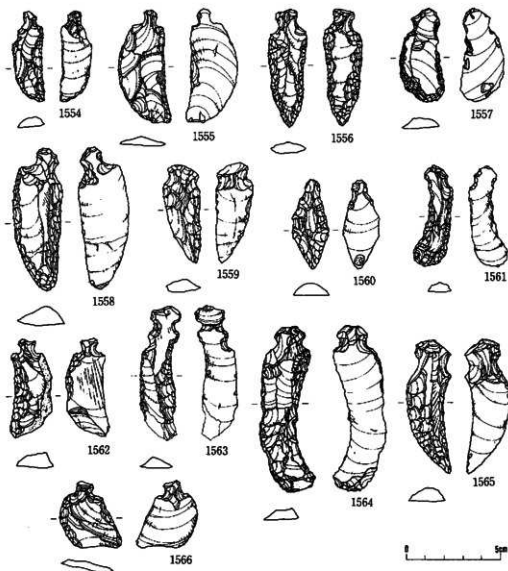
No.	地点・部位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	石材名	特徴・備考	図録
			長さ	幅	厚さ				
1523	FIV i, V層上面	石鏃	(32)	17	3	(7.0)	麻灰質硬質砂岩	De 1 凸基有蓋。アスファルト付着	256
1524	B I e, VI層	#	(32)	15	4	1.3	麻灰質硬質砂岩	De 1 # # #	#
1525	F III j, O層	#	28	13	4	0.7	砂質質泥岩	Ry 2 凹基有蓋	#
1526	B II h, I層	#	34	10	4	0.6	砂質質泥岩	Ry 2 #	#
1527	B II h, I層	#	19	9	5	0.6	砂質質泥岩	Ry 2 凸基有蓋	#
1528	F IV i, I層	#	(22)	12	5	(8.6)	硬砂質砂岩	G 3 # 基部欠	#
1529	B I f, I層	#	(23)	13	4	(1.1)	黑色泥岩	De 5 #	#
1530	D III a, V層上面	#	(33)	13	6	(3.3)	泥岩	G 3 尖基無蓋。基部アスファルト付着	#
1531	B I C, I層	#	(40)	12	5	(2.0)	砂質質泥岩	Ry 2 凸基有蓋。基部欠。両側縁欠入部	256
1532	F IV f, O層	#	(30)	13	7	(3.0)	麻砂岩	G 18 尖基無蓋?	#
1533	P III P, V層	#	33	16	5	2.2	砂質砂岩	De 3 尖基無蓋	#
1534	砂岩	#	39	15	7	3.3	麻灰質硬質砂岩	De 5 #	#
1535	B I e, O層	尖頭鏃	(30)	20	8	(5.0)	砂質砂岩	De 3 尖頭部欠	257
1536	C III h, 不整砂層も	#	(33)	(16)	(5)	(7.0)	硬砂質砂岩	G 3 尖頭部欠。アスファルト付着	#
1537	F IV f, I層	#	(45)	(15)	6	(3.4)	砂質砂岩	De 3 #	#
1538	E IV h, II層	尖頭鏃	(55)	11	7	(4.0)	麻灰質硬質砂岩	De 5 片断	257
1539	F IV h, O層	#	61	17	4	5.0	麻灰質硬質砂岩	De 5 木葉状	#

第364図 石鏃(3)・尖頭器(1)



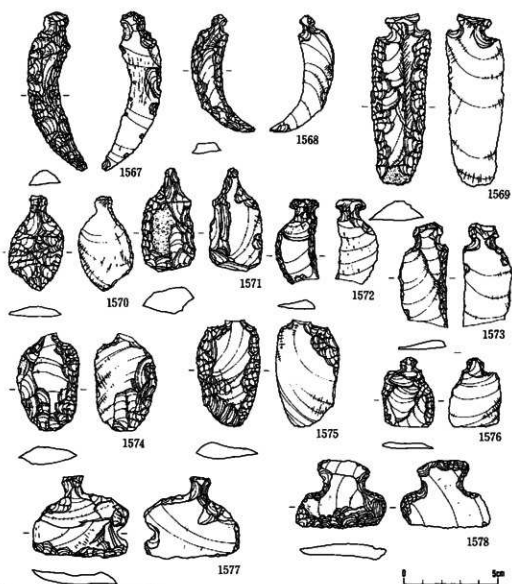
No	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1540	甘藷-4住Q,掘り方	矢頭器	(74)	15	3	(4.0)	珪質泥岩	De 3	257
1541	B I d, I 層	石鏃	46	17	3	2.8	凝灰質珪質泥岩	De 5	
1542	C II-4住埋土	"	30	16	9	3.4	珪質泥岩	De 3	"
1543	B II f, I 層	"	34	16	3	1.4	珪質黄面泥岩	Ry 2	"
1544	F 埋土, V 層上部	"	(22)	15	3	(1.0)	珪質泥岩	De 3	"
1545	D 埋土-2住埋土上部	"	27	19	6	3.0	珪質泥岩	De 3	"
1546	B I f, I 層	"	(30)	16	10	4.2	凝灰質珪質泥岩	De 5	"
1547	I 埋土-1住Q,埋土	"	26	12	9	2.0	凝灰質硬質泥岩	De 1	"
1548	D II-1住Q,埋土	"	48	10	7	4.0	凝灰質砂質チャート	Ch	"
1549	B II b, VI 層	"	51	51	3	17	洗砂岩質粘板岩	G	"
1550	F IV a, O 層	"	53	11	8	5.0	珪質泥岩	De 3	"
1551	F IV f, I-II 層	板形石匙	27	14	5	2.0	洗砂岩質粘板岩	G 3	"
1552	C 田区 埋土上部	"	27	14	4	1.1	洗砂岩質粘板岩	G 3	"
1553	E IV f, I 層	石鏃	46	22	6	7.2	凝灰質珪質泥岩	De 5	"

第365図 尖頭器(2)・石鏃・石匙(1)



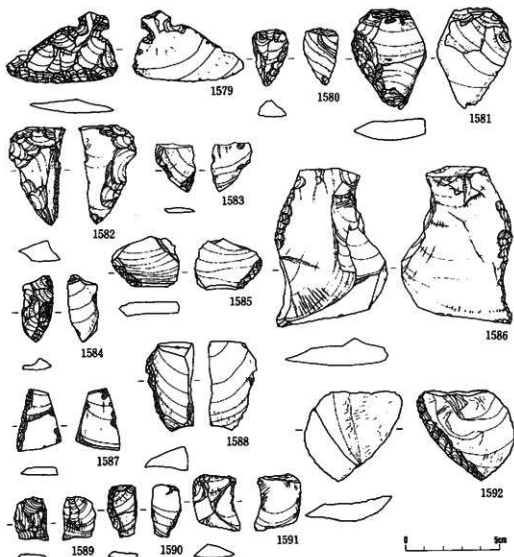
No	地点・層位	器種	大きさ(最大): mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1554	B: d, 1層	細形石匙	48	16	9	3.0	湖尻實地資料館 De 5		297
1555	D III-1 住 堀土	#	60	25	5	8.4	湖尻實地資料館 De 1		#
1556	D II j, O層(堀土)	#	62	21	6	8.2	湖尻實地資料館 G ₂		#
1557	E IV i, O層	#	69	22	5	8.0	湖尻實地資料館 De 5		#
1558	F III a, V層	#	76	29	9	23	湖尻實地資料館 De 5		#
1559	G III i, V層	#	52	20	7	7.3	湖尻實地資料館 De 1		#
1560	E IV a, V層上面	#	47	19	6	5.6	砂質礫岩	De 3	#
1561	G IV i, II層	#	53	12	5	5.8	湖尻實地資料館 De 5		297
1562	D III b, V層上面	#	52	19	8	10	砂礫岩	Ne 1 右側部C自然面残す	#
1563	F IV a, I層	#	(72)	19	7	(8.1)	湖尻實地資料館 De 5	挟入部2部近4部。尖部部欠	#
1564	D III d, O層	#	87	23	5	21	湖尻實地資料館 De 5		298
1565	C III j, V層	#	71	21	9	15	湖尻實地資料館 De 1		#
1566	C II-4 堀Q, 堀土	#	36	28	4	6.0	珪質礫岩	De 3	#

第366図 石匙(2)



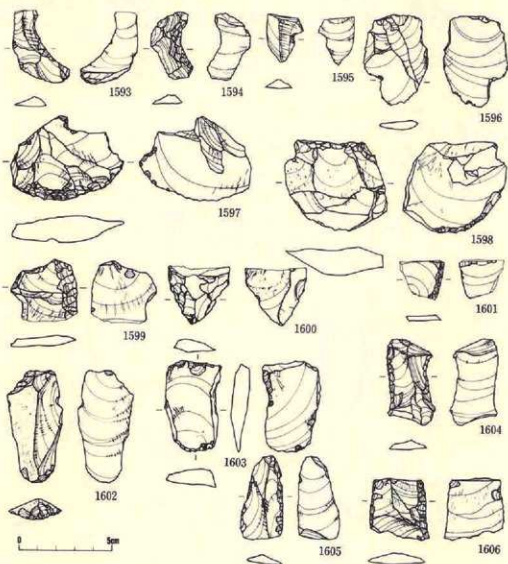
No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	石材名	特徴・備考	図面
			長さ	幅	厚さ				
1567	E IV f. O層	楔形石匙	84	22	7	14	凝灰質地質泥岩	De 5	258
1568	C III - 5 住Q, 埋土	"	63	16	5	8.4	凝灰質泥岩	De 3	"
1569	D III a. VI層	"	91	32	11	31	地質泥岩	De 3	"
1570	C III f. O層	"	58	28	5	8.0	地質泥岩	De 3	"
1571	F III c. I層	"	54	20	12	19	地質泥岩	De 3	"
1572	E IV d. O層	"	(45)	21	4	(5.7)	凝灰質地質泥岩	De 5	"
1573	E IV d. O層	"	(56)	26	4	(8.7)	凝灰質地質泥岩	De 5	"
1574	F III c. II層	"	(53)	32	9	(18)	地質泥岩	De 3	つまみ部欠
1575	B I c. VI層	"	(57)	34	8	(16)	凝灰質地質泥岩	De 5	"
1576	C III b. VI層	"	(37)	27	3	(5.2)	凝灰質地質泥岩	De 5	"
1577	E IV f. O層	楔形石匙	42	50	5	15	凝灰質地質泥岩	De 5	右側部にノッチ
1578	B II f. I層	"	36	48	7	12	凝灰質地質泥岩	De 5	"

第367図 石匙(3)



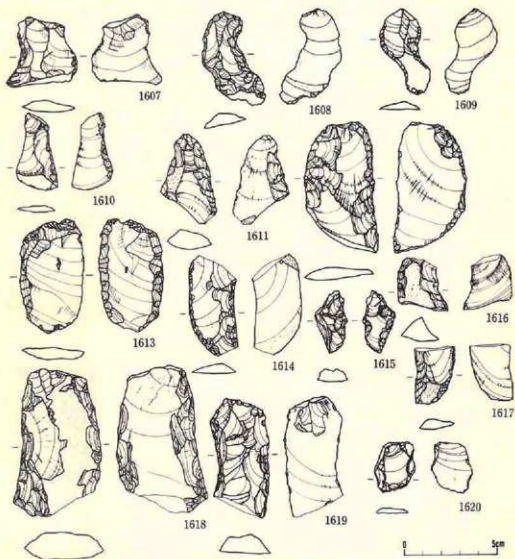
No	地 点・層位	器 種	大きさ(最大): mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1579	B I d, VI層	横刃石匙	36	56	7	12	凝灰質燧石層岩	De 5	258
1580	B II f, I層	不定形石匙	30	19	8	5.0	凝灰質燧石層岩	Ry 2 1	
1581	P III b, V層	〃	30	52	10	25	凝灰質燧石層岩	Ry 2 1	
1582	C III j, VI層上面	〃	52	17	11	16	凝灰質燧石層岩	De 5 2. 左側縁像鋭利な痕	
1583	C III i, VI層	〃	35	28	2	2.8	凝灰質燧石層岩	De 5 1. 先端部	
1584	C III a, I層落ち込み	〃	35	16	6	3.8	燧石層岩	De 3 1. 凸刃	
1585	B I a, 横穴状ビット	〃	(27)	36	7 (9.6)		燧石層岩	De 3 5. 両側欠. 両面端部磨蝕	
1586	B I c, VI層下部	〃	85	56	17	7.0	凝灰質中粒凝灰岩	G 4 1. 先端部縁部割傷	258
1587	C II b, O層	〃	33	33	4	4.3	凝灰質燧石層岩	G 3 1	〃
1588	C III i, O層	〃	47	24	12	17	燧石層岩	De 2 1. 一部磨蝕状	〃
1589	C III - 5 箇Q, 壤土	〃	(23)	16	3	(1.6)	燧石層岩	De 3 5. 先端部欠	〃
1590	C III i, O層	〃	26	15	3	2.4	凝灰質燧石層岩	De 5 1	
1591	C II - 4 箇4号マダモ通部	〃	38	22	7	3.5	燧石層岩	De 3 1. そのほかの縁部像鋭利な痕	258
1592	P III c, IV層	〃	48	51	10	22	凝灰質燧石層岩	De 5 1	259

第368図 石匙(4)・不定形石器(1)



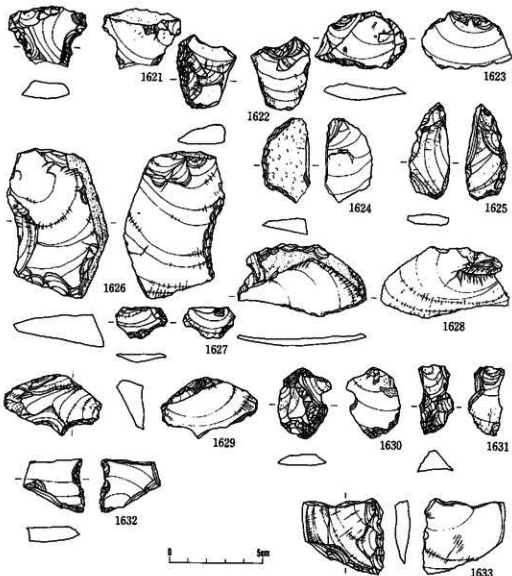
No.	地点・層位	器種	大きさ(最大): mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1593	P III d, IV層	不定形石器	(38)	25	6	(4.1)	凝灰質地質泥岩 De 5	1. 基部欠。凹片	
1594	D III a, VI層	"	35	22	8	3.9	珸質泥岩 De 3	1. 凹片。左側縁微細刻線状	258
1595	J III b, V層	"	25	19	5	1.6	流紋岩質極細粒凝灰岩 G ₂	1. 小さなノッチ	
1596	B I e, O層	"	47	34	4	11	凝灰質珸質泥岩 De 5	1. "	
1597	P III d, O・I層	"	44	60	14	32	凝灰質珸質泥岩 De 5	1	259
1598	B I e, VI層下部	"	47	51	14	42	凝灰質珸質泥岩 De 5	1	
1599	B I d, I層	"	(32)	38	5	(8.1)	流紋岩質極細粒凝灰岩 G ₃	5	
1600	E IV e, O層	"	(30)	31	6	(6.9)	珸質泥岩 De 2	5. 不規則な細部調整	
1601	F IV e, I層	"	(20)	24	3	(2.6)	凝灰質珸質泥岩 De 5	5. 凹陥欠	
1602	D III-2住Q, 礫土	"	59	29	11	16	珸質泥岩 De 3	1. 先端部90°に近い細部調整	
1603	E IV f, O層	"	47	29	8	16	珸質泥岩 De 3	1. 先端部縁斜度細部調整	259
1604	H IV 201方形周溝礫土	"	41	25	5	5.5	流紋岩質極細粒凝灰岩 G ₃	2	
1605	E IV f, I・II層	"	43	22	4	43	珸質泥岩 De 2	1. 先端部縁斜度細部調整	
1606	F IV d, O層	"	33	32	6	7.3	凝灰質地質泥岩 De 5	2. 基部欠か	259

第369図 不定形石器(2)



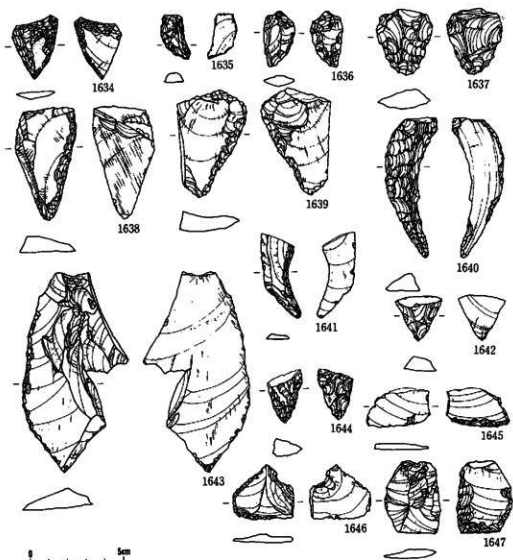
No.	地点・層位	器種	大きさ(最大) : mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1607	PⅢc, O~IV層	不定形石器	36	34	6	7.7	凝灰質地質泥岩	De 5 2	259
1608	FⅣj, IV層	〃	50	32	6	8.1	凝灰質砂質泥岩	De 5 2	
1609	PⅢD, IV層	〃	45	21	4	3.7	珸質泥岩	De 3 2	258
1610	DⅡ-1住Q ₂ 層土	〃	41	22	3	3.0	流紋岩質極細粒凝灰岩G 3	2, 先端部微細割離痕	〃
1611	CⅢ4, VI層	〃	(48)	28	10	(10)	凝灰質硬質泥岩	De 1 5, 先端部欠	
1612	CⅢ-3住Q ₂ 層土	〃	70	38	6	22	凝灰質硬質泥岩	De 1 2	259
1613	FⅣbc, I O層	〃	60	33	8	19	凝灰質珸質泥岩	De 5 2	〃
1614	FⅣf, I層	〃	(53)	25	7	(9.8)	凝灰質地質泥岩	De 5 5, 両端欠	〃
1615	FⅣ-3住Q ₂ 層土	〃	32	17	7	3.8	珸質泥岩	De 3 2	
1616	CⅢ-6住Q ₂ 層土	〃	(25)	25	13	(7.8)	黒曜石	Ka 5, 両端欠	
1617	EⅣH, II層	〃	(30)	21	5	(3.7)	凝灰質珸質泥岩	De 5 5	259
1618	CⅡ*, O層	〃	(78)	42	15	(86)	斜長石斑紋岩	Ry 8 5, 先端部欠	〃
1619	BⅠd, VI層下部	〃	(69)	29	9	(25)	凝灰質硬質泥岩	De 1 5, 〃	〃
1620	DⅣH, O層	〃	27	22	2	2.9	凝灰質珸質泥岩	De 5 2	〃

第370図 不定形石器(3)



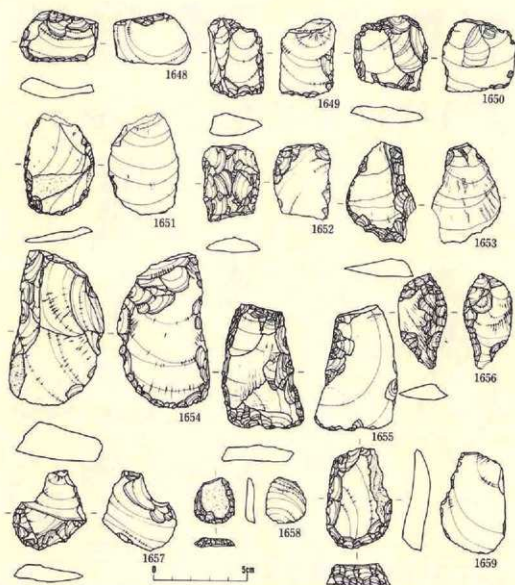
No.	地点・層位	類別	大きさ(最大): cm		重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅				
1621	C II f. O層	不定形石器	(32)	42	9 (12.0)	磨質珪岩	De 3 5. ノッチ2個	
1622	C II j. O層	"	39	31	10	11.0	磨灰質燧石	De 1 2
1623	D III a. VI層	"	31	40	6	10.0	磨灰質燧石	De 5 2
1624	B I c. VI層下層	"	(45)	25	6	(8.9)	磨灰質燧石	G 3 5
1625	D III b. VI層上層	"	51	21	5	8.1	磨灰質燧石	De 5 2
1626	D III f. VI層	"	75	47	11	68.0	硬質珪岩	De 2 2. 先端部不規則な鋭利調整
1627	C III d. O層	"	(16)	27	3	(1.5)	磨質珪岩	De 3 5
1628	C III a. 砂層上部	"	30	68	4	25.6	硬質珪岩	De 2 2
1629	F III e. O-II層	"	32	51	11	17.3	磨灰質燧石	De 5 2. ノッチ2個
1630	H III a. O-I層	"	30	28	8	8.0	燧石尖	Te 2 2
1631	D III a. VI層	"	36	19	10	7.6	磨灰質燧石	De 5 2. 尖部削り部
1632	B I b c.	"	28	32	8	8.0	磨灰質燧石	G 3 2
1633	C II-4 柱増土	"	43	46	8	16.1	磨質珪岩	De 3 2. 尖部形

第371図 不定形石器(4)



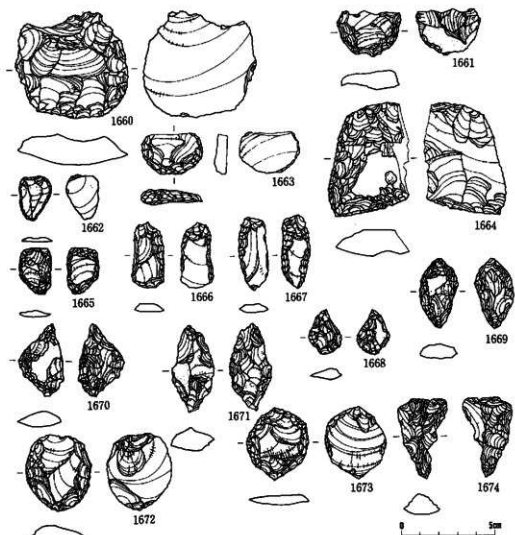
No	地 点・層位	群 属	大 小 (最大) : cm			厚 度	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長 寸	幅	厚 寸				
1634	FIV E ₂ , O層	不定形石器	33	23	4	3.5	燧石質灰岩	Ry 2 3	
1635	C II b, Ⅲ層上面	"	21	12	5	2.4	燧石岩	De 3 3	
1636	C III f, O層	"	29	17	6	2.5	燧石質地質岩	De 5 5	
1637	C II a, V層	"	(35)	30	10	(9.5)	燧石岩	De 3 5, 表面保存部割裂	
1638	E IV i, 砂土	"	60	32	9	16.7	燧石岩	Ne 4 2	260
1639	FIV E ₂ , II層	"	57	37	6	18.8	燧石岩	De 2 2, 両面磨削痕	"
1640	FV-1 (砂土)	"	74	20	9	12.7	燧石岩	De 3 3, 断面非連続	"
1641	G II j, O層	"	(45)	18	4	(3.1)	燧石質地質岩	De 8 5, 基部欠	
1642	D III, 砂土	"	(24)	25	8	(3.2)	燧石質地質岩	De 1 5, 断面非連続出土	
1643	D III b, V層	"	105	53	10	30.7	燧石質地質岩	De 5 2, 断面非連続	260
1644	FIV-3 (砂土) 上部	"	(27)	19	10	(3.4)	燧石質地質岩	Ch 2 5, 断面非連続	"
1645	D III c, VI層	"	29	33	3	3.1	燧石岩	De 2 2	"
1646	B I a, O層	"	29	32	4	3.4	燧石質地質岩	G 2 2	"
1647	D III b, VI層上面	"	38	29	5	8.5	燧石岩	De 3 2	"

第372図 不定形石器(5)



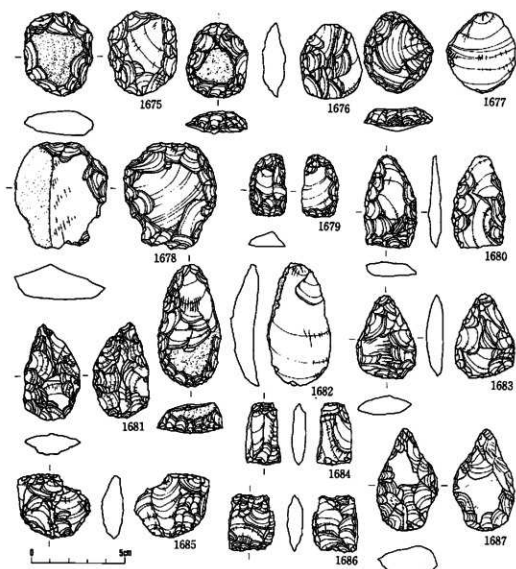
No.	地点・層位	器 種	大きさ(最大) : mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1648	DII-1住跡9方	不定形石器	27	41	8	9.6	黄灰岩質燧石層状物G3	2. 念斜度調整部調整	260
1649	DIIIab, V層	"	42	29	12	17.5	黄灰岩質燧石層状物G3	2	260
1650	B1区表探	"	39	49	8	15.9	凝灰質地質泥岩	De5 2	
1651	FIVc, O層	"	52	37	4	13.4	凝灰質地質泥岩	De5 2	
1652	CIIIg, VII層上部	"	40	30	8	10.4	凝灰質地質泥岩	De5 2	260
1653	FIVj, O層	"	53	37	9	17.3	燧石泥岩	De3 2. 一部断面状の調整部調整	260
1654	EIVf, II層	"	82	47	17	68.0	燧石泥岩	De2 2	"
1655	DIIIj, O層	"	65	41	10	33.4	燧石泥岩	De2 2	"
1656	GIV-3住地上	"	51	26	8	8.7	燧石泥岩	De3 2. ほび全縁辺におよぶ調整部調整	"
1657	EIVf, I・II層	"	42	39	9	11.5	凝灰質地質泥岩	De5 2	"
1658	CII-1住地土	"	24	22	5	3.1	燧石泥岩	De3 2. 念斜度調整部調整	260
1659	CIIIj, V層上部	"	53	45	12	29.1	凝灰質泥岩	De5 2. "	261

第373図 不定形石器(6)



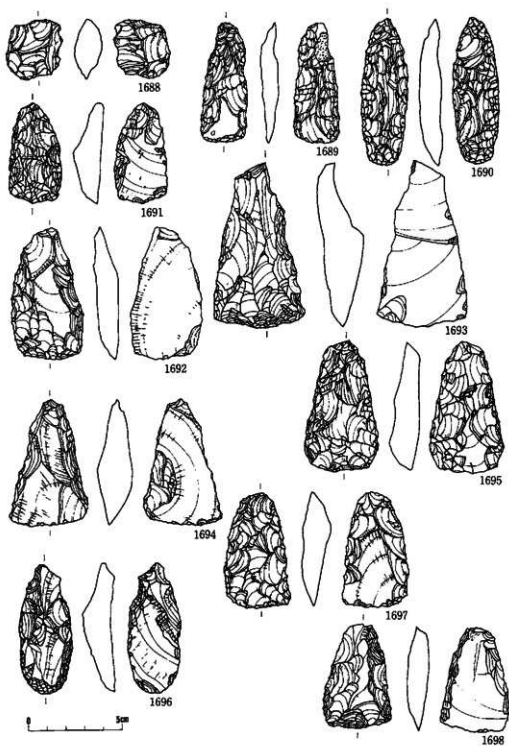
No.	地点・層位	群 属	大きさ(最大): cm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1660	D III-2 住層土	不定形石器	97	68	15	62.0	地質燧石	De 2 2	261
1661	C III a. O 層	"	(25)	34	9	8.7	凝灰質燧石	De 5 2	260
1662	E IV e. O 層	"	24	17	25	1.5	地質燧石	G 3 3. 横形細部剥離	
1663	C III c. O 層	"	(21)	32	6	(7.0)	凝灰質燧石	De 5 5. 急斜に剥離	260
1664	F III e. II 層	"	(68)	49	11	(45.5)	凝灰質燧石	De 5 5. 横形細部剥離	261
1665	C III b. O 層	"	24	16	3	1.8	粘板岩	Ne 1 3	260
1666	D II-4 住層土	"	35	18	4	3.5	粘板岩	Ne 4 3	
1667	F IV e. O 層	"	39	18	5	3.5	凝灰質燧石	Ry 2 3	
1668	C III-7 住層土	"	24	18	6	2.0	凝灰質燧石	Ry 2 3. 石座の一隅か	
1669	F IV h. O 層	"	27	21	8	5.7	凝灰質燧石	G 3 3. 尖鋭部剥離か	260
1670	B I e. 旧土	"	39	24	9	7.6	凝灰質燧石	G 3 3. "	261
1671	F IV a. II 層	"	46	22	12	9.1	凝灰質燧石	De 5 3. "	
1672	C III-2 住層土	"	41	35	12	19.2	凝灰質燧石	Ry 2 2	
1673	D III-2 住層土	"	38	33	5	7.9	凝灰質燧石	De 1 3	
1674	C III a. V 層	"	42	27	11	8.5	凝灰質燧石	De 5 3	

第374図 不定形石器(7)

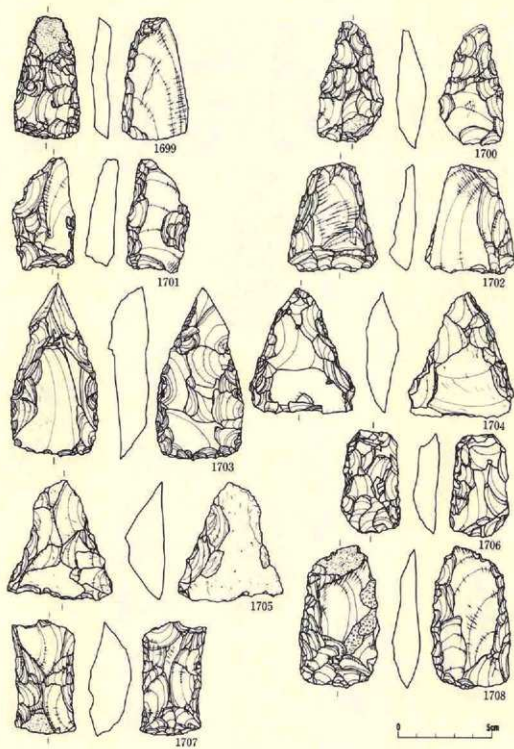


No.	地点・層位	器種	大きさ(最大) : cm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1675	E IV f. II層	不定形石器	45	36	13	25.8	砂岩	No 1 3	261
1676	B I d. VI層下部	?	38	32	11	15.5	凝灰質地質泥岩	De 5 3. 条状皮部部剥離	?
1677	D II-4 砂層	?	37	43	10	19.4	砂質泥岩	De 3 3	?
1678	D II-1 砂層上	?	56	49	18	51.3	凝灰質硬質泥岩	De 1 3. 層状剥離の部形剥離	?
1679	D II-2 砂層上部	?	34	20	8	6.4	凝灰質硬質泥岩	G 3 3	?
1680	E IV f. I層	?	49	38	7	11.0	凝灰質硬質泥岩	De 1 3. 石角部	?
1681	C III c. VI層	?	50	29	11	13.2	砂質泥岩	De 2 3. ?	?
1682	F III d. IV層	?	65	34	13	32.4	凝灰質硬質泥岩	De 1 3. 条状皮部部剥離	261
1683	E IV g. I-II層	?	44	31	9	14.7	地質泥岩	De 3 3. 石角部	?
1684	D II a. VIII層上部	?	33	19	7	5.1	凝灰質地質泥岩	De 5 4. 2個1対の刃部	261
1685	E IV c. II層	?	34	38	11	14.4	地質泥岩	De 3 4. ?	261
1686	E IV-11 砂層土	?	38	25	9	4.7	凝灰質硬質泥岩	G 3 4. ?	?
1687	F III a. IV層	?	54	32	13	19.7	硬質泥岩	De 2 3. 石角部	?

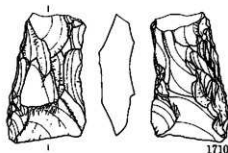
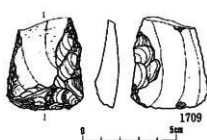
第375図 不定形石器(8)



第376图 不定形石器(9)・石篋類(1)

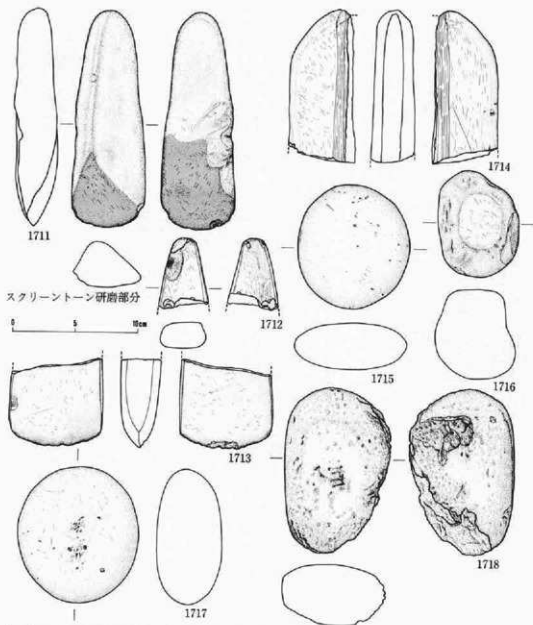


第377圖 石篋類(2)



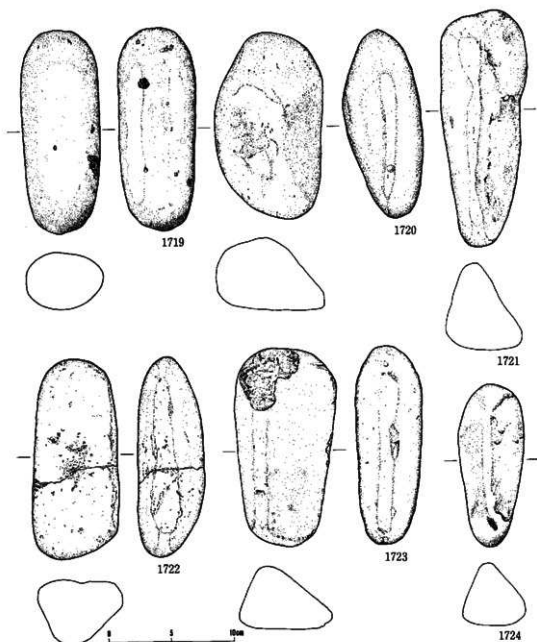
No.	地点・層位	器 種	大きさ(最大):mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1688	D III c, 1-11層	不定形石器	32	28	15	14.5	粘板岩	Ne 1 4, 2個1列の刃部	261
1689	C III d, 内層上面	#	63	24	6	12.5	凝灰質硬質砂岩	De 3 ほぼ背面側面	#
1690	F III d, O・I層	#	78	25	12	24.4	凝灰質硬質砂岩	De 5 両面側面	262
1691	D III a, VI層	#	53	27	14	19.1	凝灰質硬質砂岩	G 3	261
1692	B I f, VI層下部	#	70	38	11	34.3	凝灰質硬質砂岩	De 1	262
1693	C III a, VII層上部	#	88	49	21	68.0	凝灰質硬質砂岩	De 1	#
1694	E IV-10 住居面	#	68	41	19	41.2	粘板岩	Ne 4 刃部斜鈍。トランツェ縁石片か	#
1695	C II i, II層	#	68	39	13	37.4	粘板岩	Ne 4 両面側面	#
1696	F III f, II層	#	70	28	9	27.0	凝灰質硬質砂岩	De 5 先端部規則的なやや急傾斜の縁部側面	#
1697	D IV j, O層	#	62	34	15	33.2	凝灰質硬質砂岩	De 5	#
1698	B I c, VI層	#	56	37	12	25.2	凝灰質硬質砂岩	De 1	#
1699	C IV j, VI層	石片類	65	36	5	26.8	凝灰質硬質砂岩	De 5	#
1700	B I d, VI層	#	64	34	14	28.4	凝灰質硬質砂岩	De 1	#
1701	D III a, VI層	#	60	34	14	30.8	地質砂岩	De 3 刃部不規則な縁部側面	#
1702	D II a, O層	#	58	48	14	41.7	硬質砂岩	De 2	#
1703	B I f, VI層最下部	#	91	47	17	78.0	凝灰質硬質砂岩	G 3	#
1704	D III e, O層	#	66	55	15	51.2	凝灰質硬質砂岩	De 1	#
1705	E IV c, O層	#	63	56	23	51.1	斜長石凝灰岩	Ry 5	263
1706	C II c, O層	#	54	31	11	24.6	凝灰質硬質砂岩	De 5	#
1707	C III j, VII層上部	#	51	33	22	46.4	凝灰質硬質砂岩	De 5 刃部一部自然面。打製石片か	#
1708	D III b, VII層上部	#	75	42	13	46.3	粘板岩	Ne 1	#
1709	B I c, VI層	#	(49)	41	12	(29.6)	凝灰質硬質砂岩	De 5	263
1710	E IV d, O層	#	(69)	42	15	(57.1)	硬質砂岩	De 2 刃部に縁部側面を伴わない	#

第378図 石鏡類(3)



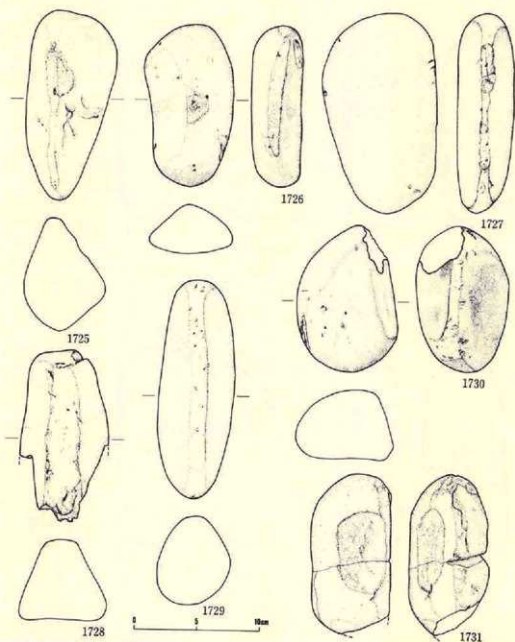
No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1711	EIV区ダメ押しVI層	磨石斧	173	59	37	483	輝石安山岩	An 2 刃部は両面を研磨	264
1712	CII-4住堀土	磨製石斧	(56)	40	20	(61)	暗緑色粘板岩	Ne 2 基部をきむ破片。	
1713	CIII ₁ VI層	磨石斧	(70)	75	32	(280)	灰褐色山岩	An 6 刃部をきむ破片。両面研磨。	
1714	CIII ₁ VI層最下部	磨製石斧	(122)	(54)	35	(418)	暗緑色細粒凝灰岩	G 14 石斧を新り取った残り。両面を研磨。	264
1715	CIII ₁ VI層(落ち込み)	磨石目録	98	89	36	475	凝灰質硬砂岩	Sa 2 扁平な刃部の両面を使用。	
1716	B I d ₁ VI層	磨石	85	64	71	822	武蔵岩質中粒凝灰岩	G 12 磨面は平坦になっている。	
1717	CII-1住堀面直上	磨石	106	97	52	808	硬砂岩	Sa 1 両面を使用。凹石と適合。	
1718	FIV-9 a 住堀土	磨石	(131)	84	56	793	輝石安山岩	An 5 両面を使用するほか1側縁にも磨面。	

第379図 石斧・磨石(1)



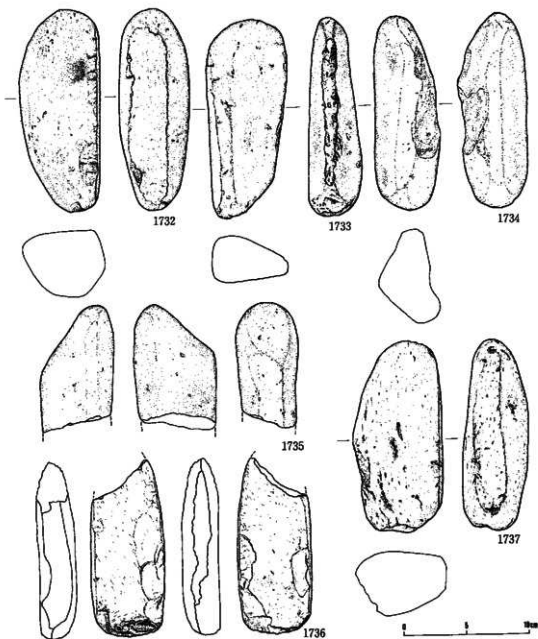
No.	地点・層位	器 種	大 小 (最大) : mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図 録
			長	幅	厚				
1719	GⅢ-6 住層土	磨石Ⅱ型	162	62	46	800	輝石安山岩	An 2 両面を使用	
1720	OⅢa, O・I層	磨石Ⅰ型	148	96	61	1,080	輝石安山岩	An 2 横断面16×87mm	264
1721	OⅢa, O・I層	?	187	72	55	1,021	輝石安山岩	An 2 17×142mm	
1722	CⅢa, 階上層	?	158	69	52	730	輝石安山岩	An 2 23×123mm	264
1723	OⅢa, O・I層	?	166	82	56	914	輝石安山岩	An 2 13×128mm	?
1724	BⅠf, VI層	?	150	99	52	470	輝石安山岩	An 2 5×86mm	

第380図 磨石(2)



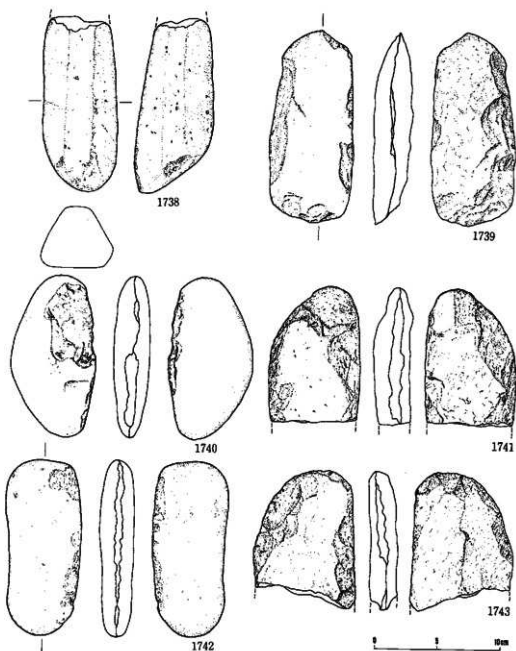
No	地点・層位	器種	大きさ(最大): mm			重量g	石材名	特徴・備考	図
			長さ	幅	厚さ				
1725	B I e, VI層	磨石 I 類	150	97	63	1.091	鹿枝野實中粒凝灰岩 G12	横断面 1×115mm	
1726	I III d, I 層	"	130	71	40	540	鹿枝野實中粒凝灰岩 G12	" 10×61mm	
1727	O III b, O・I 層	"	160	91	46	960	礫石安山岩 An 2	" 7×99mm	
1728	B I d, VI層	"	(137)	69	70	(660)	礫石安山岩 Hn 1	" 幅24mm, おずかに凸になる	265
1729	E IV-13 住埋土	"	174	73	60	1.029	礫石安山岩 An 2	" 14×127mm	"
1730	D Ⅱ-3 住埋土	"	116	78	55	(720)	礫石安山岩 An 3	" 2 面, 幅9×13mm	
1731	B I f, VI層	"	(128)	64	56	(64.1)	礫石安山岩 An 2	" 幅19mm	265

第381図 磨石(3)



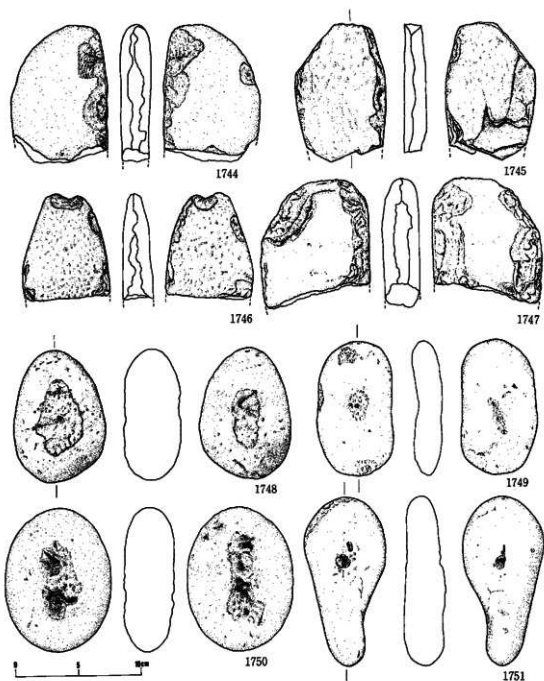
No.	地点・層位	磨石の種類	大きさ(最大): mm			重量g	石材名	特徴・備考	図号
			長さ	幅	厚さ				
1732	GⅢ-7 住居土下位	磨石I類	161	54	56	803	阿蘇石(安山岩)	縦断面30×136mm, 幅広11	285
1733	OⅢ1, I層	"	158	64	38	549	阿蘇石(安山岩)	" 12×105mm, 両面に小剣部痕	
1734	BⅠc, VI層	"	183	72	52	790	鹿放翁實中乾煎灰岩	G12 " 2面, 17×100mm・15×103mm	
1735	CⅢf, VI層上部	"	(180)	65	65	(435)	阿蘇石(安山岩)	An2 " 2面, 幅11・27mm	
1736	PⅢd, O・I層	磨石	(141)	59	30	(408)	濃緑色細粒凝灰岩	G14 両面縁を使用。両面も平滑で、一面に磨痕。	285
1737	BⅠe, VI層		153	72	51	758	鹿放翁實中乾煎灰岩	G12 " 22×124mm	"

第382図 磨石(4)



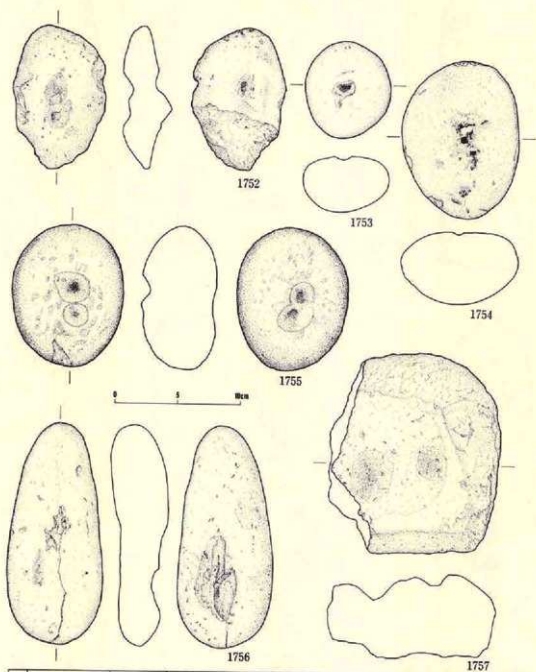
No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量g	石材名	特徴・備考	図順
			長さ	幅	厚さ				
1738	FIVe ₁	磨石I類	(137)	60	62	(665)	鹿嶋岩雪中軟礫灰岩	G12 横断面2面。幅19・21mm	265
1739	B I e ₁ VI層	打製石斧	(183)	(67)	(30)	500	輝石砂岩	Fls 1 表面は自然面	266
1740	D III区表層	半円状扁平打製石斧	129	68	29	331	輝石安山岩	An 2 1面縁のみ周面加工。残く小さな割傷	※
1741	F IV c ₁ IV層	※	(107)	73	(31)	(318)	輝石安山岩	An 2 片残存。周縁加工。刃部幅11mm	※
1742	D III e ₁ O-1層	※	140	80	27	366	輝石安山岩	An 2 1面縁のみ周面加工。残く小さな割傷	※
1743	F III e ₁ O-11層	※	(130)	81	22	(340)	鹿嶋岩雪中軟礫灰岩	G12 片残存。周縁加工。刃部幅4mm	266

第383図 磨石(5)・半円状扁平打製石器(1)



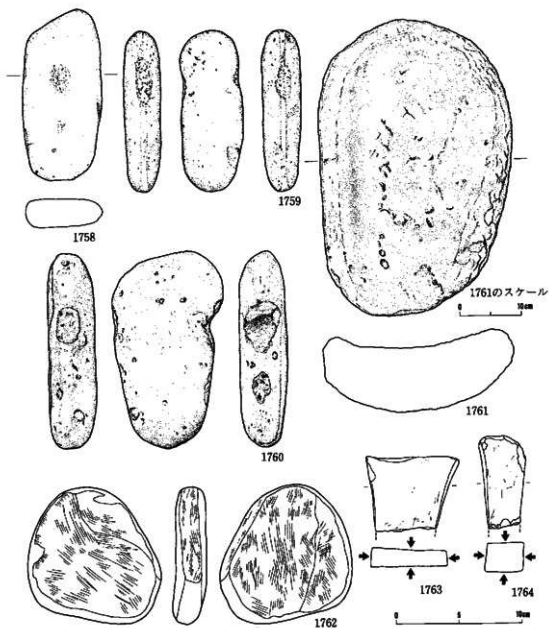
No.	地 点・層 位	器 種	大 小 (最大) : mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図 録
			長さ	幅	厚さ				
1744	B i d. VI層	半円状扁平打製石器	(110)	77	25	(330)	流紋岩質中粒凝灰岩 G12	片断存。1側縁を両面加工。	266
1745	C ii-4 住層上	"	(110)	72	18	(215)	輝石安山岩 An 3	片断存。両側縁を加工。刃部鋭い。	
1746	C iii a, O層	"	(88)	70	28	(210)	流紋岩質中粒凝灰岩 G12	片断存。一側は欠入。	266
1747	B ii a, 埋層上面	"	(102)	87	30	(423)	流紋岩質中粒凝灰岩 G12	片断存。両縁両面加工。	"
1748	B ii a-2 住層直上	凹石	104	73	46	443	輝石安山岩 An 5	両面が凹む。	
1749	B iv a, VI層上面	"	107	60	22	192	輝石安山岩 An 2	両面が凹む。鋭い凹みが顕著。	266
1750	E iv i, VI層	"	115	85	40	510	輝石安山岩 An 2	両面が凹む。鋭い凹みが顕著。	267
1751	B ii-1 住層上	"	134	66	23	330	輝石安山岩 An 3	両面に3箇所ずつの凹み。	

第384図 半円状扁平打製石器(2)・凹石(1)



No.	地点・層位	器 種	大きさ(最大) mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1752	G IV-5 住居土	凹石	(114)	72	33	(273)	輝石安山岩	An 2 表面2個、裏面1個の凹み	267
1753	B Ⅱ-1 住居土	〃	77	66	45	256	輝石安山岩	An 3 浅い凹み1個	
1754	FIVE, 1層	〃	126	93	57	1,008	斑紋物質中粒凝灰岩	G 12 浅く小さな凹み、側縁の一部磨面	
1755	C Ⅲ-9 住居土上部	〃	114	89	60	781	輝石安山岩	An 3 両面に2個ずつの凹み	267
1756	C Ⅲ区表層(C Ⅲ E,付注)	〃	176	76	43	740	斑紋物質中粒凝灰岩	G 12 両面が凹む	〃
1757	1 IV-2 住居土直上	〃	159	(134)	67	(1,960)	輝石安山岩	An 3 深く大きな凹み2個	〃

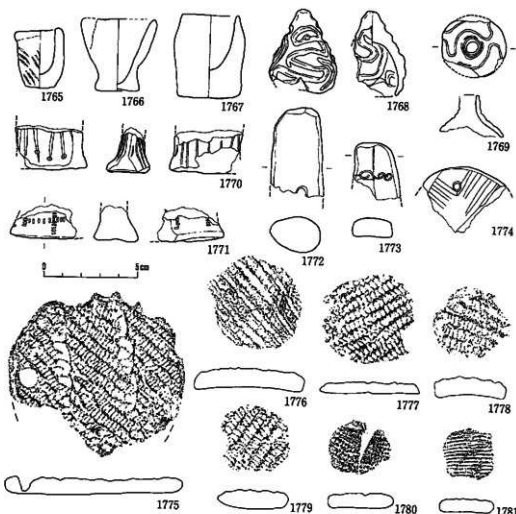
第385図 凹石(2)



No.	地点・層位	器名	大きさ(最大): mm			重量g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1758	C II b. 10層上部	凹石	135	83	22	330	浜坂府内中乾炭灰石	G 12	
1759	H III-4 # 住堀土下層	敲石	128	49	31	279	野石安山岩	An 2	287
1760	H III-10住堀土	#	157	86	38	653	白色粗粒凝灰岩	G 6	同図様に打痕。
1761	F IV d. 71層上	石皿	475	308	103	21,020	角閃石質安山岩	An 1	完全
1762	B I d. 71層	砥石	189	105	23	320	成層黄泥状岩	Ry 4	断面が円面と1個縁にいろいろしい
1763	D II a. O層	#	(61)	74	15	(86)	白色粗粒凝灰岩	G 13	
1764	C II c. O層	#	(74)	35	23	(90)	白色粗粒凝灰岩	G 13	

S = $\frac{1}{4}$

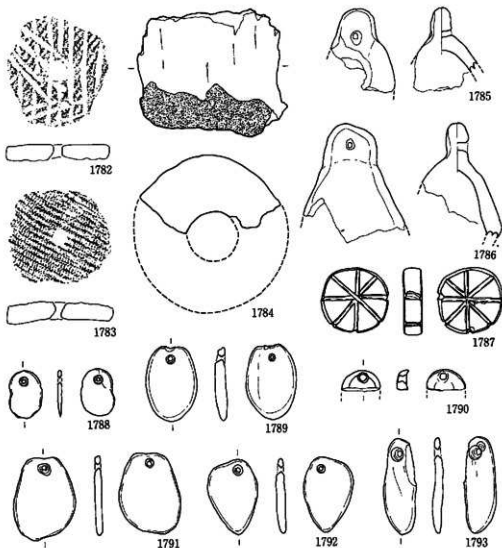
第386図 凹石(3)・敲石・石皿・砥石



No.	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm			重量:g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	高さ			
1765	FIV-9a 住層土	縄文土器	—	—	—	—	ミニチュア。高さ3.2cm・口	
1766	GIVc, V層上面	土器	—	—	—	—	高さ3.8cm・明赤褐色・ヘラズリとナデ	
1767	IVd, I層	—	—	—	—	—	高さ4.3cm・口・ヘラミガキとナデ	
1768	CIII-6 住層土	縄文土製品	長:44	36	—	—	無文・沈線	268
1769	CII-4 住層土下部	切斷面付蓋形土器	長:23	33	—	—	蓋部分。無文・沈線・小刺突・貫通孔	#
1770	CIIIa, O層	土器	高:24	(36)	23	—	胴部下面部。横く細い沈線文と小刺突文	
1771	FIV-9a 住層土	—	高:17	(36)	23	—	口部。直線竹管文	
1772	FIVa, I-II層	不明土製品	(47)	27	19	—	に深い黄褐色・明瞭な横線段ナデズリ・断面楕円形・貫孔	
1773	GIV-5 住層土	—	(29)	24	10	—	無文・入組状沈線文・黄褐色	268
1774	DIII d, O層	—	—	—	9	—	円筒状になる。管色・沈線文・貫通孔	#
1775	CIII-5 住層土下部	円筒状土製品	33	(36)	9	(78.0)	土器片利用ではない。ループ文・LR (O段多量)・線紋多量・略に小孔	#
1776	FIV b ₁₋₄ , VI層	—	50	57	10	38.8	—	#
1777	CIIIb, O層	—	53	47	6	19.7	縁辺打ち欠きと部分研削・中央の小孔を貫通 (両面から)・RL・線紋多量	#
1778	FIV-2 住層土	—	41	40	10	14.2	縁辺打ち欠き・線紋多量・RL (O段多量)・貫通孔	#
1779	B I d, VI層	—	38	37	10	13.8	縁辺打ち欠きと部分研削・RL (O段多量)・線紋多量	#
1780	CIII, O・I層	—	34	34	8	11.6	—・LR	#
1781	DIIIa, V層上面	—	30	29	7	8.5	縁辺部打ち欠き・凸辺方形気孔・L	#

第387図 土製品(1)

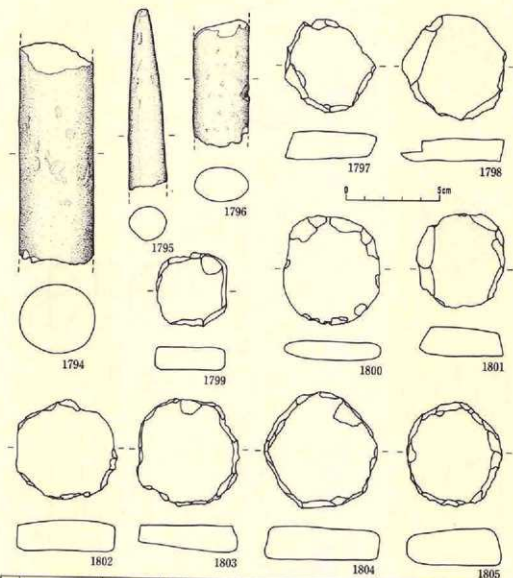
S = $\frac{1}{4}$



No	地点・層位	器 種	大きさ(最大):cm			重量g	特 徴	備 考	図版	
			長さ	幅	厚さ					
1782	C III-a 住居土上部	円筒状土製品	58	56	9	24.5	縁辺打ち欠き・中央の孔は側面から部転穿孔・沈蝕・11層1敷土層	288	#	
1783	B I a ₁ 1層	#	56	50	10	32.6	縁辺打ち欠きと研削・中央貫通孔・R.L (O線参考)・縦線多量			
1784	E III a ₁ デズ押し	碗形口	(67)	—	30	—	外径82cm・通風孔径28mm・伊直先端部黄褐色釉			
1785	I IV f. III-IV層	不明土製品	高: (43)	(30)	7	—	黄褐色・内外面ナグ・貫通孔・脚形土製品?土胎?	289	#	
1786	E III b ₁ 1層	#	高: (63)	(51)	9	—	にぶい黄褐色・内外面ナグ・貫通孔・半ばから断面・土胎?			
No	地点・層位	器 種	大きさ(最大):cm			重量g	石 材 名	特 徴	備 考	図版
			長さ	幅	厚さ					
1787	D III b, V層上面	無釉品	35	34	10	11.6	白色細粒凝灰岩	G13	両面放射状沈蝕・一部断面まで・朱塗り	288
1788	O III a ₁ 1層	有孔石製品	25	17	2	1.5	粘板岩	Ne1	表面研削・一端に小孔・両面部転穿孔	#
1789	P III a ₁ IV層	#	27	30	6	10.6	粘板岩	Ne1	断面・孔あけ跡じたと上部を断面調査	#
1790	B I a ₁ 1層	#	(11)	20	5	(1.2)	白色細粒凝灰岩	G13	片残・内外断面・裏面くぼむ・貫通孔	#
1791	P III a ₁ IV層	#	33	43	3	8.0	粘板岩(ルンツェルス)	Ne1	自然磨・一端に小孔・両面部転穿孔	#
1792	P III a ₁ IV層	#	27	40	6	8.0	粘板岩	Ne1	" " "	#
1793	D III a ₁ IV層	#	16	51	4	(5.2)	粘板岩	Ne1	一部欠・断面孔の位置を要している	#

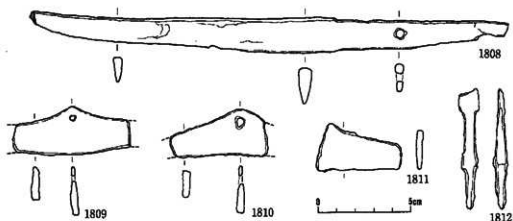
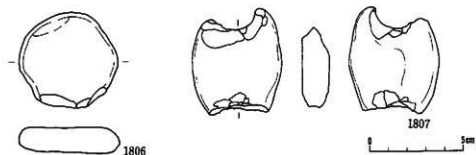
第388図 土製品(2)・石製品(1)





No	地点・層位	器種	大きさ(最大):mm 長さ 幅 高さ	重量g	石材名	特徴・備考	図録
1794	D III c, O層	石鏃	(118) 40 37	—	粘板岩ホルンフェルス Ho1	両端欠。研磨・新面円形	269
1795	B I 区盛り土	〃	(96) 21 18	—	粘板岩ホルンフェルス Ho1	一端へ細くなる。研磨断面円形	〃
1796	D III c, II~IV層	〃	(87) 29 18	—	粘板岩ホルンフェルス Ho1	両端欠。研磨・新面円形	〃
1797	B I d, I層	円盤状石製品	52 49 14	53.6	輝石安山岩	An2 縁辺打ち欠き	268
1798	B II-1 住居土	〃	56 55 12	54.7	輝石安山岩	An2 〃	〃
1799	B II e, I層	〃	40 37 12	32.6	白色粗粒凝灰岩	G13 縁辺一部に自然面残し、打ち欠き	〃
1800	B II-1 住居土	〃	57 51 9	46.1	輝石安山岩	An2 縁辺打ち欠き	268
1801	B II f, I層	〃	50 45 15	50.8	輝石安山岩	An2 〃	269
1802	B I b, O層	〃	55 52 16	74.0	輝石安山岩	An2 〃	〃
1803	B I c, I層	〃	57 56 14	76.0	輝石安山岩	An2 〃	〃
1804	E IV d, O層	〃	60 62 20	130.6	輝石安山岩	An2 縁辺打ち欠きと一部研磨?	〃
1805	B II e, O層	〃	55 51 20	100.6	輝石安山岩	An2 縁辺打ち欠き	〃

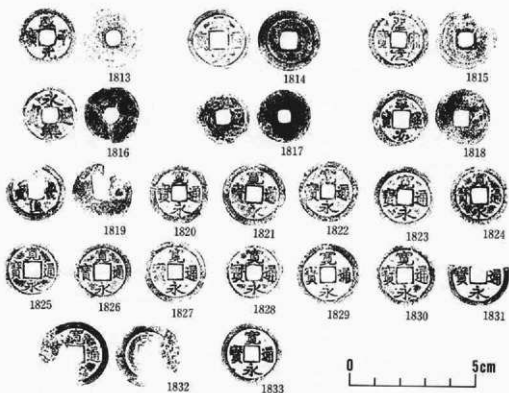
第389図 石製品(2)



No	地 点・層 位	器 種	大きさ(最大): mm			重量g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
1806	GIV a, I 層	円盤状石製品	51	52	14	54.5	白色粘板岩片	G13 縁辺大部分は自然面残し、一部打ち欠き	269
1807	B i f, Vc 層	石匙	57	48	14	43.3	輝石安山岩	An2 両端鋭いノッチ	#

No	地 点・層 位	器 種	大きさ(最大): cm			重量g	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
1808	B i f, O 層	小刀	(25.4)	19	7	(64.5)	両端わずかに欠。両面平直リ・縁鋭明瞭	269
1809	I IV f, O 層	火打金	(62)	25	4	(26.9)	山形。両端欠・貫通孔	#
1810	I IV d 5 II 層	#	(32)	24	4	(15.5)	#・#・#	#
1811	表層	#	(45)	—	3.5	(12.8)	#。一明かな破片	#
1812	F IV - e,	不明	64	幅: 18	5	(8.1)	根先欠・身・茎とも他に比べると短い。誰? 誰?	#

第390図 石製品(3)・鉄製品



No.	地 点 ・ 種 位	銘	直 径 mm	重 量 g	図 版
1813	I 組 d ₁	咸平元寶	23.8	2.55	269
1814	F IV f ₁	天聖元寶	25.0	3.35	#
1815	I 組 e ₁ 断出面	聖宗元寶	24.7	2.73	#
1816	C III j ₁ 日曆	永樂通寶	—	1.35	#
1817	D III b ₁	#	21.75	1.15	270
1818	D III a ₁ O 曆	平安通寶	(22.6)	(1.80)	#
1819	E II i ₁ 日曆	不明	24.2	(1.84)	#
1820	D III a ₂ 日曆	寬永通寶	24.3	2.87	#
1821	C III a ₂ 日曆	#	25.35	2.75	#
1822	不明	#	24.4	2.32	#
1823	D III b ₂ V 曆上面	#	25.0	2.50	#
1824	I IV f ₂ O 曆	#	23.55	2.58	#
1825	C III b ₂ 日曆	#	(23.1)	2.15	#
1826	P III e ₂ O ~ IV 曆	#	23.25	2.30	#
1827	C III d ₂ O 曆	#	25.6	3.73	#
1828	C IV i ₂ 日曆	#	23.65	(1.90)	#
1829	D III e ₂ 日曆下位	#	24.95	2.53	#
1830	D III b ₂	#	24.8	2.50	#
1831	D III b ₂ O 曆	#	24.4	(1.83)	#
1832	C III e ₂ 海防軍土(1 曆)	#	25.55	(2.00)	#
1833	C II a ₂ O 曆	#	24.65	3.70	#

第391図 古銭

れるであろう。

6. 土製品

点数は少ないが、縄文時代や平安時代・所属時期不明の各種の土製品が遺構内外から出土している。第387図・第388図のほかは該当する遺構の出土遺物中に掲載している。

(1) 縄文時代

円盤状土製品・垂飾品・鐔形土製品・土偶・器種不明があるほか、切断蓋付壺形土器やミニチュア土器を含めている。

a. 円盤状土製品

21点が出土し、13点を図示した。完形品は10点（48%）である。胎土や地文から、前期のもの9点と中期以降のもの12点がある。

前期：9点のうち完形品は4点である。8点は縄文土器片を打ち欠き、あるいはその後に周辺部を研磨して製品としている。平面形は円形に近いもののほか、楕円形気味のものがある。湾曲の強い胴部破片を利用しているものは3点である。直径が38～64mm（平均52mm）、重量が13.5～32.6g（平均20g）を測る。中央部に小孔を伴うものは3点で、両面から回転穿孔されている。ただ第387図1777は貫通していない。第387図1775は土器片を利用したものではなく、当初から円盤を意図した製品である。直径はかなり大型で、93mmである。ループ文を地文にし、表面中央部の一端に貫通していない小孔1個を伴う。大きさや形態の点で土器片利用のものと機能が異なるものかも知れないが、ここに分類した。

所属時期が明らかな第388図1782は縄文時代Ⅱ群1類（早稲田6類相当）のもので、1775もその時期かほぼ近い時期のものである。残る7点も植物性繊維を胎土に多量に含み、1775と同様の時期が考えられる。該期の遺構ではDⅢ-8住居跡から1点出土している。

中期以降：植物性繊維を胎土に含まないことや地文・焼成から中期以降のものとして推定できるのは12点である。すべて土器片を利用し、周辺部を打ち欠き、あるいはその後に研磨して成形している。平面形はほぼ円形のものが多いほか、方形・多角形・凸凹長方形がある。直径が30～60mm（平均43mm）、重量が6.7～38.8g（平均17.8g）である。中央部に小孔を伴うのは第388図1783だけで、両面から回転穿孔されている。

該期の遺構では晩期初頭のBⅡ-2・BⅡ-3の2棟の住居跡から1点ずつ出土している。また所属時期は特定できないが、EⅣ-107落とし穴から1点が出土している。

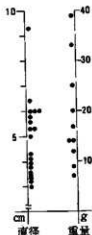


図12 円盤状土製品
計測値分布図

b. 垂飾品

晩期初頭のBⅡ-3住居跡から1点が出土している(第88図234)。平面形は楕円で、外面が凸、内面が凹の面になっている。長軸方向の中軸線に2個の小孔を伴い、沈線による文様が描かれるほか、朱が全体に塗られている。住居跡に共伴するものである。

c. 鐔形土製品

第387図1768である。沈線による文様が無文地に描かれた後期前葉十腰内Ⅰ式期のものである。

d. 土偶

第387図1770・1771の2点はともに下端を含む破片である。沈線文や竹管文による文様、器形からは後期初頭～前葉のものと推定される。

e. 器種不明

第86図216・第387図1773・1774の3点がある。216は縄文、1773は細い沈線文が表面に施文され、形状がやや似ている。1774は円盤状の製品の破片である。浅い沈線による文様が表面に施され、一端に小孔を伴う。216は晩期初頭のBⅡ-2住居跡から出土しており、同時期のものであろう。

f. 切断蓋付壺形土器

第387図1769は小型の切断蓋付壺形土器の蓋部分である。沈線による文様が無文地に描かれた後期前葉十腰内Ⅰ式期のものである。

g. ミニチュア土器

図化できたのは第387図1765だけである。後期または晩期に属する。

(2) 平安時代

紡錘車・土玉・円盤状土製品・土鈴・轆の羽口のほか、ミニチュア土器をここに含める。

a. 紡錘車

EⅢ-1住居跡から出土した1点だけである(第160図483)。

b. 土玉

CⅢ-5とHⅢ-10の2棟の住居跡から1点ずつ出土した(第113図330・第239図637)。ともに中央部に小孔を伴う完形品である。

c. 円盤状土製品

GⅢ-5住居跡から1点が出土した(第203図573)。回転糸切り痕を残し、周辺部が再調整された坏Ⅰ類の底部を利用し、周辺を打ち欠いてほぼ円形に仕上げている。

d. 轆の羽口

完形品はなく、破片や細片がすべてであるが、遺構から29点、遺構外から30点が出土してい

る。平安時代の住居跡・住居状遺構では、13棟から1点ずつ、1棟から2点、1棟から4点、あわせて15棟から19点が出土している。15棟は97棟の15%に相当する。同時代のピットでは1基から2点が出土し、あわせて21点が平安時代に属する。1,807gと多量の鉄滓が出土したEⅢ-1住居跡は4点、1,706gの鉄滓が出土したEⅢ-3住居状遺構は1点を出土し、出土状況からは鉄滓とともに廃棄されたことが推定できる(EⅢ-1住居跡で確実なもの1点)。遺構外はL面に8点(27%)、M面に22点(73%)が分布する。M面でもJ区から南、そしてH面からは出土していない。もっとも多いのはM面のEⅢ区で7点、次いで同面のFⅣ区で4点がある。EⅢ区に多いことは上述の2棟の住居跡・住居状遺構が存在することに関連するかもしれない。

一周し、形状を良く知ることができる例は第132図365・第218図593・第327図864にある。それ以外で計測値が推定可能な個体も含めると、外径が68~108mm(平均86mm)、通風口径が29~47mm(平均35mm)、器壁厚が16~42mm(平均25mm)を測る。もっとも長いものは15cmの残存である。また593は他に比べると大型である。炉側先端部を残すものは先端が細く、他端が太いという一般的な形態を示す。先端が溶解して青黒色に変質し、発泡したガラス質になるものが多い。365や593は鉄滓が付着している。

出土状況が特異なものが2例ある。HⅣ-6住居跡(平安時代)はほぼ中央に小ピットを伴う。ピットは壁や底部が焼けて還元状態を示している。第241図642は炉側先端部が一周する程度の残存であるが、ピットの埋土に突き刺さった状態で出土している。HⅣ-152焼土はHⅣ-55ピット(平安時代)の埋土上面に形成された現地性の焼土で、炉側先端部を含む864はそこに突き刺さって検出された。2例は出土状況から推定して単なる偶然の出土とは考え難い。前者の例は岩手県関沢口遺跡や宮城県沼崎山遺跡の例と比較して、鍛冶施設とすることができるピットからの出土である。後者は鉄滓3点137gが焼土中から出土していることも考慮に入れる必要があらう。

羽口のカマド支脚への転用例はDⅡ-4住居跡にある(365)。同住居跡のカマド崩壊土中からは第132図364・365が出土している。調査時は押し潰された状態の羽口とみていたが、接合・復元の結果、方形の断面をもつことがわかった。接合しないが同一個体であろう。幅は外径が95~110mm、内径が68mm±(364)である。胎土や硬さも羽口とは異なり器種不明としておく。

e. 土鈴

FⅡ-1住居跡(平安時代)から1点が出土している(第172図507)。鈕の上半は欠くものの、一文字形の透し穴の側縁が下端に確認できる。球形の小型のものである。第388図1785・1786は遺構外からの出土である。いちおう土鈴かと推定したもの、確実な点は不明である。とくに1785は色調や焼成などの点で縄文時代の鐺形土製品なのかもしれない。

f. ミニチュア土器

数は多くないが、土師器のミニチュア土器が平安時代の住居跡やピット・遺構外から出土している。図示できたのは5点である（第34図75・第66図147・第252図668・第387図1766・1767）。

(3) 時期不明

第387図1772は遺構外から出土した。断面が不整楕円形状の細長い製品で、折れている部分の中央部に小さな貫通孔を伴う。にぶい黄褐色で明瞭なヘラケズリ痕が両面に残る。

7. 石製品

縄文時代に属するものを中心に、遺構内外から出土しているが、種類・数量とも多いものではない。第388図～第390図のほかは該当する遺構の出土遺物中に掲載している。

(1) 縄文時代

円盤状石製品・有孔石製品・垂飾品・石棒・石剣・石錘がある。

a. 円盤状石製品

遺構内から2点、遺構外から9点が出土し、9点を図示している（第389図1797～1805）。すべて完形品で、円形・凸辺方形・不整多角形状などの平面形を示す。直径は40～62mm（平均54mm）、重量は32.8～120g（平均66.8g）である。周縁の加工は、打ち欠くだけのもの6点、部分的に打ち欠く以外は素材のままのもの4点、打ち欠いたあと一部を研磨するもの1点である。石材は安山岩9点、凝灰岩2点である。

該期の遺構からは出土していない。遺構内の2点は晩期初頭のBⅡ-2住居跡と重複するBⅡ-1住居跡（平安時代）からのものである。遺構外では7点がBⅠ区・BⅡ区からの出土である。晩期初頭の住居跡群が占地するところに集中することから、同時期との関連が推定できるであろう。

b. 有孔石製品

遺構から1点（第321図849）、遺構外から6点（第388図1788～1793）が出土している。1790を除いた6点は、楕円形や長方形・不整形の小型で薄い円盤を素材にし、両面からの回転穿孔による小孔を一端に伴う。石材は粘板岩5点、凝灰岩とホルンフェルスが1点ずつである。1790以外は、遺構（OⅢ-105落とし穴）からのものを含め、H面のOⅢ区・PⅢ区からの出土であり、前期前葉～中期初頭？の土器群と強い結びつきを示す。それに対して1790は先の6点とは形状が異なるとともにBⅠ区からの出土であり、晩期初頭の時期のものと推定される。

c. 垂飾品

第388図1787が遺構外から出土している。軟質な白色細粒凝灰岩を素材にし、全面を研磨加工して円形で扁平な製品にしている。中心で交差する4本の線が両面に刻まれ、半数は側面までおよぶ。朱が全体に塗られている。

d. 石棒・石剣

石棒と推定される3点が遺構外から出土している(第389図1794~1796)。1795は一端を含むが、残る2点は両端を欠失している。断面は、1794・1795が円形、1746は楕円形である。1795は一端へ次第に細くなっていく。石材はすべてホルンフェルスである。出土地点や層位からは時期が特定できない。また石剣と推定される小破片1点が晩期初頭のBⅡ-3住居跡から出土している。

e. 石鏢

第390図1807がBⅠ区から出土している。扁平な亜円礫の両端に挟りを入れていた。石材は安山岩である。

(2) 平安時代

足形石製品と有孔石製品があり、すべて住居跡からの出土である。

a. 足形石製品

2点(第38図97・第183図530)がある。530はFN-6住居跡の掘り方埋土から出土した。人間の右足がモチーフで、足首に相当する部分にいくぶん不確実な点があるが、97との比較から完形品と考えられる。幅広い面取りによって甲や足首を表現し、側面からの刻みによって5指を作り出している。97はHN-2住居跡の床面直上からの出土である。破損品であるが、530によく似た形状と作風である。足首から甲にかけての部分が残存し、足首の上端にもケズリが認められる。530に比べるとやや細かなケズリがみられる。石材はともに白色細粒凝灰岩で、軟質である。

530は掘り方埋土からの出土という点ではFN-6住居跡構築時あるいはそれ以前のものであることが確実である。97の存在ということを考慮に入れ、また縄文時代の造形感覚と比較すると2点は平安時代に属するものと考えて間違いないであろう。

b. 有孔石製品

JN-1住居跡から1点が出土している(第54図129)。足形石製品と同じく白色細粒凝灰岩を素材にする。平面形が長方形、大きさが31×46mmで、扁平である。両面から回転穿孔された小孔1個をほぼ中央に伴う。JN-1住居跡は縄文時代の遺物をまったく出土していない。平安時代のものと考えてよいであろう。

8. 金属製品類

(1) 遺構外出土の鉄製品

62点の鉄製品が遺構外から出土している。分布はL面42点(68%)・M面18点(29%)・H面

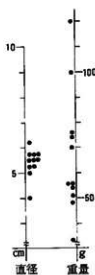


図13 円盤状石製品
計測値分布図

2点(3%)である。M面のK区からH面のO区の間150mから出土していない。

平安時代の遺構からの出土例のように時期を特定できないうえ、破片が主であるために器種を明らかにできないものが39点(63%)と多い。図示は5点にとどめ、推定も含めた器種別の点数を示す次のようになる。

刀子5点・小刀1点・鎌1点・目釘式手鎌1点・釘(現代)4点・角釘4点・鉄鏝(平安時代?)1点・火打金3点・轡1点・楔形鉄製品1点・環状鉄製品1点

図示例(第391図1808～1812)のうち、1808は長さの点で小刀として分類しておく。1809～1811は山形の火打金であるが、すべて破損品である。形態や本遺跡での遺構・遺物の所属時期を考慮すると平安時代か中世のいずれかのものと推定できる。1212は本遺跡の他の鉄鏝の例と比べると頸部が短い。鏝あるいは鑿の一種と考えておく。

(2) 平安時代の遺構出土の金属製品について

平安時代の遺構から出土した金属製品には鉄製品と銅製品がある。ただし銅製品はⅠⅢ-1住居跡のP3から出土した薄い銅板の小破片1点と古銭1点があるだけなので記載を省略し、本項では鉄製品について述べることにする。

1. 遺構数と数

住居跡92棟のうち、鉄製品を出土した住居跡は32棟(35%)で、87点の製品がある。また2基のピットから2点が出土した。主なものの集成図は図14～図17に示した。以下で使用する番号は集成図のものである(一部は挿図番号と遺物番号で示している)。

2. 器種別の記載

(1) 鋤あるいは鉄先

DⅢ-5住居跡から1点が出土した。ほぼ完形品で、身幅は14.4cmである。

(2) 鎌

4棟から4点が出土した。3は完形で、土井義夫が分類したC類に相当する(土井, 1971)。1や2も原形を推定できる。第23図31は先端部を含む部分が残っている。先の土井分類の小型のものに相当することが考えられる。

(3) 手鎌

手鎌とした器種には2型がある。一つは目釘をもつもの(目釘式手鎌)、一つは両端を折り返すもの(装着式手鎌)である。前者は「穂摘み具」や「穂切り具」、「摘み鎌」、「手鎌」などさまざまな呼び方をされているものである。本書では、小川貴司が仮称する目釘式手鎌(小川, 1980)を採用している。後者については類例を探すことができなかったが、形態や大きさに注目し、手鎌と推定した。あわせて13点ともっとも多い器種である。

a. 目釘式手鎌: 7住居跡から11点が出土した(5～10)。そのうち、HN-2住居跡から3

点、GⅢ-5a・IⅢ-1の各住居跡から2点ずつである。完形、あるいはほぼそれに近いものは4点である。長さは8.3~11.7cm、最大幅は1.6~2.9cmである。刃部中央付近が磨り減って背部方向へ内湾する例のほかに、5や第246図658のように外湾気味になるものがある。目釘が残るもの5点、木質部が残るもの3点がある。木質部が残るもののうち、10は住居跡内の砂層まで掘り込んだ深い貯蔵穴の底にあったために遺存状態が良好で、これまで知ることのできなかった柄の部分の復元できる。両端の木質部の断面形はほぼ三角形で、裏面の一部を欠いているが、目釘頭部を含めた最大厚は30mmである。右手でもって体のほうに折り返した場合、薬指と小指が切れないように木をかぶせている。一緒に出土した9も木質部の多くが残っているものの、空洞化が著しい。

b. 装着式手鎌：IⅢ-1住居跡から2点が出土している(30)。30は一端を欠いているが、刃部は両端で狭くなり、一方へほぼ直角に折り返している。しかし、折り曲げた部分の先端を欠くため、実際の長さは不明である。同住居跡からは折り曲げた一端を含む破片がもう1点出土している(第246図3001)。類例を探すことはできなかったが、形態や大きさ・刃部の作りが目釘式手鎌に類似することから装着式の手鎌と考えた。

(4) 刀子

12住居跡から15点が出土した(22~29)。完形あるいはそれに近いものは4点と少ない。全長が13.7~15.8cmのもの3点、19.8cmのもの1点、刃部長は6.6~7.6cm4点、11.1cmが1点である。柄が残るものは5点である。25は丸柄である。また24は焼けている。

(5) 紡錘車

6住居跡から7点が出土しているが、1点は形状や長さ・太さから紡茎と推定したものである(11~16)。紡輪が残る6点の直径は4.8~6.1cmである。紡茎の径は0.4~0.6cmである。完形品がないために紡茎の長さは不明であり、もっとも長い16は22.3cmである。

(6) 鉄鎌

7住居跡から10点が出土している(17~21)。完形品は4点である。BⅠ-1住居跡では3本がまとめて床面から出土し、2本が完形品、1点は両端を欠いている。小川(1980)が仮称する長頸鑿根式、長頸尖根式がともに3点である。欠失により形状が不明なものもそのいずれかに属するものと考えられる。全長がわかるものは、長頸鑿根式3点は13~15.8cm、長頸尖根式1点は12.7cmである。莖被と茎との境に段をもつものが6点、もたないものが2点、不明が2点である。

(7) 鉈

2住居跡から2点が出土している(36・37)。ともに完形品である。36は鉈が明瞭で断面が三角形の両刃である。裏面には浅い溝を伴う。刃部全体が湾曲し、刃先にとくに著しい。37は全

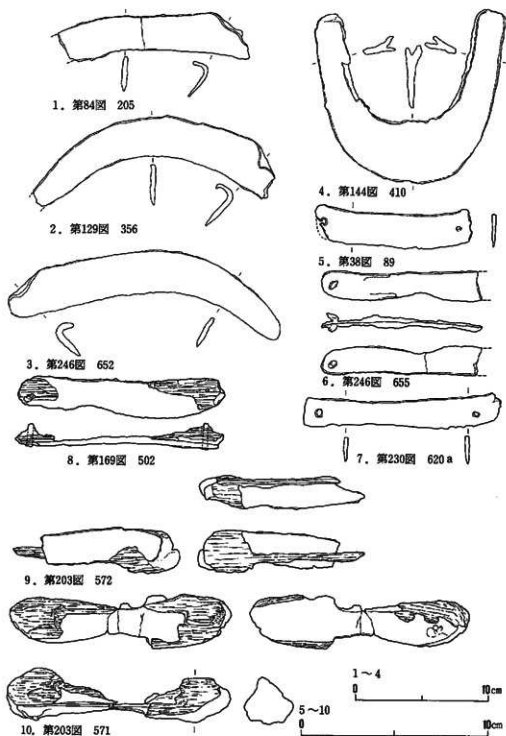


図14 平安時代鉄製品集成図(1)

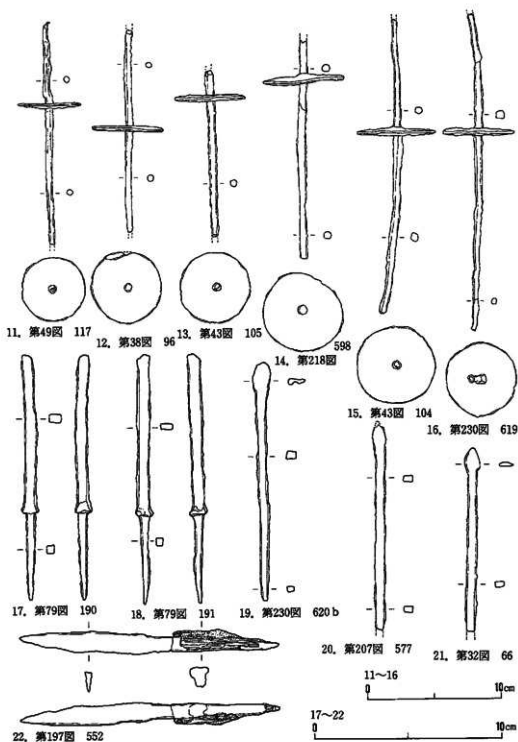


圖15 平安時代鉄製品集成図(2)

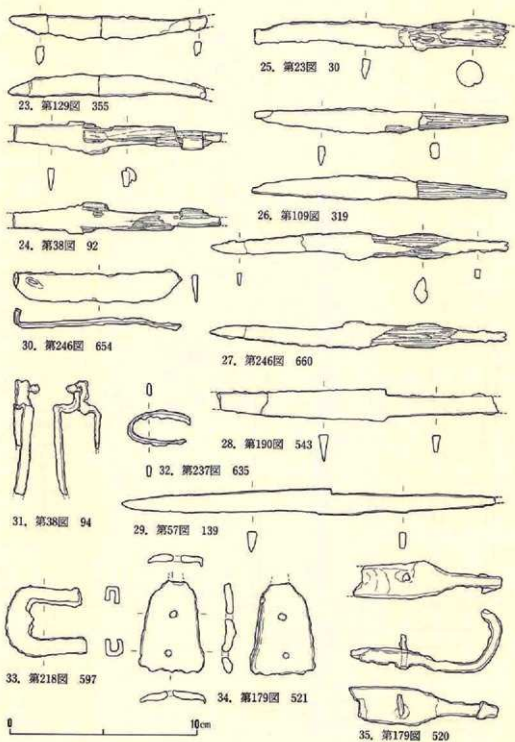


図16 平安時代鉄製品集成図(3)

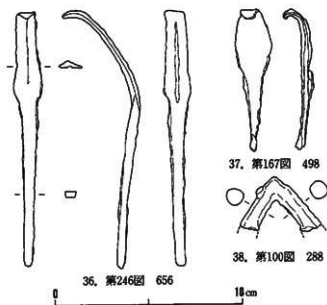


図17 平安時代鉄製品集成図(4)

には釘状のものが食い込み、曲がっている。県内では太田方八丁遺跡（志波城跡）や力石Ⅱ遺跡などから出土している。

(10) 刀装具

1住居跡から1点が出土している(33)。青森県島海山遺跡の鎧(小川, 1980)。とされている例に類似する。

(11) 環状鉄製品

2住居跡から2点が出土している(32)。締金具と考えるが、どのような器種に用いたのかはわからない。

(12) 釘

3住居跡と1ピットから5点が出土した。すべて角釘で、3点は折頭式である。

(13) その他

器種不明のものが12住居跡・1ピットから24点出土している。38は器種不明である。第141図401はやや内湾する板状のもので、縁が残ることからみて、銅の可能性がある。第218図596は断面が長方形の棒状のもので、両端へしだいに細くなっていく。両端を欠くが、刺突具の一種と考える。そのほか、断面が長方形の細い棒状のもの、断面が正方形の細長い棒状のものがある。後者の一部は釘の可能性もある。また、丸棒状のものなどは紡錘車の紡茎の一部の可能性もある。

長に比べると刃幅が広く、刃先が大きく湾曲している。鎧は不明瞭である。

(8) 鞍金具

1住居跡から2点が出土している(34・35)。セットになるものである。類似のものは宮城県宮下遺跡にあり、鞍金具としているのを参考にした。岩手県鴻ノ巣館遺跡や宮地遺跡、秋田県高向市館遺跡にも類似の製品がある。

(9) 鐙子状鉄製品

1住居跡から1点が出土している(31)。つまみ部の頭部

3. 住居跡からの出土状況

32棟の住居跡、2基のピットから87点が出土している。1点が出土しているのは14棟(44%)、2基(100%)、2点出土は6棟(19%)、3点出土は7棟(22%)、4点出土は2棟(6%)、5点・8点・16点出土は各1棟(3%)である。5点出土のCⅡ-4住居跡の器種の内訳は、刀子2点、鉄鏃1点、不明2点、8点出土のHN-2住居跡は、目釘式手鏃3点、刀子2点、紡錘車・鋸子状鉄製品・釘が各1点である。出土層位や残存状況からみて、直接その住居跡に伴うものではなく、廃棄されたものの可能性が高い。16点が出土したIⅢ-1住居跡の器種別点数は、鏃1点、目釘式手鏃、装着式手鏃・刀子・釘が各2点、鏃1点、不明6点である。この住居跡は焼失を受けている。床面～床面直上からは鏃1点(完形)、目釘式手鏃2点(ともに一部欠失)、装着式手鏃1点(一部欠失)・刀子2点(1点は完形、1点は破片)、釘2点(完形)、その他2点が出土している。すべてが住居跡に伴うとはいえないかもしれないが、鏃と2種類の手鏃が共伴する可能性があることは、それらの機能や用途を考えるうえで重要であろう。

(3) 鉄滓

a. 遺構外

53点2,006gの鉄滓が出土している。重量は、最小が2.9g、最大が260gで、1個あたりの平均は37.8gになる。分布は、一段低いA区とB区を除いたL面がもっとも多く31点(58%)1,110g(55%)、次いでM面が18点(34%)628g(31%)・H面が4点(8%)268g(13%)となる。次に述べる平安時代住居跡からの出土例と同様、分布が広範囲にわたる特徴をもつ。

b. 遺構内

236点9,699gの鉄滓が縄文時代以外の各種遺構から出土している。ここでは平安時代の遺構から出土した例に限定して記述する。

住居跡からの出土例は量の多少や出土層位を問わなければ37棟(40%)から出土し、165点7,379gを測る。最小1gの小片から最大700gまでとバラツキがある。それらの分布は次のようになる。

①出土住居跡：L面11棟(30%)、M面24棟(65%)、H面2棟(5%)の分布を示し、M面に多い。しかし、各面での検出棟数に対する比率は、L面が52%、M面が36%、H面が50%となる。平安時代の住居跡が存在するが鉄滓を出土していない大区画は24区画中BⅠ・FⅡ・FⅢ・KN・LN・PⅡの6区画(25%)と少ない。出土量の多少を問題にしなければ、分布域の広さということが特徴的である。

②出土点数：出土点数別の住居跡棟数は、1点が16棟(43%)、2点が5棟(14%)、3点が7棟(19%)、5点が2棟(5%)、6点が1棟(3%)、8点が3棟(8%)、10点・19点・49点が各1棟(各3%)である。1～5点が30棟(81%)、6～10点が5棟(14%)で、11点以上

は2棟(5%)と少ない。19点が出土しているのはDⅡ-1住居跡、49点はEⅢ-1住居跡である。

③出土重量：1棟あたりの出土重量は、最小が3g(GⅢ-3住居跡)、最大が1,807g(EⅢ-1住居跡)である。100g単位の棟数分布は、1～100gが23棟(62%)、101～200gが3棟(8%)、201～300gがなし、301～400gが6棟(16%)、401～500gが2棟(5%)であり、それ以上は601g(DⅡ-3住居跡)・757g(DⅢ-4住居跡)・1,807g(EⅢ-1住居跡)が各1棟(各3%)である。100g以下のうちでも、40g以下しか出土しない棟数は17棟と多く、46%を占めている。

④出土状況：最大の点数と重量を出土しているEⅢ-1住居跡の場合は埋土中への一括廃棄であることが出土状況から推定できる。竈の羽口の破片1点がそれとともに出土している。IⅣ-1住居跡は楕円形の小ピットP1を共伴する。P1は壁が良く焼け、埋土は少量の木炭を伴う赤灰色と灰赤色土である。竈の羽口の破片とともに鉄滓1個51gが出土している。P1は鍛冶に関連した施設の可能性も考えられる。以上のほかは埋土を中心に出土しているものである。

住居状遺構からの出土例はEⅢ-3住居状遺構にある。41点1,706gが出土している。最小が2.6g、最大が250gを測る。埋土中へ一括廃棄されたもので、竈の羽口の破片1点と一緒に出土している。

ピットからの出土例は3基(7%)にみられる。DⅢ-51ピットは2点11g、EⅢ-52ピットは1点16.1g、EⅢ-54ピットは7点53.9gが出土している。あわせて10点81gと少量である。3基はL面に存在し、後者の2基は焼土ピットとして分類したものである。

EⅣ-152焼土遺構は平安時代に属することが推定できる。竈の羽口(一周するが残存部は少ない)が焼土に突き刺さった状態で出土するとともに鉄滓3点137gが焼土中から出土した。

以上、平安時代の遺構から出土した鉄滓について記載した。住居跡からの出土点数や重量と遺構外からのそれらを比較してみると、分布数量がL面に多いのに気がつく。まず、住居跡からの数量が多い大区画名をあげるとEⅢ区・DⅡ区・DⅢ区の順になる。この3区で92点(56%)3,733g(51%)と半数を占める。遺構外を同様にとりあげるとEⅢ区・DⅢ区・CⅢ区の順になり、26個(49%)954g(48%)とほぼ半数を占める。両者にはEⅢ区とDⅢ区が共通項になる。EⅢ区にはEⅢ-1住居跡に次いで多くの数量を出土したEⅢ-3住居状遺構が存在し、2棟あわせると90点3,513gと全出土数量の31%と30%を占める。

これまで述べてきたことは生産の場を反映した分布を示すのではなく、廃棄の場としての傾向をあらわすものと考えられる。鉄滓の分析結果は付録に載せているが、鍛冶滓との結果がでている。鍛冶に関連すると推定される施設はIⅣ-1住居跡とHⅣ-6住居跡に伴う。2棟は

調査区の中央付近のM面に存在する。仮にその2棟を認めたとしても鉄滓の広範囲な分布を説明することはできない。もちろん調査区外になんらかの工房跡が存在する可能性があることを考えることはできる。それとともに住居内にあって機能が明らかにできない小ピットや焼土ほかの施設の検討も必要とされるのかもしれない。

(4) 古銭

古銭は遺構から7点、遺構外から23点が出土している。

遺構から出土した遺構名と種類・点数は次のようになる(第332図890~896、図版242)。

DⅢ-2住居跡(平安時代):永楽通宝1点、CⅢ-2住居跡(近世後半以降):寛永通宝1点、CⅢ・DⅡ・DⅢの各区の柱穴状ピット4個(時期不明):永楽通宝1点・寛永通宝4点。

以上のうち、DⅢ-2住居跡からの出土例890は検出面とほぼ同レベルの埋土最上部からのもので、共伴はしない。CⅢ-2住居跡例895は1号炉の底面からの出土であり、共伴資料と考えることができる。新寛永である。柱穴状ピットは所属時期が不明であり、出土例891・892~894・896との関連は不明である。出土例7点はL面からの出土である。

遺構外の出土面と区名・種類・点数は次のようになる(第392図1813~1833、図版270)。

L面:CⅡ区 寛永通宝1点、CⅢ区 永楽通宝1点・寛永通宝5点、CN区 寛永通宝1点、DⅢ区 永楽通宝1点・平安通宝1点・寛永通宝5点、EⅡ区 判読不能1点、EⅢ区 寛永通宝1点

M面:FN区 天聖元宝1点、IⅢ区 咸平通宝1点・聖宋元宝1点、IV区 寛永通宝1点

H面:PⅡ区 寛永通宝1点

それらの分布は、L面が17点(77%)、M面が4点(18%)、H面が1点(5%)である。そのほか、出土地点が不明な寛永通宝1点がある。L面が中心になる点は遺構からの場合と同じである。

種類別の点数は、咸平通宝1813・天聖通宝1814・聖宋通宝1815・平安通宝1818・判読不能(元豊通宝カ)1819が各1点、永楽通宝1816・1817が2点、寛永通宝1820~1833ほかが16点である。

上記のいくつかの初鑄造年をあげると咸平元宝が宋の998年、天聖元宝が宋の1023年、聖宋元宝が宋の1101年、永楽通宝が明の1408年である。ただ、永楽通宝2点は銅銭である。寛永通宝は古寛永6点と新寛永9点・不明1点がある。

『図録日本の貨幣1』(日本銀行調査局編)によると、平安通宝は〈その他の九州銭〉に分類され、「この銭文はまったく独創のものであり、模鑄銭の範疇のものとはいえない」としたあと、「伊東多三郎教授が、細川氏が豊前小倉を領有ののりの鑄銭について発表されたことから、その銭貨にこの平安銭をあてるべきではなからうかとする説が生まれ、一部に支持されつつある」

とされている。細川氏が豊前小倉藩に入封したのは慶長7年（1602年）のことである。

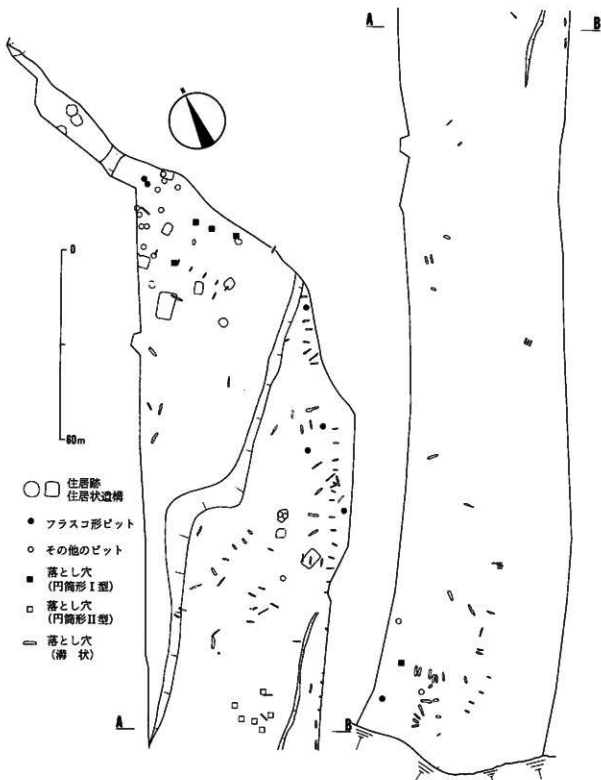


図18 縄文時代遺構種類別分布図

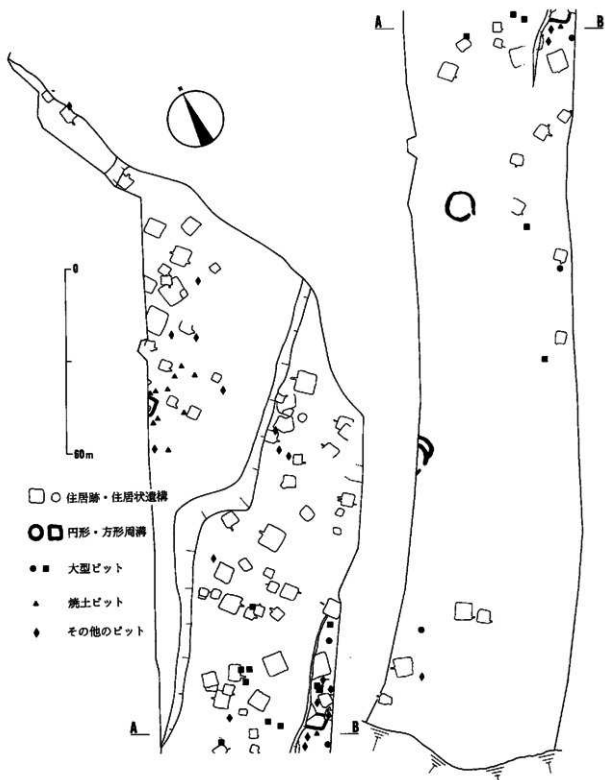


図19 平安時代遺構種類別分布図

Ⅶ まとめ(2)―遺構―

1. 住居跡

(1) 縄文時代

16棟の住居跡が検出されている(表4)。時期別の内訳は、早期2棟・前期6棟・後期3棟・晩期5棟である。

a. 早期

前期の日計式押型文期のDⅢ-12住居跡がある。平面形は隅丸台形状で炉は伴わない。柱穴状ピットはいくつか検出されているが、規則的な配列は示さない。L面の東寄りの部分に単独で検出されている。その東側は約20mで“地山”まで削削されている。仮に同期の住居跡がさらにあったとすれば、その部分である可能性が高い。また日計式押型文の分布はL面に限定さ

表4 縄文時代住居跡一覧表

No.	調査 次数	住居跡名	平面形	縦 横 m	床面積 ㎡	壁 高 cm	壁 溝	柱 穴	炉		時 期	備 考
									敷 敷	形 態		
1	2	DⅢ-12	隅丸台形状	2.4~2.7× 2.9~3.2	7.3	79	なし	不明	な し		早期前期	
2	2	DⅢ-11	凸出隅丸方形 (+張り出し部)	2.4×2.8 (2.8×2.8)	4.5	54	#	4主性+壁柱穴 か	#		(後)早期後葉	
3	2	CⅡ-3	(後)長方形	3.8× (後)6.1	(後) 20.5	24	(#)	(後)9本柱	1	地床が	前期前期	延が区域外
4	2	CⅢ-1	(後)方形	4.2×不明	(後) 8.8	29	#	(後)なし	1	円形ピット	#	部分的に削削
5	2	CⅢ-3	長方形	2.6×3.7	7.6	26	#	8本柱	なし		#	
6	2	DⅢ-3	#	5.6× (後)9.0	(後) 30.9	30	#	9本柱	#		#	意匠による削削が多い。
7	2	DⅢ-8	ややいびつな 長方形	2.4×3.8	9.1	55	#	6本柱	#		#	
8	1	GⅣ-2	やや不整な長 方形	3.8×5.7	15.7	21	#	8本柱	1?	方形状の くぼみ?	#	溝とし穴に切られた 中央部をがと推定
9	2	CⅢ-11	不整円形	2.0×2.3	2.8	13	#	壁柱穴	1	石囲いが	(後) 後期初期～前期	
10	2	FⅣ-7	不明	2.4~3.5 ×不明	不明	21	(#)	不明	1	土器埋没 部	後期初期～前期	削削いちじるしい。
11	2	FⅣ-8	(後) やや隅丸方形	2.5× (後)2.6	(後) 6.1	8	#	6個+α	1	石囲いが	(後) 後期初期～前期	埋没を伴う。
12	2	AⅠ-1	不明	不明	不明	41	不明	不明	1	敷路と推定	晩期初期	部分調査
13	2	BⅡ-2	横円形	(後) 3.2×3.6	7.4	42	なし	壁柱穴	1	地床が	#	
14	2	BⅡ-3	ややいびつな 横円形	3.2× (後)3.5	(後) 9.2±	11	一部	#	1	#	#	
15	2	BⅡ-4	(後) 円形～横円形	BⅡ-3より も小 さ	不明	8	#	#?	不 明		#	大部分をBⅡ-3 住居跡に切られて いる。
16	2	BⅡ-5	(後) 円形～横円形	不明	#	56	不明	不明	#		#	部分調査

れており、当時の居住域を推定させる。

日計式押型文期の住居跡の検出例は少ない。青森県八戸市売場遺跡1棟、岩手県馬場野Ⅱ遺跡2棟、宮城県松田遺跡3棟が知られているだけである。平面形は、売場遺跡が楕円形、馬場野Ⅱ遺跡が楕円形とほぼ円形、松田遺跡が隅丸長方形2棟と隅丸方形1棟である。床面積は、最小の馬場野Ⅱ遺跡№3住居址状竪穴遺構が3.6㎡、最大の売場遺跡第404号竪穴住居跡と松田遺跡(第2次)第1号住居跡(推定)が16.6㎡である。本遺跡のDⅢ-12住居跡は7.3㎡とほぼその中間の大きさである。住居跡内に炉を伴う例はない。柱穴は売場遺跡が壁柱穴を伴うほか、松田遺跡(第1次)例が約二分の一の壁寄りに小ピットが並ぶ。

この住居跡の年代であるが、本遺跡DⅢ-12住居跡は基本層序Ⅵ層に覆われていることがグリッド壁で観察できる。Ⅵ層は8,600±250B.P(大池ほか, 1970)の¹⁴C年代測定値をもつ南部浮石起源の黒色土と推定できる。もちろん、「地質」の項でも述べたが、再堆積ほかの問題を検討しないまま、厳密な年代指標層として考えることはできないが、およその指標にはなるであろう。また、馬場野Ⅱ遺跡でも南部浮石の下位に検出されたことは重要である。

DⅢ-11住居跡は先のDⅢ-12住居跡の南西約10mの所に、やはり単独で存在する。凸辺隅丸方形の小型の住居跡で、床面よりも高い張り出し部を西側に伴う。床面積は4.5㎡で、炉は伴わず、柱穴は主柱穴と壁柱穴の組み合わせ、あるいは壁柱穴だけと考えた。出土遺物が少なく、所属時期は推定になるが、埋土の層相と考え合わせると後葉早稲田4類期に入るものであろう。該期の土器(縄文土器I群6類)は早期のなかでは量的にもっとも多く、分布域はL面とM面の北部FⅣ区までに限定されている。この住居跡を中心にした半径80mの範囲ということになる。

該期の住居跡は現在のところ岩手県では知られていない。青森県では売場遺跡の5棟がある。

b. 前期

前葉早稲田6類期に属すると推定される住居跡が6棟検出されている。5棟がL面にあって南北約80m、東西約20mの範囲に集中する。残る1棟はそれらとはややかけ離れたM面のGⅣ区に存在する。

〈平面形〉すべて方形基調である。CⅢ-1住居跡が一部削剝されていて詳細が不明であるが、他はすべて長方形とすることができる。

〈規模・床面積〉CⅢ-1住居跡は床面積が不明である。残る5棟は推定も含めてであるが最小が7.6㎡、最大が38.9㎡、平均が18.4㎡である。最小と最大の比は1:5.1となっている。最大はDⅢ-3住居跡である。早期や前期前葉の住居跡が「大型住居跡」か通常のものかを区別するのは住居形式や内部施設の違いからではなく、相対的な規模の大小によってである(高橋ほか, 1981)。その規模に絶対値を設けることはできないが、該遺跡での相対性や他遺跡の

例との比較で考えるべきであろう。やや時期はさかのぼるが、岩手県下でもっとも古い時期の大型住居跡は二戸市長瀬B遺跡のBi03住居址である。早期中葉寺の沢式類似期のもので、隅丸長方形の平面形をもち、床面積は49.8㎡である。ちなみに同時期の5棟（重複を含めて）のうち、最小は4.6㎡で、最小と最大の比は1：10.8となっている。本遺跡例に時期的に近い二戸市中曾根II遺跡では「前期初頭に位置づけられるものが殆どであると思われる」住居跡が8棟検出されている。平面形は長方形が7棟、正方形に近いものが1棟で、床面積は最小6.3㎡、最大91.1㎡と報告されており、その比は1：15となっている。149号址は本遺跡のDⅢ-3住居跡に近い34.9㎡である。それと最大の193号址との比は1：2.6であるが、最小の161号址との比は1：5.5と本遺跡に近い値となっている。この二つの遺跡の例と比較して、本遺跡のDⅡ-3住居跡は必ずしも大

型住居跡に分類できない。未調査区が広がるということとを考慮すれば、相対的に大型の住居跡とするにとどめたほうが適切であろう。

〈柱穴〉CⅢ-1住居跡を除いた5棟は柱穴をもつ(図20)。CⅢ-1住居跡は削剝をうけている部分もあるが、柱穴をもたないものと推定できる。6本柱がDⅢ-8住居跡、8本柱がCⅢ-3・GⅣ-2の各住居跡、9本柱がDⅢ-3とCⅡ-3

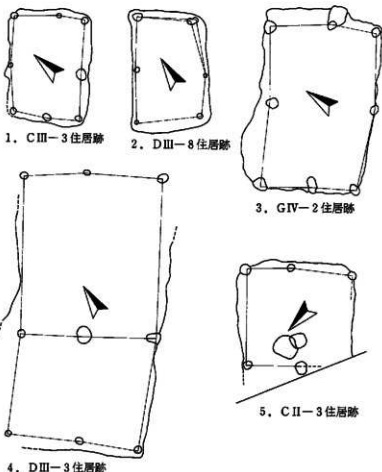


図20 縄文時代前期住居跡柱穴配置図

(推定)の各住居跡である。四隅に4個があることは共通し、6本柱の場合は長辺の中間の壁(隙)に1個ずつ、8本柱ではそれに短辺の壁(隙)に1個ずつ、9本柱は中央にさらに1個が加わる。柱穴のなかには壁を掘り込んでいるものも多く、特徴のひとつになっている。柱穴は個々にバラツキがあるものの一般的に深く、例えばGⅣ-2住居跡は39~73cm、DⅢ-3住居跡は38~54cmとなっている。

〈炉〉

住居跡内に炉を伴うのはCⅡ-3・CⅢ-1の2棟である。CⅢ-1住居跡は中央部と推定される付近にやや浅いがロート状の掘り込みを伴う炉があり、内部はよく焼けている。CⅡ-3住居跡は中央部と推定される付近の床面が焼けていることから地床炉と考えられる。また、GⅣ-2住居跡は床面の中央部付近を落とし穴に切られ、その部分に方形状の浅いくぼみが約二分の一ほど残っている。位置や形態、内部に少量の木炭が残ることなどからは、今村啓爾が縄文時代早期の住居跡を例にあげて指摘した「灰床炉」(今村, 1986)の可能性が高い。また先のCⅡ-3住居跡の地床炉の南側に一部が重なっている凸凹方形の浅い掘り込みも類似の施設かもしれない。

〈床面〉

内部の周辺部に浅い掘り方と床構築土を伴うDⅢ-8住居跡がやや軟らかいのを除いては非常に良く締まっていて硬い。

〈V層との関係〉

「地質」の項ですでに触れているが、V層との関係について再度記載する。DⅢ-8住居跡はⅥ層を切って構築され、V層に厚く覆われていることがグリッド壁で観察できる。またDⅢ-3住居跡の埋土上半を構成する埋土の一部は本層起源のものである。GⅣ-2住居跡の埋土上半には塊状の中礫浮石が含まれている。再堆積ほかの問題を問わないまま厳密な年代指標層とすることはできないが、少なくともDⅢ-8とDⅢ-3の2棟の例は中礫浮石降下以前に廃絶されていたと考えておきたい。中礫浮石の年代はさまざまに議論されているが、それについての一つの資料になるであろう。

〈出土遺物と所属時期〉

6棟とも出土遺物量は多くはない。とくに土器はすべて破片での出土である。前期Ⅱ群1類と10類を主体に、早期Ⅰ群が混入している。その点と前期の土器の分布状況や出土量から所属時期をⅡ群1類(早稲田6類相当)期と推定した。石器は、GⅣ-2住居跡から剝片石器とともに剝片・チップが多く出土しているのが特徴的である。磨石Ⅰ類が出土しているのはCⅢ-3とDⅢ-3の2棟である。半円状扁平打製石器が床面~床面直状にややまとまって出土しているCⅢ-1住居跡は磨石Ⅰ類を伴わないことや住居形式が他の5棟とやや異なることが注目

され、時間差あるいは系統差を考慮することができるのかもしれない。

〈他遺跡との比較〉

長方形で4隅とその中間に柱穴を伴うGN-2住居跡に類似したものは同じ浄法寺町五庵I遺跡にある(VIH20竪穴住居跡)。出土遺物が少なく、早期から前期と推定されている。早稲田6類期の住居跡とされている例は青森県表館遺跡IIに1棟がある。凸辺隅丸正方形のもので、床面積は4.8㎡と小型である。主柱穴2個と壁柱穴5個+αの柱穴配置になるとされているが、本遺跡例のような柱穴配置とは異なる。また、近い時期のものと思われる二戸市中曾根II遺跡の155号址は11主柱とされているが、壁から内側に入った位置に掘り込まれている。岩手県における前期初頭～前葉の住居跡の検出例は少なく、新たな資料になるであろう。また他地域の住居形式との系譜的なつながりが注目される。

c. 後期

推定を含めてであるが、3棟がある。L面にCⅢ-11住居跡、M面ではFN-7・FN-8の2棟が北寄り隣接して分布する。

〈平面形・規模・床面積〉

FN-8住居跡はやや隅丸の正方形と床面積6.8㎡が推定される。CⅢ-11住居跡は不整楕円形で、床面積は2.8㎡と小型である。FN-7住居跡は平面形が把握できず、規模・床面積とも不明である。

〈炉・付属施設〉

FN-7住居跡は斜位埋設土器を伴う炉、CⅢ-11・FN-8の2棟は石囲い炉である。CⅢ-11住居跡の炉は壁際の1個に他の構成礫とは異なった大きな板状の礫を立てるものである。同住居跡は大型の貯蔵穴を伴う。

〈時期〉

FN-7住居跡は斜位埋設土器、FN-8住居跡は埋甕を共伴する。ともに粗製深鉢形土器であるが、後期と推定できる。前者は折り返し状口縁をもつもので、初頭～前葉とすることができる。CⅢ-11住居跡の炉に類似するものは岩手県五庵I遺跡などに例があり、後期と推定できる。さらに本遺跡の後期の土器の時期と分布を考え合わせると、CⅢ-11住居跡とFN-8住居跡も初頭～前葉のなかでとらえて間違いはないであろう。

d. 晩期

この時期の5棟はL面でもいちだん低いAⅠ・BⅡ区に集中して検出された。完掘できたもの2棟、同時期の住居跡に切られて一部しか残っていないもの1棟、調査区域外へ出るもの2棟と検出状態は良好とは言えない。

ほぼ全体を知ることができる2棟は楕円形の平面形をもち、多くの壁柱穴を伴う。床面積は

7.4m²と9.2m²(推定)である。ともに中央部付近に地床炉がある。平面形が不明なAⅠ-1住居跡をのぞいた残る2棟も円形～楕円形になることが推定できる。

出土遺物から推定し、BⅡ-2・BⅡ-3の2棟は初頭の大洞B式期のもので、残る3棟もほぼ同時期と推定される。

以上、各時期の住居跡について記載してきた。早期はL面、前期はL面を主にしてM面の北半、後期はL面とM面の北寄り、晩期はL面でも一段低い面に居住域がある。そして、M面の南半からH面には住居跡は検出されていない。ただ、H面の南端の開析谷斜面には小規模ながら前期未葉～中期初頭?の包含層が形成されていることから、該当する時期の居住域が調査区の東側に広がっている可能性を指摘できるであろう。

(2) 平安時代

住居跡の事実記載の項目を中心に、若干のまとめとする。

a. 検出棟数について

住居跡は次のように数えている。住居の構築から廃絶までを1サイクルとし、再利用の痕跡を残さない場合はもちろん1棟としている。これは65棟(72%)を数える。拡張や貼り床・複数のカマドの存在ほかの理由から、新旧関係のある複数の住居が同一平面のなかに存在すると考えられる場合は、住居跡名のあとに小文字のアルファベットa・bを付け、CⅡ-4 a住居跡・CⅡ-4 b住居跡のように呼んでいる。それを1群とする11群22棟(24%)になる。そのほか、新旧関係のある複数のカマドがあるが、住居を再利用したことを確実に証明できないCⅢ-5・OⅡ-1・PⅡ-1の各住居跡、部分的な貼り床や複数のピットが存在するものの、同様の理由をもつHN-1住居跡、2基のカマドをもつが新旧関係が不明であることと貯蔵穴について不明な点があるGN-3住居跡の計5棟(5%)はそれぞれ1棟として数えている。その結果、合計92棟の住居跡が存在したことになる。なお、同一平面内における再利用を示す動きの具体的なことは次に述べることにする。

b. 重複

住居跡同士の重複は次のように分類する。

I. 全体重複：複数の住居跡が完全に重なり合う。典型は古期住居跡の全形を覆って新期住居を構築する場合である。拡張あるいは縮小による床面ほかの共有一再利用の形態を伴う例もここに含める。さらに、拡張や縮小を伴わない同一平面内での再利用もこの範疇で考えること

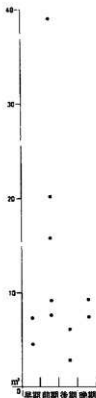


図21 縄文時代住居跡床面積別分布図

表5 平安時代住居跡一覧表(1)

調査 地区	住居跡名	平面形	規模	床面積	主軸方向	敷瓦・瓦葺	土間・土壁	開口方	カマド	煙道	土山灰	地層	備考
1	D1-1	方形(竪長)	3.6×2.0	不明	不明	(なし)	(なし)	×	不明 出土品3点	—	灰白色 少量	不明	見附跡
2	D1-1	方形(竪長)	4.4×2.0	■	S-24°-E	15~17	一部	○	(1) 併用(西側寄り)	IC 石積み	少量	(1)	V 見附跡
3	D1-1	不規則な方形・台形 (竪長)	4.1×2.0	■	N-40°-E	16~20	(なし)	×	(1) 併用と南側の間の	併わない	本小 やや多い	(2)	II 一般瓦葺
4	D1-2	方形(一部竪長)	不明	■	不明	23~28	一部	○	(不明)	—	不明	不明	II 大部分は瓦葺へ
5	D1-1	台形	5.0×3.6	25.8	N-30°-E N-40°-E	27~42	部分(4分)	○	1号：各階中央 2号：1号の南 4号：3号の南	IB IB IB	なし	2	■ 瓦葺へ
6	D1-1	やわいびつな方形	3.7×3.8	13.5(推)	N-50°-E	30	なし	○	3号：北側中央	IB IC?	不明	なし	■ 瓦葺へ
7	D1-4	隅角正方形	3.2×3.3	9.3(推)	S-30°-E	30~38	■	○	併用と南側の間の	IC?	■ 瓦葺へ	■	I D1-1往に切られ
8	D1-5	隅角正方形	3.5×3.5	25.8	S-42°-E N-42°-E	32~53	大部分	○	1号：南側中央 2号：北側中央	IC IA	■ 瓦葺へ	2	I 部分的に瓦葺
9	D1-6	台形	4.3× 4.2~4.9	17.8	S-34°-E	18~30	なし	○	併用中央と南側の間の	瓦葺のため不明	■ 瓦葺へ	1	I 部分的に瓦葺
10	D1-8	やわいびつな隅角正方形	2.5×2.5	4.7	N-12°-E	37~43	■	○	北側中央	■ 瓦葺へ	■ 瓦葺へ	1	II
11	D1-1	隅角方形	4.4×4.7±	不明	不明	15~26	(なし)	○	(不明)	—	■ 瓦葺へ	(不明)	II 瓦葺へ
12	D1-2	一部隅角の長方形	6.5×7.6	43.4(推)	N-20°-E	32~40	一部	■	(1) 北側中央	瓦葺へ出るた が不明	■ 瓦葺へ	(不明)	II 瓦葺へ
13	D1-2	長方形(竪)	不明	不明	不明	一部	一部	○	(不明)	—	■ 瓦葺へ	(不明)	II 瓦葺へ
14	D1-3	やわいびつな正方形 (竪)	3.2×3.3	7.7(推)	S-30°-E	29~35	(なし)	○	(1) 併用中央と南側の間の	JA 石積み	■ 瓦葺へ	(1)	II 瓦葺へ
15	D1-4	ほぼ正方形	2.4× 2.4(推)	5.2	N-57°-E	3	一部	×	1 北側中央	併わない	■ 瓦葺へ	なし	II 瓦葺へ
16	D1-1	隅角長方形	2.9×3.6	8.8	S-25°-E	32~35	ほぼ一貫	■	1 併用中央寄り	JA? 石積み	■ 瓦葺へ	1	II 瓦葺へ
17	D1-2	ほぼ正方形	7.0×7.5	45.9	不明	27~53	なし	○	併用中央と南側の間の	—	■ 瓦葺へ	なし	I D1-1往に切られ
18	D1-4	隅角正方形	3.5×3.5	9.3	N-47°-E	28~40	大部分	○	1 併用中央と南側の間の	IC	■ 瓦葺へ	1	I D1-1往に切られ
19	D1-5	いびつな隅角正方形(推)	3.2× 3.1~4.3	12.9(推)	S-47°-E	21~34	(なし)	○	(1) 併用中央と南側の間の	IC	■ 瓦葺へ	(1)	IV 一部を瓦葺に切られ

表 8 平安時代住居跡一覽表(4)

地区別	地目	平田部	傾斜部	水陸方向	位置	カマヤ	距離	面積	形状	備考
55	GIV-3	傾斜方部	3.9~3.4x 3.1~3.4	N-27°E N-47°W	○	なし	なし	8.5	IC	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
56	GIV-4	傾斜正方部	2.8x3.0	カマヤ主軸 方角S-10°E	○	なし	なし	6.4	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
57	GIV-5	傾斜正方部	3.1x3.1	N-47°E	○	なし	なし	7.7	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
58	GIV-6	やや傾斜の正方形	3.4x3.5	N-55°W (11~17)	○	なし	なし	11.5	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
59	GIV-7	やや傾斜の正方形	4.6x4.7	S-47°E 22~23	○	なし	なし	28.0	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
60	GIV-7a	GIV-7aと傾斜・河原坂		N-47°E	○	なし	なし	不明	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
61	HIII-2	やや傾斜の矩形状	4.3~4.8	S-17°W	○	なし	なし	18.2	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
62	HIII-3	方形(傾斜不明)	不明	不明	○	なし	なし	不明	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
63	HIII-4	やや傾斜の正方形	4.6x5.5	N-51°W	○	なし	なし	22.9(推)	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
64	HIII-4a	HIII-4aと傾斜・河原坂と測定		S-51°E	○	なし	なし	不明	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
65	HIII-5	やや傾斜の正方形	3.1x3.3	S-46°E	○	なし	なし	9.1	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
66	HIII-7	やや傾斜の東方部	4.9x5.1	S-47°E	○	なし	なし	18.0	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
67	HIII-8	やや傾斜の西方部	1.6~2.1 x2.3	N-55°E	○	なし	なし	4.3	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
68	HIII-9	傾斜矩形状	5.2~5.4 x 5.1~5.7	N-50°E (11~17)	○	なし	なし	25.2	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
69	HIII-10	やや傾斜の東方部	2.7x3.2	S-46°E (4~9)	○	なし	なし	7.7	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
70	HIII-11	傾斜正方形	7.8x7.0±	S-51°W	○	なし	なし	44.7(推)	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
71	HIII-12	方形(傾斜不明)	4.7x不明	N-47°W	○	なし	なし	不明	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
72	HIII-13	傾斜のはほぼ正方形	3.8x3.9	S-21°W	○	なし	なし	18.0	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。
73	HIII-14	方形(傾斜不明)	不明	不明	○	なし	なし	不明	なし	2番のカマヤの新田 GII-7を切る。

表 9 平安時代住居跡—覽表(5)

施設番号	施設名称	平面形状	規模	床面積	主軸方向	設置形態	建築	柱配置 柱間隔	張り方 骨組	カマド	煙道	扉の不 透火	水山式	分類	備考
74	I IV-5	隅丸方形	3.5×不明	不明	N-32-E	24-35	(なし)	○	(1)	北東壁北側部	IC	(1)	小壁	II	一部区域外
75	I IV-6	ほぼ正方形	6.1× 6.0-6.3	38.0	S-8-EW	-	なし	II-35	○	西壁中央と南壁との間	IC	1	(形状)	I	ほぼ西壁まで南側外周部
76	I II-1	わずかにいびつな正方形	5.1-5.4× 5.3-5.5	25.9	S-44-E	31-35	一部	III-35	○	西壁中央から南壁寄り	IC	4	なし	3	VI
77	I II-2	隅丸(凸凹)角方形	3.8×4.1	15.4	N-47-E	40-45	片	不明	○	北東壁南側寄り	IIA	1	形状	I	昭和初期、く、改修、心室も取り方で変
78	I II-3	隅丸方形	2.3×2.6	6.4	S-44-E	-	不明	なし	○	西壁中央と南壁との間	IIA	なし	形状	II	不明
79	I IV-1	隅丸方形(壁線不 明)	3.4×不明	不明	N-32-E	31	(一部)	(不明)	○	北東壁南側寄り	IIA	不明	小壁	3	II
80	I IV-2	隅丸方形	5.4×6.1	29.6	S-4-W	39-43	ほぼ一 面	II-35	○	西壁西寄り	IIA	1	小壁	3	II
81	I IV-3	隅丸のややいびつな方形	3.3×3.7	10.3	N-44-E	29-34	なし	なし	×	西壁中央から南壁寄り	IIA	なし	小壁	2	II
82	I IV-4	ほぼ正方形	6.0×6.6	39.6(値)	S-8-W	-	不明	II-35	○	西壁中央からやや南寄り	IIA	3	不明	不明	I bが実行。
83	I IV-1-a	隅丸(凸凹)角方形	4.8×4.6	13.3	N-54-E	21-24	一部	なし	×	北東壁中央と南壁との間	IIA	1	形状	IV	張り方と柱で、カマドで統一。
84	I IV-1-b	J IV-1-a位と相似・相似図			S-34-E	1位に同じ	不明	×	1	西壁中央と南壁との間	IIA	2	不明	(IV)	
85	I IV-2	隅丸角形状	3.1-3.4 ×4.1	10.0	S-37-E	29-35	なし	×	○	西壁中央	IC	なし	小壁	II	
86	I IV-3	隅丸角形状(枕)	4.2×4.4	18.4(値)	S-37-E	31-33	×	×	○	西壁中央と南壁との間	IC	1	小壁	II	
87	I IV-1	隅丸角形状	3.7-4.1× 3.4-3.9	12.0	S-37-E	33-37	×	×	○	西壁中央と南壁との間	IC	3	なし	VI	一部区域
88	I IV-1	隅丸角形状	3.1-3.3 ×2.8	11.3	S-37-E	8-37	片	×	○	西壁南側部	○	1	形状	2	II
89	O II-1	ほぼ正方形	5.4-5.8 ×6.7	26.2	N-10-W S-14-E	53-74	片	片	○	1階：西壁中央 2階：西壁中央からやや南寄り	IIA	1	形状	I	
90	O II-1	正方形	5.3×5.4	28.2	S-42-W	41-60	なし	2階柱	○	東壁南側寄り	IIA	なし	形状	I	
91	O II-2	やや隅丸の正方形	4.0×4.1	12.2	S-32-E	40-71	ほぼ一 面	なし	○	1	IIA	1	形状	I	
92	P II-1	いびつな角方形	3.1-3.3 ×4.1	11.8	N-10-W S-14-E	7-38	なし	なし	○	1階：西壁中央 2階：西壁中央からやや南寄り	IIA	1	なし	I	

ができるであろう。

II. 部分重複：複数の住居跡が一部分重なる。典型は時間的に先行する住居跡の一部を壊して新期の住居を構築する場合である。

表10は全体重複の住居跡の具体的な内容例をあげたものである。拡張例は3棟にみられる。C II-4 a 住居跡は4本柱であるが、1本を作り替えて新期のものになっている可能性もある。同一平面のなかに新旧のあるカマド4基を伴うほか、下位のC II-4 b 住居跡の上に貼り床をしていることからの推定である。D II-2 住居跡は2群の柱穴が検出され、三方へ拡張されたことが考えられる。また一部が調査区域外に出るため推定になるが、カマドは共有一再利用の関係にあるものかもしれない。G IV-1 住居跡は拡張のもっとも明白な例である。長方形の平面形をもつ古期G IV-1 b 住居跡を一方へ拡張し、ほぼ正方形のG IV-1 a 住居跡を構築する。

表10 平安時代住居跡重複例

番号	住居跡名	柱穴群数	拡張	カマド			貯蔵穴類			貼り床		床面積 ㎡	備考
				新	旧	不明	新	旧	不明	全面	部分		
1	C II-4 ^a _b	1?2?	二方	3	1		2			ほぼ 全面		25.0 13.5	
2	D II-2 ^a _b	2	三方か	1			—				○	43.4	一部区域外
3	F IV-1 ^a _b	×		2	1		1	1				12.7	
4	F IV-5 ^a _b	2		1			伴わない				○	42.7	
5	F IV-9 ^a _b	×		1	1		1	3		ほぼ 全面		11.7	
6	F V-1 ^a _b	—	?	—			—			全面 か?		—	区域外 柱穴伴う
7	G III-5 ^a _b	1		1	1		1	1			○	29.7	
8	G IV-1 ^a _b	2	一方	共有か			—				○	26.4 21.6	一部区域外
9	G IV-7 ^a _b	1		1	1		2	2		広範囲		20.0	2本柱
10	H III-4 ^a _b	2		1	1		—					22.9	
11	J IV-1 ^a _b	×		1	1		1	2			○	13.3	
12	C III-5	1		1	1		1	1?				25.8	
13	G IV-3	×				2	1		2?		○	8.5	
14	H IV-1	1		(1)			2	1	1		○	44.7	一部削制
15	O II-1	1		1	1		1+a					26.2	
16	P II-1	×		1	1		1					11.0	

柱穴は2個を再利用し、拡張部分に新たに2個を作る。一部が調査区域外に出るが、カマドが再利用の関係にあることが推定できる。床面積は21.6㎡から26.4㎡と4.8㎡の拡張になる。FV-1a住居跡は二分の一が調査区域外に出ることや削割されているため確実なことは言えないが、下位にある一回り小型のFV-1b住居跡を拡張して貼り床したことも考えられる。

次に拡張以外にみられる動きをあげる。①新旧関係のある複数のカマド+新旧関係のある貯蔵穴(FN-1住居跡)・②①+貼り床(FN-9・GⅢ-5・GN-7・JⅣ-1の各住居跡)・③新旧関係のある複数のカマド+複数の柱穴配置(HⅢ-4住居跡)・④複数の柱穴配置+貼り床(FIV-5住居跡)である。そのほか新旧関係のあるカマドを複数もつものの、柱穴配置が1群あるいはもたないCⅢ-5・OⅡ-1・PⅡ-1の各住居跡、複数のカマドと新旧関係がある貯蔵穴かと推定されるピットを複数伴うと推定され、一部に貼り床が施されているGIV-3住居跡がある。床面の中央部付近に貼り床が認められ、新旧関係のあるピットを伴うHN-1住居跡も表10に載せているが、柱穴配置が1群しかないことやカマドも1基しかない可能性が強いことから考えると必ずしも2棟の重複とは言えないのかもしれない。また、CⅢ-5住居跡ほかにも単にカマドの作り替えと考えることもできるのかもしれない。

以上の16棟(a・bの場合も1棟にしている)の住居跡に特徴的なのは、柱穴を伴う20㎡以上の住居跡が10棟で、床面積が不明なFV-1住居跡を除けばそれ以下のものとはほぼ2:1の比率になることである。また20㎡以上22棟のうち10棟(45%)が何らかの形で重複あるいは再利用されていることになる。これはそれ以下の床面積である住居跡47棟(計画可能棟数)に対する5棟(11%)に比べれば非常に高い比率といえる。住居跡の床面積が大きいということは単に容れ物としての容量が大きいということだけでなく、大小の差が住居跡の利用形態にもおよんでいる可能性があることを指摘できるであろう。

c. 平面形

正方形あるいは長方形が主になり、隅が丸味をおびた「隅丸」のものが多く、正方形と長方形の区別は、便宜的に、(長辺-短辺)÷短辺×100=xとし、xの値が10%以上を長方形、それ以下を正方形とした。単に、長辺-短辺の差が大きいものが長方形というわけではないが、50cm以上のものに10%を越すものが多い。20%を越すものは60cm差(21%)のFN-9a住居跡、70cm差(24%)のDⅢ-1住居跡、90cm差(20~29%)のHⅢ-4a・HⅢ-7・PⅡ-1の3棟、110cm差(27%)のGN-1b住居跡がある。これらはかなり長方形を示しているといつてよい。そのほかの形状はCⅢ-6住居跡のような台形やGⅢ-3住居跡のような台形状のものがある。また、単に方形としたものや不整形のものがある。

d. 床面積

床面積は、住居跡壁面の下端をプラン・メーターで3回計測し、その平均値を採用した。こ

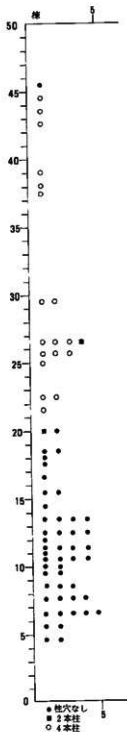


図22 平安時代住居跡
床面積別分布図

の場合、壁溝やカマドの存在は無視しているため、ほぼ掘り方の面積に近い。92棟中、計測できたのは、推定も含めてのことであるが、69棟（74%）である。残る23棟は調査区域外にまたがることや削制されていることなどの理由から計測できなかった。

図22は1㎡を最小単位とした分布図である。最小は4.3㎡のHⅢ-8住居跡、最大は45.9㎡のDⅢ-2住居跡である。最小と最大の比は1:10.7である。69棟の合計面積は1,174.4㎡で、1棟平均は17.0㎡となる。図23は床面積を正方形に置き換えた概念図である。ふたつの図からは29㎡台の2棟と次の分布域37㎡台の2棟の間が開くことに気がつく。その差は8.3㎡である。8.4㎡以下の住居跡が14棟（20%）もあることを考慮にいれ、まず37㎡以上の7棟（10%）を大型として分離した。次に30㎡以下20㎡以上の住居跡15棟（22%）を中型とした。20㎡を基準にしたのはこの面積以上の住居跡になると本遺跡では柱穴を伴ってくることによる。したがって、それ以下の47棟（68%）を小型とする。小型は最小4.3㎡と最大18.7㎡の比が1:4.3と大きく、さらに5㎡区分ぐらいの細分も可能と考えられるが、細分はしていない。ちなみに、最小と最大の比は、中型が1:1.5、大型が1:1.2となっている。そして小型:中型:大型の棟数の比率は大型を1とした場合6.7:2.1:1になる。

拡張例と床面積

拡張を伴う住居跡の作り替えて床面積が計測できる2例がある。GⅣ-1b住居跡21.6㎡は4.8㎡拡張され、26.4㎡のGⅣ-1a住居跡となる。4.8㎡の拡張はほぼCⅢ-8住居跡1棟分の床面積に相当する。またCⅡ-4b住居跡13.5㎡は11.5㎡拡張され、25.0㎡のCⅡ-4a住居跡となる。

規模別住居跡の分布

「住居をひと、もの、空間によって構成されるシステム」とする見解がある（石毛、1971）。住居を単純に人とももの容れ物として考えた場合、規模の大小差は内部に収容可能な数量の違いを第一に反映しているといえることができる。ここでは住居がもつ一般的な機能は問わないことにする。

大型の住居跡はL面のCⅡ区からM面のⅠⅢ区・ⅠⅣ区まで点在している。大型が分布しないのは、M面の南端のJ区・K区・L区、H面のO区やP区である。前者は住居跡の密集度の低いところで、5棟がやや距離を置いて南北方向に並ぶ。後者には4棟の住居があり、中型と小型がそれぞれ2棟である。それに対して、中型・小型は一見すると分布に明瞭な特徴は認められない。しかし、規模の大小の違いはそれぞれなんらかの有機的な関わりをもちながらある時期に同時に存在していると考えることができるであろうが、それは住居跡群をできるだけ時間軸にそう形で把握したあとのことになるであろう。したがって、床面積をもとにした住居跡群の動きはⅨ章で述べる。なお、図24は浄法寺町の9遺跡における床面積別分布図を比較のために掲載したものである。個別の遺跡ではバラツキがあるが、9遺跡を合計した分布パターンが本遺跡と近似することに注意する必要がある。

e. 主軸方向

主軸方向（主軸方位）は、カマドが設置された壁に直行する線が磁北と作る角度として計測している。したがってほぼカマド―煙道部方向に近似する。またHⅣ―4住居跡のようにカマドが隅に設置され、煙道部が相対する隅を結んだ線上に伸びる場合、主軸方向は求めることができない。したがってその場合はカマド方向を求め、主軸方向のかわりとした。複数の住居跡が同一平面内で重複することによって、あるいは作り替えによって複数のカマドをもつ場合はそれぞれについて主軸方向を求めた。その結果、81の主軸方向があることになる（図25）。

図をみると、30°以上の空白がある部分はN―10°―WとN―20°―Eの間（30°）、N―80°―WとS―40°―Wの間（60°）である。N―Eの間には15（19%）、E―Sの間には33（41%）。ただしEを主軸にするEⅣ―7住居跡を含む）、S―Wの間には10（12%）。ただしSを主軸にするHⅣ―6住居跡を含む）、そしてW―Nの間には23（28%）の主軸方向の分布がみられる。この状況は3つの面に共通する。そのなかでS―Wの間の10はL面にある1のほかはM面のH区からL区の間分布し、ある程度集中す

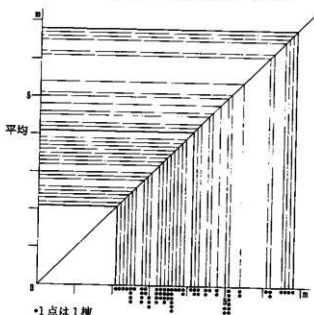


図23 平安時代住居跡床面積別分布の概念図

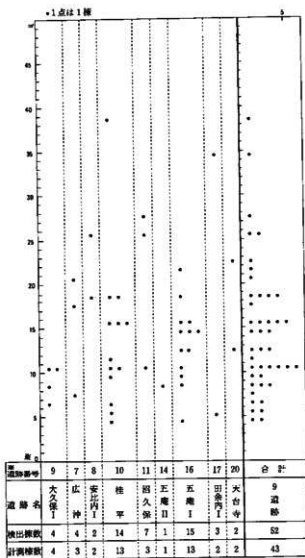


図24 浄法寺町の平安時代住居跡床面個別分布図

である。それぞれはフィールドでは肉眼での識別が比較的容易である。10数点を資料として採取し、5点を奈良教育大学三辻利一氏に分析・同定を依頼した（付属参照）。その結果、灰白色浮石は十和田a火山灰1点と不明1点、黄褐色火山灰3点は白頭山火山灰と同定された。このなかで問題になるのは不明の1点である。CⅢ-5住居跡の床面のごく一部の範囲にだけ分布していたものである。この住居跡は埋土を含めた残存状況は良好で、埋土最上部に灰白色浮石の薄層が小規模に広がること、灰白色浮石を含む柱穴状ビット数値に埋土上部から切られてい

る傾向がある。

主軸方向は住居跡を小期区分する際の重要な識別形質の一つと考えられることが多い（例えば原島，1977）。住居跡の小群区分と主軸方向の関係についてはIX章で後述する。

f. 埋土

埋土は個別の住居跡の重要な属性の一つであり、詳細な検討が必要であろう。しかし、埋土の層相から自然堆積なのか人間が介在することによって形成された堆積物なのか、あるいはそれらが複合したものなのかを判断することは埋没のメカニズムと過程を個別に復元できないかぎり困難なことといわざるをえない。「地質」の項でも簡単に触れているが、ここでは、平安時代の遺構の埋土に一般的に観察される2種類の火山灰について検討することから埋土について若干考えることにする。

2種類の火山灰とは、①灰白色浮石（NⅤ・7.5YRⅤ～Ⅲ/2周辺）、②黄褐色火山灰（2.5YRⅤ/2周辺）

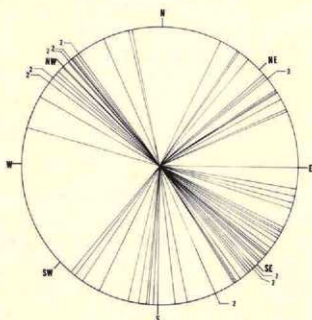


図25 平安時代住居跡主軸方向分布図

外では、埋土最上部に伴うCⅢ-5住居跡・DⅢ-2住居跡、埋土下部に伴うCⅢ-6住居跡・GⅢ-3住居跡、床面に広がるHN-6住居跡の例がある。GN-1a住居跡を除いた最大層厚は24cmで、粒径に違いがある葉理が発達していることが観察できる例がある。GN-1a住居跡は大小の塊、DⅢ-2住居跡は小塊が集合して層状になり、最上部を占める。

これらの層状の堆積物を降下時のプライマリイなものとするのかそれとも再堆積とみるのかではその位置づけがちがってくる。しかし、GN-1a住居跡例などは後者と判断できるものの、他の例についてはそのどちらとも判断できなかった。ただ仮に全部が再堆積としても後述するブロック状に含まれる例よりは時間的に先行することは確実であろうし、降下時との時間差もそれほど大きいものではないであろう。

以上の例はその占める層準によって時間的な差異があるものと考えられる。埋土の上位に位置するものほど時間的に先行し、下位にあるほど降下時に近いといえよう。しかし、個別の住居跡ではその埋没の過程で働く要因の違いがあることが予想され、単純に時間差におきかえていくことはできないであろう。層状に堆積する例は岩手県北部の古墳・奈良時代の住居跡から知られているが（二戸市堀野遺跡ほか）、本遺跡例はすべて平安時代に属する。

もっとも多いのは灰白色浮石が塊状に含まれる例である。壁下部または床面まで削刺されている例を除いては29棟に認められる。塊の大きさや含まれる量はバラツキがある。小さな数mm

ることを確認している。したがって十和田a火山灰とされる一群とは異なったものであることをある程度予想していた。以上のことをふまえるならば、不明とされた以外の灰白色浮石を十和田a火山灰と考えても大過ないものとする（本文中や一覧表では、肉眼による識別である点を考慮し、灰白色浮石として記載している）。

埋土中の在り方

灰白色浮石の埋土中の在り方にはいくつかの類型が認められる。もっとも顕著な例は層状の堆積物として確認できる場合である（図26）。15棟に確認され、図示した以

程度のものから10数cmのものがあり、量も、DⅡ-2やDⅢ-4の各住居跡のように埋土全体に多量に含まれる場合とHⅢ-2住居跡のように小塊が点在する場合とがある。その中間的な例があることはもちろんのことである。この例で問題になるのはどのような過程を経て塊状になるのかということであるが、そのメカニズムは不明である。

住居跡の掘り方埋土にこの塊が含まれる例はEⅢ-2住居跡をはじめ6棟に知られる。掘り方については別項で述べているが、その埋土は掘りあげた“地山”火山灰に黒褐色系の土を混入するものがほとんどであり、その逆が一部にある。いずれの場合も住居構築時には灰白色浮石が降下していたことを知ることができる。

以上が灰白色浮石についてである。もう1種類の黄褐色火山灰が埋土中に観察できたのは11棟である。すべて塊状にみられるもので、DⅢ-1・DⅢ-5住居跡でやや多くの量が認められるほかは少量である。そのうち灰白色浮石とともに存在する例は8例で、単独で存在するのはBⅡ-1・DⅢ-1・EⅣ-10の3棟の住居跡だけである。

次に2種類の関係に触れる。まず、住居跡よりも量的に2種類を多く含んでいるJⅢ-201円形周溝を例にあげる。この周溝は下位に灰白色浮石、上位に黄褐色火山灰が存在する。このような在り方は周溝ほど顕著ではないが、2種類の火山灰を含む住居跡例に共通する（ただしHⅢ-3住居跡は逆転）ことで、それはそのまま時間的な先後関係を表わしているものと考えることができる。黄褐色火山灰が灰白色浮石よりも上位にあることは苫小牧火山灰を提唱した町田 洋らが確認していることであり（町田ほか、1981）、本遺跡ではそれを再確認できる。

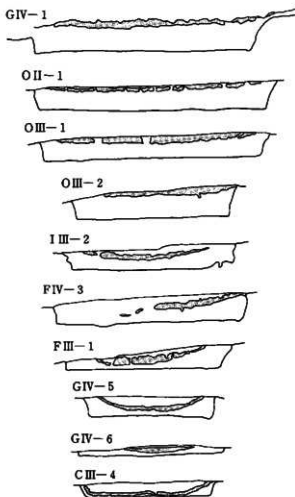


図26 平安時代住居跡にみられる灰白色浮石層

これまで述べてきたことから次のように類型化できる。

I. 灰白色浮石を層状に含む。さらに細分できる。

I a. 単層で葉層の発達が見られるものが多い。

I b. 単層であるが、大小の塊が集合しているもの。

II. 灰白色浮石を埋土中に大小の塊として含む。

III. 埋土だけでなく、掘り方埋土にも灰白色浮石を塊として含む。

IV. 灰白色浮石と黄褐色火山灰を含む。

V. 灰白色浮石を欠き、黄褐色火山灰を単独で含む。

このように、2種類の火山灰を鍵層にして5つの類型（細分では6類型）が可能である。それは住居跡の時間的な前後関係も表わすことが予想され、IX章で述べることにする。

g. 壁高

壁高は四つの壁で計測している。削剝を受けていることが明白な場合や計測不能な例(12棟)をのぞいた80棟の最大値をとると、最小3cm (DII-4住居跡) から最大96cm (HIV-1住居跡) までの幅がある。平均の深さは約47cmである。10cm単位での棟数は、10cm未満1棟・11~20cm3棟・21~30cm11棟・31~40cm20棟・41~50cm11棟・51~60cm19棟・61~70cm6棟・71~80cm6棟・81~90cm2棟・91~100cm1棟である。最大のHIV-1住居跡は床面積が44.7㎡と大型である。床面積が20㎡以上の住居跡は原則的に柱穴をもつ（「柱穴」の項を参照）が、削剝を受けていることや重複によって壁高が不明な5棟を除いた17棟は、最小が33cm、最大が96cm、平均は約59cmである。規模の大小と上屋構造の違いは壁高にも反映してくることが予想される。

h. 壁溝

壁際の床面を細く掘り込んだ溝は「壁溝」あるいは「周溝」と呼ばれている。92棟のうち、なんらかの形で伴うものは42棟（46%）、伴わないもの26棟（28%）、区域外へ出ることや削剝を受けていることなどによって有無が不明なもの24棟（26%）となっている。伴うもののうち、一周あるいはほぼ一周するもの17棟（40%）、二分の一程度6棟（14%）、部分的14棟（33%）、調査区域外へ出ることや重複して削剝されているなどの理由で詳細が不明なもの5棟（12%）である。

i. 床面と掘り方

床面の状態はField Cardの記載をもとにしている。硬い、あるいは軟かいは硬度計をもちいたものではなく、あくまで主観的で相対的なものである。一般的な傾向としては規模の大きな住居跡に床面が硬く、しかも貼り床をぼどこすなどの行為が見られる。ただし、貼り床は住居跡の再利用と関わることであり、単独の場合は必ずしもあてはまることではない。住居跡中央が硬く、壁に寄った周辺が軟らかいことは規模の大小を問わず一般的であるが、やはり規模

が大きなものによく観察できる。好例はいくつかあるが、なかでも焼失住居跡であるHⅢ-9住居跡を例にあげることが適当であろう。「焼失住居跡」の項で後述する。

住居跡の精査の最終行程は床面を掘り下げることである。逆にいえば住居構築の第1段階を確認することである。

住居の構築はまず平面形を決め、大小の凹凸をもった整穴を掘る。これを「住居の掘り方」(略して単に「掘り方」と呼ぶ。92棟のうち、掘り方を伴うもの77棟(84%)・伴わないもの7棟(8%)・不明ほか8棟(9%)となっている。掘り方は、中央部に比べると壁寄りの周辺部が深くなる傾向が一般にみられる。CⅡ-4・GⅣ-1の各住居跡のように、拡張される場合も掘り方を伴う。次の段階では掘り方は埋め戻されて床が作られる。その土を「掘り方埋土=床構築土」とした。掘り方を掘る際に出た“地山”火山灰をマトリックスにし、塊状の黒褐色土や黒色土を混入した土を使う。なかにはマトリックスになるのが黒褐色土という例もあるが稀である。このようにして作り出した床面を掘り込んで柱穴や壁溝・貯蔵穴をつくる、あるいはカマドを設置するなどの行程が次にくる。なお、住居構築の復元は千葉県山田水呑遺跡の報告書に詳細に触れられている。

j. 柱穴

柱痕跡と掘り方が識別できる例はHⅢ-4住居跡をはじめ7棟がある。柱痕跡の平面形は長方形あるいは長楕円形のものが多い。FⅣ-5住居跡やIⅢ-1住居跡では正方形や円形のものも認められる。掘り方の平面形は円形や楕円形気味のものが主で、一部が凸辺の正方形や長方形・不整形である。

掘り方の深さはだいたいバラツキがある。4本柱を例にあげれば、全体が深いIⅣ-2住居跡は73.6~109cm(1:1.48)、4個が平均的なOⅡ-1住居跡は32~38cm(1:1.2)、バラツキが大きいEⅣ-1住居跡では18.5~57cm(1:3.1)、GⅢ-5a住居跡は36.7~92.2cm(1:2.5)を測る。

柱穴の配置

住居跡92棟のうち、配置的に適切である柱穴を伴うものは24棟(26%)、柱穴を確認できないものは53棟(58%)、残る15棟(16%)は区域外に出ることなどによって一部あるいは全部について不明である。

柱穴配置には、①2本柱(2主柱)、②4本柱(4主柱)の二つがある。①はGⅣ-7a住居跡とOⅢ-1住居跡の2棟である。カマドが設置された壁の反対側の壁が作る二つの隅から内側に入った位置に2個の柱穴を伴う。②の例は22棟である。柱穴位置から3型に大別できる(図27)。

1型: 4個の柱穴が四隅から内側に入った位置にある。

Ⅱ型：2個の柱穴はⅠ型と同様に隅から内側に入った位置にあり、残る2個はカマドが設置された壁とは反対側の壁際にある。

Ⅲ型：Ⅱ型とは逆に、残り2個はカマドが設置された壁際に位置する。柱穴を結んだ線の内側にカマドがある例をⅢa型、その外側にあるものをⅢb型として細分した。

Ⅰ型は図27の図示例のほかにEⅣ-8住居跡が含まれることが推定できる。EⅣ-1とFⅣ-5aの各住居跡は1個がかなり壁よりに位置し、いびつな方形の配置になる。Ⅱ型との中間形と考えることもできるであろうが、細分はしていない。カマドの設置場所は壁のほぼ中央である。ただし、CⅡ-4a住居跡は1号カマドを伴う場合である。Ⅱ型はHⅢ-4住居跡など4棟がある。カマドの設置場所は壁のほぼ中央である。CⅢ-5住居跡2号カマドを伴う例もこのなかに含めるべきかもしれない。Ⅲa型はⅠⅢ-1住居跡をはじめ8棟、Ⅲb型はGⅢ-4住居跡1棟である。HⅢ-4b住居跡やOⅡ-1住居跡（2号カマド）もⅢa型と考えることができる。カマドはすべて壁中央から一方へ寄って設置される。以上のほかには重複を含めた削剝がひどく、カマドを含め住居跡の大部分を失っているHⅢ-3住居跡のように上述の3型に含めることができない例がある。

以上、配置形が不明な1棟をのぞいて3型に分類した柱穴配置についてみることにする。柱穴の作り替えはⅠ型のFⅣ-5住居跡、Ⅱ型のDⅡ-2住居跡・HⅢ-4住居跡、Ⅰ型・Ⅱ型のGⅣ-1住居跡にみられる。CⅡ-4住居跡も作り替えてある可能性は強いが断定はできない。それらのうち、DⅡ-2住居跡は三方、GⅣ-1住居跡は一方への拡張を伴う住居の作り替えである。HⅢ-4住居跡の場合は1個の作り替えとともにカマドを作り替えていることが考えられる。FⅣ-5住居跡の例は2個を作り替えている。そのほかの重複の柱穴配置の具体的なことは別な項に述べているからここでは繰り返さないことにする。柱穴配置型の動きを知ることができるのは、GⅣ-1住居跡のⅡ型→Ⅰ型、HⅢ-4住居跡・OⅡ-1住居跡のⅢa型→Ⅱ型の変化である。ただしOⅡ-1住居跡はカマドが作り替えられているだけである。CⅢ-5住居跡は2号カマドが壁中央にあることと柱穴位置から、Ⅱ型→Ⅲ型という推測がなりたつ。また、Ⅲa型のGⅢ-5住居跡は新旧2基のカマドを伴うが、柱穴配置は1群しかない。仮に古期の2号カマドの時期にも同様の柱穴配置であったとすると、カマドの設置された壁に直交する壁際に2個を伴うことが考えられ、岩手県北部では九戸郡江刺家遺跡や一戸町上野遺跡などに類例が知られている。

柱穴と床面積

柱穴をもつ例は削剝がいちじるしいHⅢ-3住居跡をのぞいては床面積が20.0㎡以上の住居跡に限られる。不明なEⅣ-8住居跡もそれ以上になることが推定できる。20.0㎡以上の住居跡は22棟あり、そのうち最大であるDⅢ-2住居跡は柱穴をもたず、GⅣ-7b住居跡は柱穴

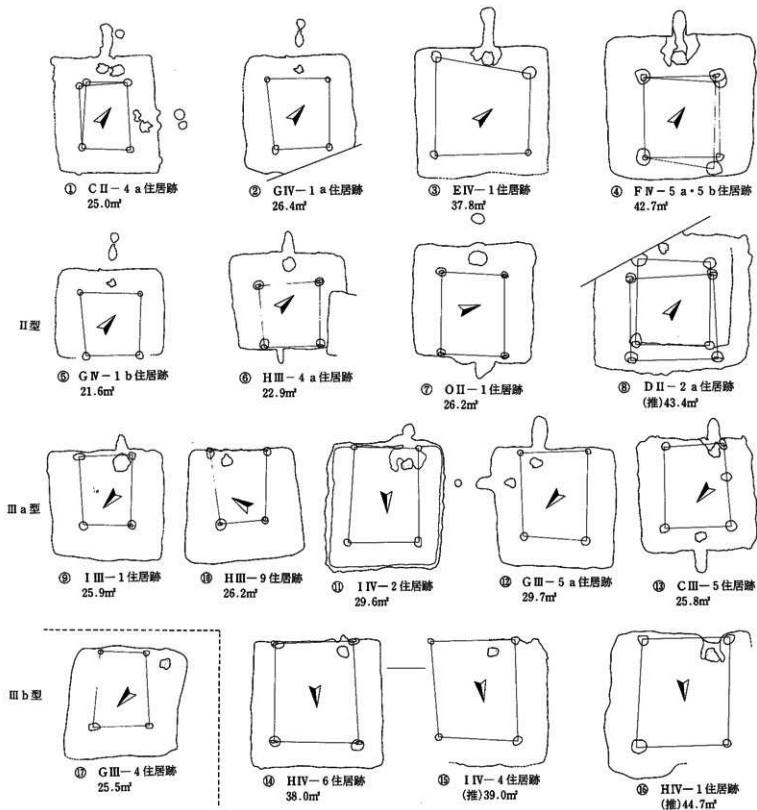


図27 平安時代住居跡柱穴配置圖

が不明である。他はすべて柱穴を伴う。①2本柱の2棟は20.0と26.2m²、②4本柱のうち、I型：25.0～42.7m²・II型：21.6～43.4m²・IIIa型：22.9～44.7m²・IIIb型：25.5m²となっている。以上の例は、「四主柱と無主柱は大体20平方メートルの竪穴面積を境にして使い分け」しているとする宮本長二郎の見解（宮本，1986）にほぼ一致するであろう。

k. カマド

92棟の住居跡を調査したが、全体を掘ることができたもののなかで明らかにカマドをもたないのはEN-11住居跡1棟である。この住居跡は最新期のVI群に分類できる。また、削刺されていることや調査区域外にまたがっていることなどの理由によってカマドの有無が不明なものは15棟である。残る76棟がカマドを伴う。現存するカマド数別の住居跡棟数は、1基=70棟、2基=5棟（CIII-5・FN-1a・GN-3・OII-1・PII-1の各住居跡）、3基=1棟（CII-4a住居跡）である。ここではGN-1a・1b住居跡ほかのように、カマドの共有一再利用が考えられる場合はそれぞれが1基をもつことにしている。また、CIII-5住居跡のように2基のカマドに時間的な前後関係があることが明確ながら、それに伴う住居自体の建て替えなどの動きがつかめない例はいちおうカマドだけの作り替えと推定し、2基を所有するとした。2基を伴うもののうち、新旧関係が明らかでないGN-3住居跡を除くと、いずれもCIII-5住居跡と同様である。3基を伴うCII-4a住居跡の場合でも同時存在でないことが残存状況から明らかである。

本体

カマドの数の合計は76棟83基である。本体が原形をよく保っている例は少数で、多くは側壁下部と火床部、あるいはそれらを覆う崩壊構築材から推定することになる。シルトや粘土質シルト・粘土・シルト質粘土・火山灰のほかに礫を用いるものは43基である。その他は崩壊が著しいことや削刺されているなどの理由により、礫を伴うかどうか分からないものが多い。本体が原形を比較的良好に保っている例は礫を伴うものに少数あり、住居跡名を列記すると、EN-1・GN-5・HIII-5・HN-3・KN-1の各住居跡である。構築礫は安山岩を側壁や天井部に使い、1～2個の砂岩を天井石に使う例が多い。燃焼部に支脚を伴うのは10例である。土師器壺を倒立させているCIII-5住居跡1号カマド、土師器壺の胴部下半や小型の壺を倒立させるCII-1・GN-6、土師器杯を使用するOIII-1住居跡、礫を埋置したHN-5・GN-5・HIII-8・IN-3・LN-1の各住居跡、フイゴの羽口を埋置したDII-4住居跡である。OIII-1住居跡は2個の杯を重ね、小型の礫の上に伏せた状態で使用している。またCII-1住居跡も礫との併用である。

煙道部

煙道部（煙出し部を含めての総称）は、①もつもの69基、②もたないもの8基、③削刺など

により不明のもの6基となっている。①を形態別数でみると、⑤掘り込み式46基(67%)、⑥くりぬき式(推定2基を含め)12基(17%)、③そのどちらともいえないその他の形態4基(6%)、④煙道部を伴うものの削割を受けていて下底部しか残存しないために③～⑥のどれに属するか不明のもの7基(10%)である。

⑤の掘り込み式では、掘り込みだけのもの26基に対して、礫や粘土・シルト・土器などが全部あるいは一部に使われて残存しているもの20基である。煙道部に礫を使っているのは、BⅡ-1・DⅡ-3・DⅢ-1・EⅣ-1・GⅢ-5a(1号カマド)・IⅢ-1の各住居跡である。EⅣ-1住居跡のほかは側壁の礫を粘土で被覆している。DⅡ-3やDⅢ-1の住居跡は煙出し部の部分にも天井石を伴う。また、GⅢ-5a住居跡1号カマドは煙出し部からほぼ完形の土師器甕が倒立して出土した。煙道部と煙出し部の境を礫や粘土で構状に作り出している例にはEⅢ-1住居跡やJⅣ-1b住居跡2号カマドなどがある。煙道部は粘土で天井部を作り、先端部は礫を4～6段積みあげて煙出し部にするのはOⅢ-1住居跡・OⅢ-2住居跡である。2棟は隣り合って存在する。粘土やシルト・火山灰を全体に使うのはEⅣ-6・HⅣ-3・HⅣ-5・KⅣ-1の各住居跡である。またBⅡ-1住居跡とPⅡ-1住居跡1号カマドは天井部の上に多くの土師器甕の大型破片が散布していたが、補強用に使われたものと考えられる。HⅣ-3住居跡は粘土で構築された側壁と掘り方とが明瞭に識別できる。HⅢ-2・JⅣ-3・LⅣ-1の各住居跡は掘り込み式ではあるが、急傾斜で立ち上がり、短いものである。またFⅣ-9a住居跡1号カマドも短い煙道部をもつが、先の3基

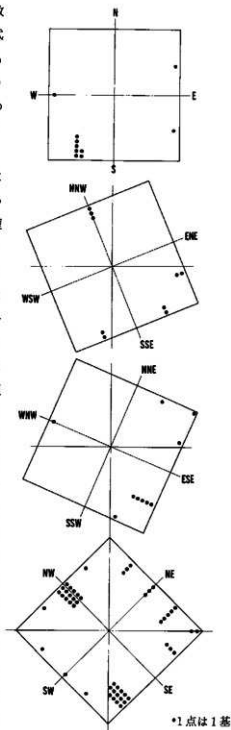


図28 カマド位置概念図

のような立ち上がりはせず、水平である。O II-1住居跡2号カマドは1号カマド構築時に壊されていることが考えられる。そのため確実な点は不明であるが、壁をわずかに掘り込んで直立する煙突形の煙道部をもつものである。

以上は掘り込み式である。⑤のくりぬき式ではC II-2 a住居跡3号カマドの煙出し部

上部に礫が用いられている。⑥のその他としたもののいくつかを次にあげる。I N-3住居跡の煙道部は明確な掘り込みを伴わない。底部を欠いた2個体の土器器臺を煙道部中部に使用し、一方の口縁部へ別個体の胴部下半を挿入している。先端部は砂岩が側壁を構築し、煙出し部としている。H IV-1住居跡は粘土質シルトが作る側壁の一部が台形状に壁を削り残した部分に残るが、掘り込みは確認できなかった。

煙道部の形態とその底面の勾配の概略を組み合わせた模式図が図29である。掘り込み式(I・II)は上り勾配のCが他の二つに比べてやや多く、くりぬき式(III)は下り勾配が多い。なお棟数は確実なものしか数えていない。

住居跡内におけるカマドの設置場所

カマドの設置場所を概念図で示すと図28のようになる(E IV-8住居跡など4棟は除外)。カマドとひとつの壁は、①壁のほぼ中央、②中央からどちらか一方の壁へ寄った位置(その多くはほぼ中間の位置)、③隅2カ所と5カ所が設置場所になる関係にある。それと住居跡のおおよその方向との関係を図化している。

ほぼ南北方向を向く住居跡は9棟である。そのうちO II-1住居跡は2基のカマドを伴う。もっとも多いのは南壁の7基、次いで東壁2基、西壁1基である。北壁に設置される例はない。西壁に設置されるO II-1住居跡1号カマドだけが①で、残りは②である。一辺が北北西によると、北北西壁に3基が設置され、①である。南南東壁4基、東北東壁2基で、すべて②である。西南西壁には設置されない。一辺が北北東に寄ると、10基のうち6基は東南東壁、3基は残る3つの壁に設置され、すべて②である。また北東隅に設置されるF IV-9 a住居跡1号カマドがある。一辺が北東に傾く住居跡は上述の3方向に比べて圧倒的に多い。北西壁と南東壁が各17基、北東壁が11基、南西壁が3基である。また東隅2基である。北西壁の17基のうち15基は①である。さらに北東壁・南西壁とも①の例があるのに対し、南東壁例はすべて②である。

カマド位置の動き

新旧関係のある複数のカマドを伴う場合や住居跡の重複によるカマド設置位置の動きを示し

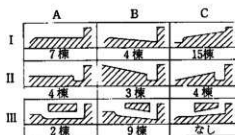


図29 煙道部分類模式図

たのが図30である。2基を伴うが新旧関係が不明なものはGⅣ-3住居跡である。矢印の方向へカマドが動いている。破線は推定、破線の両端に矢印があるものは動きが不明である。

カマドの設置位置と住居跡分類群の関係については後述する。

1. 焼失住居跡

焼失住居跡の認定

多量の炭化した材や草本類・焼土が住居跡内に分布する例がある。DⅡ-2 a・FⅣ-3・HⅢ-9・HⅣ-2・IⅢ-1・IⅣ-2の6棟の住居跡に認められ、焼失住居跡として間違いないであろう。分布や堆積の特徴は、焼土や炭化材が壁寄りの部分では下位に堆積土をとまって高い位置にあり、床面中央部へ向かって傾斜して下がっていること、それ以外ではほぼ床面～床面直上の層準に分布することである。焼土は、床面が焼けて赤色に変化している例はほとんどなく、堆積物として検出される。シルト質で、炭化材の上下に認められる。その量は個々の住居跡で多少があり、FⅣ-3・HⅢ-9の各住居跡が多量の焼土が広範囲に分布するのに対し、IⅣ-2住居跡では部分的にみられるに過ぎない。その起源は「本来竪穴住居の屋上にあった土」が火災に伴う倒壊によって堆積したものとする大川 清の指摘が説得力がある(大川, 1952)。大川は、同論文のなかで、床面に分布する石にも注目し、「これらの石は、屋上に土と共にあったものではなかろうか」としている。後述するFⅣ-1 a住居跡の場合、床面上に分布した巨礫には焼けているものもあり、大川の推測を裏付けるものであろう。

大川は「竪穴式住居跡の発掘によって、次の三つの場合に遭遇する」としている。

1. 床面の上に焼土を認めない場合。
2. 部分的に焼土のみのある場合又は、極く少量の炭化物と共に、部分的に焼土を認める場合。(この場合、焼土の量に多少の差があることは当然であり、多くは部分的に存在するものである。)
3. 床面の上に接して相当多量の炭化物があり、更にその上や周囲に多量の焼土を認める場

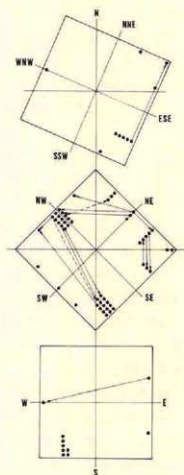


図30 カマド位置の動き

合。

先に述べたDⅡ-2 a 住居跡のほかの例はこの3に相当する。問題になるのは2の場合である。大川は、「2に対しては、火災に遭遇したものであろうと考えられる場合が多いが、時には、如何なる理由によったものであるのか、全然判断を下せない事もある」としている。本遺跡では、DⅢ-1 住居跡をはじめ10棟が2の例に相当する(表5～表9や本文参照)。炭化した材や草本類・焼土の量が上述の6棟に比較しても少量で、焼失住居跡と簡単に判断は下せない。ただ炭化物や焼土のあり方は先の例にだいたい合致するものの、住居跡中央部付近において床面～床面直上に堆積するものとそれよりもやや上位の層準に分布する例の2通りがある。前者の場合、FⅣ-1 a 住居跡のように火災によると考えることができるものがある。しかし、後者については火災以外の要因も推定できる。なお、一覧表の焼失・焼土の欄にはその状態によって2あるいは3と記載している。

焼失住居跡の例

焼失住居跡のうち、炭化した材が良く残って3棟を例にあげ、材の種類や分布の仕方を簡単に説明する。FⅣ-3 住居跡は垂木と考えられる5～8cmの角材や丸材が住居中央から放射状に分布する。しかし、板材はみられない。HⅢ-9 住居跡とIⅢ-1 住居跡は垂木が顕著な放射状の分布にはならず、ややランダムである。そして、床面にほぼ密着するような状態で幅広の板材が認められる。床面は中央部が硬い。HⅢ-9 住居跡では、東壁から南壁中央部にかけたの部分に、18～37cmの幅をもつ板材が南北を向くように数多く認められ、南東隅に掘り込まれた大型の貯蔵穴の底面には同様の板材がほぼ同方向を向いて落ち込んだ状態で検出されている。これは貯蔵穴の上を覆っていた板材が火災のときに焼け落ちたものである。本住居跡はⅢ a 型の柱穴配置であるが、板材は4個の柱穴を結んだ線の外側にのみ存在する。板材を取り除いたあとと床面はとくに硬いとはいえないのに対し、柱穴の内側は非常に硬く締まっている。以上の状況からは床板を敷いた部分と土間部分との存在が推定できる。また硬く締まった床面は北西隅寄りの西壁へ狭く続くことから出入口の位置も推定できるのかもしれない。

一方、IⅢ-1 住居跡は幅20～55cmの板材がみられるが、小規模である。しかし根太と推定される材を伴っており、床板の可能性が高い。中央部を中心とした範囲の床面が硬く締まっているのに対し、周辺部は軟らかい。

以上、例にあげた3棟は炭化材の残存状況の良好なものである。FⅣ-3 住居跡は床面積が10.8㎡と小型で、無柱式のものである。それに対して、HⅢ-9 住居跡は26.2㎡、IⅢ-1 住居跡は25.9㎡で、ともにⅢ a 型の4本柱(四主柱式)である。大きさが上層構造の違いにとどまらず内部施設の違いにも反映していることが推定できるものの具体的な点は不明である。

材の樹種

3に分類した6棟のうち5棟から採取した炭化材のサンプル数83点の樹種別の内訳は、クリが73点、ケヤキと種名不明の針葉樹が3点ずつ、ナラと不明なものが2点ずつである。また草本類1点はススキと同定されている。

m. 付属施設

(1) 貯蔵穴類

貯蔵穴あるいはそれに類する機能をもつビット・性格不明のビットを住居内施設として伴う例が49棟ある。調査区域外に出ることや削剝が著しいもの13棟を除外した79棟に対しては62%を占める。また、次の(2)に含めたものはぞいている。伴わないことが明確なのは30棟である。形態や大きさ・深度・設置位置によりある程度分類できるであろうが、大型や小型とする絶対値を求めることができない。したがって、ここでは一括してそれらをあつかい、大型の一群ほかについて若干ふれることにする。

基数と伴う住居跡名は次のようになる。

1基：BⅡ-1・CⅢ-8・DⅡ-3・DⅢ-1・DⅢ-4・DⅢ-5・EⅢ-2・EⅣ-4・EⅣ-5・EⅣ-6・EⅣ-8・EⅣ-10・FⅡ-1・FⅣ-1a・FⅣ-1b・FⅣ-6・FⅣ-9a・GⅢ-1・GⅢ-5a・GⅢ-5b・GⅢ-7・GⅣ-3・HⅢ-2・HⅢ-7・HⅢ-9・HⅢ-10・HⅣ-3・HⅣ-5・HⅣ-6・IⅢ-2・IⅣ-2・JⅣ-1a・JⅣ-3・LⅣ-1・OⅢ-2・PⅡ-1の各住居跡(36棟)

2基：CⅡ-1・CⅡ-4a・CⅢ-5・EⅢ-1・GⅣ-7a・GⅣ-7b・JⅣ-1bの各住居跡(7棟)

3基：FⅣ-9b・IⅣ-4・OⅡ-1の各住居跡(3棟)

4基：HⅣ-1・IⅢ-1・KⅣ-1の各住居跡(3棟)

合計すると71基である。複数を伴う例のなかで、新旧関係が認められるのはEⅢ-1とHⅣ-1・KⅣ-1の各住居跡である。EⅢ-1住居跡はP2がP1に切られている。HⅣ-1住居跡はP3とP4が同時存在、P2はそれらよりも時間的に先行し、P1は3基との関係が不明である。またFⅣ-9a・9bの2棟の住居跡のように、住居の作り替えの際にビットも作り替える例が数例ある(「重複」の項で前述)。

開口部の平面形は、円形基調(円形・円形状・不整円形・楕円形など)39基・方形基調(長方形・凸辺長方形・方形・不整方形など)26基、不整形6基である。

開口部での大きさと床面からの深度の分布は図31に示している。床面を大きく削剝されている場合は深度から除外している。また計測漏れは4基である。平面形を無視するなら、開口部径は、最小が40×40cm、最大が110×185cm、深度は、最小が8cm、最大が100cmとバラツキが大きい。深度が60cm以上の11基を深い一群と仮定し、開口部との関係を見ると、開口部径の最小

はGN-7 b住居跡P 4 (凸辺長方形・径75×100cm・深さ61cm)、最大はFW-9 b住居跡P 4 (長方形・径110×185cm・深さ63cm)である。またEIV-5住居跡P 1 (長方形・径100×190cm・深さ50cm)が群を抜いて大きい、深度はそれらよりも小さい。この一群に含まれるものは円形基調3基に対して方形基調8基である。上述の2基以外を深度の大きな順に並べると、JIV-1 a住居跡P 1 (長方形・径95×140cm・深さ100cm)・HN-1住居跡P 3 (円形・径100×110cm・深さ91cm)・GIII-5 a住居跡P 1 (凸辺長方形・径105×130cm・深さ81cm)・GN-3住居跡P 1 (凸辺方形・径85×95cm・深さ75cm)・IⅢ-1住居跡P 3 (不整形・径78×82cm・深さ68cm)・HⅢ-9住居跡P 1 (凸辺長方形・径103×145cm・深さ65cm)・HN-1住居跡P 2 (凸辺長方形・径105×145cm・深さ64cm)・EN-6住居跡P 1 (不整形・径105×128cm・深さ61cm)・GN-7 a住居跡P 1 (長方形・径80×100cm・深さ60cm)である。

開口部径の大きな一群の多くが上述のものに該当してくる。また深度を50cm以上とするとさらに多くが該当してくる。

住居跡床面積との関係を見ると、深度60cm以上のもの11基のうち、3基は小型3棟、5基は中型5棟、2基は大型1棟、1基は床面積不明1棟に属する。さらに50cm以上のものとなると、

8基は小型7棟、6基は中型6棟、3基は大型1棟、3基は床面積不明3棟に属する。大型の1棟はHN-1住居跡である。比率でいえば、小型15%・中型40%・大型14%と中型のものの所有率がやや高い傾向がある。

以上、ビットを分類できないまま深度を中心

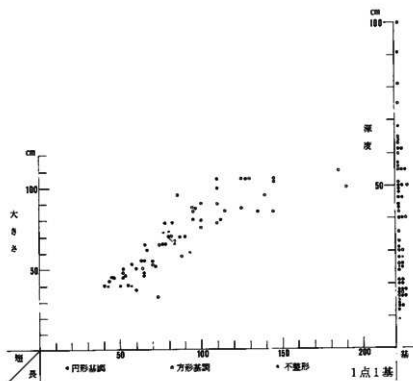


図31 平安時代住居跡内ビット規模別分布図

にみてきた。この類のビットが設置される場所はバラツキがあるが、開口部径が大きく深度の深いものは床面中央からある壁や隅へ寄った位置にあるものも多く、逆の一群はカマド脇に設置されるものが多い。たとえば焼失住居であるHⅢ-9住居跡P1は深度60cm以上のものである(上述)。床面に床板と推定できるものが分布し、その一部はP1中に落ち込んでいる。位置はカマドが設置された壁の反対壁が作るひとつの隅に寄って存在するが、住居使用時は上部に床板をかぶせて閉塞していたことが考えられる。またDⅡ-3住居跡P1(凸辺隅丸長方形・径33×73cm・深さ30.2cm)は小型であるが、ひとつの隅に設置される。内部は厚さ2cm±のシルトが全体に貼り付けられている。それらの例は機能を考える上での好資料になるであろう。

(2) その他のビット

上述の(1)とは異なる機能をもつことが推定される小ビットを伴う例があり、次に記載する。

IⅣ-1住居跡は削刺が著しく、部分的な残存である。南東壁中央からいくぶん南西寄りの位置にP1(円形・径53×53cm・深さ22cm)を伴う。内部が焼け、竈の羽口の小片と鉄滓1個が出土している。

HⅣ-6住居跡は中央からわずかに北西へ寄った位置に不整円形ビット(径19×21~26cm・深さ7cm)を伴う。壁の上部が焼け、内部を充填する漆黒土には炉側先端部を下にした竈の羽口の破片が突き刺さっている。

上述の2棟は鍛冶炉の可能性が高い(本文や付属鶴田論文参照)。それらに形態が類似するものの、遺物が出土しないことや状況からは必ずしも鍛冶炉とは言いつけないものが、CⅢ-5住居跡P3(不整円形・径50×65cm・深さ14cm)・DⅡ-3住居跡P2(円形・径36×38cm・深さ7cm・内部は焼けて還元状態を示している)・IⅢ-1住居跡P5(円形・径30×38cm・深さ12cm・底面は焼けて還元状態を示している)にみられる。またFⅣ-5住居跡やHⅣ-1住居跡は不整形の浅い落ち込みを伴い、内部が焼けている。

(3) 中世

3棟がM面に検出されている(表11)。

HⅢ-6住居跡は浅い竪穴住居跡で、方形の本体部とその外側に付属する張り出し部とで構成されている。一部の柱穴が共有一再利用の関係にある新旧2群の柱穴群があり、ほぼ同形・同規模の2棟が重複していることがわかる(HⅢ-6a・HⅢ-6bの各住居跡)。床面も共有一再利用の関係にある。柱穴は、本体部は四隅とその中間の壁際および真中、張り出し部はそれと結ばれる2個が隅に配置されている。カマドは相伴せず、炉は床面が残存する部分には検出されていない。時期を決定できる相伴遺物はないが、重複するHⅢ-4a住居跡(平安時代)を切っていることと住居形式から中世に分類する。

GⅣ-8住居跡は柱穴から存在を確認した住居跡であり、床面を含めた全体が削刺されてい

ることが推定できる。7個の柱穴を長方形に配置した本体部の外側にそれと結ばれる2個の柱穴を伴う張り出し部が作られる。住居形式から中世に分類できる。

(4) その他

これまでに述べてきた縄文時代・平安時代・中世に分類できない住居跡が11棟存在する(表11)。漆の塗り紙ほかを出土した5棟について先に記載する。

5棟(CⅢ-2a・CⅢ-2b・DⅢ-7a・DⅢ-7b・CN-1の各住居跡)のうち、ほぼ同位置で重複していることを複数の柱穴群や炉から知ることができるCⅢ-2・DⅢ-7の各住居跡は新旧2棟に分離している。分布はL面に限定され、比較的近接した位置に存在する。すべて竪穴式である。平面形は長方形、柱穴は四隅とその中間の壁際に配置され、8~12本と多い。柱痕跡と掘り方が識別できる例も多い。炉と推定できる浅い掘り込みを内部の中央付近に伴う点は5棟に共通する。炉の平面形はCN-1住居跡をのぞいて四角形で、四隅に小ピットを伴う例が多い。CN-1住居跡は三角形になり、隅には同じような小ピットをもつ。ただ、この例は一部を削削されていることも考えられる。少量の木灰や炭が内部に検出された例がある。この種の掘り込みを炉と考えたのは次の二つの理由によるものである。

1. 漆を塗る際に湯が必要であり、そのための炉ではないかという佐藤喜蔵氏の御教示

2. 今村啓爾が縄文時代早期の炉を取り上げた論文(今村, 1986)中にみられる「灰床炉」との形態や検出状況の類似性

2の今村が取り上げた時代の例と本遺跡の例を比較するのは少々強引ではあるが、機能の類似性が結果的に形態のそれに結びつくと考え難いことではない。本遺跡の例は四隅のピットが小さく、内側に傾く例があるが、今村が推定した「灰床炉」の構造とずれることはないであろう。

以上の5棟のうち、古期の2棟をのぞいては漆の塗り紙、CN-1住居跡はさらに固化した漆液を出土しているが、所属時期を推定させる遺物はCⅢ-2a住居跡の1号炉の底面から出土した寛永通宝1枚と埋土からの磁器の小破片1点があるにすぎない。それらからCⅢ-2a住居跡を近世後半あるいはそれ以降と考えた。残るDⅢ-7a住居跡とCN-1住居跡は住居形式や出土遺物・占地の類似性を通して同じ時期に分類した。また、CⅢ-2b・DⅢ-7bの2棟は重複の在り方から推定してそれらと大きな時間の隔たりはないものとする。

これまでは住居跡として記載してきた。しかし、単に住居跡といえるかどうかについては検討が必要であろう。同じ浄法寺町の五庵II遺跡は住居形式とどまらず、出土遺物に類似性をもつ住居跡が多く検出されている。「15世紀末から近世とはいえるものの、詳細は不明である」とされる20棟のうち、「漆器製作にかかわる道具」である「漉穀・手形」(「砥石」も含まれているが除外)の両者あるいはいずれかを出土する例は13棟である。その機能については、「『大型住

表11 中世・近世・所属時期不明住居跡一覧表

No.	調査 次数	住居跡名	平 面 図	規 模 m	床面積 ㎡	壁 高 cm	壁 材	柱 穴	形 状		時 間	備 考
									数	形 状		
1	2	CⅢ-2a	(推)ややいびつな台形状	3.2~3.5× 3.8~4.1	12.4	20	なし	11本柱	1~2	方形	近世後半あるいはそれ以降	墓にかかわる工務跡?
2	2	CⅢ-2b	(推)ほぼ正方形	3.5±× 3.6±	12.1	20	#	9本柱	1	#	#	#
3	2	CⅢ-7	ほぼ長方形	3.3× 4.6~4.9	13.8	19	一部?	11本柱	な	し	不明	
4	2	CⅢ-9	(推)方形	(推)2.5× 2.9	不明	8	不明	不明	不	明	#	CⅢ-10住居跡を切る。
5	2	CⅢ-10	不明	不明	#	不明	#	#	#	#	#	CⅢ-9住居跡に切られる。
6	2	CⅣ-1	(推)長方形	2.6× (推)3.8	(推)8.9	37	なし	8本柱	1	三角形	(推)近世後半あるいはそれ以降	墓にかかわる工務跡?
7	2	DⅢ-6	(推)長方形	(4.2±× 4.9±)	不明	不明	?	12本柱	な	し	不明	
8	2	DⅢ-7a	ややいびつな隅丸長方形	3.7× 3.7~4.0	11.9	37	なし	8本柱	1	合辺方形	(推)近世後半あるいはそれ以降	墓にかかわる工務跡?
9	2	DⅢ-7b	(推)隅丸長方形	3.3± (推)4.0	10.5	37	#	#	1	不整形	#	#
10	2	DⅢ-9	ややいびつな正方形	3.0×3.2	7.6	33	#	12本柱	な	し	平安時代以降DⅢ-7住居跡以前	
11	2	GⅣ-8	長方形 十張り出し部	2.0~2.3× 4.3~4.6	不明	不明	不明	9本柱 (張り出し部含む)	不	明	(推)中世	柱穴のみ残存
12	2	HⅢ-6a	長方形 十張り出し部	3.8× 4.9~4.7	#	22	(なし)	11本柱 (張り出し部含む)	不	明	中世	
13	2	HⅢ-6b	長方形 十張り出し部	3.7× 4.3~4.6	#	22	(なし)	11本柱 (張り出し部含む)	#	#	#	

※HⅢ-1住居跡は除外している。

居跡は母屋兼作業場の性格、小型住居跡は作業場の性格」をもつ可能性」を指摘している。五庵Ⅱ遺跡の個々の住居跡との比較はしていないが、本遺跡の例も漆の工房と居住を兼ねたような機能をもつことを考えておきたい。

これまで記載してきた以外に、CⅢ-7・CⅢ-9・CⅢ-10・DⅢ-6・DⅢ-9の5棟の住居跡がL面に、HⅢ-1住居跡がM面に存在する。検出の過程で壁を削削してしまった可能性が高いDⅢ-6住居跡以外は竪穴式である。

重複関係から所属時期をある程度推定できる例が多い。

DⅢ-9住居跡は平面形が隅丸方形で、四隅とその間の壁際に11個の柱穴を伴う。DⅢ-8住居跡(縄文時代前期)よりは新しく、DⅢ-7住居跡(近世あるいはそれ以降)より古いことを知ることができる。住居形式や埋土・出土遺物から推定するならば中世以降とさらに時間幅を狭めることができるであろう。CⅢ-7住居跡はCⅢ-8住居跡(平安時代)を切っている。CⅢ-9住居跡はCⅢ-10住居跡の上に貼り床をして構築している。CⅢ-10住居跡とともに、CⅢ-7住居跡よりは古いことがわかるものの、CⅢ-8住居跡との新旧関係を把握できなかったため、時期を特定できない。DⅢ-6住居跡が中世以前にさかのぼることは住居形式から考え難い。HⅢ-1住居跡は重複によって断片的に残ったもので、住居の作り方からは

平安時代に属する可能性もあるが、それ以上の積極的な根拠を上げることができず、時期不明としておく。

2. 住居状遺構

8棟が検出されている。厳密な定義を与えて住居状遺構としたのではないので、個別に記載するなかでそれについては触れていく。

(1) 縄文時代

DⅢ-13住居状遺構1棟がL面に存在する。重複のほかの理由で推測になるが、平面形は不整形に近い。残存する壁間の長さは2.5mとやや大きい。居住を目的にした施設を想定することは壁や床面の状況からはかならずしも適切とは言えないであろう。Ⅱ群1類（早稲田6類）期に分類できる。

(2) 平安時代

DⅢ-14・EⅢ-3の2棟がL面に、EⅣ-12・FⅣ-2・FⅣ-4の3棟がM面北部に検出されている。DⅢ-14住居状遺構はDⅢ-2住居跡（平安時代）の埋土中に構築されたもので、同住居跡の壁を掘り込むひとつの隅を伴うことから、一辺が2m前後の方形のものと推定できる。カマドはないが、2基の現地性焼土を伴う。EⅢ-3・EⅣ-12・FⅣ-2の各住居状遺構は、平面形が隅丸正方形や隅丸凸辺長方形・隅丸不整形、床面積が3.8～4.5㎡である。大きさは平安時代の大型ピットとしたものよりも一回りほど大きい（図33参照。ただしOⅢ-51ピットとは比較しない）。しかし、同程度の床面積をもつ平安時代の住居跡はHⅢ-8（4.3㎡）とCⅢ-8（4.7㎡）の2棟がある。掘り方を伴うのはEⅢ-3・EⅣ-12の2棟、またFⅣ-2住居状遺構は伴う可能性が高い。カマドや炉は伴わない。FⅣ-4住居状遺構は床面下位まで削制され、掘り方の一部が残っている。壁際に広がる焼土はカマド火床部の残存とも推定でき、住居跡が断片的に残ったものかもしれない。

(3) 所属時期不明

DⅢ-10住居状遺構がL面に、DⅣ-1住居状遺構がM面北端に検出された。DⅢ-10住居状遺構は平面形が隅丸凸辺長方形で、規模は1.9×2.2m、床面積は2.1㎡である。重複関係からも所属時期は明らかにできない。DⅣ-1住居状遺構は床面の一部と柱穴状ピット・現地性焼土から確認できたものであるが、平面形や大きさの詳細は不明である。住居跡が断片的に残ったものの可能性も考えられる。

3. 掘立柱建物跡

GⅢ-8掘立柱建物跡1棟がM面に存在する。1間×2間の規模である。柱穴は、遺構の有

無を最終的に確認するために掘り下げていった段階で検出されたため、下半が残存して細く浅いものになっている。埋土や占地を考慮すると平安時代に属するものと推定できる。

4. ピット

115基のピットが検出された。時代別では、縄文時代23基・平安時代48基・所属時期不明44基となる(表12)。以下は時代別に記載する。なお遺構名は番号だけで表わしている。

(1) 縄文時代

推定も含め23基が検出されている。時期別の内訳は、早期1基・前期5基・中期1基・後期6基・晩期2基・不明8基である。分布を外観すると、L面のC区に14基、M面は北半のD～F区に7基、H面はO・P区に2基と分散するが、L面がもっとも密度が高い。

a. 早期

L面に検出されたCⅡ-61がある。不整形で、埋土や土器からは早期I群6類(早稲田4類相当)期のものと推定される。同時期の住居跡はやや離れたDⅢ区に1棟が存在する。

b. 前期

土器や埋土から前葉のⅡ群1類(早稲田6類)期に属することが推定できるものが5基で、L面に4基、M面に1基分布する。CⅢ-51・同57は円筒形、CⅢ-53は円形の浅皿状、CⅢ-54は不整形、GⅣ-

57はいびつな楕円形で、2基は断面形が不定である。5基は同時期の住居跡と分布がほぼ重なり合い、密接な関係にあったことが考えられる。なお、CⅢ-51・同53は¹⁴C年代測定をしているが、 $6,780 \pm 150$ B.P.と $6,100 \pm 130$ B.P.という結果が出ている(付篇参照)。

c. 中期

M面北端に検出され

表12 所属時期別ピット一覧表

調査区	縄文時代	平安時代			時期不明	
		出土ピット	大型ピット	その他		
1	DⅣ-51	HⅣ-01	GⅣ-51	HⅣ-53	DⅣ-52	EⅣ-59
	EⅣ-51	EⅢ-51	-52	-54	-53	FⅣ-51
	-52	-52	HⅣ-51	-57	-54	FⅣ-51
	FⅣ-51	-53	-52	-58	-55	GⅣ-51
2	CⅢ-52	EⅢ-51	IⅣ-53	-60	GⅣ-53	GⅣ-55
	-53	-52	-54	IⅣ-51	HⅣ-55	-56
	-54	-53	GⅣ-54	-52	-56	HⅢ-51
	-56	-54	HⅢ-53	OⅣ-54	CⅢ-51	IⅢ-54
	-57	-56	-54	BⅢ-51	-55	-52
	-59	-57	-55	DⅢ-54	-58	-53
	-60	-58	HⅣ-62	-55	CⅢ-52	-54
	-61	-58	-63	-56	-55	-55
	CⅢ-51	IⅢ-56	IⅢ-56	EⅢ-54	-58	-57
	-53	KⅣ-51	KⅣ-51	EⅢ-59	-59	-58
	-54	-52	EⅣ-54	-61	-59	-59
	-56	LⅣ-51	-55	-63	IⅣ-55	-55
	-57	OⅢ-53	-57	-65	OⅢ-55	-55
	-60		GⅢ-52	-66	PⅢ-51	-55
	FⅣ-52		HⅢ-52	-62	DⅢ-53	PⅢ-54
	-53		OⅢ-54	-64	-64	-62
	GⅣ-57				EⅢ-55	未命名1
	OⅢ-51				EⅣ-56	
	PⅢ-52				-58	

たDN-51がある。上半を削剝されているが、下半はフラスコ形になる。出土土器からⅢ群2類(円筒上層式e)期に分類できる。なお、同時期の遺構はほかにはない。

d. 後期

L面に4基、M面北部に2基が検出されている。CⅡ-52・FⅤ-51はフラスコ形、EⅣ-52はいくぶん浅いが同形、CⅡ-53・同57は上半がやや開く円筒形である。出土土器や形態ほかから推定すると、初頭～前葉に属する。CⅢ-56は円形の浅皿状ピットで、出土土器から末葉に分類する。

e. 晩期

L面に1基、H面に1基が検出されている。CⅡ-56はいくぶん浅いフラスコ形ピットである。所属時期は推定である。OⅢ-51は円形の浅皿状で、ほぼ完形の粗製深鉢を伴う。

f. 時期不明

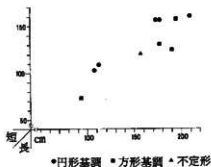
縄文時代に属することが推定できるものの、確実な時期が不明なものは8基である。そのなかには切り合い関係があるが時期の不明なものがある。後期のCⅡ-53に切られて下底部しか残らないCⅡ-54、後期前葉に属すると考えられるFⅣ-8住居跡の貼り床下に検出されたFⅣ-52とそれに隣接する同形態・同規模のFⅣ-53、形態や埋土から推定したCⅡ-59ほかがある。その他には形態が不安定なもの、円筒形のEⅣ-51、フラスコ形のPⅡ-52ほかがある。PⅡ-52は形態や埋土が近接する円筒形Ⅰ型の落とし穴OⅢ-52(115)に類似するが、底面に副穴を伴わないことから除外した。

(2) 平安時代

この時代のピットは推定も含め48基と多い。形態からいくつかに分類できる。焼土ピットと貯蔵穴と推定される機能をもつ大型のもののほか、形態に安定性を欠く一群がある。

a. 焼土ピット

焼土ピットにしたのは、形態的な安定感のいかんにかかわらず、内部に現地性の焼土が形成され、場合によっては木炭も伴うものである。合計11基検出され、10基はL面のEⅡ・EⅢ区に集中し、残る1基がHⅣ区にある。平面形は円形～楕円形・隅丸方形・隅丸台形・不整形ほかである。大きさは72×93cm～160×210cmとややバラツキが大きく(図32)、深度は削剝を受けているものをのぞけば26～40cmほどである。焼けている面が底面である例は少なく、それよりもいくぶん上位に形成されている例が多い。焼土の規模は一定性にと



ほしい。

ピットの機能や性格を遺構の状態から把握することは難しい。次にいくつかの特徴をもつピットを例に記載する。

EⅢ-52は2基が重複している可能性もあるが、復元可能な多数の坏Ⅰ類が焼土に載る形で出土した。底部が残る4例はⅠ類Cであり、底部を欠く例の多くも同じ分類型であることが推定できる。EⅡ-53・EⅢ-51は方形のピットで、重複している。ともに長軸方向の東壁へ寄った位置に大規模な焼土が形成されて

いる。EⅡ-53は掘り方を伴っている。EⅢ-57は長方形状で、やはり長軸方向の一方の壁へ寄った位置に焼土が形成されている。上下に2層の焼土があり、2時期にわたる使用が考えられる。EⅢ-58は小型の方形状で、多量の木炭を主に焼土の外側に伴っている。

埋土はすべて灰白色浮石を含み、先のEⅢ-52ピットの資料のほかにも平安時代の遺物を出土している。またEⅢ-52・54ピットからは少量の鉄滓が出土している。

b. 大型ピット

平面形が円形や方形・長方形・台形で、深度が一般的に深く、形態的な安定感がある大型のものである。壁溝や掘り方を伴う例も多い。17基が検出され、分布はM面のG～L区に16基、H面のO区に1基がある。

大きさは140×141cm～375×410cm、深度は30～140cmとバラツキが大きい(図33)が、最大のOⅢ-53は他の16基に比べると違いが大きすぎ、性格を同一視できるかどうか疑問が残る。

住居跡との関係を示す例がある。JⅣ-3・KN-1の2棟の住居跡はM面の南端に孤立的に存在するが、その2～3m離れた位置にKN-51・KN-52が存在し、共伴する可能性が高い。同様な例はLN-1住居跡とLN-51に顕著であるほか、GN-1住居跡とGN-51、HN-1住居跡とGN-52が密接な関係にあることが推定できる。それに対し、GN-54やHⅢ-54ほか11基はM面の一定の地域にまとまって存在する。

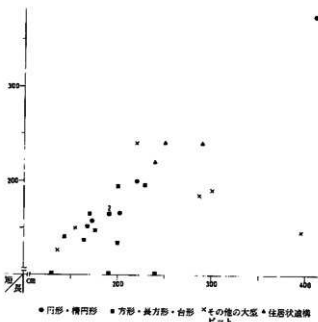


図33 平安時代大型ピットほか規模別分布図

これに類似したピットは県北の平安時代の遺跡ではよく検出され、単にピット（安代町有矢町遺跡ほか）や小屋址（安代町上の山Ⅶ遺跡）ほかとされている。本遺跡の場合、貯蔵施設であることの確実な検出状況や遺物はないが、上述のような近接する住居跡との直接の関連性や分布域が偏ることからは屋外の貯蔵施設としての機能・性格が考えられ、その場合、ふたとおりの在り方が想定できる。ひとは住居跡に近接してある上述の場合で、住居＋屋外ピットの単位を直接的に想定できる。それに対して、HⅢ区やHⅣ区付近にある程度集中的に分布している例は個別の住居跡との関連がつかめないし、集中することからは集落空間での住居との機能的な分割が考えられる。

c. その他のピット

上述のaとbに分類される以外のピット20基をここに含めている。そのために形態や規模はバラツキがあり、分布もL面からH面に広く分散することになる。ここでは際立った特徴をもついくつかのピットについて記載し、分類はしないことにする。

EⅤ-55・同57（凸辺）は隅丸長方形の大型ピットで隣接して存在する。GⅢ-52は平面形がその2基に似るが、深度がかなり小さい。EⅤ-57・GⅢ-52は掘り方を伴う。大型であるが、bの一群とは形態が異なることから分離している。それに対し、HⅤ-57やOⅢ-54は形態や規模からbの大型ピットに含めたほうが良いのかもしれない。

遺物を多量に出土したピットにDⅢ-53がある。土師器甕Ⅰ類の大小の破片を埋土から多く出土しているが、混在する焼土塊やシルト塊ほかからはカマド構築土とともに一括して廃棄されたことが考えられる。EⅢ-59は柱穴跡と掘り方が識別できる大型のもので、単独で検出されている。平安時代に属することは確実であるが、性格は不明である。

(3) 時期不明

縄文時代や平安時代に所属時期を限定できないピットは44基である。一括して扱っているために形態や規模にバラツキが大きく、分布もL面からH面にまたがっている。それらのなかで、HⅤ-2住居跡の床面下に検出されたHⅤ-55・同56の2基は平安時代あるいはそれ以前のものである。CⅢ-65・同66・GⅣ-55・同56の4基は「グメ押し」の段階で検出されたもので、層位的には縄文時代に属する可能性が大きい。また、CⅡ-58はキセルの破片を出土し、近世以降の可能性が強い。

5. 落とし穴

137基の落とし穴を検出している。形態別では、溝状落とし穴126基、円筒形落とし穴11基である。

(1) 事実記載中の形状

溝状落とし穴は形状を記号として表わしている。図34に示しているように、平面形はⅠ型とⅡ型に分類している。縦断面形はA～D、横断面形は1～3と模式化し、その組み合わせによって「溝ⅠD2」のように記載した。縦断面形・横断面形はあくまでも概念的なものであり、数多くの変異形を個々には含んでいる。以下の遺構名は番号だけで表わすことにする。

(2) 分類

a. 溝状落とし穴

重複や地形改変に伴う削削、あるいは最終の検出面まで把握できなかったことなどの理由により、上部や上半を失い、一部は底部だけで確認できる例が数多くある。さらに調査区域外に出るために部分しか調査できなかった例が8例にあり、比較的全形をよく保っている例は59基にしかすぎない。したがって平面形でⅠ型・Ⅱ型に分類したものの厳密な規定はすることができなかった。Ⅱ型はⅠ型に比べて開口部が長楕円形であり、底部の横断面の幅と縦断面の長さの比がⅠ型に比べると大きいという程度の認識であるとともに形状を記号化するための便宜的なものである。次の分類群のS2がⅡ型を含んでいる(CⅢ-102など6基)。

縦断面の長さや横断面の幅の分布と基数を示したのが図35である。先に述べたような理由により、開口部ではなく、底部が残る114基の計測値にもとづいている。しかし完掘しているものの底部幅を著しく掘りすぎている可能性があるFⅤ-101は図から除外している。

S・M・Lに大別する。分布領域のある程度のまとまりを区切った便宜的な分類である。

S：長さが110～210cm、幅が12～40cmのもの46基(40%)である。長さの違いから細分するなら、S3：110cm(1基)、S2：130～177cm(37基)、S1：192～209cm(8基)のように分類できるのかもしれない。

M：長さが227～307cm、幅が7～50cmのもの38基(33%)が含まれる。

L：長さが318～413cm、幅が9～50cmのもの30基(26%)が含まれる。長さの違いから細分するならL1：318～390cm(28基)、L2：407～413cm(2基)のように分類できるのかもしれない。

以下の本文中では大別での記載をし、必要な場合のみ細分した分類を用いることにする。

b. 円筒形落とし穴

11基と少ない。開口部径や深さから二つに細分する。

円筒形Ⅰ型：5基を分類した。次のⅡ型に比べると開口部・底部とも直径が大きい。開口部径は最小がDⅢ-52(109)の122×132cm、最大がOⅢ-52(115)の190×200cm、深度は、最小がCⅢ-64(104)の105cm、最大がDⅢ-52(109)の137cmである。全部がほぼ中央部に副穴1個を伴い、その径は15～20cm、深さは6～20cmである。CⅢ-67(105)は1個の隣が副穴の上縁に存在する。上記以外にはCⅢ-62(103)がある。

円筒形Ⅱ型：6基を分類した。“地山”まで削剝を受けていることや重複のために5基は上部をわずかに、1基(HN-114)は上半を大きく削剝を受けている。したがって本来は開口部径が一回り大きく、深度もやや大きくなるものであろう。HN-114を除外した計測値は次のようになる。

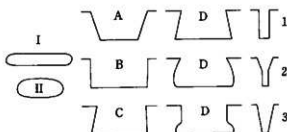


図34 溝状落とし穴概念図

開口部は、最小がHN-113の60×70cm、最大がHN-108の70×99cm、深度は最大のHⅢ-102が94cmである。径のパラツキはⅠ型に比べるとかなり小さい。全部が底部に副穴を伴い、1個(HⅢ-102・HN-108・HⅣ-110・HN-114)あるいは2個(HN-109・HN-113)がみられる。副穴は径3～13cm・深さ4～27cmで、Ⅰ型に比べると径が小さい。

(3) 分布

粗密はあるものの、調査区のほぼ全域に分布する(図39)。地形面別(第2図参照)の分布数は、L面が20基、M面が85基、H面が32基でM面がもっとも多い。もちろん、M面が面積的にいちばん広いことからいちがいに比較することはできないであろうし、M面でもⅠ区からM区の150mの間には分布密度が薄くなる(12基)。地形面と分類形との関連は次のようになる。

L面：溝状S8基・溝状M2基・溝状L6基・円筒形Ⅰ型4基が分布する。

M面：溝状S28基・溝状M25基・溝状L18基・溝状不明8基・円筒形Ⅱ型6基が分布する。溝状不明の8基は調査区域外に出るもので、残存状態や配置からはSに属する可能性が強い。

H面：溝状S10基・溝状M12基・溝状L7基・溝状不明2基・円筒形Ⅰ型1基が分布する。溝状不明の2基は底部の一部を削剝した状態で検出している。

溝状落とし穴が三つの面に広範囲に分布するのに対し、円筒形落とし穴の分布は限定的である。Ⅰ型がL面のCⅢ区・DⅢ区の17m四方の範囲に4基とH面に1基があるにすぎない。Ⅱ型はM面のHⅢ区・HⅣ区の13m四方のなかに6基が分布する。また溝状落とし穴はSとLの分布率に比べ、MがL面に2基(5%)と少ないことが特徴的である。ちなみにL面の分布率はS22%・L19%である。図37は溝状落とし穴の底面の標高から作成した分布図である。

(4) 副穴

円筒形落とし穴の副穴については上述したので、ここでは溝状落とし穴の副穴について記載する。精査時に浅い副穴を掘りあげたため、実測図に記入されていないものが一部にある。

副穴としたものは底面に伴う小ビットを指す。規則的な並び方を示す場合は副穴として識別することが容易であるが、かなりランダムな並び方を示す例の場合は必ずしも全部が副穴とし

て適切であるとは考えられない。したがって分類形別の遺構名を上げ、次に典型と考えられるものを列記することにする。分類はXをつけ、溝状Xのように表わしている。

SX: 13基 (GⅢ-102・FⅢ-102・FN-115・FN-116・GⅢ-101・GⅢ-102・GⅢ-107・GN-114・KⅢ-104・OⅢ-104・PⅢ-106~PⅢ-108)

MX: 7基 (EN-101・GN-101・GN-111・KⅢ-101・KⅢ-102・PⅢ-101・PⅢ-103)

LX: 3基 (FⅢ-101・PⅢ-104・PⅢ-105)

不明: 1基 (PⅢ-102)

合計24基である。副穴の数は1~5個がある。PⅢ-105は8個を伴うが不規則である。底部中央を縦断面方向に規則的に並ぶ例は、2個 (GⅢ-101・GⅢ-107)、3個 (FⅢ-102・GⅢ-102・GN-114・OⅢ-104・PⅢ-108)、4個 (PⅢ-106・PⅢ-107) がある。1個しか伴わない例は疑問が残る。

対あるいは数基が集まって一群を構成する場合、後述するように、副穴の有無が識別形質になることがある。

(5) 主軸方向

溝状落とし穴のほぼ真中をとる長軸線と磁北のズレを主軸方向とし、地形面別にそれをみたものが図38である。地形面の形態や占地・対あるいは一群を構成する落とし穴との関連で長軸方向を考えて行く必要があり、個別の分布からの意味の読み取りは困難である。図から気がつくのはL面の主軸方向が99°の範囲に納まることとM面・H面での分布がほぼ全方向におよぶことである。H面は平坦面が狭く緩斜面を多く含むためと考えられるが、L面やM面は平坦面が卓越していることから、検出数や調査対象

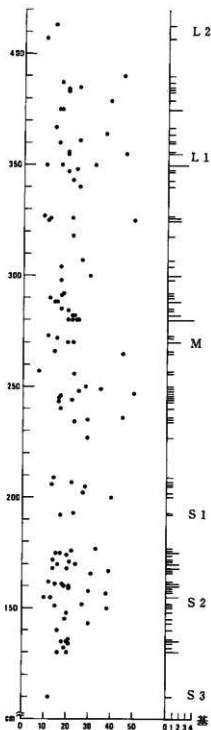


図35 溝状落とし穴規模別分布図

区域の違いが反映されているのであろう。

(6) 配列状況

2基以上が集まり、有意の配列を示していることが考えられる例があり、図39に線で結んで示した。ただ注目したのは主軸方向をほぼ同じにする並列の場合である。さらに先の分類を同じくするもの相互の組み合わせを優先している。それ以外に組み合わせを考えることができる例も少数ではあるが存在するが、触れていない。

a. 溝状落とし穴

L面：①は6基が北西から南西へ3～6 m 間隔で並ぶ。両端を結んだ長さは26 m である。S2に分類できる一群である。

M面：北端にある②はS2とS1が対になる。中間にDN-108があるが、ピットと重複して一部分が残るだけのため、分類できない。EN区・FN区にある③はM2基、⑤はL2基が対になる。EN区からGN区にかけての約42 m の間にS2が11基並ぶ(④)。個々は主軸方向に若干のバラツキがあり、主軸方向を同じくする2基一對の細分も可能である(例えばEN-105とFN-105・EN-106とFN-106)。ほぼ東西方向に並ぶ⑥はS1X1基とS2X2基の組み合わせである。⑦はS2XとS2が対になり、間隔は13 m と広い。GN区にある⑧はMX1基とM2基が並ぶ。⑨はMXとMが8 m ほど間隔を置いている。⑩はS2XとS1Xが並ぶ。南部のKⅢ区には⑪と⑫がある。⑪はS2XとS2が16 m の間隔を置いている。平面形はⅡ型である。⑫はMX2基が近接して対になる。LN区の⑬はS1が1 m 未満の間隔で3基並ぶ。

H面：NV区にある⑭はS2が1 m 未満の間隔で対になる。OⅢ区・PⅢ区には対あるいは一群を構成するものが多い。⑮・⑯・⑰はMが2基一對になる。ただ⑮はOⅢ-112とOⅢ-113を考える方が適切かもしれない。⑱・⑲は主軸方向をほぼ同じくする2基が5 m と9 m の間隔で並ぶ。それらのすぐそばの⑳はLの2基が4 m の間隔を保つ。㉑と㉒はS2が2基一對になる。㉓はS2Xの4基がわずかに弧を描くような配列である。主軸方向にバラツキがあるが、下部しか確認できなかったPⅢ-108以外は平面形はⅡ型である。㉔はMXとLXが2基ずつ、不明のXが1基のあわせて5基を一群としてとらえたが、主軸方向・分類形が異なるものを副穴の存在という共通性を優先して組み合わせたものである。

以上のなかで、①～⑬が配列を考える資料として良好である。落とし穴の分布密度の希薄な地域にいわば孤立的に存在する。⑭は副穴がジグザグになることや埋土構成も類似する。⑮も埋土構成も互いに類似する。⑪は平面形がⅡ型である。そのほか、㉑や㉒のように多数が直線的に並ぶS2の在り方は、周辺に分布するものが別形態のものである点や同時あるいはそれぞれの存在を認識しながら配列する点では時間的にかなり近いといえるであろう。

b. 円筒形落とし穴

円筒形Ⅰ型5基のうち4基を結んだのがL面北部の③である。同じ様に円筒形Ⅱ型を結んだのがM面の⑤である。③は3基が直線的に並ぶようにも見えるが確実ではない。

(7) 出土遺物

a. 溝状落とし穴

28基が遺物を出土している。地形面別の基数は、L面が5基、M面が13基、H面が10基である。L面とH面が検出数の31%前後から出土し、M面ではその半分の比率である。遺物の種類は縄文土器と剝片石器・礫石器・土製品・石製品であるが、量は少ない。

L面：CⅡ-101は埋土上・中部や底面直上からⅠ群6類やⅡ群1類・前期前葉の土器片・凹

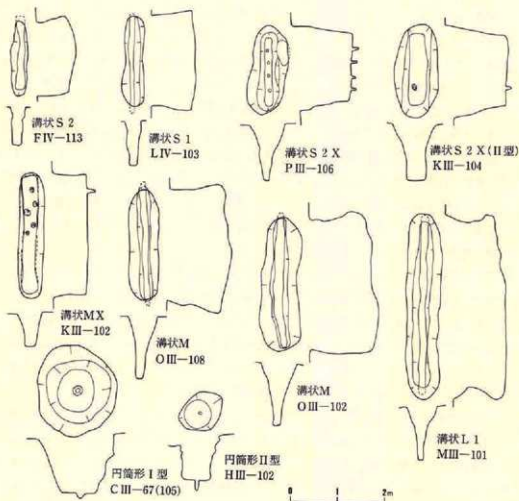


図36 落とし穴分類図

石、CⅢ-102はⅡ群1類や10類の土器片、DⅢ-106がⅡ群1類の土器片を出土している。

M面：遺物を出土するのは北部のDN区～GN区に限定され、FN区に8基と多い。FN-103・FN-115がⅡ群3類、FN-104やFN-107が前期前葉、FN-104が後期の土器片を出土している。他に出土している土器は後期が主体である。そのほかには石匙や不定形石器・円盤状土製品などがある。

H面：出土土器片のほとんどはⅡ群6類～8類に分類した円筒下層式d1やd2である。そのほかには石鏃や凹石・有孔石製品などがある。

b. 円筒形落とし穴

遺物を出土しているのはCⅢ-67(105)をのぞいた円筒形Ⅰ型に限られている。種類は縄文土器片と礫石器があるが量は少ない。

CⅢ-62(103)・CⅢ-64(104)はⅡ群1類の破片と磨石Ⅰ類を出土している。CⅢ-62(103)は埋土最上部に同一個体の破片35点が一括して出土している。DⅢ-52(109)はⅠ群1類を埋土から6点出土しているほか、前期前葉と推定できる破片を埋土上部から出土している。OⅢ-52(115)は円筒形下層式dと推定できる破片1点を埋土上部から出土している。

(8) 遺構の時期

落とし穴は所属時期を決定できる資料を欠いている。主に重複関係から若干時期について触れておくことにする。

縄文時代の住居跡との重複関係には次の例がある。溝状S2の1基は早期前葉の1棟を切っている。溝状M・MX・Lの3基は前期前葉の2棟を切っている。そのうちの2基は1棟の埋土から掘り込んでいる。円筒形Ⅰ型の1基は後期初頭～前葉と推定される1棟と直接は重複しないが、層位的には下位にある。

平安時代の住居跡と重複する例は溝状S2・M・MX・L・円筒形Ⅰ型の17基がある。住居跡が床面下まで削剥されていたために新旧関係を把握できなかった1基を除いてすべて切られている。

落とし穴同士の重複が何例かにある。円筒形Ⅰ型のDⅢ-52(109)は溝状S2のDⅢ-103に切られている。溝状同士では直接・間接に重複する3基のS2・M・Lがある。

そのほかの平安時代の遺構や近世あるいはそれ以降と推定される住居跡と重複する溝状落とし穴はすべて切られている。基本層序との関係ではⅤ層を切る溝状2基がある。

以上の例から所属時期を推定することは困難である。溝状落とし穴は平安時代Ⅰ群に分類した住居跡に切られていることとそれ以前の本遺跡の時代的な様相を考慮するなら、縄文時代に属するものと考えてよいであろうが、小期での区分は不可能である。

円筒形落とし穴のうち、Ⅰ型はOⅢ-52(115)を除いた4基が層位や出土遺物・埋土から縄

文時代早期～前期前葉のなかに位置づけることができるであろう。OⅢ-52 (115) とⅡ型は所屬時期を推定するてがかりを欠き、縄文時代に属することだけを推定しておきたい。

(9) その他

東北縦貫自動車道に関連して調査された浄法寺町の14遺跡のうち2遺跡を除いて落とし穴が検出されている。溝状落とし穴・円筒形落とし穴・そのほかを合わせ405基がある。田村(1987)によると、124遺跡1,896基が岩手県内で検出されていることから、遺跡数で10%、遺構数で21%を占めている。本遺跡の遺構数は都南村湯沢遺跡の170基に次ぐものであり、7.2%を占めている。

落とし穴が検出された浄法寺町12遺跡の発掘面積は94,042 m²である。遺跡の大小やあるいはどの部分を調査したかを考慮に入れなければ100 m²あたり平均0.4基が検出されたことになる。本遺跡は0.6基、もっとも多い安比内Ⅰ遺跡は1.2基になっている。安比内Ⅰ遺跡は小さな開析谷を隔てて本遺跡の南側に隣接する遺跡である。41基の溝状落とし穴が検出され、A類と分類された長さが1.5～2mと短い19基は南北2列に9基と10基の並列として認められる。本遺跡で溝状Sとしたものとほぼ同形態である。またB類に分類された長さが2.5～4 mの8基が等間隔で並ぶ例もある。五庵Ⅰ遺跡は81基が検出され、円筒形のものが34基と多い。それ以外には溝状のものが40基、長方形のものが7基がある。本遺跡の例と対比しての分析は行うことができ

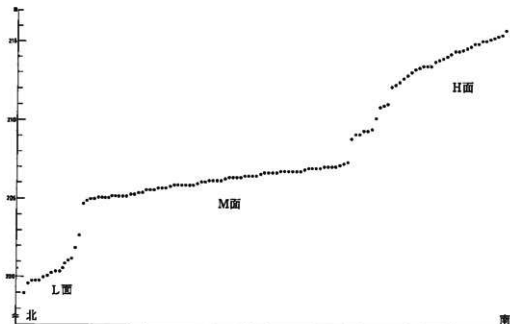


図37 溝状落とし穴標高分布図

なかったが、円筒形のものとは溝状のものに比べると限定された位置に存在するとされている点や数基単位である程度規則的な配列を示すものがある点は注意する必要がある。

6. 周溝

円形周溝 2 基、方形周溝 3 基が検出されている。

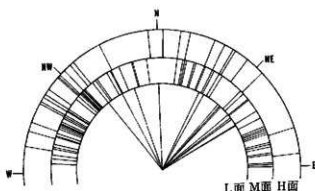


図38 落とし穴主軸方向分布図

(1) 検出状況・重複関係

発掘できたのは J III-201 円形周溝 1 基である。HN-201 方形周溝は重複と削割によって一部を失い、E II-201・M III-201 の各方形周溝と M III-202 円形周溝は調査区域外に出るため、約二分の一が調査できたにすぎない。HN-201 方形周溝は HN-4・同 5 の 2 棟の住居跡（ともに平安時代）に切られている。また M III-201 と M III-202 は一部が重複し、前者が後者を切っている。なお以下の記載は J III-201 のように遺構名を省略して表わしている。

(2) 占地

E II-201 は L 面、残る 4 基は M 面に存在する。E II-201 と HN-201 が平安時代の住居跡の密集地にあるのに対し、3 基はそれが希薄な J III 区とまったく分布しない M III 区を占地している。

(3) 平面形

上述のような検出状況のため不明な部分があるが、隅丸方形は E II-201 と HN-201・M III-201、円形は J III-201 と M III-202 である。J III-201 は溝の南の部分がわずかに切れてつながらないうえ、対峙する両端はわずかにズレを生じている。M III-201・M III-202 の 2 基も南側が切れている。E II-201 は溝が南西部で追えなくなるが、先の 3 基のような形態なのかあるいはなんらかの理由で消滅しているかを判断できない。

(4) 埋土

灰白色浮石を埋土に含むのは EN-201・HN-201・M III-202、それとともに上位に黄褐色火山灰を伴うのは J III-201・M III-201 である。J III-201 の灰白色浮石が部分的に層状に堆積する以外は 2 種類とも大小の塊で含まれる。M III-201 が M III-202 を、2 種類の火山灰を含む HN-4 住居跡が HN-201 を切ることは火山灰の時間的な先後関係と整合的である。

(5) 規模

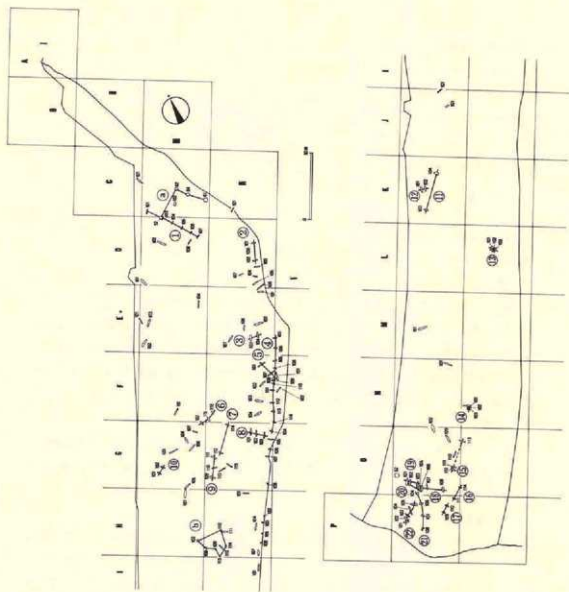


図39 落とし穴分布図

開口部の外径は、EⅡ-201が6.15 m×不明、HⅣ-201が5.3 m×不明、JⅢ-201が9.3×9.5 m、MⅢ-201が12 m±×不明、MⅢ-202が10 m±×不明である。

(6) 溝の幅・深さ・断面形

溝は一定の幅や深さで掘られているのではなく、部分によってある程度バラツキがある。例えば上端幅はHⅣ-201が50～80cm、JⅢ-201が30～103cm、深度はJⅢ-201が16～64cm、MⅢ-201が38～48cmようになる。断面の形状は浅皿状・V字状・U字状・逆台形ほかである。

底部は大小の凹凸が著しいのが一般的である。

(7) 付属施設

全体を調査できたJⅢ-201、溝の内側を広く調査できたHN-201は内部に付属する施設を伴わないことが確認できる。ただ、JⅢ-201は北から北東にかけての溝の内側に沿う細い孤状の溝があり、共存することが考えられる。

(8) 出土遺物

出土遺物はきわめて少ない。土師器甕の細片がJⅢ-201・MⅢ-201から1点ずつ、坏Ⅰ類A2と土師器甕Ⅰ類の小破片がEⅡ-201から1点ずつ、剝片石器がHN-201から1点出土したのがすべてである。

(9) 所属時期

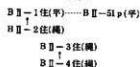
平安時代の遺構である。重複関係や埋土から、EⅣ-201・HN-201・MⅢ-202がⅡ群、JⅢ-201・MⅢ-201がⅣ群に分類できる。

(10) その他

この種の遺構は安比川流域の安代町や浄法寺町では検出例がなく、本遺跡例が初見である。しかし馬瀬川流域の二戸市では、古くは堀野遺跡で検出され、環状溝遺構と呼ばれていた。その後検出例は増え、11遺跡に知られている。隣接する一戸町では上野遺跡に例がある。所属時期は主に奈良・平安時代と考えられている。

1. 矢印で示したものは矢印の先にある遺構が新しい。
2. 破線で示したものは新旧関係が不明である。
3. 満路・焼土遺構・柱穴状ピットは本図に含めていない。また落とし穴は時代を記載していない。
4. 略号：住＝住居跡、柱＝柱・住居状遺構、p＝ピット、p-f＝落とし穴
縄＝縄文時代、平＝平安時代、中＝中世、近＝近世後半あるいはそれ以降、不＝時代不明

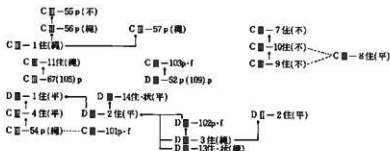
B II区



C II・C III(1)区



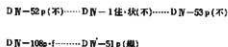
C III(2)・D III(1)区



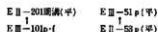
D II・D III(2)区



D IV区



E II・E III区



E IV区

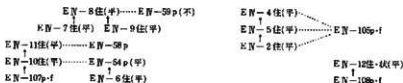


図40 重複遺構新旧関係図(1)

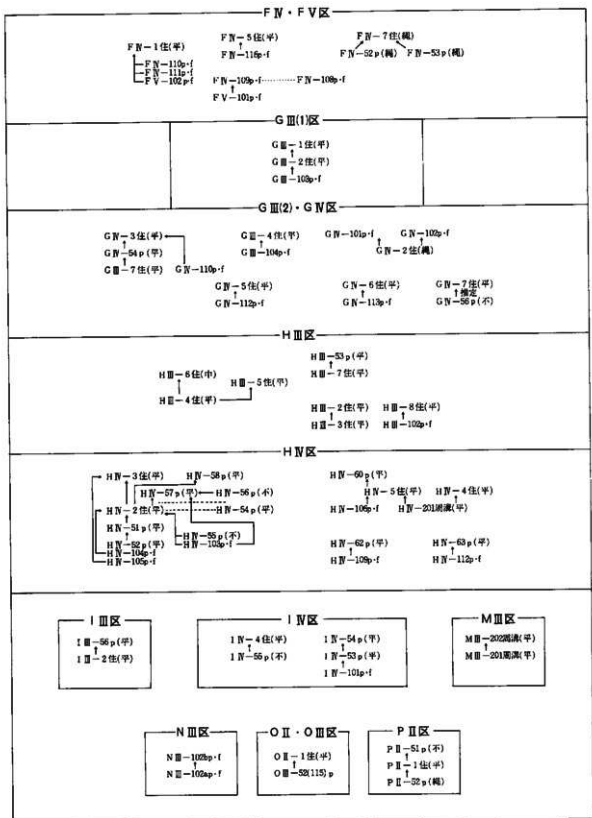


圖41 重複建構新舊關係圖(2)

VIII まとめ(3)—遺物—

1. 縄文土器

早期から晩期の各時期のものが出土している。分類群と相当する型式名などは表3にまとめている。

残存状態は破片が主であり、器形全体を知ることができる資料はⅡ群7類にやや多いものの、他はほとんどないといってもよい。また出土量の主体を占めるのは遺構外や平安時代の住居跡からのもので、該期の遺構からの出土は少ない。

時期別の出土量の比較は厳密なものではないが、後期が破片数では優占し、次いで晩期または前期・早期・中期の順になる。

時期別の分布と地形面の関係はおおよそ次のとおりである。Ⅰ群（早期）は各類をととしてL面が主である。6類・7類になるとM面の北端に少量が分布する。Ⅱ群（前期主体）は1類～3類がL面を主体にし、少量がM面やH面から出土する。4類～7類はそれとは逆にH面の南端に分布の中心が移り、L面やM面からの出土は少量である。Ⅲ群（中期）はM面北部が主で、少量がL面に分布する。Ⅳ群（後期）は分布域がもっとも広範囲になる。L面とM面を主

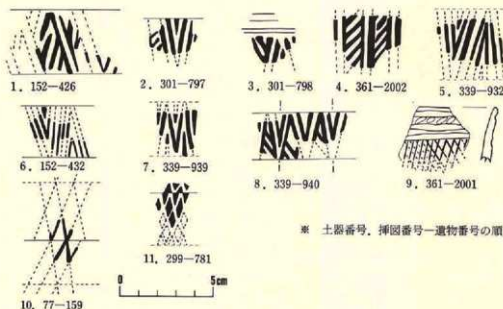


図42 押型文原体模式図

体に、少量がH面から出土する。V群(晩期)はL面でも一段低いA区・B区に分布の中心があり、ごく少量がそのほかのL面やM面・H面に分布する。I群～III群・V群は該期の遺構の分布と密接な関係にある。また、IV群のなかでも初頭～前葉の一群がM面北部やL面の一部に分布密度が高いのは同様の理由による。

いくつかの特徴をもつ分類群について触れ、まとめたい。

I群1類は日計式押型文に相当する。図42は拓影をもとにした原体の推定復元図である。割り付け基本形はV字状文(5～8)・格子目文(9・10)・長菱形文(11)・縦割文(4)がある。1～3についてはよくわからない。V字状文は、重層V字状文(5・7)・介在線のある重層V字状文(6)・斜線入り逆V字状文(8)の文様がある。格子目文は2点とも斜格子文、長菱形文はネガティブなものである。また縦割線は斜線入りである。原体の長さがわかる例では、1が3.4cm、6が2.8cm、8が2.5cmである。8は一回転幅が2.9cmである。以上のほか、5が3.8cm、7が2.9cmの原体の長さが推定できる。

該期の住居跡はDⅢ-12である。押型文とともに縄文を施文する土器が出土している。押型文は1と6がある。それ以外の施文としては口縁

表13 縄文土器分類表

群	順	相当型式名など	時期	住居跡
I	1	日計式押型文	早	1
	a	寺の沢式		
	2	b 吹切沢式		
	c	雲沢AⅡ式?		
	3	a 物見台式	期	1
	b	明神裏Ⅲ式		
	4	ムシリⅠ式 売場遺跡第Ⅷ群土器		
	5	大塚野遺跡第2群土器b類 売場遺跡XⅤ群土器B類 (=第Ⅷ群土器)		
II	6・7	早稲田4類 赤御堂式	前 期 (一部中期?)	6
	8	不明		
	1	早稲田6類・春日町式		
	2	Ⅱ群1類の仲間		
	3	大木2a式		
	4	大木5式		
	5	大木6式。一部は大木7式を含むか?		
	6	円筒下層式b 円筒下層式d ₁		
	7	円筒下層式d ₁ 円筒下層式d ₂		
	8	Ⅱ群7類の仲間		
III	9	円筒下層式	中 期	
	10	大木1式～大木3式 熊谷(1983b)第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期 早稲田6類 不 明		
IV	1	円筒上層式d	後 期	3 (推)
	2	円筒上層式e		
	1	称名寺式		
	14	十腰内Ⅰ式、ほか 大溝式		
V	15	中葉～末葉	晩 期	5
	1	大溝B式ほか		
	2	大溝B-C式		
	3	大溝C ₁ 式		
	4	大溝B式ほか		
V	5	粗製土器		

部にめぐる数条の沈線や胴部への沈線と推定できるものがある。縄文土器にも同じような沈線を口縁部に伴う例がある。胴部では羽状縄文を地文にする例がある。底部の形状が推定できる資料は3点があり、2点は丸底、1点は直径1.7cmの小さな平底である。それらは無文で、外面を磨いている。また、DⅢ-52(109)ピット出土の3は押型文とともに横位平行沈線文・LRが併用されている。

日計式押型文を出土した遺跡は岩手県北部では3遺跡と少ない。馬淵川流域の一戸町北館B・平船Ⅲ、雪谷川流域の軽米町馬場野Ⅱの各遺跡で、馬場野Ⅱ遺跡は2棟の住居跡が検出されている。

I群3類は明神裏Ⅲ式に相当する。3類aの物見台式とは沈線文が押し引きによるかどうかによって識別したが、文様意匠や色調・胎土・分布域などはほぼ同じといってよい。

岩手県北部での出土例は二戸市中曾根Ⅱ・一戸町北館Aなどの遺跡にある。

I群4類はムシリⅠ式に相当する。平底になる資料が1点出土している(第106図315)。最下部に沈線がめぐり、やや揚げ底風になる。

I群5類は、口縁部資料は沈線と内外面に施文される縄文、胴部資料は外面に施文される沈線と刺突文・縄文が文様を構成する。その施文の色調・胎土などから沈線文系のムシリⅠ式と縄文系の早稲田4類・赤御堂式をつなぐ形質をもつものと推定した。類例は少ないが、矢巾町大渡野遺跡や青森県八戸市売場遺跡の例などが相当するであろう。

I群6類・7類は早稲田4類や赤御堂式といわれる一群に相当する。早期の中では破片数をもっとも多く、該期の住居跡は1棟がある。

Ⅱ群1類は早稲田6類・春日町式に相当する。沈線と刺突文・縄文が文様を構成する。沈線は通常のものとして押し引きによるものとに分類できるほか、両者を併用する例がある。該期の住居跡は6棟があり、出土量は7類に次ぐ。

岩手県北部の出土例は二戸市上里遺跡などにあるほか、浄法寺町の調査での出土例が多い。

Ⅱ群3類は大木2a式に相当する。葺瓦状燃糸文や沈線文・貼付文が文様を構成する。やや小型の鉢(第350図1208・1209ほか)は内外面をていねいに磨いた作りである。周辺では二戸市中曾根Ⅱ遺跡にS字状連鎖沈線文を伴う例がある。

Ⅱ群4類は大木5式に相当する。岩手県では岩手町までの分布例があるが(熊谷, 1983a)、その北限を引き上げる資料になるであろう。

Ⅱ群5類は大木6式に相当するが、一部は分離できなかった中期の大木7a式を含むかもしれない。この類の分布の北限も4類と同じ様なことがいえるであろう。

Ⅱ群7類は燃紐や絡条体の側面圧痕が主に口縁部文様帯を構成する一群で、円筒下層式dに相当する。d2が主で、d1を少量含んでいる。共伴する遺構はないが、H面の南端に小規模

な包含層を形成し、前期の中では量的に主体を占めている。6類や8類・9類にも推定も含めたその仲間を含めている。6類は口縁部文様帯への施文方法が7類とは異なり、回転縄文の一群を分類した。第351図1233・1234は円筒下層式でもbとすることができる。しかし同じ回転縄文の施文でも口縁部が1～2cmと狭い第335図912や第351図1235～1237は共伴土器や出土地点、あるいは江坂（1958）や青森県山崎遺跡第II群土器の例からd1に分類する。

II群10類には1類～9類に分類できないが、前期に属すると推定できる一群を含めている。たとえばbは熊谷（1983b）が第I期に分類しているものに相当するが、型式名はまだ付けられていない。また大木2式や大木3式の一部もここに入れている。

IV群は後期の土器である。初頭～前葉に属する1類～14類は時間的な先後関係による分類ではない。たとえば鐘状突起を伴う1類は其中でも早い一群と考えることができるであろうが、個々の類の型式上の位置づけを明らかにすることができなかったため、一括して称名寺式・十腰内1式・大湯式の型式名に相当するとした。この型式の土器群を出土する遺跡は岩手県北部にも非常に多い。

2. 平安時代の土器

土師器と須恵器があり、量的には前者が圧倒的に多い。器種は、土師器が甕・壺・甔・高台付坏・碗・鉢・鉢・高台付鉢・鍋・手づくね土器ほかがあり、須恵器は甕・壺・坏がある。さらに坏がある。数量的にもっとも多いのは土師器甕、次いで坏であり、他は少数である。

坏としている中には、内面をヘラミガキや黒色処理をしない明赤褐色～橙色の一群の土器がある。「須恵系土器」（岡田ほか、1974）や「あかやき土器」（小笠原、1976）ほかの名称で呼ばれているものも含んでいる可能性が強いが、ここではその論議はしない。また、還元炎焼成の須恵器の坏はそれと推定される小破片1点を確認できるだけ皆無に等しく、ここでは取り上げないことにする。したがって、単に坏として記載したのは「酸化炎焼成された坏」という位置づけを与えているためである。分類は坏と土師器の甕について行い、他の器種は数量が少ないために個別に記載するにとどめる。

(1) 土師器甕

土師器甕はロクロ使用の有無によって大別し、器形や法量を識別形質としてそれぞれ細分する。量はロクロを使用しないものが圧倒的に優占する。以下で使用している土器番号は図44～図48の集成図に対応する。

I類：ロクロ不使用の甕

復元（図上復元を含む）できた42個体を主に分類に用い、完存しない個体も一部加えている。口径と器高の関係を表わしたのが図43である。相関指数は0.9と強い相関関係にある。器高を優

先し、小型：S、中型：M、大型：Lに大別する。器高は、最小7.3cmから最大36.9cmで、その比は1：5.1となる。大型は、22.6～36.9cmと14.3cmの幅があり、LS・LM・LLに細分する。口径は、Sは14.5cm以上、Mは17.6cm以上のものがない。またLは器形的に特異である47（15cm）を除いては17cm以下がない。各群で重なり合う領域はもちろんあるものの、そのことや全体的な法量からは口縁部から胴部半ば付近まで残存している個体でも、S・M・Lの大別はある程度まで可能である。

小型：I S

9個体の器高は7.3～11.7cm、口径は10.3～14.4cmである。器高÷口径の指数（口径指数）は0.72～1.13で、0.72～1.0が7点、1.07～1.13が2点である。両者の値の差が小さな「ずんぐり」した器形になる。その特徴から次のように細分する。

1. 口縁部に最大径がある。さらに、a. 短い口縁部が緩やかに外傾するもの（1・2）、b. 口縁部がきわめて短く、外方へわずかに折れ曲がるもの（3）の2種がある。胴部は下半がやや内傾する。底部はわずかに張り出し気味になるものとならないものがある。

2. 最大径は胴部にあるが、口径との差は、6のように値が同じもの

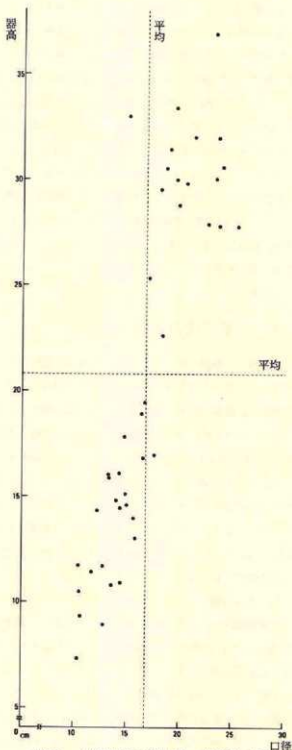


図43 土師器甕I類口径・器高分布図

も含めている。口縁部は短く、ほぼ直立～わずかな外傾となる。胴部は1に似るもの(4・6)と胴部半ばがわずかに丸味をおびて膨らむもの(7・8)とがある。底部形態も1とほぼ同様である。

3. 短い口縁部が強く屈曲し、胴部は丸味をおびて膨らむ(9・10)。

4. 明瞭な口縁部は形成されず、口唇部がわずかに外傾する(11)。

以上のように細分する。記号としては、IS1～IS4と表わし、S1はS1a・S1bとする。この群の調整は、口縁部が内外面とも横ナデが多く、胴部外面はヘラケズリ(5点)とヘラナデあるいは指によるナデ(4点)、胴部内面はヘラナデ(8点)と指によるナデ(1点)がある。木葉底は2点(2・4)がある。胎土は小礫(最大5mm±)を多く含むものが約半数である。また、3・6・11は成形・胎土とも雑である。

中型：IM

15個体の器高は13.0～19.4mm、口径は12.2～17.5cmである。口径指数は0.82～1.15で、0.82～1.0が4点、1.01～1.15が11点である。次のように細分する。

1. 口縁部に最大径がある。さらに、a. やや長い口縁部が「く」字状に外傾するもの(12～15)。胴部は半ばがやや膨らみ、下半が直線的に内傾あるいはわずかに内湾している。b. aに比べていくぶん短い口縁部が「く」字状に緩やかに外傾するもの(16～19)の二つに細分される。底部は張り出しの弱いものが多いほか、15のように外方へ強く張り出すもの、張り出さずに収斂するものがある。

2. 胴部に最大径があり、口縁部が「く」字状に外傾する(20～25)。21のように口縁部と胴部が同じ値のものもここに含めている。胴部は1に似るものと胴部半ばに最大径があって丸味をおびて膨らむものがあることはIS2と同様である。口径指数が1.02の23は丸みがやや強い。他の6点は口径指数が1.13～1.21である。底部はIM1と同様である。

3. 器高に比べると口径・底径とも大きく、「ずんどう形」になる。短い口縁部はわずかに外傾する(26)。

4. 胴部に最大径がある。明瞭な口縁部は形成されず、口唇部がわずかに外傾するだけのもの(27)・ほぼ直立するもの(28)・内湾気味の胴部からいくらか直立気味になるもの(第49図112)がある。27は胴部の下半が直線的に内傾し、底部へ収斂する。

以上のように、IM1a・IM1b・IM2～IM4に分類する。調整は、口縁部内外面は横ナデが大部分であるが、M4の27は明瞭なそれが認められない。胴部外面はヘラケズリが主で、ヘラナデや刷毛目、さらにはそのいくつかの複合例が少数ある。胴部内面はヘラナデが多く、刷毛目が少数にある。底部外面は、木葉底2点(14・26)・砂底2点(12・23)・ヘラケズリ1点(17)である。胎土には小礫を多く含む例が多い。砂底の2点にも多く含まれている。

大型：I L

18個体の口径指数は1.09～2.2と開きが大きい。LS・LM・LLに細分した。LSは、器高が22.6～25.7cm、口径が17.1～18.3cm、口径指数が1.23～1.48である。LMは、器高が27.8～33.4cm、口径が15.0～25.5cm、口径指数が1.09～2.2である。LLは、器高が36.9cm、口径が23.3cm、口径指数が1.58となっている。LMが口径の最小値が小さく、口径指数が2.2と大きくなるのは47が他に比べてやや特異な形態を示すためである。仮にそれを除くと口径は18.0～25.5cm、口径指数は1.09～1.7である。器形によって細分するが、LS～LLを一括している。

1. 長胴形で、最大径が口縁部にある。やや長い口縁部が「く」字状に外傾または外反する(29～32)。胴部の器形は、器高に対して底径が小さく下半がやや急傾斜で内傾するもの(31)とやや底径が大きく内湾気味になるもの(29・30)がある。底部を欠く32も前者であろう。底部は張り出さず収斂する。

2. 1に似た長胴形であるが、最大径が胴部にある。また口縁部と胴部が同じ値の37のほかにもここに含めている。やや長い口縁部は、わずかに外傾(33・35)・「く」字状に外傾(34・36・38・40)・外反気味(37・39)になる。胴部は、やや丸みを帯びているもの(33～36)・全体が直立気味のもの(37)・下半がやや直線的に内傾するもの(38)がある。底部は、33～35・37が張り出し、その他はそのまま収斂する。木葉底は2点(33・38)・砂底は35である。

3. 口径指数が1.09～1.36とやや小さく、口縁部あるいは胴部上半に最大径があつて胴張りする。41はI L 2との区別があいまいである。口縁部はやや長く、「く」字状に外傾するもの(41・42)、外反するもの(43・44)がある。胴部は下半がやや急傾斜で内湾気味になる。底部は43・44が張り出し、43は砂底である。

4. 1～3に比べると口縁部が短く、胴部に最大径がある。a. 胴部上半に最大径がある長胴形で、口縁部がわずかに外傾し、胴部はいくぶん膨らみをおびる(45・46)。b. aに類似するが、胴部はほぼ直立する(47)。c. 口縁部がa・bに比べるとさらに短い(48～52)。口縁部が強く外傾するものとやや緩やかに外傾するものがある。d. 胴部径が大きく、胴張りしてやや球状に膨らむと推定されるもの(53)。口縁部は「く」字状に強く外傾する。以上のうち、底部まで残る47は張り出して砂底である。

5. 4と同様に口縁部が短く、そこに最大径をもつ(54～57)。a. 口縁部がやや強く外傾～屈折し、胴部は上半がわずかに膨らむ(54)。b. 口縁部が強く屈折し、胴部はあまり膨らみをもたずに直線的である(55)。c. 口縁部はわずかに外傾し、胴部は膨らみをもたずに直線的である(56・57)。

6. 口縁部が不明瞭で、胴部からほぼ直線的に口唇部に達する(58)。5 cとした57もここに含める方が良いのかもしれない。

7. 胴張りし、大きな底部へは移行が不明瞭である。59が1点だけである。1～6とは器形の異なり、独立のものとした。

以上のように、ⅠL1～ⅠL7に分類し、4と5はさらに細分している。器面の調整は小型や中型と同様である。

Ⅱ類：ロクロ使用

ロクロ使用の土師器は口縁部から底部まで復元できたのは4点と少ない。口径と器高からみた大きさによる分類は、資料数が少ない危険性はあるが、Ⅰ型に準じて考えることができる。したがって、小型S・中型M・大型Lとし、胴部上半が残存するものについてもⅠ型同様、推測可能なものを分類している。

小型：ⅡS

60が1点である。器高が7.5cm、口径が12.0cm、口径指数は0.63と小さい。口縁部に最大径があり、外傾する。ロクロ痕以外の調整痕は認められず、切り離しは回転糸切りである。

中型：ⅡM

61と67は、器高が13.1cmと14.4cm、口径が15.0cmと15.2cm、口径指数は0.87と0.95である。口縁部と胴部が約二分の一ほど残っている資料も用いて分類する。

1. やや長い口縁部をもつ。その形態によって二つに細分する。a. 口縁部は「く」字状に外傾する(61～65)。最大径が胴部にある63を除いては口縁部にそれを持つ。61～63・65の胴部がやや膨らみをおびるのに対し、64は直線的である。胴部への調整を伴うのは2点である。61は胴部下端から底部がヘラナデ調整されている。65は胴部上半からヘラケズリされ、内面はヘラナデが施されている。b. 同じ様な器形をもつが、口唇部が上方に引き出されている(66)。胴部外面は上部からヘラケズリ調整されている。

2. 最大径がある口縁部は短く、外傾する(68)。胴部は膨らみをおびている。内外面は口縁部を除いた全体がヘラケズリとヘラナデで調整されている点が他とは異なる特徴である。

3. 短い口縁部が緩やかに外傾し、口唇部が上方に引き出される(67)。口縁部に最大径があり、器形は他とは異なり、胴部が膨らまずに下半が内傾する。外面は頸部から底部までヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。

以上のように、ⅡM1～ⅡM4に細分し、M1はさらにM1aとM1bに細分する。

大型：ⅡL

完存する74は、器高が30.9cm、口径が18.9cm、口径指数が1.63である。一部を欠くものも多く図示したが、すべて長胴形で、最大径は胴部上部あるいは半ばにあり、わずかに膨らむ形になっている。口縁部の形態の違いから細分する。

1. 口唇部が上方に引き出されている(69～73)。口縁部は外傾し、長いもの(73)といくぶ

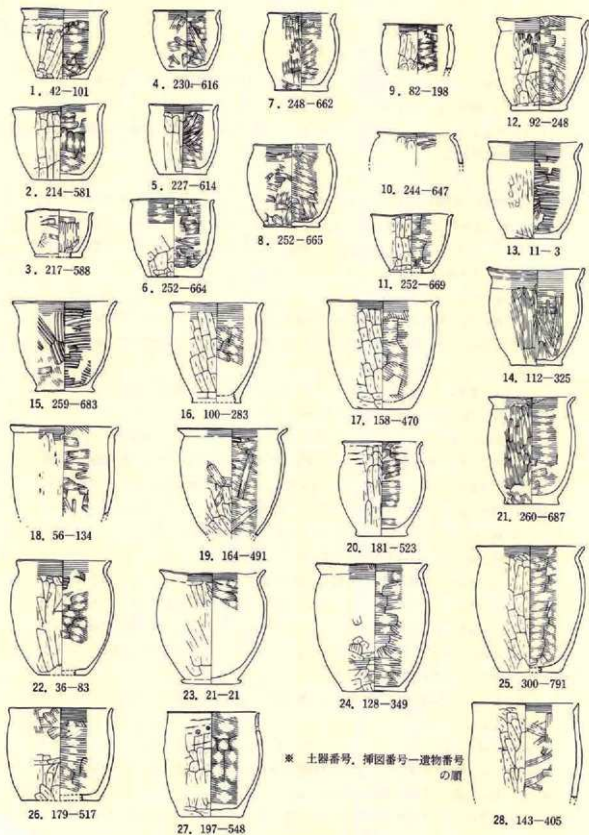


図44 土師器集成図(1)

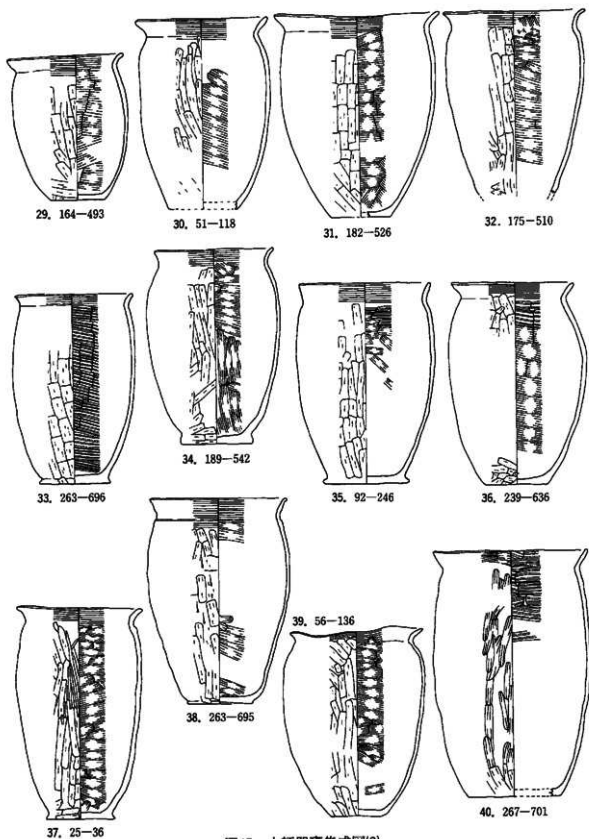
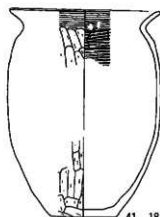
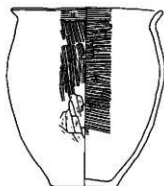


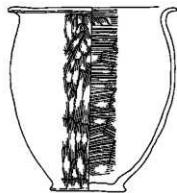
圖45 土師器壺集成圖(2)



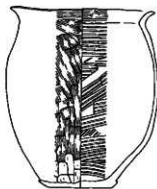
41. 181—524



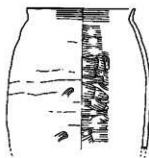
42. 51—119



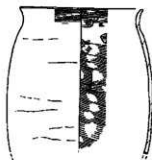
43. 201—560



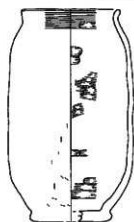
44. 202—566



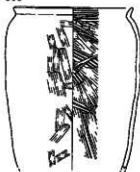
45. 217—590



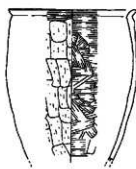
46. 159—475



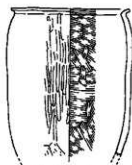
47. 35—79



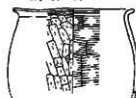
48. 200—559



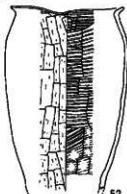
49. 244—646



50. 244—645



51. 245—649

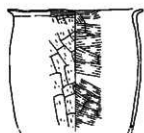


52. 201—561



53. 205—574

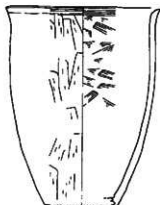
图46 土師器甕集成图(3)



54. 221—601



55. 34—77



56. 134—369



57. 30—52



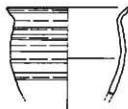
58. 167—496



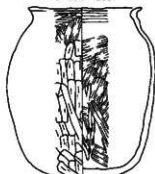
60. 157—467



61. 54—125



62. 163—490



59. 83—203



63. 164—492



64. 217—586



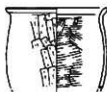
65. 269—704



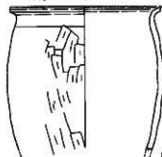
66. 132—363



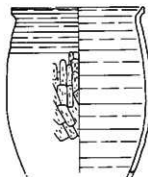
67. 128—352



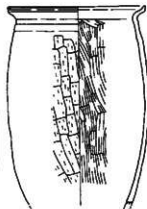
68. 143—404



69. 83—202



70. 84—204



71. 268—702

图47 土師器要集成图(4)

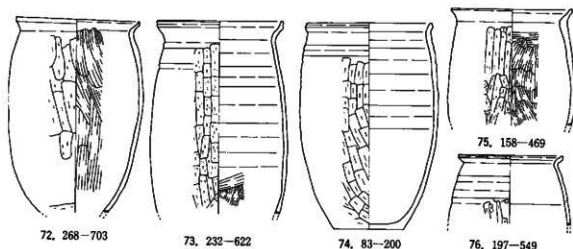


図48 土師器壺集成図(5)

ん長いものがある。すべて外面はヘラケズリされ、71～73は内面がヘラナデ調整される。

2. 口唇部は引き出されず、単に外傾するだけである(74～76)。口縁部が短いもの(74・76)とやや長いもの(75)がある。外面はすべてヘラケズリされ、75は内面にヘラナデが施されている。

以上のようにⅡL1とⅡL2に細分する。

Ⅱ類は、色調が橙色や明赤褐色のものが主で、硬質である。

分類した壺が住居跡間ではどのような共伴関係にあるかを示したのが表14である。住居跡は「埋土」の項で2種類の火山灰の状態から類型化したものをもとに配列している。Ⅰ～Ⅴまで分類し、Ⅰはa・bに細分しているが、ここでは区別をしていない。

用いた資料は図上も含め一定程度復元ができ、分類が可能なものに限定している。出土地点と層位が問題になるであろうが、遺構に共伴する遺物をどのようにして判断するかということがある。住居が焼絶され、埋没していく過程は一律ではない。個々の住居跡の埋没のメカニズムを復元することができ、しかも土器が住居跡の使用時に固有の状態で残存していると推定できる例は皆無に等しい。仮にそう推定できたとしても資料数が少なく、遺物同士の共伴関係を見ることができなくなるために出土地点や層位を無視して一括している。しかしⅠ群は灰白色浮石の下位からの遺物に限定して使用した。それ以外については調査方法に述べた取り上げ方をしているが、調査時に火山灰との具体的な関係をとらえることは物理的な理由により困難であった。住居跡と土器の分類群間の関係は次のようになる。()内は住居跡数である。

表14 土師器變出現頻度表

	CS -5	GS -5	FS -5	FS -4	GS -4	GS -3	GS -2	GS -1	IS -1	IS -2	IS -3	IS -4	IS -5	IS -6	IS -7	IS -8	IS -9	IS -10	IS -11	IS -12	IS -13	IS -14	IS -15	IS -16	IS -17	IS -18	IS -19	IS -20
CS -5	IM1IM1																											
GS -5	IM1	IM1																										
FS -5	IM1	IM1	IM1																									
FS -4			IM2	IM2																								
GS -4					IL1	IL1	IL1																					
GS -3					IL1	IL1	IL1																					
GS -2					IL1	IL1	IL1																					
IS -1								IS2	IS2																			
IS -2								IS2	IS2	IL4	IL4																	
IS -3								IS2	IS2	IL4	IL4																	
IS -4								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -5								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -6								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -7								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -8								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -9								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -10								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -11								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -12								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -13								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -14								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -15								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -16								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -17								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -18								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -19								IL4	IL4	IL4	IL4																	
IS -20								IL4	IL4	IL4	IL4																	

IS2はII群(3棟)に関係が深い。IM1はI群(3棟)とII群(4棟)、IM2はI群(3棟)とII群(3棟)・IV群(2棟)、M4はII群(2棟)に出現する。IL1はI群(2棟)とII群(6棟)、IL2はI群(4棟)とII群(13棟)、IL4はII群(6棟)、IL5はIV群(2棟)に共伴する。II群は共伴関係を知る資料がない。

逆に群の側から見ると次のようになる。

I群はIM1・IM2・IL1・IL2、II群はIS2・IM1・IM2・IM4・IL1・

IL2・IL4、IV群はIM2とIL5を共伴する。使用することができた数が少ないうえ、分類群の住居跡数を反映したこともあって、I群とII群、IV群にしか表われてこない。しかし、以上の関係からは口縁部が比較的長く明瞭なIS2・IM1・IM2・IL1・IL2はI群とII群に出現頻度が高くなり、口縁部が短く、屈折あるいはほとんど直立して立ち上がるIL4やIL5は、L4がII群に高く、IL5がIV群に出現する。

岩手県北部では平安時代の後半になると口縁部が短い壺が卓越してくる傾向があり、それに基づいた編年が行われてきていた（例えば高田，1981・関，1983）。資料数が少ないことと分類そのものが必ずしも適切ではないが、本遺跡でもそのタイプはII群とIV群に表われており、もとにした住居跡の分類群になんらかの関わりをもつことを予想できるであろう。

(2) 坏

ロクロ使用の有無によって大別できるが、復元できたロクロ不使用の坏は3点と少なく、個別に記載し、細分はしない。以下で使用している番号は図50・図51に対応する。

a. ロクロ不使用の坏

1は口径に対して底径が非常に大きく、平べったい器形である。口縁部の外面が横ナデであるほかは指ナデで調整され、胴部下端は手持ちヘラケズリが施されている。胴部にはヘラ書を伴う。2は器壁が非常に厚い。外面は、口縁部がヘラミガキ、胴部下半がヘラケズリされている。内面はていねいなヘラミガキが施されているが、黒色ではない。未処理なのか二次的な加熱等による消滅なのかはわからない。3は大型の坏である。底部は平底風の丸底である。内外面ともていねいなヘラミガキが施され、内面は黒色が一部に残る。

以上の例は復元され、器形や調整が明らかになったものである。単に坏として扱っている破片のなかにそれらを含んでいることがあるかもしれない。

b. ロクロ使用の坏

内面の調整や黒色処理の有無から二つに大別し、それぞれを細分している。なお、再調整はすべて手持ちヘラケズリである。

内 面	切り離し技法	再調整の有無と部位	
ヘラミガキ+黒色処理 I 類	静止糸切り (静止切り離し)	A 〇 し	0
	回転糸切り	B 胴部下端	1
非ヘラミガキ+非黒色処理 II 類	底部全面が再調整され、 切り離し技法不明	C 胴部下端～底部周辺 底部周辺	2 a 3 b
	技法不明	D 胴部下端～底部全面	4 a b
	欠 失	E 底部全面	5

以下の記載は I A 0、I A 1 のように記号化して表わすことにする。なお、再調整されていても部位を明記する必要がない場合は I A x・I B x ほかのように表わしている。

ここで 2、3 補足的な説明を加えておく。第 1 は A に () で入れた静止切り離しについてである。土師器や須恵器の切り離し技法にはヘラ切り、静止糸切り、回転糸切りが知られている。本遺跡ではヘラ切りの例はない。静止切り離しとした理由は、静止状態での切り離しと推定できるものの、切り離しの工具が撚紐である場合とそれに疑問が残る場合とがあるが、工具の問題まで立ち入ることができなかったためである。糸切りと推定できる例はそうに記載しているが、一部は静止切り離しと仮称しておいた。

第 2 は口縁部の外面を横位のヘラミガキをする I 類についてである。E II-52 ビットからの一括出土例に多いほか、図示例では C II-4 住居跡 (第 99 図 280) などから出土している。破片を含めると 29 棟の住居跡から出土している。ヘラミガキの幅は 5~20mm ほどである。ある分類群に特定されるものではなく、I A 2 a・I A 3・I C・I B 0 に確認できる。第 3 は内面だけでなく外面にもヘラミガキと黒色処理を施すものについてである。図示例では 4 に 1 例があり、I A 2 a に分類できる。そのほかには 4 棟から破片で出土しているだけで、量は少ない。したがって、独立の分類群を設定せずに I 群のなかに含め、必要に応じて記載することにする。

分類に際しては成形技法や調整技法とともに法量を重視している。図 49 は底径÷口径×100 を指数とする分類群ごとの分布を表わしたものである。I・II 類に分けずに切り離し技法と再調整でその指数をみていく。A 0 は 49.2~56.1 (平均 52.7)、A x は 41.7~57.4 (平均 43.3)、B x は 33.1~42.5 (平均 39)、B 0 は 32~45.2 (平均 37.9) の間にあり、分布域の違いを見えている。A と B が重なる領域は A x の最小値である 41.7 と B 0 の最大値である 45.2 の狭い範囲に限られている。C は 33.8~48.5 (平均 42.8) に分布し、A 0 と B 0 の両方の分布域に重なってくることが見ることができる。

表 14 は坏の出現頻度を示している。資料の扱いは壺と同じであり、口縁部まで残り、復元実測できた資料を用いている。ただ住居跡の配列は群を変えてはいないが、若干変更している。それは器種が異なることを優先し、それぞれの出現頻度を知ることを目的にしているためである。

I 類は次のようになる。I A x・I C は I 群と II 群に共伴する。I B 0 は I 群・II 群・IV 群・V 群に共伴し、前 2 者に 69% が出現する。II 類は共伴例が少ないが、II A x が II 群に共伴する。逆に群の側から見ると次のようになる。

I 群は I A x・I C・I B 0、II 群はそれらに II A x を加える。IV・V 群は I B 0 のみ見られる。

I A x と I C・II A x は I 群と II 群に限定される共伴関係を示す。I B 0 は I 群・II 群・IV・

V群と出現範囲が広いが、その器形的な特徴を比較すると次のような点が異なる。I群・II群の7点は口径指数が33.3~35.5、IV・V群の4点は37.5~44.1との分布域に違いがあり、重なり合わない。前者は後者に比べると底径が小さい特徴が認められる。ただ資料数が少ない危険度も考慮に入れる必要があらう。

IAとIBの共存関係を推定させる資料は隣接する安比内I遺跡にもある。2棟の住居跡のうち、BI-1住居跡は十和田a火山灰を埋土中・下部に層状に伴い、上位には苫小牧火山灰を塊で含む。その十和田a火山灰の下位から、本遺跡の分類でIA2（次からの記載は本遺跡での分類を使用）とIB0が共存して出土している。口径指数は、前者が46.0、後者が30.2である。また北側で隣接する広沖遺跡のBV-1住居跡は埋土中・下部に灰白色浮石、その上位に黄褐色火山灰を塊状に含む。カマド支脚にIIA2とIB0、床面や床面下からIA2が2点とIB0が1点出土している。口径指数は、IA2が42.0、IIA2が43.8、IB0が34.2である。秋田県では浄法寺町に近い鹿角市高市向館遺跡の第31号住居跡が参考になる。埋土中部に大湯浮石（=十和田a火山灰）を層状に堆積し、出土状態が不明であるが、IA1とII類Bで回転ヘラケズリによる再調整をもつものが一緒に出土している。

以上のような例からはIAxとIB0が共存する可能性が指摘でき、またIB0の口径指数は先に指摘した本遺跡の例に合致する。ただ安比内I遺跡の埋土は本遺跡の埋土の類型には見られないものであり、広沖遺跡の例は本遺跡のIV群に分類したものに相当することから、今後、比較・検討する必要がある。

ここで坏だけでなく甕や須恵器も含めた静止糸切りについて周辺の遺跡の例を取り上げる。

静止糸切りの技法をもつ例は非常に少ないようである。上述の遺跡例を除けば、浄法寺町桂平遺跡にIIAxとIB0があると報告されている。馬淵川流域では一戸町田中4遺跡に「静止糸切りか」という記載をもつ坏がある。青森県では八戸市根城跡・売場遺跡に例があり、和野前山遺跡に「静止糸切りの可能性のある」とされる例があるが、いずれも少量である。米代川流域では先の高向市館遺跡のほかは秋田城、北上川中・下流域では志波城跡・盛岡市柿ノ木平遺跡・胆沢城跡に例がある。探すことができなかった出土例はもちろん多いかもしれないが、静止糸切りは単に技法の問題にとどまらず、系統的にどこに連なるかが問題になるであらう。そして本遺跡を理解するための有効な要素の一つであることが

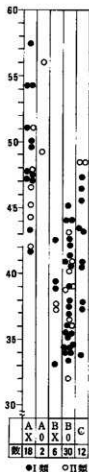


図49 坏口径指数

表15 坏出现频度表

[illegible]

予想される。

(3) その他

a. 砂底

土師器壺Ⅰ類とコップ形土師の外面に意図的に砂を付着させる例がある。代表的な例を図53に示した。砂の付着の仕方はいくとおりかある。1・2は全面、4・5は周辺部を除いた内側、6は逆に中央を残した広い範囲、3は中央の狭い範囲、に砂が付着している。壺の底部は胴部からそのまま移行するものと底部が張り出し気味になるものとがある。器形全体を知ることができる例ではIM1a・IM2・IL2・IL3b・IL4bにある。

この種の土器は、桜田(1982)が砂粒付着壺形土器と呼び、「津軽平野と米代川流域に分布す

る」としているものであり、一般には「砂底」として知られている。岩手県でも例は少ないもののいくつかの遺跡から出土している。二戸市府金橋遺跡は奈良時代の土師器甕に1点があり、九戸郡江刺家遺跡はロクロ不使用甕に「砂が付着（砂底）するものが多い」としている。北上中流域では江釣子村下谷地A遺跡に5点が知られている。浄法寺町の遺跡では田余内Ⅰ・桂平・広沖・五庵Ⅰ・五庵Ⅲの各遺跡から出ている。五庵Ⅰ遺跡の例はロクロ使用の甕にも付着している。また青森県八戸市根城跡にも例があり、先の桜田の指摘よりも若干分布域が広がっている。貝梨峠を境に水系は米代川と安比川に分れるが、その安比川沿いの浄法寺町の遺跡に出土例が多いことは注目されるであろう。

b. 刻線を伴う土器

土師器甕Ⅰ類のなかに、胴部下部から底部外面にヘラ状工具による刻線を伴う例が12棟の住居跡から15点出土している。すべて破片のため不明な部分があるが、7～9は胴部下部から底部全面に刻線されている。残る12点も、1点が胴部下端で止まることが推定される以外は底部にも施文されるようである。刻線は細く鋭い工具によって深く刻まれる直線がほとんどである。斜行するものが主で、重なり合って斜格子状になる例がある。

住居跡分類群との関係では、FN-3・OⅡ-1の2棟の住居跡はⅠ群に分類でき、灰白色浮土層の下位から出土している。

この種の土器の全体形を知ることができる例が浄法寺町の大久保Ⅰ遺跡にある(図53)。住居跡から出土したロクロ不使用の(大型の)甕の胴部下部から底部全面に施文されている。他に類例は少ないらしく、秋田県カウヤ遺跡の遺構外出土の甕胴部破片に類似のものを見ることができるが、内面にも刻線を伴う点が異なる。秋田県鹿角市歌内遺跡の例は木葉底のうえに刻みを伴う。しかし、歌内遺跡の例は本遺跡のものよりは安代町扇畑遺跡の「米」に近い記号に共通する可能性がある。むしろ盛岡市太田方八丁遺跡(志波城)の鍛冶施設と推定される住居跡から出土し、「特異な例」とされている胴部下端から底部外面に刷毛目が施文される例に共通性が強い印象を受ける。

c. その他の土師器

少数ではあるが甕以外の土師器が出土している(図53)。

10は甕である。ロクロは使用していない。1個を欠くが、胴部下部に2個1対の小孔を伴う。胎土は小礫を多く含み、作りが粗雑である。土師器甕Ⅰ類との識別が破片では難しいが、確認できたのはこの1点だけである。11・12・14は鉢である。14は小型、12は大型のもので、内面を黒色処理している。11はそれらと器形が異なり、底部から直線的に外傾し、口縁部に違する。16は台付鉢である。ロクロを使用するが、身部の外面にヘラケズリされている。橙色で硬質の製品である。13は図上復元をしている。青森県羽黒平遺跡などにみられる鍋形土器に類似する。



1. 94-253



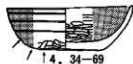
ロクロ不使用

2. 157-463



3. 200-553

I 類 Ax



4. 34-69



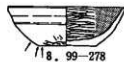
5. 127-340



6. 108-317



7. 99-279



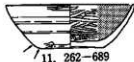
8. 99-278



9. 99-276



10. 217-585



11. 262-689



12. 99-280



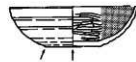
13. 262-688



14. 207-576



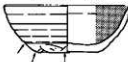
15. 127-344



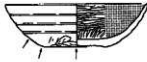
16. 30-50



17. 21-18



18. 157-464



19. 115-331

I 類 Bx



20. 235-625



21. 235-624



22. 56-132



23. 262-690

I 類 B0



24. 259-681



25. 112-323



26. 241-639



27. 137-371



28. 212-579



29. 157-461



30. 175-508



31. 112-321



32. 235-623



33. 30-51



34. 169-501



35. 82-195



36. 224-605



37. 178-513



38. 224-607



39. 235-626

図50 坏集成図(1)

※ 土器番号、挿図番号一遺物番号の順
11はI類C

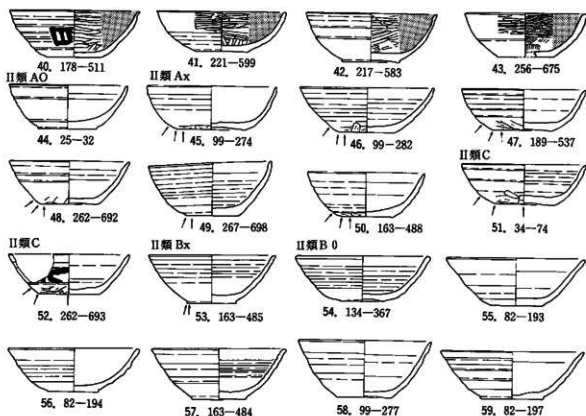


図51 坏集成図(2)

17は胴部がかなり膨らむことから大型の壺に分類したが、甕としてもよいかもしれない。15は坏よりも小型であり、碗として分類した。ロクロ使用で、回転糸切り痕を残す。それ以外の内外面はいいねいなヘラミガキと、黒色処理が施されている。18・19は短頸壺である。18はロクロを使用しているが、切り離しは不明である。19は器面全体がいいねいにヘラミガキされている。6はコップ形の小型のもので、底部は砂底である。

以上のうち、11や16は色調や硬度ほかの点でいわゆる土師器の範疇からは逸脱する。「あか焼き」ほかといわれる一群を設定するべきであろうが、その試みはしていない。坏同様、甕も含めての全体の作業になるためである。

d. 須恵器

甕あるいは壺の破片を出土している住居跡は多い。しかし復元あるいは図示できる例は非常に少ない(図52)。1・3は長頸壺である。中型程度の大きさである。4は甕である。3点は胴部下半をヘラケズリしている。2は小型の甕で、略完形である。回転糸切り痕を底部に残す。

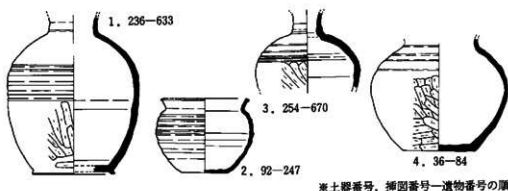


図52 須恵器集成図

坏は焼き損じと考えられる赤褐色の破片1点がHN-4住居跡から出土しているだけである(第42図100)。外面にヘラ書を伴う。

e. 墨書・ヘラ書

墨書を伴う土器は墨痕痕1点も含めると15点が住居跡から出土している(図54)。すべて坏の体部外面に確認できる。坏I類13点に対し、坏II類は2点である。底部まで残存し、分類可能なものはIB0が4点、IA3、IICが1点ずつである。

文字を判読できる例は少ない。「貞」2点(1・2)は正位、「箇」カ(4)1点は倒位、「日」1点(5)は横位である。3は該当する読みが不明である。6は横位の「日」と読める可能性がある。8は一部欠けているために不明な部分があるが「+」の記号、11は「U」の記号かもしれない。「貞」2点はI群としたGN-6・CIII-5の2棟からの出土である。

周辺の遺跡の例には次のようなものがある。

「貞」は矢巾町一本松遺跡に例があり、住居跡出土の須恵器坏の底部に見られる。秋田城からは2点出土している。須恵器坏の底部に書かれ、1点はヘラ切り、1点は糸切りである。吉沢(1984)は福島県矢ノ戸遺跡にあるとしている。「箇」カとした例は秋田城に1点あり、赤褐色土器の坏(糸切り)の底部に伴う。「日」とした例も秋田城に3点がある。

ヘラ書されているもののうち、文字と推定できるのは14であるが、破片のために判読不能である。焼き損じの須恵器の坏の体部外面に伴う。沈線は細く鋭い。「+」記号はクロコ不使用の坏(第94図253)の体部外面と土師器壺I類の口縁部内面に2点(第134図368・第201図562)、「x」記号は坏I類Bxの底部外面(第262図690)と土師器壺I類の肩部外面(第179図519)や底部(第192図546)に認められる。253や562の例は沈線は鈍く浅い。

3. 植物遺体

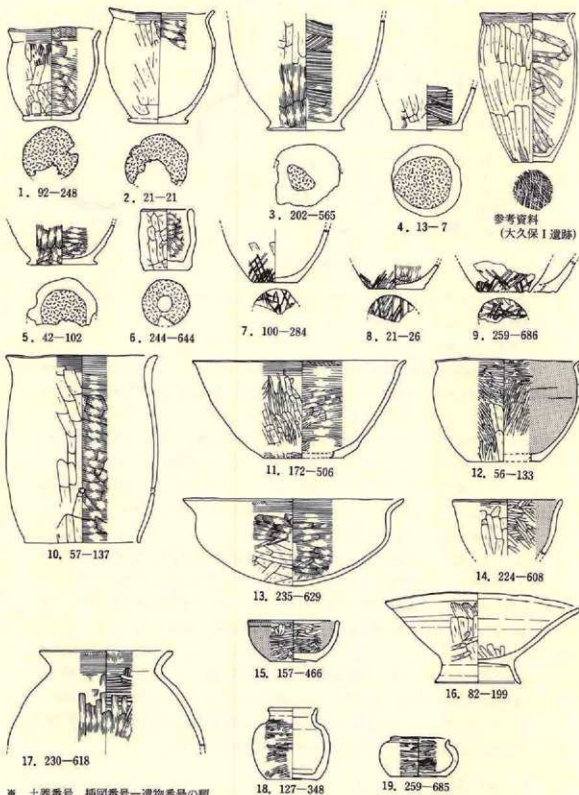


図53 砂底・刻線土器・各種土師器

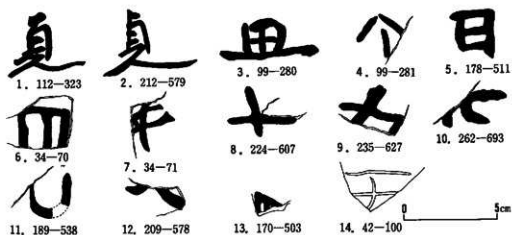


図54 墨書・ヘラ書集成図

縄文時代と平安時代の遺構から出土した堅果類についてまとめる。

(1) 縄文時代

CⅡ-3・DⅢ-8の2棟の住居跡、CⅢ-51・同-54の2基のピットからクルミの破片が1点ずつ出土している。それらは前期前葉の遺構である。

(2) 平安時代

HⅢ-5・IⅢ-1・同2・IⅣ-2・OⅡ-1の5棟の住居跡からクルミが1点ずつ出土している。焼失住居跡であるHⅣ-3住居跡は比較的多くのクルミを出土している。PⅡ-1住居跡からはトチの実が出土している。2号カマドの煙道部から煙出し部にかけての部分に多量に存在していた。くりぬき式の煙道であり、意図的に埋められた可能性が高い。ピットではGⅣ-51からクルミ1点が出土している。

4. 漆関連の遺物

CⅢ-3・DⅢ-7・CⅣ-1の3棟の住居跡から出土した漚し紙と漆膜がある。漚し紙は漆液中の夾雑物を漚過するために使用された和紙で、摺りがかった状態で固化している。色は赤色・赤褐色で、直径は3mm前後が主体を占め、太い例は9mmになる。形状は、第332図に示したように棒線状のものとそれをさらに棒に巻きつけて搾り取ったものとの2種類^{註1)}がある。固化して折れやすい状態にあるため、破片がほとんどである。前者の残存最大長は22mm、後者の最大径は21×28mmである。後者は3本一束の棒の間に潜らせるようにして巻きつけているらしく、棒の樹皮が内側にわずかに付着している。漆膜はCⅣ-1住居跡から出土した。直径66mmの円

形で、きわめて薄く、色調は暗赤褐色である。木製の容器の底に付着した漆液が容器の腐敗のあとに残ったことが考えられる。

同じ浄法寺町の五庵Ⅱ遺跡は本遺跡と同様の「漚殻」^{註2)}とともに手形と砥石が中・近世の住居跡から出土している。

註1・註2) 浄法寺町民俗資料館佐藤喜蔵氏のご教示による。

IX まとめ(4)―遺跡―

1. 平安時代の集落

住居跡埋土に含まれる2種類の火山灰を鍵層にしてⅠ～Ⅴとして先に類型化しているが(Ⅷ章)、ここではそれらを群としてその特徴を述べ、次に土器を主にした遺物との関係を記載していく。遺構名は種類名を省略し、主軸方向はN-Sのように90°の範囲で表わすことにする。

Ⅰ群：灰白色浮石を層状に含む。その状態から、a. 単層であり、葉層の発達が認められる場合が多いもの、b. 単層であるが、大小の塊が集合しているもの、に細分した。それらがブライマリアが再堆積かは問題になるであろうが、少なくともどちらの場合でもⅡ群以降よりは降下時に時間的に近いことが推定でき、bはより再堆積の可能性が強いことが指摘できるであろう。ここではそれに対しては判断を保留にする。次の16棟を分類している。

L面：CⅢ-4～CⅢ-6・DⅢ-2の4棟

M面：FⅢ-1・FN-3・GⅢ-3・GN-1a(・1b)・GN-5・GN-6・HN-6・IⅢ-2の9棟

H面：OⅡ-1・OⅢ-1・OⅢ-2の3棟

L面の4棟はC区・D区の狭い範囲に集まっている。床面積は8.3～45.9㎡で、92棟中最大であるDⅢ-2が大型、CⅢ-5が中型であるほかは小型である。カマドの存在が不明な1棟を除いては主軸方向はS-Eが3例、N-Wが1例である。カマドを作り替えることによる主軸方向の動きは1例にあり、N-Wから変化している。

M面の9棟はF区からI区の南北約80mの間に分布する。床面積は6.3～38㎡で、小型が7棟、中型と大型が1棟ずつである。主軸方向はN-Wが6棟、N-E・S-E・Sが1棟ずつである。N-Wの6棟は壁中央にカマドを設置する特徴がある。GIV-1bは浮石層は確認できないが、重複関係のあり方から時間的に近いものと考えて分類した(重複をあらわすa・bについては以下同じものとする)。

H面は住居総数が4棟で、この群の3棟は近接して存在する。床面積は12.2㎡(小型)が1棟、26.2㎡(中型)が2棟である。主軸方向はS-Eが3例、N-Wが1例で、後者はS-Eからカマドの作り替えがある。OⅢ-1とOⅢ-2の関係が注目される。両者が一方の煙出し部先端から1mも離れていないぐらいに壁と接していること、埋土最上部に灰白色浮石を伴い、下位の埋土構成も似ていること、煙出し部に礫を数段積み上げる特殊な作りが共通し、そのような例は他にみられないこと、主軸方向が同じであること、小型と中型であることがその

特徴である。それらの要因は2棟に強い結びつきがあり、時間的にも近い関係にあることを推定させるが、位置関係からは同時存在と考えることは無理がある。遺物の出土量はともに少ないが、とくにOⅢ-2に少ない。

Ⅱ群：灰白色浮石を塊として埋土に含む。浮石は粒径や含まれる量にバラツキがあるが、一括して扱い、それについては後述する。L面とM面に35棟が分布する。

L面：CⅡ-1・CⅢ-8・DⅡ-1・DⅡ-2a（・2b）・DⅡ-3・DⅡ-4・DⅢ-4・EⅢ-1の9棟

M面：EⅣ-6・FⅣ-5a（・5b）・FⅣ-6・FⅣ-9a（・9b）・FⅣ-1a・GⅢ-1・GⅢ-4・GⅢ-6・GⅢ-7・GⅣ-3・GⅣ-4・GⅣ-7a（・7b）・HⅢ-4a（・4b）・HⅢ-5・HⅢ-7・HⅢ-10・HⅣ-2・HⅣ-5・IⅣ-2・IⅣ-3・JⅣ-2・JⅣ-3の26棟

L面の9棟はC～E区の南北80mの間に分布する。床面積は6棟が計測でき、4.7～43.4㎡である。小型が5棟、大型が1棟となる。主軸方向は、N-Wが2棟、N-Eが3棟、S-Eが2棟である。N-Wの2棟はカマドが壁中央に設置されている。この面ではDⅡ-3・DⅢ-4・EⅢ-1が近接して存在する。床面積が6.9～9.3㎡と小型であること、大小の灰白色浮石を多量に含むこと、主軸方向がほぼ同じであること、後2者はカマド脇に、壁をえぐり込むようにして作る小ピットを伴うことが共通する。

M面の26棟はE区～J区の広い範囲に分布する。床面積は18棟で計測できるほか、3棟が同規模と推定され、6.4～42.7㎡である。小型が14棟、中型が5棟、大型が2棟である。小型と中型は同形・同規模のもの1棟と2棟をそれぞれに含む。主軸方向は、N-WとN-Eが5例ずつ、S-Eが13例、S-Wが2例である。カマドの動きは、S-E⇄N-Eが1例ずつ、S-E→N-Wが1例にみられる。N-Wの5例はカマド本体が不明な1棟を除いては壁中央に設置される特徴をもつこと、2基のカマドを伴うが、その新旧関係が不明な1棟を除いては灰白色浮石を多量に含むことが共通する。

Ⅲ群：埋土だけでなく、掘り方埋土＝床構築土にも灰白色浮石と同一物と推定されるものを塊状に含む点で識別した。掘り方埋土には少量がみられるだけである。L面とM面に分布する。

L面：EⅢ-2

M面：FⅣ-（1a）・1b・HⅢ-8・IⅢ-3・IⅣ-1・LⅣ-1の6棟

L面の1棟は掘り方で確認できたもので、床面積は13.1㎡、主軸方向は不明である。

M面の6棟は、不明な1棟を除いては4.3～12.7㎡の床面積をもち、すべて小型である。1棟は同形・同規模と推定したものである。主軸方向は、N-W・N-E・S-Eが2例ずつ、S-Wが1例である。カマドの作り替えによる主軸方向の動きはN-W→N-WとS-Eがある

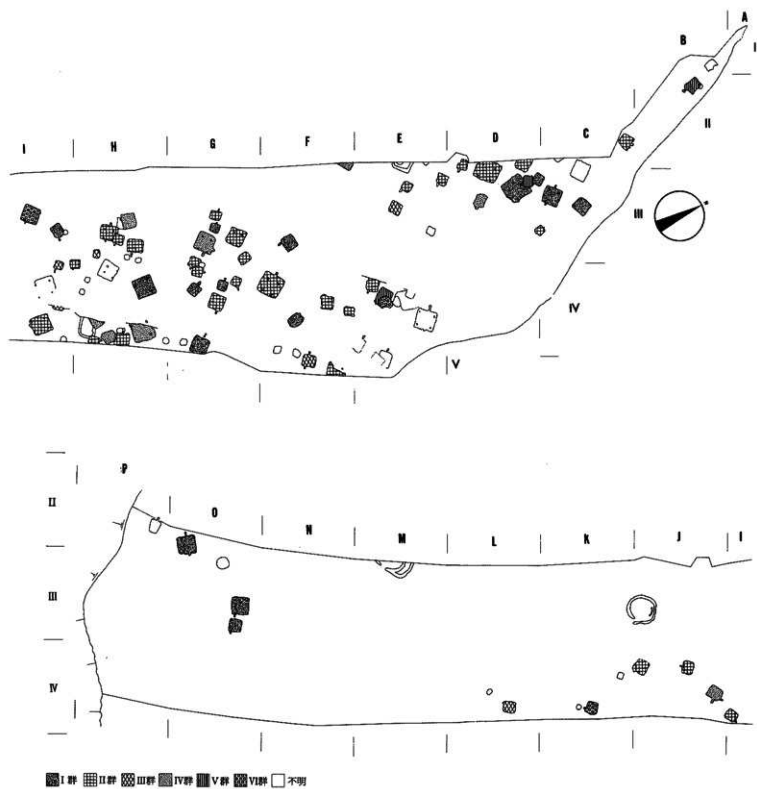


图55 平安时代住居跡分類図

(FN-1)。

IV群：2種類の火山灰を含み、1例以外は灰白色浮石が下位、黄褐色火山灰が上位に位置する。すべて塊状に含まれる。L面とM面に分布する。黄褐色火山灰の量は少ない。

L面：DⅢ-5・FⅡ-1の2棟

M面：GⅢ-5a・HⅢ-2・HV-1・HV-3・HV-4・JN-1a（・1b）の7棟

L面の2棟のうち、1棟は大部分が調査区域外にある。DⅢ-5は床面積が12.9㎡（小型）、主軸方向はS-Eである。

M面ではG区からJ区の南北約80mの間に分布し、HV区に3棟が集中して存在する。床面積が計測できる6棟は10.0～44.7㎡で、小型4棟、中型1棟、大型1棟である。小型は同規模と推定した1棟を含む。主軸方向は、N-Eが1例、S-Eが2例、S-Wが3例である。S-Wの3例はS-2'-WからS-12'30'-Wとほぼ南方向である。カマドの移動はS-E→N-Eが知られる。また、GⅢ-5aはGⅢ-5bのN-EからS-Eへ動いているものであろう。

V群：灰白色浮石を欠き、黄褐色火山灰だけを塊状に含む。L面とM面に散在する。

L面：BⅡ-1・DⅢ-1の2棟

M面：EN-10

L面の2棟のうち、1棟は一段低いBⅡ区にある。床面積は1棟が計測でき、8.8㎡（小型）である。主軸方向は、S-E・S-Wがそれぞれ1棟である。

M面の1棟は北端に位置する。床面積は16.9㎡と小型である。主軸方向は、カマドについての推定が正しければS-Eである。

VI群：2種類の火山灰を含まない。M面に3棟が散在する。

M面：EN-11・IⅢ-1・KN-1

床面積・主軸方向は2棟で計測でき、12.0㎡（小型）と25.9㎡（中型）、S-E・S-Wが1棟ずつである。

その他：上述のI群～VI群に含まれないものが19棟ある。多くは著しい削剝を受けていることや重複、あるいは調査区域外に大部分があることによって埋土を知ることができないためであるが、残存状況が良好であってもI群～VI群に分類するのに困難を感じるCⅡ-4やPⅡ-1の例も含めている。L面～H面に分布する。

L面：BⅠ-1・CⅡ-2・CⅡ-4a・4bの4棟

M面：EN-1～EN-5・EN-7～EN-9・FV-1b・GⅢ-2・GⅢ-5b・HⅢ-3・HⅢ-9・IN-4の14棟

H面：PⅡ-1

L面の4棟のうち、床面積を計測できるのは2棟で、13.5㎡（小型）と25.0㎡（中型）である。この例は前者から後者へ拡張されている。主軸方向はN-Wが1例、N-Eが2例で、カマドの作り替えによる移行はN-E→N-Wにみられる。

M面の多くも床面積・主軸方向が計測できない。床面積がわかる6棟は5.7～39.0㎡で、小型が3棟、中型が1棟、大型が2棟である。主軸方向は、N-Wが4棟、N-Eが2棟、E・S-E・S-Wが1棟ずつである。

H面の1棟は、床面積が11.0㎡で、小型である。主軸方向はN-WとN-Eであり、カマドの作り替えによって後者から前者へ移行している。

以上、各群とそれらに分類できない一群をその他として記載してきた。問題点が多くあるが、そのいくつかについて触れておく。

I群の灰白色浮石の占める層準は同一ではない（図26）。1. 埋上最上部を構成する例、2. 埋土中・下部に認められる例、3. 床面直上、あるいは床面を覆う例の大きさは3つに分類できる。個々の住居跡が埋没する過程に働く要因を明らかにできないまま断定はできないであろうが、1と3の場合には時間的な差があることが推定でき、分離して考える必要があろう。

II群はもっとも多くの棟数を含む。埋土に含まれる大小塊の量や検出状況を一部考慮外においているために必然的に多くなった面もある。とくに、壁高が低いものや上部を一部削割されている例に疑問を残している。II群同士の重複関係は3例に認められる。1例は古期住居跡の埋土中に床面を構築し（DⅡ-1とDⅡ-4）、2例は部分重複で直接の切り合い関係にある。後2者では灰白色浮石を少量しか含まないものが多量に含むものを切っている（GⅢ-7とGⅣ-3、HⅢ-4とHⅢ-5）。しかし、そのことから量的に多いものが少ないものに比べて時間的に先行するとは必ずしもいえない。I群でも灰白色浮石層の下位に小塊をわずかに含む例が数棟で観察でき、上部を削割された場合にはI群と識別できない場合もあることなども考慮しなければいけないためである。

III群は掘り方埋土に灰白色浮石と同一物と思われるものを含む点で識別した。しかし、含まれる量は少なく、調査時にもれなく観察できているかどうか問題の一つとして残る。

IV群の黄褐色火山灰は少量で、塊として入る。下位の灰白色浮石は個々の住居跡によって量にバラツキがある。HⅢ-2は少量含まれる両者の層準が逆転している。とくに灰白色浮石の量は少なく、2種類とも再堆積と考えられる。IV群と重複関係にある例はII群と同様の埋土をもつ周溝との間に認められ、周溝を切っている（HN-4とHN-201）。

V群はDⅢ-1がI群のCⅢ-4とDⅢ-2を埋土上面から切っている。また、BⅡ-1・DⅢ-1は礫を用いた煙道部の構造が共通する。そのV群に含まれるEN-10を切るEN-11

があり、VI群として分離した。EⅣ-11は平面形がかなりいびつな長方形状であることやカマドを伴わないことが他の住居跡とは異なり、住居としてよいかどうか疑問が残る。IⅢ-1とKⅣ-1をここに含めたのは残存状況が非常に良好であるのにもかかわらず2種類の火山灰がまったくみられないこととIⅢ-1の出土土器から類推してのことである。

次に各群における床面積について触れる。

I群は、小型が9棟・中型が5棟・大型2棟である。II群は、小型が19棟、中型が6棟、大型が2棟、不明が8棟である。III群は、小型が6棟、不明が1棟である。IV群は、小型が5棟、中型・大型がそれぞれ1棟、不明が2棟である。V群は、小型が2棟、不明が1棟、VI群は、小型・中型がそれぞれ1棟である。その他は、小型が5棟、中型と大型が2棟ずつ、不明が10棟である。しかし、これは単に数的にみたものであり、3面の地形面ごとにある程度分布や住居形式にまとまりを示している例があることからはその関係を推察していくことが必要であろう。

群別ではなく、面別にみると次のようになる。ただし不明は除いている。

L面は、小型が11棟（73%）、中型と大型が2棟（13%）ずつ、M面は、小型が34棟（68%）、中型が11棟（22%）、大型が5棟（10%）、H面は小型と中型が2棟（50%）ずつである。全体としての住居棟数の比率は、小型が47棟（68%）、中型が15棟（22%）、大型が7棟（10%）であり、M面と比率が同じになる。

分類群と主軸方向の関係は次のようになる。ただし不明は除いている。

I群は、N-Wが8例、N-Eが1例、S-Eが7例、Sが1例である。II群はN-Wが7例、N-Eが8例、S-Eが15例、S-Wが2例である。III群は、N-WとN-E・S-Eが2例ずつ、S-Wが1例である。IV群は、S-E・S-Wが3例ずつ、N-Eが1例である。V群は、S-EとS-Wが1例ずつである。VI群は、S-EとS-W・もたないものが1例ずつである。その他は、N-Wが6例、N-Eが5例、S-E・S-W・Eが1例ずつである。

逆に主軸方向の側から群別の例数をみると次のようになる。

N-Wの23例は、I群が8例、II群が7例、III群が2例、その他が6例である。N-Eの17例は、I群が1例、II群が8例、III群が2例、IV群が1例、その他が5例である。S-Eの30例は、I群が7例、II群が15例、III群が2例、IV群が3例、V群とVI群・その他が1例ずつである。S-Wの9例は、II群が2例、III群が1例、IV群が3例、V群とVI群・その他が1例ずつである。また、SとEがI群とその他に1例ずつある。

以上のことから、群によって主軸方向の分布にある程度の傾向性があることがわかる。I群～III群はN-W・N-E・S-Eに主に分布するのに対し、IV群～VI群はS-EとS-Wが主になる。とくにN-Wはその他を除いてはI群とII群で88%を占めている。しかも、N-W

の一群はカマドが壁の中央に設置される例が大部分であり、それ以外の主軸方向のものが壁中央からどちらか一方へ寄った位置や隅に作るのと対照的である。

主軸方向が意味することを考えると、I群がよい例になるであろう。I群はL面・M面・H面の3面に分布し、L面とH面はS-E、M面はN-Wが卓越する。上述のように灰白色浮石層の層準によって時間差を考慮する必要があるが、同時に3面あるいは2面を棲み分けながら、それぞれの構成単位ごとにおおよそ主軸方向を設定していたのかもしれない。

次に各群と遺物との関連をみていく。

I群は、土師器甕のIM1・IM2・IL1・IL2、坏のIAX・IC・IB0を主に共伴する。個別には土師器甕のIS1・IS2や坏IBxを伴うが、土師器甕II類は破片が少量出土するだけである。土師器の短頸壺や須恵器を伴うが量は少ない。鉄製品はこの群の住居跡数の13%に相当する2棟から出土しているだけである。

II群は、土師器甕のIS2・IM1・IM2・IM4・IL1・IL2・IL4、坏のIAX・IC・IB0・IIAXを共伴する。個別には土師器甕のII類が多くなるほか、坏IBx・IIc・IIB0を伴う。土師器のその他の器種も多く、ロクロ不使用の坏・壺・鉢・甕・短頸壺、壺、須恵器は壺や小型の甕があるが、量は少ない。鉄製品を出土する例はI群に比べて多くなり、この群の住居跡数の37%に相当する13棟から出土している。

III群は遺物については内容が不明である。

IV群は、土師器甕のIM2とIL5、坏のIB0を伴う。個別には坏ICがみられる。土師器甕II類は破片で認められる。須恵器は壺が認められる。鉄製品はこの群の住居跡数の44%に相当する4棟から出土している。

V群はBII-1に資料がある。土師器甕IIL1が数個体あるほか、IL7、坏IB0・IIB0、土師器の台付の鉢、須恵器の破片が出土している。鉄製品はこの群の67%に相当する2棟から出土している。

VI群はIⅢ-1に資料がある。土師器甕IS3やIL4が出土している。鉄製品はこの群の67%に相当する2棟から出土している。

以上、不十分ではあるが、床面積と主軸方向・遺物を主に各群の様相をみてきた。各群の時間的な前後関係を示す重複例が何例もあり、V群がI群、IV群がII群、VI群がV群をそれぞれ切っている。直接の重複関係にない群同士があるものの、I群・II群・IV群～VI群はほぼ時間的な推移をあらわすものと考えてよいだろう。また、中世の住居跡3棟や近世後半あるいはそれ以降に分類できる5棟は埋土に2種類の火山灰をまったく含まないことから、VI群の火山灰の欠除も類推できると考える。III群はFⅣ-1のように灰白色浮石の大小塊を含むことと黄褐

色火山灰を欠く点でII群に近いことが考えられるが、説明としては不十分であろう。

浄法寺町の遺跡では桂平遺跡で火山灰を鍍層にして3類型の分類をしているが、本遺跡に比べると黄褐色火山灰が層状に入る点が異なる。火山灰の在り方は遺跡の自然環境だけでなく、反復利用される遺跡と一回の利用で廃絶される遺跡というように、集落地としての利用形態によって違ってくるであろう。複数の遺跡での比較・検討がなによりも必要とされ、また本報告書では十分に検討できなかったが、遺物との対比によって類型の適否を検証する作業が今後の課題である。

2. 周辺の遺跡

周辺の遺跡を概観し、本遺跡との若干の比較を行いたい。発掘調査された遺跡に限定し、第2図に遺跡位置、表16におおよその内容を記載した。番号は図と表が照合する。20と21以外は東北縦貫自動車道に関連した調査である。もとにした資料に違いがあるため、1～6・20・21は遺構についてだけ触れる。また、1～6は隣接する二戸市に所在する遺跡であり、記載は浄法寺町の遺跡を中心にしている。

(1) 縄文時代

早期：13遺跡のうち、遺物を出土しているのは7遺跡である。早期～前期とされる五庵I遺跡のNH20住居跡は本遺跡で前期前葉に分類したものに類似し、同時期とすることができる。馬立Iと大久保の2遺跡例は貝殻文系土器の時期の住居跡であり、とくに馬立I遺跡での検出例の多いことが注目される。本遺跡では日計式押型文期と早稲田4類期の各1棟を検出している。

本遺跡から出土している土器との関わりでは、寺の沢式が6、吹切沢式が7・10・15・16、ムシリI式が17、物見台式が7・8・14～17、早稲田4類あるいは赤御堂式が7・8・15・16から出土している。また早稲田5類が7・10にある。

このように早期の遺構や土器が多いことは同じ安比川流域でも安代町の遺跡とは大きな違いである。

前期：3棟の住居跡が検出されている。五庵I遺跡の前葉の1棟については上述のとおりである。中葉は1棟が沼久保、末葉は沼久保と五庵Iの2遺跡から1棟ずつ検出されている。広沖遺跡の1棟は前期末葉と推定されている。本遺跡は前葉の6棟を検出している。

土器を出土しているのは9遺跡である。長七谷地Ⅲ群土器は7、早稲田第6類あるいは春日町式は7・15・16、大木1式～3式は7・10・11・15、大木5式は10、円筒下層式bは11・15・17、円筒下層式c・dは8・11・16・17・19から出土している。

早稲田6類あるいは春日町式は岩手県北でも出土例が少なかったが、浄法寺町での出土遺跡

表16 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	編 文 野 代					住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	住居	
-----	-----	---------	--	--	--	--	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	--

1～6：昭和30年度・昭和31年度調査時。7～20：報告書。21：当手県立歴史文化財センター発行「あらびて」No.26、1985

数が多いことや大木式が出土していることが注目される。

中期：この時期の住居跡は浄法寺町では検出されていない。馬立Ⅰ遺跡は中葉、馬立Ⅱ遺跡は中期末葉から後期初頭とされている。

土器を出土しているのは7遺跡であるが、中葉のものを出土している15以外は3遺跡が大木9式や大木10式、2遺跡は中期、1遺跡は中期末葉～後期初頭と報告されている。

本遺跡でも遺構（円筒上層式e期のビット1基）・遺物とも縄文時代のなかではもっとも希薄な時期である。それに対し、安代町では末葉の時期の住居跡・土器とも検出例が多い。

後期：住居跡の検出例は多い。5遺跡で14棟（13棟。沼久保遺跡例に1棟が弥生時代かもしれないとされている）がある。中葉7棟、中葉～後葉が1棟、後葉が5（4）棟、末葉が1棟である。また二戸市でも馬立Ⅰ・同Ⅱ・青ノ久保の各遺跡に多くの住居跡が検出されている。本遺跡は初頭～前葉と推定できる3棟を検出している。

土器を出土している例は田余内Ⅱを除いた12遺跡と多い。中期末葉～後期初頭とされる例も含めれば、田余内Ⅰと後期としている柿ノ木平Ⅲの2遺跡を除いては初頭から前葉に相当する型式を出土している。中葉あるいは末葉の土器を出土するのは10・11・13・15～17である。

初頭～前葉の土器を出土する遺跡が多いことは岩手県北部でもかなり普遍的な状況として見られる。

晩期：住居跡が検出されているのは中葉の16と晩期末葉～弥生初頭とされる15に1棟ずつがある。また21では中葉の3棟がある。土器を出土する遺跡は7遺跡に知られている。本遺跡では推定も含め5棟を検出している。

以上のほかに縄文時代に属することが考えられる遺構に落とし穴がある。落とし穴のまとめの項でも記載したが、浄法寺町の遺跡からは岩手県下の20%（本遺跡を含む）の落とし穴が検出され、二戸市の例を加えるとさらにその比率は上がり、29%に達する。

(2) 弥生時代

住居跡を検出しているのは沼久保遺跡で1棟がある。また五庵Ⅲ遺跡では晩期末葉～弥生に位置づけられている1棟がある。

遺物を出土しているのは6遺跡にある。そのなかでも小田野（1987）の第Ⅰ期に相当する例が13と14に報告されている。本遺跡の土器片は末期に相当する。

(3) 古墳時代

該当する遺構・遺物は検出されていない。

(4) 奈良時代

遺構・遺物とも青ノ久保遺跡にあり、5棟の住居跡が報告されている。

(5) 平安時代

住居跡は9遺跡52棟と多い。さらに天台寺に2棟がある。本遺跡でも主体を占める時期である。それに対し、二戸市の6遺跡では青ノ久保遺跡に5棟が知られるだけである。住居跡を伴うと推定されるやや大型のピットが7・8・10・11・12・16・17に検出されている。屋外にあって貯蔵施設として機能していることが考えられる。

遺物は鉄製品ほかのいくつかに限定して記載する。

鉄製品の主な器種は次の遺跡にみられる紡錘車は7・8・10、鉄鏝は16・17、刀子は8・11・16・17、刀剣は10、足金具は11、本遺跡で目釘式手鏝とした器種は10にある。鉄滓と鑊の羽口の両方あるはいずれかを出土しているのは7・10・11・16・17である。

墨書を伴う坏は次の遺跡から出土している。7が「本」2点、12が「傘」、16が「寺」あるいは「吉」と報告されている。

土師器の甕の胴部下端から底部外面に刻線を伴う例は大久保Ⅰ遺跡に1点がある。例の少ない土器だけに本遺跡との直接の関わり合いを示す資料になるであろう。大久保Ⅰ遺跡は南約1kmの位置にある。

静止糸切りにより切り離し技法を持つ坏を出土しているのは7・8・10である。そのうち広沖と安比内Ⅰ遺跡は本遺跡に隣接している。

(7) 中・近世

中世の住居跡は11と16にある。また五庵Ⅱ遺跡は中世から近世にかけての住居跡が20棟検出され、館跡に関連する掘立柱建物跡1棟のほか多くの柱穴群がある。天台寺跡は確実な時期を把握できないものの、寺院跡が検出されている。

本遺跡では中世3棟、近世後半あるいはそれ以降5棟の住居跡を検出している。五庵Ⅱ遺跡の住居跡のなかになんらかの「作業場」的な機能を併せもつ例がある点は本遺跡に共通する。

3. さいごに

飛鳥台地Ⅰ遺跡はおおよそ63,000㎡の面積を有するものと推定できる。今回の発掘調査面積22,730㎡はその36%に相当する。安比川に面した広い低位段丘に立地する遺跡ということで、数多くの遺構・遺物が発見・検出されることが予想されていたが、調査結果は期待以上のものがあった。さいごに時代別の遺跡の様相を簡単に描いてみたい。

縄文時代は居住域と狩猟の場として主に機能していた。もっとも古い時期の住居跡は早期前葉日計式押型文期の1棟がL面にある。一部削割を受けている部分があるために確実なことは言えないが、同時期の住居跡が周辺に存在した可能性は薄く、1棟1集落であったことが推定される。絶対年代は、南部浮石に相当する黒色土の下位にあることから8,600±250 B.P.以前の年代が想定できる。

その後、寺の沢式・吹切沢式・物見台式・明神裏Ⅲ式・ムシリⅠ式の時期に何らかの活動が継続的に繰広げられてきたことを出土土器から知ることができ、その分布からはL面が主な活動域であったことが早期全般を通じていえる。

続く早稲田4類期の住居跡は1棟検出された。先の早期前葉の住居跡に近接した位置にあり、集落形式としては同様のことが言えるであろう。

その後、空白期を挟み、前期前葉早稲田6類期になると複数の住居による集落が形成された可能性が高い。L面に検出された5棟、それらとはやや離れたM面の1棟がそれである。1棟を除くと、長方形の平面形、6～9本柱（主柱）に共通した住居形式を認めることができる。さらに、他の住居跡と比べて相対的に規模の大きなDⅢ-3住居跡の存在は、時間的にややさかのぼる二戸市長瀬B遺跡や早期～前期初頭とされている二戸市中曾根Ⅱ遺跡にも例があり、この時期の集落の構造上の一般的な特性である可能性を指摘できる。同時期のそのほかの遺構としては数基のピーカー形やフラスコ形のピットが同じ面にある。2基のピットの¹⁴C年代測定の結果は6,780±150と6,100±130 B.P.と出ており、従来の年代観に対してほぼ整合的である。

円筒下層式と大木式がともに出土している。円筒下層式の土器はbの小破片数点がL面から出土しているが、伴う遺構はない。前期末葉円筒下層式dの時期になると調査区の南端、H面のO・P区が利用される。この付近は西へ張り出す小規模な緩斜面で、南端の小さな開析谷に面した斜面が同時期の遺物包含層となっている。それに伴う住居跡ほかの遺構の存在が調査区域内に予想されたが、検出されなかった。可能性としては調査区域外の一段高い東側の面に居住域があることが考えられる。この時期の土器片はL面にも破片として分布するが少量である。一方、大木式の土器は2式や3式・5式・6式が主にM面とH面に少量分布する。また、大木1式もⅡ群10類に含んでいることが考えられる。大木5式は岩手県での分布の北限がさらに北上した例となろう。この時期の具体的な活動については不明である。

中期は遺構・遺物とも縄文時代ではもっとも希薄な時期である。中期初頭の土器はⅡ群5類とした一群と分離できないままそこに含めているかもしれない。中期中葉の遺構と遺物はM面北端にあるピット1基とそれに伴う略売形の土器ほかが少量ある。円筒上層式d・同eであり、大木式の土器は出土していない。

その後しばらく空白期がある。後期になると、本遺跡の縄文土器のなかでも量的に主体を占める初頭～前葉の土器片がL面とM面の広い範囲を中心に分布する。それに伴うと推定される遺構はL面に1棟、M面に2棟存在する住居跡とM面にある数基のフラスコ形ピットなどである。

後期中葉～末葉の土器は量が少ない。晩期になるとL面でも一段低い北端に住居跡5棟が集

中して営まれている。初頭の大洞B式期に属し、同時期の土器はM面にも点在する。続く時期の土器も少量が出土している。

狩猟の場としての利用も活発である。落とし穴は137基が検出されている。大きくは二つの形態があり、そのうち円筒形Ⅰ型とした5基は1基を除いては早期～前期前葉に属することが出土遺物や埋土から明らかである。占地はL面の一部とH面に限られているが、早い時期からピットフォール・ハンティングが狩猟形態として確立していたことを知る事ができるであろう。そのほかの落とし穴は時期を決定する確実な資料を欠くが、各地の例とも比較すると、縄文時代のなかに位置づけても誤りではないであろう。粗密はあるものの調査区全体に分布し、円筒形に対して卓越する溝状の落とし穴は対あるいは群となるものが把握できるなど、ある程度の規則性を認めることができる。また円筒形の二つとも一定のまとまりをもって分布するなど良好な資料になるであろう。

弥生時代は数点の土器片があるだけである。同時代末葉に属するものである。次に本遺跡が利用されるのは平安時代になってからのことである。

平安時代に入ると、居住域として活発に利用されるようになる。それは本遺跡にとどまらず、隣接する広沖や安比内Ⅰの各遺跡を含めた動きとして理解する必要がある。広域火山灰である十和田a火山灰や白頭山一苦小牧火山灰の遺構中の在り方から住居跡のおおよその分類をし、6群を設定した。3面に分類した地形面を各期を通して棲み分け、ある時期は周溝を伴うような集落を営んだのであろう。そしてH面の利用が限られることや隣接する広沖遺跡と安比内Ⅰ遺跡での住居跡数の少ないこと（あわせて6棟）は集落形式を類推する手がかりになることが考えられ、検討が必要とされるであろう。

集落は十和田a火山灰が層状に覆うⅠ群のうちの何棟かが最初に形成したものであろう。あるときはそれに重なりながら、あるいは若干の時間差を挟みながら、居住地として反復利用されてきた。後半あるいは終末期はせいぜい数棟の住居跡が互いにかかりの距離において散在的に存在した様子が推定できる。しかし、その点は、限られた調査範囲での推定でもあり、同じ様な状態で検出される周辺の遺跡例との比較・検討ができなかったことが今後の課題であり、本遺跡に限定された仮説の域を出るものではない。さらに土器の分類が不十分なこともあり、土器の型式と関連させた集落形式の動きの具体的な点は触れることができなかった。

年代は、2種類の火山灰についての町田ほか（1981・1982）の年代観をもとにするとおおよそ9世紀後半から11世紀はじめの頃まで集落が営まれていたことが考えられ、主体は10世紀代にあったのであろう。しかし本遺跡独自で時期を決定できる資料を欠き、あくまでも推定にすぎない。

平安時代の集落が山間地へ拡大していく現象は岩手県においても顕著であり、高橋（1986）

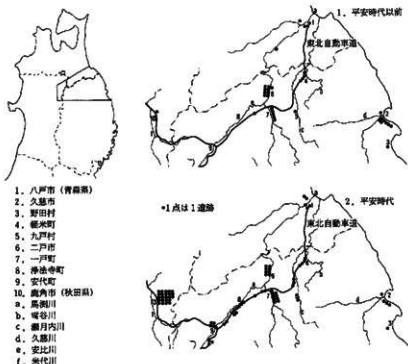


図56 岩手県北部付近の古代の住居跡検出遺跡

によると、遺跡数と検出住居跡数の増加が以前の時期に比べると著しいが、1遺跡あたりの住居跡は逆に減少しているという。住居跡を検出した遺跡の分布を図56に示したが、安比川流域はとくにその現象をよく反映している。しかし北上川中流域と比較した場合、土器・鉄製品・墨書、あるいは鍛冶の存在を予想させる輪の羽口や鉄滓など、遺物では独自性を見出し難い点は注意される必要があろう。そうしたなかで砂底は分布からは秋田県や青森県（とくに津軽平野）に共通性の高い土器である。

遺物は種類・量とも豊富である。鉄製品が豊富なことや墨書土器が多いことなど、周辺の同時代の遺跡とやや異なる面がある。なかでも鉄製品は器種・数とも豊富で、鋳あるいは鍛先や鍛・多くの目釘式手鎌などの農耕にかかわる生産具や収穫具、紡錘車・鉄鎌・刀子・馬具そのほかがある。目釘式手鎌は岩手県内では9遺跡に15例が知られているだけであり、本遺跡の出土例（11点）の多いことが目につく。平安時代という大区分ではなく細分した時期での比較が必要であろうが、それをいま問わなければ、この器種は、青森県の古館遺跡や砂沢平遺跡ほか、津軽平野に面した段丘や丘陵に立地する遺跡に数多く出土しており、共通性がどのような類似の生業に起因するのかが注目されるであろう。しかし農耕具と生業形態を具体的に結びつけるには、今回の調査では行うことができなかったが、たとえば遺構の土を採取して水洗するなど

の意識的な調査をするとともに花粉分析・プラントオパールなど自然科学的分析と結合させた調査の必要性を感じる。生業形態がコンプレックス（複合）であることを山間地ではとくに考慮に入れる必要を感じるが、その一部としてある可能性が強い水稻稲作農耕を仮に想定した場合、比高差が15mと小さく、本遺跡の前面に小規模に広がる安比川の沖積地に耕地を求めることができるであろう。さらにトチやクルミが住居跡から出土していることはある意味では当然であろうが、堅果類の利用という面を知ることができる。北緯40度付近にあり、山間地に立地する本遺跡がどのような生業基盤と歴史的な背景のうえに成立してきたのかは今後の検討課題である。

この時代の関わりで注目されるのは八葉山天台寺である。行基の創建といわれる寺伝はさておき、10世紀代に属すると推定される礎石掘建柱建物跡が検出されるなど、平安時代に成立した寺院である可能性を残しており、わずか1.5kmの距離しか離れていない本遺跡とどのように関わっていたのか興味深いものがある。あるいは直接同じ時代に重なることがなかったとしても、天台寺を生み出す歴史的な背景は平安時代に安比川流域へ集落が進出・拡大することと無縁のものではないだろう。

もう一つ注目したいのは、札幌市サグシュコトニ川遺跡で発見され、その後秋田県湯の沢F遺跡にも例があることが明らかになった「夾」(佐伯, 1986)と同じようなへら書をもつ須恵器が淨法寺町の銭神平で出土していることである。小岩末治が論文中に実測図・拓本とともに発表している(小岩, 1956)。遺跡は安比川を挟んで本遺跡の対岸にある。本遺跡に居住した集団を考えるうえでの重要な参考資料といえよう。また、本遺跡で判読できる墨書の3種類4字すべてが秋田城跡出土の墨書のいくつかに共通することや砂底が存在することなどは秋田県側との関係を具体的に示す例である。しかし住居形式をはじめ、遺物の点でも中間地域ともいえるべき鹿角盆地との差が大きいことが問題になるであろうが、さきに述べたことと同じ小期での対比によっていづれ解決されていくことであろう。

須恵器の胎土分析の結果からは青森県の五所川原からのものと能登半島に産地が推定されるもの、太平洋側東北地方からのものと三つのルートから搬入されたことを知る事ができる(付篇)。また鉄製品の分析からは磁鉄鉱を原材料とする高度な技術によって作られていることが明らかになっている(付篇)。それらのモノがどのような経路で、またどのようなヒトの動きのなかでもたらされたのかを解明することは本遺跡の様相を明らかにするだけでなく、先の山間地への集落の進出という歴史的現象と密接に結びつくことが予想できる。遺構外からの出土のうえ小破片であるが、ログロ円柱作りといわれる技法(服部ほか, 1979)をもつ底部があることはこの時代のモノとヒトの動きを知るうえで重要である。

次の中世に入ると住居跡が3棟検出されているが、具体的な時期はそれ以上に明らかにする

ことはできなかった。近世後半あるいはそれ以降の時代では、住居と漆の工房を兼ねていると推定される竪穴が5棟みつまっている。同じ浄法寺町五庵Ⅱ遺跡にも例があり、近世に浄法寺造りで知られた漆の町の歴史に1ページを記すものである。さらにこの時代の掘立柱建物跡かと推定される柱穴状のピット群がL面に数多く検出されたが、具体的な検討はできなかった。

調査に入る前、遺跡は畑地であった。それ以前は水田として利用されていた時期もある。およそ9,000年前から集落地あるいは狩猟の場・農業をはじめとする各種生産の場として繰り返し利用されてきた飛鳥台地はいま高速自動車道がその主要部を貫き、景観を一変させた。歴史は新しいヒトコマを絶えず刻み続けている。その瞬時を絶ち切るように調査をおこない報告をしてきたが、幾多の誤認をおかしているはずであり、それはこんご機会があれば訂正してゆきたい。

註1) 実物が浄法寺町にすでに存在しないことを佐藤喜蔵・中村 裕の両氏に御教示いただいた。

引用・参考文献

- 秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所(1984):秋田城跡出土土器土器集成。秋田城跡発掘調査事務所研究紀要Ⅰ, 25—67。
- 石毛直道(1971):「住居空間の人類学」。SD選書。鹿島出版。
- 今村密爾(1985):縄文早期の竪穴住居址にみられる方形の掘り込みについて。古代, No.80, 1—19。
- 江坂輝弥(1970):「石神遺跡」。ニュー・サイエンス社。
- 大池昭二・高橋一(1970):南部浮石の¹⁴C年代。地球科学, 28, 99—100。
- 大川 清(1952):住居址に於ける焼土について。古代, 第7・8合併号, 52—58。
- 小笠原好彦(1976):東北地方における平安時代の土器について二、三の問題。『東北考古学の諸問題』, 407—422。東北考古学会。
- 岡田茂弘・桑原滋郎(1974):多賀城周辺における古代埴形土器の変遷。宮城県多賀城跡調査事務所研究紀要Ⅰ, 65—92。
- 小川貴司(1980):出土鉄製品とその問題点。『古館遺跡発掘調査報告書』, 462—507。青森県教育委員会。
- 小田野哲憲(1987):岩手の弥生土器編年試験。岩手県立博物館研究報告第5号, 1—22。
- 興野義一(1967):大木式土器理解のために(Ⅰ)。考古学ジャーナル, No.13, 16—18。
- 熊谷常正・小田野哲憲・高橋信雄(1982):「岩手の土器」。岩手県立博物館。
- 熊谷常正(1983a):大木式・円筒土器下層式土器出土遺跡—岩手県一。『考古・遺跡・遺物地名表』, 153—156。柏書房。
- 熊谷常正(1983b):岩手県における縄文時代前期土器群の成立。岩手県立博物館研究報告第1号, 45—65。
- 小岩末治(1956):岩手における土師式文化考(上)。岩手史学研究, No.21, 21—30。
- 佐伯有清(1986):刻字土器「夫」の意義。『サクシュコトニ川遺跡』, 185—190。北海道大学。
- 板田 隆(1982):底面に砂粒を付着させる壺形土師器とその分布範囲について。日本考古学協会第48回総会研究発表要旨, 37。
- 関 豊(1983):馬淵川上流域の古代土器の様相。『駒場遺跡緊急発掘調査報告書』, 29—34。二戸市教育委員会。
- 高橋幸男(1985):「火の道具」。柏書房。
- 高田和憲(1981):③時期区分。『一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅰ』, 367—371。一戸町教育委員会。
- 高橋富雄(1977):「天台寺」。東京書籍。
- 高橋信雄(1985):岩手の古代集落。『日高見—菊池敬治郎学兄還暦記念論文集』, 249—269。
- 高橋文夫・三浦謙一(1981):岩手県における「大型住居址」の変遷について。縄文時代研究会パンフレット。
- 田村壮一(1987):陥し穴状遺構の形態と時期について。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要Ⅱ, 25—44。
- 土井義夫(1971):関東地方における住居址出土の鉄製農具について。物質文化, No.18, 14—27。
- 日本銀行調査局(1972):「図録 日本の貨幣1」。東洋経済新報社。

- 服部敬史・福田健司（1979）：南多摩竊址群出土の須恵器とその編年。神奈川考古，第6号，79—120。
- 原島礼二（1977）：考古資料と文献資料。「地方史と考古学」，149—182，柏書房。
- 福田友之（1986）：考古学からみた「中瀬浮石」の降下年代。弘前大学考古学研究，№3，4—17。
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）：日本海を渡ってきたテフラ。科学，vol.51 №9，562—569。
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1982）：八戸市槻城跡の火山灰層。「史跡槻城跡発掘調査報告書Ⅴ」，八戸市埋蔵文化財調査書第11集，91—94。
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広・小田勝夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）：テフラと日本考古学。「古文化財の自然科学的研究」，865—928，同朋舎出版。
- 松山 力（1978）：遺跡群の位置及び周辺の地形・地質。「一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅰ」，8—18，一戸町教育委員会。
- 宮本長二郎（1986）：住居。「岩波講座 日本考古学 4」，176—216，岩波書店。
- 八木光則（1976）：いわゆる「特殊磨石」について。信濃，vol.28 №4，298—315。
- 山田勝美監修（1976）：「龍字大鑑」。柏書房。
- 吉沢幹夫（1984）：宮城県出土の墨書土器について。東北歴史資料館紀要第10巻，39—57。
- 吉田東伍（1906）：「大日本地名辞書」，増補版（1970）を引用。989。
- 渡辺 誠（1980）：飛騨白川村のトテムキ石。「藤井祐介君追悼記念考古学論叢」，347—370。

報告書

〈青森県〉

- 青森県教育委員会（1977）：「烏海山遺跡発掘調査報告書」。青森県埋蔵文化財調査報告書第32集。
- 〃（1979）：「羽黒平遺跡発掘調査報告書」。青森県埋蔵文化財調査報告書第44集。
- 〃（1980）：「砂沢平遺跡」。青森県埋蔵文化財調査報告書第53集。
- 〃（1982）：「山崎遺跡」。青森県埋蔵文化財調査報告書第68集。
- 〃（1984）：「和野前山遺跡」。青森県埋蔵文化財調査報告書第82集。
- 〃（1984）：「表館遺跡Ⅱ」。青森県埋蔵文化財調査報告書第91集。
- 〃（1985）：「売場遺跡発掘調査報告書（第3次・第4次）」。青森県埋蔵文化財調査報告書第93集。
- 八戸市教育委員会（1983）：「史跡槻城跡発掘調査報告書Ⅴ」。八戸市埋蔵文化財調査報告書第11集。

〈秋田県〉

- 秋田県教育委員会（1982）：歌内遺跡。「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ」。秋田県文化財調査報告書第88集。
- 秋田県埋蔵文化財センター（1986）：「カウヤ遺跡発掘調査報告書」。秋田県文化財調査報告書第135集。
- 秋田市教育委員会（1986）：湯ノ沢F遺跡。「秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」。
- 鹿角市教育委員会（1982）：「高向市館跡発掘調査報告書」。角鹿市文化財調査資料22。

〈岩手県〉

岩手県埋蔵文化財調査報告書(第2集～第76集)と岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書(第89集～第115集)は「岩埋文報告書」と略している。

岩手県教育委員会(1979):大波野遺跡,「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」,岩手県文化財調査報告書第32集,

〃(1979):一本松遺跡,「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」,岩手県文化財調査報告書第32集,

〃(1980):宮地遺跡,「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」,岩手県文化財調査報告書第48集

〃(1980):鴻ノ巣路遺跡,「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」,岩手県文化財調査報告書第49集,

〃(1982):方田方八丁遺跡(志波城遺跡),「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ」,岩手県文化財調査報告書第68集,

〃(1982):下谷地A遺跡,「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ」,岩手県文化財調査報告書第72集,

草間俊一(1965):「堀野遺跡」,福岡町教育委員会,

草間俊一・玉川一郎(1974):「長沼古墳」,和賀町教育委員会,

一戸町教育委員会(1981):北館B遺跡・田中4遺跡,「一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅰ」,一戸町文化財報告書第1集,

〃(1984):「上野遺跡」,一戸町文化財調査報告書第7集,

岩手県水沢市教育委員会(1983):「胆沢城一昭和57年度発掘調査概報」

岩手大学考古学研究会編(1982):「柿ノ木平遺跡一昭和50・51年度発掘調査報告」,盛岡市教育委員会,

大迫町教育委員会(1979):「立石遺跡」,大迫町埋蔵文化財報告第3集,

浄法寺町教育委員会(1981):「伝天台寺跡一昭和55年度発掘調査報告概報」,

〃(1983):「天台寺跡 第7次発掘調査概報」,

二戸市教育委員会(1981):「中曾根Ⅱ遺跡発掘調査報告書」,

盛岡市教育委員会(1981):「志波城跡一昭和55年度発掘調査概報」,

〃(1985):「柿ノ木平遺跡一昭和59年度発掘調査概報」,

岩手県埋蔵文化財センター(1978):「都南村湯沢遺跡一遺構編」,岩埋文報告書第2集,

〃(1979):力石Ⅱ遺跡,「主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書」,岩埋文報告書第8集,

〃(1982):桜松遺跡,「師所ダム関連遺跡発掘調査報告書」,岩埋文報告書第29集,

〃(1982):「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書長瀬B遺跡」,岩埋文報告書第36集,

- 〃 (1982)：「有矢野遺跡」。「有矢野・上の山Ⅰ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第38集。
- 〃 (1982)：「志波城発掘調査報告書」，岩埋文報告書第45集。
- 〃 (1983)：「小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第52集。
- 〃 (1983)：「上屋遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第55集。
- 〃 (1983)：「上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第60集。
- 〃 (1983)：「江刺家遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第70集。
- 〃 (1983)：「府金橋遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第72集。
- 〃 (1983)：「平船Ⅲ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第76集。

岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

- 〃 (1985)：「榑ノ水平Ⅲ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第89集。
- 〃 (1985)：「海上Ⅰ・海上Ⅱ・大久保Ⅰ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第90集。
- 〃 (1985)：「五庵Ⅱ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第94集。
- 〃 (1986)：「関沢口遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第95集。
- 〃 (1986)：「五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第97集。
- 〃 (1986)：「馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第99集。
- 〃 (1986)：「岩手県埋蔵文化財調査略報（昭和60年度分）」，岩埋文報告書第101集。
- 〃 (1986)：「田余内Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第105集。
- 〃 (1986)：「安比内Ⅰ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第106集。
- 〃 (1986)：「沼久保遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第109集。
- 〃 (1986)：「桂平遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第110集。
- 〃 (1986)：「広沖遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第111集。
- 〃 (1986)：「五庵Ⅲ遺跡発掘調査報告書」，岩埋文報告書第112集。
- 〃 (1987)：「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（昭和61年度分）」，岩埋文報告書第115集。

〈宮城県〉

- 宮城県教育委員会 (1980)：「宮下遺跡」，「東北自動車道調査報告書Ⅱ」，宮城県文化財調査報告書第63集。
- 〃 (1982)：「松田遺跡」，「仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書Ⅱ」，宮城県文化財調査報告書第88集。
- 〃 (1982)：「松田遺跡」，「東北縦貫自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」，宮城県文化財調査報告書第92集。
- 〃 (1986)：「今熊野遺跡Ⅱ－縄文・弥生時代編－」，宮城県文化財調査報告書第114集。

登里町教育委員会 (1980)：「沼崎山遺跡」，登里町文化財調査報告書第2集。

〈千葉県〉

山田遺跡調査団 (1977)：「山田水呑遺跡」，山田遺跡調査会。

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二
副 所 長	宮 英 一
〔管 理 課〕	
課 長 (兼)	宮 英 一
課 長 補 佐	伊 藤 吉 郎
主 事	立 花 多加志
嘱 託	似 内 喜 兵
運転技士兼技能員	佐 藤 春 男
〔調 査 課〕	
課 長	昆 野 靖
主任文化財専門調査員	小田野 哲 憲
〃	三 浦 謙 一
〃	工 藤 利 幸
文化財専門調査員	佐々木 嘉 直
〃	平 井 進
〃	中 村 良 一
〃	田 村 壮 一
〃	光 井 文 行
〃	玉 川 英 喜
〃	佐 藤 嘉 広
〃	中 川 重 紀
〃	高 橋 義 介
〃	酒 井 宗 孝
〔資 料 課〕	
課 長	新 田 和 雄
主任文化財専門調査員	高 橋 与右エ門
文化財専門調査員	田 鎖 寿 夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第120集

飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫道自動車関連遺跡発掘調査

分冊1 (本文・挿図・表)

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月26日 発行

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020 盛岡市青山4丁目10-5

電話 (0196) 41-0585#0

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1968